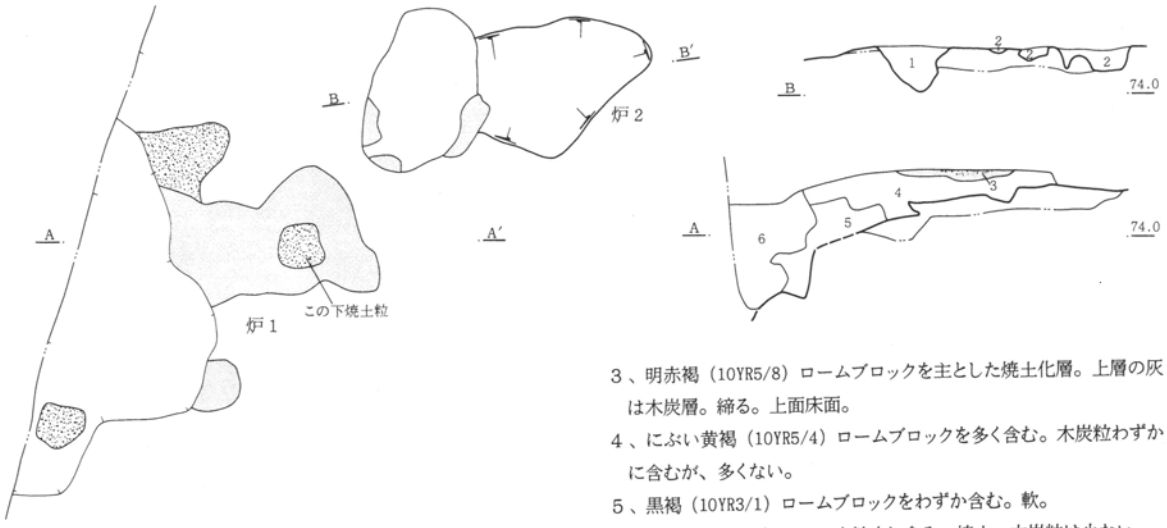


１、黒褐（10YR3/1）ロームブロック小粒多く、床下のピット・焼土・木炭粒ほとんど見えない。締る。上面床面。

２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含み、焼土・木炭粒ほとんど見えない。

３、明赤褐（10YR5/8）ロームブロックを主とした焼土化層。上層の灰は木炭層。締る。上面床面。

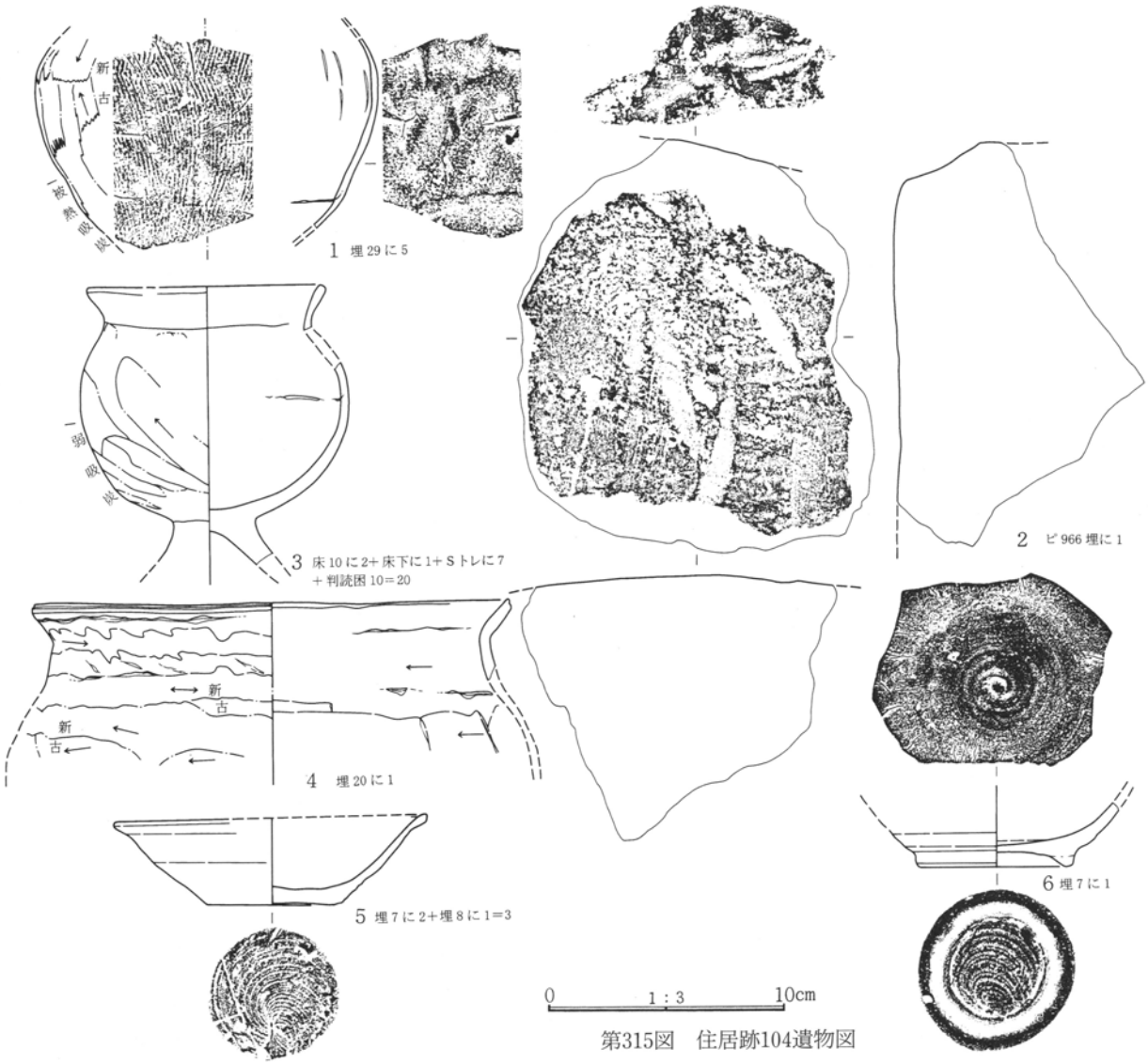
４、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを多く含む。木炭粒わずかに含むが、多くない。

５、黒褐（10YR3/1）ロームブロックをわずか含む。軟。

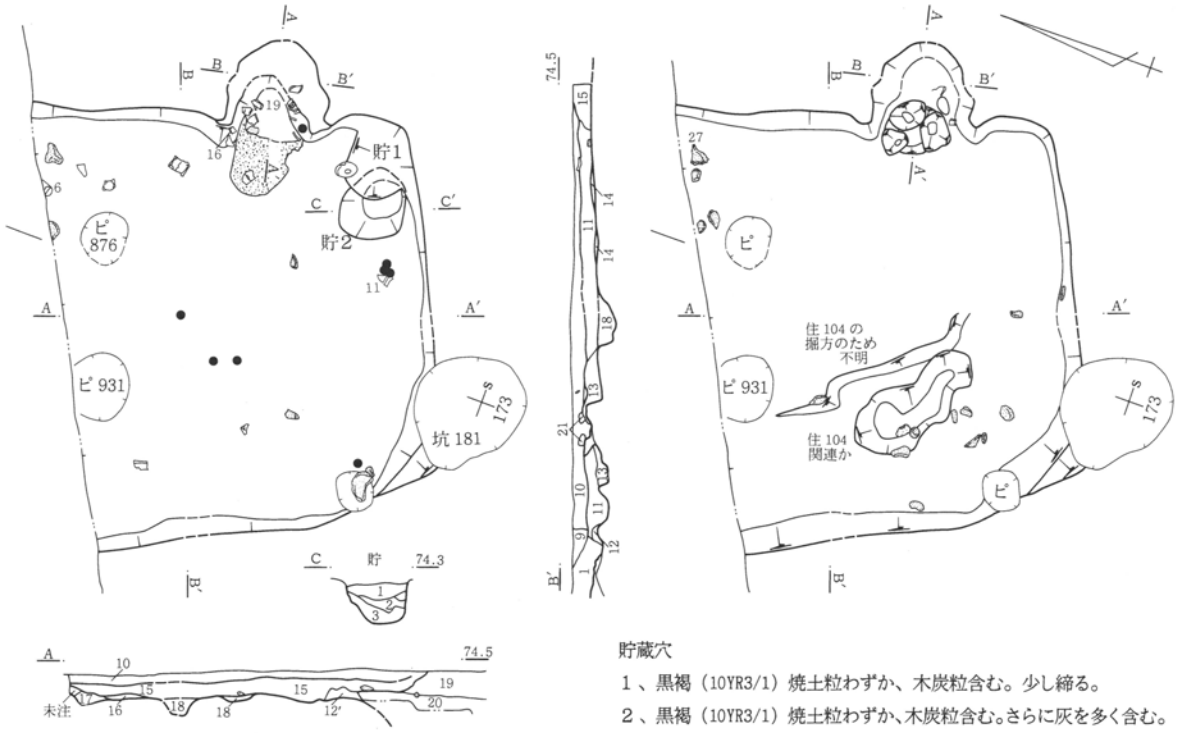
６、黒褐（10YR3/1）ローム小粒少し含み、焼土・木炭粒は少ない。

0　1：30　1m

第314図　住居跡104遺構図



第315図　住居跡104遺物図



貯蔵穴

１、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか、木炭粒含む。少し締る。

２、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか、木炭粒含む。さらに灰を多く含む。

３、黒褐（10YR3/1）１層に近いが、わずかロームブロック小塊入る。

１、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。

９、黒褐（10YR3/1）ローム小粒わずか入る。小ピット埋土か。

10、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒入り、下方少し還元気味で締り、床面。

11、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多く、全体に軟らか。

12、明黄褐（10YR6/6）ローム粒と土壌化。12′はローム浮き出し。

13、黒褐（10YR3/1）12層より黒っぽい。軟らか。下面床面。

14、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒入り、少し還元気味。ローム上面と併せ別住居床面。

15、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。軟。

16、黒褐（10YR3/1）床面。還元気味。

17、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒見えず、ローム小粒入る。

18、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多く含み、上面床面。

19、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し入り、ローム粒入る。

20、黒褐（10YR3/1）黒味強く、軟。

21、ロームブロック。

カマド

１、黒褐（10YR3/1）焼土粒含むが、木炭粒少ない。1′は掘方埋土。

２、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。

３、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど含まない。

４、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど含まない。少し還元気味。前代、床直上層。4′は住105床下層。4″はやや軟らか。

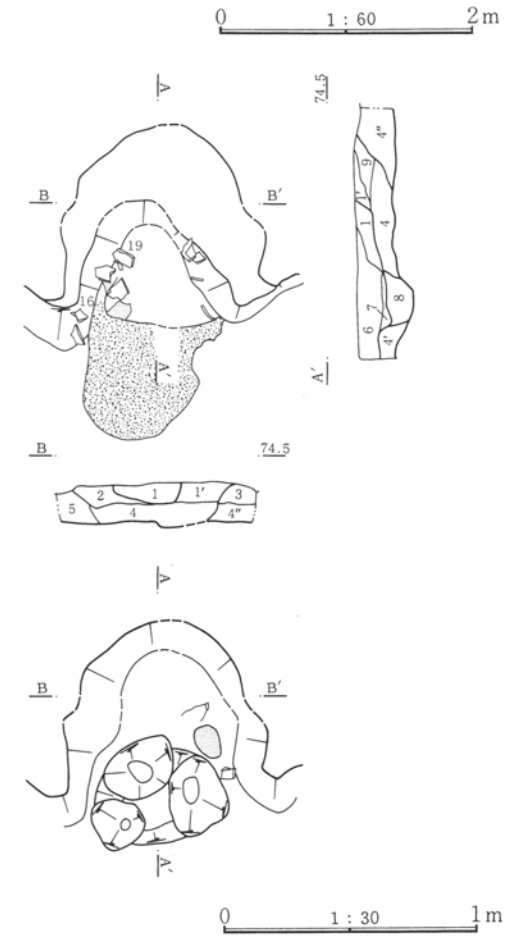
５、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど含まない。少し茶味おびる。

６、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。

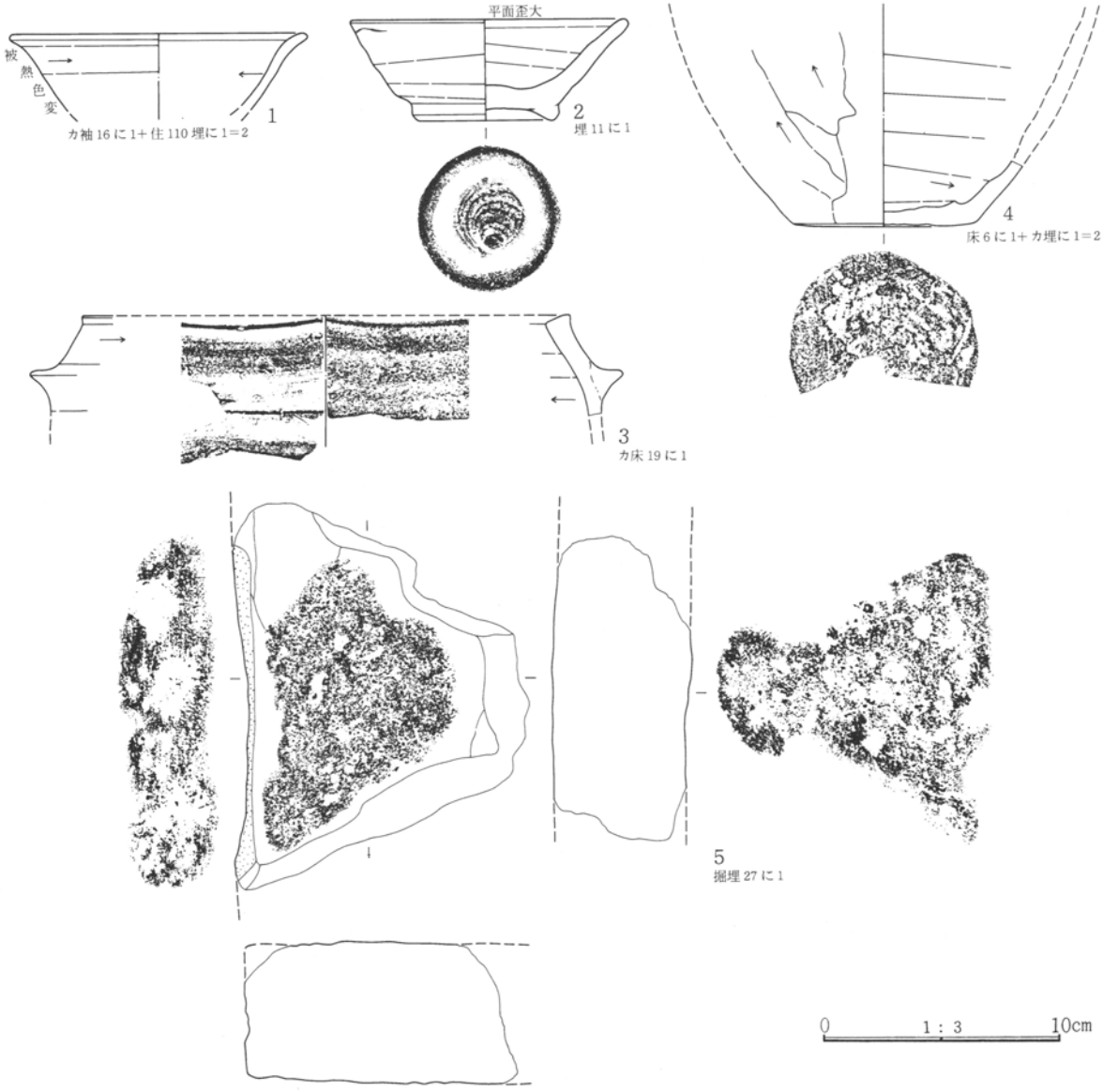
７、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。

８、黒褐（10YR3/1）焼土多く含み、少し粗。

９、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど含まない。



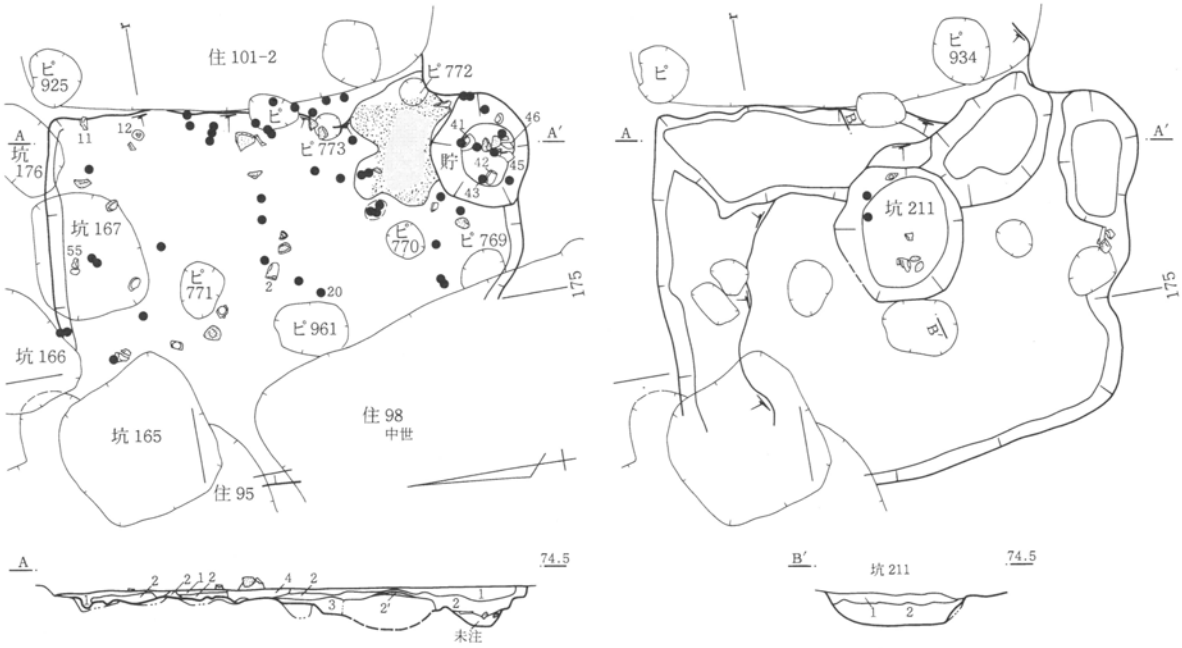
第316図　住居跡105遺構図



第317図　住居跡105遺物図

住居跡104　（第312・313・314・315図、図版61・178）

位置はＱ大区rst171・172・173にある。調査面はローム漸移下層標高74.4mである。重複は住居跡105・108・109、南半倒木痕、坑181・223、ピ876・859・960などが後出し、井戸跡19との関係は井戸跡が先行する。北壁沿い中央にも住居跡かもしれない遺構が炉跡を切って存在していた。規模は東西767cm、南北616＋αcm、方向は中軸でN40°30′Wを測り、Ｑ区中では最大である。施設として新、古の炉跡、貯蔵穴が、柱穴に北東、南東（ピ958）、南西（ピ964）、北西（ピ931）と建替に関連するかもしれない柱穴に北東（前述に同じ73.95m）、南西（ピ963）、北西（73.73m）のピットがあり、南東のピ958は２つの柱穴が重んでいるので新旧２穴である。しかしながらこれらのピットや床面の連続性について７ｍを越える住居であると当初は想定していなかったので、全体把握したのは掘方調査に至ってからであった。掘方は柱穴位置と同壁間も溝状掘り凹めた形で、南壁が高まるのは以降の倒木痕によるためである。掘方で発見されたピット966・965・962などについて掘方調査時の発見ではあるが以前か以降か不明である。ピット966中から地山数m下方にローム層水性二次堆積による軟質の凝灰岩層があり、酷似の加工石材が第315図２にあり、本住居跡に関連したとすれば、当遺

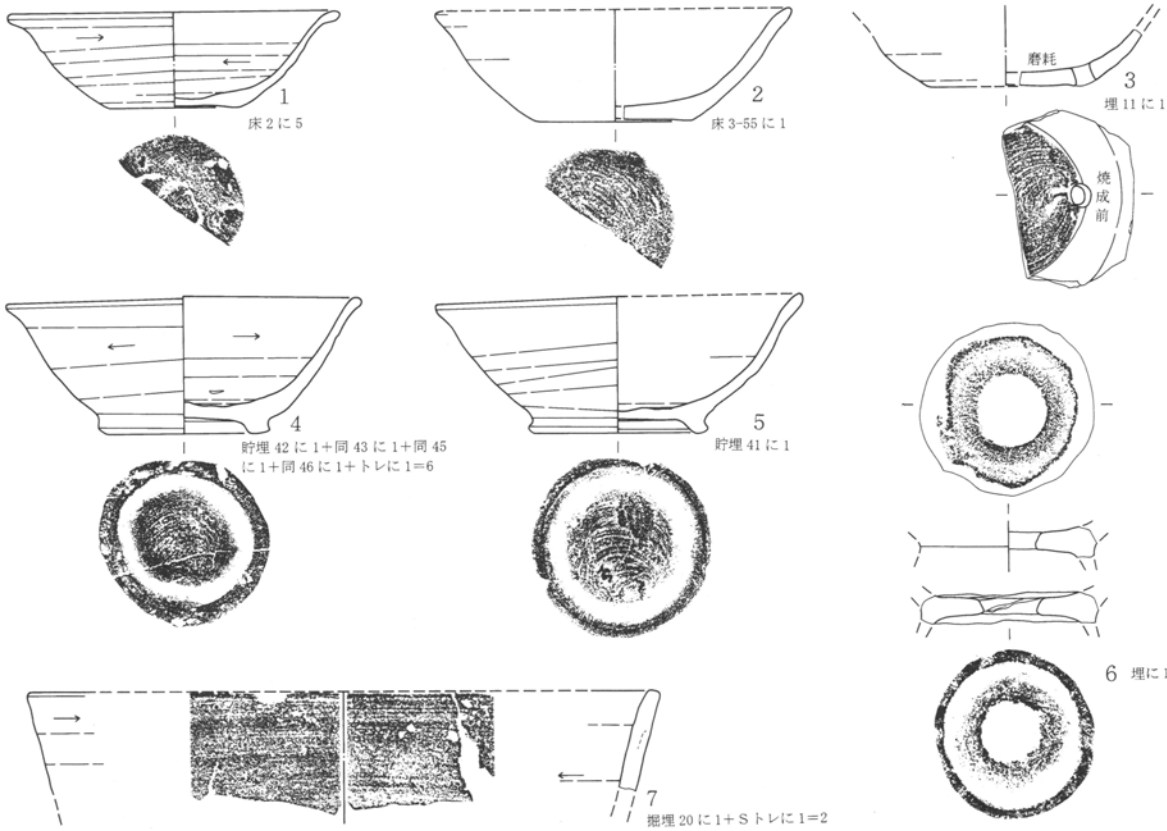


1、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む上面が床1 。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを多く含む上面が床2 。2′ は2の焼土化。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずかに含むが、ローム粒少ない。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず。古代の別掘り込み。軟。

1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒を多く含み、横縞状にロームブロック含む。締る。
2、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒少し含み、ローム小ブロック多く含む。

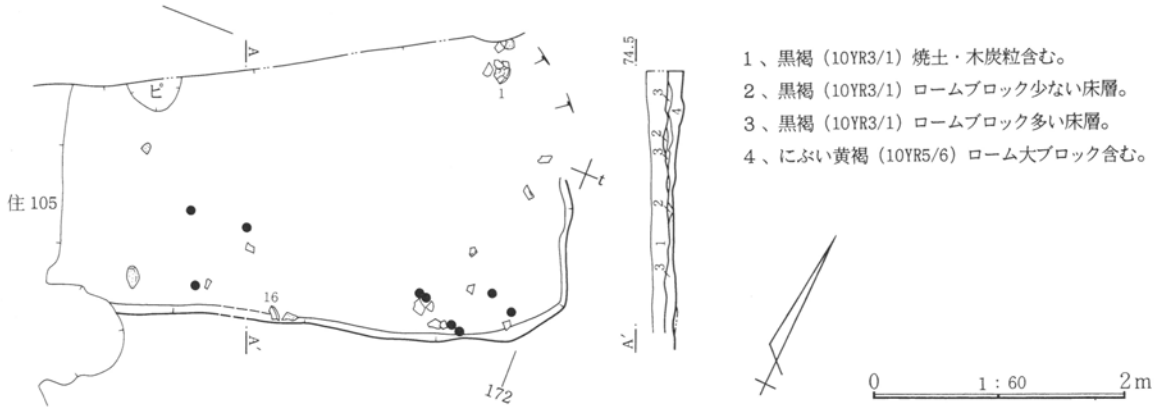
0　1：60　2m

第318図　住居跡106遺構図

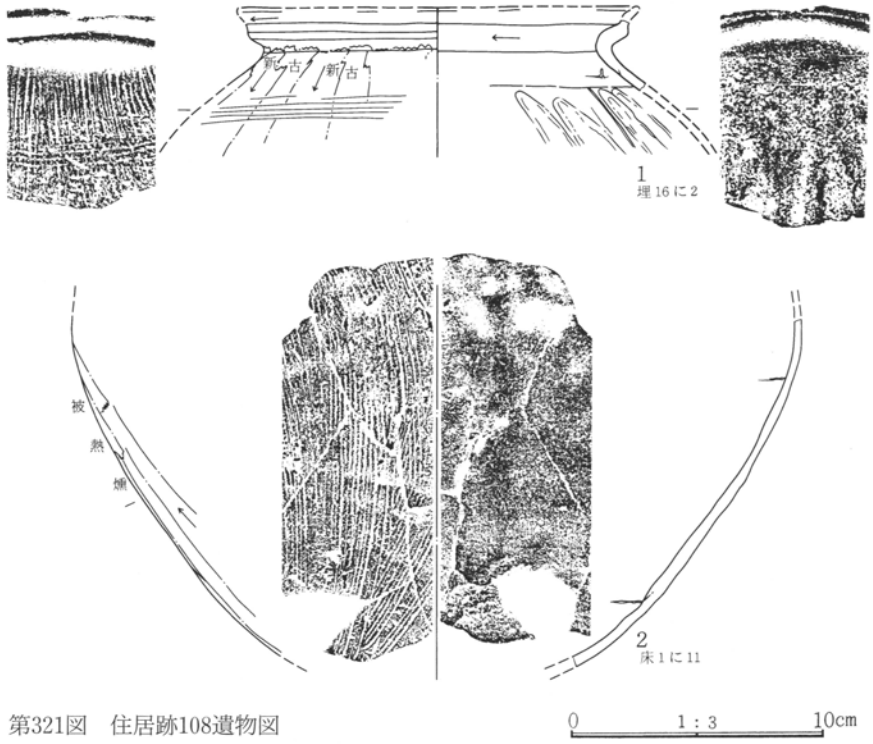


0　1：3　10cm

第319図　住居跡106遺物図



第320図　住居跡108遺構図



第321図　住居跡108遺物図

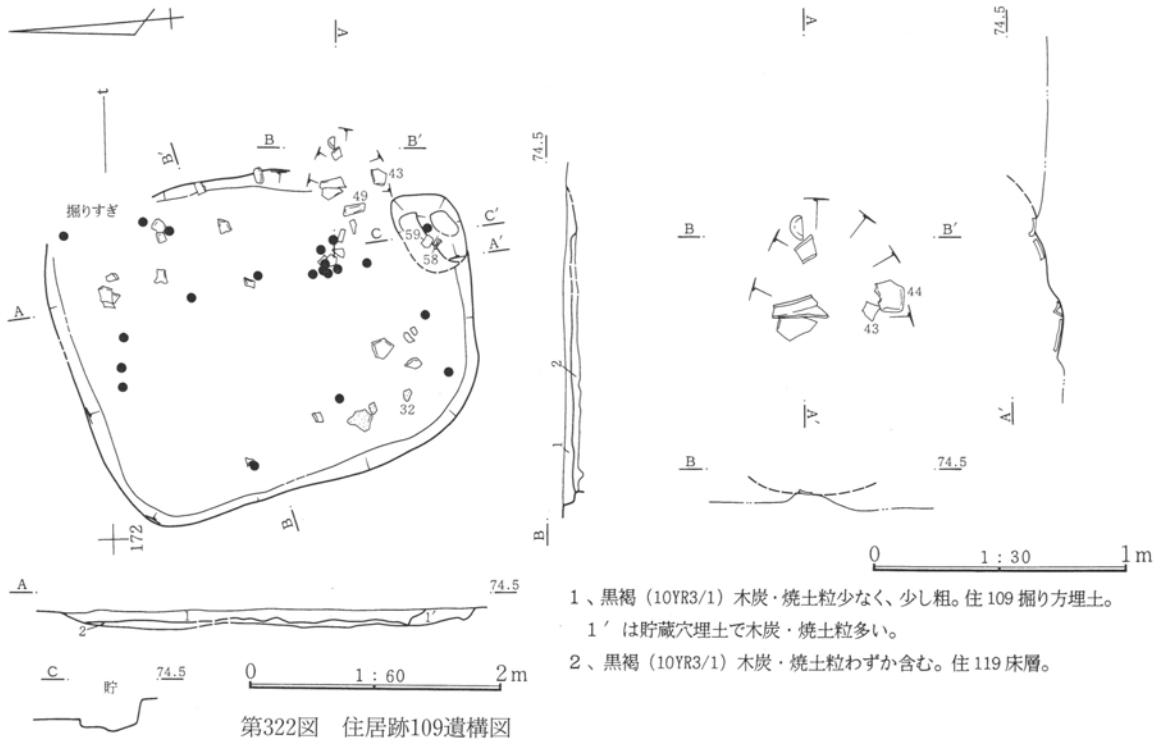
跡での最古使用例となる。遺物は、同図１の甕が古墳時代前期で、本住居跡に関連の時期の個体である。しかし、同図3・4・5・6は9―10世紀前半の個体であり、それらは本住居跡の床付近に達していた遺物であり、調査した後出住居跡を除く範囲にも上層からの掘込みがおよんでいたようである。

住居跡105―1・2　（第316・317図、図版61・178）

位置はQ大区st172・173、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡105―2・108・104が先行し、坑181、ピに切られ、ピットとは不明。規模は東西355cm、南北303＋αcm、方向は中軸でN23°Wを測る。施設に竈・貯蔵穴があり、別に住居跡105―2の先行貯蔵穴があり竈掘方に焼土面が竈痕跡として残る。住105―1の貯蔵穴１は床面より深さ３cmを測る。遺物は第317図の２は埋土であり、除くと10世紀前半の個体である。

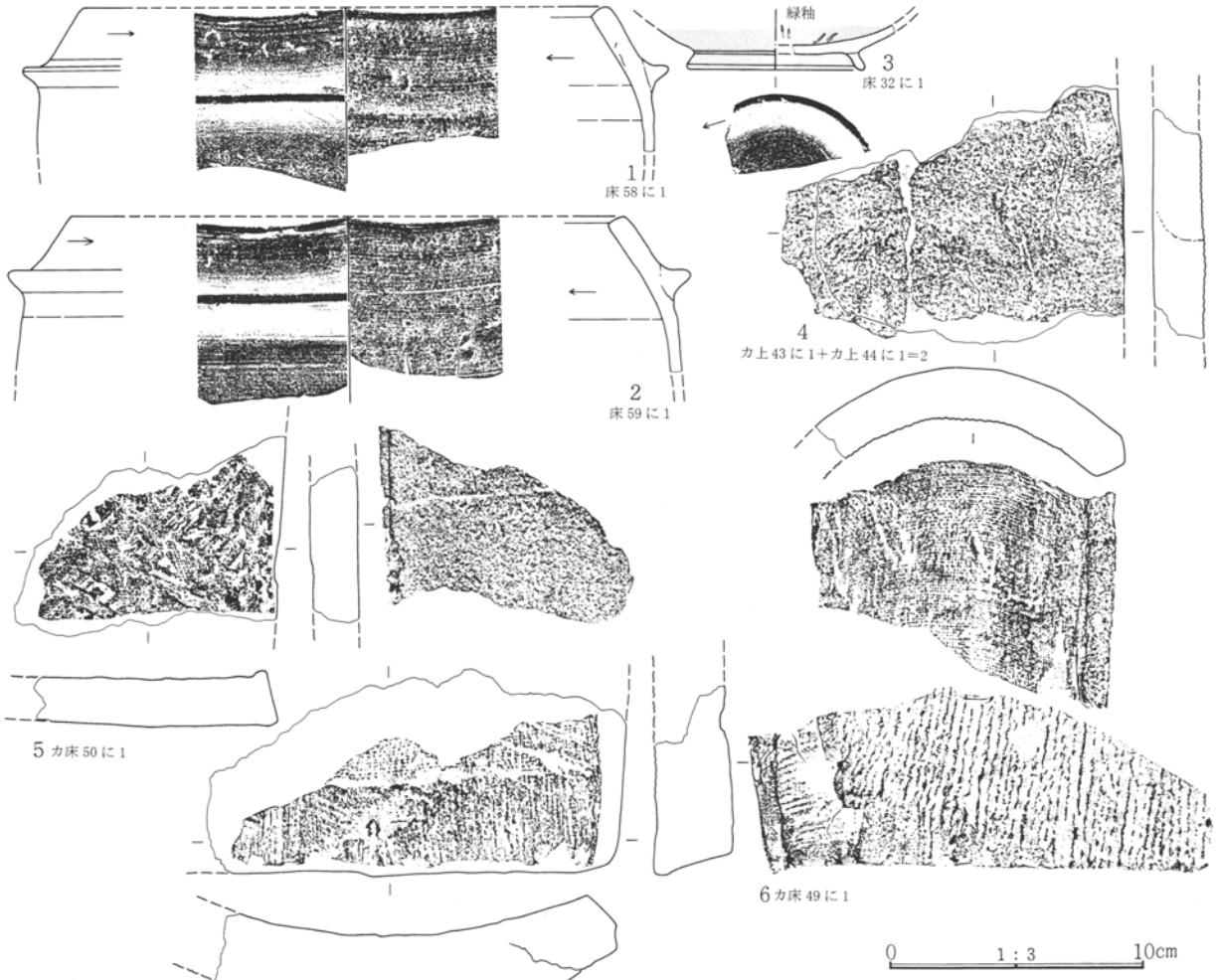
住居跡106　（第318・319図、図版62・178）

位置はQ大区qr174・175、調査面はローム層上面標高74.35m。重複は住居跡95・98、坑165・166・167・

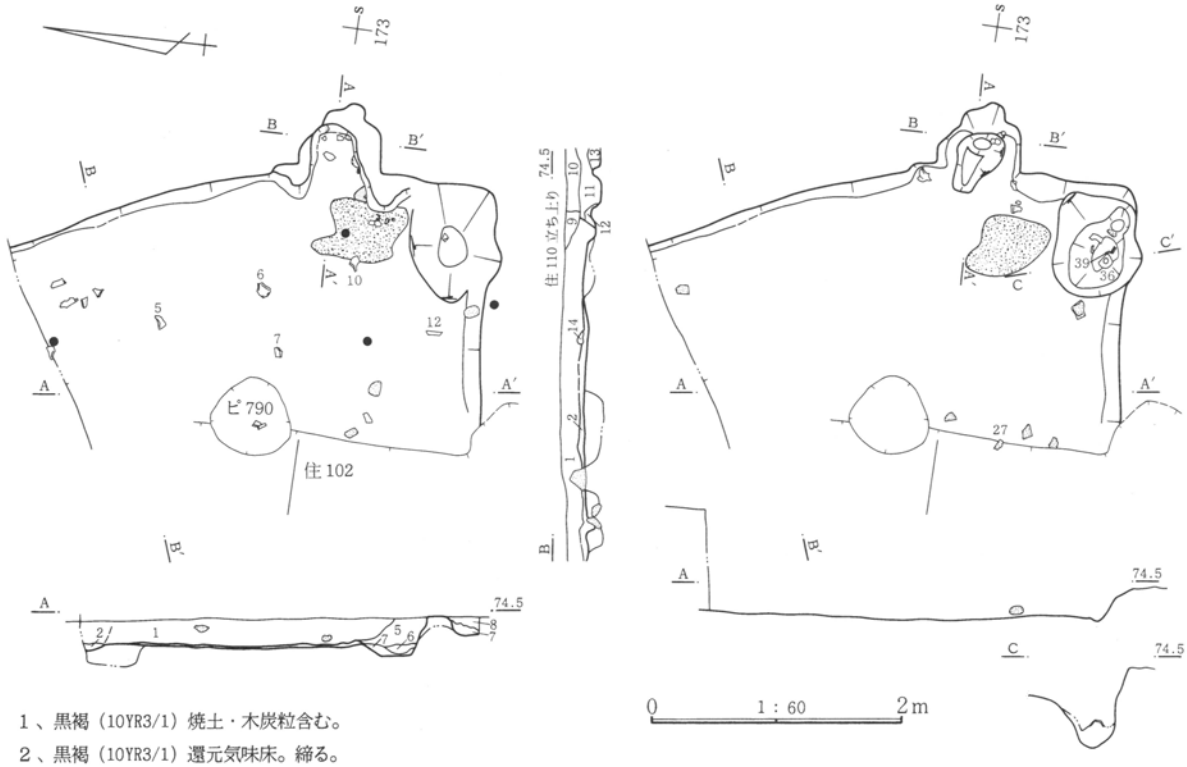


1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少なく、少し粗。住109掘り方埋土。
1′は貯蔵穴埋土で木炭・焼土粒多い。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒わずか含む。住119床層。

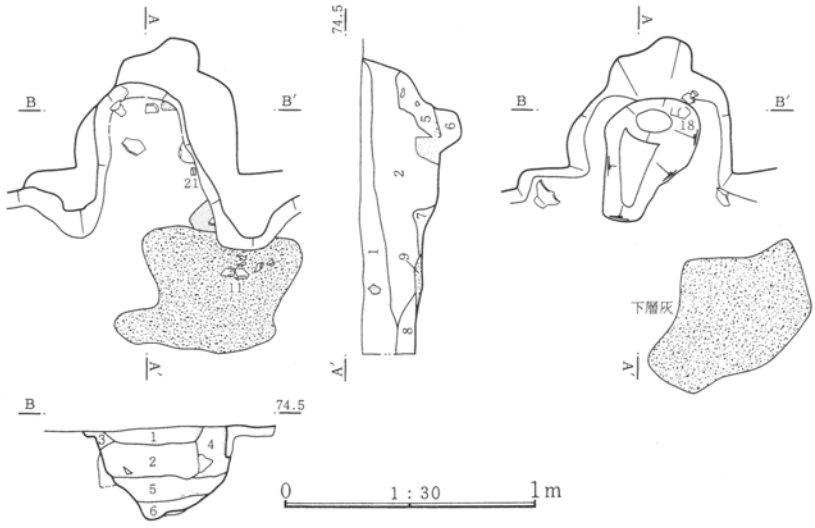
第322図　住居跡109遺構図



第323図　住居跡109遺物図



1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。
2、黒褐（10YR3/1）還元気味床。締る。
5、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含み、軟。
6、黒褐（10YR3/1）５層より少し黄味あり。
7、褐　（10YR4/4）ローム漸移的色調。締りあり。
8、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒入らず、少しローム土壌化の気味あり。
9、黒褐（10YR3/1）ローム小粒わずか入る。小ピット埋土か。
10、明黄褐（10YR6/6）ローム粒と土壌化。下方少し還元気味で締り、住105の床面。
11、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多く、全体に軟らか。
12、明黄褐（10YR6/6）ローム粒と土壌化。12′はローム浮き出し。
13、黒褐（10YR3/1）12層より黒っぽい。軟らか。下面床面。
14、ロームブロック。

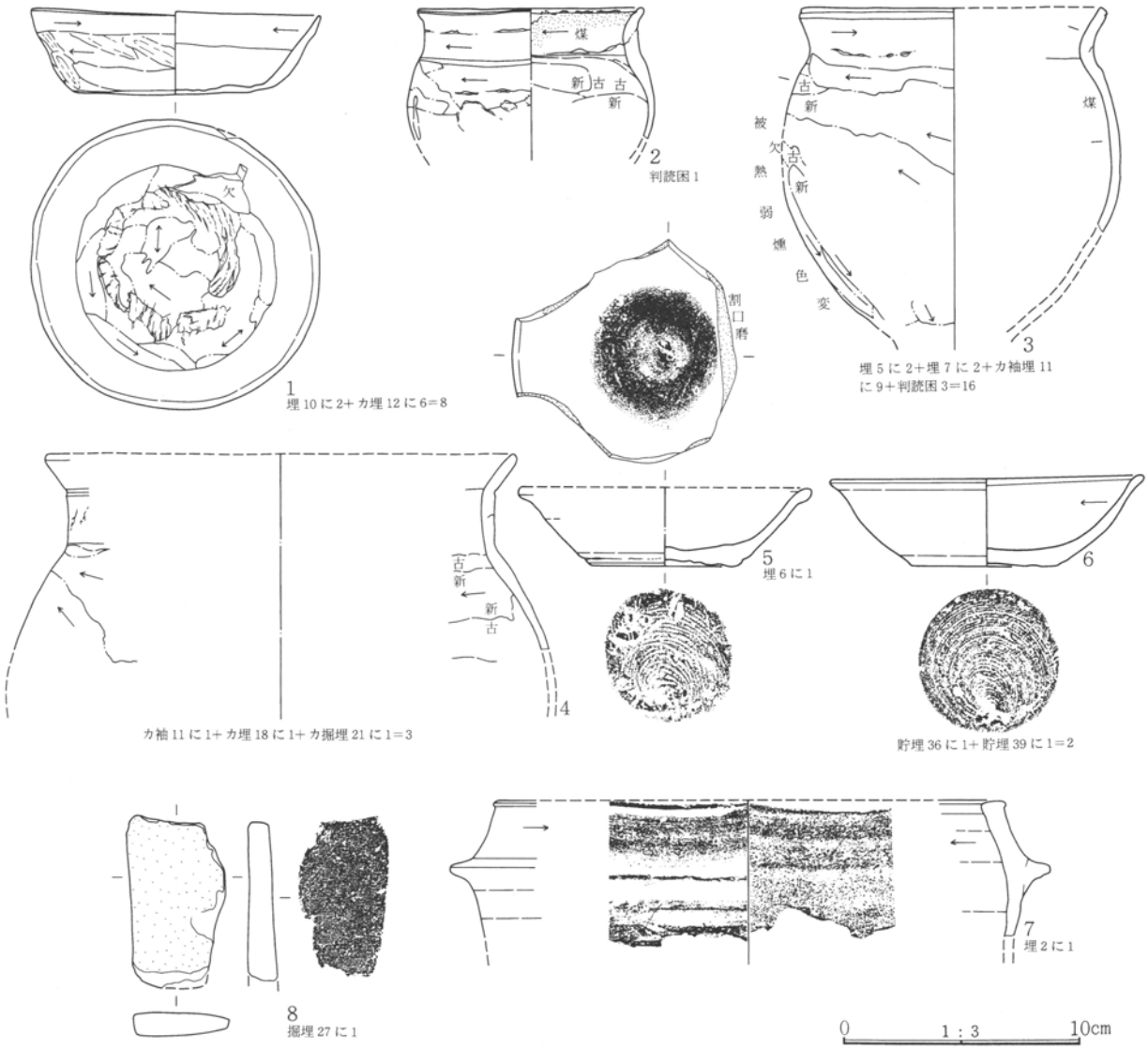


1、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒含むが、１層より少ない。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒含むが、微。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。右壁少し焼土化。
5、黒褐（10YR3/1）焼土粒含み、灰を多く含む。
6、黒褐（10YR3/1）焼土粒少なく、灰も少ない。
7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締りあり。
8、黒褐（10YR3/1）少し還元気味。住110の床直上層。
9、灰層。

第324図　住居跡110遺構図

176、ピ769・770・772・773・771・925・961が後出。住101―2とは不明。規模は東西300cm、南北387cm、方向は中軸でN2°30′Wを測る。施設に竈、廃棄時にほとんど埋まっていた貯蔵穴、床下坑がある。遺物は10世紀前半。

住居跡108　（第320・321図、図版178）



第325図　住居跡110遺物図

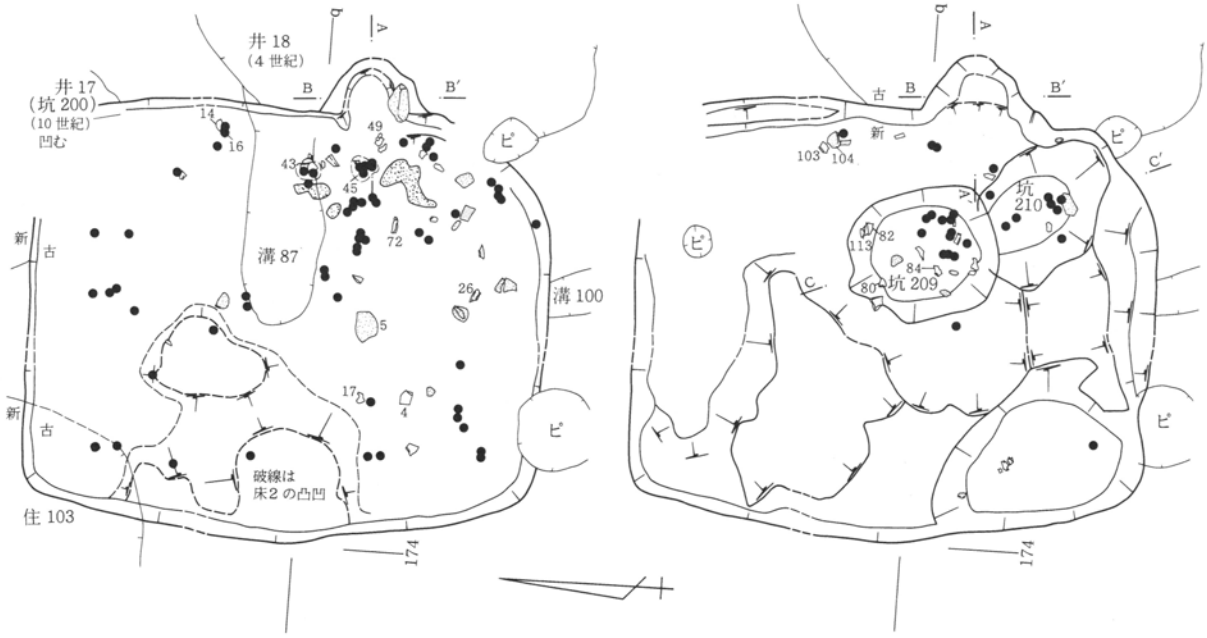
位置はQ大区st172に、調査面は標高74.4m。重複は住居跡105に切られ、住居跡104を切るが、床面高が同104と同じであり、炉、柱穴を欠き、掘方も同104の掘方を切る構造も見受られず、否住居跡の可能性もあり。南、東輪郭は平面確認時による。規模は東西410＋αcm、南北240＋αcm、方向N16°W。遺物は、古墳時代前期で、同期住居跡の方向性は30～40°西偏する点も異なり、否住居跡の可能性が強まる。

住居跡109　ぐ第322・323図、図版62・179）

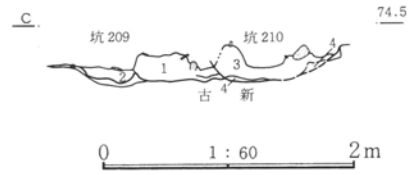
位置はQ大区rs173に、調査面はローム漸移上層、標高74.4m。重複は下方の住居跡119・136を切り、さらに同104を切る。規模は南北335cm、東西255cm、方向は中軸でN13°45′Wを測る。施設に竈、貯蔵穴があるものの掘方は以下に黒色土埋没の住居跡が重なるため不明。遺物は、10世紀代の羽釜片がある。

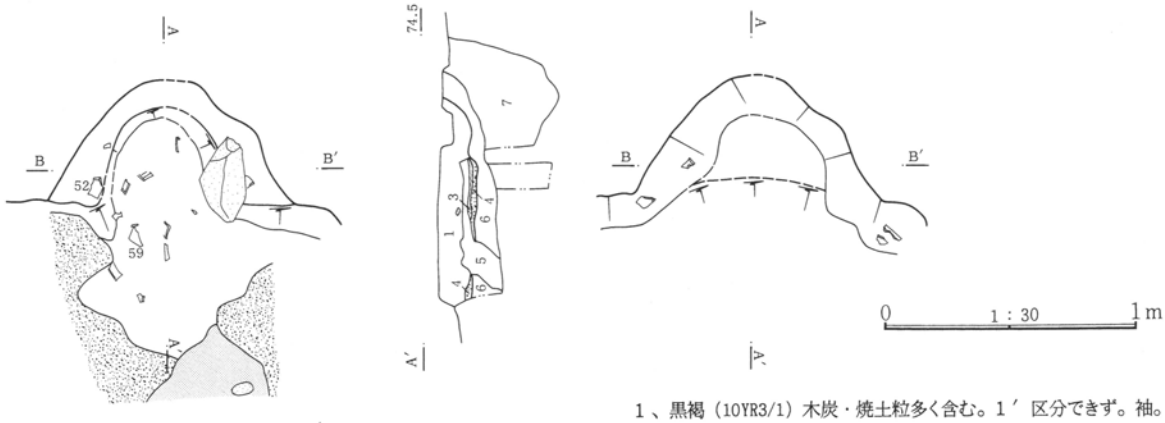
住居跡110　（第324・325図、図版62・179）

位置はQ大区rs173に、調査面はローム漸移上層、標高74.4m。重複は、同102に切られる。規模は南北393＋αcm、南北212＋αcm、方向は南壁を基にN4°Wを測る。施設として竈、貯蔵穴があり、掘方は平坦であっ



1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含み、ロームブロック入る。
2、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。
3、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。ロームブロック横縞状に入り、少し締る。
4、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒ほとんど入らない。粘性。





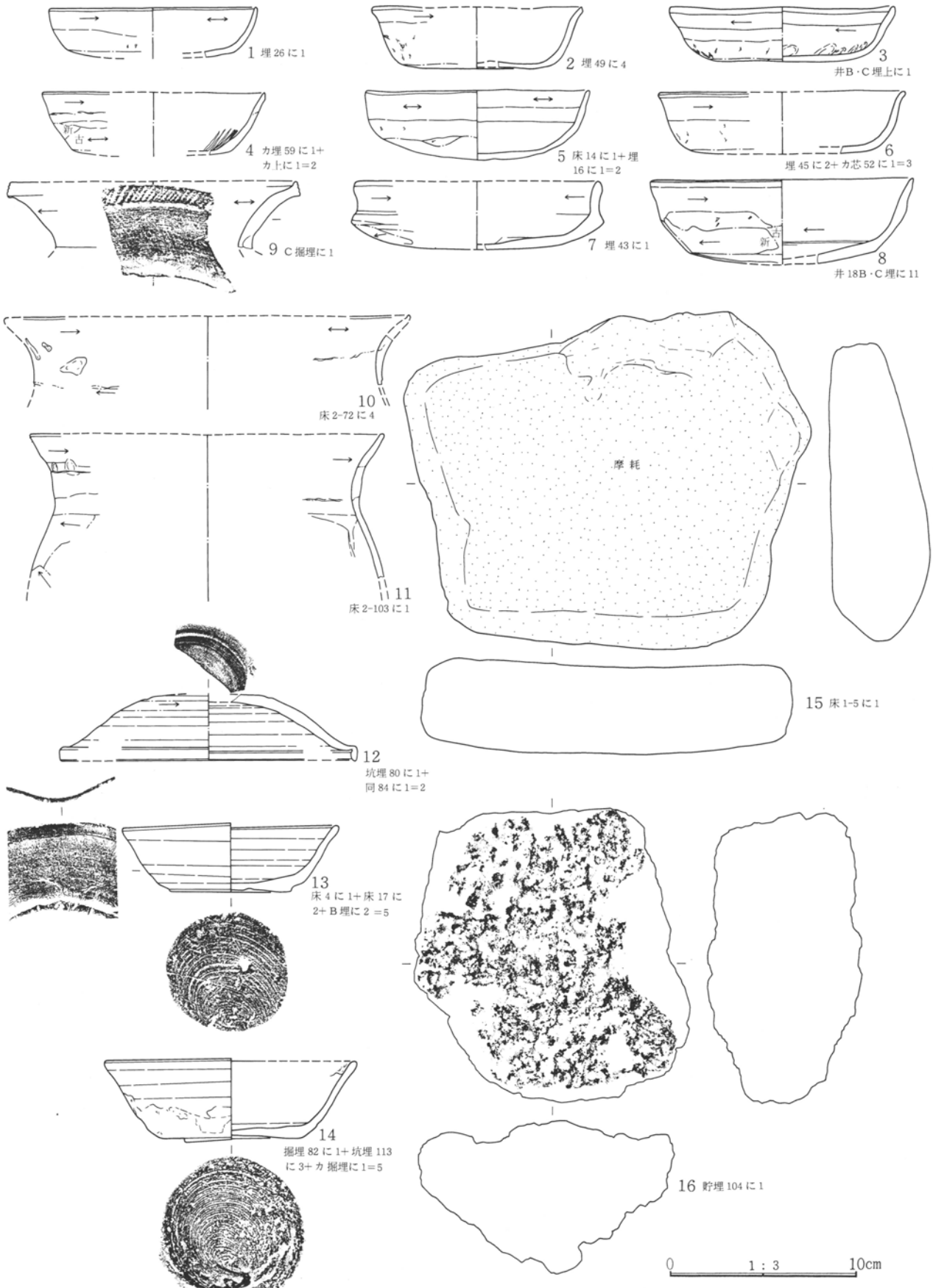
1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒多く含む。1′区分できず。袖。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し入る。
3、赤褐（10YR4/6）焼土粒主体で、焼土化にしてはブロック多い。
4、褐灰（10YR5/1）灰を主とするが、焼土粒も入る。軟。
5、黒褐（10YR3/1）灰を多く含み、1 層より焼土粒・木炭粒は少ない。
6、黒褐（10YR3/1）木炭粒・焼土粒含む。
7、黒褐（10YR3/1）木炭粒・焼土粒微。軟。

第326図　住居跡111遺構図

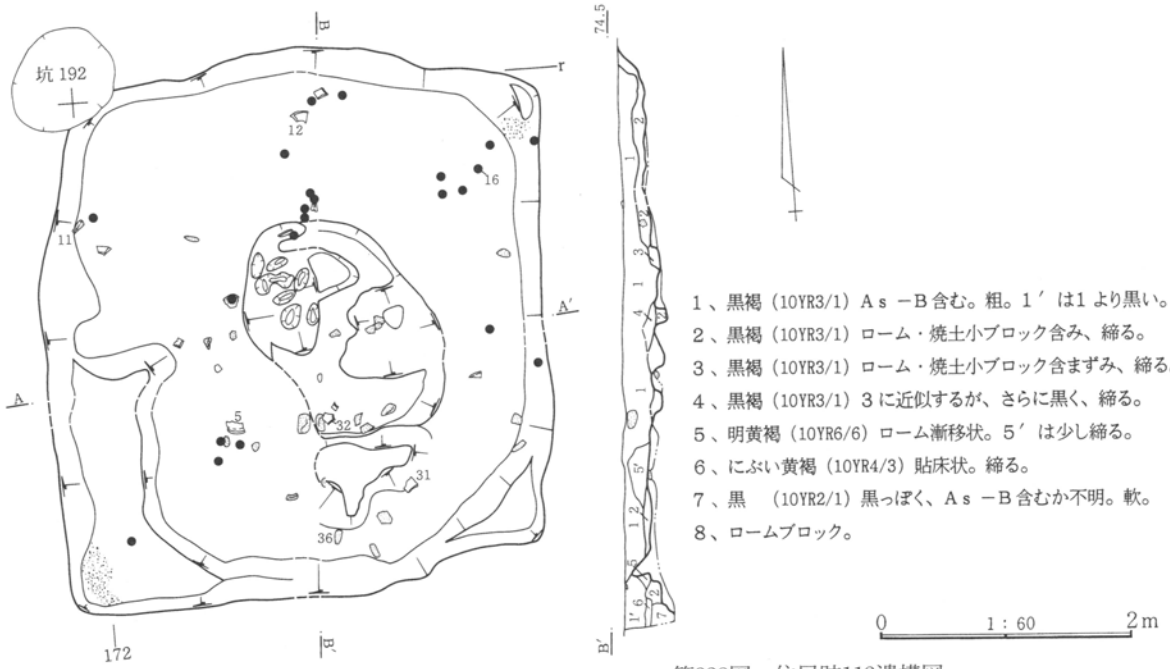
た。遺物は第325図のとおり、竈、貯蔵穴の同図４・６を基にすると９世紀中頃で、住居機能も同期であろう。

住居跡111　（第326・327図、図版63・179・180）

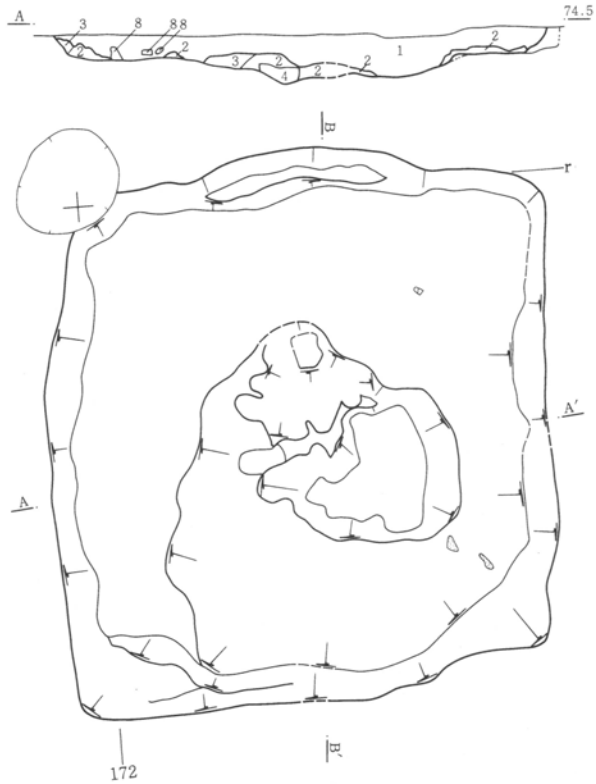
位置はＱ大区pq173･174にある。調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡103、井17に切られ、井



第327図　住居跡111遺物図



第328図　住居跡112遺構図



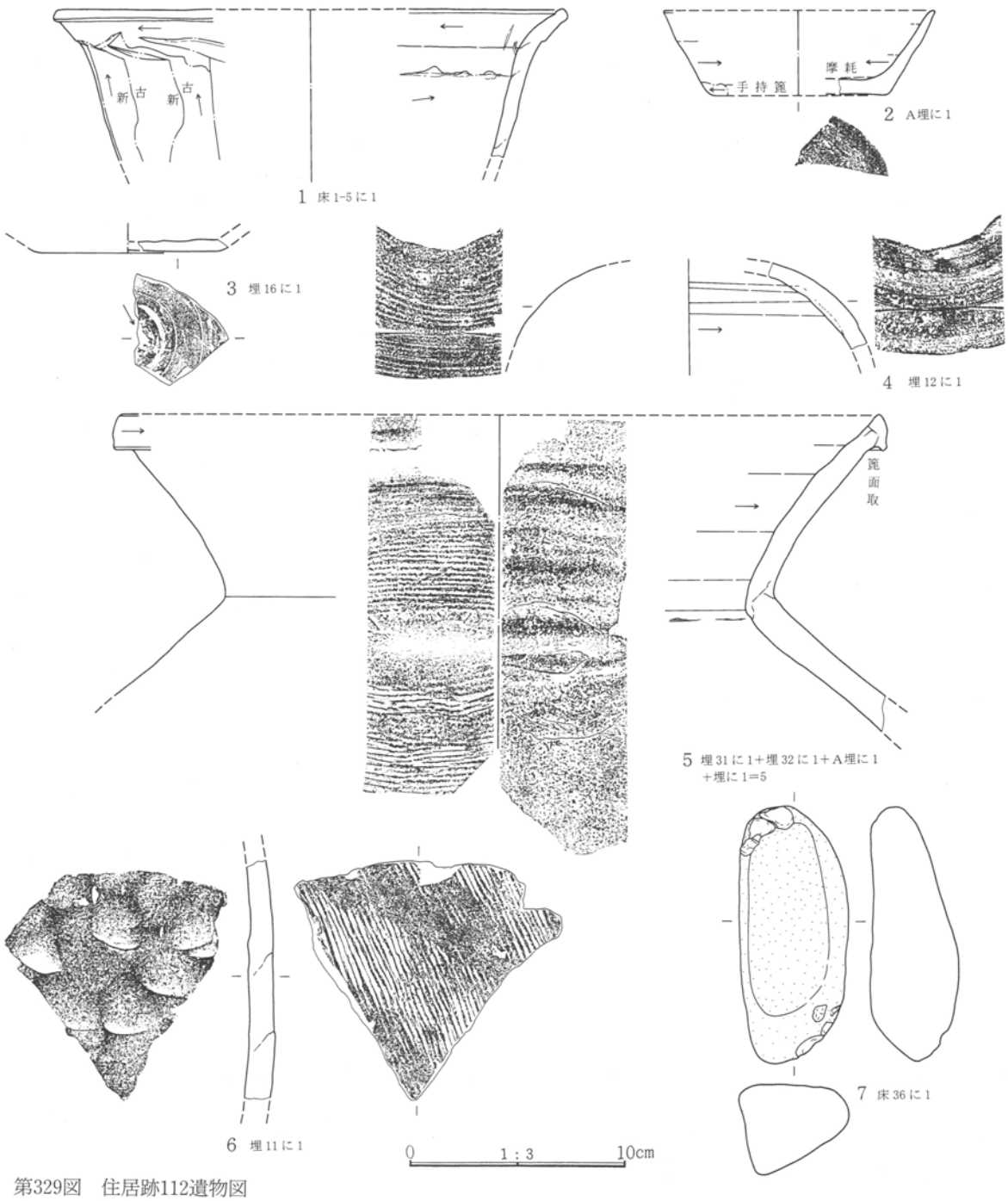
18を切る。規模は東西415cm、南北345cm、方向は中軸でN1°30′Wを測る。施設に竈、貯蔵穴（坑210の南東部か）かもしれない土坑、掘方で床下坑、貼床の下層床２での凹凸がある。遺物は、第327図に示したが、７世紀初頭頃の同図７、８世紀代の５・８などまじえ、床１とした上層床の一群に5・13・15、下層床床２とした10・11などが住居の機能時に直結しそうな個体で、15を除き９世紀前半である。

住居跡112　（第328・329図、図版63・180）

位置はＱ大区qr171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.4mである。重複は、坑192が切る。本住居跡は中世竪穴で、土層注１のとおりＡｓ－Ｂ混りの黒褐色土を主体埋土とするが、以下はＡｓ－Ｂを含むか否か不明であり、別遺構の底面が以下に含まれている可能性がある。また中世竪穴として注１の次層には締る床面が存在しているが柱穴らしい穴跡の存在はなかった。規模は、東西400cm、南北433cm、方向N3°30′Wを測る。遺物は第329図に、同図２は９世紀前半、1・4が７世紀代と見られるが、中世遺物の存在はない。

住居跡114　（第330・331図、図版63・180）

位置はＱ大区ｔ171にあり、調査面はローム漸移層中、標高74.4cmである。重複は住119が切る。調査面上で概に床下に達していたらしく、壁面の存在は不明瞭であり、床面も不明瞭で、土坑の可能性もある。規模は、東西202＋αcm、南北123＋αcmである。遺物は第331図に示したが床面は土層断面注４中で、８世紀前半

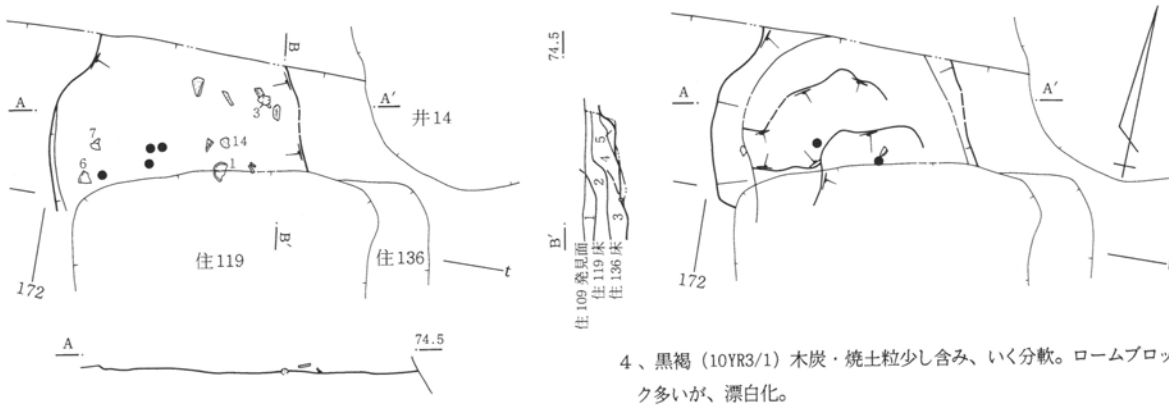


第329図　住居跡112遺物図

の個体を主とし、住居の機能時も同期であろう。

住居跡115　（第332図、図版64）

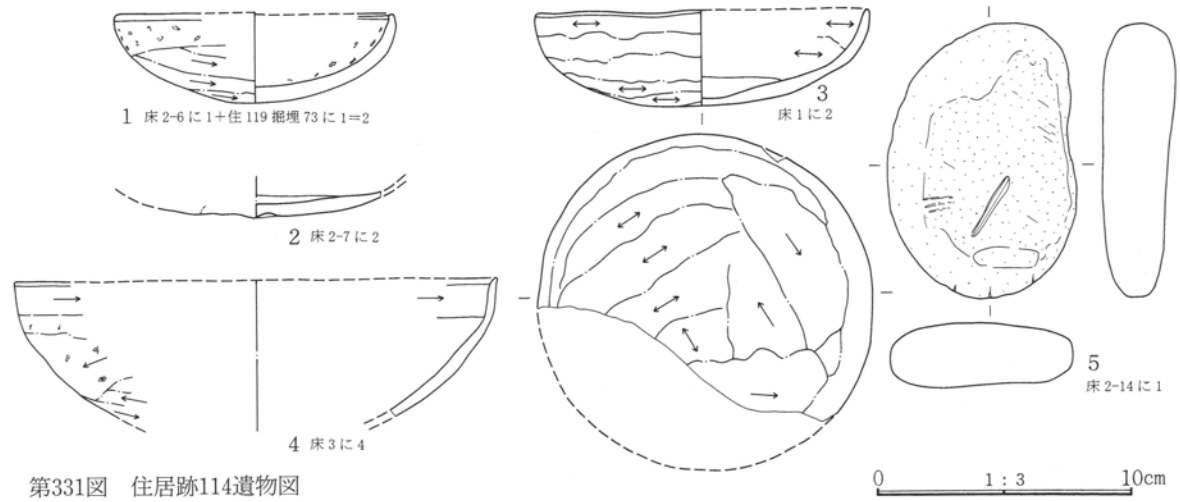
位置はＱ大区rs174にあり、調査面はローム層上面、標高74.35mである。重複は住居跡100―1に切られる。規模は東西145＋αcm、南北289＋αcm、方向は東壁でN12°Wを測る。施設として竈位置が高いためか不明であった。貯蔵穴は南東隅より内側に50cm以上離れた場所に発見され、掘方で南東隅がわずか凹むため別住居の貯蔵穴の可能性もある。遺物は、収録漏である。



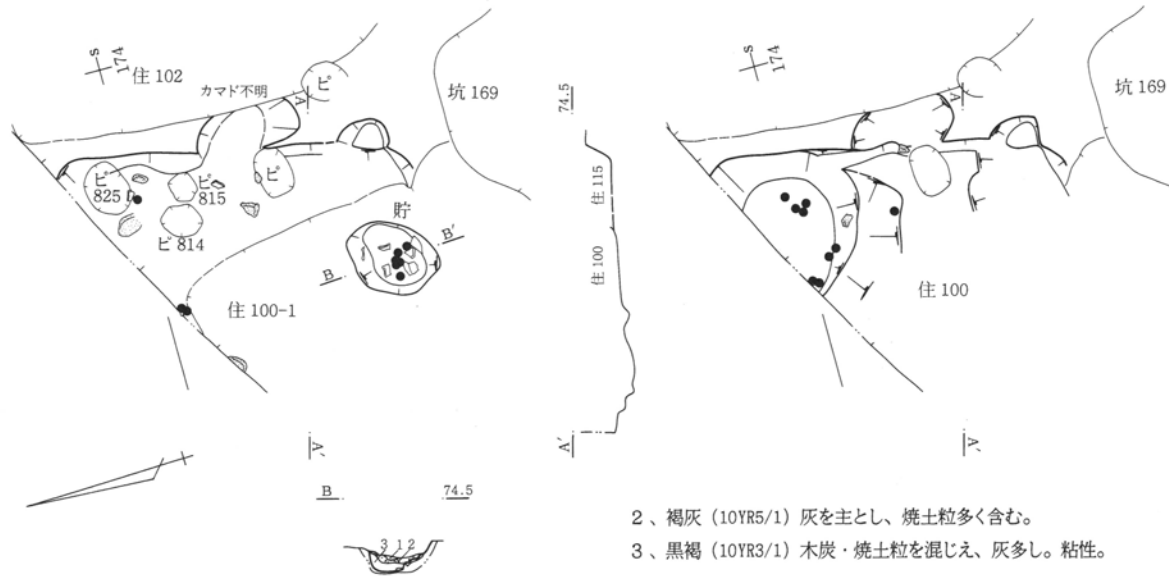
1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少なく、少し粗。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、少し軟。
3、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、軟。ロームブロック多い。
4、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、いく分軟。ロームブロック多いが、漂白化。
5、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、いく分軟。ロームブロックームさらに多い。

0　1：60　2m

第330図　住居跡114遺構図



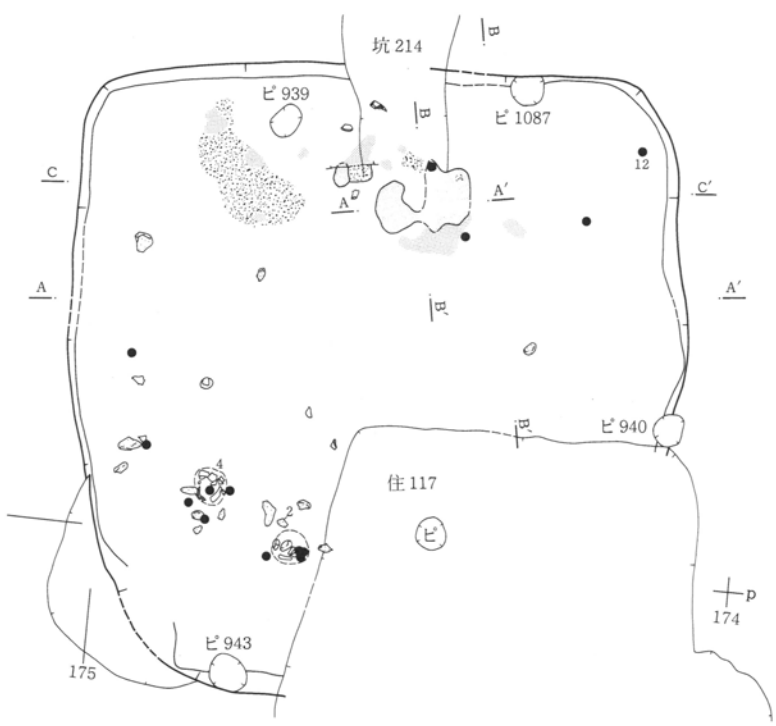
第331図　住居跡114遺物図

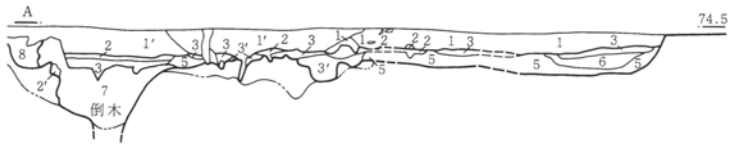


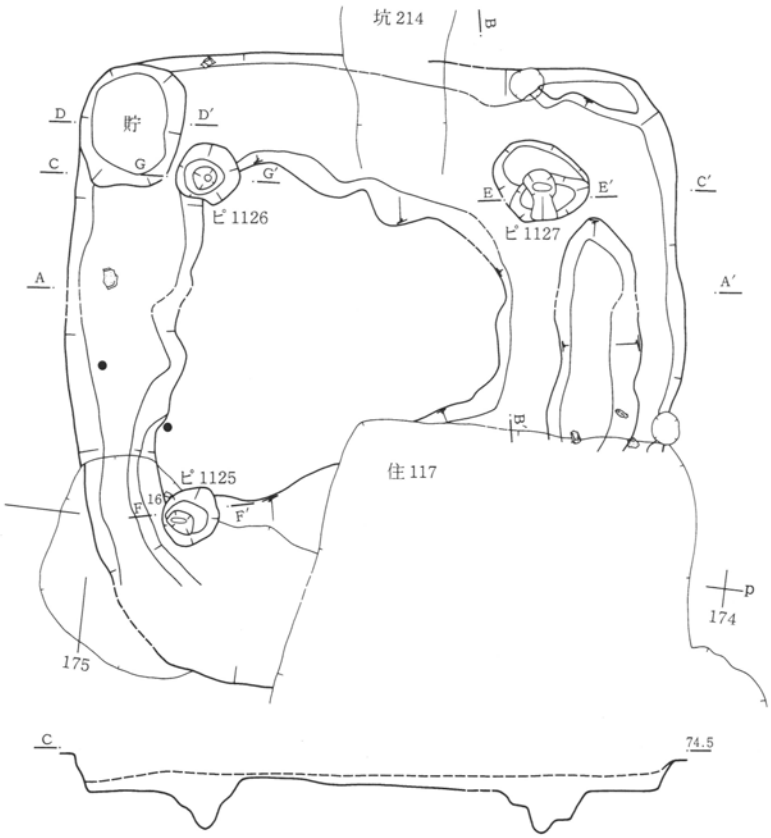
1、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック。
2、褐灰（10YR5/1）灰を主とし、焼土粒多く含む。
3、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒を混じえ、灰多し。粘性。

0　1：60　2m

第332図　住居跡115遺構図







1、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒わずかに含み、やや粗。1′はさらに黒ずむ。

2、灰黄褐（10YR4/2）1層中に黒褐(10YR3/1)土の大ブロック含む。そのブロックが床貼5層。2′はそのブロック。

3、灰黄褐（10YR4/2）2層に、にぶい黄褐（10YR5/4)のローム粒とその土壌化入る。黒褐（2層中の)は少ない。3′は少し黒味強い。

4、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロックとその土壌化含む灰黄褐土。

5、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを主とする。5′はブロックそのもの。

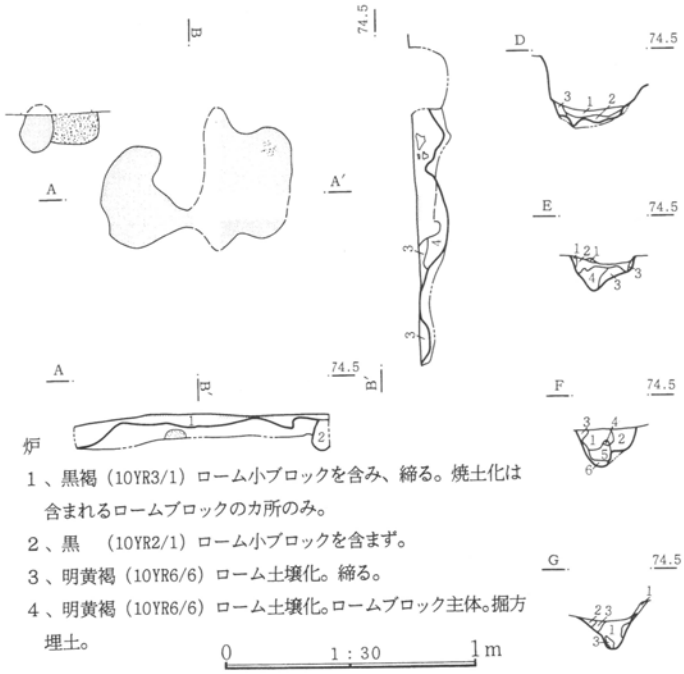
6、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック・漂白小ブロック含む。

7、黒褐（10YR3/1）軽石入らない黒褐。軟。

8、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移的。

0　1：60　2m

第333図　住居跡116遺構図



貯蔵穴

1、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含み、ローム小ブロック入る。締りあり。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、粗。
3、明黄褐（10YR6/6）ローム土壌化主。

ピット 1127

1、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック。
2、黒褐（10YR3/1）漂白ローム粒を多く含む黒褐。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを含み、締る。
4、にぶい黄褐（10YR7/4）漂白ロームブロックを主とし、締る。

ピット 1125

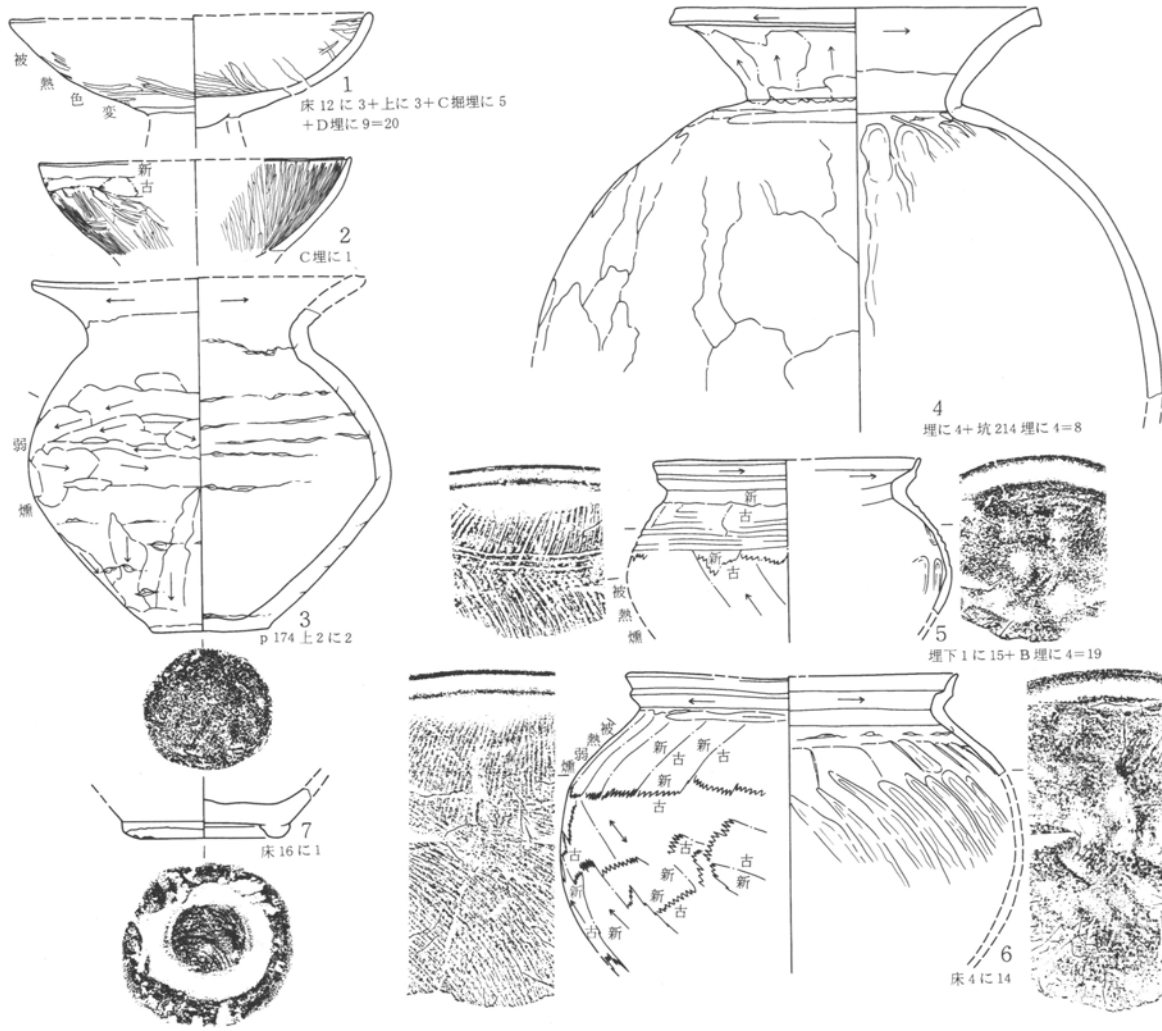
1、黒褐（10YR3/1）少し砂質。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。
3、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック。
4、にぶい黄褐（10YR7/4）漂白ロームブロック。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック小粒含み、締る。
6、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化含み、締る。

ピット 1126

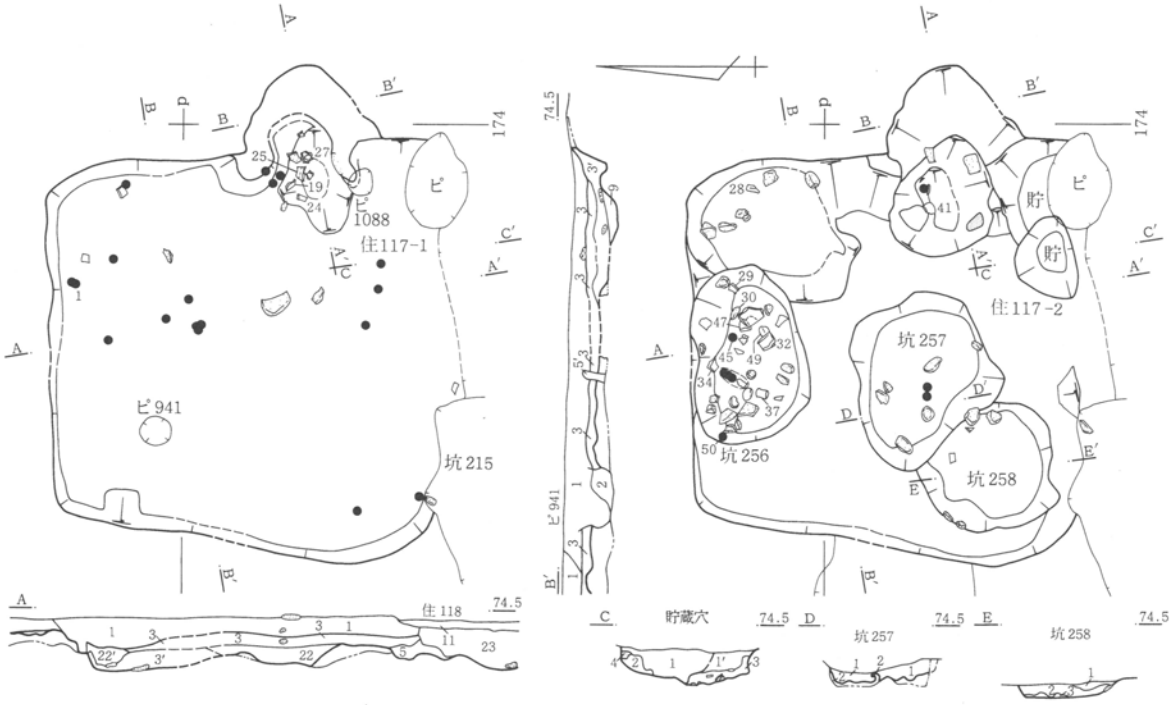
1、黒褐（10YR3/1）ローム小粒含み締る。柱痕ぼくない。
2、黒褐（10YR3/1）黒味あり、軟。柱痕らしくない。
3、にぶい黄褐（10YR5/4）漂白ロームブロック含む。

0　1：60　2m

第334図　住居跡116遺構図



第335図　住居跡116遺物図



１、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒わずかに含み、やや粗。
２、灰黄褐（10YR4/2）１層中に黒褐(10YR3/1)土の大ブロック含む。そのブロックが床貼層。
３、灰黄褐（10YR4/2）にぶい黄褐（10YR5/4)のローム粒とその土壌化入る。黒褐は少ない。３′は少し黒味強い。
５、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを主とする。５′はブロックそのもの。
９、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移的。その漂白化を主とする。
11、灰黄褐（10YR4/2）黒味あり、軽石少ない。ローム小粒少し含む。
22、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック含む。上面は床面で貼床上面。以下は床下土坑であり客土。22′は黒味強い。
23、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土粒含み、軟。別遺構土坑か。

貯蔵穴

１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック焼土入る。木炭粒含む。１′は含まず。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックをわずか含み、焼土粒少ない。
３、黒褐（10YR3/1）漂白ロームブロックをわずか含み、焼土粒少ない。
４、焼土塊。

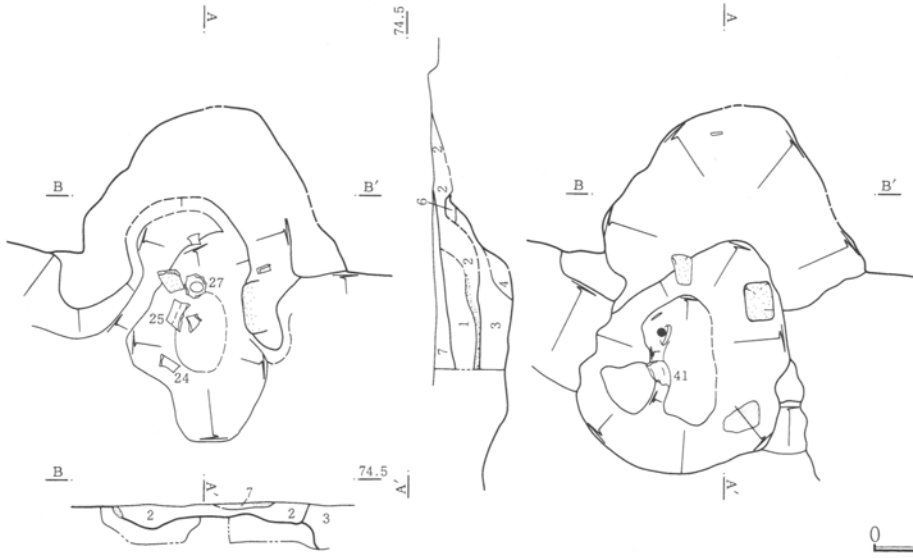
坑257

１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。焼土・木炭粒ほとんどなし。
２、にぶい黄橙（10YR6/4）漂白ロームの土壌化。

坑258

１、黒褐（10YR3/1）黒味おび、ロームブロック含まず。焼土・木炭見えず。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。
３、にぶい黄褐（10YR5/4）漂白ロームを主とする。

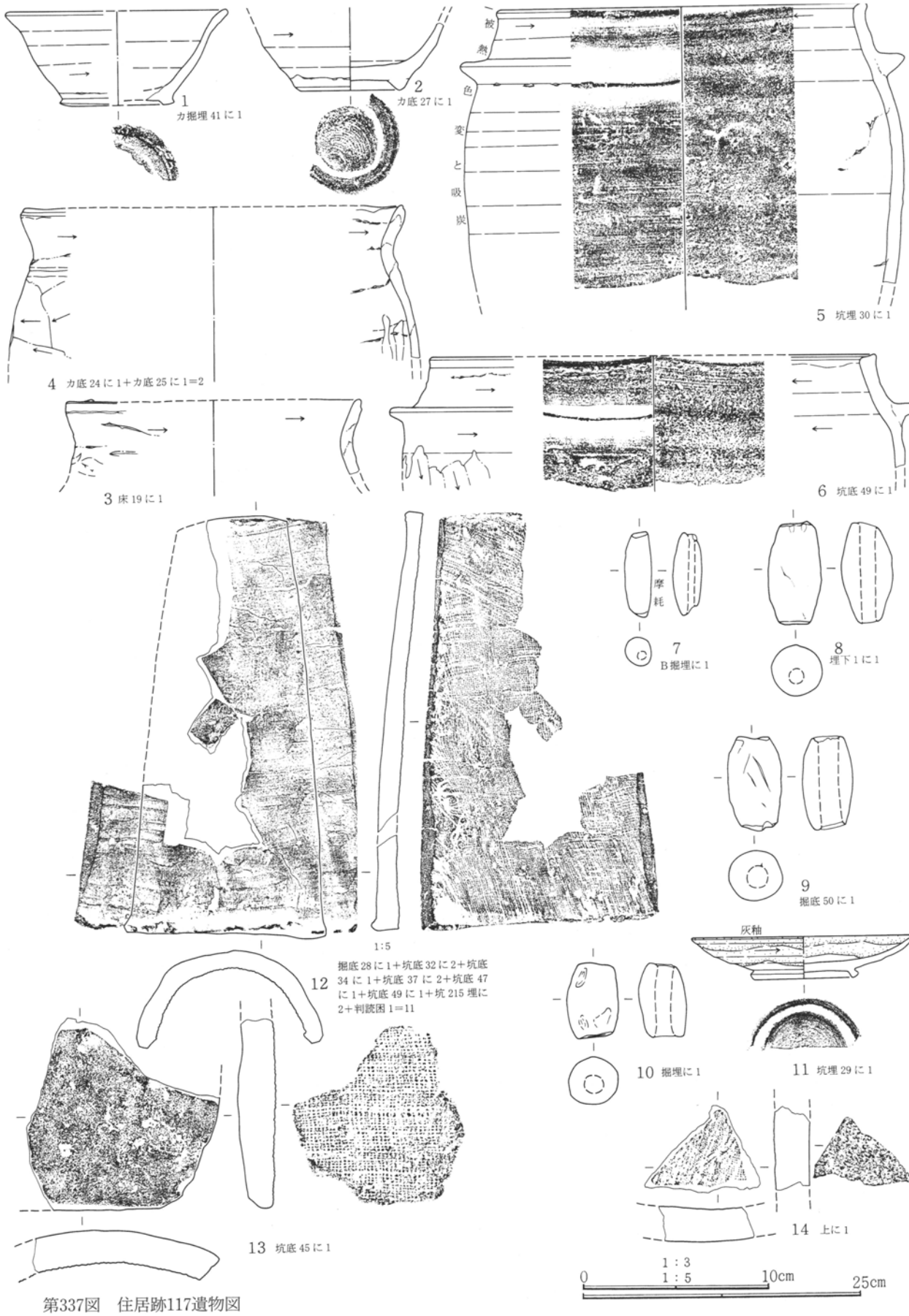
0　1：60　2m



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒を少し含む。木炭粒少ない。
２、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒も多く含む。燃焼部に木炭粒・灰さらに多い。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを多く含む。別遺構埋土か。
４、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック主とし、粗。
６、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒見えず、軟。倒木痕か。５層より黒い。
７、黒褐（10YR3/1）２層に同じ。直下に使用面の灰層あり。

0　1：30　1m

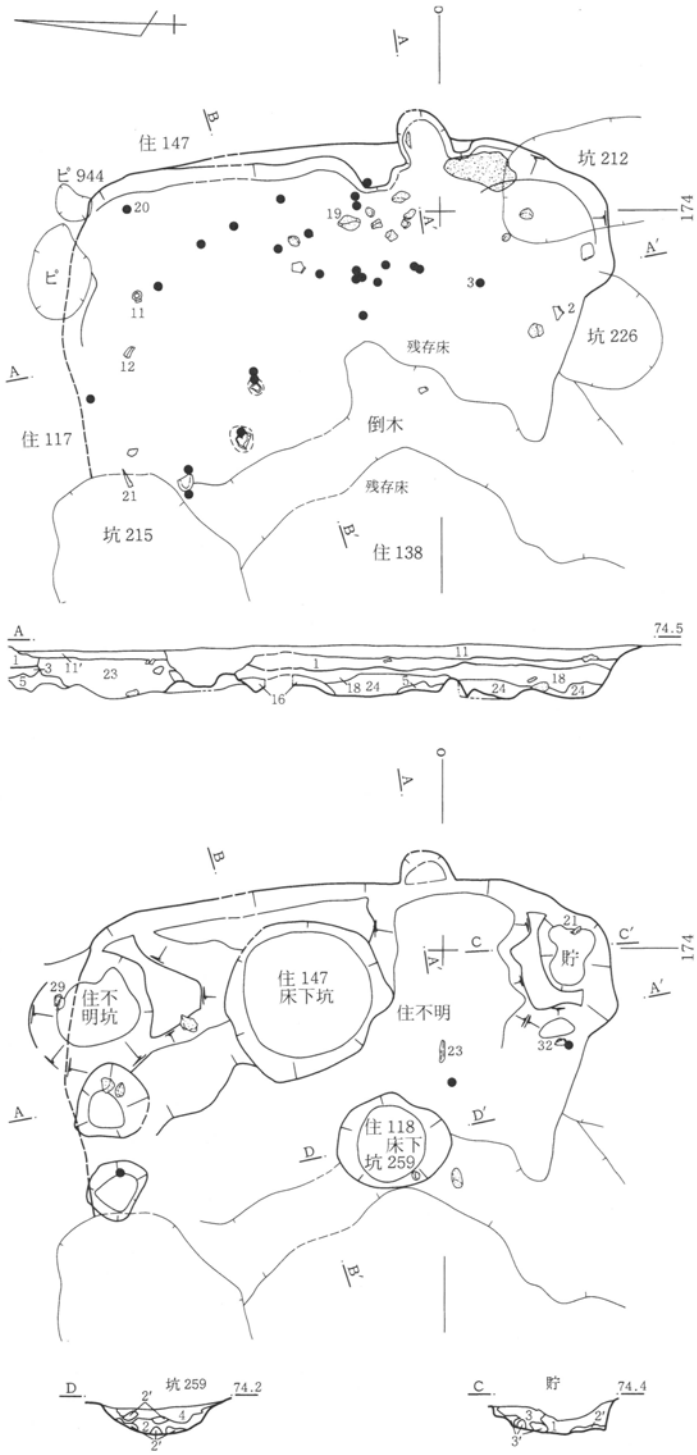
第336図　住居跡117―１・２遺構図

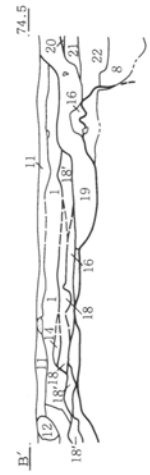


第337図　住居跡117遺物図

住居跡116　（第333・334・335図、図版64・180・181）

位置はＱ大区op174・175にあり、調査面はローム層上面標高74.45mである。重複は、住居跡117、坑214、土器集積３に切られ、南西隅に後出の倒木が重む、図中南西隅の細線がそれである。土器集積３は、本住居跡の埋没の一過程にあった





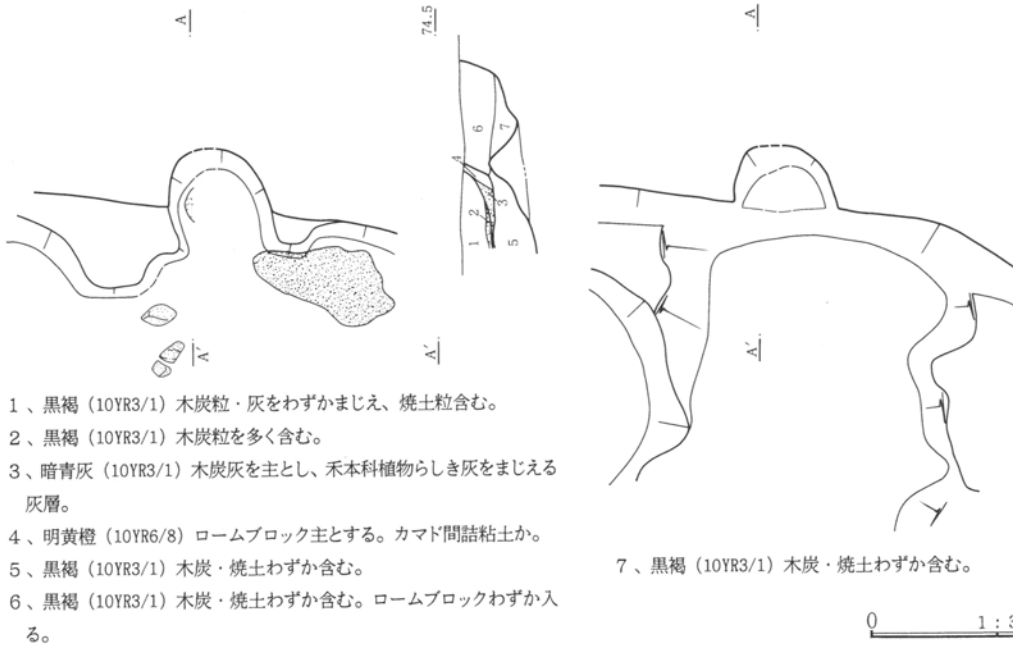
１、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒わずかに含み、やや粗。
３、灰黄褐（10YR4/2）にぶい黄褐(10YR5/4)のローム粒とその土壌化入る。
５、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを主とする。
８、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移的。
11、灰黄褐（10YR4/2）黒味あり、軽石少ない。11′はローム小粒少し含む。
12、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック。12′は漂白化ロームブロック。
16、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック量多く、黒褐ブロック含み、少し軟らか。床下。
18、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック多く、締る。床層。18′は少し軟。
19、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒含み、木炭粒入る。ロームブロック少ない。床下土坑埋土。
20、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック入らず、少し締る。床層か。
21、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック入らず、焼土粒少し入り軟。別住居掘方埋土か。
22、灰黄褐（10YR4/2）黒褐ブロック。
23、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土粒含み、軟。別遺構土坑か。
24、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒少し含む。ロームブロック入る。軟。

0　1：60　2m

１、黒褐（10YR3/1）上方にロームブロック含み軟。焼土粒入る。
２、黒褐（10YR3/1）漂白化ロームブロック多く含む。2′はそのブロック。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。3′はロームブロック。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含まず。軟。

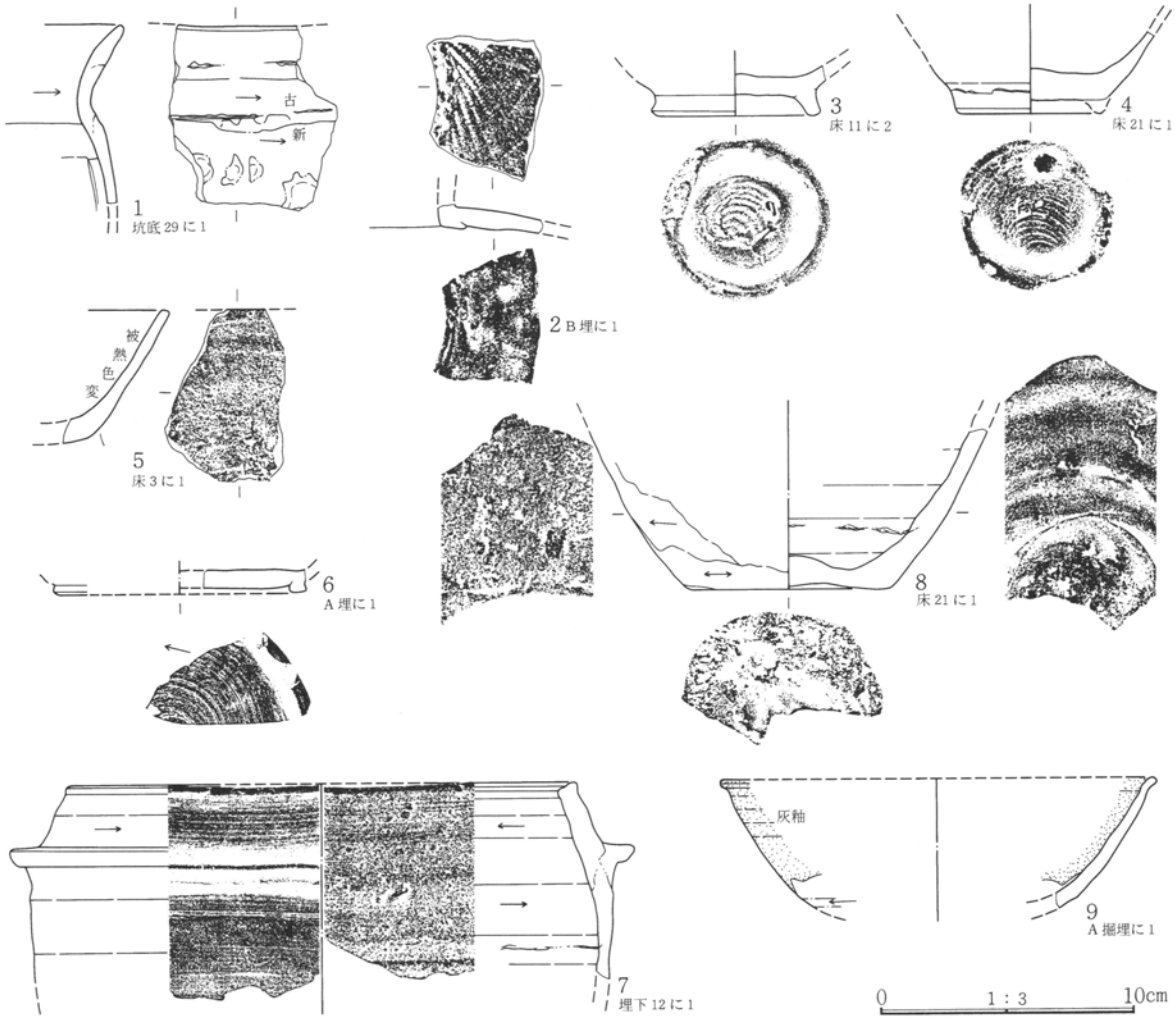
第338図　住居跡118遺構図

土坑状の輪郭を拾った可能性もある。施設として北半に炉跡、貯蔵穴、柱穴がある。南東柱穴は、住居跡117の掘方が深いため発見できなかった。遺物は第333図のとおり、古墳時代前期の個体で占められるが、同図７に10世紀代の遺物もあり、後世の掘込みがおよんでいたようである。住居機能は古墳時代前期である。

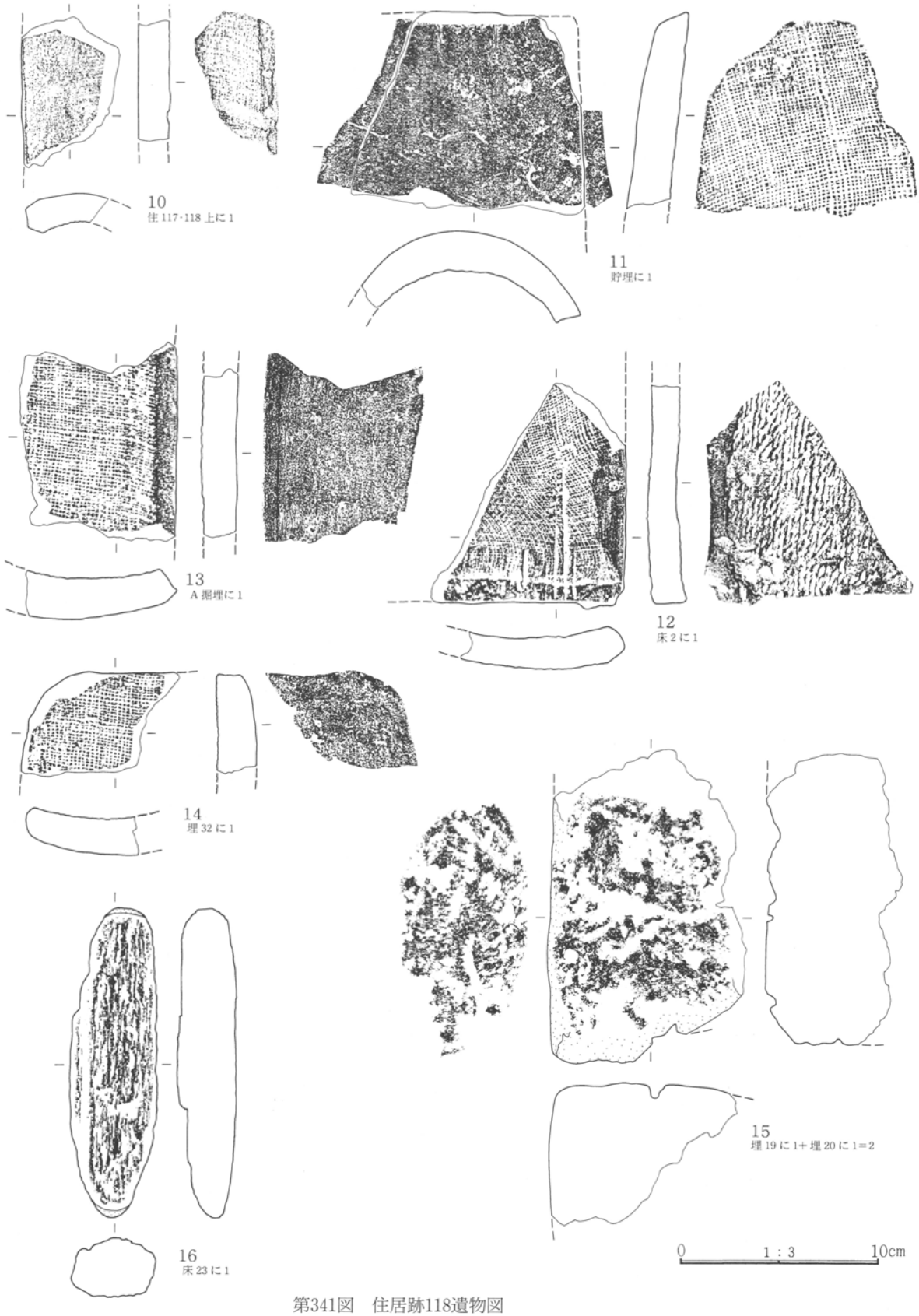


１、黒褐（10YR3/1）木炭粒・灰をわずかまじえ、焼土粒含む。
２、黒褐（10YR3/1）木炭粒を多く含む。
３、暗青灰（10YR3/1）木炭灰を主とし、禾本科植物らしき灰をまじえる灰層。
４、明黄橙（10YR6/8）ロームブロック主とする。カマド間詰粘土か。
５、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土わずか含む。
６、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土わずか含む。ロームブロックわずか入る。
７、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土わずか含む。

第339図　住居跡118遺構図



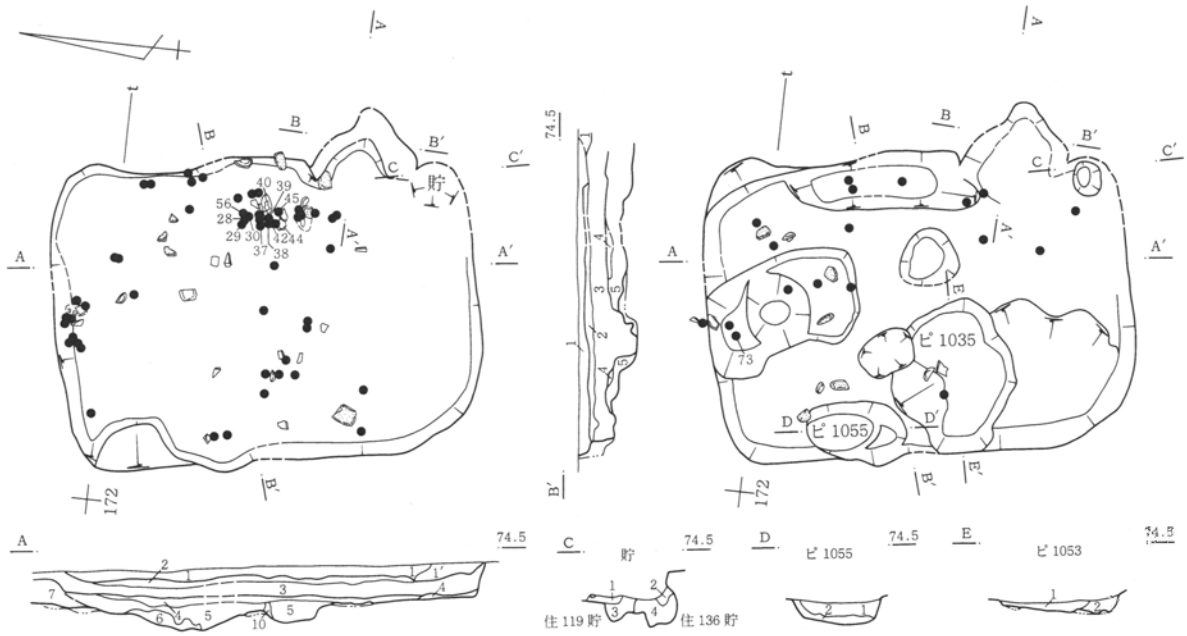
第340図　住居跡118遺物図



第341図　住居跡118遺物図

住居跡117―1　（第336・337図、図版64・181）

位置はＱ大区pq174にあり、調査面はローム層上面標高74.4mである。重複は北接の住居跡116を切り、坑



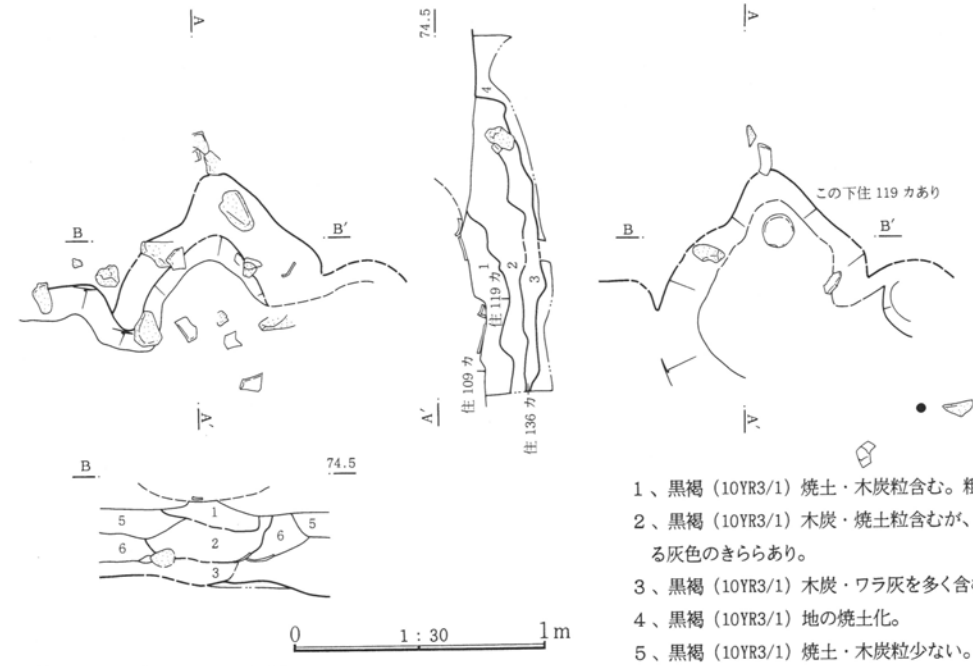
1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少なく、少し粗。1′は木炭・焼土粒多い。住109貯埋。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒わずか含み、B－B′南側に焼土粒・木炭粒特に多い。住119床層。
3、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、少し軟。
4、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、還元気味。少し締る。住136床層。
5、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、いく分軟。掘方埋土でロームブロック多い。
6、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、いく分軟。5層と基本的に同じであるが、ロームブロックは漂白化。
7、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含む。いく分軟。
10、ロームブロック。

貯蔵穴
1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒入り、少し締る。
2、黒褐（10YR3/1）漂白ロームブロック多く含む。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、少し締る。客土様。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。

ピット1055
1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック少し含み、少し締る。
2、にぶい黄褐（10YR6/4）漂白ロームブロック多く漂白。粘性。

ピット1053
1、黒褐（10YR3/1）ロームブロックほとんど含まない。少し締る。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入る。少し締る。

0　1：60　2m

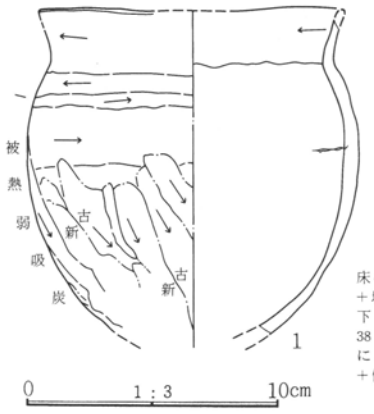


1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。粗。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含むが、木炭粒少ない。灰をまじえる灰色のきららあり。
3、黒褐（10YR3/1）木炭・ワラ灰を多く含むと見える中に焼土粒入る。
4、黒褐（10YR3/1）地の焼土化。
5、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒少ない。
6、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒わずか含む。

0　1：30　1m

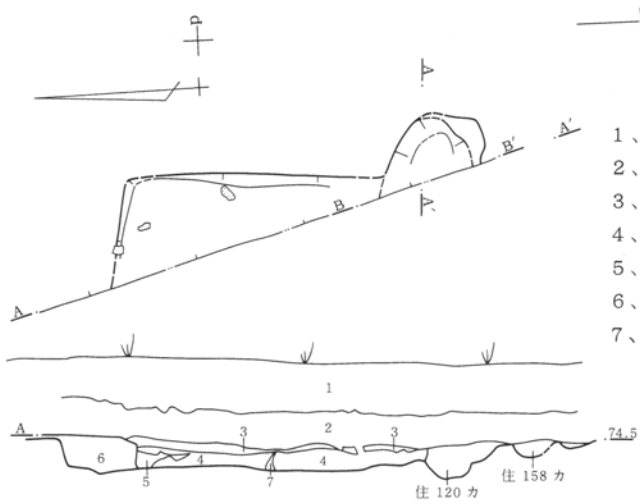
第342図　住居跡119遺構図

215に切られ、先行して住居跡117―2がある。規模は東西340cm、南北328cm、方向は中軸でN1°15′Wを測る。施設として竈、床面ではほとんど埋没し、掘方で掘方上面より深さ５cmの貯蔵穴、床下坑がある。床下坑については、同117―2の貯蔵穴に気付くまで掘方調査を続けていたので床下坑相互の新古の関係を求めるに至らなかった。遺物は第337図のとおり時期混在の感があり、同じ竈出土であっても同図1・2は10世紀中頃、3・4は９世紀後半頃。５・６は９世紀末から10世紀初頭頃、同図12の男瓦は８世紀代瓦の二次使用。同図13は９世



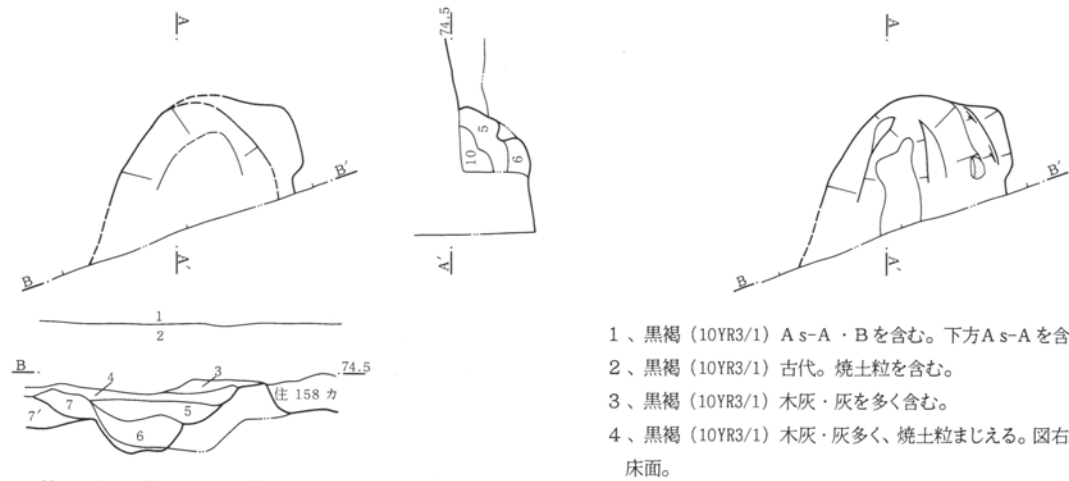
床40に6＋床42に1＋床56に1＋埋下28に1＋埋下29に1＋埋下30に1＋埋下37に1＋埋下38に2＋埋下39に1＋埋下44に1＋A埋に4＋住109A埋に1＋住109トレに1＝22

第343図　住居跡119遺物図



１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含み、上層は現耕土。
２、黒褐（10YR3/1）上層はＡs-Ｂ少し混じり、ローム小ブロック含む。
３、黒褐（10YR3/1）少し還元気味の床面。締りややあり。
４、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、水平気味に堆積。
５、明黄褐（10YR6/6）さらにロームブロック多く、上面締り床。
６、明黄褐（10YR6/6）ローム主に同ブロックや漸移的土壌化で構成。
７、黒褐（10YR3/1）根。

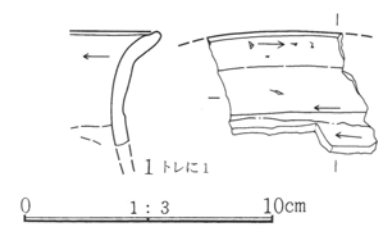
0　1：60　2m



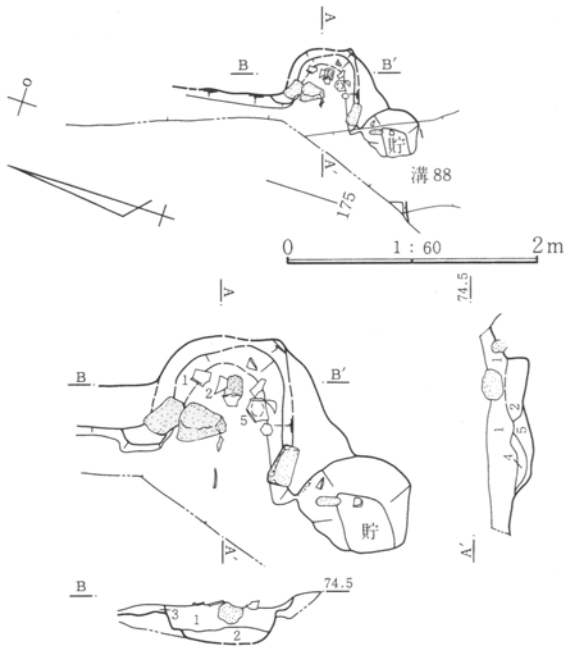
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ・Ｂを含む。下方Ａs-Ａを含まず。
２、黒褐（10YR3/1）古代。焼土粒を含む。
３、黒褐（10YR3/1）木灰・灰を多く含む。
４、黒褐（10YR3/1）木灰・灰多く、焼土粒まじえる。図右端は少なく、床面。
５、黒褐（10YR3/1）木灰・灰・焼土粒多い。
６、黒褐（10YR3/1）木灰・灰・焼土粒含む。
７、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロックを多く含む。掘方埋土。７′はさらにブロック多い。
10、黒褐（10YR3/1）木炭・灰・焼土粒少ない。

0　1：30　1m

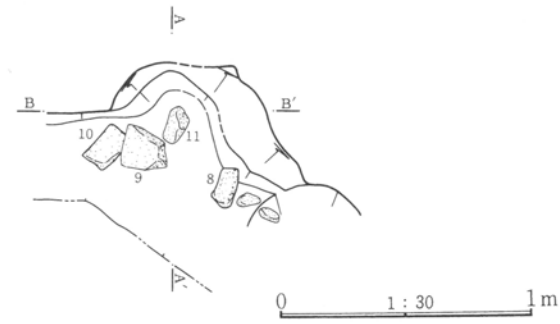
第344図　住居跡120遺構図



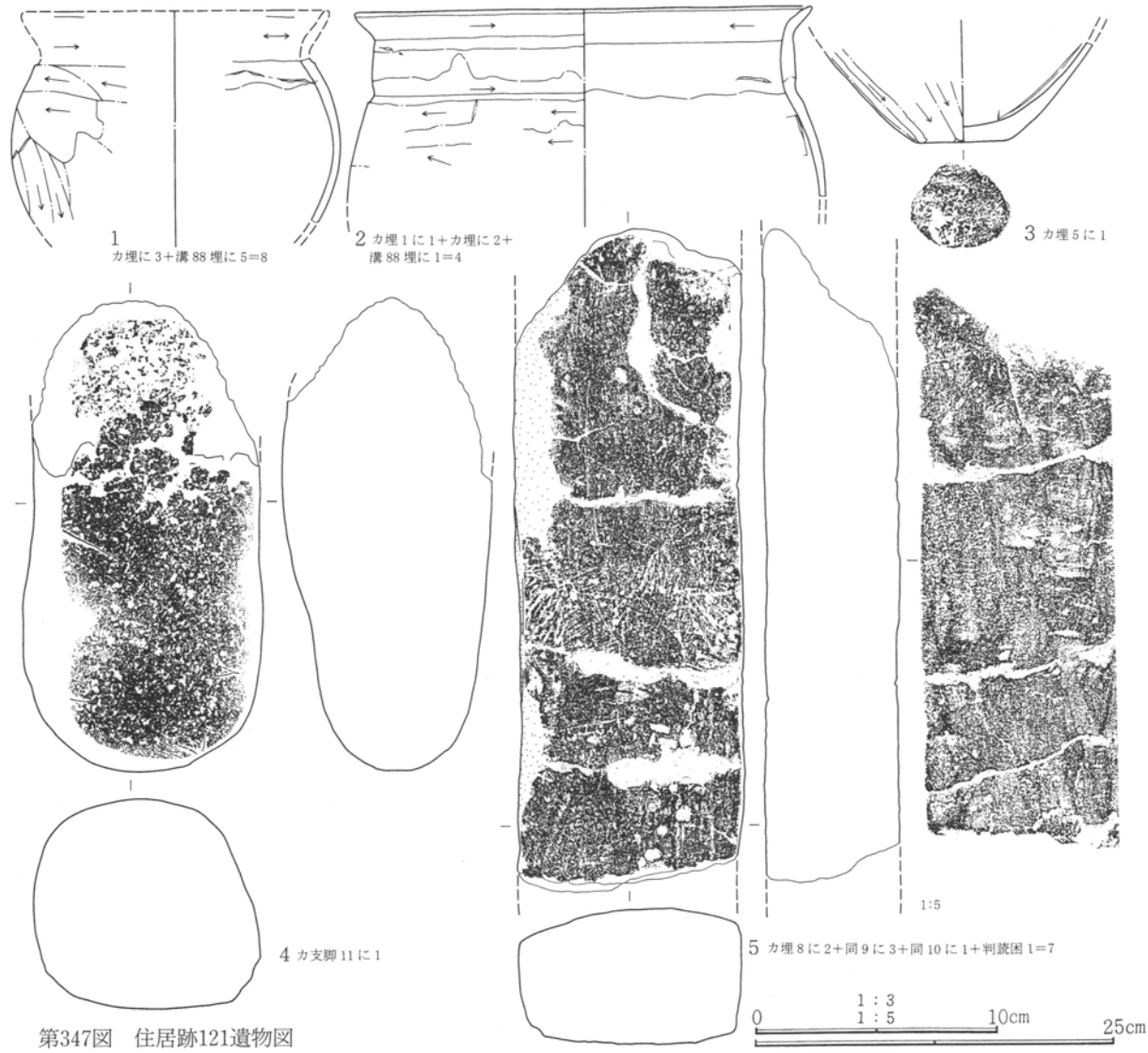
第345図　住居跡120遺物図



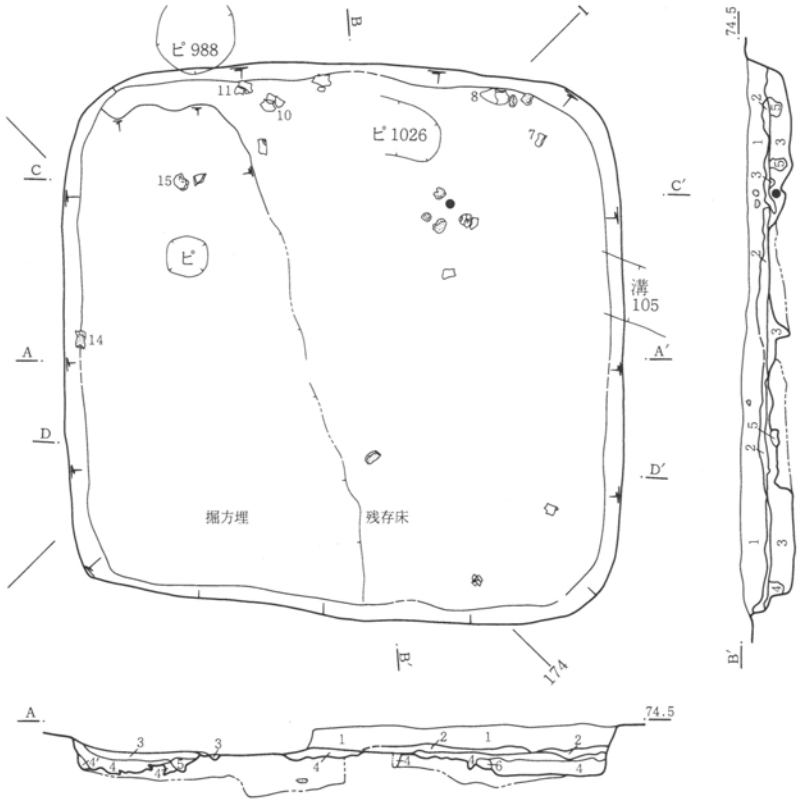
１、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒を多く含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒少ない。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。カマド掘方埋土。
４、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒ほとんど見えず。
５、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒ほとんど見えず。ロームブロック入る。カマド掘方埋土。



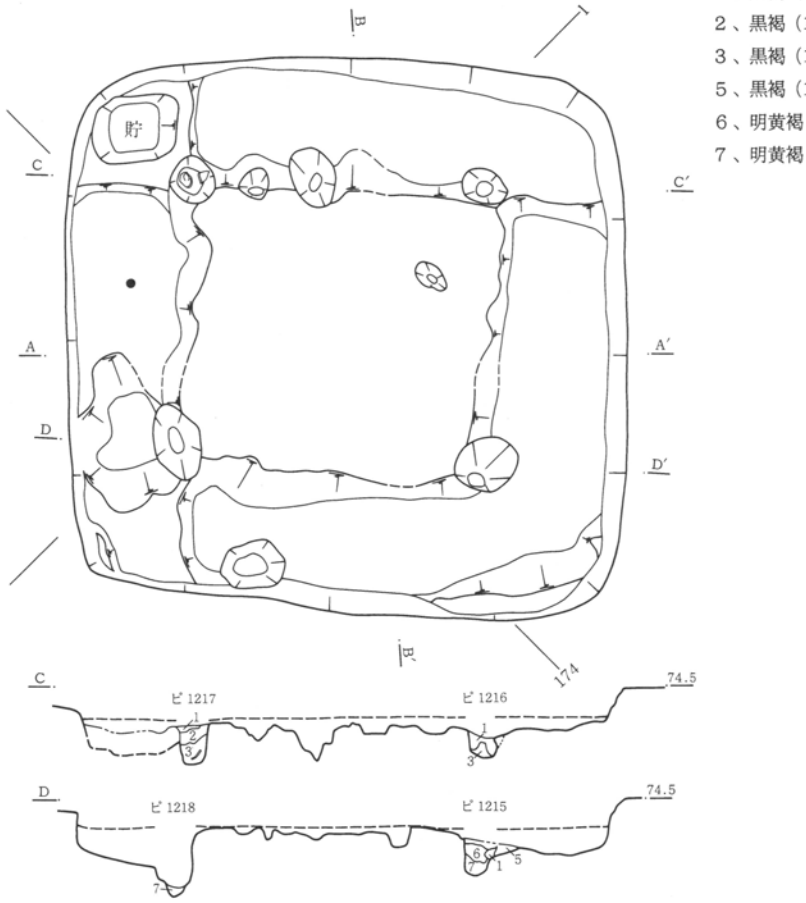
第346図　住居跡121遺構図



第347図　住居跡121遺物図



１、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・小ブロックを含む。粗。焼土粒ほとんど見えず。
２、黒褐（10YR3/1）ローム粒入るがブロック入らず。還元気味床層。
３、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く含む掘方埋。上面床。
４、黄褐（10YR5/6）ロームと土壌化を主とする。４′はやや締る。
５、黒褐（10YR5/6）黒褐色土ブロック。
６、黄褐（10YR5/6）地山凝灰岩ブロック。古式土師器の住居に伴う例。



１、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い。少し締る。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。少し締る。
３、黒褐（10YR1/3）ローム小粒入る。少し締る。
５、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックわずか含む。
６、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く締る。
７、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く締る。

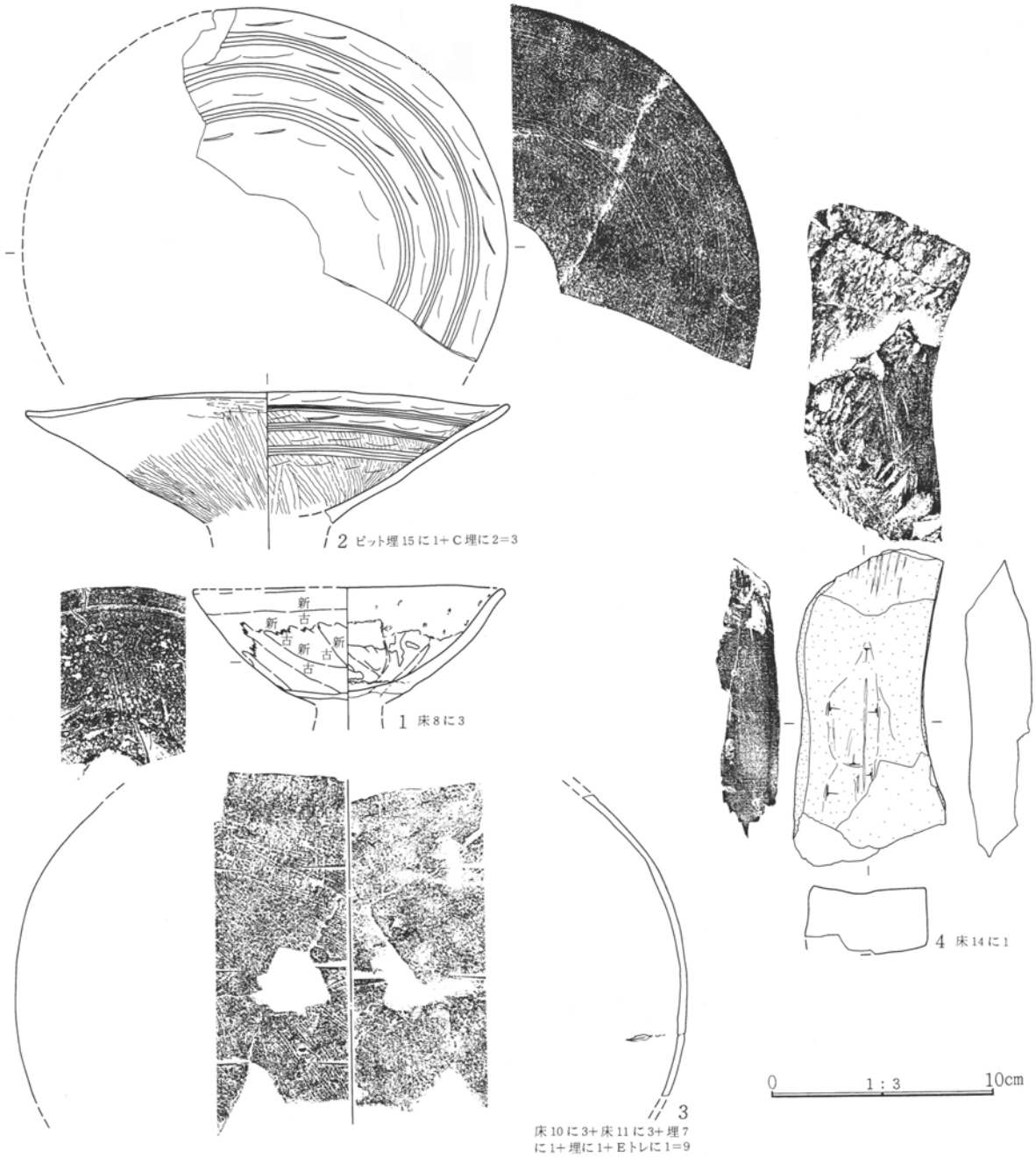
0　1：60　2m

第348図　住居跡122遺構図

紀前半の男瓦である。同図11は灰釉陶器皿で９世紀後半頃の製品と見られる。以上の中で竈出土のみで新、古を捉えると９世紀後半頃と10世紀中頃である。

住居跡117―2　（第336・337図、図版64・181）

位置はＱ大区pq174にあり、調査面はローム層上面標高74.4mである。重複は北接の住居跡116が古く、後出の住居跡117―1に切られ

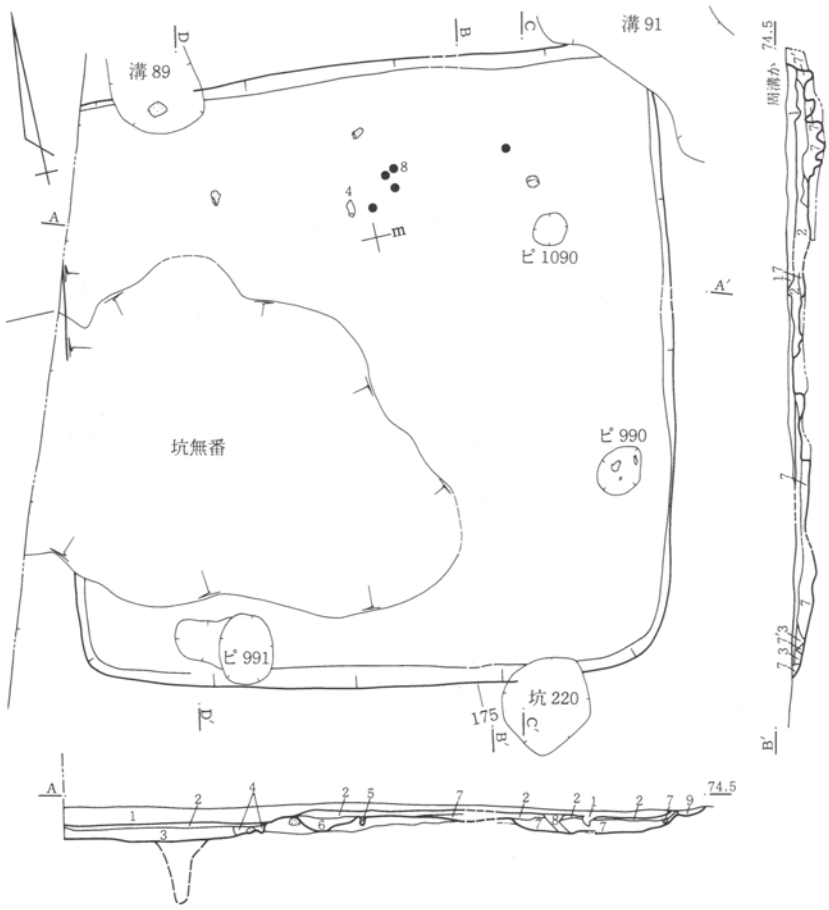


第349図　住居跡122遺物図

る。規模は同117―1と二重像のごとく重なるため、近似規模と考えられる。また竈位置は、少し東へ奥まった位置にあるため、住居跡117―1がやや西に寄ったとも考えられる。施設、出土遺物については住居跡117―1で触れた。

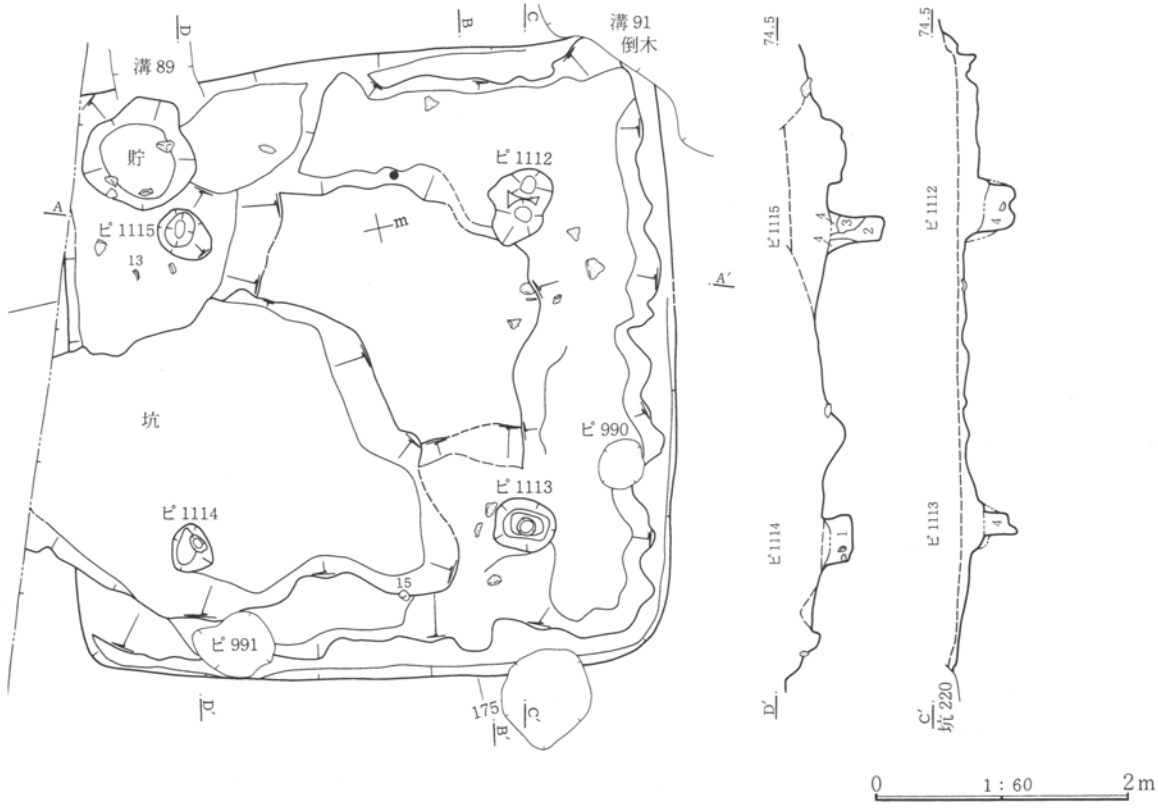
住居跡118　（第338・339・340・341図、図版65・181・182）

位置はQ大区no173・174にあり、調査面はローム漸移層標高74.4m。重複は住居跡138を切り、住居跡117―1に切られ、後出して西壁を喰う西半の倒木がある。掘方調査時には、北寄りに別住居（無番）の床下坑を考えさせられる円形土坑、竈前にも別住居を思わせる平坦な掘方面があって外見以上に複雑らしい。規模は南北で445cm、東西で230＋αcm、方向は東壁を基にN5°45′Wを測る。施設として東壁に竈、掘方面から深さ９cm

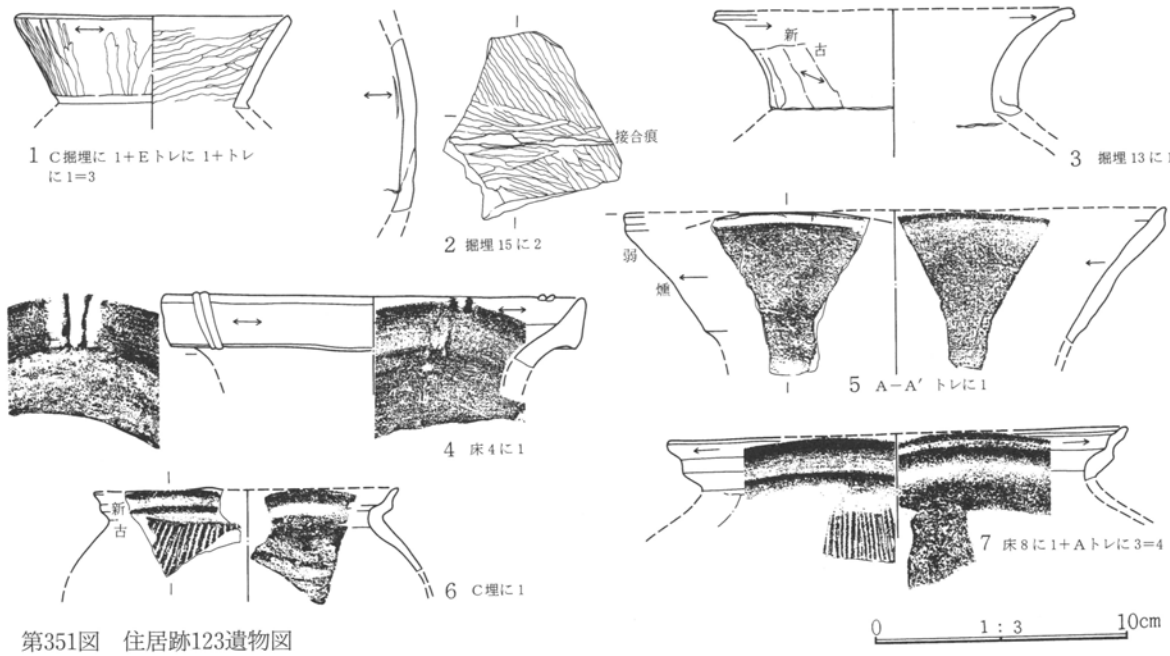


1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ少しまじえ軟。少し木炭粒入る。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少しまじえる。床。締りあり。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少しまじえる。軟。
4、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒・ローム小ブロックまじえる。
5、黒　（10YR2/1）動物生活穴か、軟。
6、未注記。
7、褐　（10YR4/4）ロームブロックとその土壌化を主とする。7′は黒褐主体。
8、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロックわずか。その土壌化。軟。根か。
9、褐　（10YR4/4）ローム漸移的。

掘り方
1、黄褐（10YR5/6）ローム小ブロックを多く含み、少し締る。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックほとんどなし。抜取柱痕か。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。
4、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く含み、締る。



第350図　住居跡123遺構図



第351図　住居跡123遺物図

の貯蔵穴、床下坑がある。遺物は第340図に示したが８世紀代の同図5･6など埋土から床にかけて存在し、同図１はおそらく無番住居に伴ない、同図3・4・7・8・9が、本住居跡に関連すると考えられる。この一群は10世紀前半頃で、住居機能もその頃か。

住居跡119　（第342・343図、図版65・182）

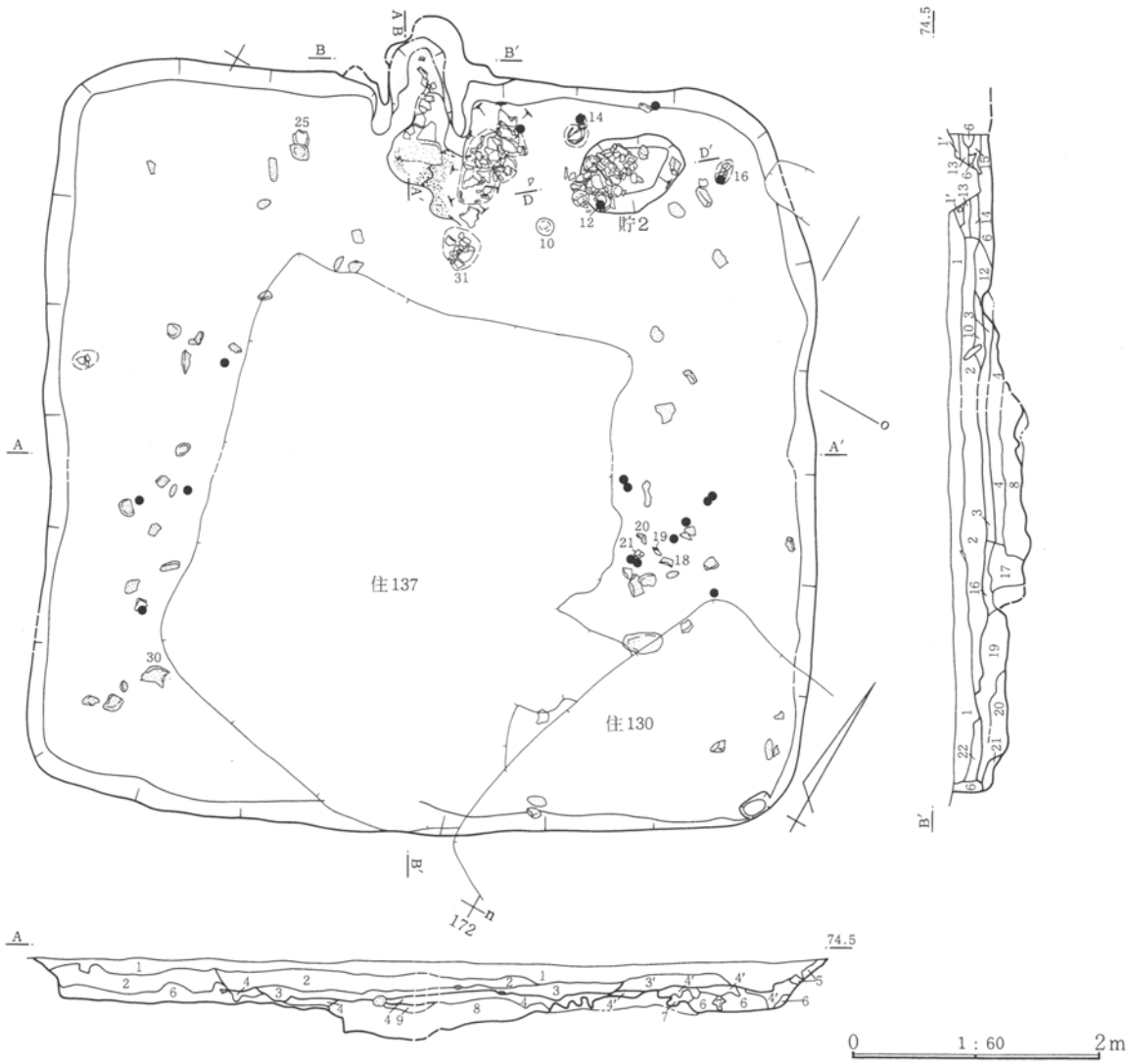
位置はＱ大区st171･172にあり、調査面はローム漸移上層標高74.4mである。重複は上方に２重像のように住居跡109が切る。規模は南北340cm、東西237cm、方向は中軸でN8°15′Wを測る。施設として東壁に竈、廃棄時では埋没著しい貯蔵穴、ピ1053とした床下坑がある。床下坑については上方に重さなる住居跡109の床下坑など重さなっているようで第342図床面図の遺物分布の少ない空間が、それを思わせる。結極のところ掘方は住109掘方と分別はできなかった。遺物は第343図１の９世紀後半の台付の可能性のある土師器甕がある。ある程度のまとまりと、面的な広がりのある個体で、本住居機能時と関連すると考えてよいであろう。

住居跡120　（第344・345図、図版65・182）

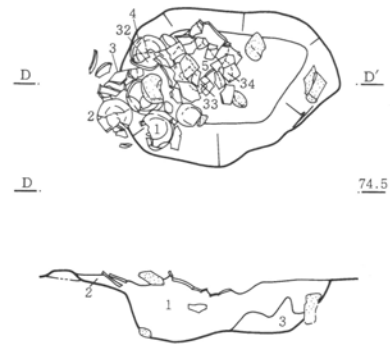
位置はＱ大区op175にあり、調査面はローム漸移層標高74.5m。重複は住居跡158を切る。規模は南北290＋αcm、東西92＋αcm、方向は東壁でN3°30′Wを測る。施設として東壁に竈がある。遺物は第344図に示した同図１があり、それは調査壁面下に設けたトレンチ中の遺物で、製作時期は９世紀代である。しかし下方にあり先行の住居跡158は10世紀代の遺物を伴なうため、同図１は、住居跡120に直結しそうにない。

住居跡121　（第346・347、図版66・182）

位置はＱ大区no174にあり、調査面はローム漸移層標高74.4m。重複は溝跡88が切る。規模は南北203cm、東西100cm、方向N12°30′Wを測るが、平面確認時には南北長290cm余りで北壁に至る北東隅部が見えていたが最終的には90cm余り削り過ぎた。施設として東壁に竈、壁外と掘方底間の深さ18cmの貯蔵穴を認めた。遺物として第347図を掲げたが、同図1･2は９世紀中頃。同図11は抜取られず残存した竈支脚、同図５は竈内と右袖側に散乱していた竈天井架材などがあり、住居機能時は同図1・2をもって９世紀中頃である。



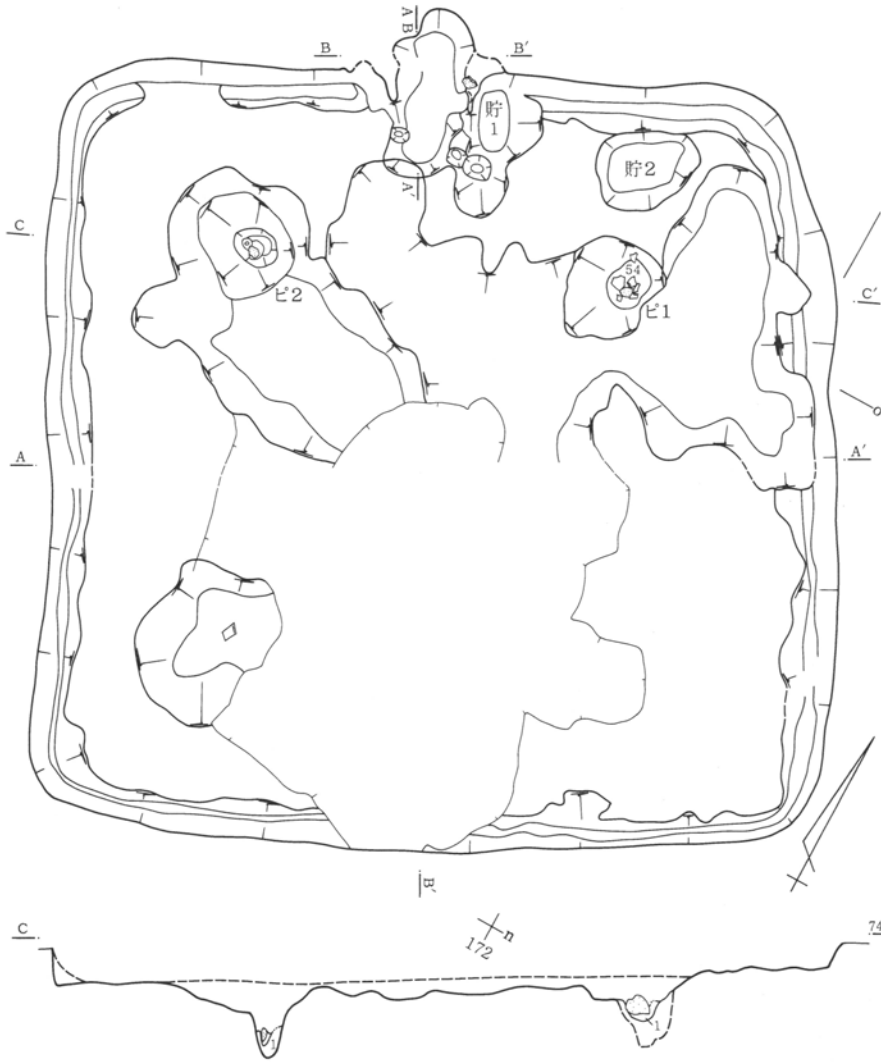
１、黒褐（10YR3/1）少し軟らか。ロームブロック少ない。１′は差なし。
２、黒褐（10YR3/1）少し軟らか。ロームブロック少ない。
３、黒褐（10YR3/1）焼土粒少し含む。３′は含まず。
４、黒褐（10YR3/1）焼土粒少し含む。締りあり。ローム小ブロック入る。４′もほぼ同じ。
５、灰黄褐（10YR4/3）ロームブロック少し含み、その土壌化。
６、黒褐（10YR3/1）ロームブロック主とする。
７、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含むが、少ない。
８、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒含む。少し締る。
９、黒褐（10YR3/1）焼土粒・他物入らず。少し締る床層。
10、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含む。
12、黒褐（10YR3/1）３層に近似。ロームブロック入る。
13、灰黄褐（10YR4/3）ロームブロック少し多い。カマド崩落土。
14、灰黄褐（10YR4/3）13層より黒味あり。
16、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、軟。
17、黒褐（10YR3/1）焼土粒含み、土坑埋土(床下坑か)。軟。
19、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多い。少し締る。
20、黒褐（10YR3/1）ローム小粒ほとんどなし。焼土粒あり。
21、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、少し締る。床。住124。
22、黒褐（10YR3/1）１層と差少。



１、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含まず。ロームブロック多く含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含まず、締る。床面。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを主とする。

0　1：30　1m

第352図　住居跡124遺構図



カマド

1、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。黒ずむ。

2、黒褐（10YR3/1）焼土粒多い。

3、黒褐（10YR3/1）焼土粒多い。さらにロームブロック入る。天井崩落か。3′は焼土粒少ない。

4、黄褐（10YR5/6）焼土の大ブロック含む。ロームブロック多い。

5、褐　（10YR4/4）ローム漸移状。5′は少し黒い。

6、黒褐（10YR3/1）焼土細粒含む。少し粘性。

7、赤褐(2.5YR4/8) 焼土化。貼付壁体。

8、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを主とする。

9、黒褐（10YR3/1）焼土大ブロック多く含む。

10、黒褐（10YR3/1）焼土小ブロックを多く含む。天井崩落か。ローム小ブロック入る。

11、褐灰（10YR4/1）灰・木炭を多く含み、焼土ブロック含む。

12、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。黒ずむ。

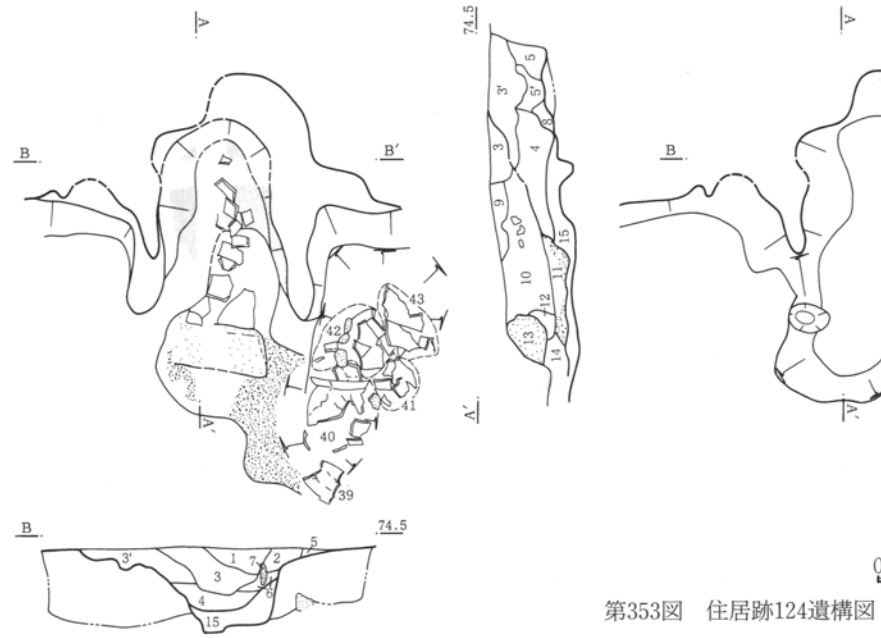
13、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんどなし。硬く、天井材か。

14、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含む。

15、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

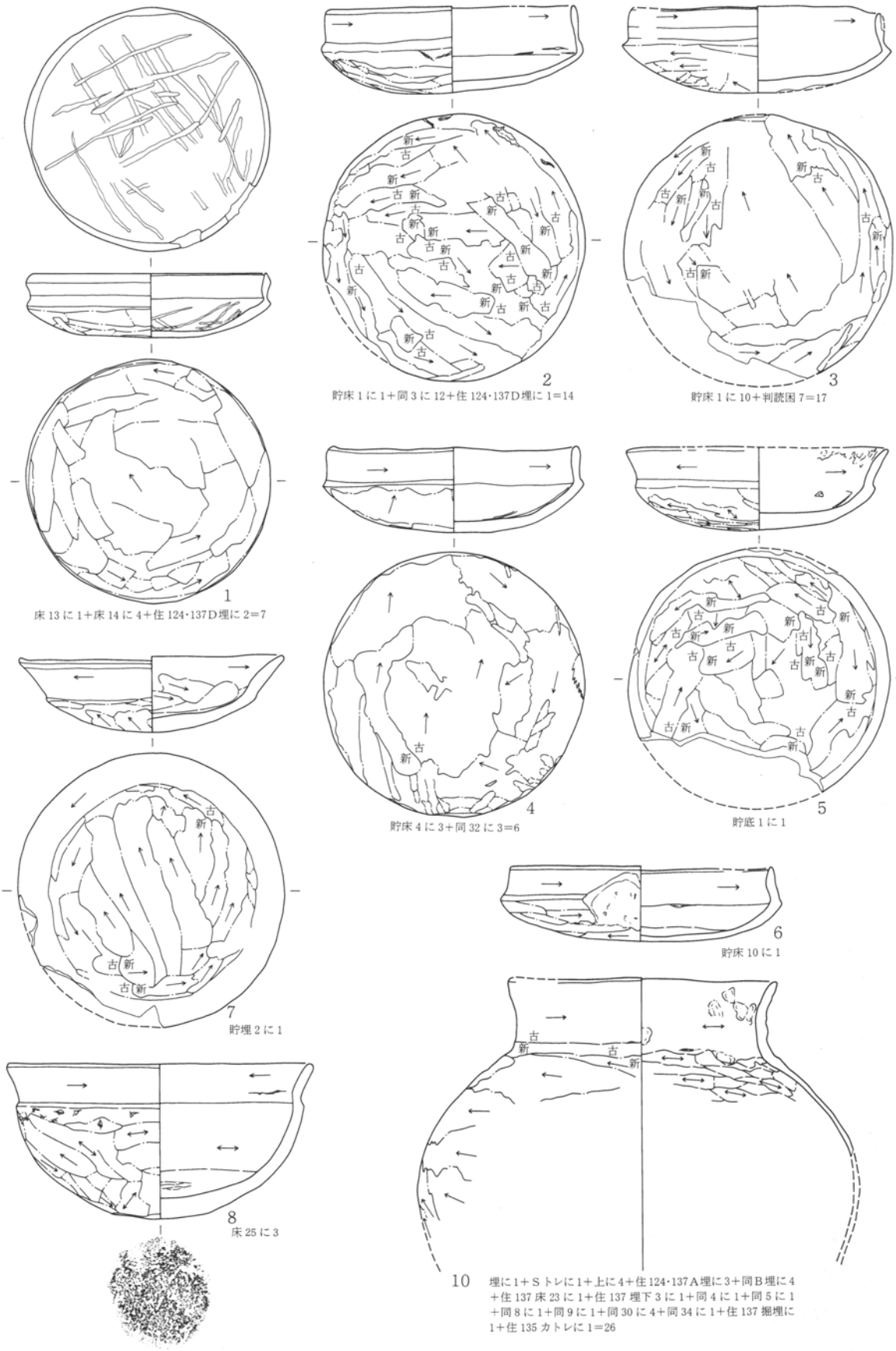
1、黒褐（10YR3/1）ローム漂白ブロックを多く含み、ピ1は木炭粒入る。

0　1：60　2m

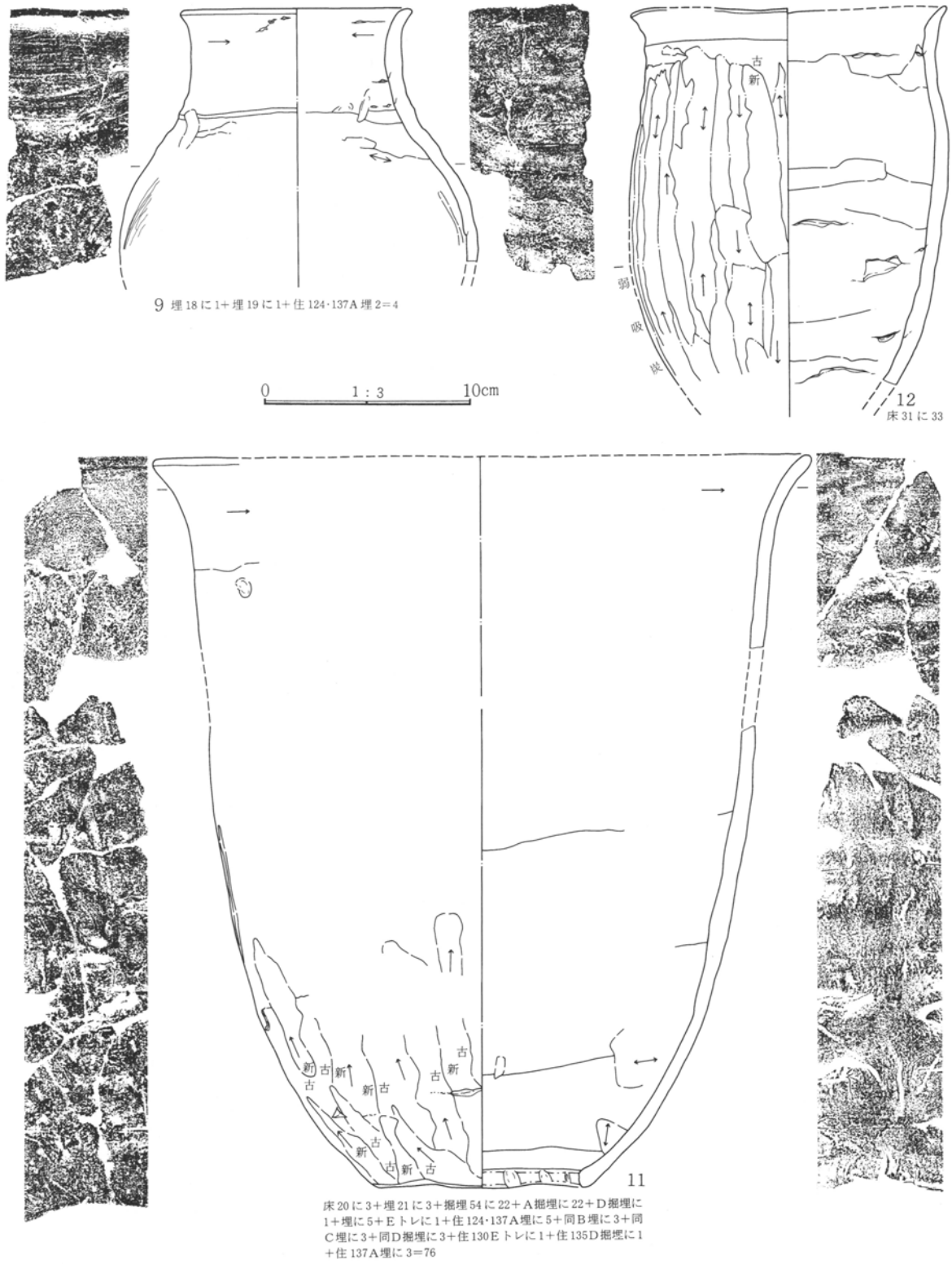


0　1：30　1m

第353図　住居跡124遺構図



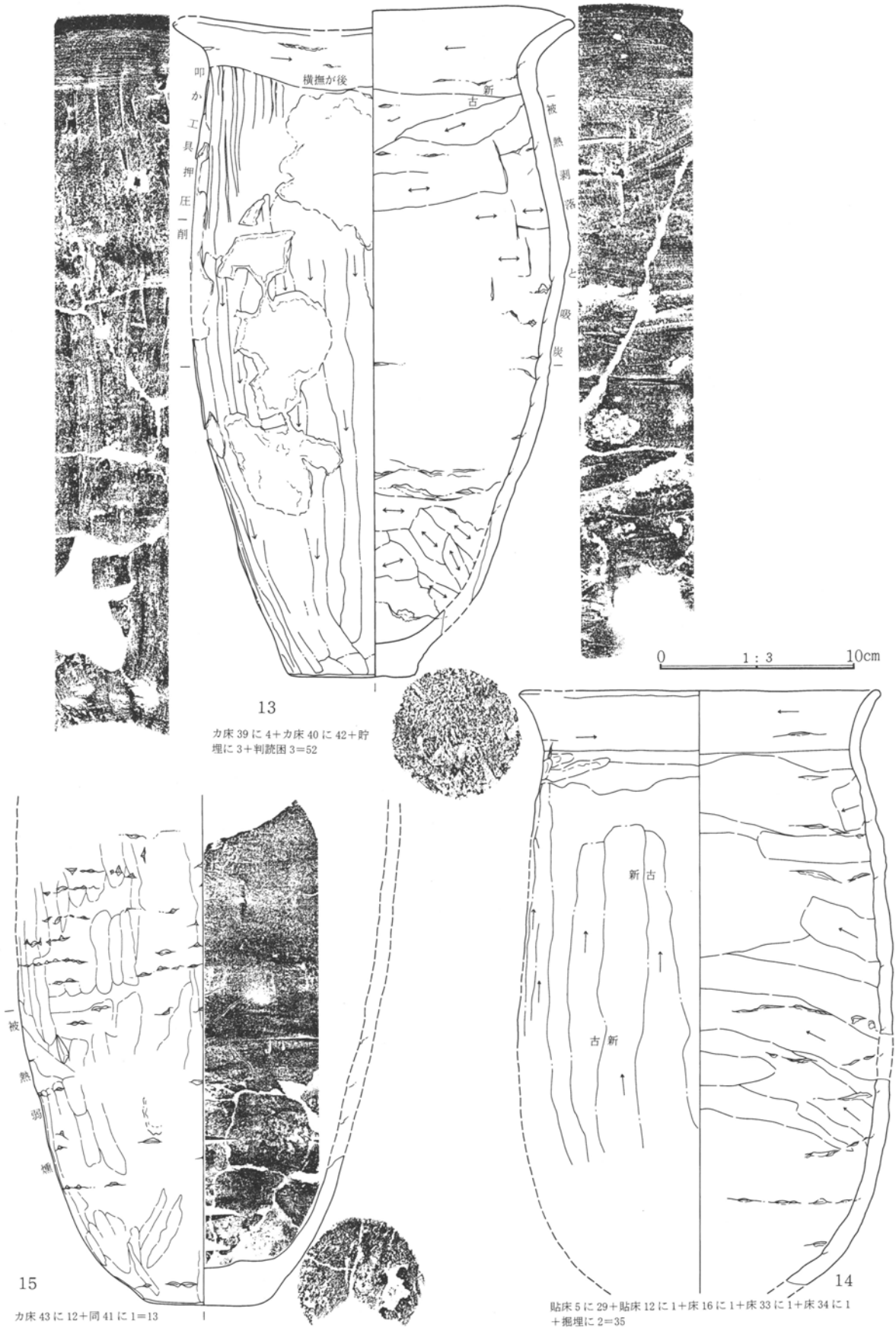
第354図　住居跡124遺物図



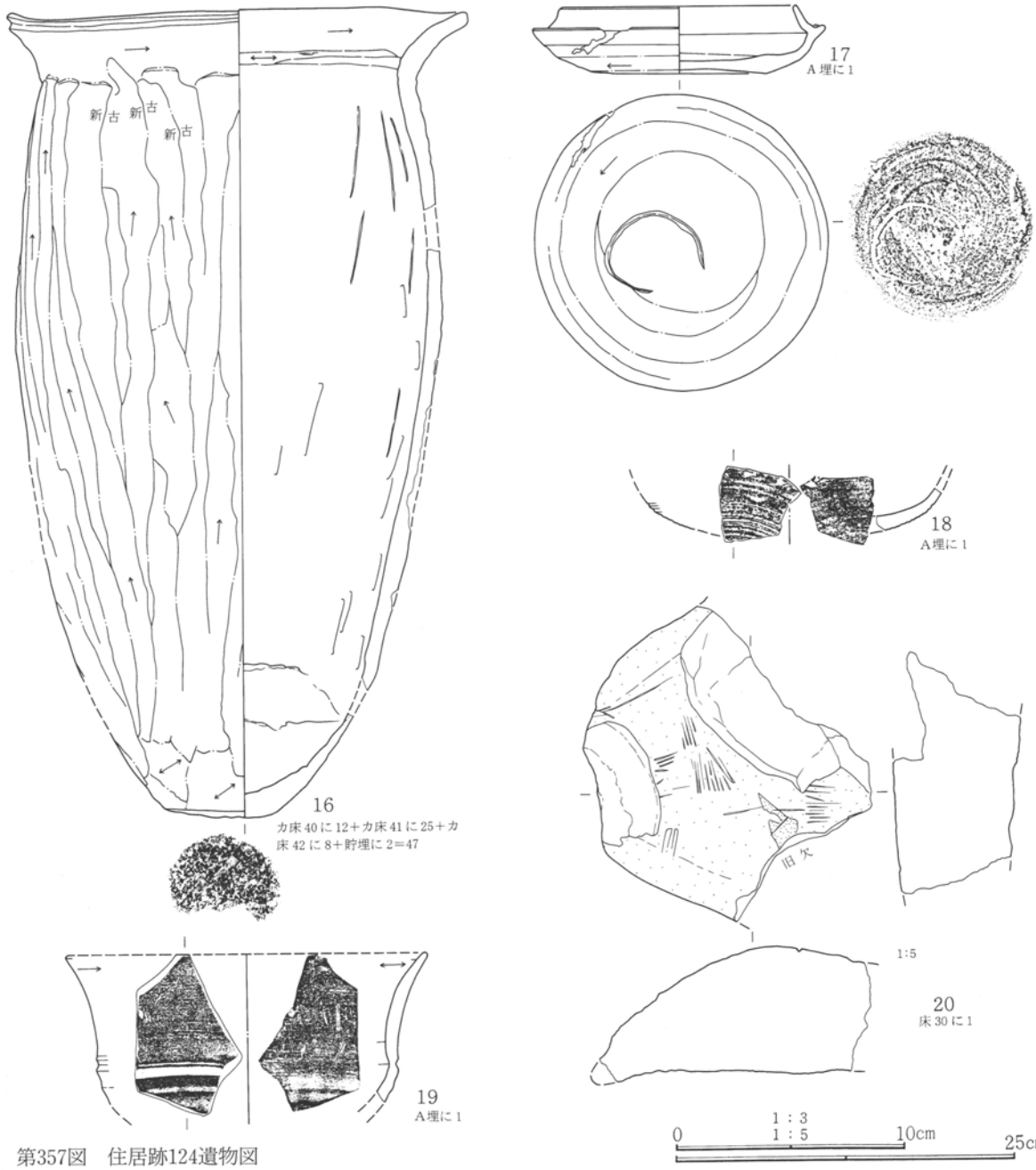
第355図　住居跡124遺物図

住居跡122　（第348・349図、図版66・182）

位置はQ大区hl173・174にある。調査面はローム層上面標高74.5m。重複は溝跡105が切るほか、調査時当初の重機による剝過ぎで西半の床面を失なう。規模は南北443cm、東西440cm、方向N44°45′Wを測る。施設として、残存床に炉跡を思い出せず、底面位置標高73.97mの貯蔵穴、柱穴４穴、中央部を残し、周壁沿いを独



第356図　住居跡124遺物図



第357図　住居跡124遺物図

特に掘込む掘方がある。遺物は第349図のとおり古墳時代前期で、住居機能も同期である。

住居跡123　（第350・351図、図版66・182・183）

位置はＱ大区lm174・175にあり、調査面位置はローム層上層標高74.4m、重複は、溝跡89・91、南西寄りの坑無番220、ピ991が切る。規模は東西485cm、南北495cm、方向は中軸でN10°15′Wを測る。施設として、炉跡は発見できず、掘方上面より深さ22cmの貯蔵穴、柱穴４ヵ所、掘方で中央を高め周壁沿いを溝状に凹めた床下施設を確認した。遺物は第123図のとおり、古墳時代前期で、住居機能も同期である。

住居跡124　（第352～357図、図版66・76・183・184）

位置はＱ大区no171・172・173にあり、調査面位置はローム層上層標高74.4m。重複は住居跡130・137に切

A－A′

1、黒褐（10YR3/1）焼土･ロームブロックなど見えず。1′もほぼ同じ。1″は木炭粒入る。

2、黒褐（10YR3/1）焼土・ロームブロックなど見えず。

3、褐　（10YR3/1）ロームブロック多く含む。掘方埋土。

4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。4′はロームブロック含まない。還元気味床。

5、黄褐（10YR5/6）ロームブロック。

6、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含むが、少ない。上面の6′は床層。ロームブロック含む。

7、黄褐（10YR5/6）ローム土壌化。上面締る。

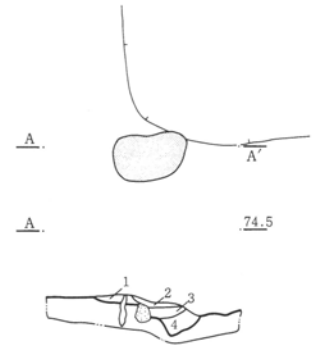
8、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化。さらにロームブロック入り、上面床。

9、黒褐（10YR3/1）黒褐土ブロック。

B－B′

1、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く、締る。

2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む、少し締る。



炉

1、黒褐（10YR3/1）木炭わずか含む。床。

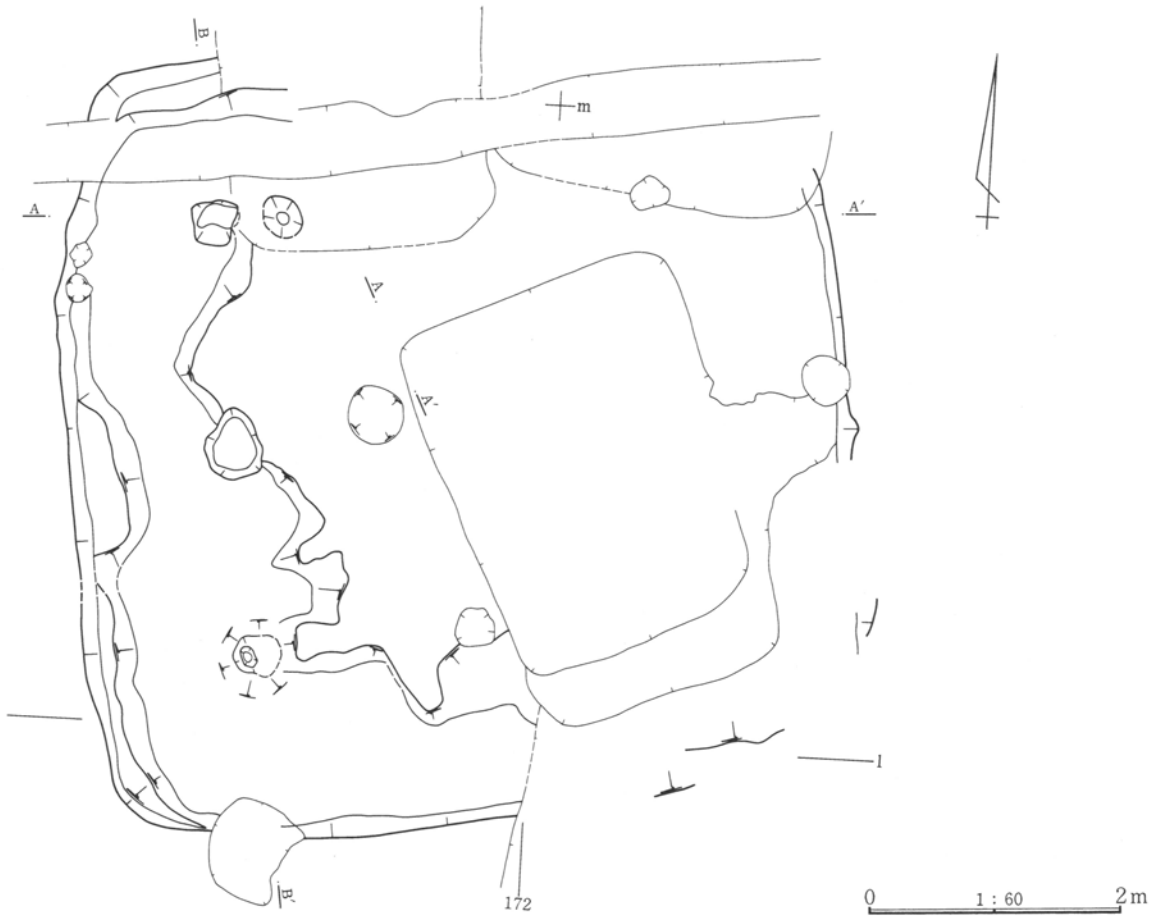
2、明黄褐（2.5YR3/1）1・3層の焼土化。

3、明黄褐（10YR6/6）ローム土壌化。漸移的。

4、黒褐（10YR3/1）木炭粒わずか含む。

0　1：60　2m　　0　1：30　1m

第358図　住居跡125遺構図



第359図　住居跡125遺構図

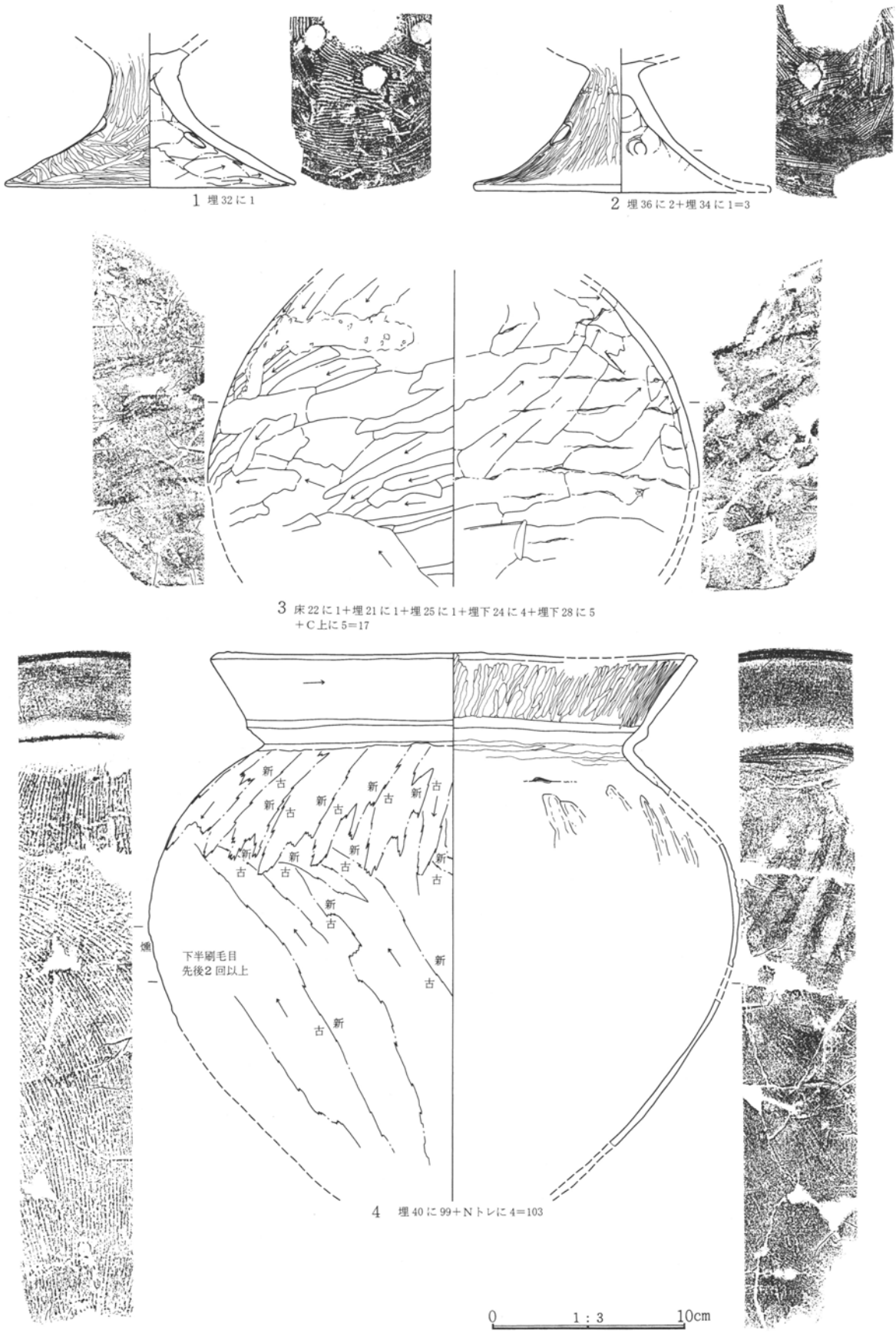
られる。規模は南北619cm、南北629cm、方向は中軸でN29°Wを測る。施設は北壁に竈、竈右袖裏に床より深さ12cmの貯蔵穴１、東側に床面より深さ57cmの貯蔵穴２、柱穴、周壁下周溝が掘方で認められた。貯蔵穴は計２ヵ所にあり、竈右脇の貯１は浅く、不整形で、第356図13・15の土師器長胴甕を置くための便宜的施設か。柱穴は住居跡137の重複で１穴が失なわれ、３穴を確認した。南西隅柱穴は掘方上面より深さ11cmを測る。遺物は第124・125図のとおり、６世紀終末から７世紀初頭頃の個体で、住居機能も同期。

住居跡125　（第358～362図、図版67・184）

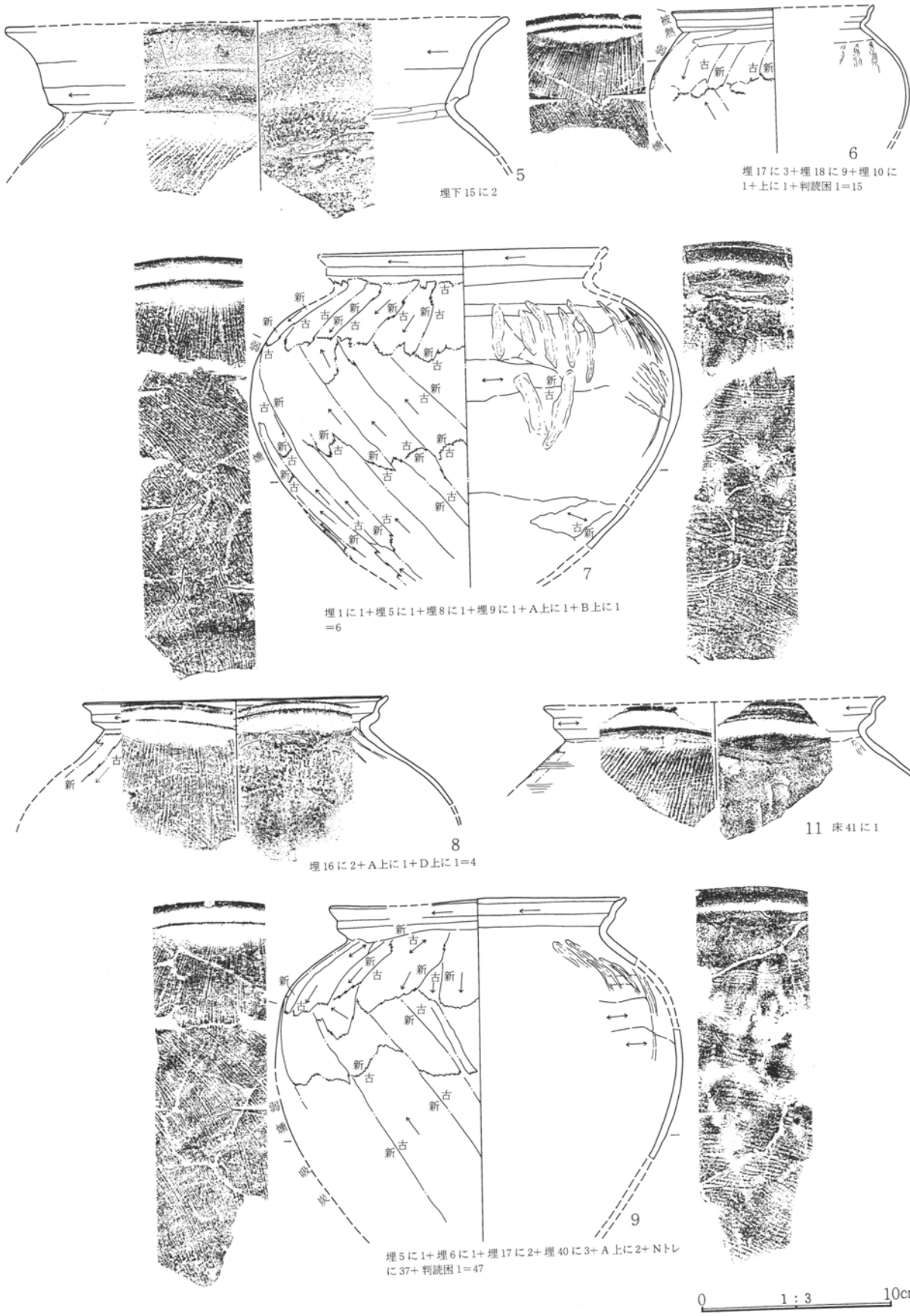
位置はQ大区hlm171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡144―1、同―2・145・126・143、坑267、ピ271・1008・1009・1010・1164、溝93が切る。この中で坑267は古墳時代前期の土坑で住居跡125の埋没過程に生じていた凹みかもしれない。平面確認時の輪郭を拾った遺構である。規模は南北610cm、東西628cm、方向は中軸でN6°15′Wを測る。施設として貯蔵穴を除き炉跡柱穴２穴、掘方での中央を高め周壁沿いを掘り凹めた床下施設、西壁下での段差などがある。東半の２柱穴は後出住居により削失されたと考えられる。南西柱穴は床から深さ39cm遺物は第360・361・362図に掲げたとおり古墳時代前期の一群が伴なう土器類で、住居機能も同期である。

住居跡126　（第363・364図、図版67・68・184）

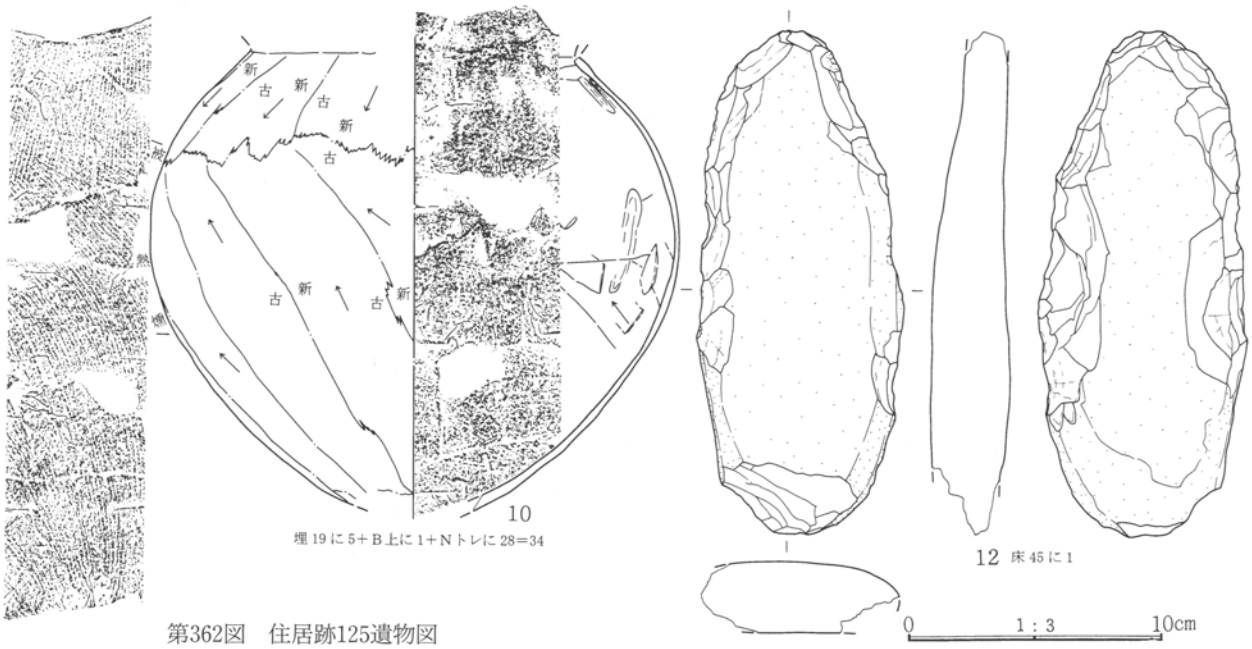
位置はQ大区lm171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.45m。重複は住居跡125・143を切り、溝跡



第360図　住居跡125遺物図



第361図　住居跡125遺物図



第362図　住居跡125遺物図

93に切られる。規模は南287cm、東西240cm、方向は中軸でN3°Wを測る。施設として東壁に竈、貯蔵穴、床下坑がある。貯蔵穴は廃棄時ではほとんど埋没していた。遺物は第364図のとおり10世紀前半の個体で住居機能も同期。

住居跡127　（第365図、図版68）

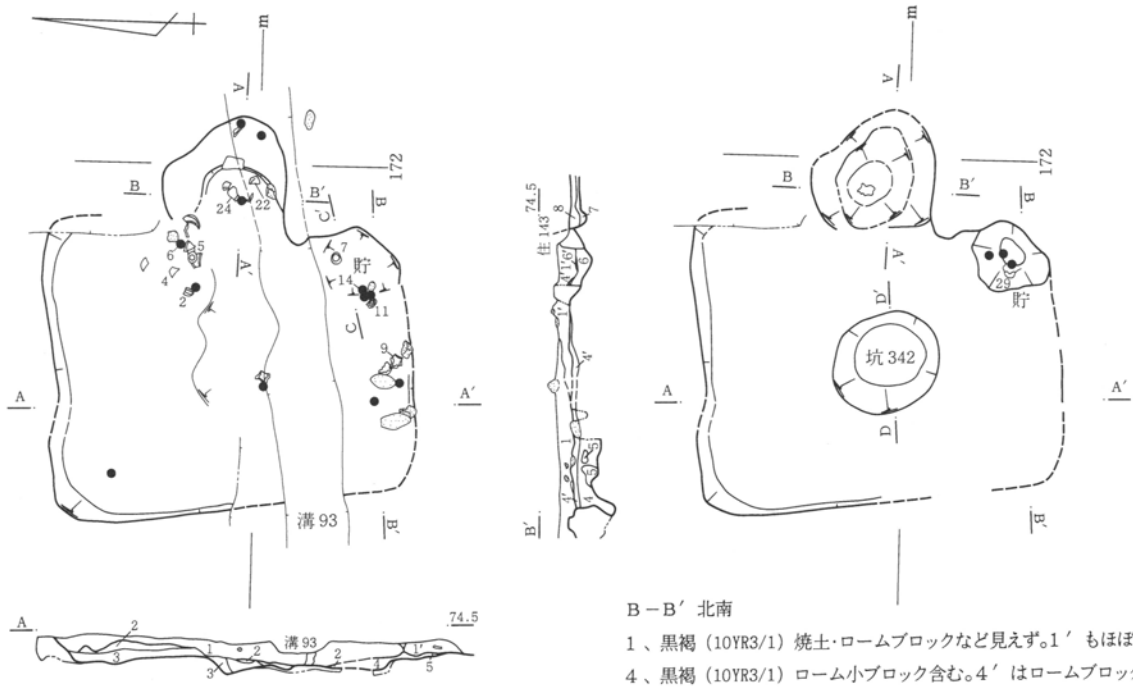
位置はＱ大区pq171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.45m。重複は北接の住居跡128を切り、坑253に切られる。規模は南北307cm、東西285cm、方向N2°Wを測る。施設として竈跡は、該当位置に坑253があり、削失した可能性が高い。貯蔵穴は掘方での南東隅の凹みを捉えれば存在の可能性もあるが住居域から外れる。掘方では床下坑がある。なお、第365図中の土層断面に9・10に見える貯蔵穴とは住居跡128に伴なう貯蔵穴のことである。遺物は少なく、掲示しなかったが、住居跡形態は10世紀前半頃の住居形態に近い。

住居跡128　（第366・367・368図、図版68・185）

位置はＱ大区pq171・172にあり、調査面はローム層上面74.45m。重複は住居跡127・131、溝跡87、坑199・244、掘立柱建物跡18の柱穴群、ピ887・1084が後出してある。規模は南北537cm、東西572cm、方向はN7°30′Wを測る。施設として炉跡、貯蔵穴２ヵ所、柱穴４穴、西方床面の部分的高まり、掘方で壁下周溝、不整形な掘込みがあった。西半の柱穴は、北西柱穴で床面より深さ45cm、南西柱穴で床面より深さ57cm。貯蔵穴２ヵ所については北壁下中央にあり掘方上面より深さ32cmを測る大形な貯蔵穴と、廃棄時に存在していたと考えられる南西隅の床面より深さ67cmの小形の貯蔵穴とがあった。遺物は第368図に掲げた古墳時代前期の一群があり、住居機能も同期。

住居跡129　（第369・370図、図版68・185）

位置はＱ大区no170・171にあり、調査面はローム層上面74.4m。重複は溝跡101、ピ1046・1047・1086、A_s－B混りの凹みなどが後出してある。規模は南北340cm、東西304cm、方向は東壁でN26°15′Wを測る。施設とし



Ａ－Ａ′ 西東

１、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土など含まず。1′ は差なし。

２、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土など含まず。床層。還元気味床。

３、黒褐（10YR3/1）ローム小粒少し入り、焼土など含まず。

４、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックを主とする。

５、黒褐（10YR3/1）還元気味。住125床。

Ｂ－Ｂ′ 北南

１、黒褐（10YR3/1）焼土・ロームブロックなど見えず。1′ もほぼ同じ。

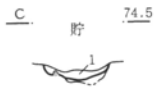
４、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。4′ はロームブロック含まない。還元気味の床層。

５、黄褐（10YR5/6）ロームブロック。

６、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含むが、少ない。上面6′ は床層。ロームブロック含む。

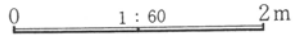
７、黄褐（10YR5/6）ローム土壌化。上面締る。

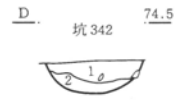
８、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化。さらにロームブロック入り、上面は床。



貯

１、黒褐（10YR3/1）木炭粒含む。

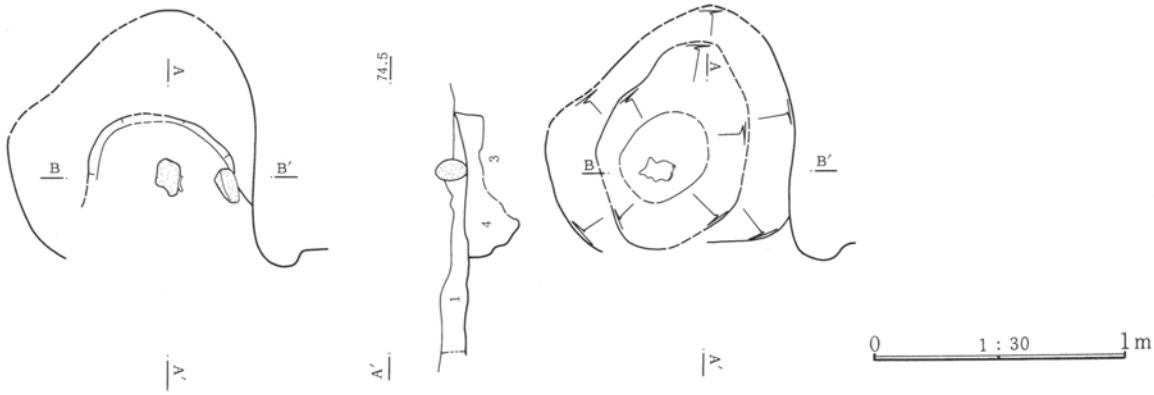


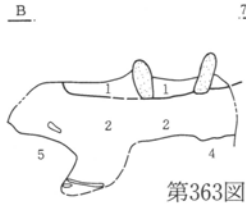


坑342

１、黒褐（10YR3/1）軟。ローム粒わずか。

２、黒褐（10YR3/1）軟。ロームブロック少し含む。





１、黒褐（10YR3/1）焼土粒含み、木炭粒微。

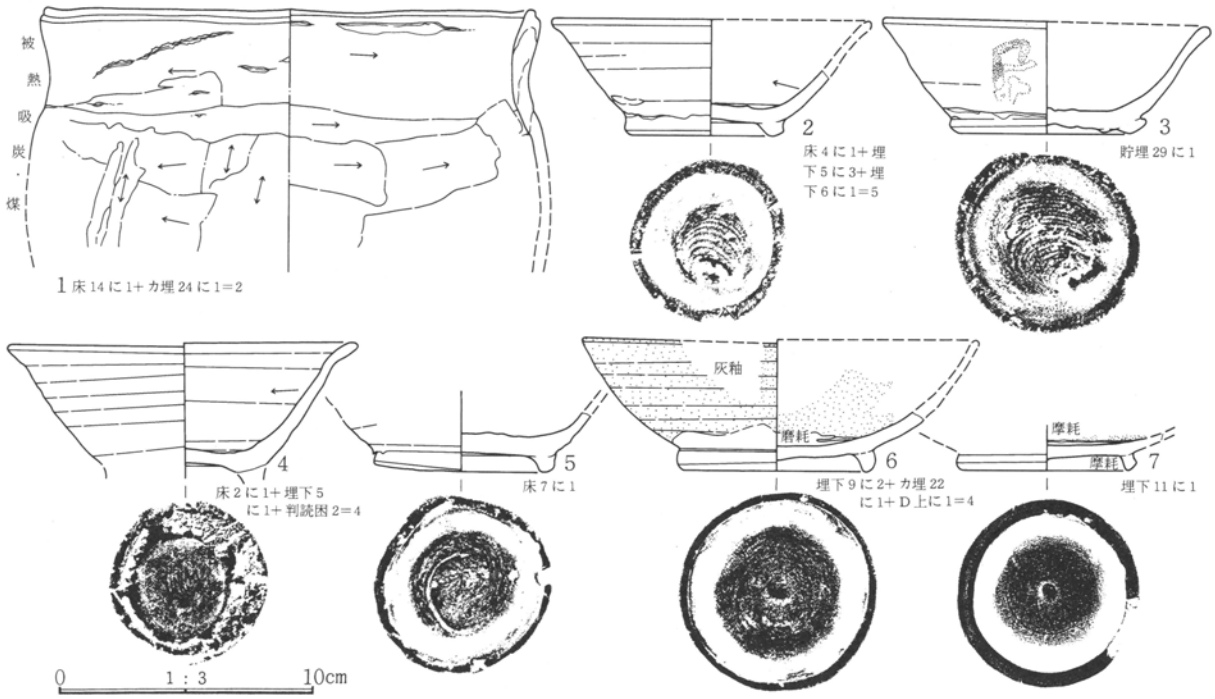
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒見えず。軟。

３、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒見えず。軟。

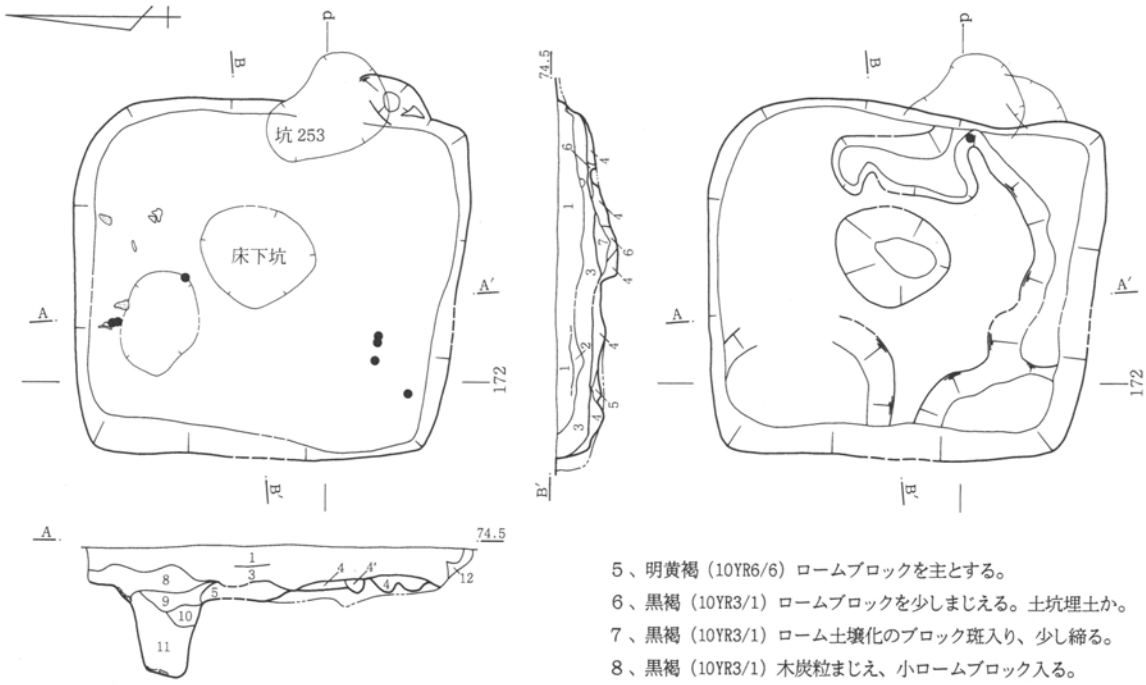
４、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒見えず。軟。少しロームブロック入る。

５、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒見えず。軟。ロームブロック多い。

第363図　住居跡126遺構図



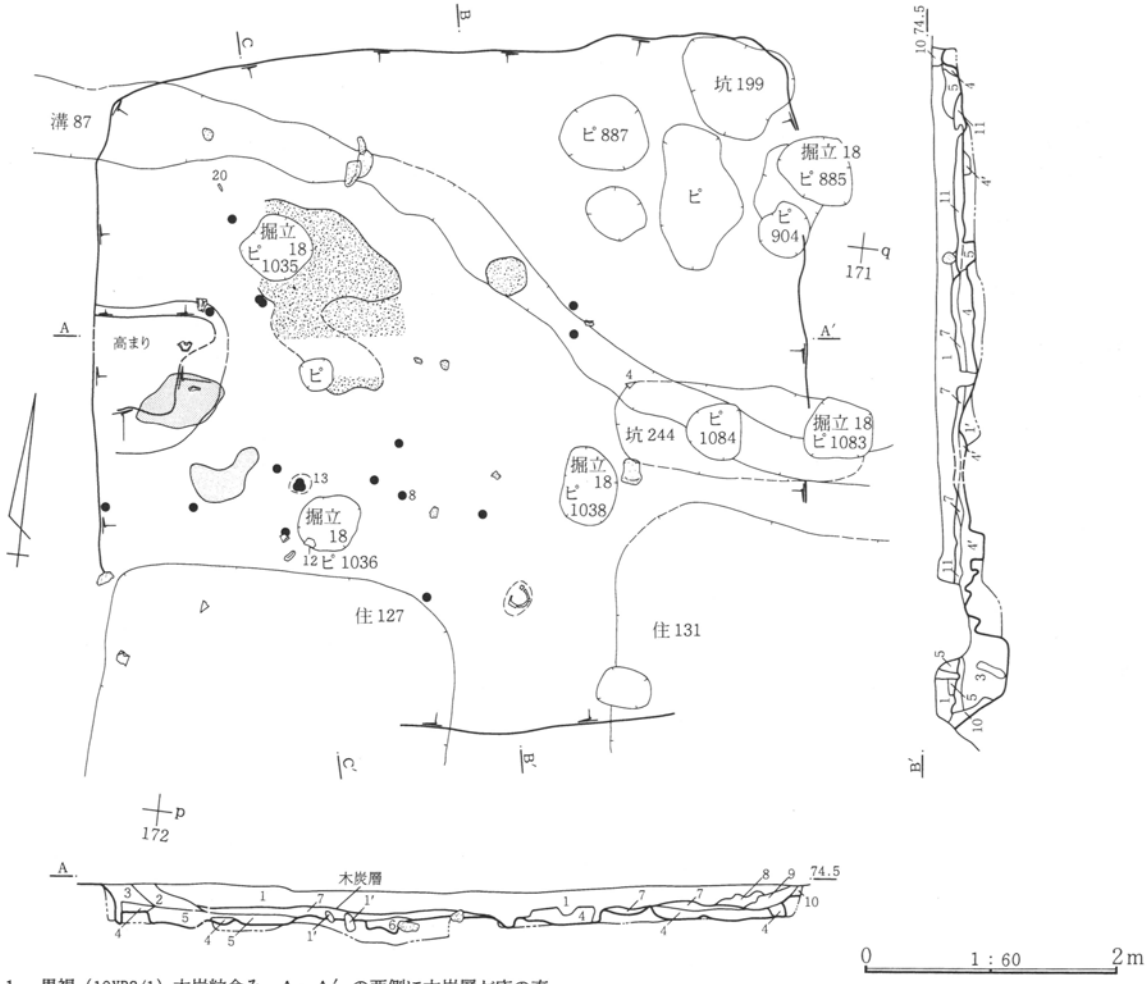
第364図　住居跡126遺物図



1、黒褐（10YR3/1）焼土粒含まず。少し粗。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入り、少し締る。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか入る。
4、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックと黒褐土まじり。上面は床で、少し締る。4′はブロック大きい。
5、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックを主とする。
6、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを少しまじえる。土坑埋土か。
7、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化のブロック斑入り、少し締る。
8、黒褐（10YR3/1）木炭粒まじえ、小ロームブロック入る。
9、黒褐（10YR3/1）８層とほとんど差なし。貯蔵穴埋土か。
10、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。貯蔵穴埋土か。
11、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックやや含む。
12、黒褐（10YR3/1）未注記。

第365図　住居跡127遺構図

て炉跡、貯蔵穴、柱穴は発見できず掘方で中央部を高め壁下を溝状に巡る床下施設を見い出した外、北壁側で棚状と中央を掘り凹めた施設が存在していた。棚状とその掘り凹めは、別住居とも考えたが、床面が北端



1、黒褐（10YR3/1）木炭粒含み、Ａ－Ａ′の西側に木炭層が床の直上層として下面にあり、その面は締る。床状。しかし埋土下層の1′は軟らかく、動物の生活穴か。
2、黄褐（10YR5/6）倒木、ロームの浮き出し。
3、黒　（10YR2/1）軽石少ない。
4、黄褐（10YR5/6）ロームブロック。土壌化と黒褐土とのまじり。軟。4′はローム主体。
5、黄褐（10YR5/6）ロームブロック。土壌化と黒褐土とのまじり。軟。4層より少し黒い。
6、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い。
7、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化、その小ブロック入り、黒褐色土主体の床層。
8、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｃ・軽石小粒多く含む。黒味強い。
9、黒褐（10YR3/1）少し土壌化ローム入る。
10、褐　（10YR4/4）ローム漸移層。
11、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化を主とする床層。

第366図　住居跡128遺構図

10世紀中頃から後半にかけての頃であろう。

輪郭まで延びるので一軒と認めた。遺物は第370のとおり、古墳時代前期の一群で、住居機能も同期。

住居跡130　（第371・372図、図版69・185）

位置はＱ大区mn171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡124・137・141を切る。規模は南北346cm、東西275cm、方向Ｎ14°Ｗを測る。施設は東壁に竈、貯蔵穴、掘方に床下坑274がある。遺物は第372図のとおり、10世紀中頃から後半にかけての個体で、同図６のみが遡る可能性がある。住居の機能も

住居跡131　（第373・374・375図、図版69・186）

位置はＱ大区op170・171にあり、調査面はローム層上面から漸移層標高74.45m。重複は住居跡127・128・159が先行し、坑244、ピ1040に切られる。施設として東壁に竈、床ではほとんど埋没していた貯蔵穴、掘方で床下坑を見い出した。床下坑直上にある床面では灰層の広がりを認めた。竈には架構石材が落下した状態

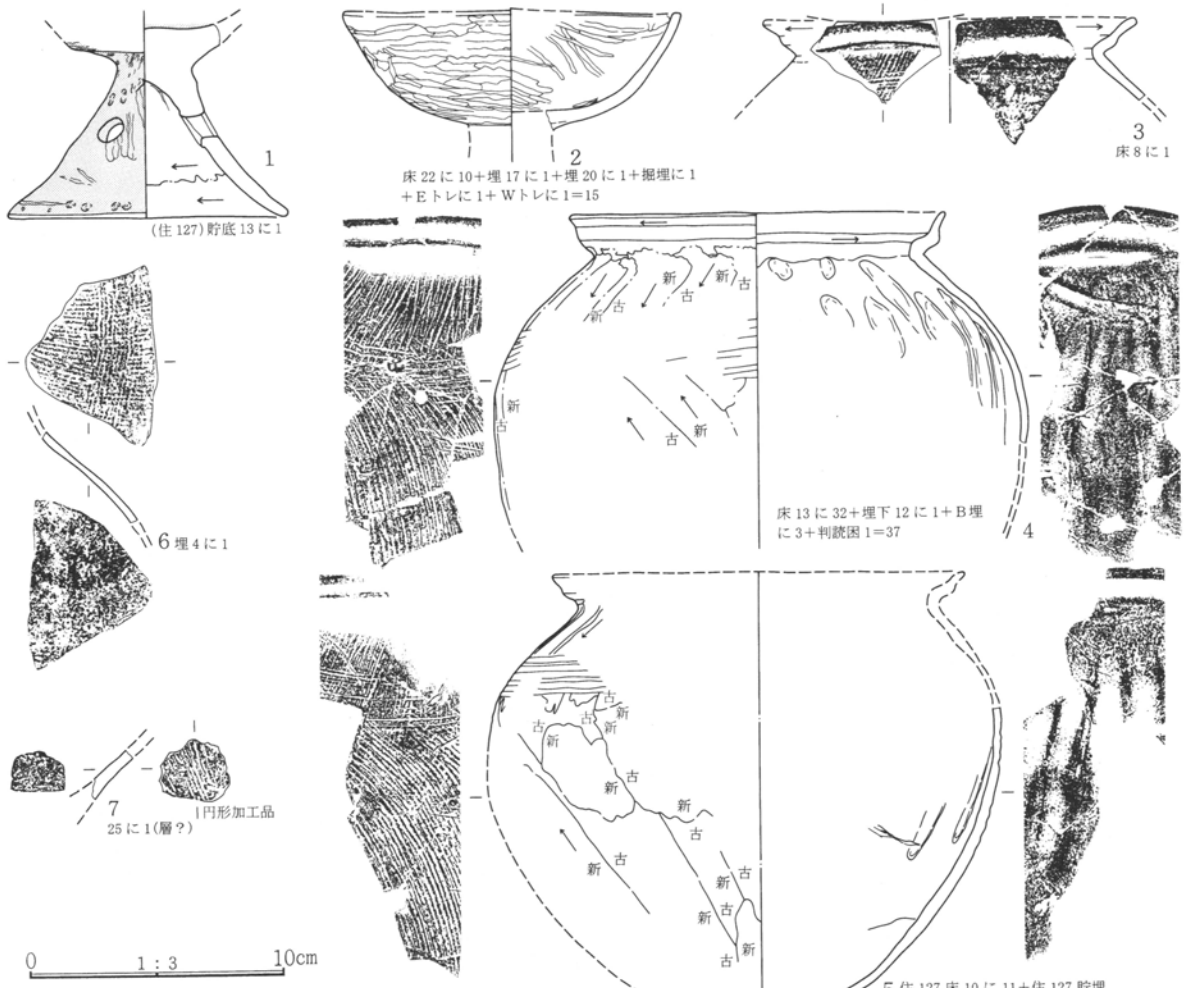
１、黄褐（10YR5/6）ロームブロックと土壌化を主とする。部分的に小焼土層あり。締る。
２、明赤褐（2.5YR5/6）１層の焼土化。締りあり床層化。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、締る。床層。３′はロームブロック少し入る。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、やや締る。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、やや締る。掘り方埋土。

第367図　住居跡128遺構図

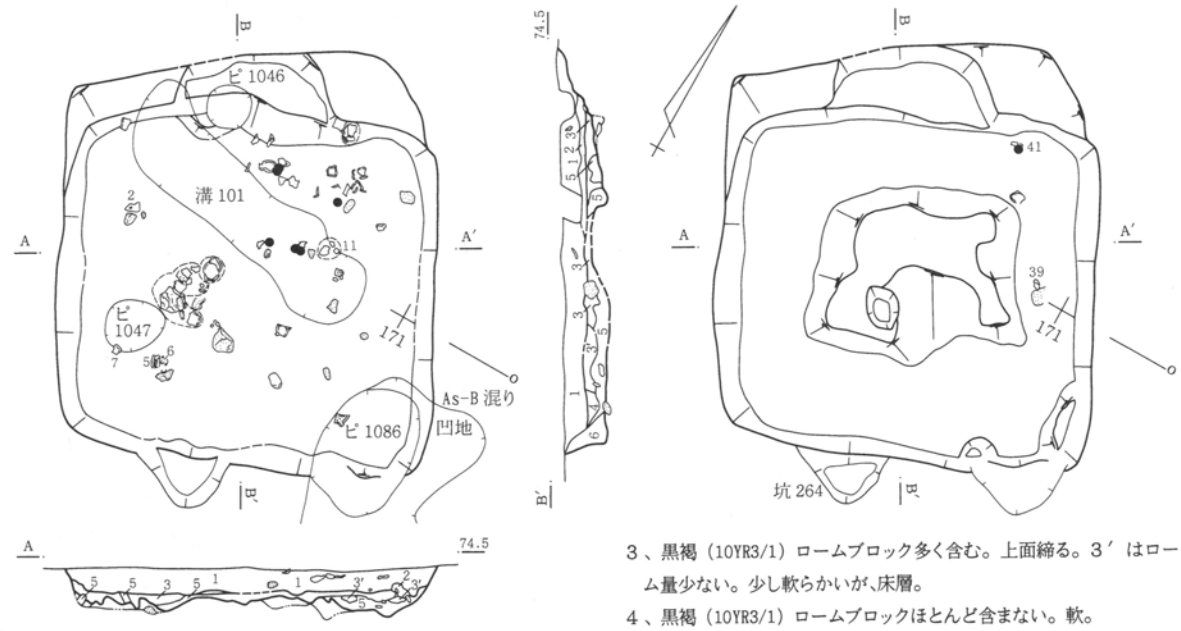
を認めた。さらに床下坑直上の床面で灰層が存在していた。規模は南北で292cm、東西292cmの方形無味。方向は中軸でN5°Wを測る。遺物は第374・375図に示したが同図１は編集図版作成誤まりで住居跡128の個体である。それを除くと10世紀中頃に近い個体が主をなし、住居機能もその頃であろう。

住居跡132　（第376・377図、第70・186図）

位置はＱ大区Ｐ170にあり、調査面はローム漸移層中標高74.4mにある。重複は住居跡131・132、坑261に切られる。この住居跡を含むＱ区東半はA_s－Ｂ混の覆土が載るA_s－Ｂ堆積以降の削平化によって住居跡上半が失なわれているため、床面までの深さは浅く、しかも住居跡埋土下層の堆積は上層がやや大まか、広範囲、単純な堆積に対し、少範囲、複雑な堆積、平面状態にある場合が多く、住居跡132を含む隣接、周辺の住居跡についてもそうであった。規模は南北352cm、東西348cm、方向は西壁を基にN5°15′Wを測る。施設として竈跡は、住居跡133に削られ、かろうじて貯蔵穴が推定床面からの深さ33cmで存在していた。掘方は北半に壁に沿う溝状の凹みが存在し、床下坑は重複の住居跡133の



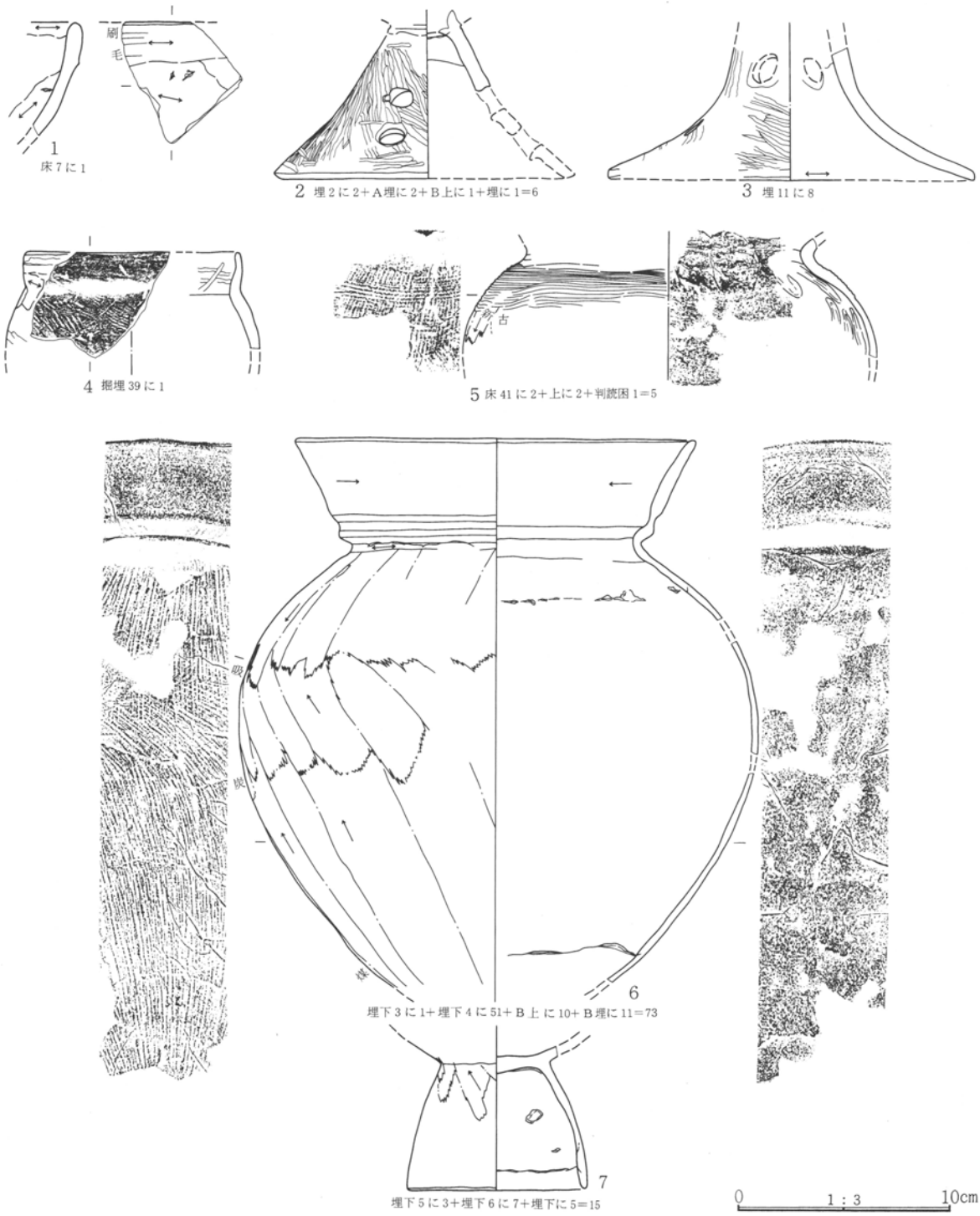
第368図　住居跡128遺物図



1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。上面締る。3′はローム量少ない。少し軟らかいが、床層。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロックほとんど含まない。軟。
5、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く含む。掘方埋土。
6、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1:60　2m

第369図　住居跡129遺構図

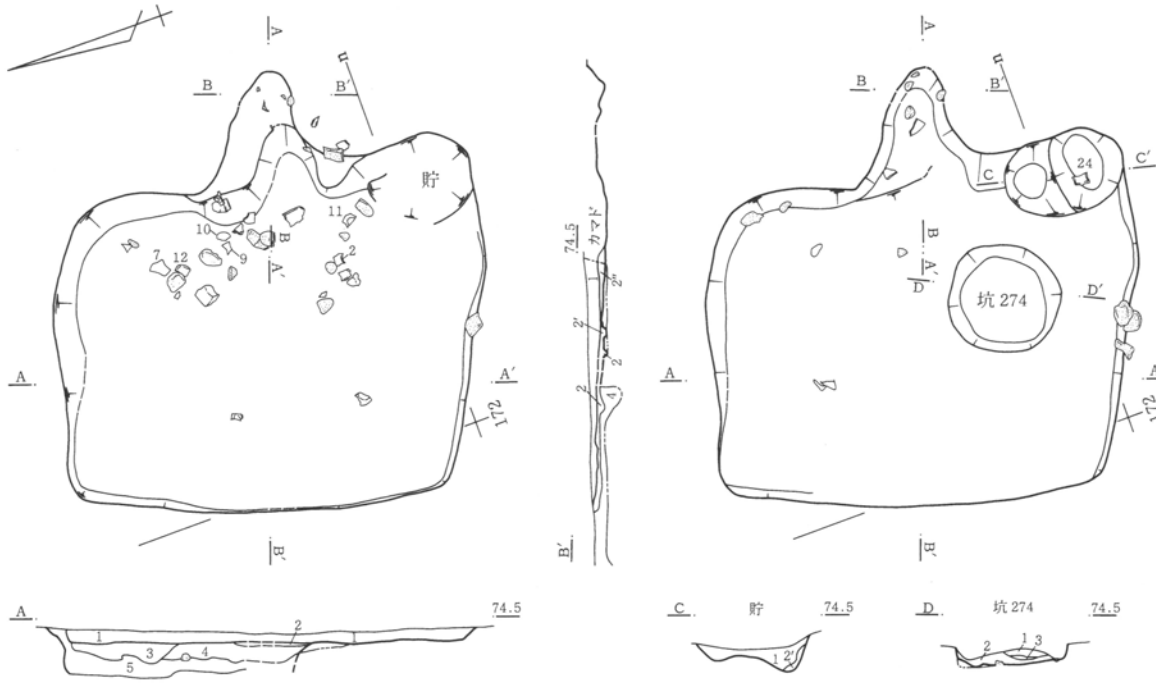


第370図　住居跡129遺物図

範囲の中に存在するのが同132の掘方中には認められなかった。遺物は第377図に掲げた、遺物取上№34に９世紀前半の埦の出土があるほか個体量少なく、住居の機能時を明確にし難いが、同期か。

住居跡133　（第378・379・380図、図版70・186・187）

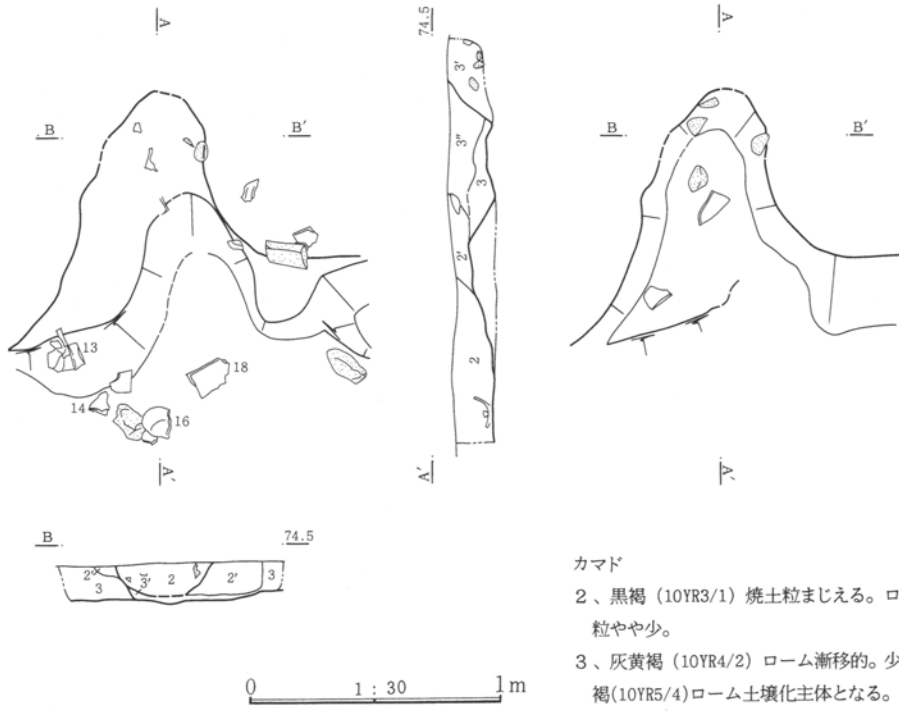
位置はＱ大区pq169・170にあり、調査面はローム層上面標高74.3m、重複は住居跡132を切り、溝跡99・102、坑261・262、ピ1062・1064に切られる。調査時、先行の住居跡132と北西半は重さなり、住居跡132の掘方は



1、黒褐（10YR3/1）軽石・木炭粒わずか含む。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。締る。2′はロームブロック含まない。2″は少し還元気味で、ロームブロック含まず。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し含む。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロックほとんど含まず。住124埋土。
5、褐　（10YR4/4）ロームブロック含み、ローム土壌化を主とする。

貯蔵穴・坑274
1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含まず。少し締る。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含まず。ロームブロック入る。2′は少し締る。
3、褐　（10YR4/4）ロームブロックを主とし、少し締る。

0　1：60　2m



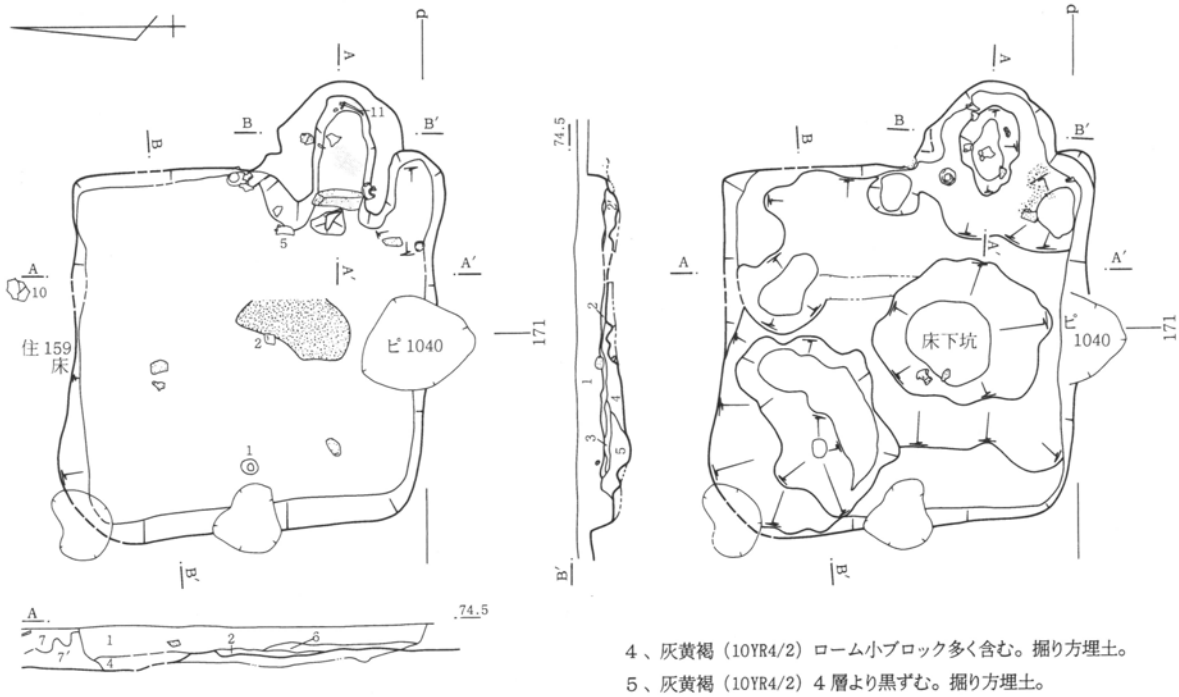
カマド
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒まじえる。ロームブロック含む。2′焼土粒やや少。
3、灰黄褐（10YR4/2）ローム漸移的。少し黒味強い。3′はにぶい黄褐(10YR5/4)ローム土壌化主体となる。3″は3に焼土粒含む。

0　1：30　1m

第371図　住居跡130遺構図

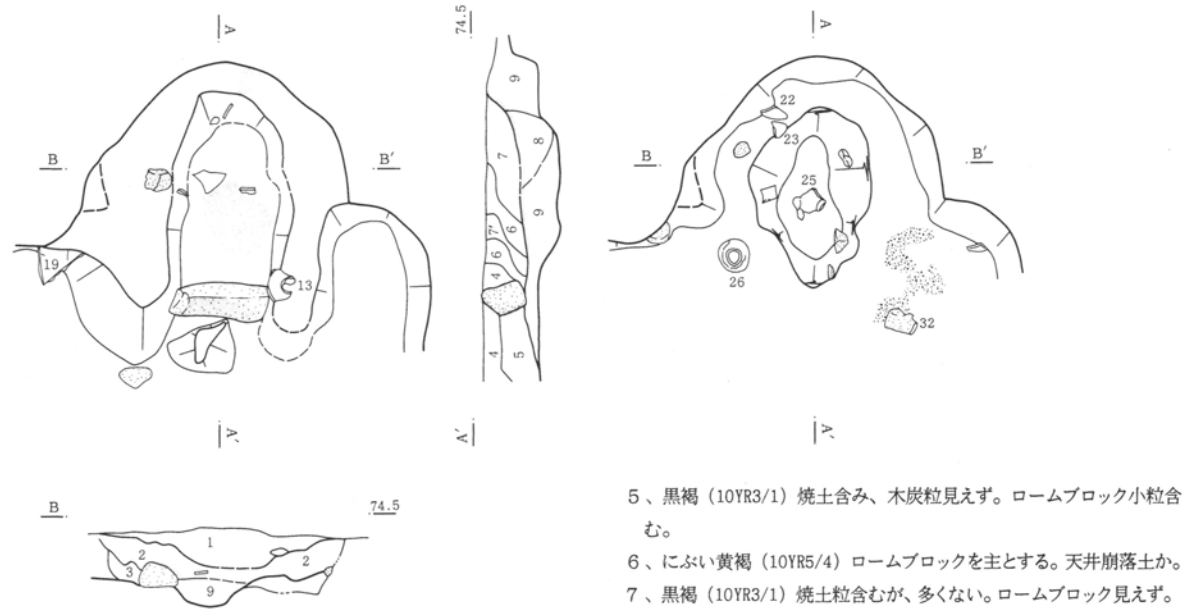
第372図　住居跡130遺物図

住居跡133の埋土から床層以下を掘り込む同質に近い黒色土のため、住居跡132の掘方は不明瞭で、両住居跡相互で遺構・遺物に混在が考えられる。規模は南北465cm、東西369cm、方向は中軸でN3°30′Wを測る。施設として、東壁に竈が、南東隅に床面から深さ３cmまで埋まり、掘方底面で床面からの深さ29cmの貯蔵穴があり、さらに２住居の床下坑が第378図下段に示したとうり複雑な状態で認められた。床層と掘方との間には下層の床面２がある程度、広い範囲に存在し、同図にその区分を示した。床下坑のうち北西側は住居跡132に関連した可能性がもたれる。遺物は、第380図に掲げたが、全体的には10世紀後半で



１、黒褐（10YR3/1）木炭粒まじえる。
２、黄褐（10YR5/6）ローム小粒多く含む。締る。床層。２′はややローム量多い。
３、黒褐（10YR3/1）黒味強く、他のまじりなし。
４、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック多く含む。掘り方埋土。
５、灰黄褐（10YR4/2）４層より黒ずむ。掘り方埋土。
６、黒　（10YR2/1）木炭灰を主とし、焼土粒をわずかまじえる。上面少し締る。カマド灰層。
７、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム土壌化主体。７′は締る。

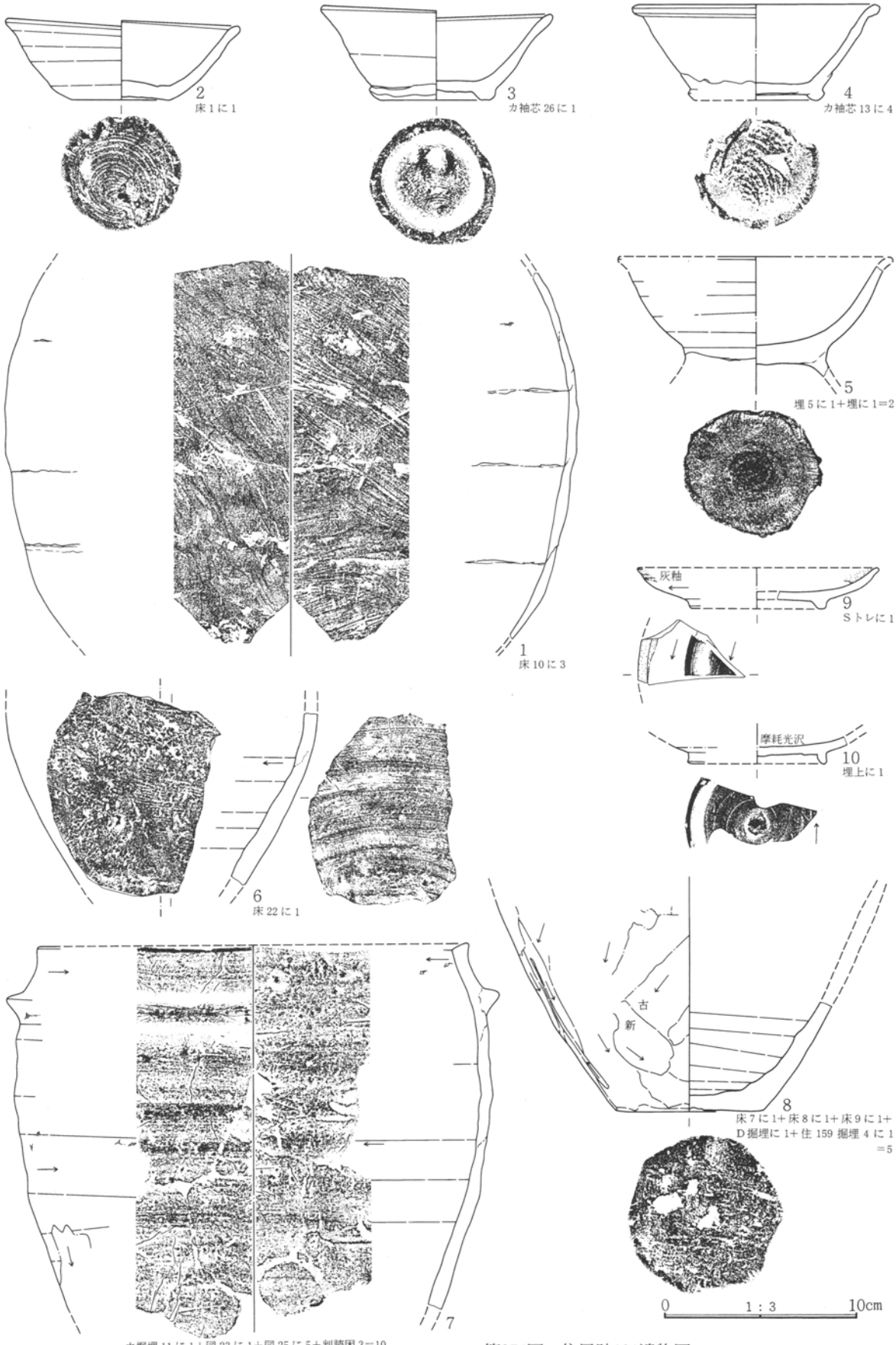
0　1：60　2m



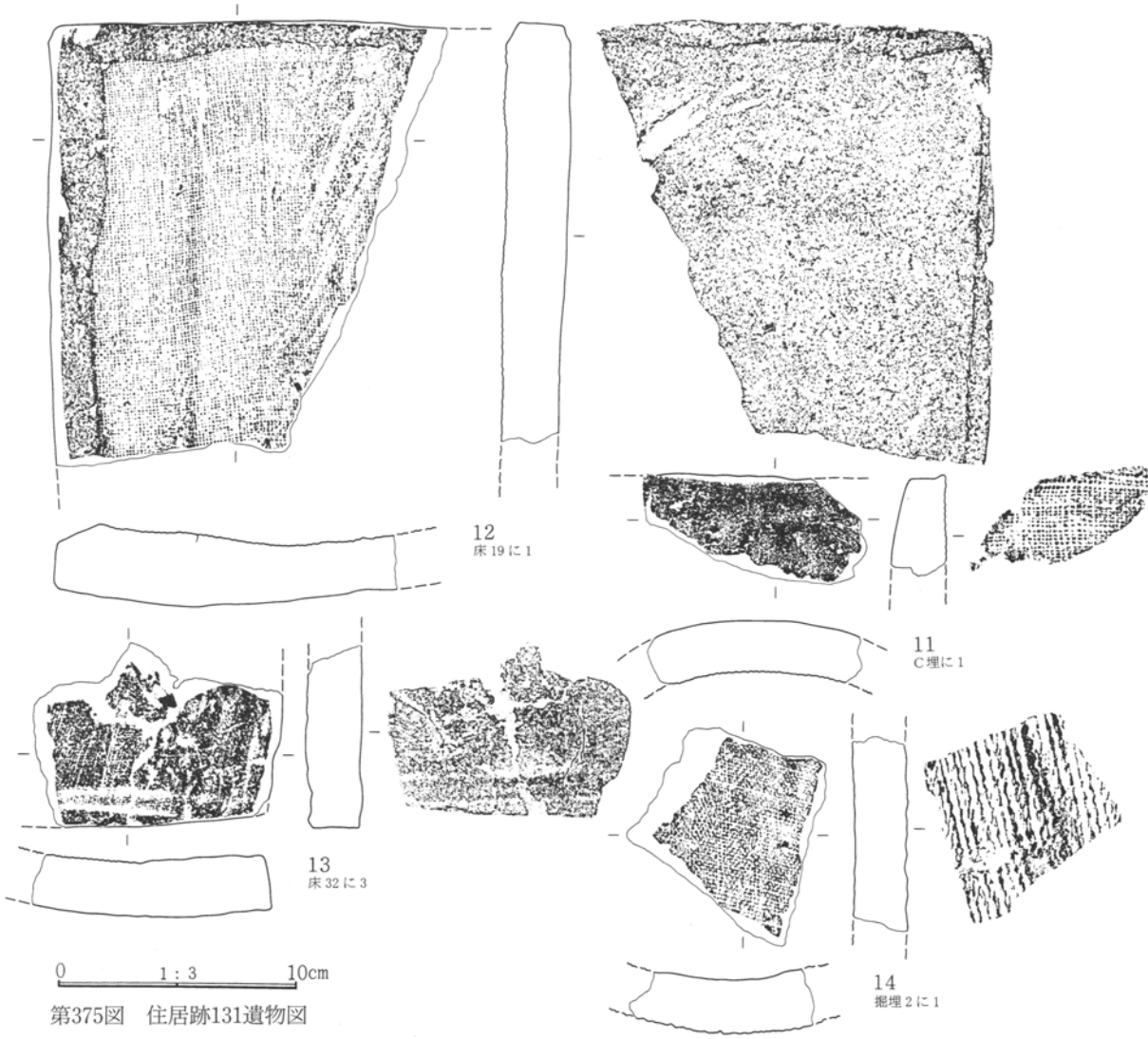
１、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。ロームブロック入る。
３、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒見えず、ロームブロック見えず。
４、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒見えず、ロームブロック見えず。
５、黒褐（10YR3/1）焼土含み、木炭粒見えず。ロームブロック小粒含む。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを主とする。天井崩落土か。
７、黒褐（10YR3/1）焼土粒含むが、多くない。ロームブロック見えず。７′ほぼ同じ。
８、黒褐（10YR3/1）焼土粒含むが、多くない。ロームブロック見えず。軟。
９、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1：30　1m

第373図　住居跡131遺構図



第374図　住居跡131遺物図

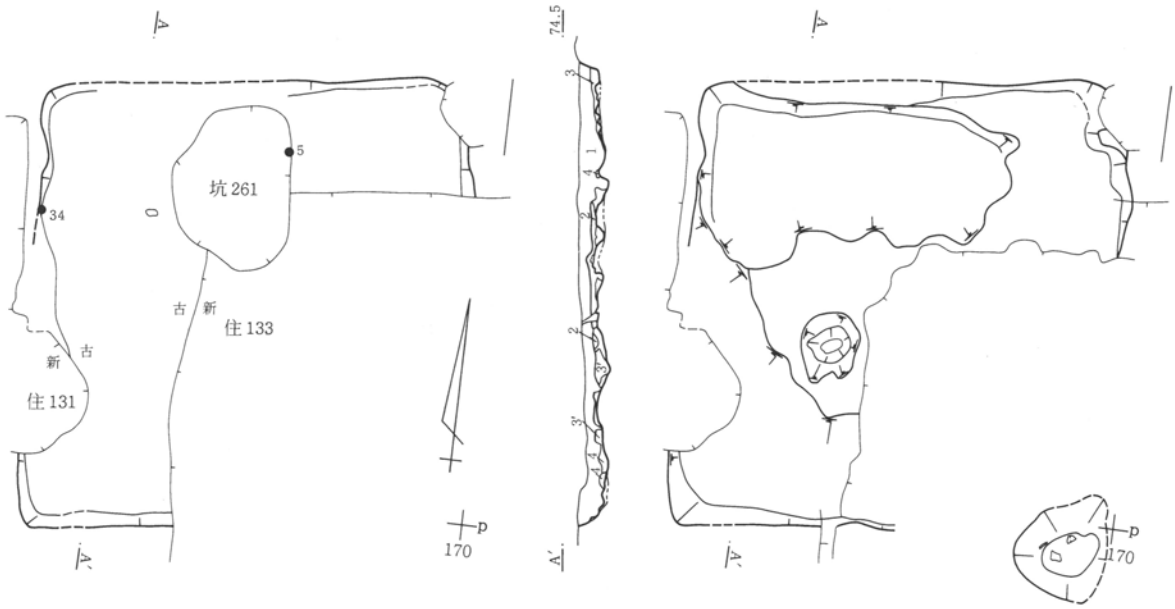


第375図　住居跡131遺物図

も末期に近い頃の個体が主であるが同図６は前半に遡ぼると考えられる。遺物の一群で注意される工房を思わせる個体を含む点にあり、同図３は顔料を混入させたとみられる茶ウルシ付着と油煙付着の坏、同図７は須恵器羽釜で内面底が顕著に磨耗している。同図10は羽口片で鉄・銅いずれかの加工に用いたか不明であるが工的な生産の中では専門的な知識をより必要とされる道具の一つである。同図の送風孔が大きのは、芯型（棒）に２層の粘土巻き付けを行なった複数例を当遺跡で見当ことができるので、同図10はおそらく内側に貼った粘土が剝れたとも考えられる。

住居跡135　（第381・382・383図、図版70・187）

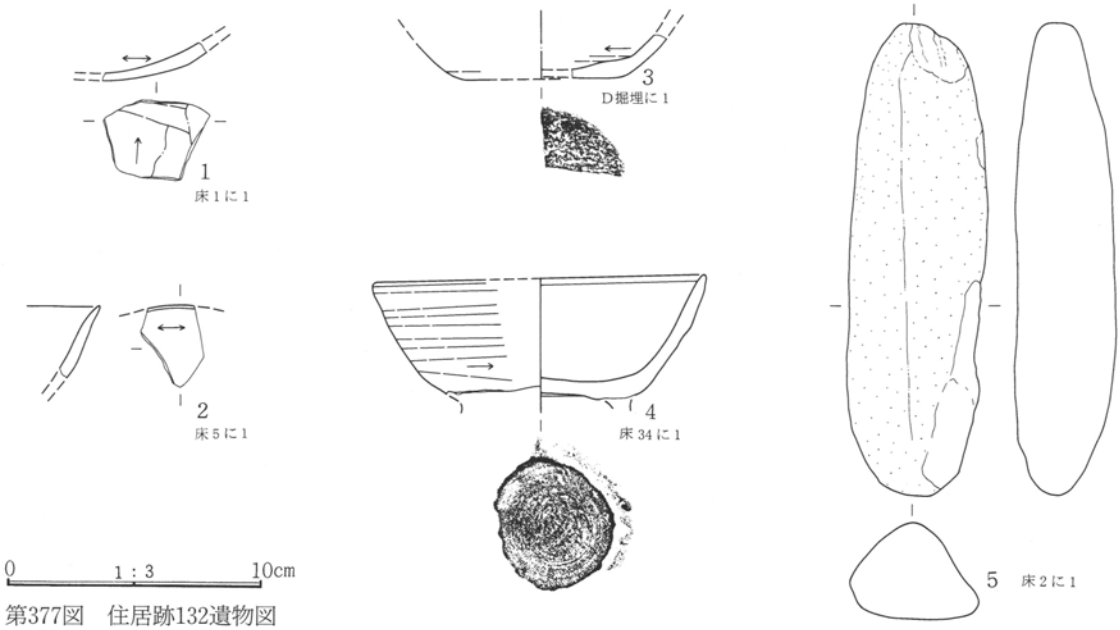
位置はＱ大区no170にあり、調査面はローム漸移層中標高74.4mである。重複は埋土上層を切って住居跡133、坑262がある。規模は、南北532cm、東西373cm、方向は中軸でN7°Wを測る。深さは床面まで約50cm、掘方まで66cmを測り、Ｑ区の中では最も深い住居跡である。施設として東壁にしっかりした石組構造をもって構築された竈、貯蔵穴として明確な穴を設けてではないが周囲の床より６cm低い凹みが竈右袖側から南東隅まで続く、床面には広く黒味のある灰が堆積し、竈の焼土化も顕著であった。掘方は不整形な凹みが設けられていた。遺物は第383図のとおり、８世紀中頃の土器類で占められ、住居機能時も同期である。同図9・12は安中市秋間地区にある秋間窯跡群の特徴的な胎土で、１住居中、複数個体が存在する例は少ない。同図12には箆記号か文字刻書がある。



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒・ローム小粒入る。
２、黒褐（10YR3/1）少し還元気味。締る床層。焼土粒入る。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。３′締る。
４、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック。土壌化を主とする。

0　1：60　2m

第376図　住居跡132遺構図

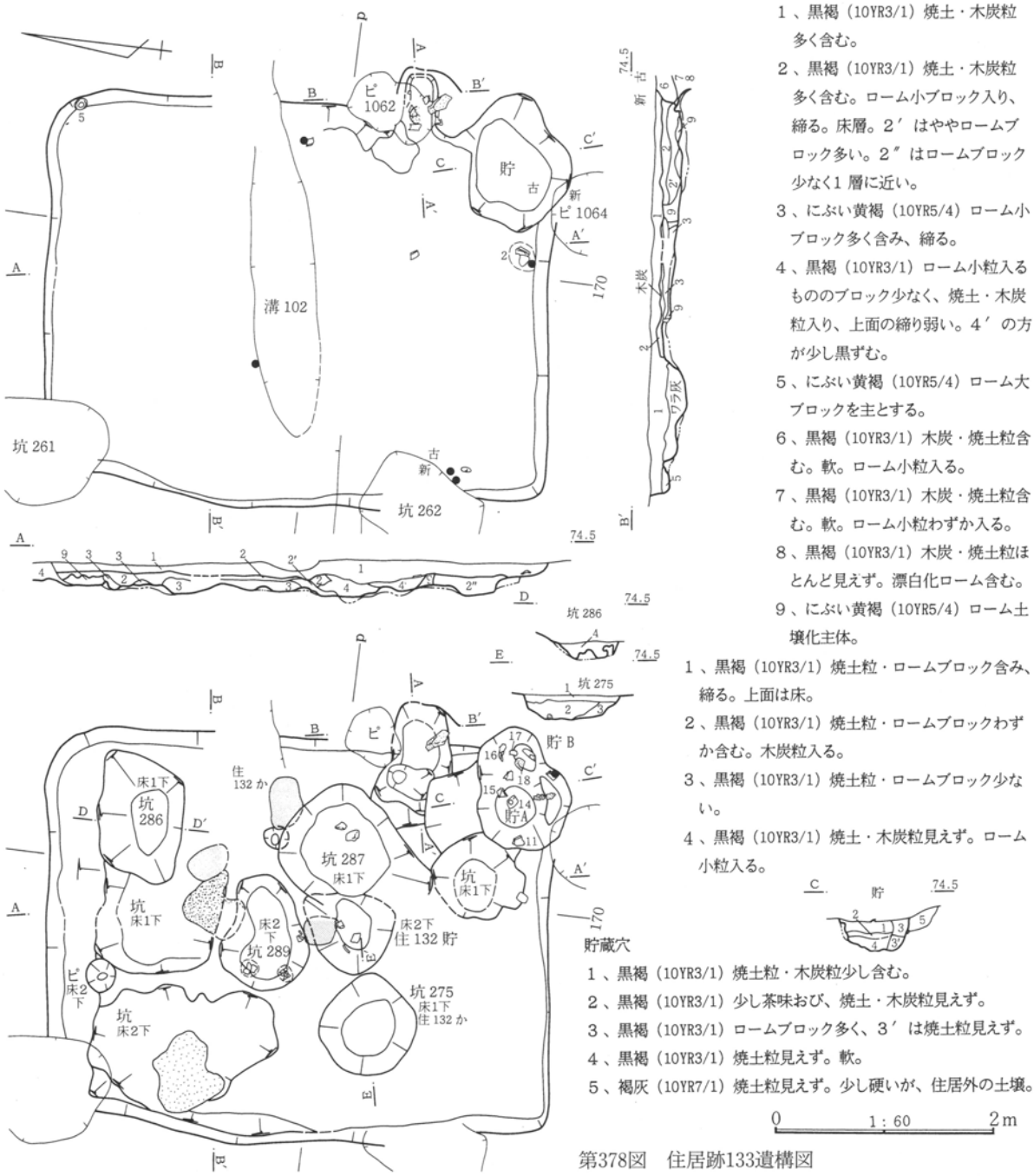


第377図　住居跡132遺物図

住居跡136　（第384図、図版70）

位置はＱ大区st171にあり、調査面はローム漸移層中標高74.4m。重複は二重像のように後出の住居跡119・109が重なり、北接の住居跡114を切る。規模は南北348cm、東西67＋αcm、方向は東壁を基にN5°Wを測る。施設として東壁に竈、南東隅に貯蔵穴、掘方に竈前の土坑などがあり、以西は住居跡119に削られる。遺物は掲載漏で、竈内、同右袖外、北東隅付近に須恵器坏・埦など近完器の個体がある。

住居跡137　（第385・386・387図、図版71・187）



1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。ローム小ブロック入り、締る。床層。2′はややローム ブロック多い。2″はローム ブロック少なく1 層に近い。
3、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロック多く含み、締る。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入るもののブロック少なく、焼土・木炭粒入り、上面の締り弱い。4′の方が少し黒ずむ。
5、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム大ブロックを主とする。
6、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。軟。ローム小粒入る。
7、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。軟。ローム小粒わずか入る。
8、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒ほとんど見えず。漂白化ローム含む。
9、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

1、黒褐（10YR3/1）焼土粒・ロームブロック含み、締る。上面は床。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒・ロームブロックわずか含む。木炭粒入る。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒・ロームブロック少ない。
4、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒見えず。ローム小粒入る。

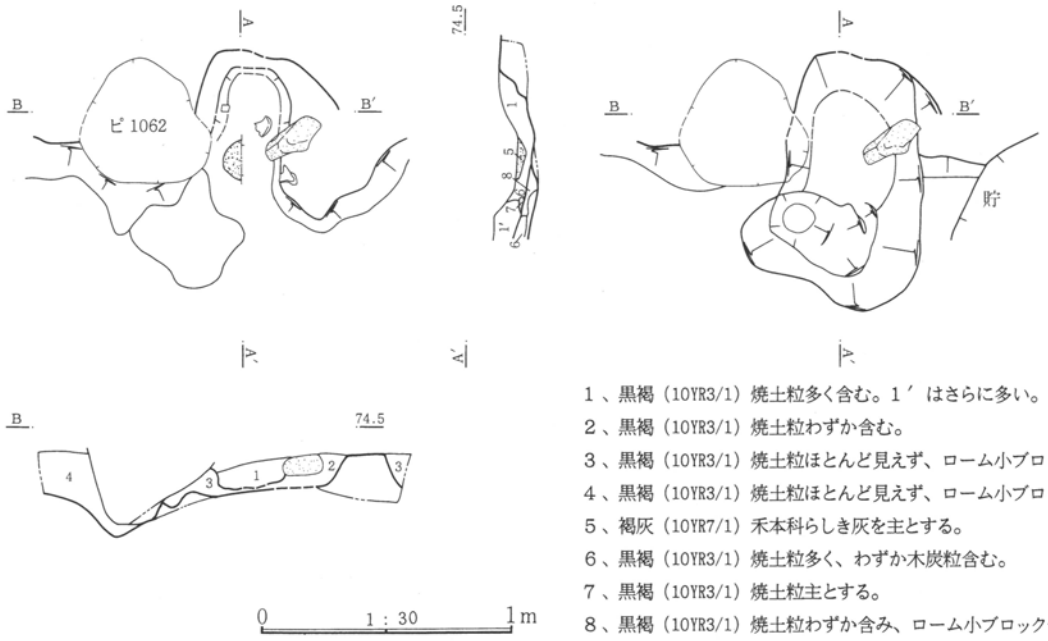
貯蔵穴
1、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒少し含む。
2、黒褐（10YR3/1）少し茶味おび、焼土・木炭粒見えず。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く、3′は焼土粒見えず。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず。軟。
5、褐灰（10YR7/1）焼土粒見えず。少し硬いが、住居外の土壌。

第378図　住居跡133遺構図

位置はＱ大区no172にあり、発見面は住居跡124埋土上面標高74.4であるが、同124の埋土中では、住居跡137の輪郭を捉えることはできず同124の床面標高74.2m付近を調査面とした。重複は、住居跡124が先行し、同130に切られる。規模は南北で426cm、東西296cm、方向は中軸でN13°Wを測る。施設として東壁に竈跡、貯蔵穴は不明瞭、掘方で床下坑が存在していた。遺物は第387図に掲げた、全体的には９世紀前半頃の一群で、住居の機能時も同期である。遺物中同図８は下げ砥で完通孔と未完通孔とがあり、使用は利手グセの少ない丁寧な使用である。

住居跡138　（第388・389・390・391・392図、図版71・188）

位置はＱ大区no174・175にあり、調査面はローム層上面からローム漸移層間で標高74.4m。重複は住居跡



1、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含む。1′はさらに多い。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど見えず、ローム小ブロック含む。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど見えず、ローム小ブロック見えず。
5、褐灰（10YR7/1）禾本科らしき灰を主とする。
6、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、わずか木炭粒含む。
7、黒褐（10YR3/1）焼土粒主とする。
8、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含み、ローム小ブロック含む。

第379図　住居跡133遺構図

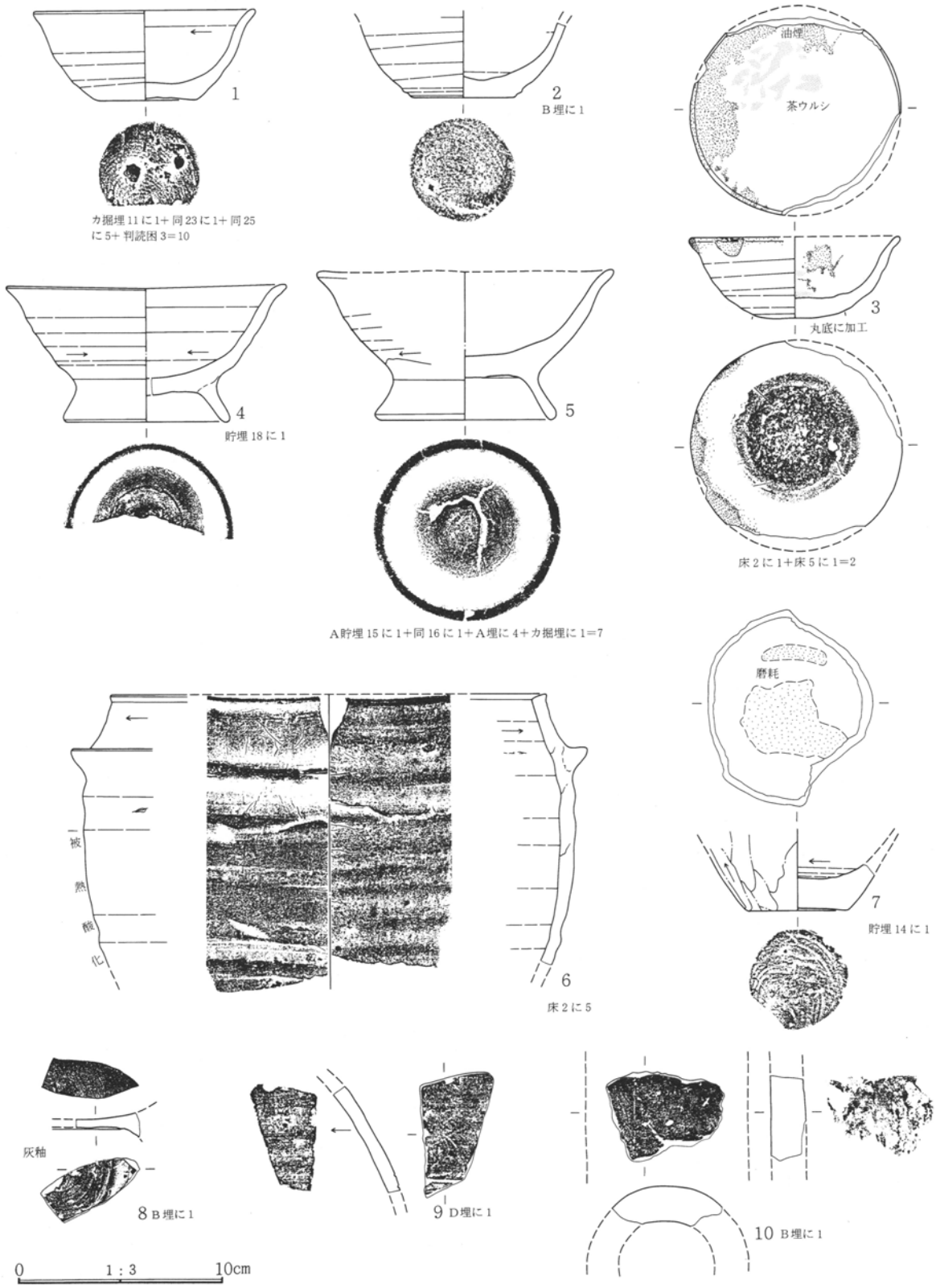
118、土坑215・226・259に切られ、坑216とした倒木によって中央部に乱れた状態が生じていた。規模は南北437cm、南北453cm、方向は中軸でN38°Wを測る。施設は北壁に竈、北東隅に貯蔵穴、柱穴３穴、掘方で竈前の凹地がある。貯蔵穴は直上に坑215とした穴跡の最深部が貯蔵穴上面であった。坑215は倒木に関連しての穴跡で仔細不明であった。柱穴のうち南東部は住居跡118の床下坑により削失されたと推定され、南西柱穴は底で標高74.2mを測る。竈は第389図のとおり、地山のローム層を袖部を残して造り出し、粘土に相当する貼土を行なって構築されていた。廃棄後の平面調査時に崩落天井と考えられる土層注9・10・2・3などを円形状に切り込む穴跡（破線部）があり内部に遺物取上げ番号31、第392図17が逆向きにやや倒れた状態で見い出された。竈内には使用石材が乱れて存在し、同前には第391図16が口を南に向け潰れた状態で出土。同左右には坏類が、貯蔵穴には第391図15が存在していた。これら遺物群の中で第390図11・12は、先行の古墳時代中期、第391図18は後出の８世紀中頃の個体が床か至近まで存在している。遺物類の総体は６世紀後半であり、住居機能も同期である。

住居跡139　（第393・394・395図、図版72・189）

位置はＱ大区mn169・170にあり、調査面はローム層漸移標高74.4m。重複は南壁側から延る無番別遺構、坑251、ピ1073が切る。規模は南北354cm、東西295cm、方向はN4°Wを測る。施設に東壁に竈、南東隅に床面ではほとんど埋没していた貯蔵穴、掘方で床下土坑と壁下沿いの溝状の掘り込みがある。竈は天井架材が前側に倒落、内部には第394図に示した甕３個体と支脚に用いられた第395図６を見い出した。時期は甕類から９世紀後半が示めされ住居の機能時も同期。

住居跡140　（第396・397図、図版72・189）

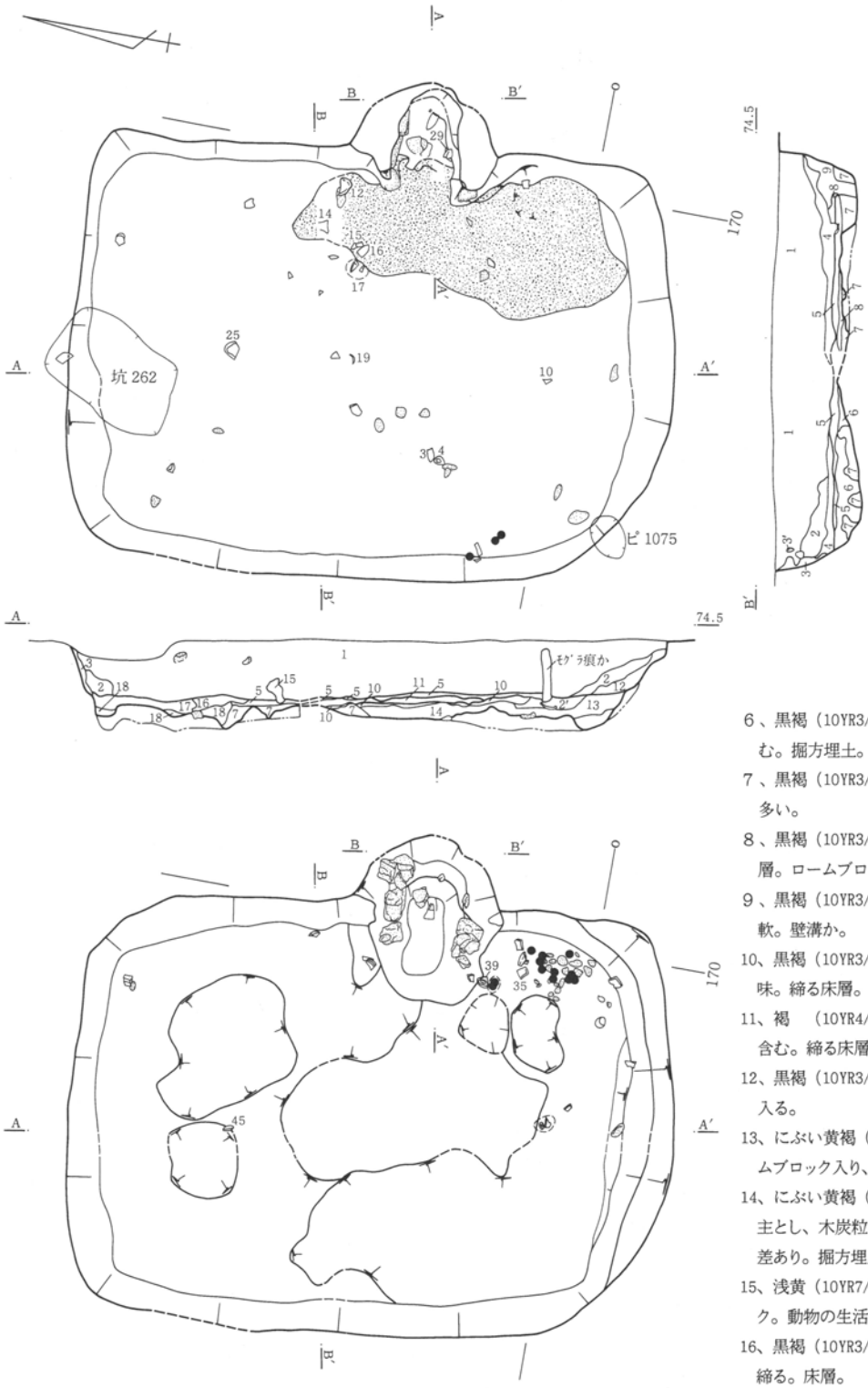
位置はＱ大区ｎ169にあり、調査面はローム層漸移で標高74.4m。重複なし。規模は南北245＋αcm、東西75＋αcm、方向は西壁を基にN3°31′Wを測る。施設として掘方において壁下が有段状になり、土層断面にその関係が見える。遺物は床面において第397図１坏があり、10世紀前半で住居機能も同期。



第380図　住居跡133遺物図

住居跡141　（第398・399図、図版73・189）

位置はＱ大区mn170・171にあり、調査面はローム層上面標高74.4mにある。重複は住居跡142・143・130、溝跡93・97、坑250・265、ピ1078、A_s－Ｂ混りの凹地が後出して存在。規模は南北で520cm、東西で554cm、



1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒・灰を含む。

2、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒・灰ほとんど含まない。粗質。2′差ほとんどなし。

3、明黄褐（10YR6/6）壁くずれ様。ロームブロック多く含む。3′はロームブロック。

4、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒・灰を含む。少し還元気味。ロームブロック入る。

5、黒褐（10YR3/1）木炭粒を多く含む。少し締る床層。

6、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを少し含む。掘方埋土。

7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック量やや多い。

8、黒褐（10YR3/1）木炭粒を主とする旧床層。ロームブロック多い。締る。

9、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含む。軟。壁溝か。

10、黒褐（10YR3/1）灰を多く含み、還元気味。締る床層。焼土粒入る。

11、褐　（10YR4/4）ローム粒・焼土を多く含む。締る床層。

12、黒褐（10YR3/1）ローム漸移状に土壌化入る。

13、にぶい黄褐（10YR5/4）漂白化したロームブロック入り、上方少し締る。

14、にぶい黄褐（10YR6/4）ロームブロックを主とし、木炭粒を多く含むところに7層との差あり。掘方埋土。

15、浅黄（10YR7/4）漂白化したロームブロック。動物の生活穴か、軟らか。

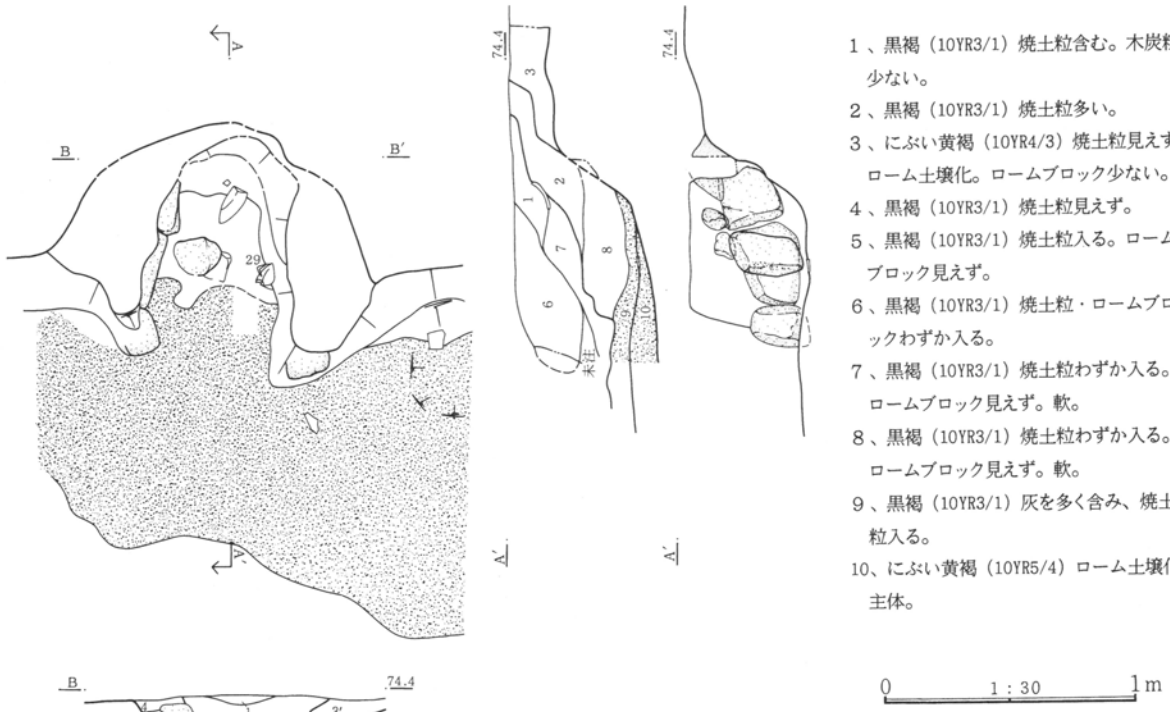
16、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒含む。締る。床層。

17、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒多く含む。床面。ロームブロック多い。

18、灰黄褐（10YR1/2）ロームブロック多く含み、焼土粒入る掘方埋土。

0　1：60　2m

第381図　住居跡135遺構図



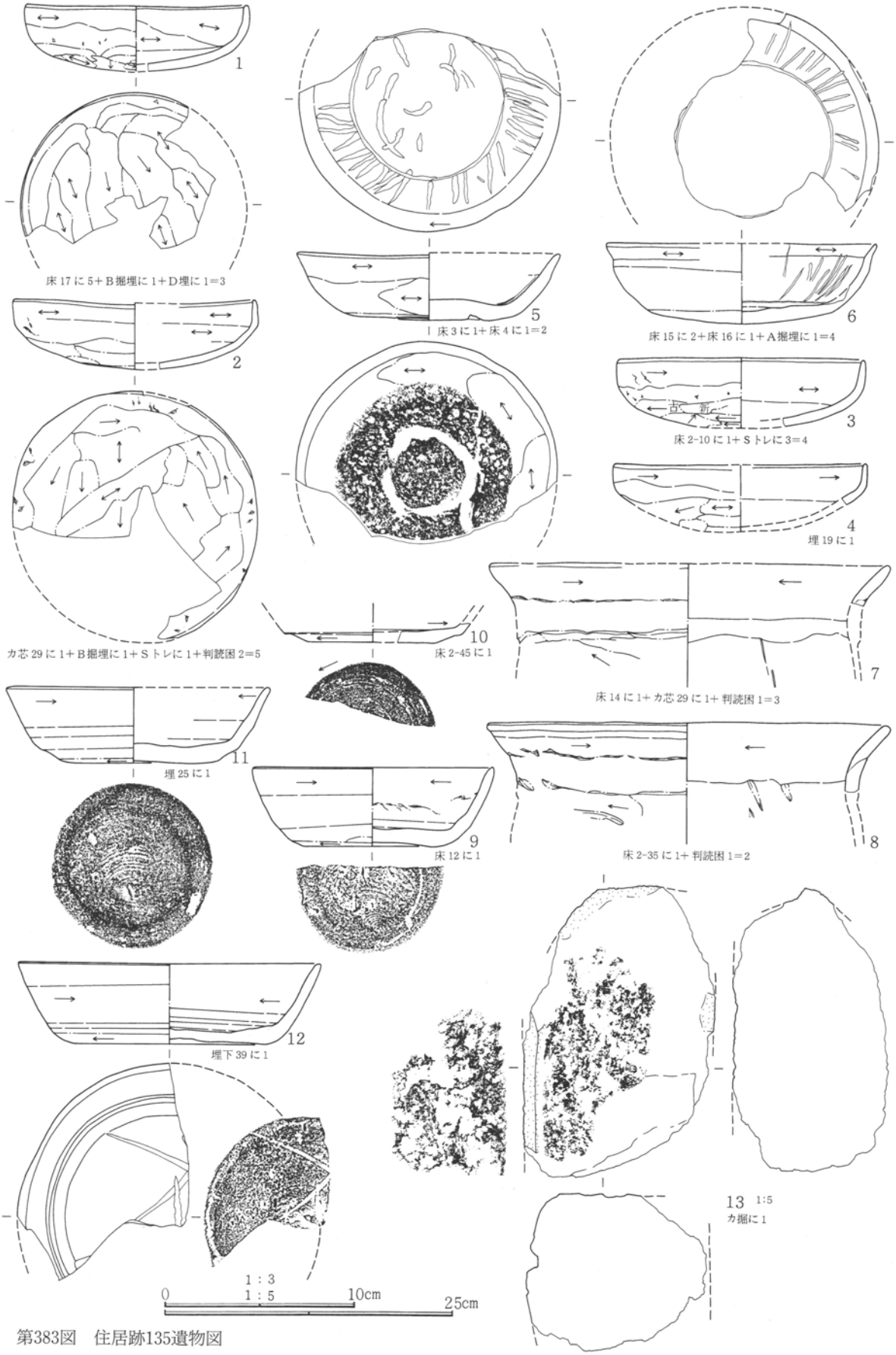
1、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。木炭粒少ない。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒多い。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）焼土粒見えず。ローム土壌化。ロームブロック少ない。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず。
5、黒褐（10YR3/1）焼土粒入る。ロームブロック見えず。
6、黒褐（10YR3/1）焼土粒・ロームブロックわずか入る。
7、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか入る。ロームブロック見えず。軟。
8、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか入る。ロームブロック見えず。軟。
9、黒褐（10YR3/1）灰を多く含み、焼土粒入る。
10、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

第382図　住居跡135遺構図

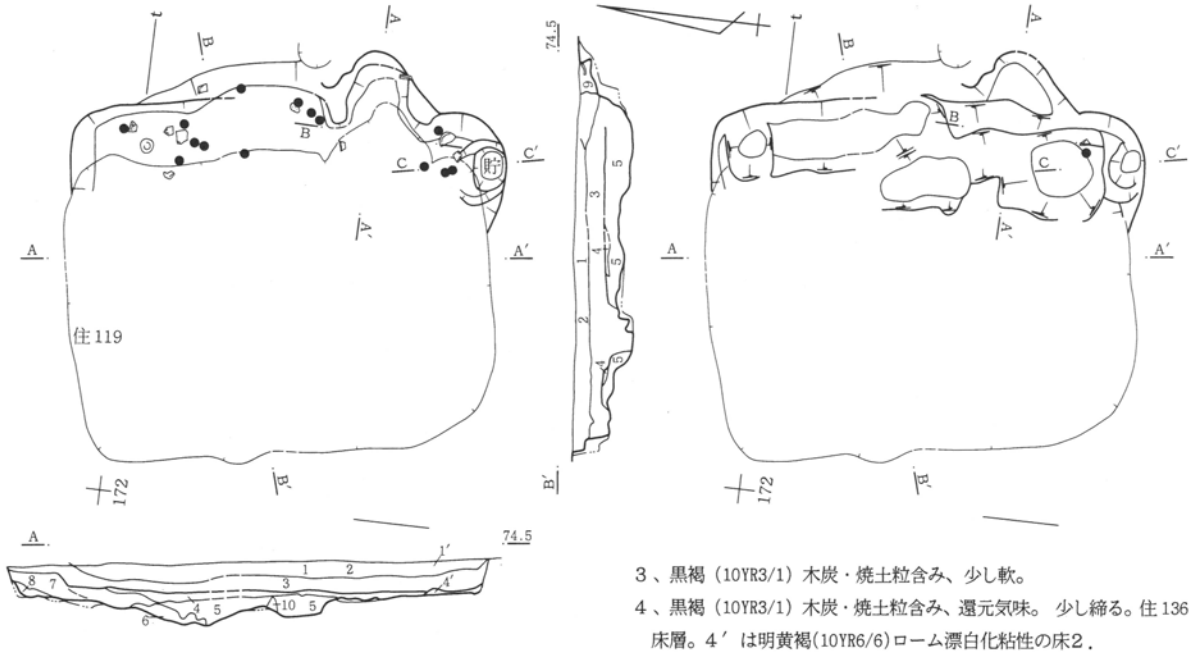
方向は中軸でN18°15Wを測る。施設として炉跡は不明、貯蔵穴は南壁下西寄りに底標高73.87mの穴跡もしくは西壁下中央付近の底標高73.91mの穴跡が考えられそうであるが、形状やや不整の感あり疑問を感ずる。柱穴は４穴確認され、北西は底標高73.71m、南西は73.45mを測り、北半の２穴は中段があり、掘直しか建替えの可能性が持たれる。その点について掘方において、東半の周壁で中段が認められ改修の可能性がより強まる。掘方は中央部を高め、周壁沿いを掘り凹めた状態の床下構造を持つ。なお柱間数値は東西275cm、南北235～255cmである。遺物は、第399図に掲げたように古墳時代前期の一群であり、量的には多くはないが器種揃えの一括性と云う意味では良好。住居機能も同期。

住居跡142　（第400・401図、図版73・190）

位置はQ大区lm171にあり、調査面はローム層上面標高74.4mである。重複は先行の住居跡142・143・163を切り、溝跡93・97、坑250、ピ1079に切られる。調査面は床下に達し、第400図は掘方状態であるが下方に住居跡142が存在し、掘方形状、床下構造は明瞭でない。住居跡埋土と床下と相互近似の黒色～黒褐色土のため調査能力を超えてしまう。図中の掘方状態は、後出の住居跡143による削失形状に近く、厳密な掘方形状ではないと考えられる。規模は南北334cm、東西240cm、方向は中軸でN3°45′Wを測る。施設として東壁に竈が、貯蔵穴は明瞭でない。遺物については第401図に示したとおりで、同図１は９世紀代、同図４は10世紀代であり、調査ヵ所そのものも混在状態にあり、竈埋没土出土の同図３を捉えれば10世紀後半頃の時期が得られ、



第383図　住居跡135遺物図

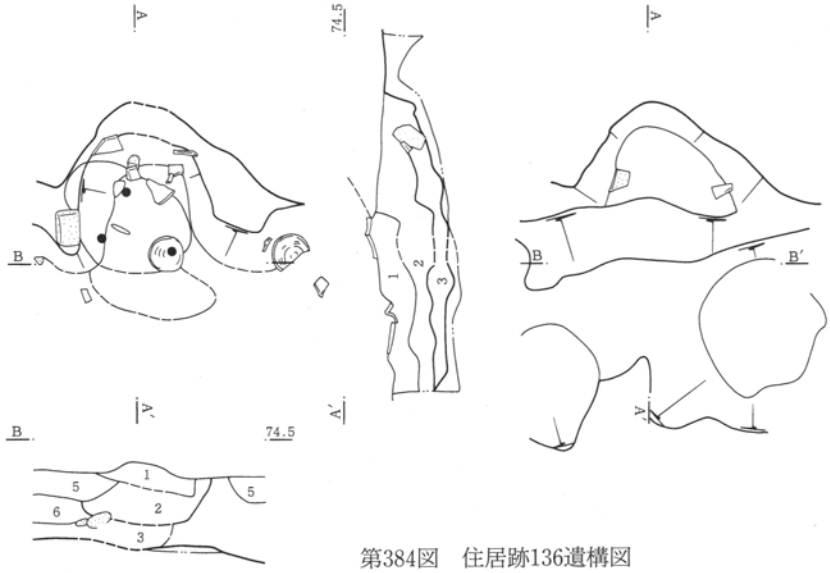


１、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少なく、少し粗。１′は木炭・焼土粒多い。住109貯埋。
２、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒わずか含み、Ｂ－Ｂ′南側に焼土粒・木炭粒特に多い。住119床層。

136号住居貯蔵穴
２、黒褐（10YR3/1）漂白ロームブロック多く含む。
４、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。

３、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、少し軟。
４、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、還元気味。少し締る。住136床層。４′は明黄褐(10YR6/6)ローム漂白化粘性の床２.
５、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、いく分軟。掘方埋土でロームブロック多い。
６、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含み、いく分軟。５層と基本的に同じであるが、ロームブロックは漂白化。
７、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し含む。いく分軟。
８、黒褐（10YR3/1）５層に近似。
９、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化含む。
10、ロームブロック。

0　1：60　2m



１、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。粗。
２、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含むが、木炭粒少ない。灰をまじえる灰色のきららあり。
３、黒褐（10YR3/1）木炭・ワラ灰を多く含むと見える中に焼土粒入る。
５、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒少ない。
６、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒わずか含む。

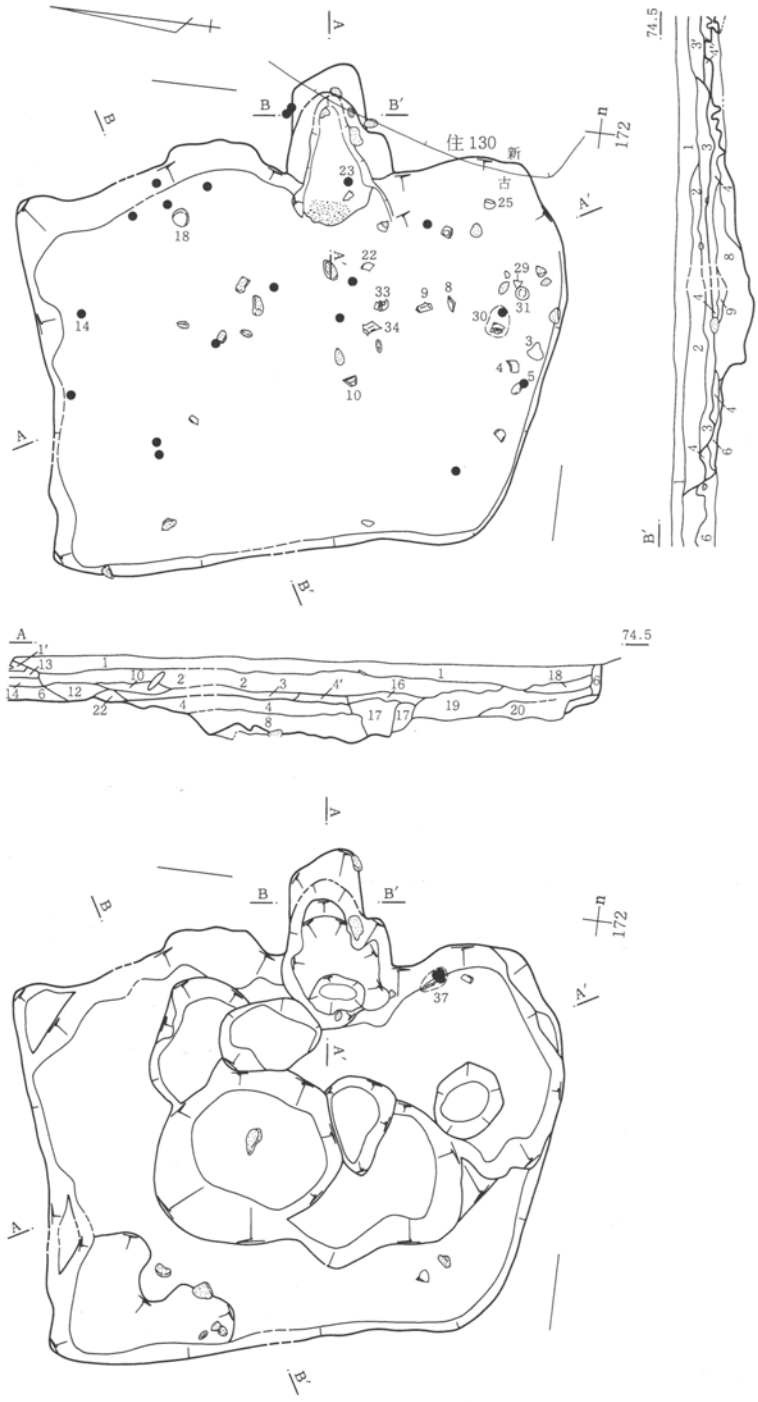
0　1：30　1m

第384図　住居跡136遺構図

住居機能もその頃か。

住居跡143　（第402・403図、図版73・190）

位置はＱ大区lm171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.35m。重複は住居跡126・142、溝跡93・97

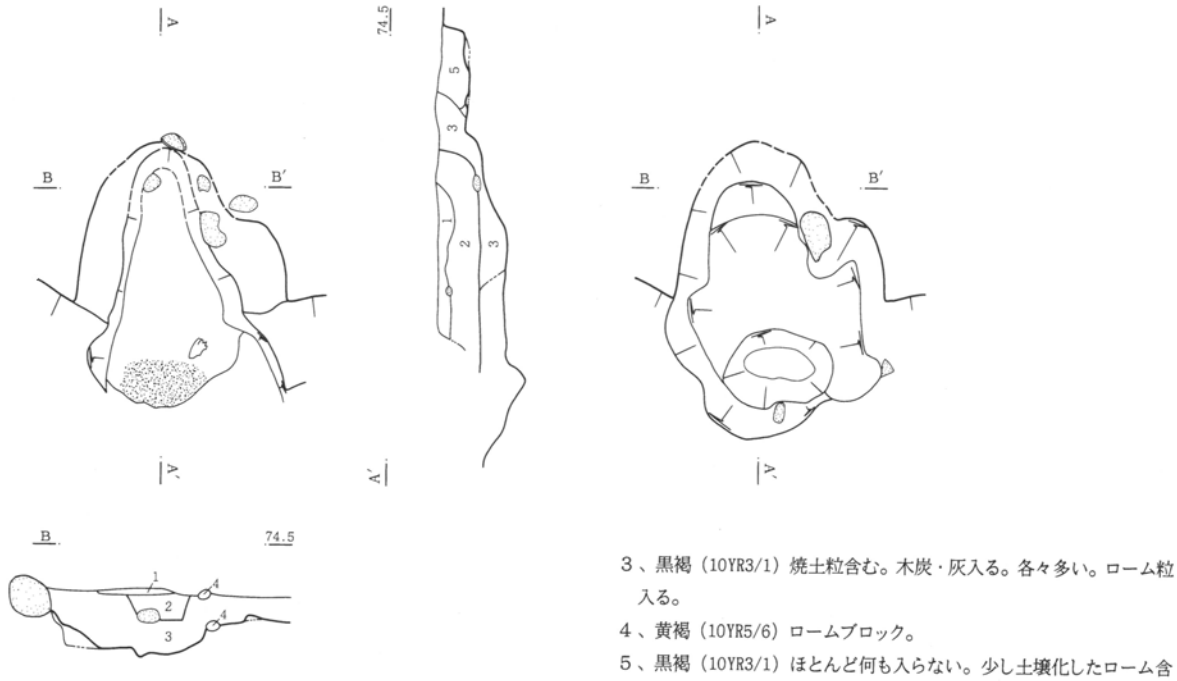


１、黒褐（10YR3/1）少し軟らか。ロームブロック少ない。1′は差なし。
２、黒褐（10YR3/1）少し軟らか。ロームブロック少ない。
３、黒褐（10YR3/1）焼土粒少し含む。3′は含まず。
４、黒褐（10YR3/1）焼土粒少し含む。締りあり。ローム小ブロック入る。4′もほぼ同じ。
６、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを主とする。
７、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含むが、少ない。
８、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒含む。少し締る。
９、黒褐（10YR3/1）焼土粒。他物入らず。少し締り、床層か。
10、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含む。
12、黒褐（10YR3/1）３層に類似。ロームブロック入る。
13、灰黄褐（10YR4/3）ロームブロック少し多い。カマド崩落土。
14、灰黄褐（10YR4/3）13層より黒味あり。
15、浅黄（10YR7/4）漂白化したロームブロック。動物の生活穴か。軟らか。
16、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、軟。
17、黒褐（10YR3/1）焼土粒含み、土坑埋土(床下土坑か)。軟。
18、黒褐（10YR3/1）１層と差少。
19、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多い。少し締る。
20、黒褐（10YR3/1）ローム小粒ほとんどなし。焼土粒あり。
21、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、少し締り、床。
22、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1：60　2m

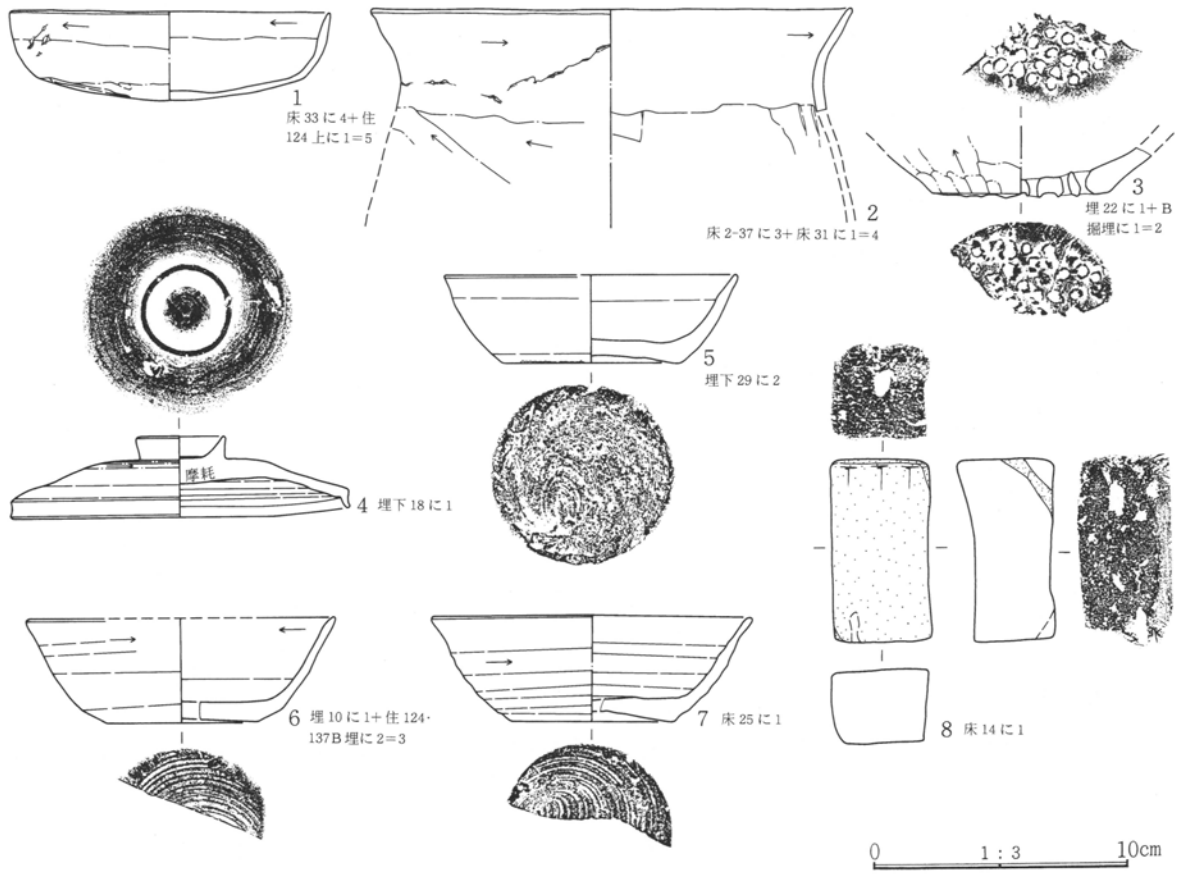
第385図　住居跡137遺構図

に切られる。それにより竈上半は削られ、南西周壁が失なわれていた。規模は、南北391cm、東西326cm、方向は中軸でN1°15′Wを測る。施設として東壁に竈、南東隅に床面で深さ８cm、坑343中の該当位置を底面とすれば掘方上面より深さ９cmの貯蔵穴、掘方で坑343・269などの床下坑を見い出した。竈は、上面削失の結果、竈前から右袖前にかけ灰層面が、左袖側で焼土粒を多く含む個所があった。遺物の出土も竈前で多く、土師器甕の大半がここから出土している。第403図に掲た遺物中、同８は流紋岩製の紡垂車で「国」とも読める刻字あり。同図７は灰釉陶器皿で、刷毛塗、小作りな高台で９世紀代である。住居機能時期は、同図1・5・6など坏・埦類と甕類からすれば９世紀後半と考えられる。

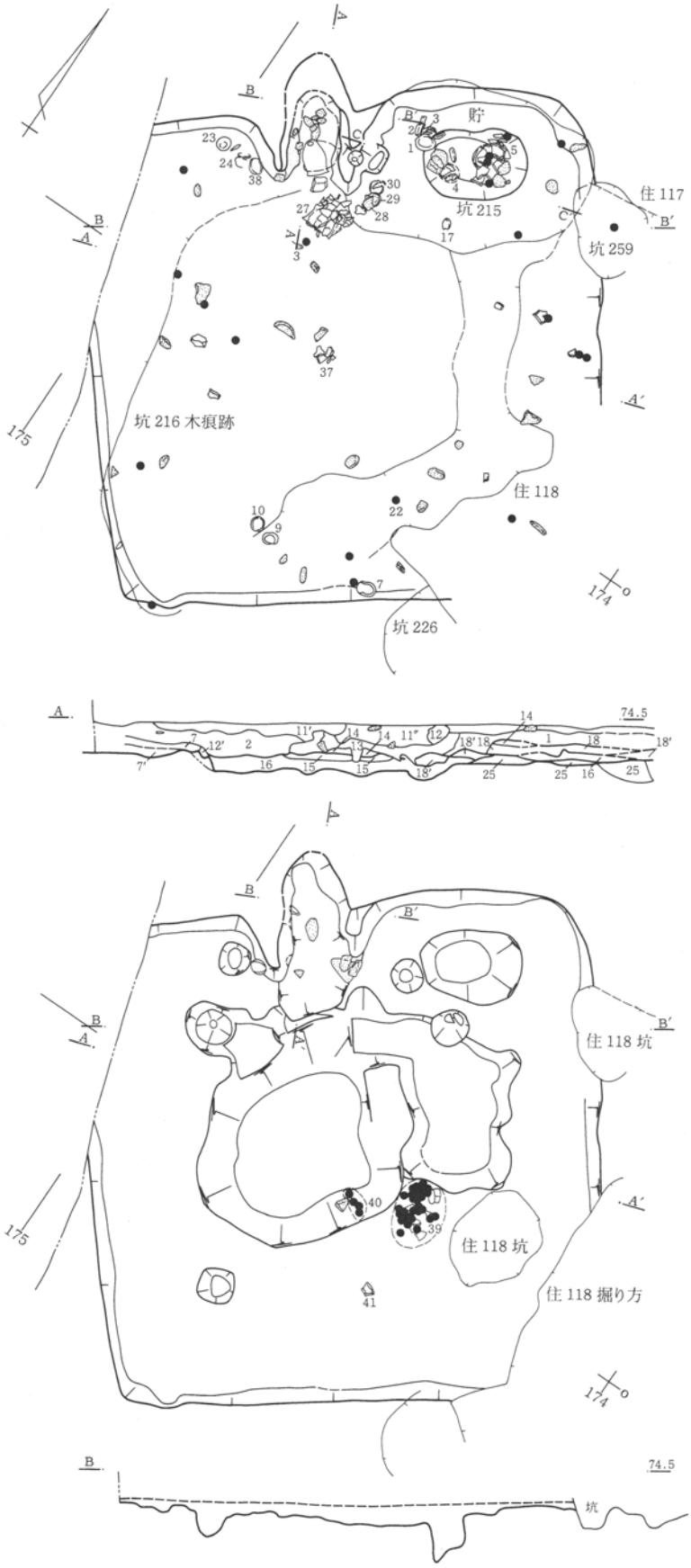


１、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。木炭・灰入る。
３、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。木炭・灰入る。各々多い。ローム粒入る。
４、黄褐（10YR5/6）ロームブロック。
５、黒褐（10YR3/1）ほとんど何も入らない。少し土壌化したローム含む傾向あり。

第386図　住居跡137遺構図



第387図　住居跡137遺物図



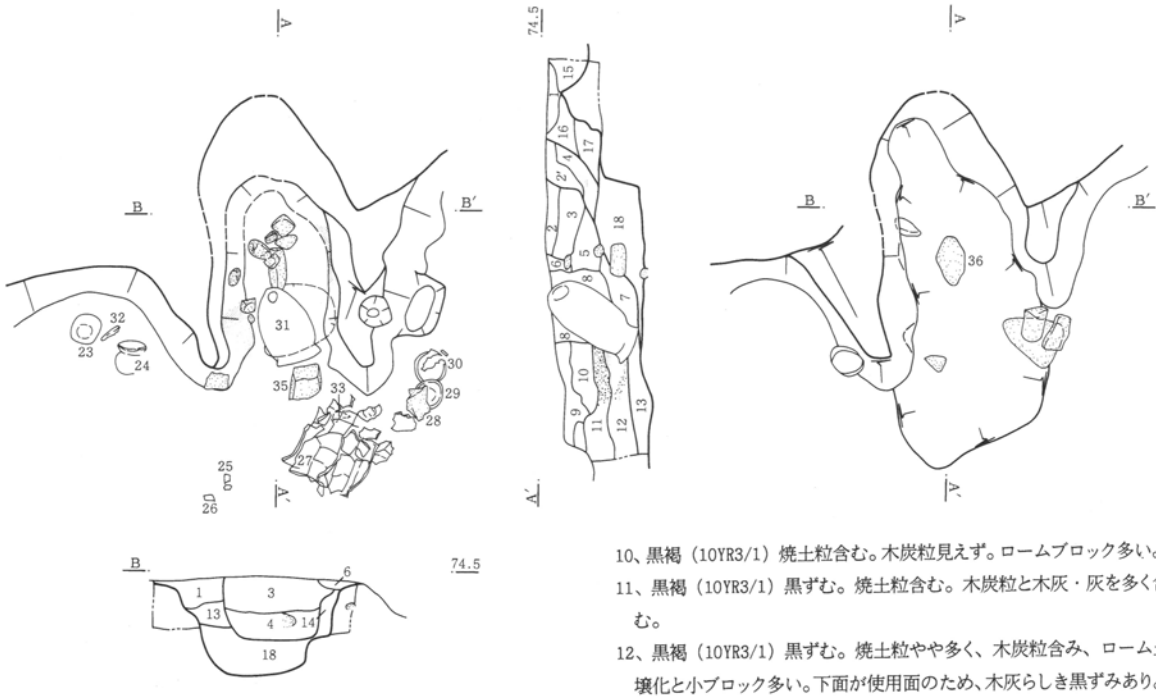
１、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒わずかに含み、やや粗。
２、灰黄褐（10YR4/2）１層中に黒褐（10YR3/1）土の大ブロック含む。そのブロックが床貼５層。２′はそのブロック。
７、黒褐（10YR3/1）軽石入らない黒褐。軟。７′はほぼ同じ。
11、灰黄褐（10YR2/4）黒味あり。軽石少ない。11′はローム小粒少し含む。11″はブロック少し多い。
12、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック。12′は漂白化ロームブロック。
13、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロックわずか含み、軟。
14、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック量多く、少し締る。
15、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック量多く、締る。床層。
16、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック量多く、黒褐ブロック含み、少し軟らか。床下層。
18、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック多く、締る。掘方埋土。床層か。18′は少し軟。
25、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1：60　2m

第388図　住居跡138遺構図

住居跡144―1　（第404・405図、図版73・190）

位置はＱ大区１171・172にあり、調査面は、周囲の住居跡からすればローム漸移層中に相当し標高74.3mを当初の掘り下げ面高とした。重複は北側の住居跡125が先行し、南側で住居跡144―2・145が先行し、同161が後出と推定された。規模は、南北で296cm、東西225



１、黄褐（10YR6/5）ローム漸移状。焼土粒見えず。
２、黄褐（10YR6/5）ローム漸移状。焼土粒多く含む。天井崩落土か。
３、黄褐（10YR6/5）ローム漸移状。焼土粒多く含む。さらに木炭粒含む。天井崩落土か。３′は焼土粒やや少ない。
４、黄褐（10YR6/5）ローム漸移状。焼土粒さらに多く、木炭粒含む。天井崩落土か。
５、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒４と同じく多く、さらに木炭粒含む。天井崩落土か。
６、黄褐（10YR6/5）ローム漸移状。焼土粒含み、木炭粒見えず。
７、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒・木炭粒含む。
８、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒極めて少なく、木炭粒見えず。少し粘性。燃焼部器設穴埋土か。
９、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒含む。木炭粒見えず。
10、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。木炭粒見えず。ロームブロック多い。
11、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒含む。木炭粒と木灰・灰を多く含む。
12、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒やや多く、木炭粒含み、ローム土壌化と小ブロック多い。下面が使用面のため、木灰らしき黒ずみあり。
13、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土粒少なく、ローム小ブロック多く含む。掘方埋土か。
14、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。焼土化あり、粘土貼付か。木炭粒見えず、ローム粒微。
15、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化多く、焼土粒わずか入る。掘方埋土か。
16、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化多く、焼土粒わずか入る。掘方埋土か。
17、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化多く、焼土粒わずか入る。掘方埋土か。
18、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。掘方埋土。

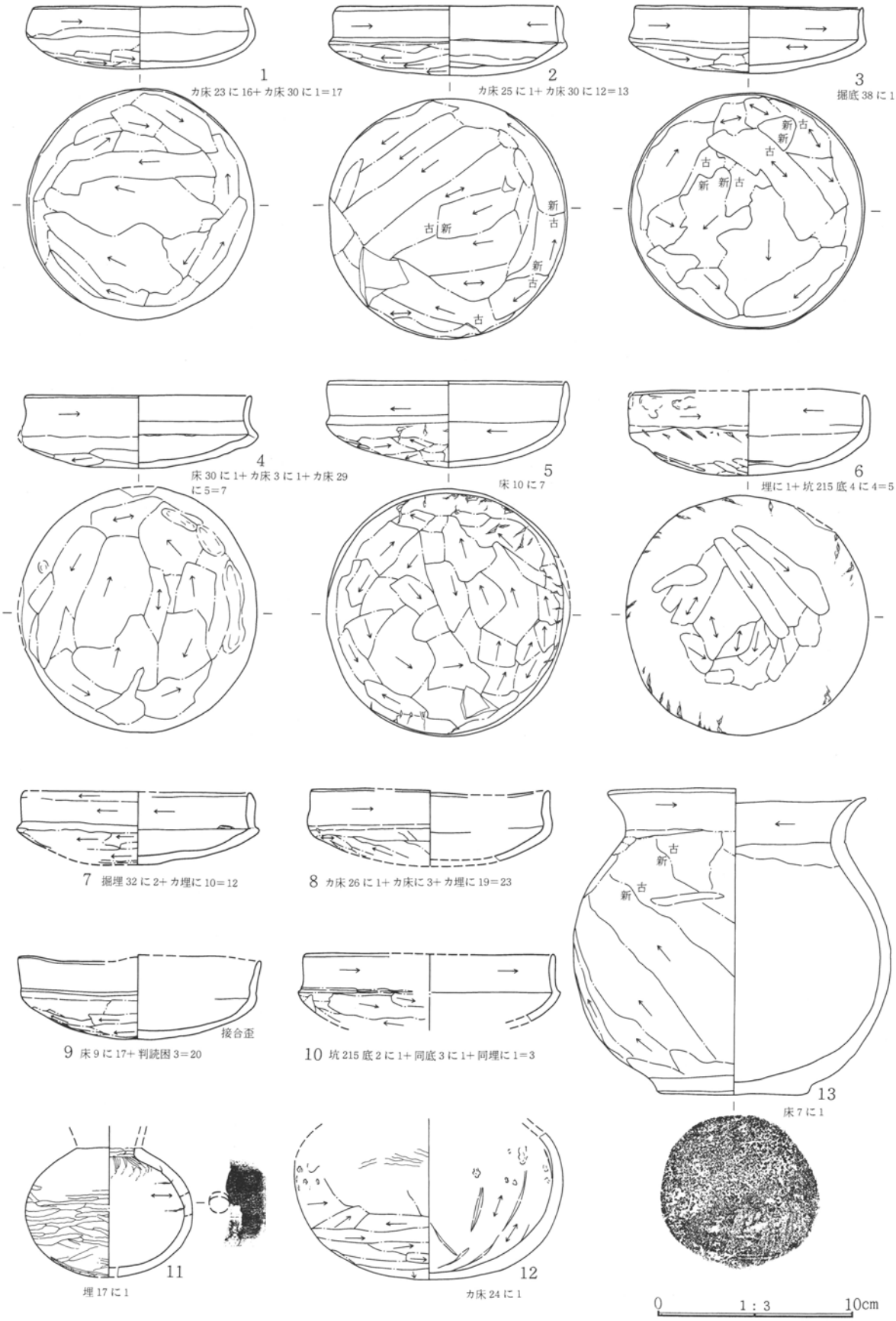
0　1：30　1m

第389図　住居跡138遺構図

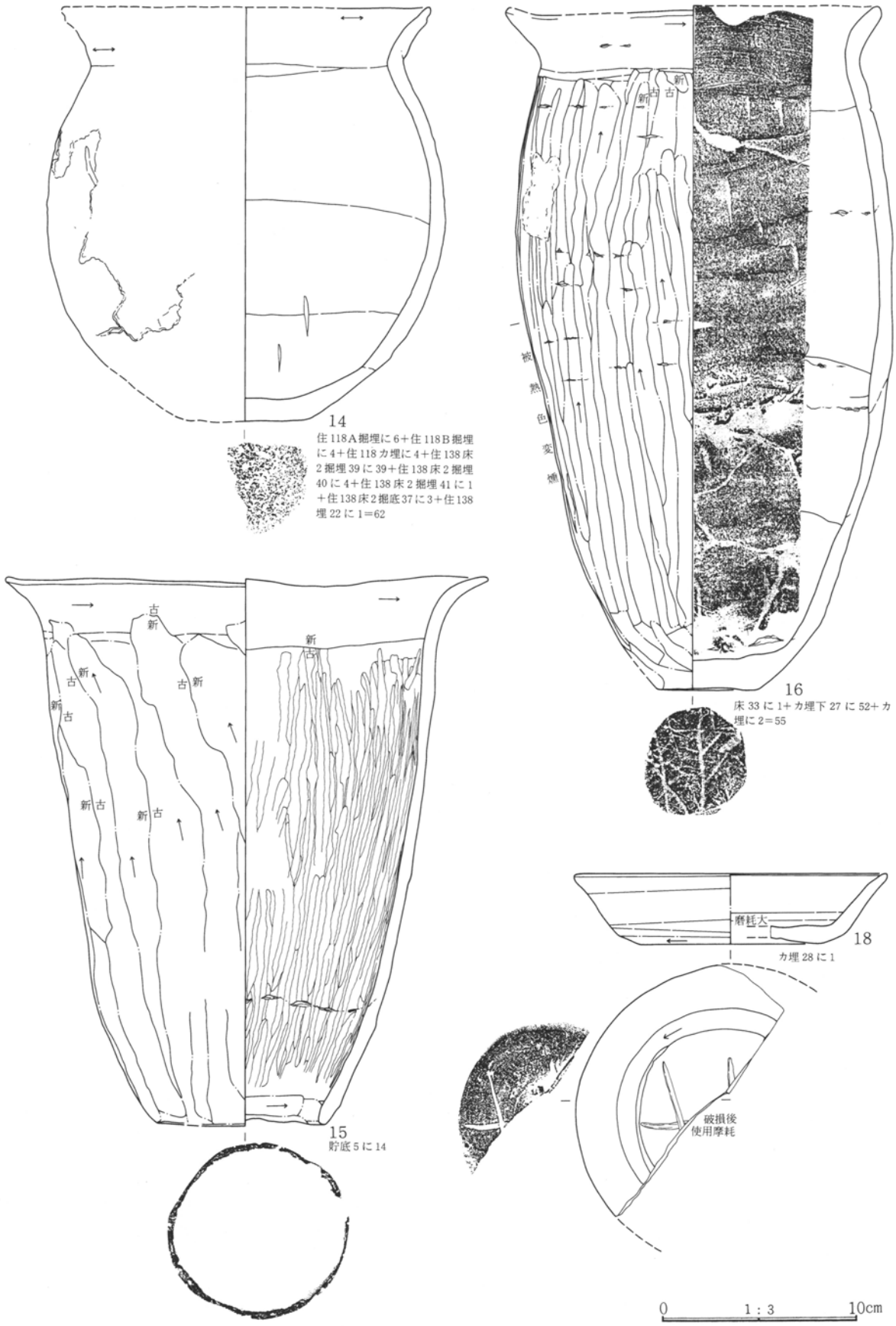
cm、方向は中軸でN21°30′Wを測る。施設としては東壁に竈が、貯蔵穴は通有位置である南東隅でも床面状態は平らで、掘方に至っても整う形の小穴は存在しなかった。床面は上下２面を確認している。下層の床２は部分的であった。掘方は、住居跡144―2が先行するため黒色土相互の分離ができないこととから不明であった。しかし住居跡144―2の掘方を含む最終の掘上り状態では、北半は平ら、南半は20cmほどの深さで不整形に掘り込められていた。竈は竈前に灰層が認められ、竈内から石製用材、土師器坏類の出土があった。遺物は第406図のとおり、８世紀後半頃であり、住居機能もその頃である。

住居跡144―2　（第404・405図、図版73・190）

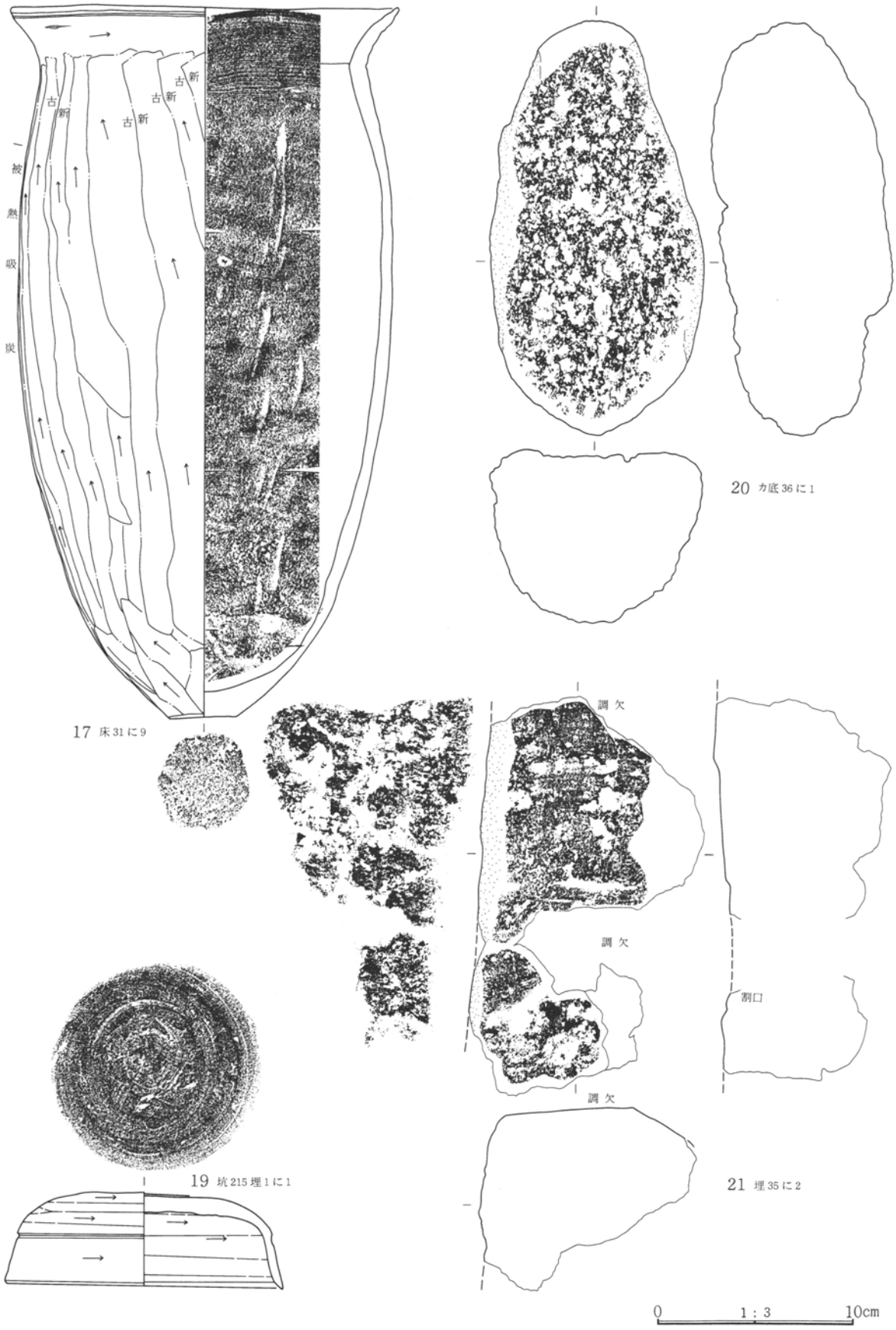
位置はQ大区１171・172にあり、調査面は周囲の住居調査からすればローム漸移層中に相当し、標高は73.3mを当初の掘り下げ面高とした。重複については、後出の住居跡144―1が二重像のようにやや北寄りに重なり、そのほか住居跡125・145が先行してある。規模は、南北で48＋αcm、東西で210cm、方向は住居跡144―1と同様N21°30′W前後と考えられる。施設としては東壁に住居跡144―1とほとんど同位置と推測され、貯蔵穴



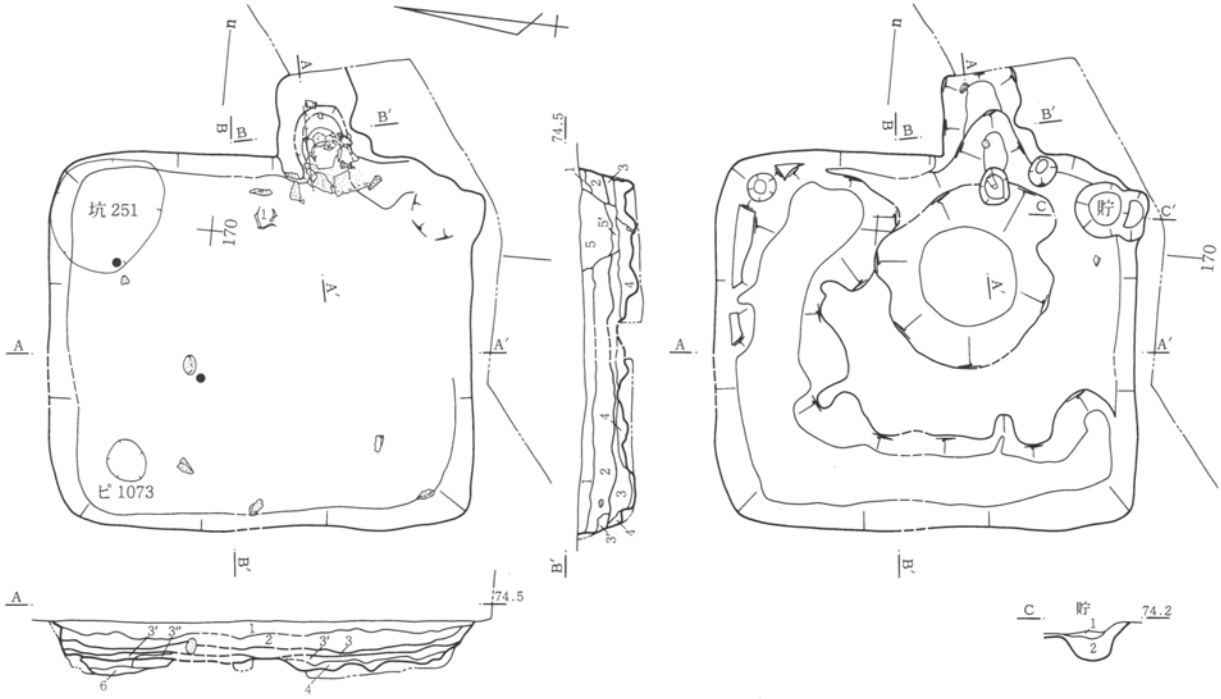
第390図　住居跡138遺物図



第391図　住居跡138遺物図



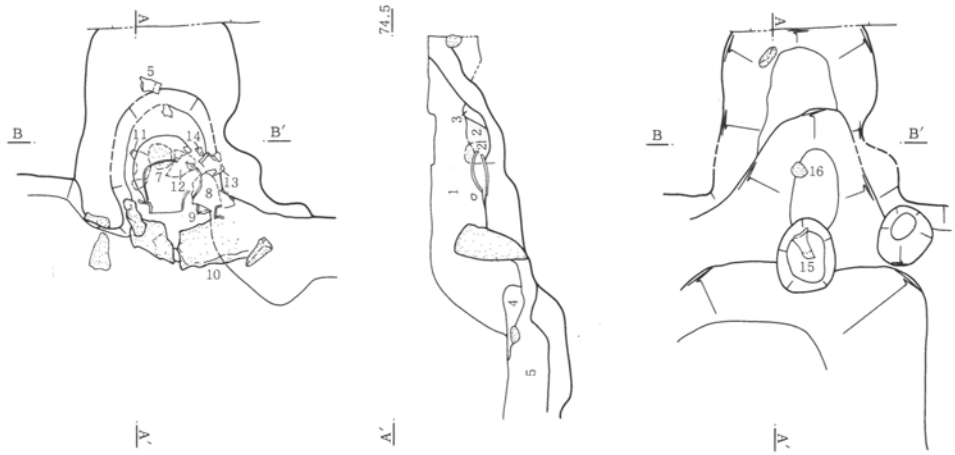
第392図　住居跡138遺物図



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含み、軟。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含み、ローム小ブロック入る。
３、黒褐（10YR3/1）少し還元気味の床層。３″もほぼ同じ。３′は黒褐（10YR3/1)ロームブロックをまじえた床層。締る。
４、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く含む。掘方埋土。
５、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。柱穴埋土。５′はやや締る。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックを含み、締る。床層。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。軟。

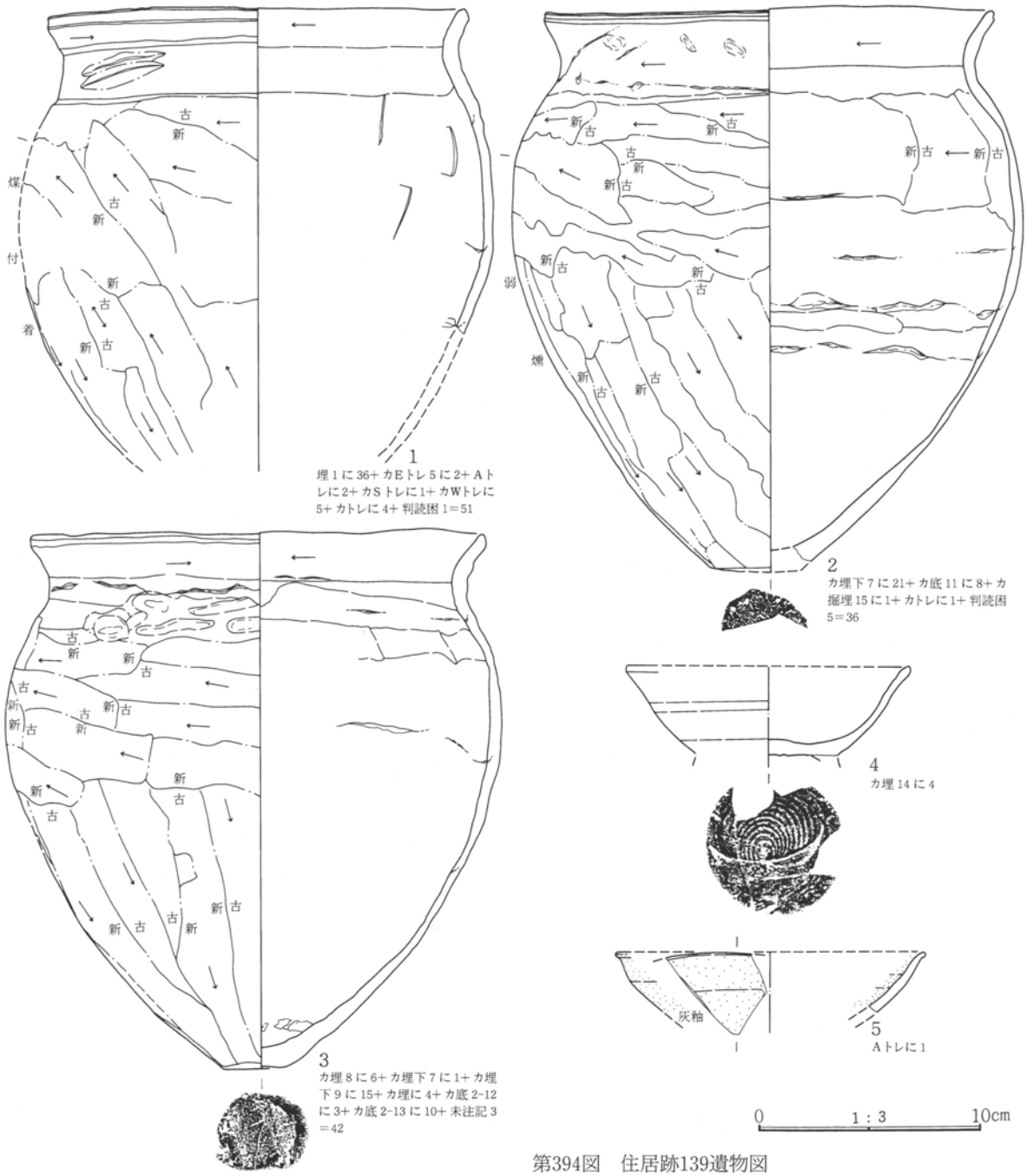
0　1：60　2m



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒まじえる。
２、赤　（10R 5/6）焼土を主とする。２′は少し黒ずむ。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い。
４、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多い。締る。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック大き目を含む掘方埋土。５′はやや締る。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1：30　1m

第393図　住居跡139遺構図

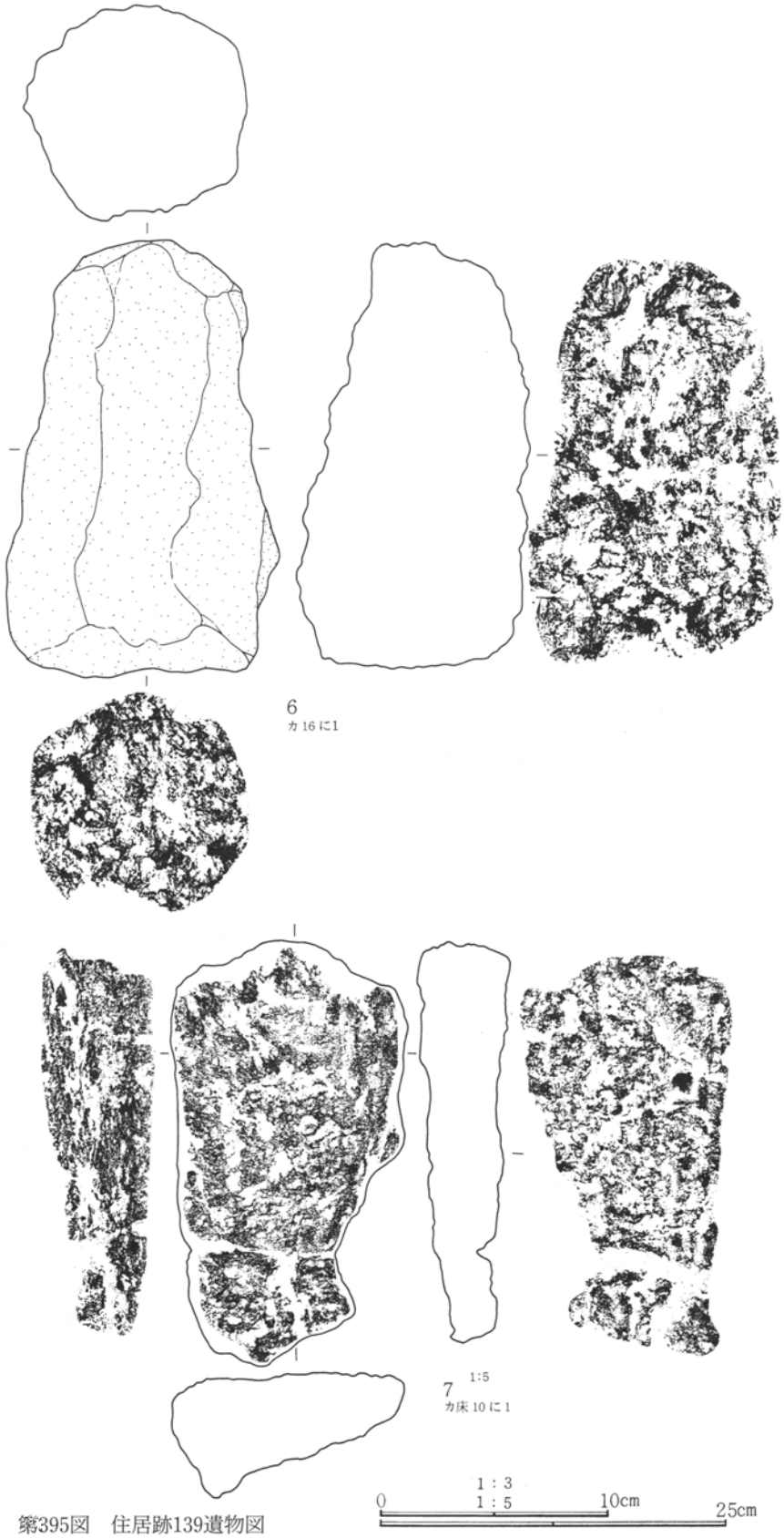


第394図　住居跡139遺物図

は不明瞭。掘方については、南半部を深さ20cm余りで不整形に掘込み、北半は平らであったが、どこまでが住居跡144―1か―2か区分はできなかった。遺物は不明瞭であるが、住居機能時期は、住居形態からすれば後代の住居跡144―1と南半から竈想定位置までが近似のため８世紀代を考えたい。

住居跡145　（第406・407図、図版74・190）

位置はＱ大区kl171・172にあり、調査面は、ローム層上面から漸移層中で標高74.4mである。重複は、住居跡範囲とのものが不明瞭なため推奨できる重さなりを示すことはできない。住居跡範囲は、遺物の多い第406図の南半部を中心に見れば、床面は少し締る程度で範囲を特定できるほどではなかった。西壁側は当初より周壁平面が確められ、それは南から北側１172交点付近まで達していたが、住居跡144の存在で延長は不明で

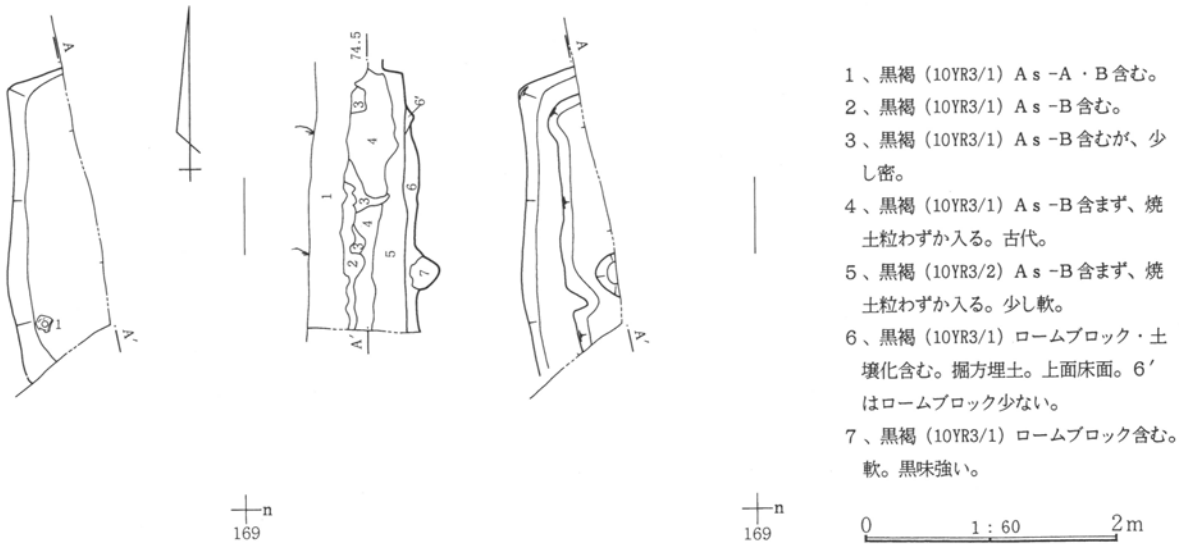


第395図　住居跡139遺物図

あった。床面らしき西を除去した結果、第406図右図のとおりローム層を掘り下げた凹みが見え、調査壁下では貯蔵穴様のピ1235が立上り上面より42cmの深さで見い出されたが、貯蔵穴とした時、竈位置は通有の場合、北東側に存在してよいはずであるが、同図土層断左Ａのとおり、焼土・木炭粒の含有は至近位置でも多くなく、ピ1235を貯蔵穴とするには弱さがある。以上、考えうる範囲で見た規模は、南北で450cm、東西270＋αcm、方向は、西壁を基にすればＮ11～12°Ｗである。遺物は第145図に示したが、同図１は10世紀中頃の椀で、住居機能があればその頃であろう。

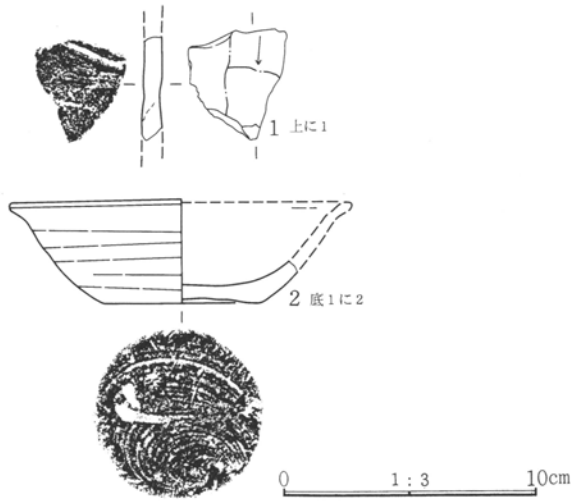
住居跡146　（第408・409・410・411図、図版74・191）

位置はＱ大区op170にあり、調査面はローム漸移層74.3m。重複は坑246、ピ1060・1062、溝跡87が後出する。規模は南北507cm、東西120＋αcm、深さは掘方面まで約40cm、方向は西壁でＮ5°Ｗを測る。施設として掘方において西壁下が段下りとなり、壁下周溝が設けられていた。掘方には床面でまとまりのあった紡垂状石材の一端がさらに及んであった。遺物第409～411に掲たとおり、こも編石と思われる石材が多数出土している。同石材の多くは磨耗痕や浅い敲打痕が見られた



１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ・Ｂ含む。
２、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。
３、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含むが、少し密。
４、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含まず、焼土粒わずか入る。古代。
５、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ｂ含まず、焼土粒わずか入る。少し軟。
６、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・土壌化含む。掘方埋土。上面床面。６′はロームブロック少ない。
７、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。軟。黒味強い。

第396図　住居跡140遺構図



第397図　住居跡140遺物図

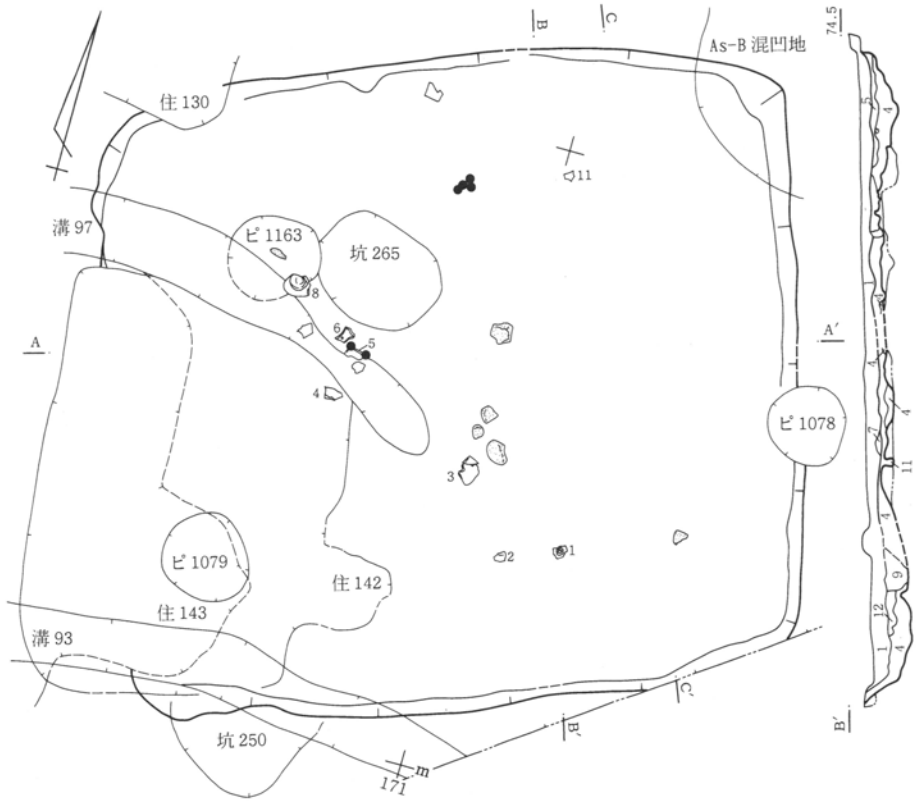
が編物を行なう際に消耗や相互のぶっかり合いなどによって生じたものか明らかではないが、今後の研究のために全量を示めした。遺物の時期は、第409図１が８世紀後半の個体であるものの埋土のため住居機能時と直結とは云えないが、住居平面の直線的な長辺や周溝を掘方に残す点などからすれば、その頃であっても良いと思われる。

住居跡147―1　（第412・413・414・415図、図版74・191・192）

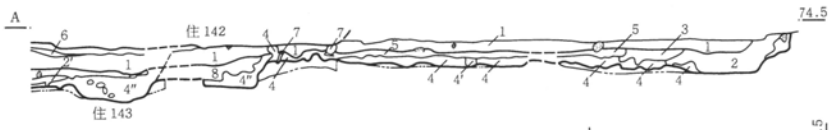
位置は、Ｑ大区no173・174にあり、調査面はローム漸移層中標高74.4mである。重複は住居跡117・118に切られる。先行して直下に倒木がある。住居跡は都合４軒の重さなりがあり、住居跡147―1・同147―2、竈跡Ａ・Ｂである。このうち住居跡147―1・同―2とは同―2が新しく、住居跡147―1と竈跡Ａ・Ｂとでは竈跡の方が後出してある。住居跡147―1の規模は、南北304cm、東西220＋αcm、方向性はＮ22°Ｗを測る。施設として東壁に取り付いてよいはずの竈跡は、見当らず貯蔵穴についても竈跡Ａの重さなりのため不明であった。掘方では、住居跡147の床下坑と考えられそうな位置の土坑を掘方図中に加えた。竈跡が未出であった点は、時おり、住居跡床面より竈掘方底面の方が低い場合があるため、無かったとも云い切れない。

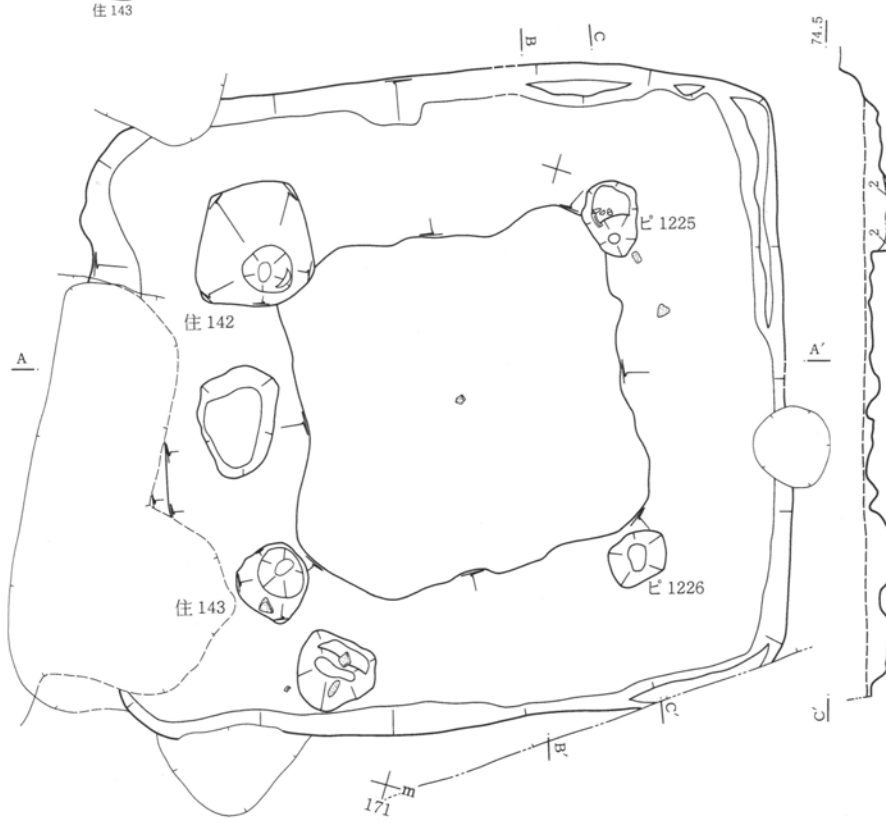
住居跡147―2　（第412・413・414・415図、図版74・191・192）

位置は、Ｑ大区no173・174にあり、調査面ローム漸移層中標高74.4mである。重複は前述のとおり、住居跡147―1とは同―1が先行してあり、竈跡Ａ・Ｂとは不明であるが、どちらかの竈跡が住居跡147―2に取り付く可能も考えられなくもないが、平面位置関係を見ると住居跡147―2の東壁走行と両竈位置とは、竈位置の方が、わずか西に片寄り過ぎに見える。住居跡147―2の貯蔵穴も不明瞭であった。規模は南北181＋αcm、東西89＋αcm、方向は東壁でＮ0°30′Ｗを測る。



1、黒褐（10YR3/1）軽石含む。木炭・焼土粒わずか含む。1′は質差なし。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを多く含み、軟。2′は締る。
3、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化。
4、黄橙（10YR5/8）ロームブロック・土壌化を主とする。黒褐ブロックも多い。4′は黒褐色ブロック。4″は締る。
5、灰黄褐（10YR4/2）黒褐とローム土壌化とのまじり。締る。床層。
6、黒褐（10YR3/1）1層とほぼ同じ。締る。床層。
7、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロックを主とする。
8、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。還元気味の床層。締る。
9、未注記
11、黒褐（10YR3/1）動物の生活に伴う穴か。
12、黒褐（10YR3/1）ローム粒わずか含む。軟。

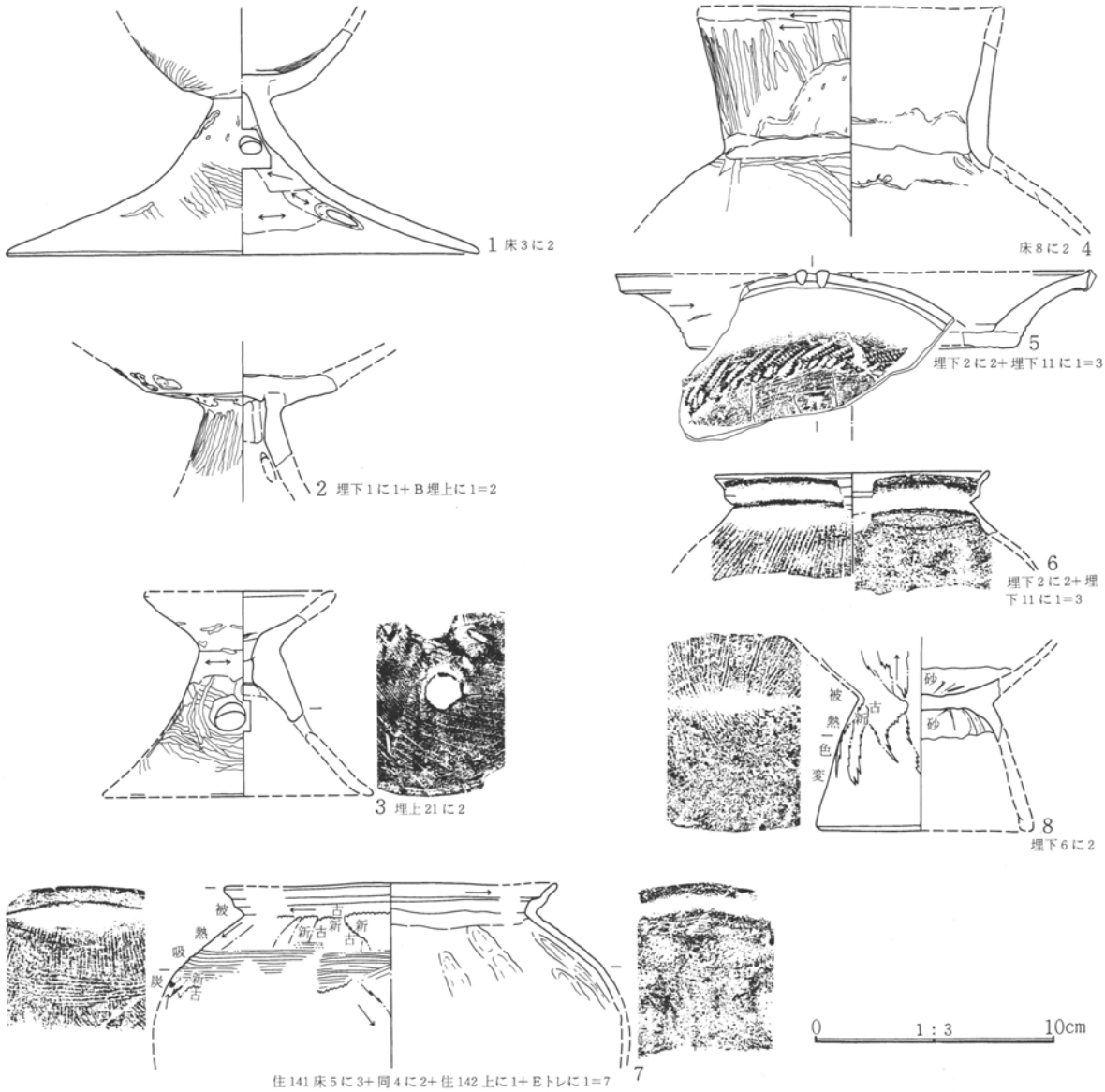




1、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック含む。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。
3、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。少し締る。
4、黄褐（10YR5/6）ローム漸移層的。少し締る。
5、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。少し締る。

0　1：60　2m

第398図　住居跡141遺構図

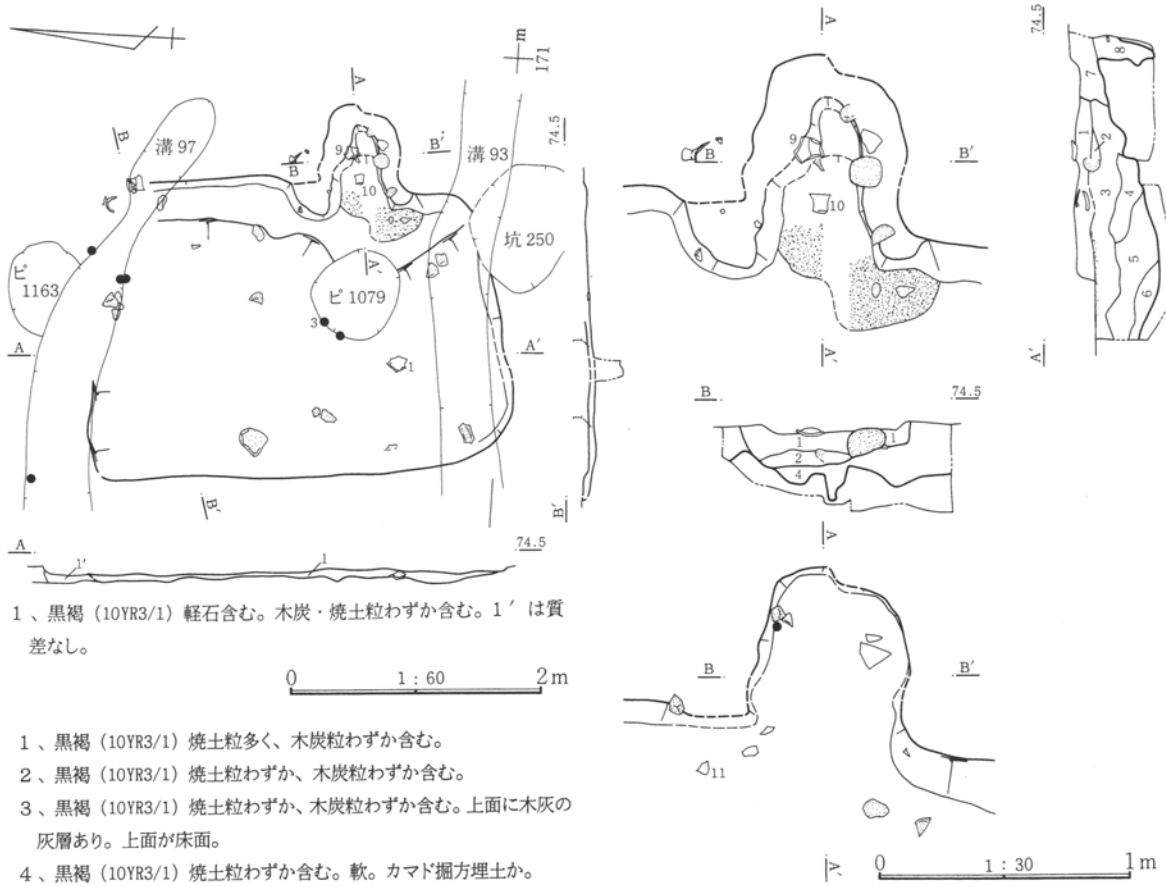


第399図　住居跡141遺物図

住居跡147竈Ａ・Ｂ　（第412・413・414・415図、図版77・191・192）

位置は、Ｑ大区no173･174にある。調査面はローム層漸移標高74.45mである。調査時点で別住居番号を付けず、どちらかが住居跡147―2の竈となるかもしれない可能性も無番とした一因でもあった。そのことについて住居跡147―1･2を含めて都合４軒の重さなりを考えた方が自然のように思えた。重複について竈跡Ａ・Ｂは切り合っており、新古の割り出しに務めたが、結論を出せなかった。第413図竈Ａ･Ｂともに軟質凝灰岩による竈用材が同Ａでは右袖らしき位置に直立し、同Ｂの埋土中にも存在していた。

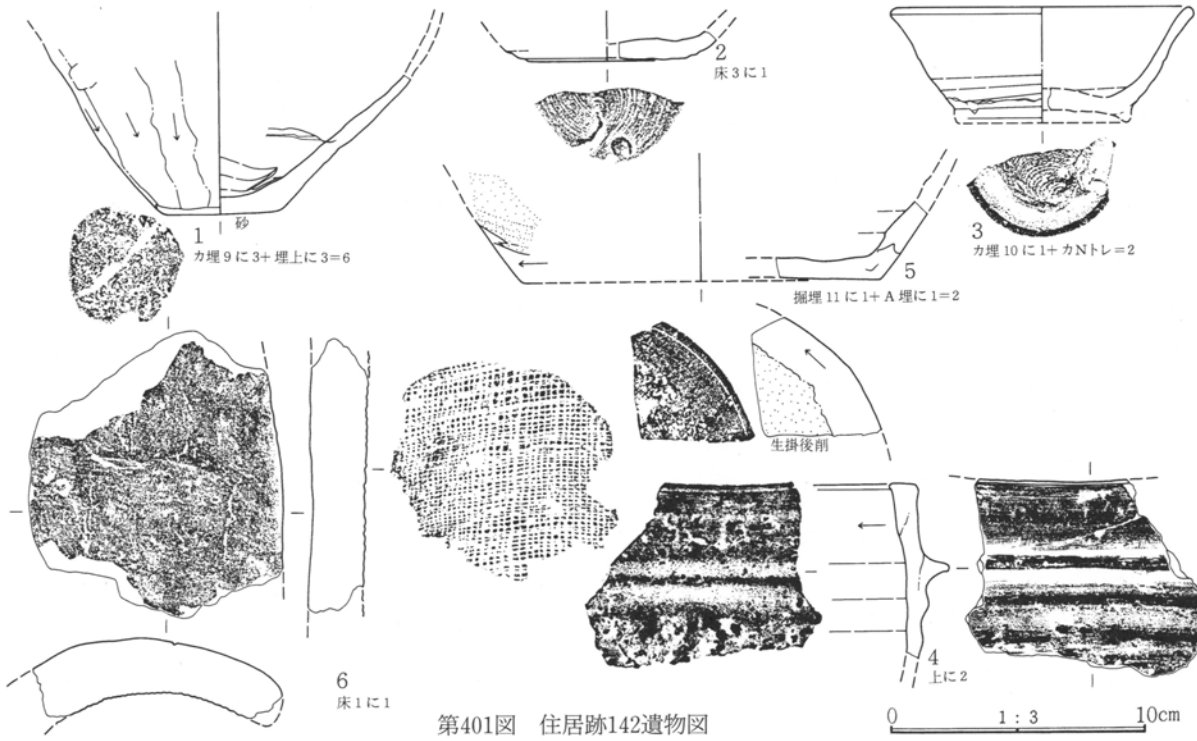
遺物について第415・415図に掲げた。同図４は10世紀初頭前後の坏で、住居跡147―1の掘方埋土の出土である。竈Ａ掘方埋土の同図２は９世紀末前後、竈Ｂ掘方埋土の同図１は９世紀末前後、竈Ｂ掘方埋土の同図３は９世紀代頃の製品と考えられる。第415図５は住居跡147―1床と竈Ｂ埋土と住居跡118の埋土出土でともに少数片でどの住居に起因するのか不明瞭であるが、時期的には10世紀代の製品である。同図９は竈Ａ右袖の平面正方形気味の石材である。



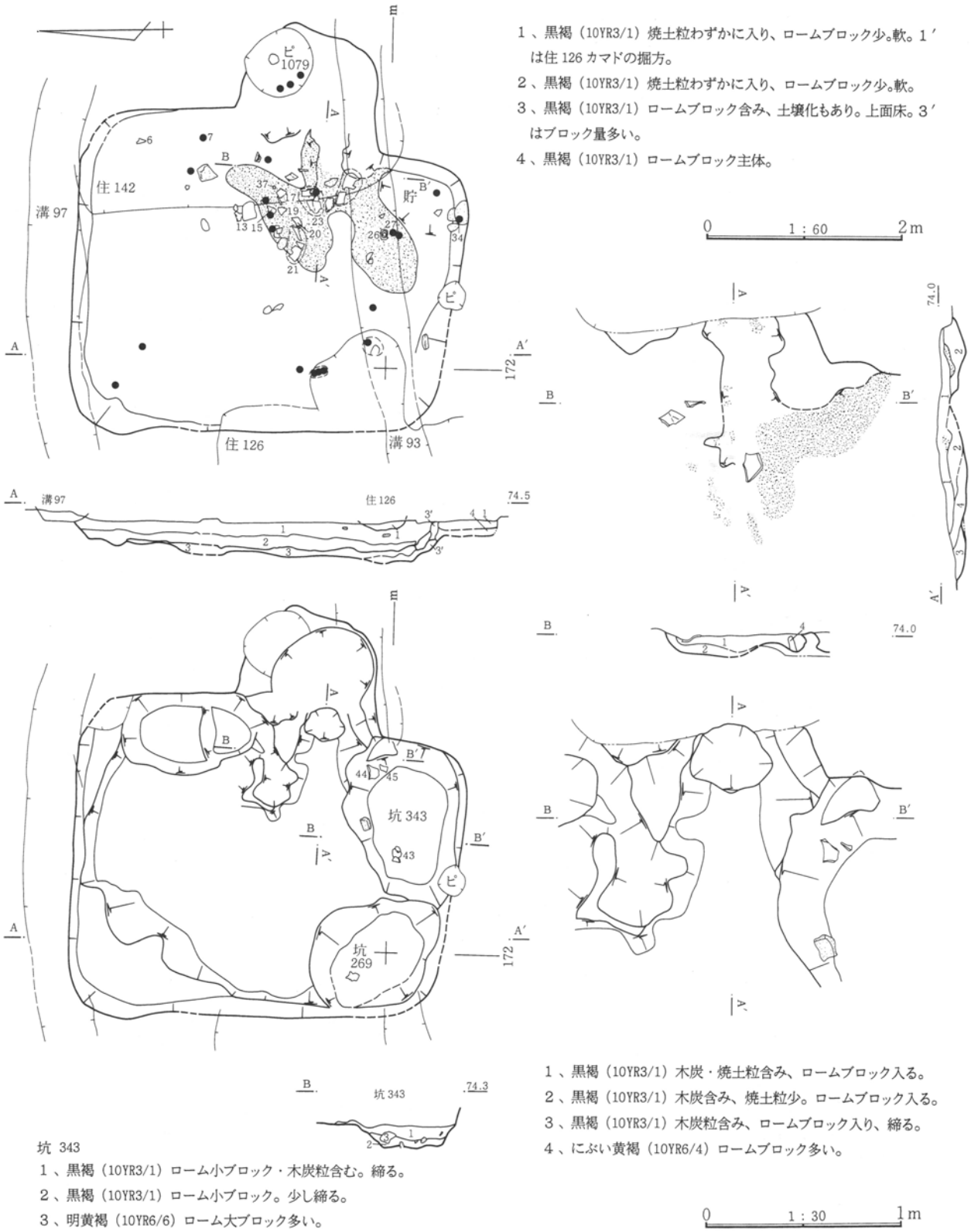
1、黒褐（10YR3/1）軽石含む。木炭・焼土粒わずか含む。1′は質差なし。

1、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、木炭粒わずか含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか、木炭粒わずか含む。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか、木炭粒わずか含む。上面に木灰の灰層あり。上面が床面。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。軟。カマド掘方埋土か。
5、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず、木炭粒も見えず。ロームブロック多く含む。
6、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化入り、わずか木炭粒入る。
7、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず、他もまじえず。
8、黒褐（10YR3/1）７層より黒味強い。

第400図　住居跡142遺構図



第401図　住居跡142遺物図



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずかに入り、ロームブロック少。軟。１′は住 126 カマドの掘方。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずかに入り、ロームブロック少。軟。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、土壌化もあり。上面床。３′はブロック量多い。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロック主体。

0　1：60　2m

１、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、ロームブロック入る。
２、黒褐（10YR3/1）木炭含み、焼土粒少。ロームブロック入る。
３、黒褐（10YR3/1）木炭粒含み、ロームブロック入り、締る。
４、にぶい黄褐（10YR6/4）ロームブロック多い。

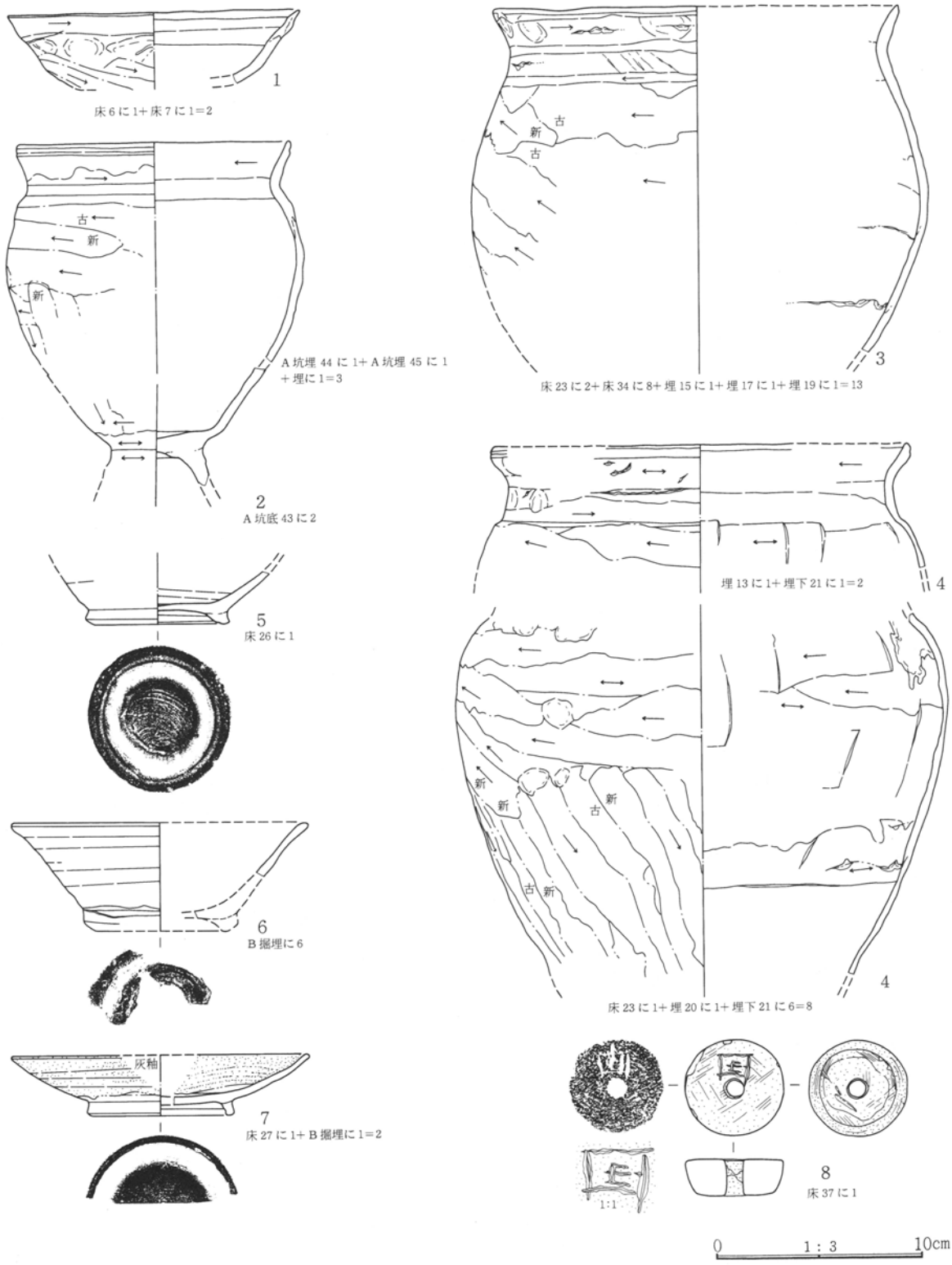
0　1：30　1m

坑 343
１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・木炭粒含む。締る。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック。少し締る。
３、明黄褐（10YR6/6）ローム大ブロック多い。

第402図　住居跡143遺構図

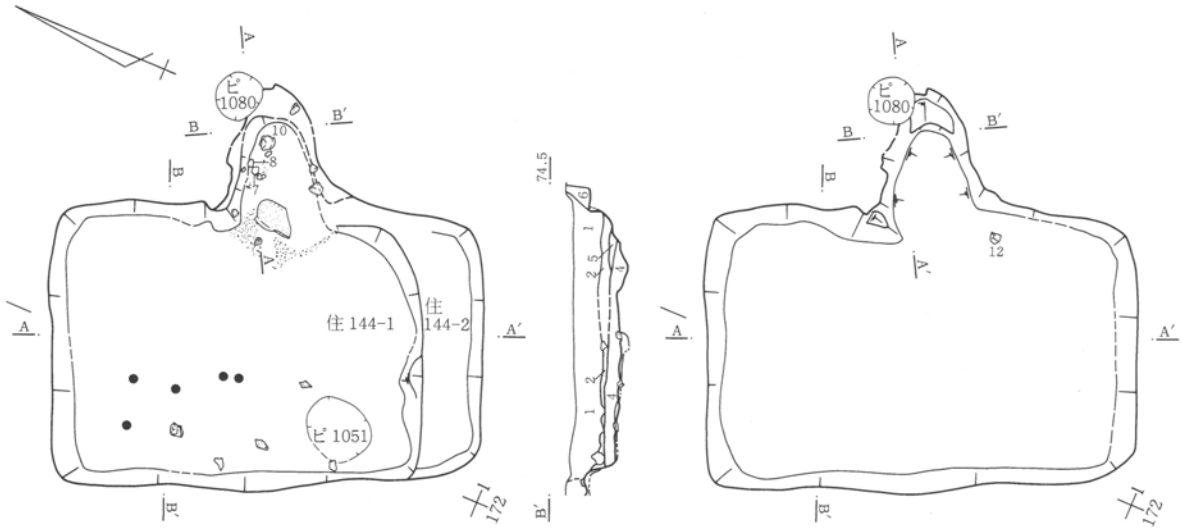
住居跡148　（第416・417図、図版75・192）

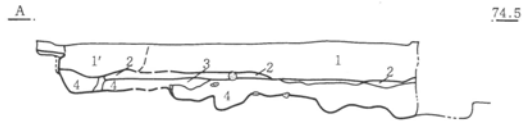
位置はＱ大区kl172･173にあり、調査面はローム層上面標高74.5mである。重複は溝跡104が先行してある。規模は南北311cm、東西267cm、方向は中軸でＮ4°Ｗを測る。施設として東壁に竈が取り付くが、貯蔵穴は不明



第403図　住居跡143遺物図

瞭、掘方については南半に溝状の凹みが見られた。床面は第416図土層注１のようにA_s－B混りの土層が床層である注２直上まで存在し、上部床層は既に削平化を受けていたと考えられ、そのことにより、貯蔵穴も失なわれたとも推測される。竈跡は上層を失ない掘方に近い状態で、竈左図は近発見時、右図は掘方である。遺物は第417図を掲げたがともに小片で、９世紀代の土師器であり、住居機能もその頃と見てよいであろう。





１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多い。木炭粒入る。１′は各々入らない。

２、黒褐（10YR3/1）少し還元気味の床層。木炭粒入る。

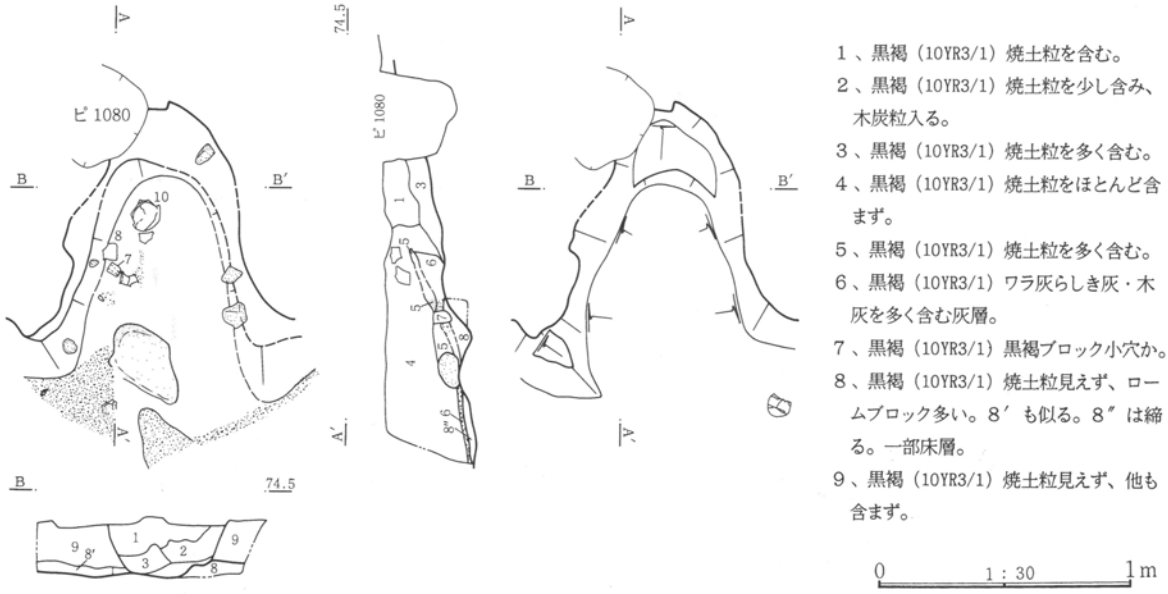
３、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックの細粒多く、木炭・焼土粒入る。

４、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・細粒とも多く、焼土・木炭粒含む。掘方埋土。

５、黒褐（10YR3/1）４よりロームブロック量多い。

６、黒褐（10YR3/1）住163埋土。住125埋土。

0　1：60　2m



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒を含む。

２、黒褐（10YR3/1）焼土粒を少し含み、木炭粒入る。

３、黒褐（10YR3/1）焼土粒を多く含む。

４、黒褐（10YR3/1）焼土粒をほとんど含まず。

５、黒褐（10YR3/1）焼土粒を多く含む。

６、黒褐（10YR3/1）ワラ灰らしき灰・木灰を多く含む灰層。

７、黒褐（10YR3/1）黒褐ブロック小穴か。

８、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず、ロームブロック多い。８′も似る。８″は締る。一部床層。

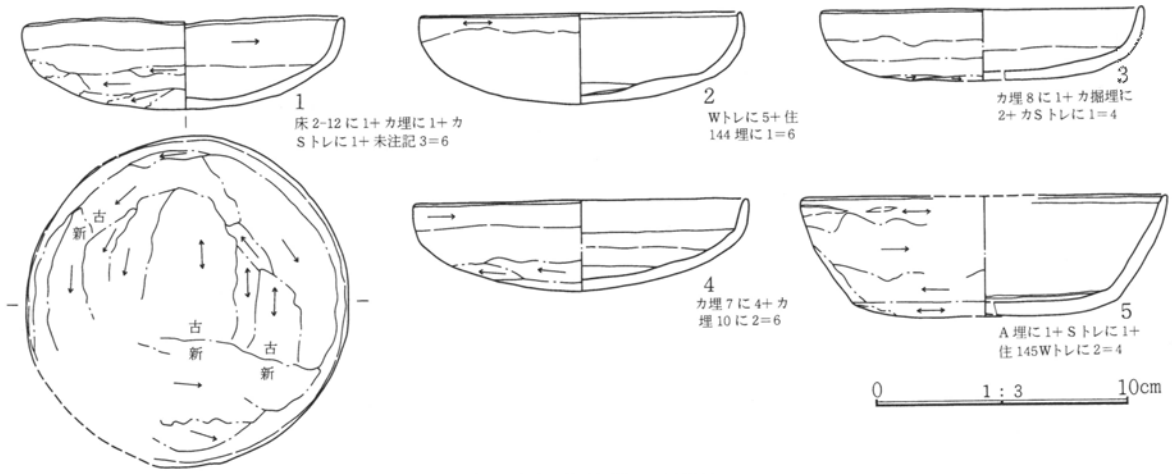
９、黒褐（10YR3/1）焼土粒見えず、他も含まず。

0　1：30　1m

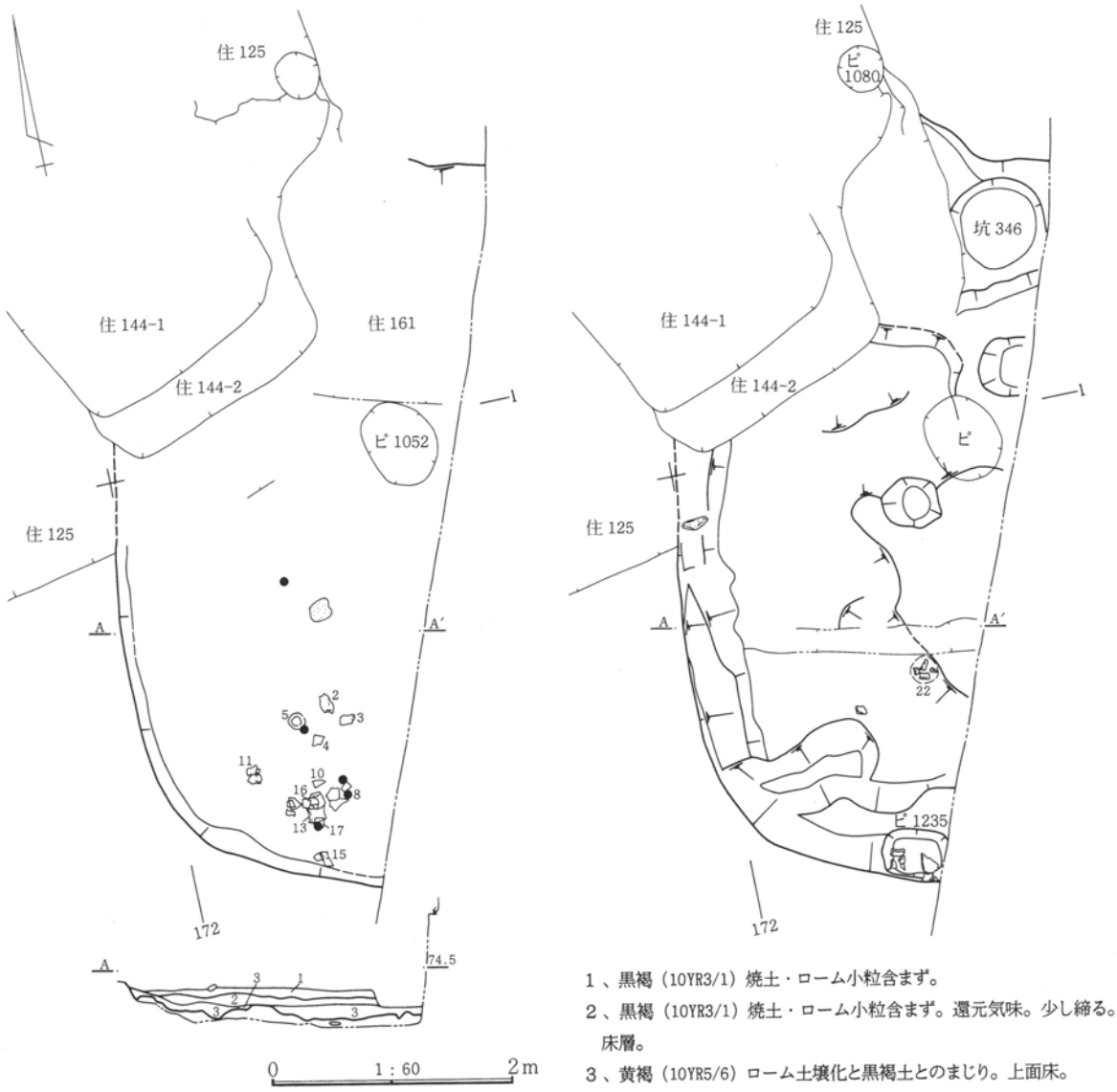
第404図　住居跡144―１・２遺構図

住居跡149　（第418・419図、図版75・192）

位置はＱ大区kl175、調査面はローム層上面標高74.25m。重複は住居跡154―2、坑241、ピ1174・1176・1177・1178・1175・1213が後出。規模は南北470cm、東西483cm、方向N6°45′Wを測る。施設に炉跡は不明、北西隅に貯蔵穴、北東に底面標高73.98m同凝似が。掘方で中央を高めに溝状の床下構造、柱穴は南西柱穴のほか、調査時点で床上面半欠のため、後出重複としたピ1174、ピ1177（底標高73.95m）、北西の凹み（底同74.06m）も柱穴として考えて良いであろう。遺物は第419図のとおり、古墳時代前期で、住居機能も同期。



第405図　住居跡144遺物図

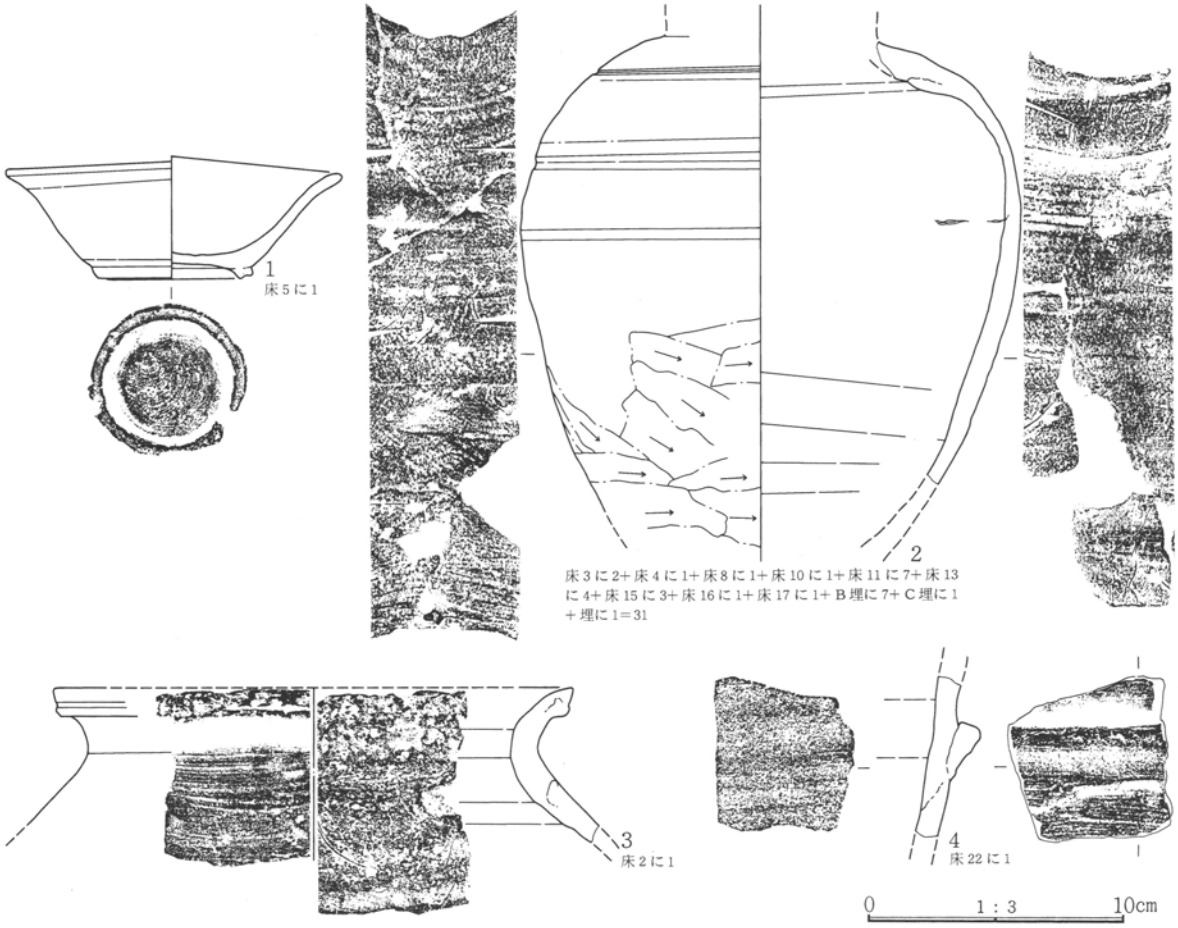


1、黒褐（10YR3/1）焼土・ローム小粒含まず。
2、黒褐（10YR3/1）焼土・ローム小粒含まず。還元気味。少し締る。床層。
3、黄褐（10YR5/6）ローム土壌化と黒褐土とのまじり。上面床。

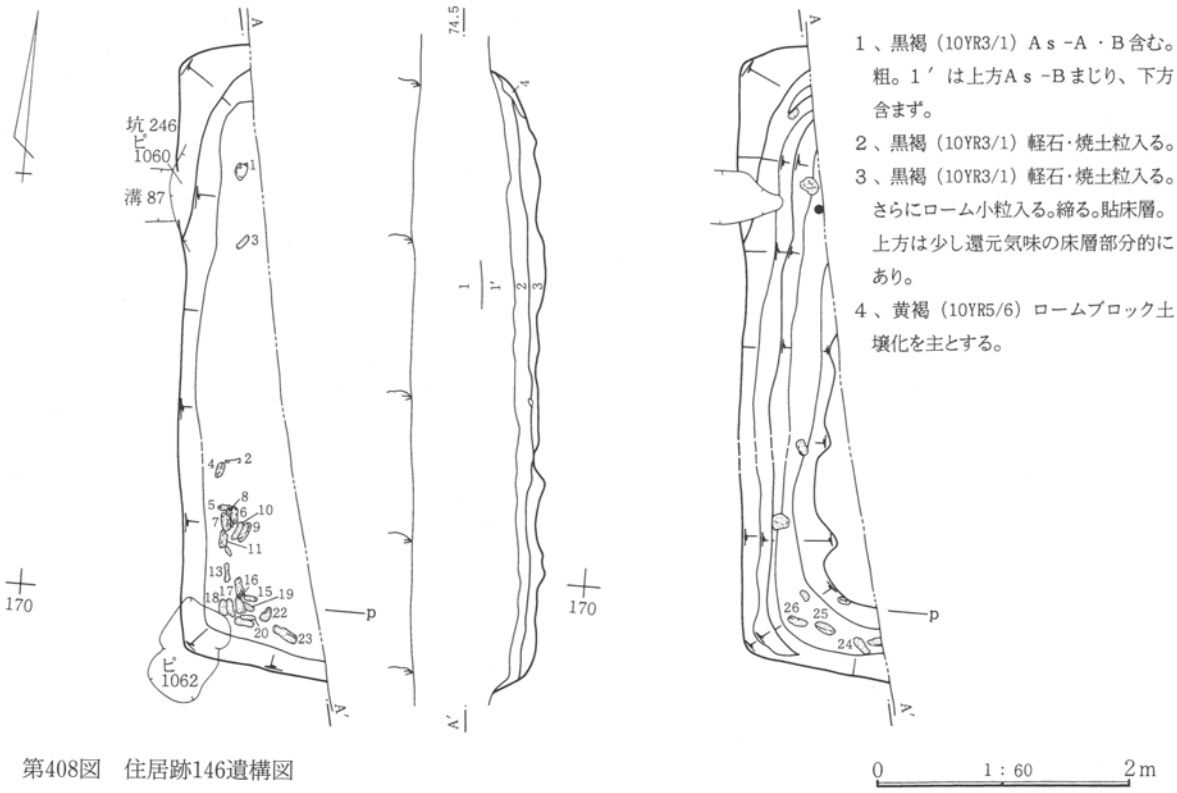
第406図　住居跡145遺構図

住居跡150　（第420・421図、図版75・192）

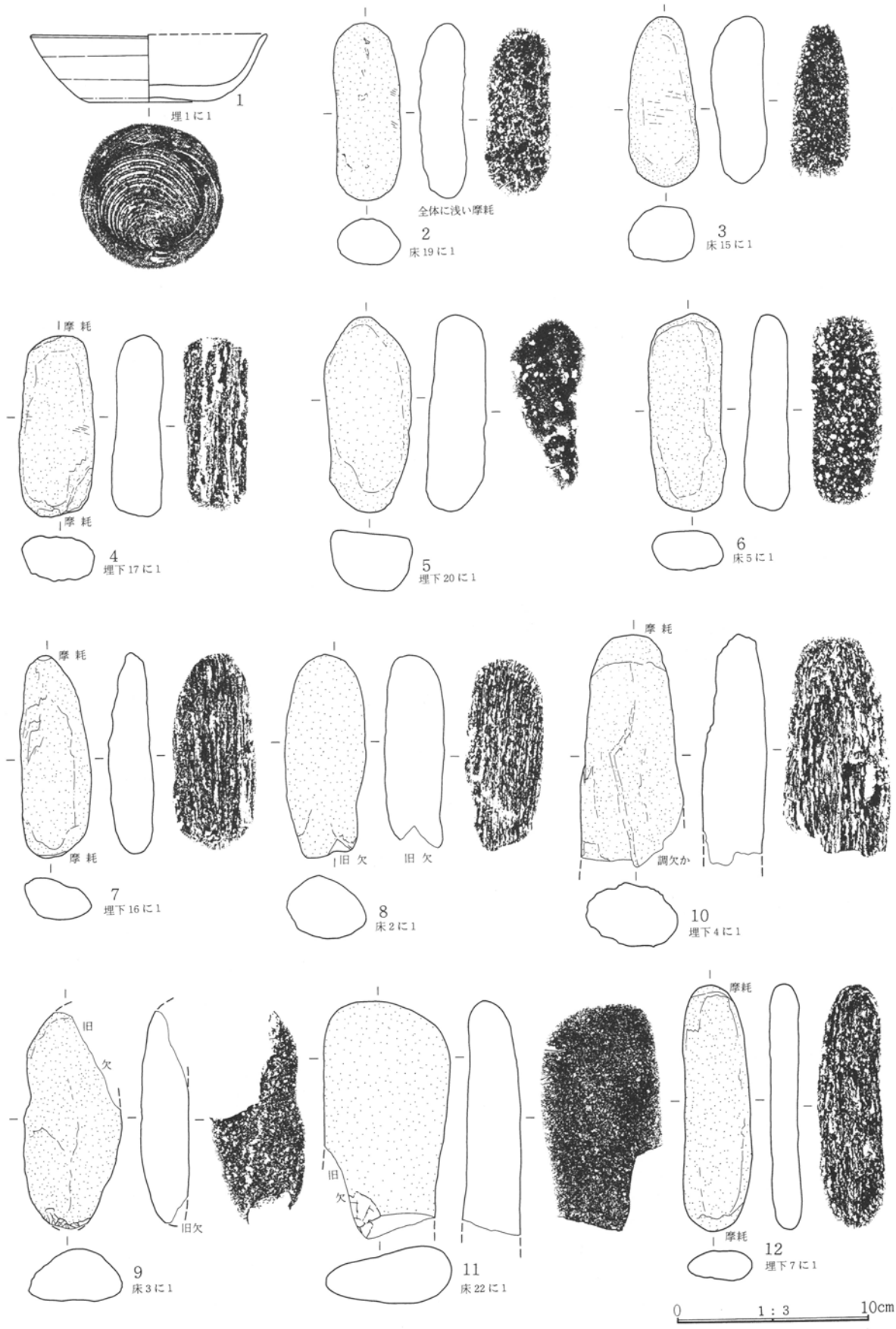
位置はQ大区jk173、調査面はローム漸移層標高74.5m。重複は、坑278・281、ピ1146・1148が後出。規模



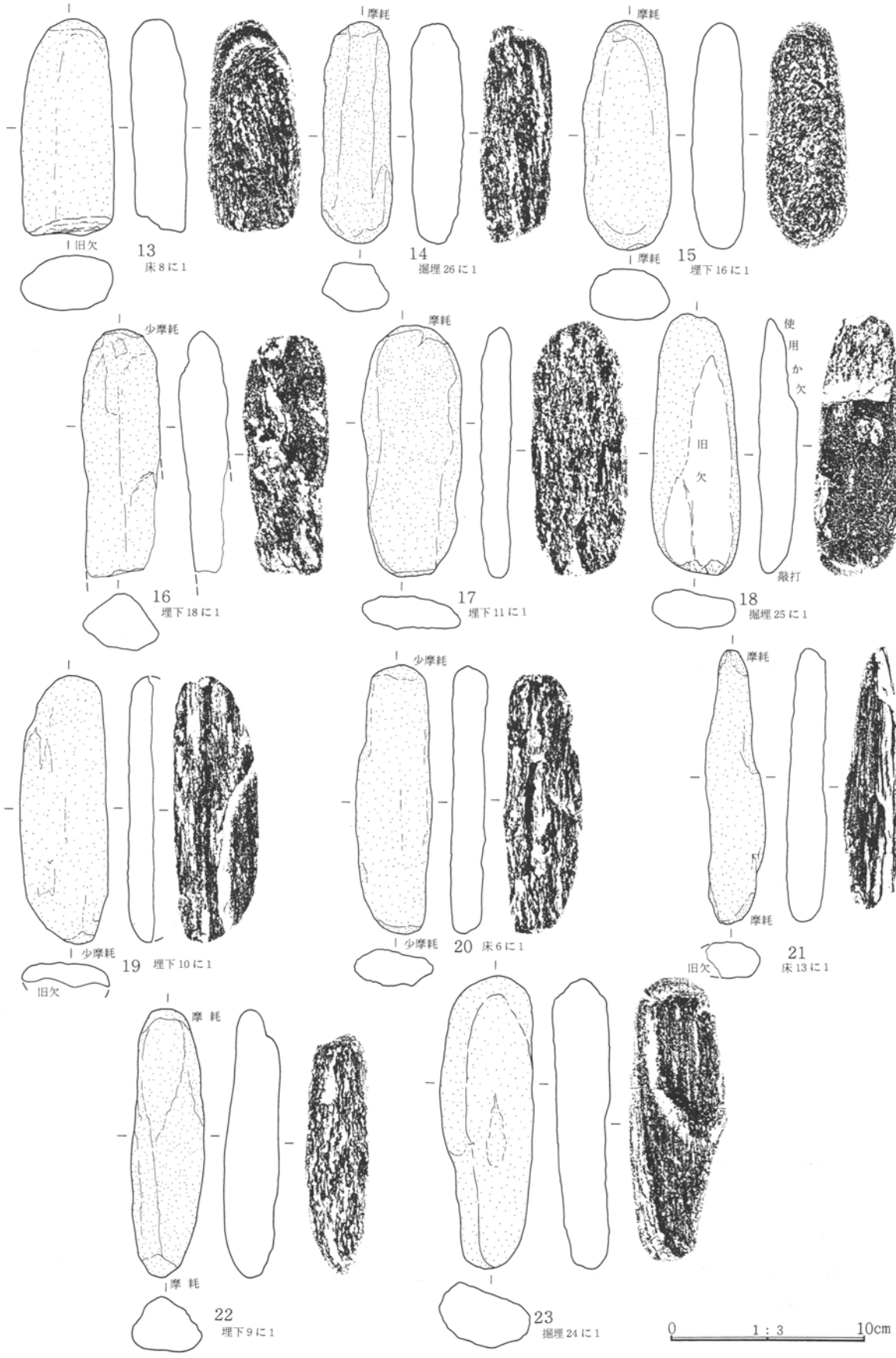
第407図　住居跡145遺物図



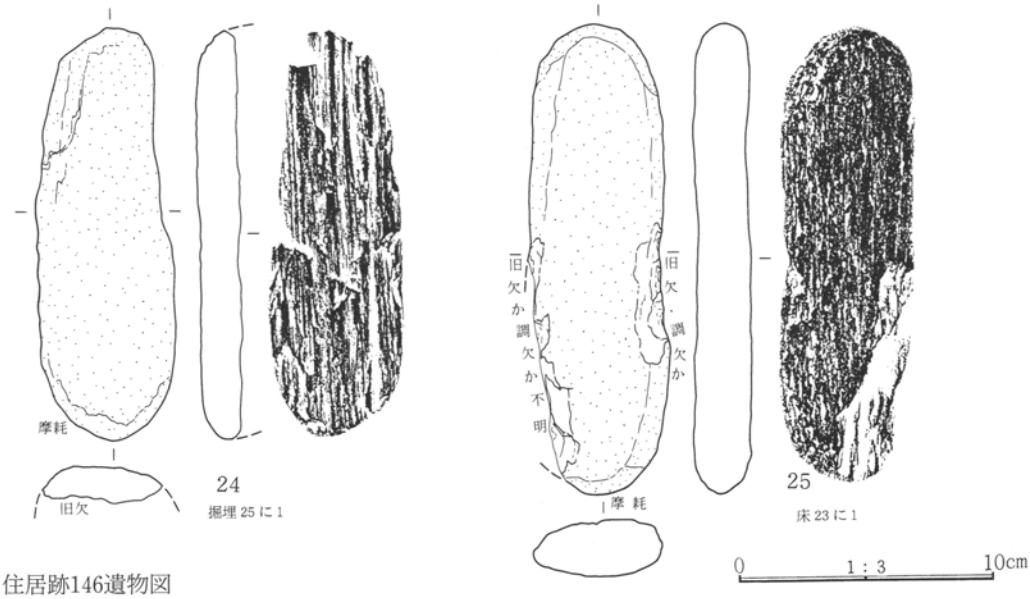
第408図　住居跡146遺構図



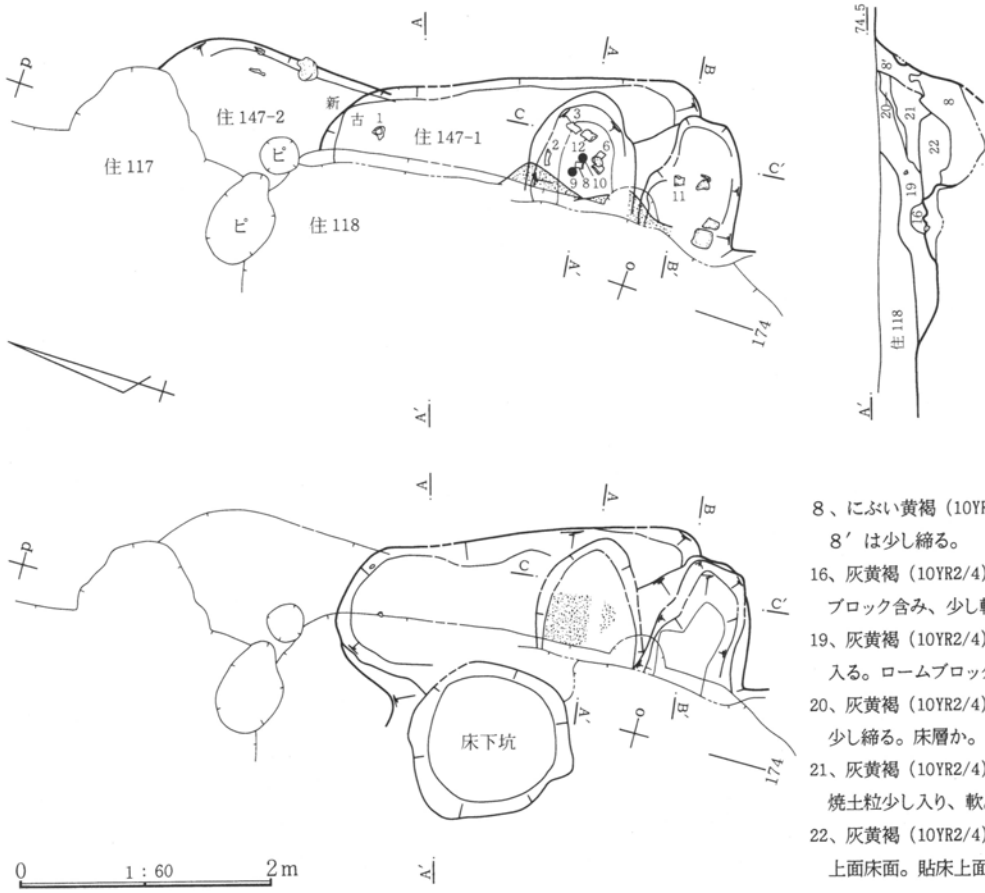
第409図　住居跡146遺物図



第410図　住居跡146遺物図



第411図　住居跡146遺物図

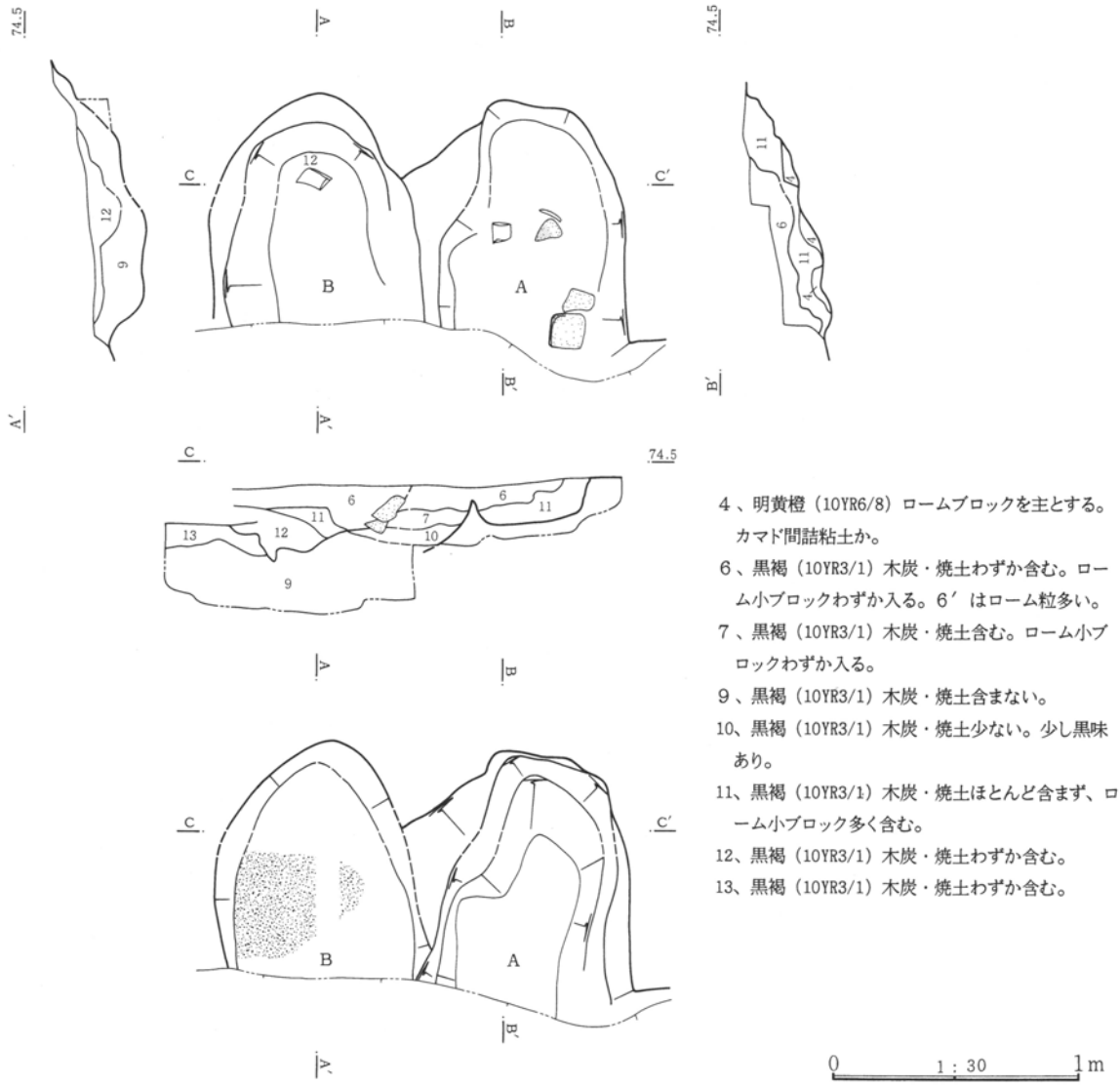


8、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移的。8′は少し締る。
16、灰黄褐（10YR2/4）ローム漸移的。黒褐ブロック含み、少し軟らか。床下層。
19、灰黄褐（10YR2/4）焼土粒含み、木炭粒入る。ロームブロック少。
20、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック入らず、少し締る。床層か。
21、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック入らず、焼土粒少し入り、軟。住居掘方か。
22、灰黄褐（10YR2/4）ロームブロック含む。上面床面。貼床上面。

第412図　住居跡147―１・２遺構図

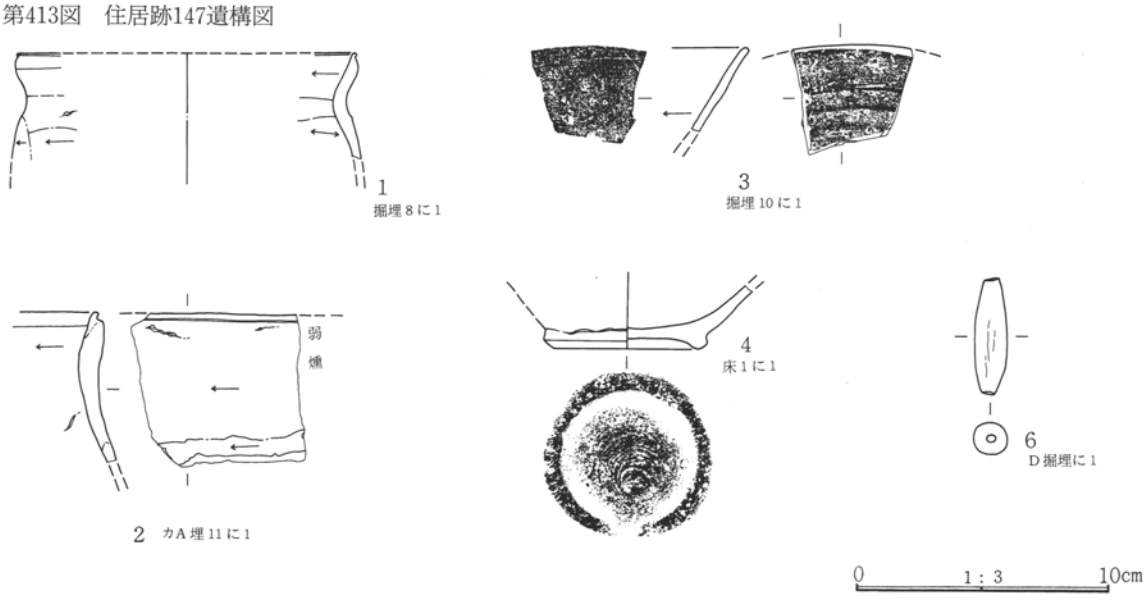
は南北436cm、東西326cm、方向は中軸でN7°W。施設は東壁に竈、南側に貯蔵穴、掘方で貯蔵穴底標高73.97と73.81の新旧に思える貯蔵穴、東壁に建替え示唆の周壁下段差、床下坑がある。遺物は第421図のとおり８世紀後半で、住居機能も同期。

住居跡151　（第422・423図、図版76・192）

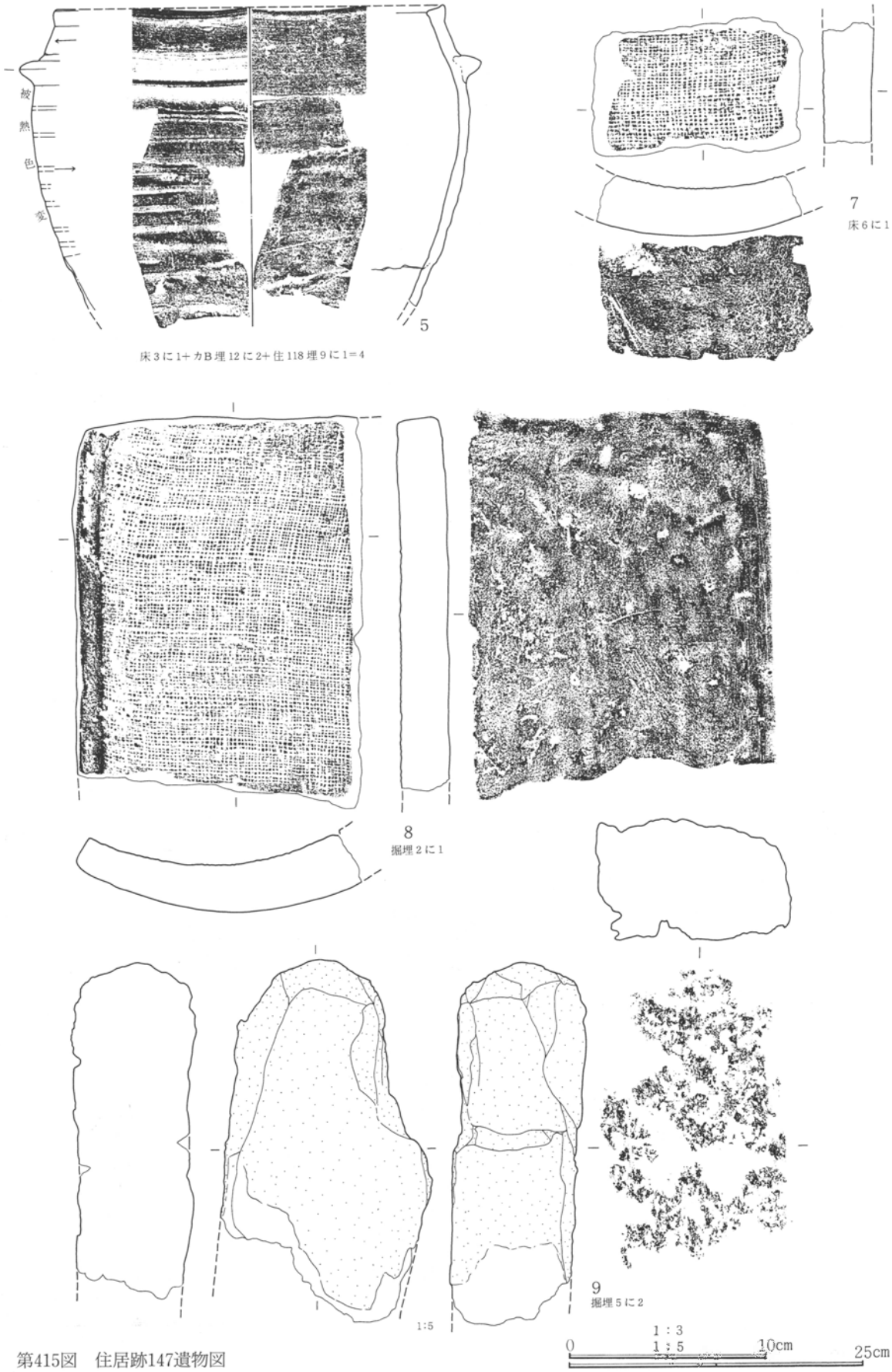


４、明黄橙（10YR6/8）ロームブロックを主とする。カマド間詰粘土か。
６、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土わずか含む。ローム小ブロックわずか入る。６′はローム粒多い。
７、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土含む。ローム小ブロックわずか入る。
９、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土含まない。
10、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土少ない。少し黒味あり。
11、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土ほとんど含まず、ローム小ブロック多く含む。
12、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土わずか含む。
13、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土わずか含む。

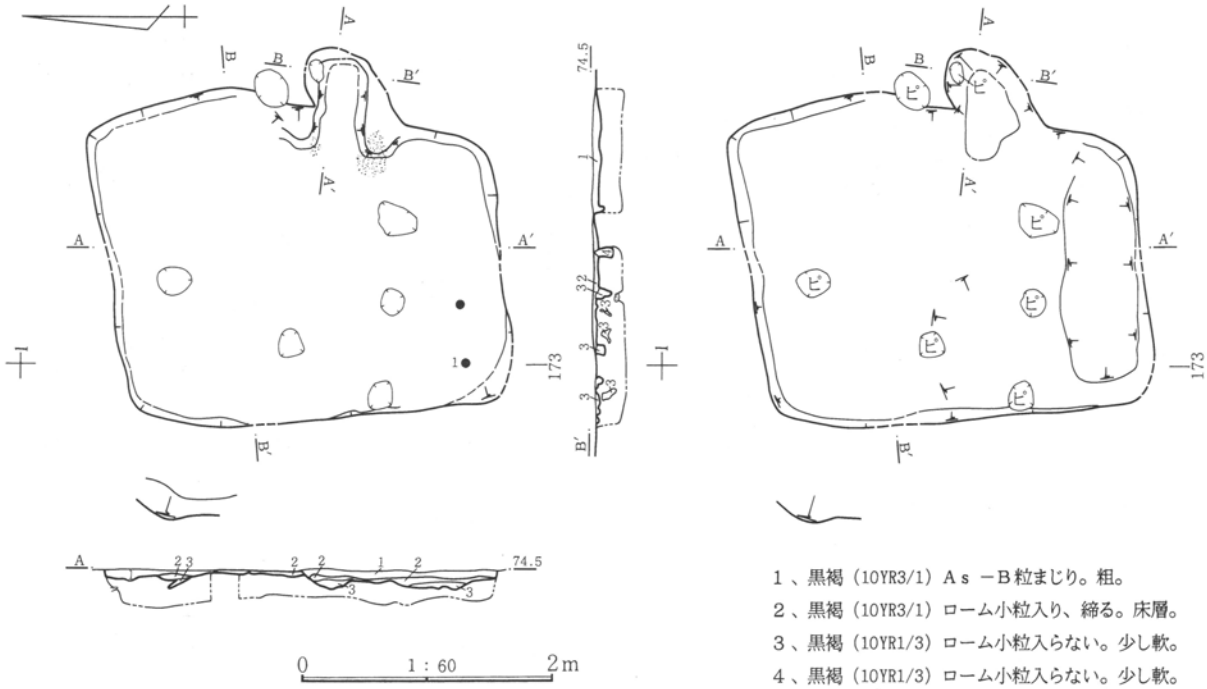
第413図　住居跡147遺構図



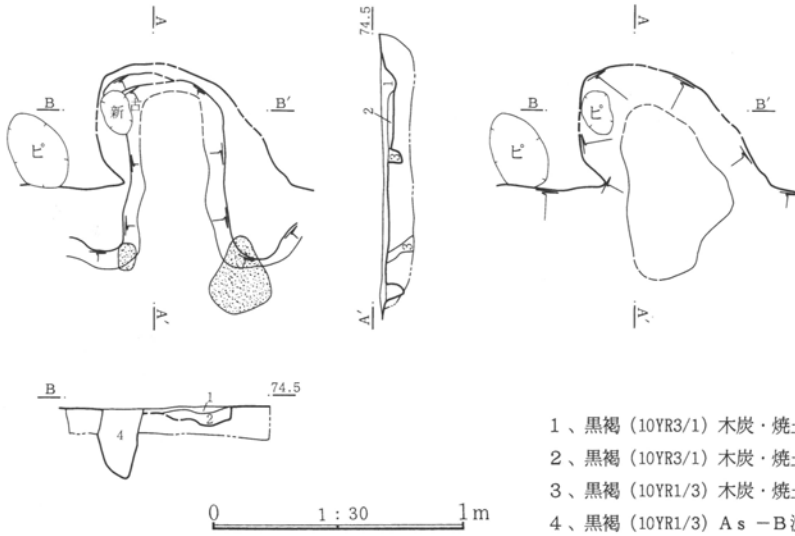
第414図　住居跡147遺物図



第415図　住居跡147遺物図

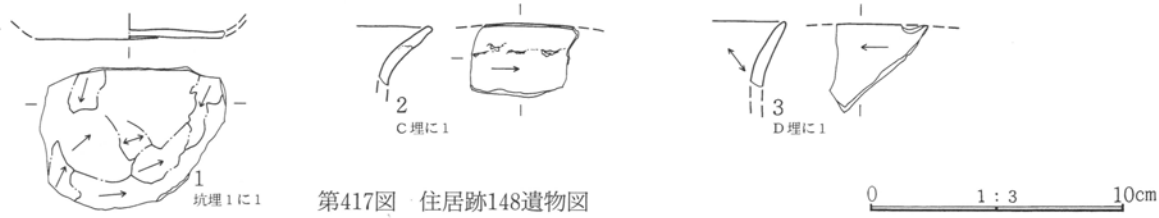


１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ粒まじり。粗。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入り、締る。床層。
３、黒褐（10YR1/3）ローム小粒入らない。少し軟。
４、黒褐（10YR1/3）ローム小粒入らない。少し軟。



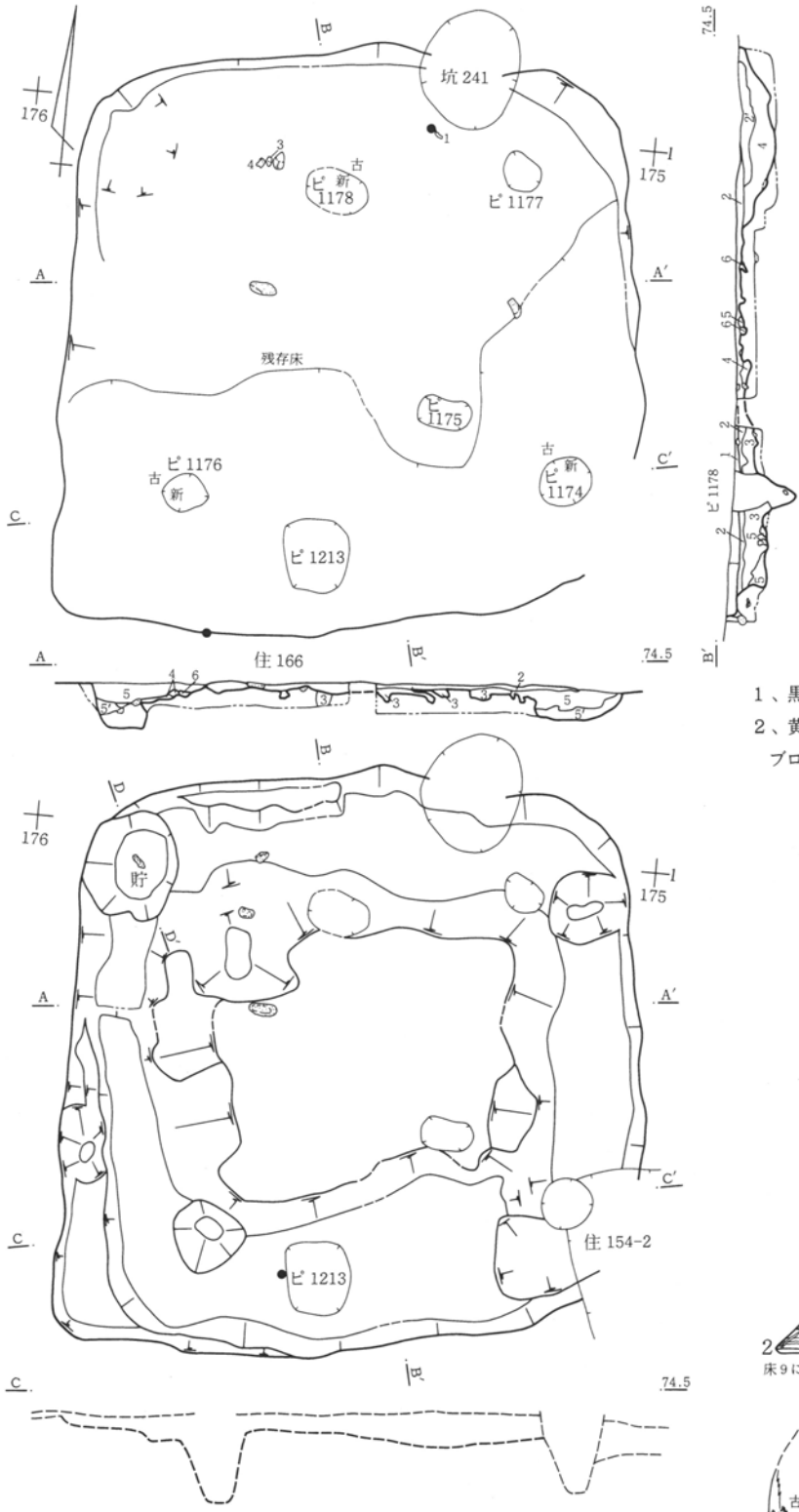
１、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒入る。
２、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒入らず。少しロームブロック入る。
３、黒褐（10YR1/3）木炭・焼土粒入らず。ロームブロックも入らず。
４、黒褐（10YR1/3）Ａｓ－Ｂ混じる。小穴。

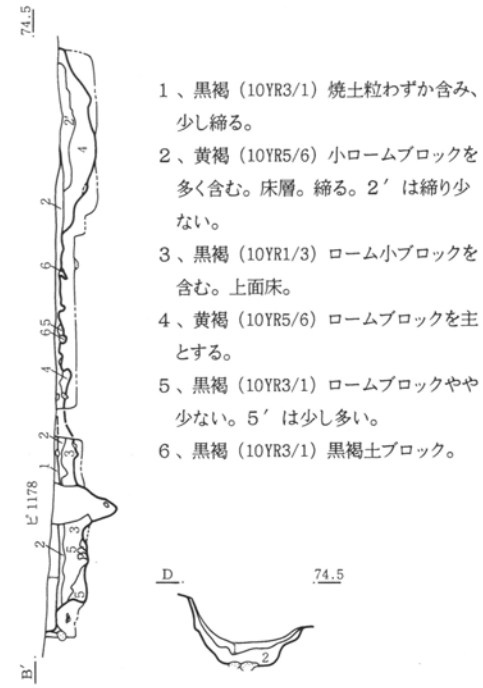
第416図　住居跡148遺構図



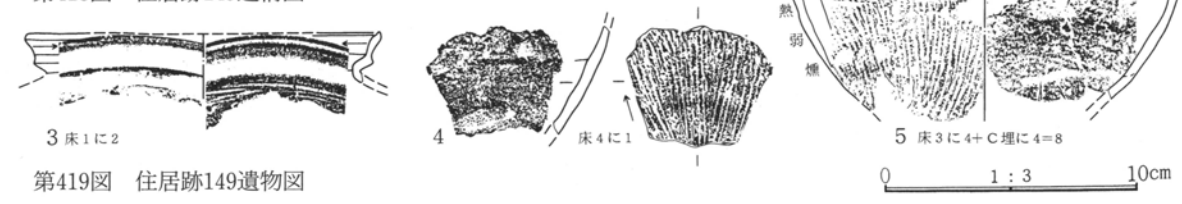
第417図　住居跡148遺物図

位置はＱ大区ｊ173・174、調査面はローム層上面標高74.5m。重複は住居跡150・153、坑281・282が後出。規模は南北で485cm、東西447cm、方向は中軸でN5°30′Wを測る。施設は東半で壁下溝がめぐるが、炉跡・貯蔵穴、柱穴など多くが不明。南東隅柱穴らしきピットの深さは標高73.96m。遺物は第423に掲げた古墳時代前期の同図１と古墳時代の６世紀前半を思わせる同図２があり、住居機能は後出遺物の６世紀代か。

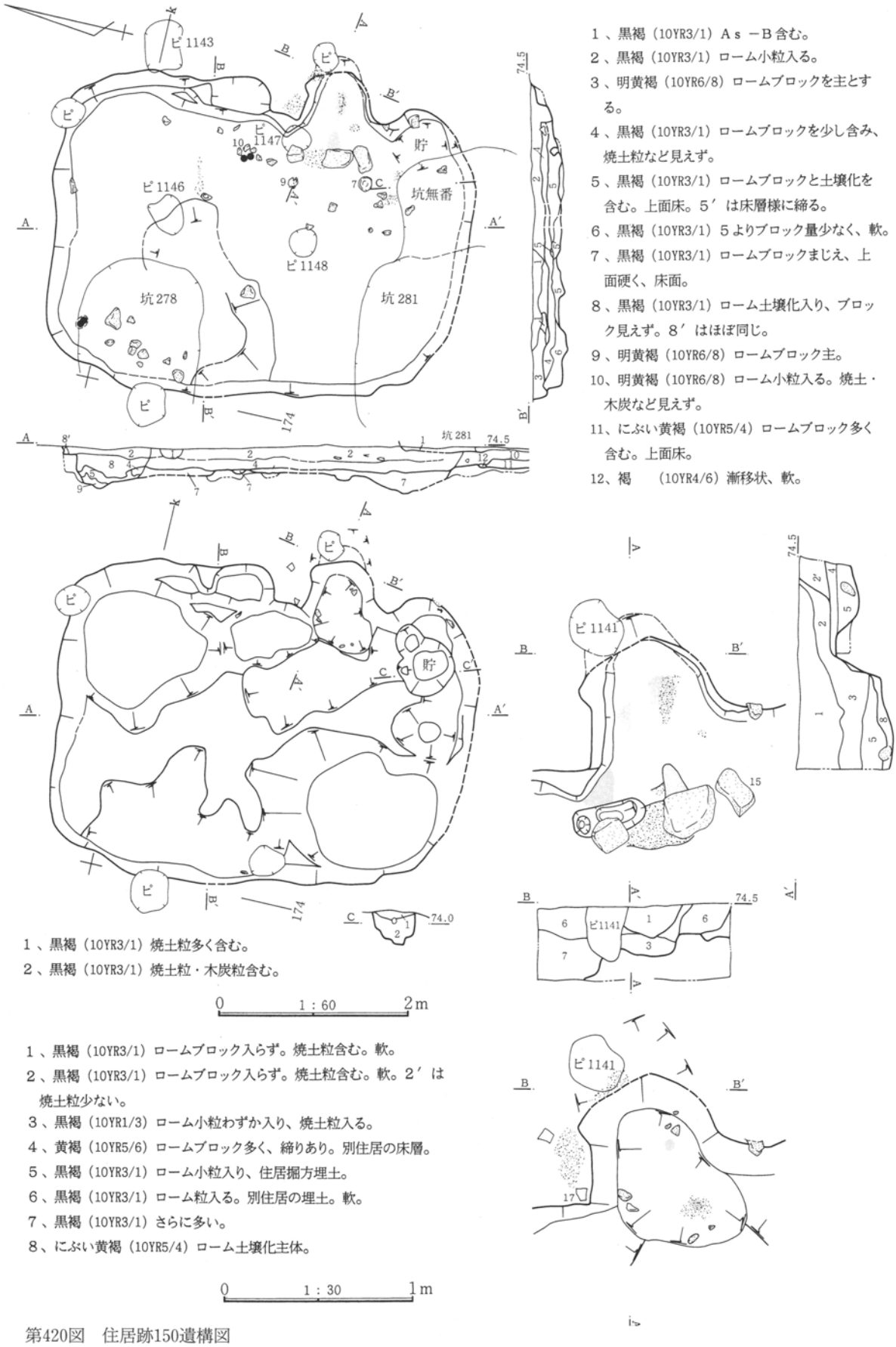




第418図　住居跡149遺構図



第419図　住居跡149遺物図

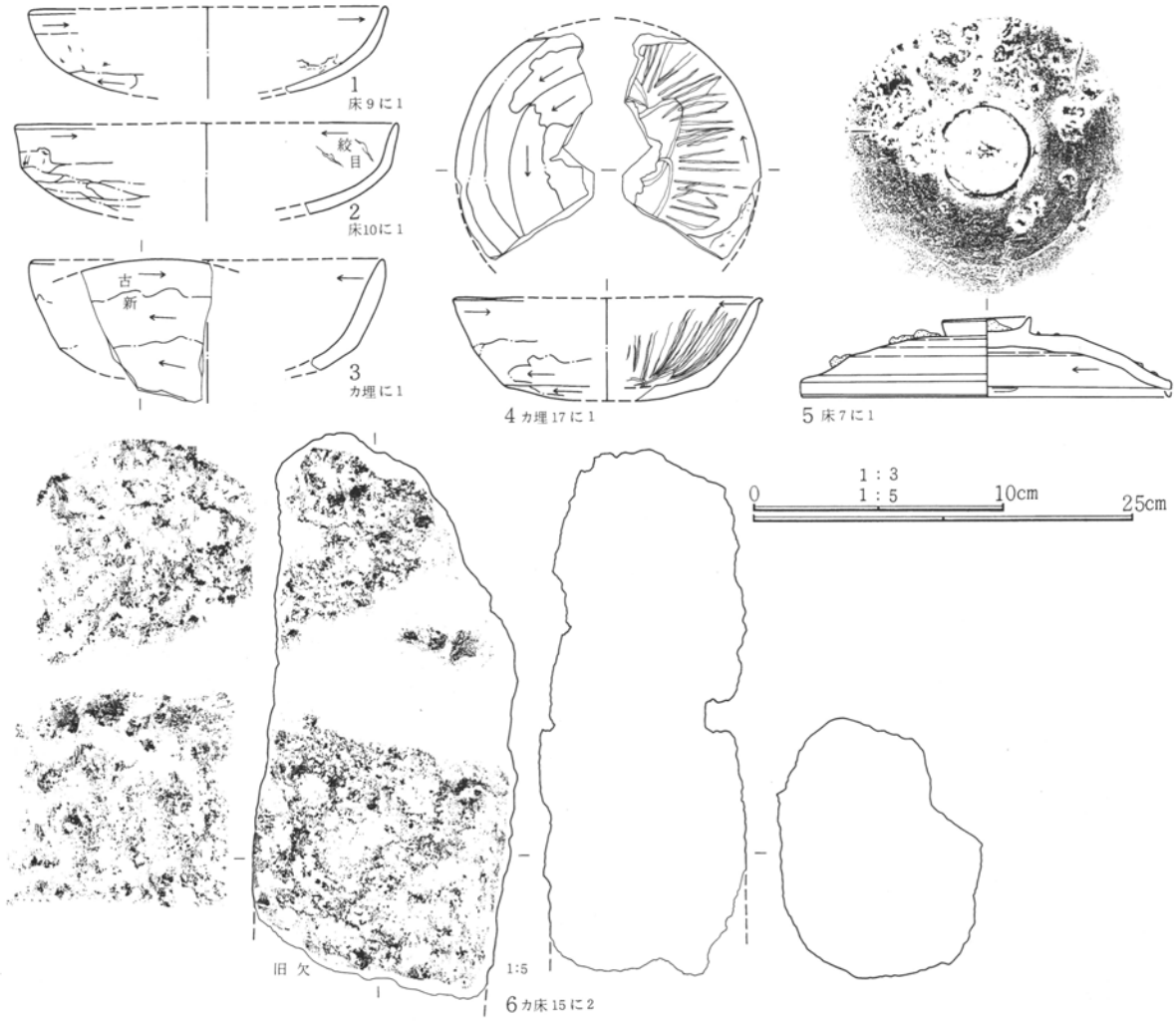


１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入る。
３、明黄褐（10YR6/8）ロームブロックを主とする。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを少し含み、焼土粒など見えず。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロックと土壌化を含む。上面床。５′は床層様に締る。
６、黒褐（10YR3/1）５よりブロック量少なく、軟。
７、黒褐（10YR3/1）ロームブロックまじえ、上面硬く、床面。
８、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化入り、ブロック見えず。８′はほぼ同じ。
９、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック主。
10、明黄褐（10YR6/8）ローム小粒入る。焼土・木炭など見えず。
11、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含む。上面床。
12、褐　（10YR4/6）漸移状、軟。

１、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒含む。

１、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず。焼土粒含む。軟。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず。焼土粒含む。軟。２′は焼土粒少ない。
３、黒褐（10YR1/3）ローム小粒わずか入り、焼土粒入る。
４、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く、締りあり。別住居の床層。
５、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入り、住居掘方埋土。
６、黒褐（10YR3/1）ローム粒入る。別住居の埋土。軟。
７、黒褐（10YR3/1）さらに多い。
８、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

第420図　住居跡150遺構図



第421図　住居跡150遺物図

住居跡152―1　（第424図、図版76）

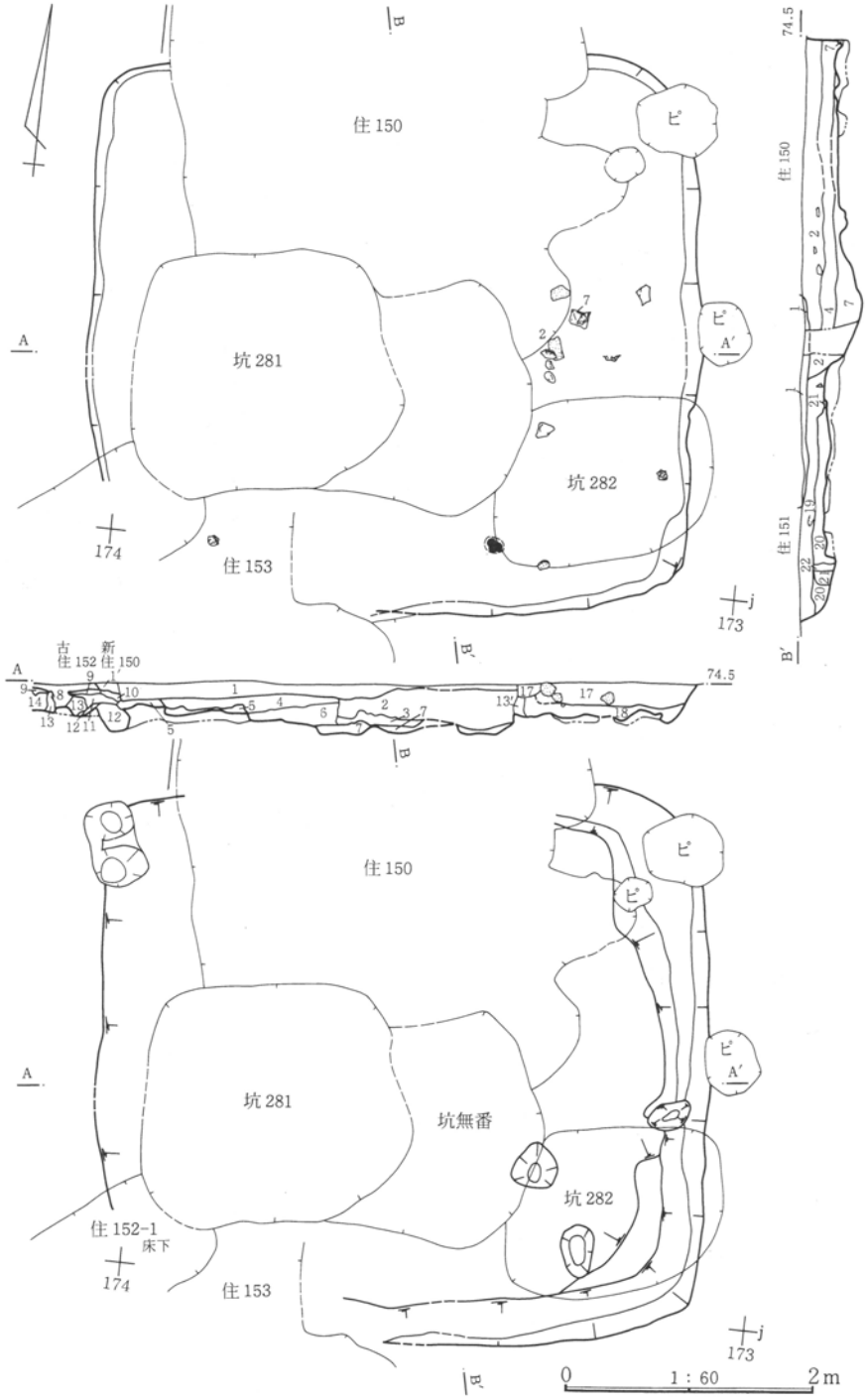
位置はＱ大区ij173・174、調査面はローム層漸移標高74.5m。重複は住居跡151、坑278・281・291が後出し、住居跡152―2とは同―２が後出したものと坑344の切り合いで考えたい。規模は南北380＋αcm、東西156＋αcm、方向はおよそN3°W。施設として貯蔵穴のピ1224があり、掘方で小規模な床下坑がある。住居跡152―1・2の関係は、当初住居跡172と住152―1の間で、住152―2の掘方痕跡で見えていたが、平面確認時に削り下げたため範囲不明となる。遺物については未抽出である。

住居跡152―2　（第524図、図版76）

位置、調査面は前出のとおり。規模は不明である。施設として貯蔵穴１ヵ所がある外不明である。住居跡152―1・2とは、規模の拡張等ではなく、別住居跡と考えられる。

住居跡153　（第425・426・427・428図、図版76・192・193）

位置はＱ大区ij173・174、調査面はローム層漸移からローム層上面標高74.5m。重複は住居跡150・152・155、坑281が後出。規模は南北で192＋αcm、東西で132＋αcm、方向は不明瞭である。施設として東壁に竈、南脇に掘方での深さ標高73.99mの貯蔵穴、掘方で竈前の土坑がある。遺物は第426～428図のとおり、10世紀中頃



第422図　住居跡151遺構図

A－A′

1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。中世か。1′は少し硬い。

2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。焼土粒少し入る。中世か。

3、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。少し締る。中世か。

4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。少し締る。中世か。

5、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く、締る。5′は中世土坑埋土。

6、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。少し軟。

7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し含み、少し締る。上面床か。

8、黒褐（10YR3/1）上層は少しＡｓ－Ｂまじえる。

9、黄褐（10YR5/6）ローム小ブロック含む。床面。住152床。

10、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず、締る。床面。住150床か。

11、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入り、少し締る。

12、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入り、少し軟。

13、黄褐（10YR3/6）ロームブロック主、少し軟。13′は動物の生活穴か。ローム入る。

14、黄褐（10YR3/6）13よりロームブロック少ない。軟。

17、黒褐（10YR3/6）ローム小ブロック、同小粒入り、礫あり。

18、黒褐（10YR3/6）ロームブロック含む。焼土・木炭など見えず。上面締り、床層。

B－B′

1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。

2、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入る。

4、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを少し含み、焼土粒など見えず。

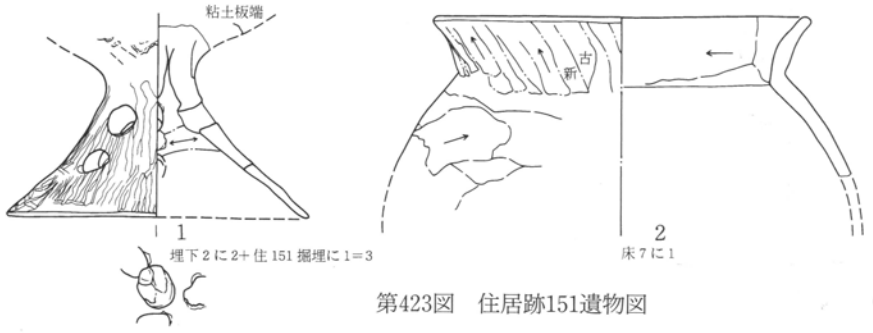
7、黒褐（10YR3/1）ロームブロックまじえ、上面硬。床。

19、明黄褐（10YR6/8）ローム小粒入る。焼土・木炭など見えず。

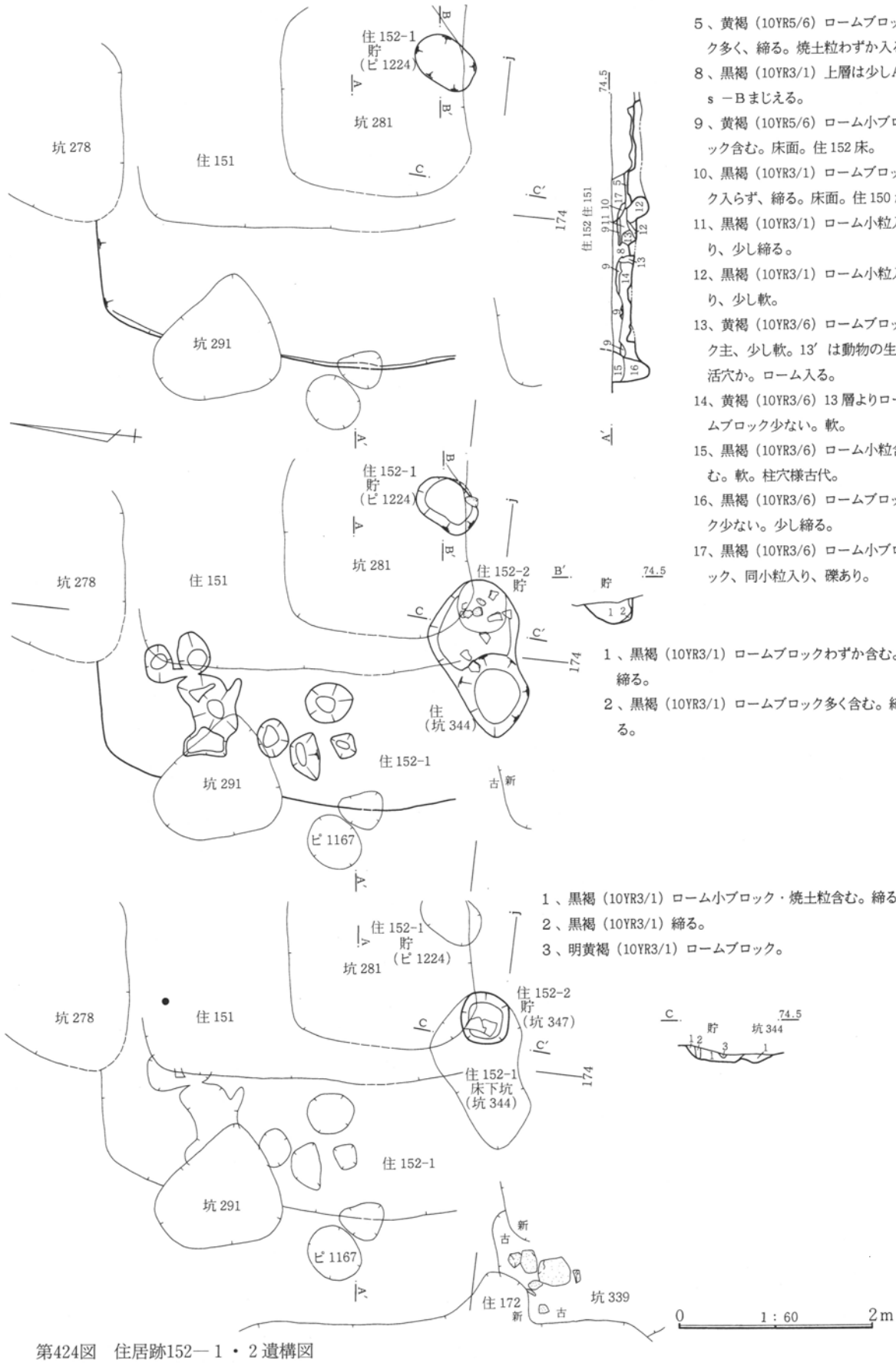
20、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含む。上面床。

21、褐　（10YR4/6）漸移状、軟。

22、黒褐　（10YR3/1）動物の生活旧穴か。



第423図　住居跡151遺物図

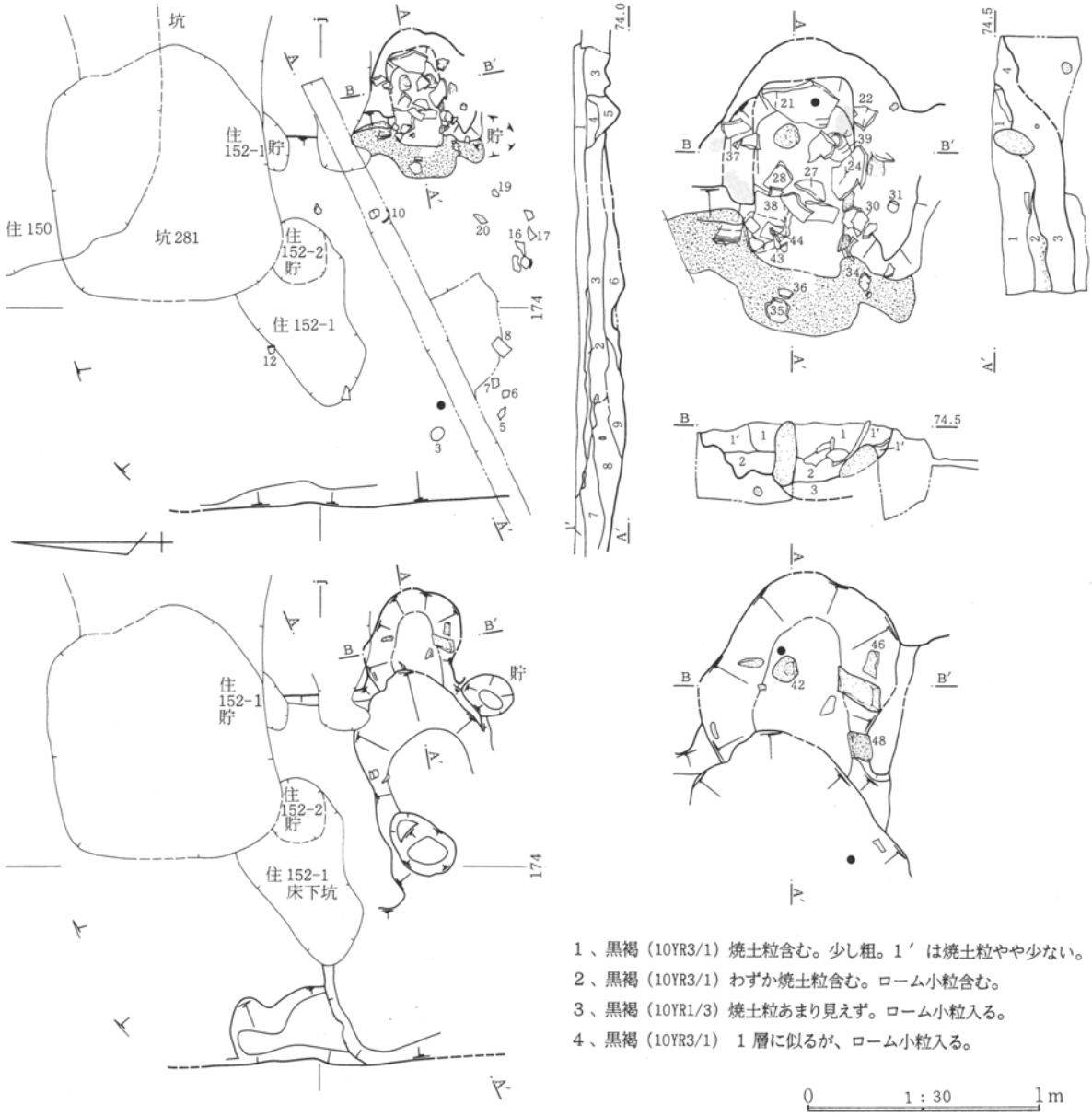


５、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く、締る。焼土粒わずか入る。
８、黒褐（10YR3/1）上層は少しＡｓ－Ｂまじえる。
９、黄褐（10YR5/6）ローム小ブロック含む。床面。住 152 床。
10、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず、締る。床面。住 150 か。
11、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入り、少し締る。
12、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入り、少し軟。
13、黄褐（10YR3/6）ロームブロック主、少し軟。13′は動物の生活穴か。ローム入る。
14、黄褐（10YR3/6）13 層よりロームブロック少ない。軟。
15、黒褐（10YR3/6）ローム小粒含む。軟。柱穴様古代。
16、黒褐（10YR3/6）ロームブロック少ない。少し締る。
17、黒褐（10YR3/6）ローム小ブロック、同小粒入り、礫あり。

１、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。締る。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。締る。

１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒含む。締る。
２、黒褐（10YR3/1）締る。
３、明黄褐（10YR3/1）ロームブロック。

第424図　住居跡152―１・２遺構図



1、黒褐（10YR3/1）小ロームブロック見えず、焼土粒わずか入る。Ａｓ－Ｂ含む。1′は焼土粒見えず。
2、黒褐（10YR3/1）小ロームブロック入る。締る。床層。
3、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入る。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック見えず。軟。
5、黒褐（10YR3/1）４より少し 締る。
6、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含み。上面締る。別住居。
7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず、焼土粒も見えず。軟。小礫入る。
8、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず、焼土粒も見えず。軟。小礫入る。７層より黒っぽい。
9、黒　（10YR2/1）倒木のそれに似る。軽石少なく、古様。

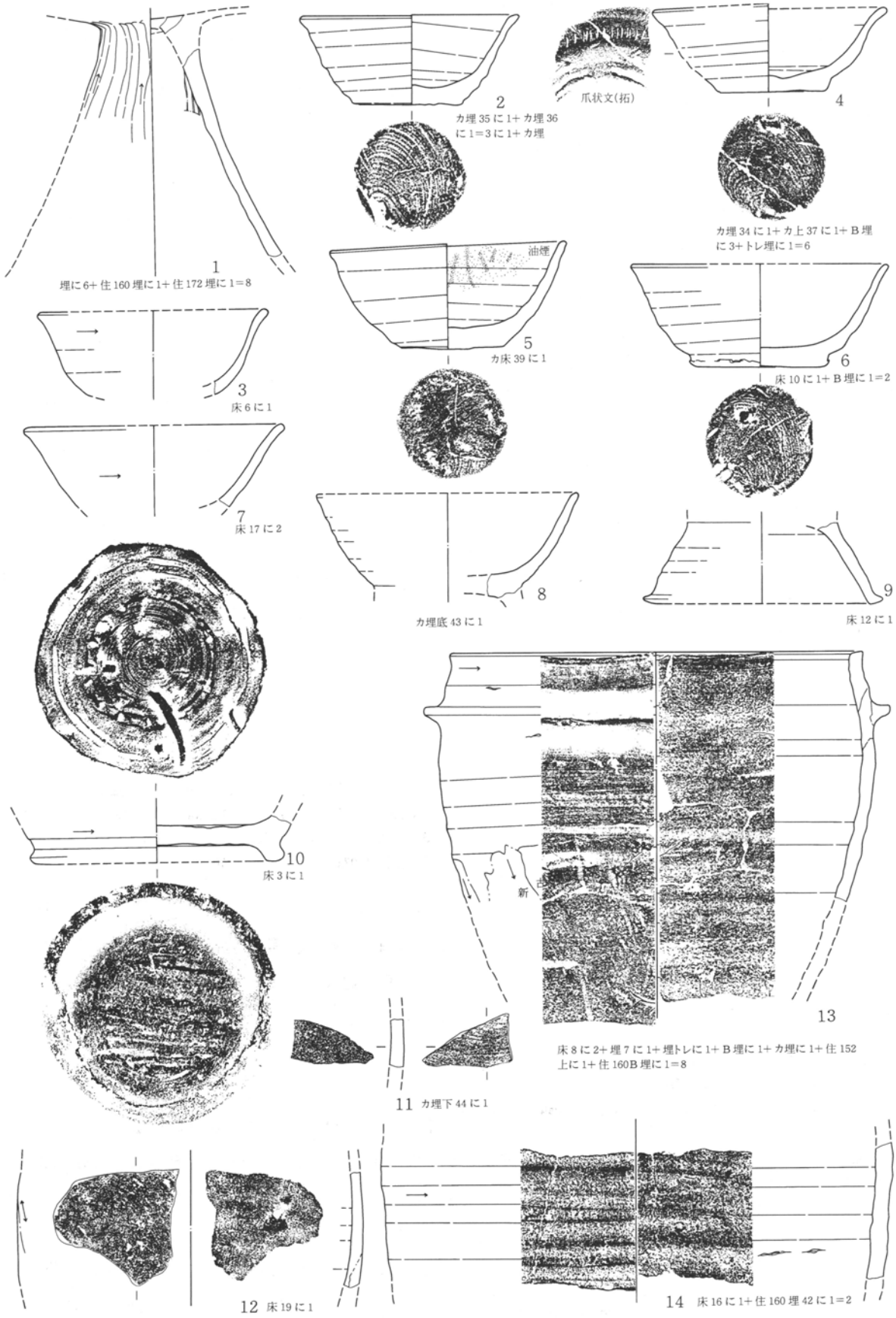
0　1：60　2m

第425図　住居跡153遺構図

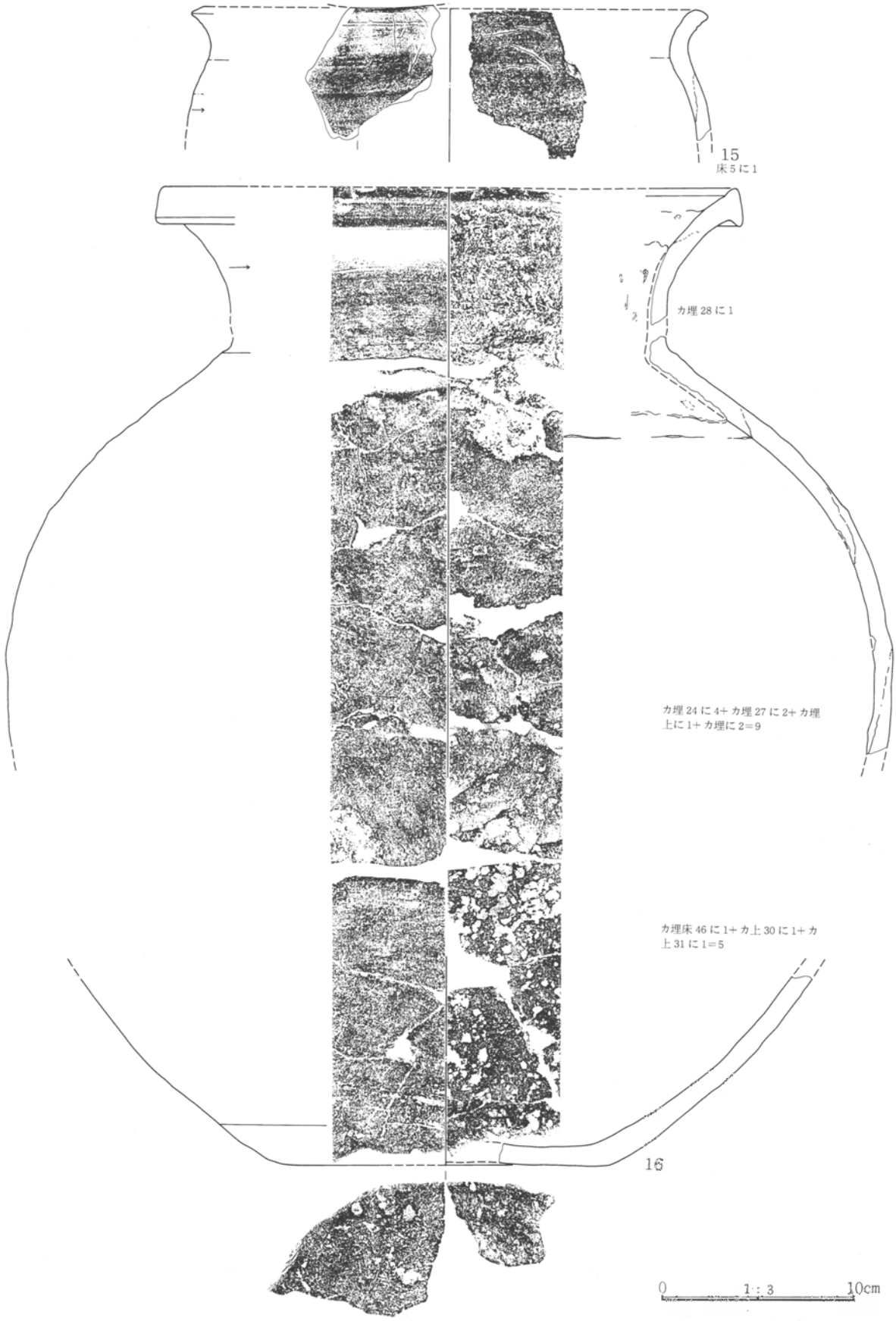
までの個体が多く、第427図16は９世紀代、第428図17は７～９世紀代を思わせ伝世個体であろう。以上の遺物類の大半竈内のまとまった取り上げであり、一括性を認めて良い個体を多く含む。住居機能は同期である。

住居跡154―1　（第429・431図、図版77・194）

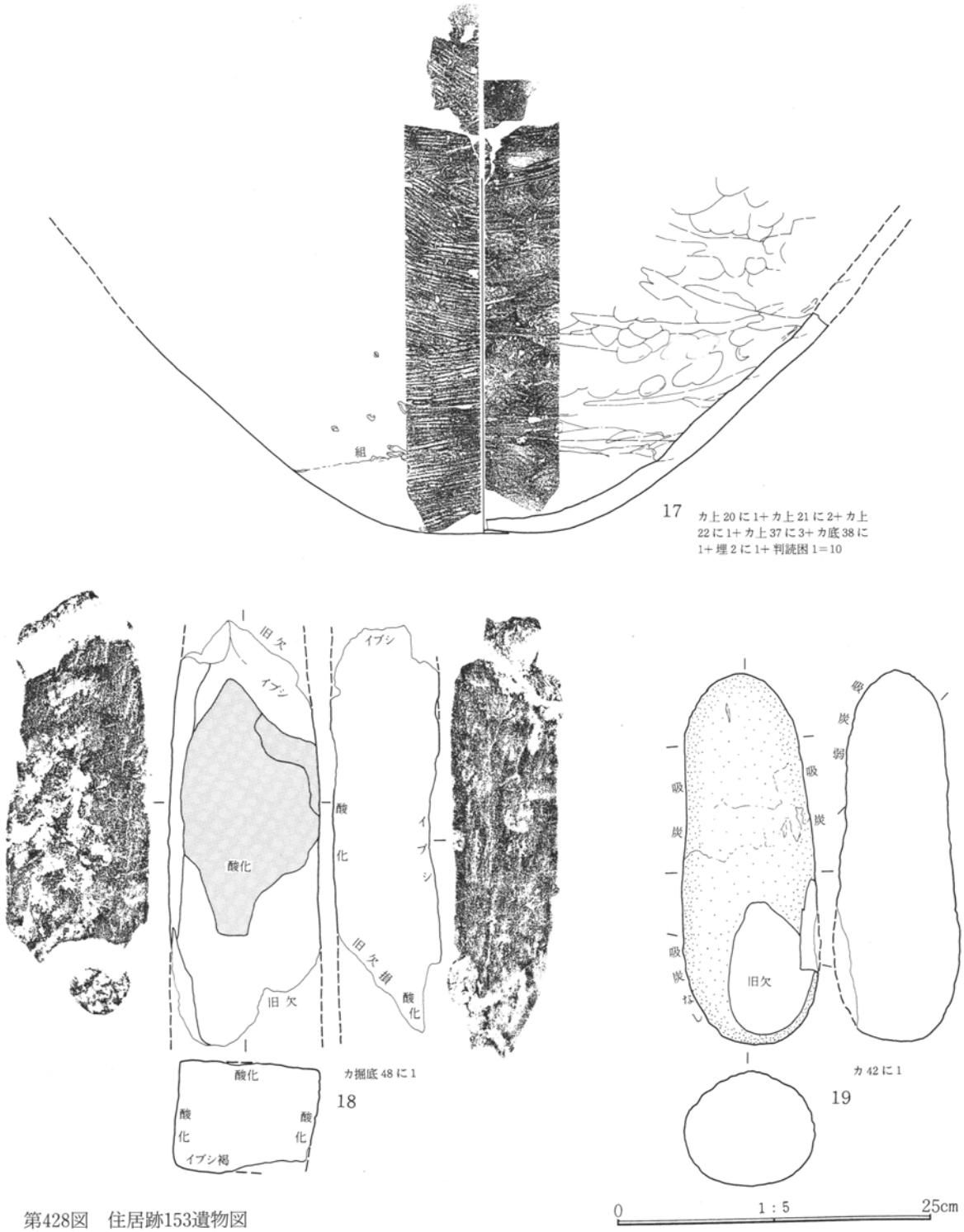
位置はＱ大区ｋ173にあり、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡154―2、井戸跡16が切る。規模は南北295cm、東西297cm、方向は中軸でN2°W。施設に東壁に竈、南東隅に掘方底で標高74.18mの貯蔵穴があり、掘方は住居跡154―2によって切られているため不明瞭であるが南同壁の東寄に凹みあり。遺物は第431



第426図　住居跡153遺物図



第427図　住居跡153遺物図

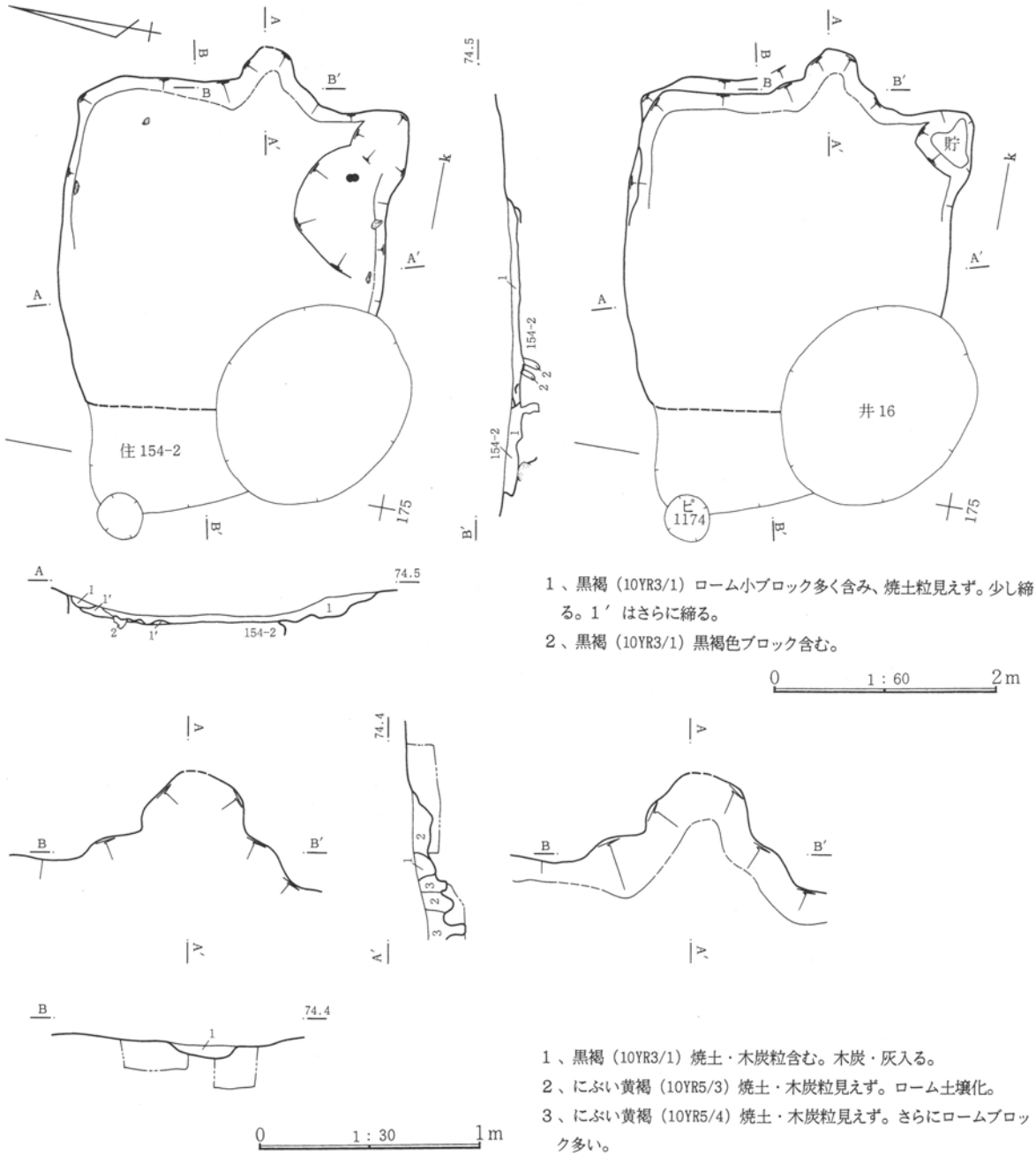


第428図　住居跡153遺物図

図のとおり大半が住居跡154―2出土である。

住居跡154―2　（第430・431図・図版77・194）

位置はQ大区k175・176、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡154―1が先行、井戸跡16に切られる。規模は南北258cm、東西283cm、方向は中軸でN15°30′Wを測る。施設に東竈、掘方底で73.95mの貯蔵穴、竈前の土坑、床下坑があるが、住居跡154―1の床下施設の一部も含むであろう。遺物は、第431図のと



１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含み、焼土粒見えず。少し締る。１′はさらに締る。
２、黒褐（10YR3/1）黒褐色ブロック含む。

１、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。木炭・灰入る。
２、にぶい黄褐（10YR5/3）焼土・木炭粒見えず。ローム土壌化。
３、にぶい黄褐（10YR5/4）焼土・木炭粒見えず。さらにロームブロック多い。

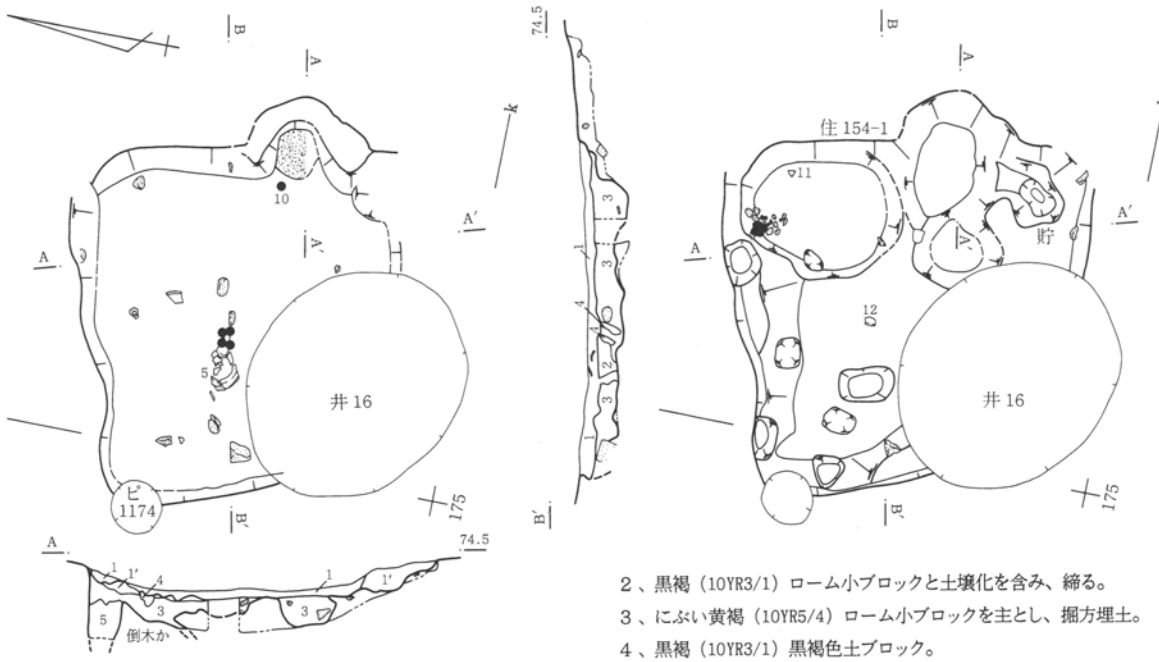
第429図　住居跡154―１遺構図

おり８世紀後半の同図1・2を含むが、床下坑や掘方に浅い小穴を伴なう住居は９世紀以降に多く、遺物数は先行の住居跡154―1に伴なう可能性あり。

住居跡155　（第432・433図、図版77・194）

位置はＱ大区hi173、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡160、溝跡106が先行し、新古不明の土坑が重なり、住157が切る。規模は南北389＋αcm、東西279cm、方向は中軸でN3°15′W。施設は東壁に竈、掘方に床下坑がある。遺物は第433図に掲げ、10世紀前半の個体が主で住居機能も同期。

住居跡156　（第434・435図、図版77・194）



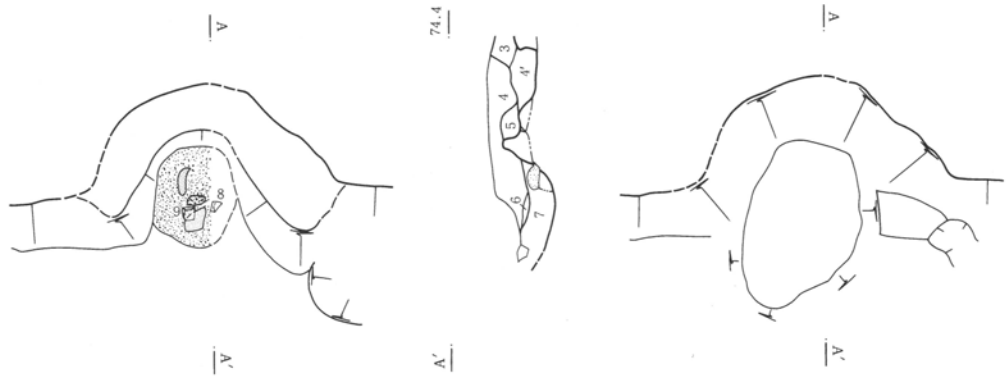
1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含み、焼土粒見えず。少し締る。1′は少しローム土壌化入る。

2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックと土壌化を含み、締る。

3、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロックを主とし、掘方埋土。

4、黒褐（10YR3/1）黒褐色土ブロック。

5、にぶい黄橙（10YR6/4）漂白化ローム客土か不明。



3、にぶい黄褐（10YR5/4）焼土・木炭粒見えず。さらにロームブロック多い。

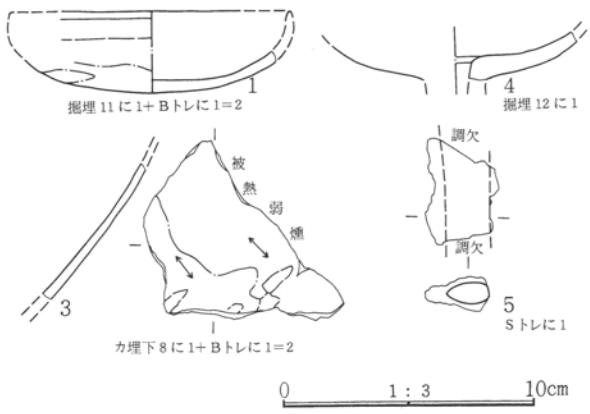
4、明黄褐（10YR6/8）ロームブロックを主とする。4′はさらにロームブロック多い。4層中に焼土粒少し入る。

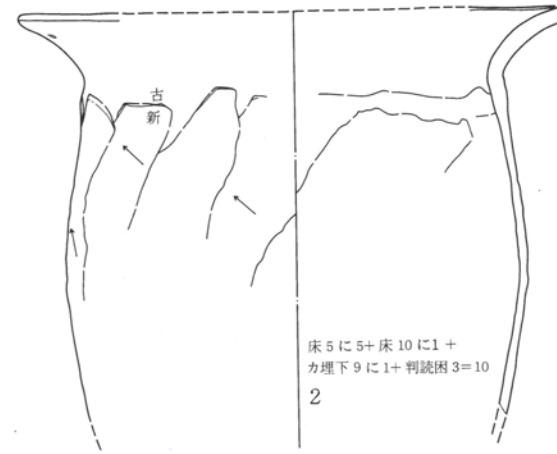
5、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭・灰を多く含み、上面は床に至る。

6、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭・灰特に多く、床に至る。

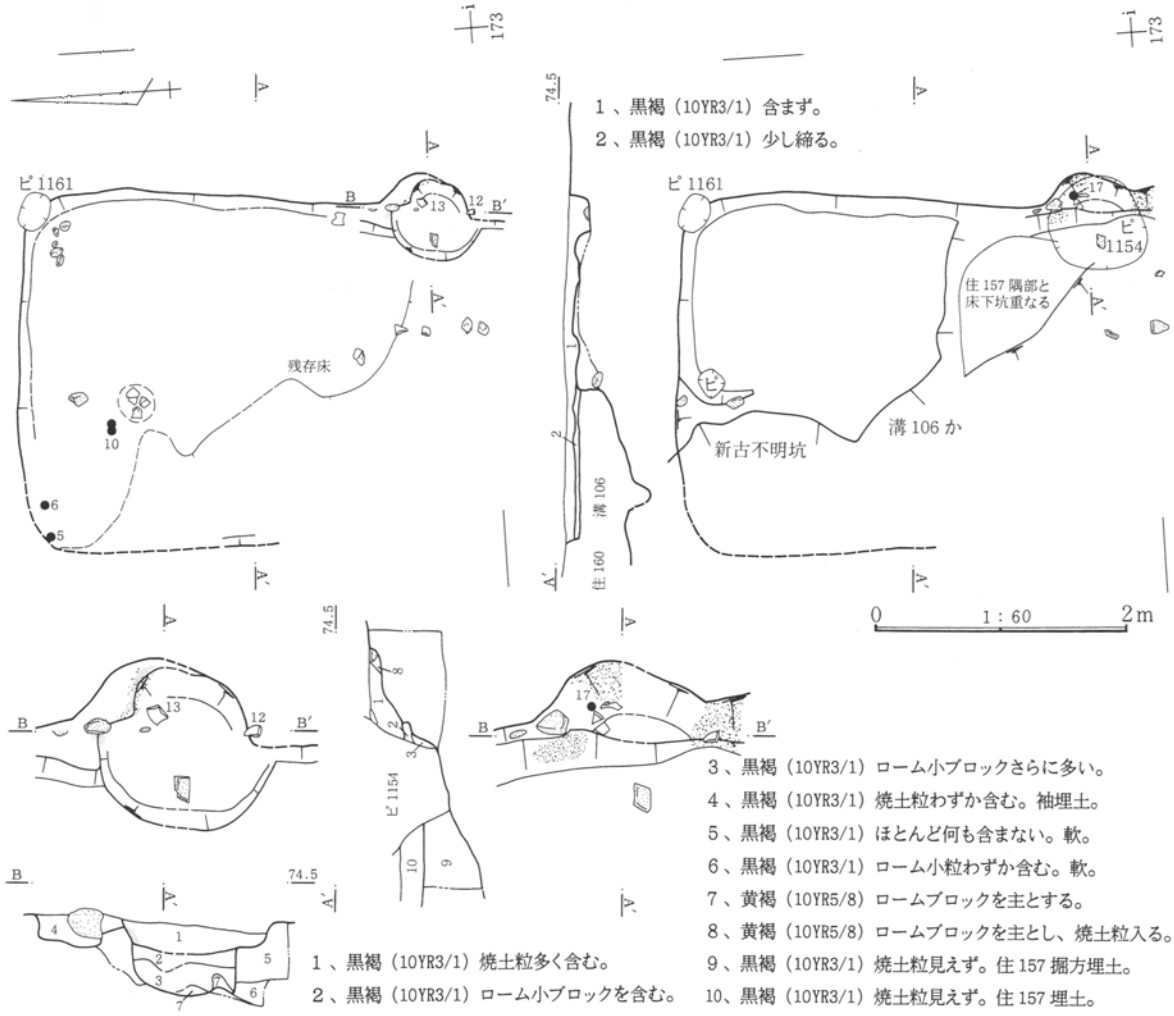
7、明黄褐（10YR6/8）ロームブロック多く、焼土少し含む。

第430図　住居跡154―２遺構図

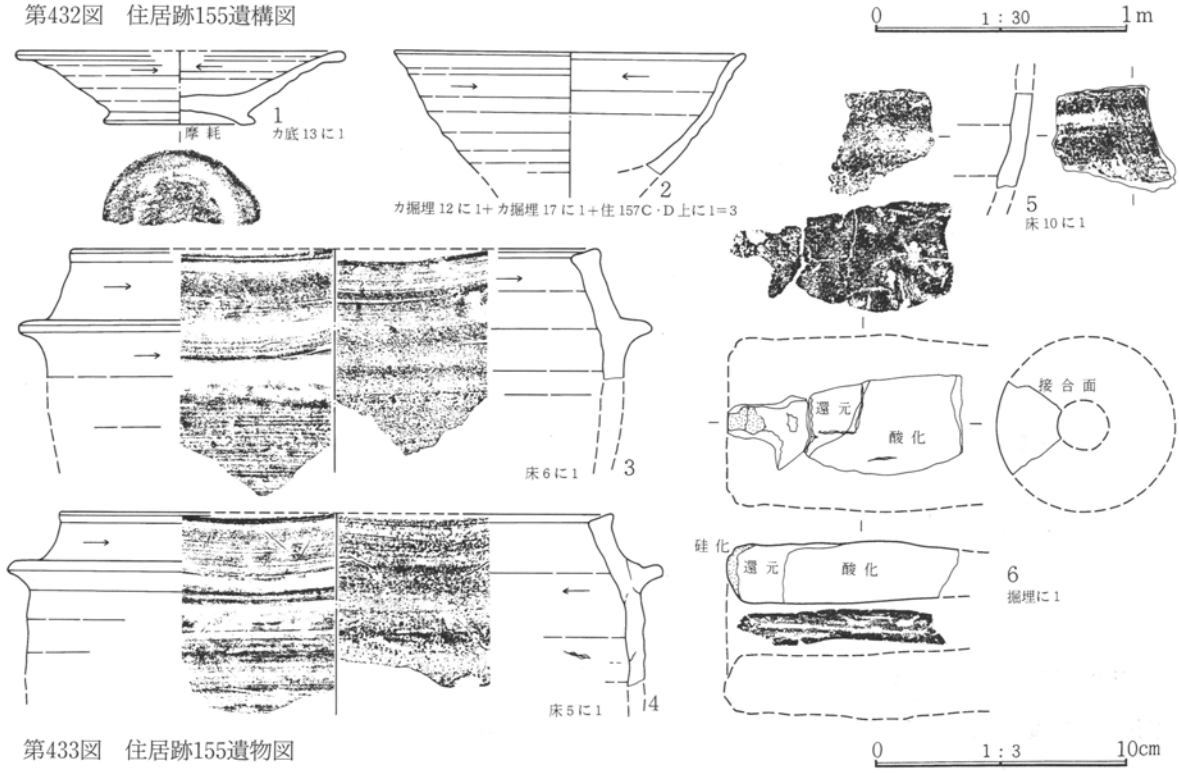




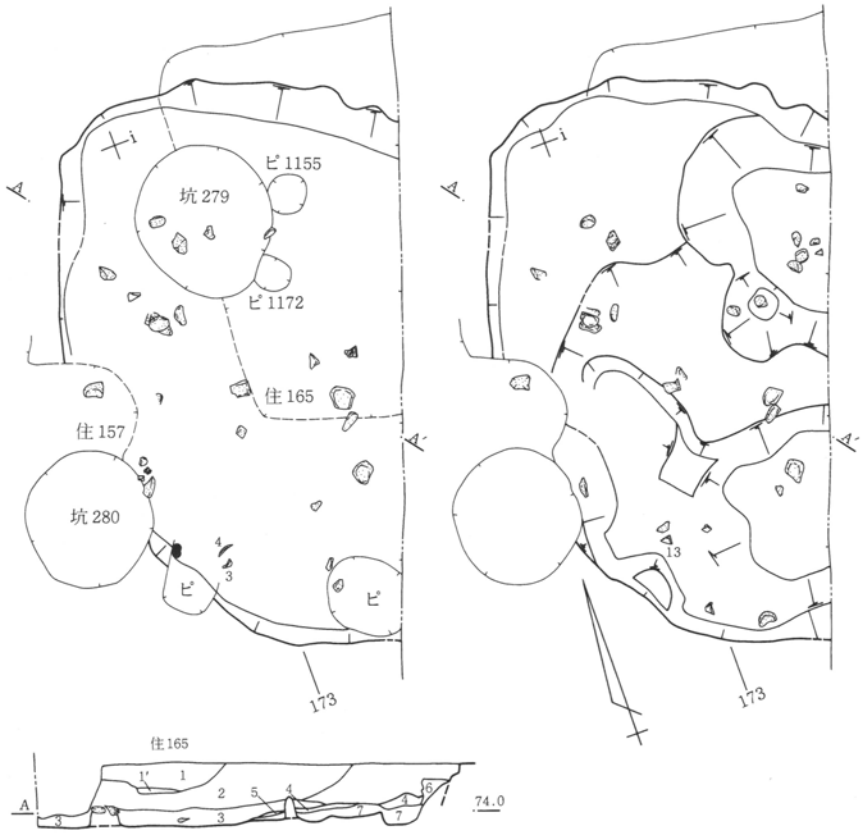
第431図　住居跡154―２遺物図



第432図　住居跡155遺構図

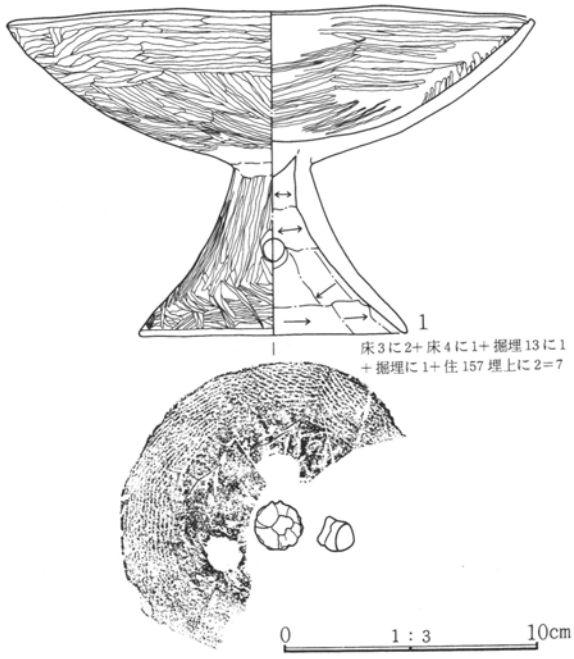


第433図　住居跡155遺物図



1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックが入るが、木炭粒見えず。1′はロームブロック入り、少し締る床層。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックが入るが、木炭粒見えず。1層より黒く、軟。
3、黒褐（10YR3/1）軽石粒少なく、古様の倒木に見られる黒褐色土に似る。
4、黄褐（10YR5/6）ロームブロックを主とする床。やや軟。
5、黒褐（10YR3/1）わずかロームブロック含む。少し締る床。
6、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移状。軟。
7、黒褐（10YR3/1）3層に似るが、少し茶味おびる。軟。

第434図　住居跡156遺構図

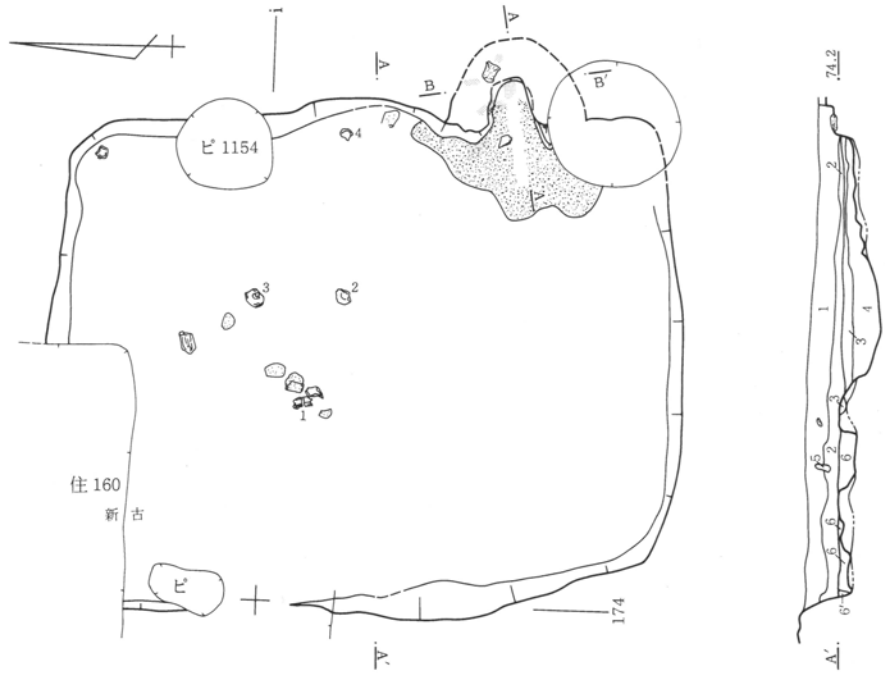


第435図　住居跡156遺物図

位置はＱ大区hi172・173に、調査面は、ローム層上面標高74.5m。重複は住居跡157・165、坑279・280に切られる。形態は隅丸方形とならず不整。規模は南北460cm、東西273cm。遺物は第435図１の古墳時代前期の高坏がある。遺構も同期か。

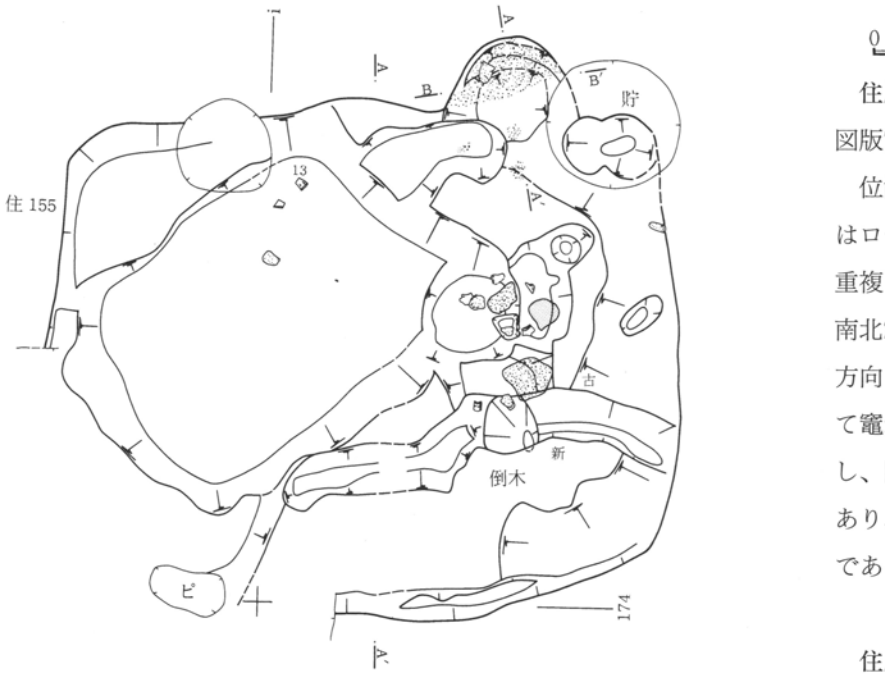
住居跡157　（図版436・437・438、図版78・194）

位置はＱ大区hi173・174に、調査面はローム層上面標74.4m。重複は住居跡160、倒木、坑280が後出。規模は南北510cm、東西408cm、方向は中軸でN4°30′W。施設に竈、掘方で底標高73.9mの貯蔵穴、焼土・灰などを伴なう床下坑を認めた。また掘方面には、隅丸長方形の住居跡157とは別の遺構らしき３mの隅丸長方形のしっかりした掘方を認めたが、仔細は不明。遺物は第438図を掲げたように10世紀前半の個体が主で住居機能も同期。



1、黒褐（10YR3/1）木炭粒わずか含み、ローム粒ほとんど見えず。
2、黒褐（10YR3/1）木炭粒わずか含み、ローム粒ほとんど見えず。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロックの締められた床の縞が黒褐還元気味の床との間に入る床層。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックをわずかに含む軟らかい掘方埋土。
5、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック状。動物の生活旧穴か。
6、明黄褐（10YR6/6）黒褐色土ブロックの入り、ロームブロック主体の掘方埋土。6′はやや軟。

0　1：60　2m



第436図　住居跡157遺構図

住居跡158　（第439・440図、図版78・194）

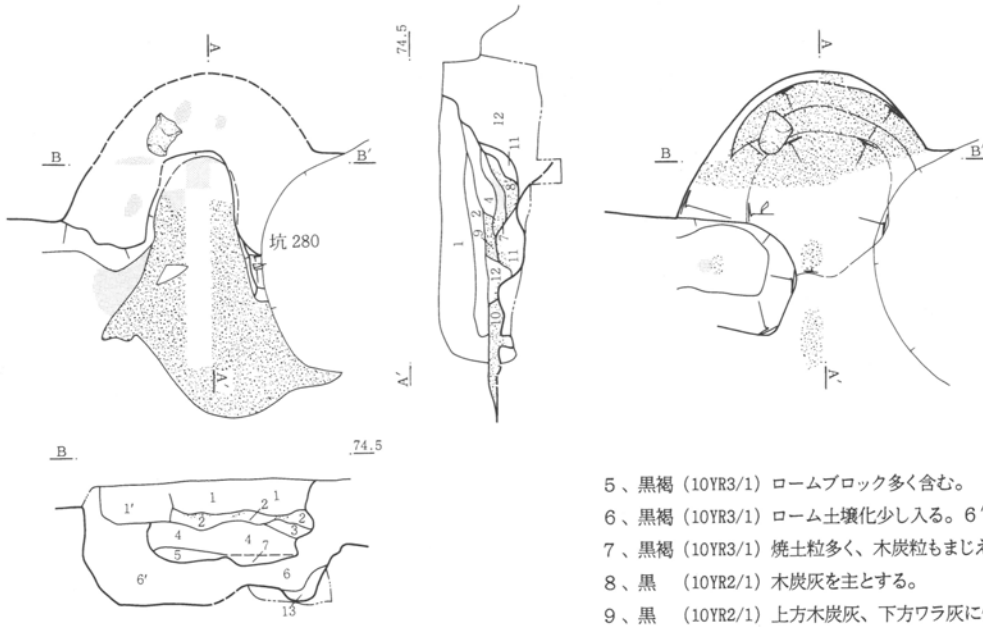
位置はＱ大区ｏ175に、調査面はローム層漸移で標高74.5m。重複は住居跡120が切る。規模は南北240＋αcm、東西31＋αcm、方向は東壁でN31°W。施設として竈がある。遺物は第440図に示し、同図２は10世紀後半の埦であり、住居機能時に関連しそうである。

住居跡159　（第441・442図、図版79・194）

位置はＱ大区op170・171に、調査面は標高74.45m。重複は住居跡131、ピ1040・1083・1084・1219、溝跡87が後出してある。規模は南北420cm、東西287cm、方向は中軸でN4°45′W。施設に竈、掘方底標74.27mの貯蔵穴がある。遺物は第442図のとおり10世紀中頃の個体で、住居機能もその頃か。

住居跡160　（第443・444・445図、図版79・195）

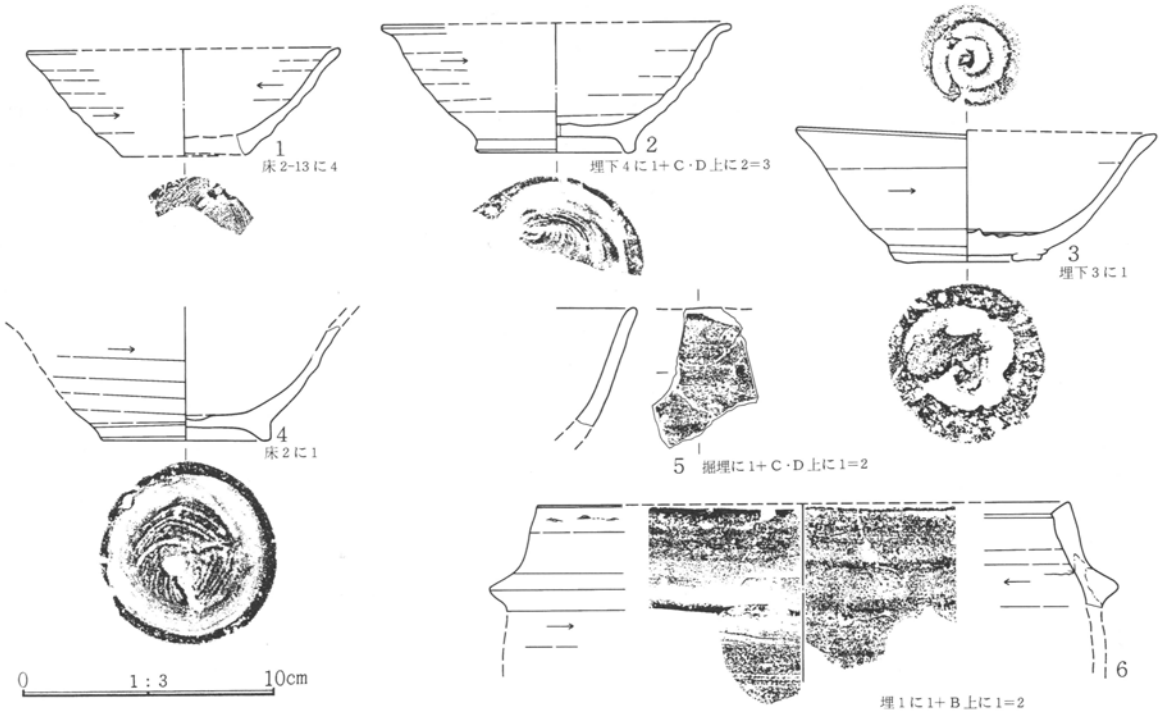
位置はＱ大区ij173・174に、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡151・152・153・155が後出してあるほか北側に無番別住居と倒木が重さなっているらしいが新・古を含め仔細不明。規模は南北407cm、無番を含めた東西で445cm、方向は東壁でN8°W。遺物は、第444図に示したが、同図1・2など９世紀後半、同図3・6が



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。１′は少し締る。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒多く含む。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロックやや多い。
４、黒褐（10YR3/1）黒味強くほとんど何も含まない。倒木に見られる黒色土様。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。
６、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化少し入る。６′は黒味強。
７、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、木炭粒もまじえる。
８、黒　（10YR2/1）木炭灰を主とする。
９、黒　（10YR2/1）上方木炭灰、下方ワラ灰に似る。
10、黒　（10YR2/1）木炭灰を主とする。
11、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒まじえる。ローム小ブロック入る。
12、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒まじえる。ローム小ブロック入る。
13、黒褐（10YR3/1）軽石もほとんど入らず、軟。倒木様。

0　1：30　1m

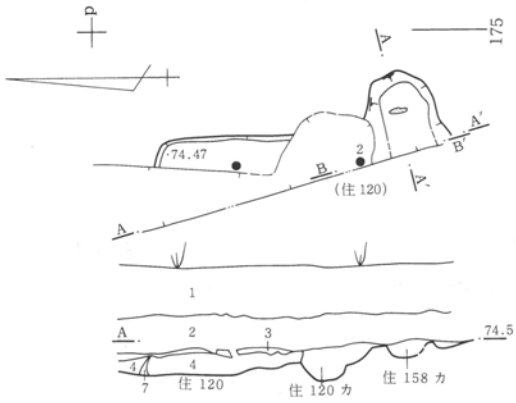
第437図　住居跡157遺構図



第438図　住居跡157遺物図

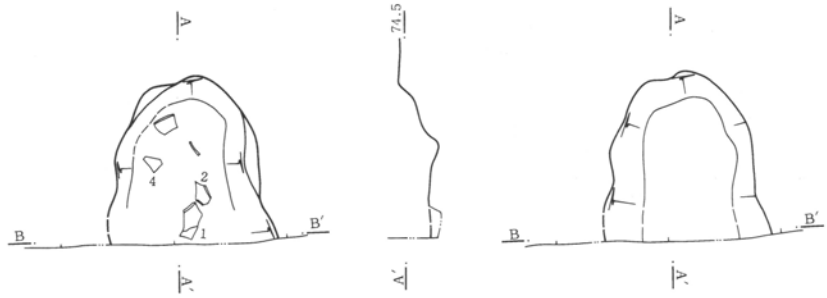
10世紀初頭頃、同図4･5･7･8など10世紀後半から末を思わせ、混在様相にある。したがって複数住居が存在か。

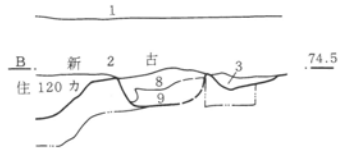
住居跡161　（第446・447図、図版79・195）



１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含み、上層は現耕土。
２、黒褐（10YR3/1）上層はＡs-Ｂ少し混じり、ローム小ブロック含む。
３、黒褐（10YR3/1）少し還元気味の床面。締りややあり。
４、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、水平気味に堆積。
７、黒褐（10YR3/1）根。

0　1：60　2m

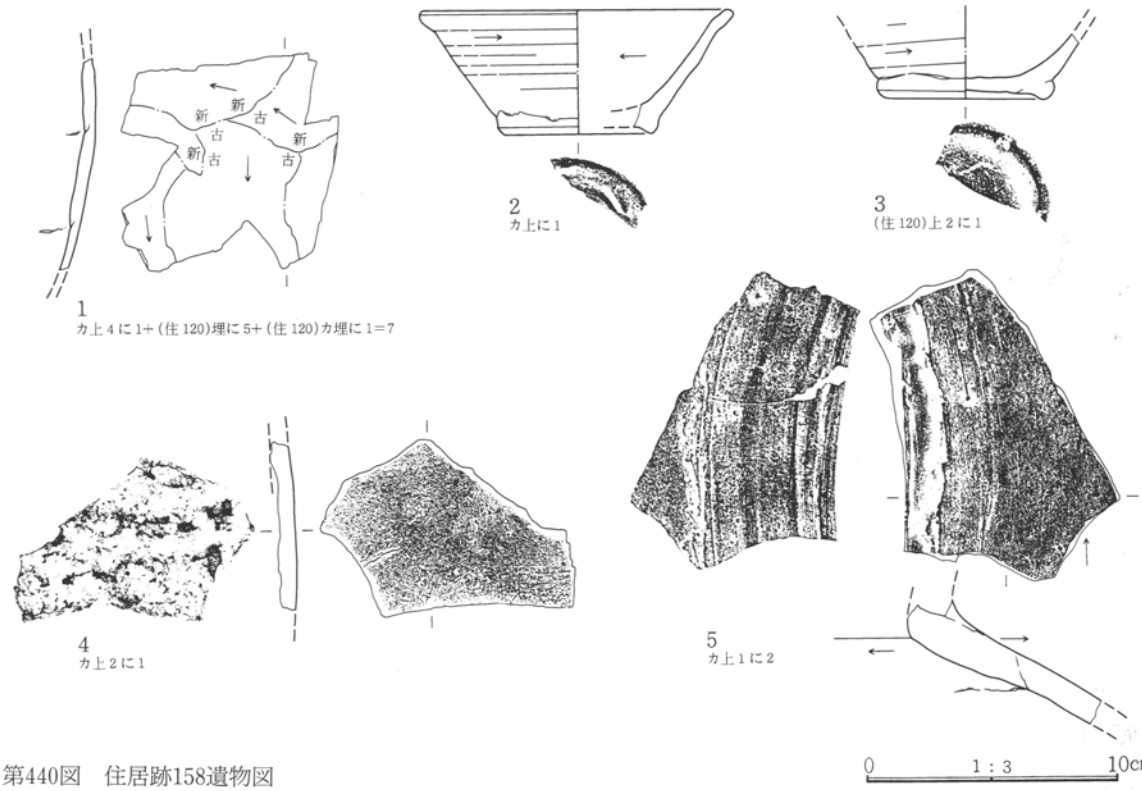




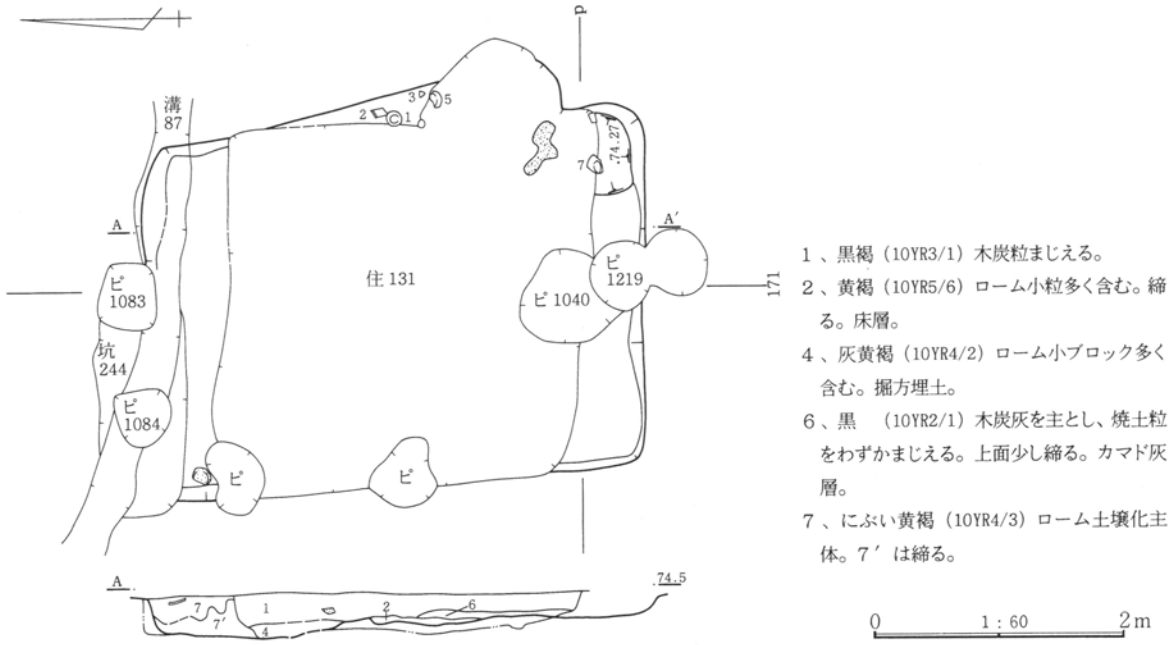
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ・Ｂを含む。下方Ａs-Ａを含まず。
２、黒褐（10YR3/1）古代。焼土粒を含む。
３、黒褐（10YR3/1）木灰・灰を多く含む。
８、黒褐（10YR3/1）木炭粒少し含み、軟。
９、灰黄褐（10YR4/2）ローム漸移状。軟。

第439図　住居跡158遺構図

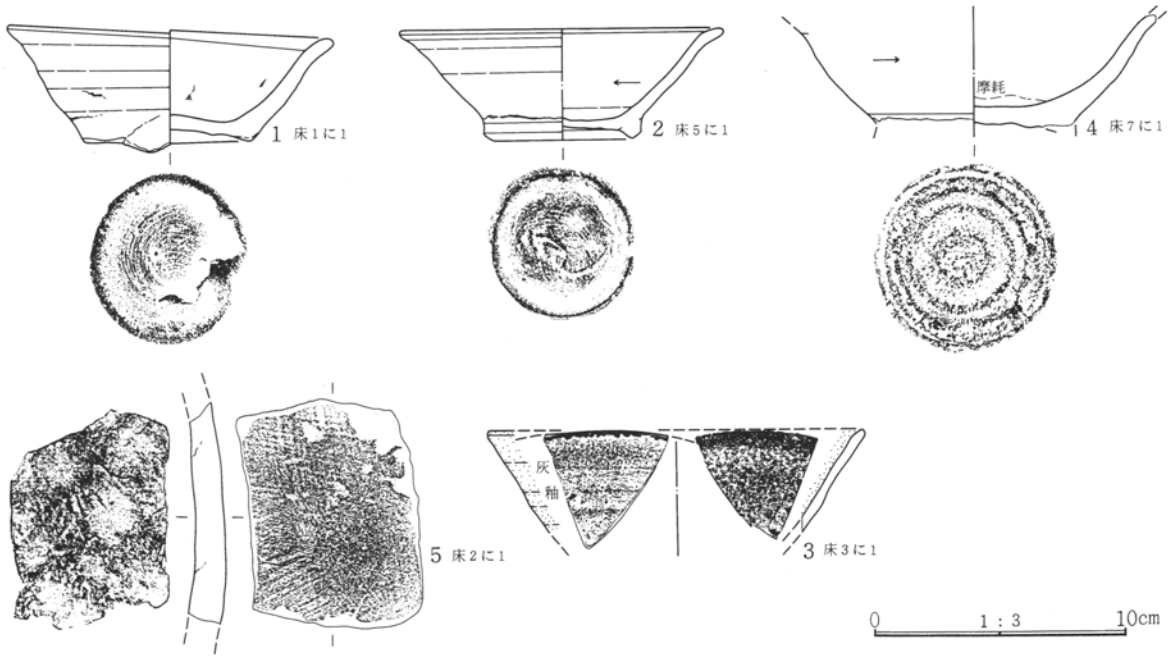
0　1：30　1m



第440図　住居跡158遺物図



第441図　住居跡159遺構図

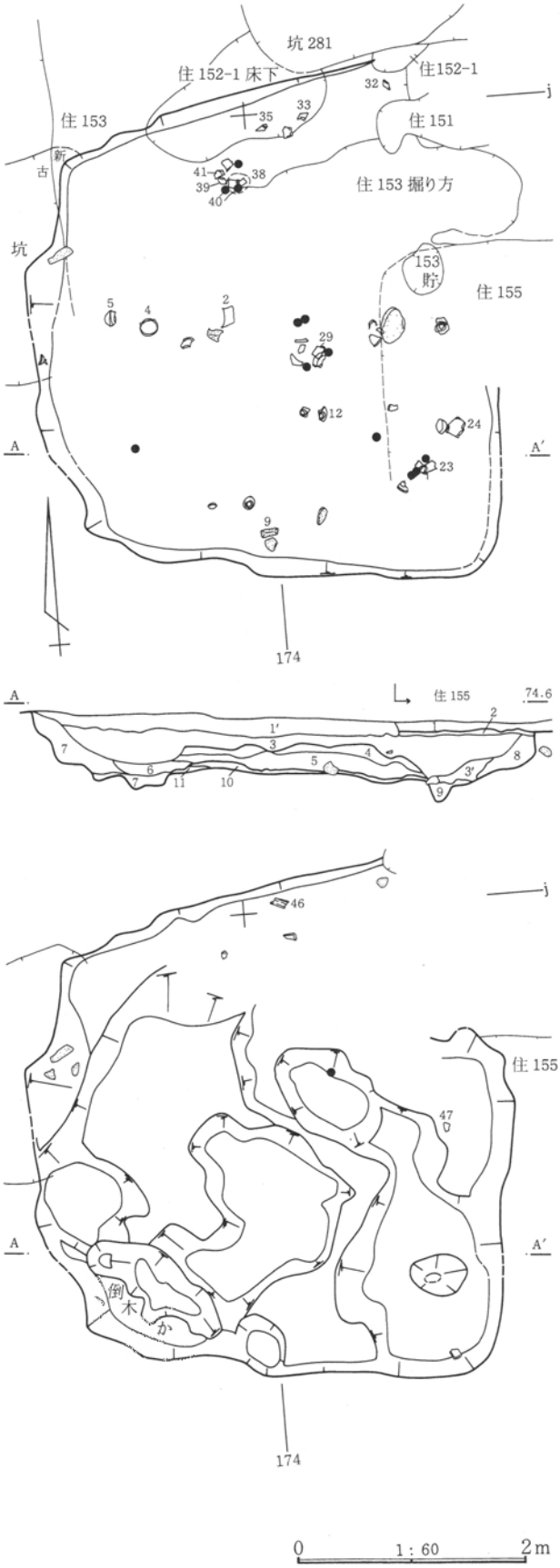


第442図　住居跡159遺物図

位置はＱ大区ｌ171に、調査面はローム層漸移からローム層上面で標高74.45m。住居跡161の残存は近掘方に近い痕跡状態にあり、第446図は調査できた範囲を示す。下方に住居跡114―1・2があり、南側で住居跡145と重なるが新古は不明である。遺物は第447図に示したが10世紀代である。

住居跡162　（第448図、図版79）

位置はＱ大区ｇ173に，調査面はローム層上面で標高74.35m。重複は後出の小ピット１穴を除きない。平面形は住居として不整気味である。規模は南北で301cm、東西250＋αcm、方向不明瞭である。施設としては小ピットが掘方で認められたが関連は不明。遺物は極めて少ない。



第443図　住居跡160遺構図

1、黒褐（10YR3/1）含まず。1′はほぼ同じ。
2、黒褐（10YR3/1）少し締る。住155床層。
3、黒褐（10YR3/1）1とほぼ同じ。小礫含む。軟。3′はわずか締る。
4、黒褐（10YR3/1）間にロームブロックを主とする層が1層、部分2層を含む床層。
5、黒褐（10YR3/1）わずかローム小粒・焼土粒を含む。軟。
6、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化を含む。軟。
7、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化を多く含む。
8、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漂白化を含む。
9、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックまじえる。
10、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック少しまじえ、締る。床層。
11、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックさらに多い。締る。床層。

住居跡163　（第449・450図、図版79・195）

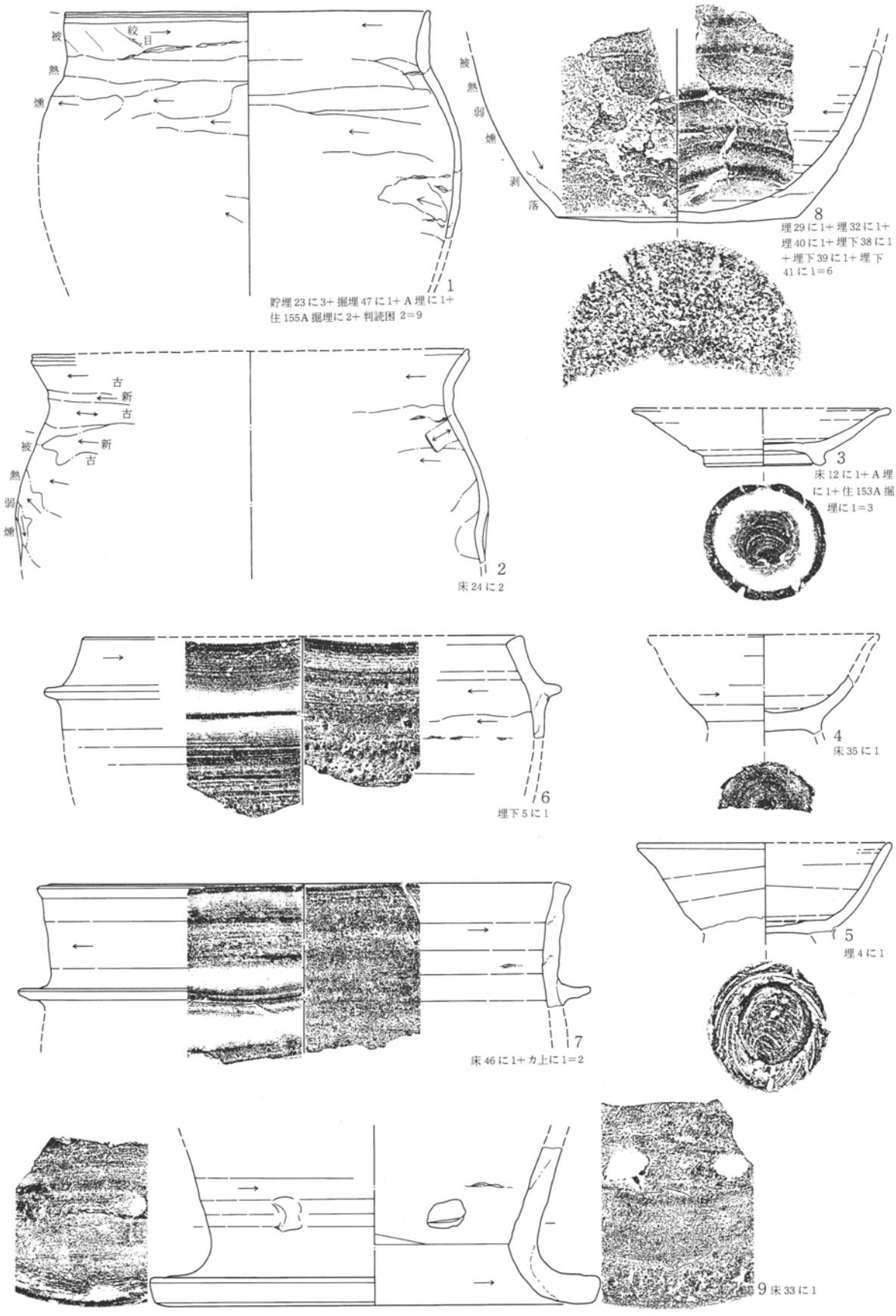
位置はＱ大区lm16に、調査面はローム層上面標高74.45m。重複は住居跡125・142・143、溝跡93、坑250に切られる。遺存は痕跡程度、施設は掘方で小穴が認められた。遺物は第450図に掲げたが出土は埋土と注記文字判読できない小片のため信頼度は薄い。規模は南北№213＋αcm、東西で133＋αcm、方向は不明瞭である。総体的には９世紀中頃で、同図２のみが肉厚の坏、埦片で10世紀代が考えられる。

住居跡164　（第451図、図版79・80）

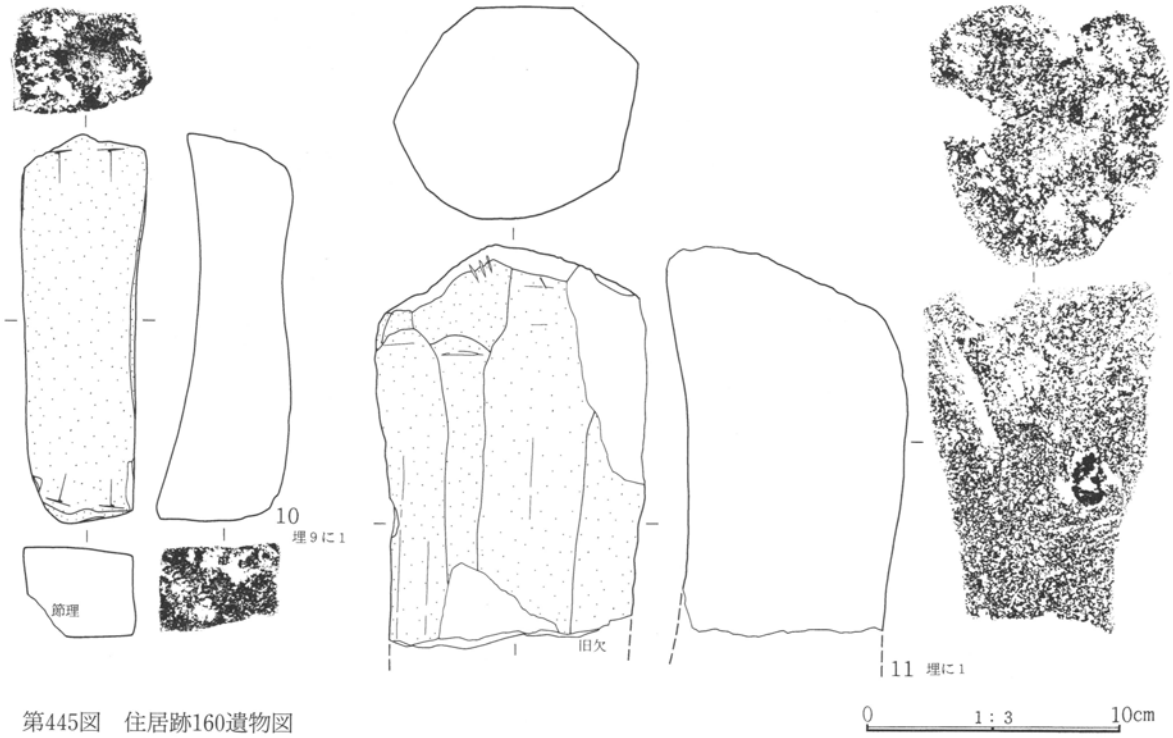
位置はＱ大区fg173に、調査面はローム層上層で標高74.3m。重複なし。平面形は住居として不整の感あり。施設として掘方に土坑あり、床面も不明瞭で住居ではない可能性もあり。規模は南北で232＋αcm、東西で128＋αcm、方位は不明瞭であるが東偏してある。遺物は微弱であった。

住居跡165　（第452図、図版80）

位置はＱ大区hi172に、調査面はローム層上面74.35mにある。重複は住居跡156が下方、先行坑279、小穴に切られる。施設として住居跡156と重さなっていたため、掘方調査がでず、同住居跡の掘方の一部が同165となる可能性もある。床面の存在は弱く、住居跡としての可能性も再考の余地あり。規模は南北289cm、東西193＋αcm、方向は東壁でN15°30′Eを測り、珍しく東偏する。遺物は微弱であった。



第444図　住居跡160遺物図



第445図　住居跡160遺物図

住居跡166　（第453・454図、図版80・195）

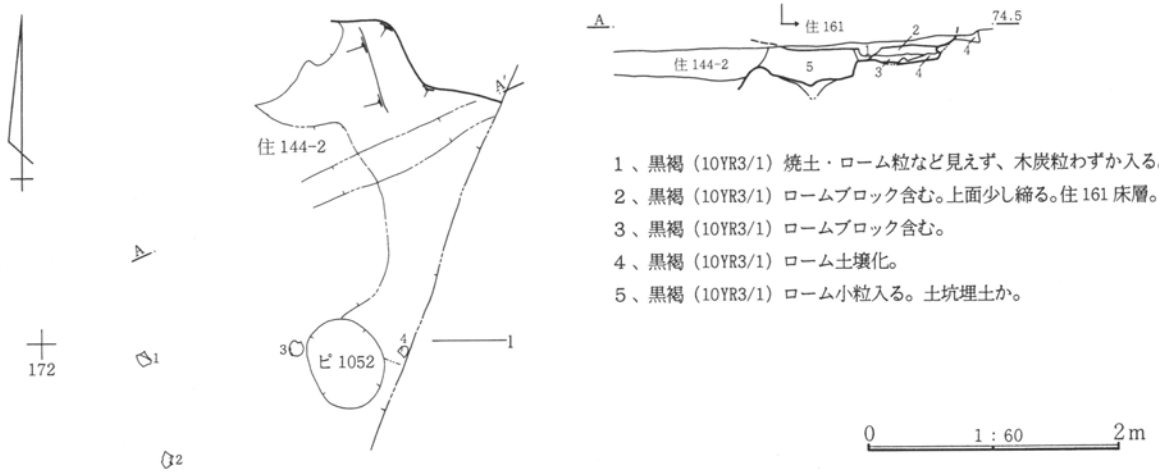
位置はＱ大区jk175・176に、調査面はローム層上面標高74.5m。重複は住居跡146・147、小ピットが切り、後出の倒木が北東隅を乱す。規模は南北508cm、東西517＋αcm、方向は中軸と目される位置でおよそN1°Wを測る。施設として炉跡が北寄りの中央に、柱穴が南東側標高73.80の底位置をもって存在し、掘方では中央を高め周壁に沿う溝状の床下施設が存在していた。遺物は第454図に掲げたように古墳時代前期の個体で、住居の機能も同期。

住居跡167　（第455・456図、図版80・81・195・196）

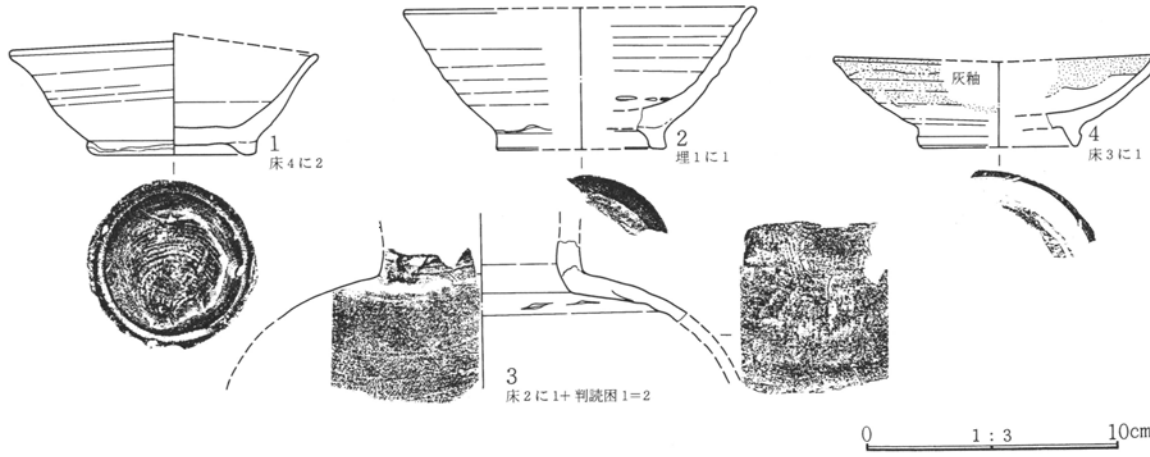
位置はＱ大区ｊ176に、調査面はローム層上面標高74.5m。重複は住居跡166と重さなり、同166が先行。ピ1202に切られる。下方には住居跡166が存在するため掘方調査は出来なかった。規模は、南北295cm、東西235cm、方向は中軸でN2°30′Wを測る。施設は東壁に竈、南東隅に貯蔵穴のわずかな凹みがある。遺物は、第456図のとおり、９世紀中頃の個体で、住居機能もその頃。

住居跡168　（第457・458図、図版81・196）

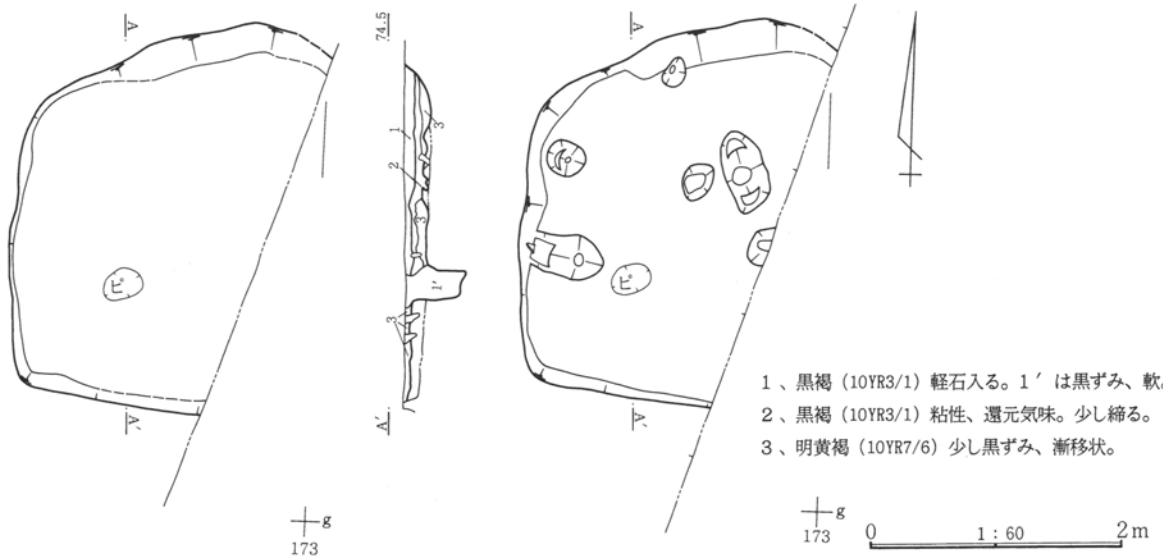
位置はＱ大区ｉ175・176に、調査面はローム層上面標高74.55m。重複は坑321・320・323、ピ1221が後出してある。調査面は既に床層で、第457図は掘方である。規模は南北331cm、東西307cm、方向は中軸でおよそN2°15′Wを測る。施設として竈跡は見えず南壁下中央付近に貯蔵穴らしき小穴が存在していた。住居跡168の住居形態は、平面隋円気味の隅丸方形で、不整ではあるが、周囲はローム層上面であり、部分的には少し締る貼床層が存在しているため住居としうる遺構である。遺物を見ると10世紀頃の須恵器埦が第458図のとおりであり、住居平面形もその頃に見えるが竈は削失されたのか見えず貯蔵穴に思える小穴も西に寄り過ぎの感がある。その頃の貯蔵穴は当遺跡の場合、廃棄時にはほとんど埋まり込んでしまうことが多く、土層断面注４がその点を示唆しているか疑問の多い住居跡である。



第446図　住居跡161遺構図



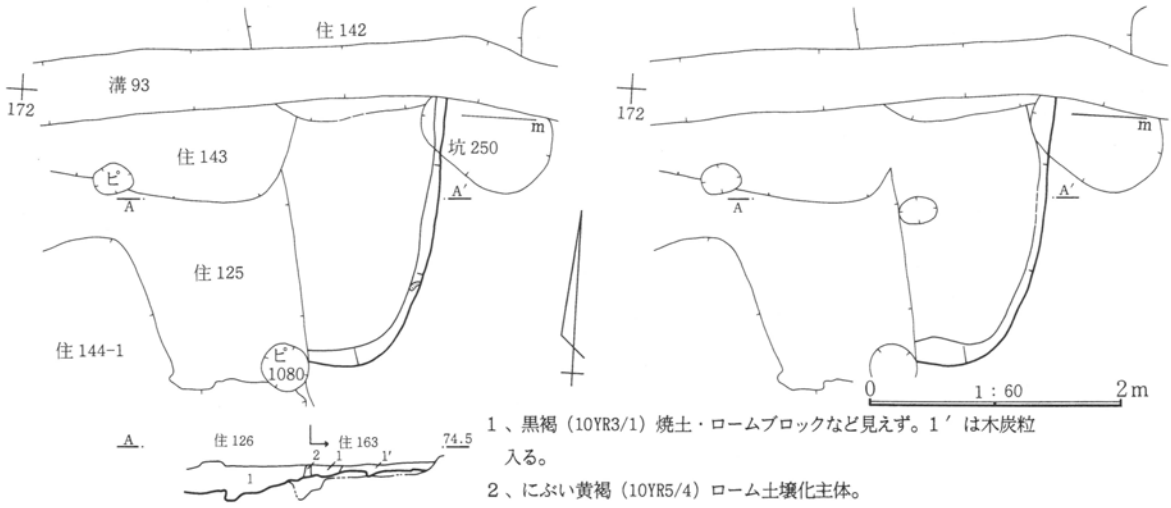
第447図　住居跡161遺物図



第448図　住居跡162遺構図

住居跡169　（第459・460・461・462・463図、図版81・196・197）

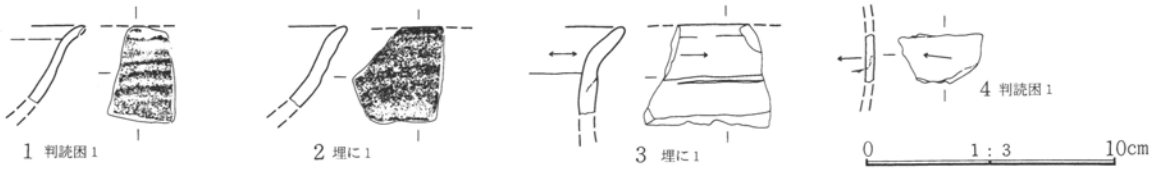
位置はQ大区hi176・177にある。調査面はローム層上面標高74.5mである。重複は井戸跡20、溝跡112、坑340・388・324、ピ195・196・197が後出してある。この中で溝跡112は住居跡北壁を沿うように当初発見され、



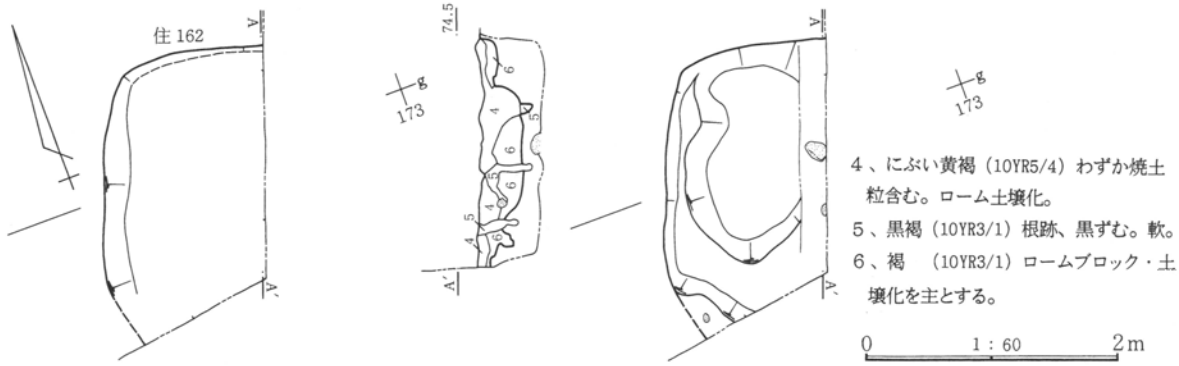
1、黒褐（10YR3/1）焼土・ロームブロックなど見えず。1′は木炭粒入る。

2、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

第449図　住居跡163遺構図



第450図　住居跡163遺物図

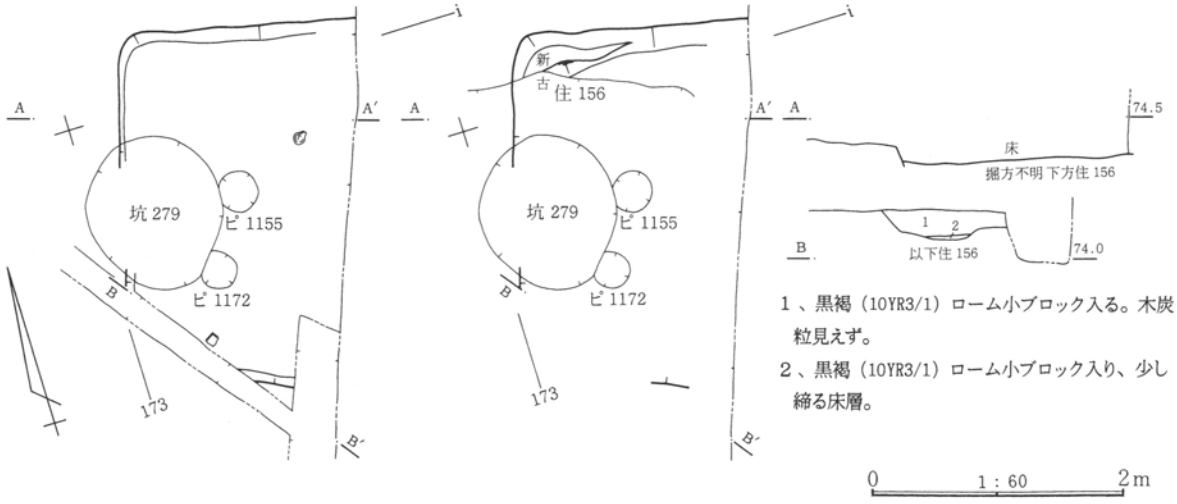


4、にぶい黄褐（10YR5/4）わずか焼土粒含む。ローム土壌化。

5、黒褐（10YR3/1）根跡、黒ずむ。軟。

6、褐　（10YR3/1）ロームブロック・土壌化を主とする。

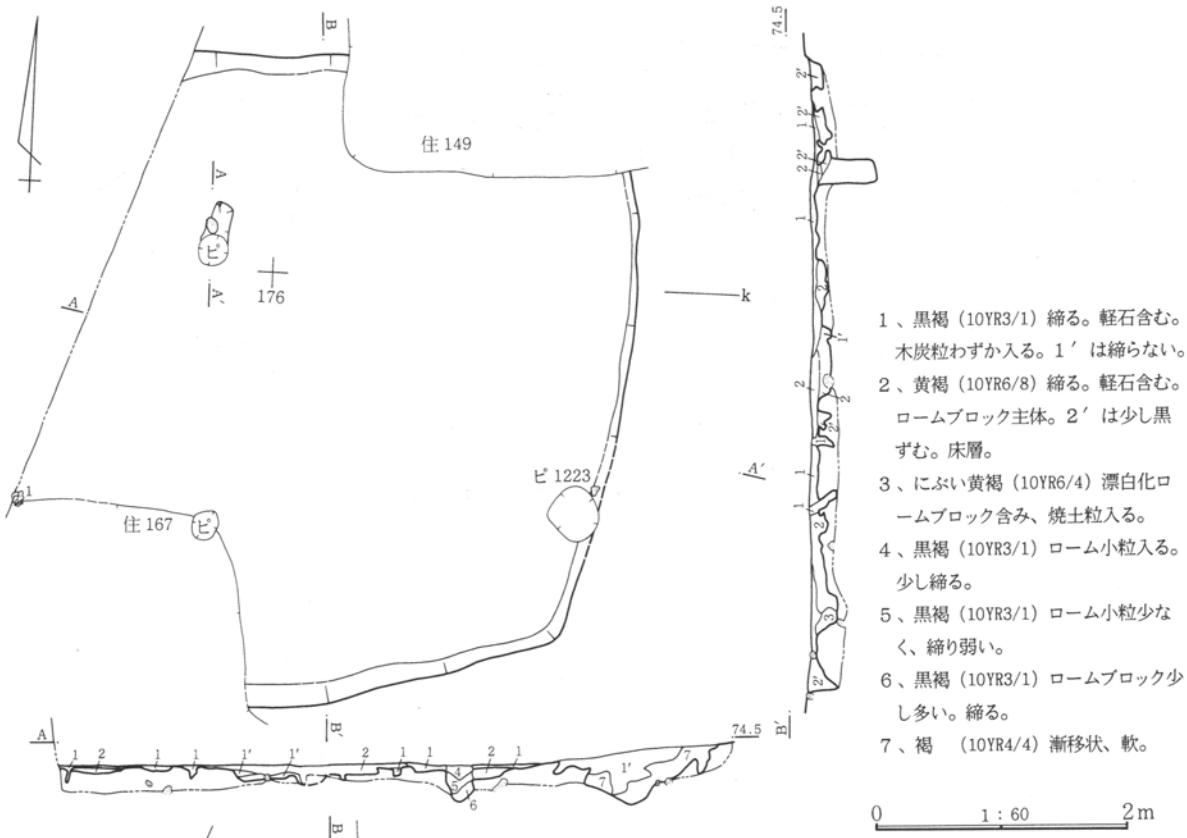
第451図　住居跡164遺構図

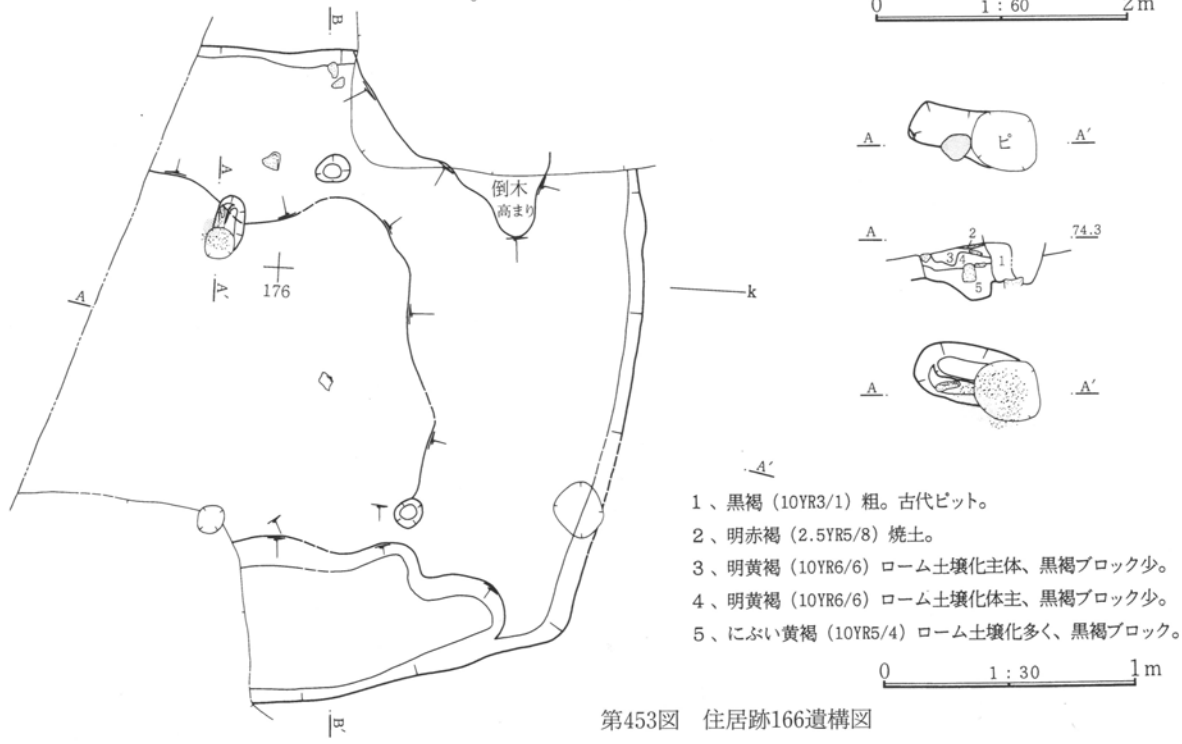


1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入る。木炭粒見えず。

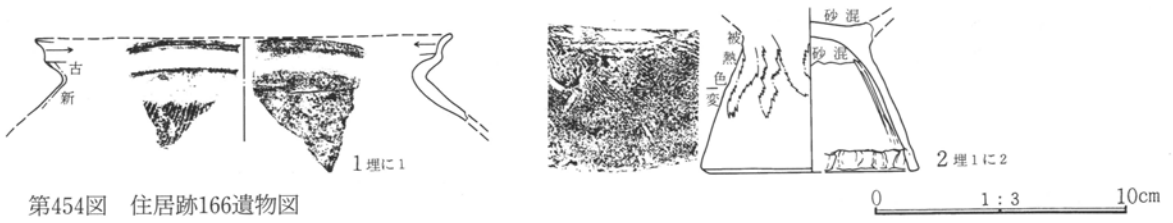
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入り、少し締る床層。

第452図　住居跡165遺構図

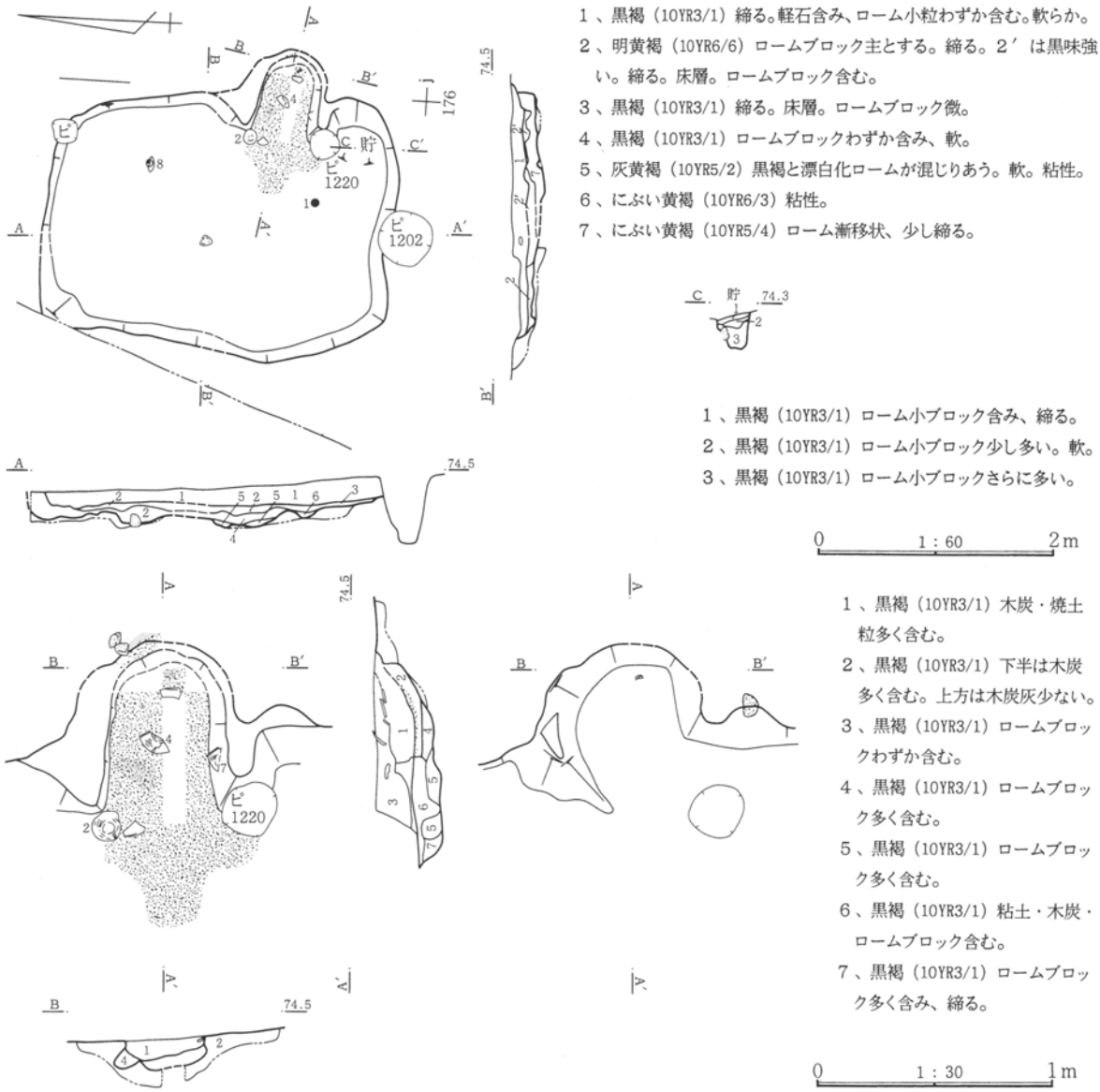




第453図　住居跡166遺構図

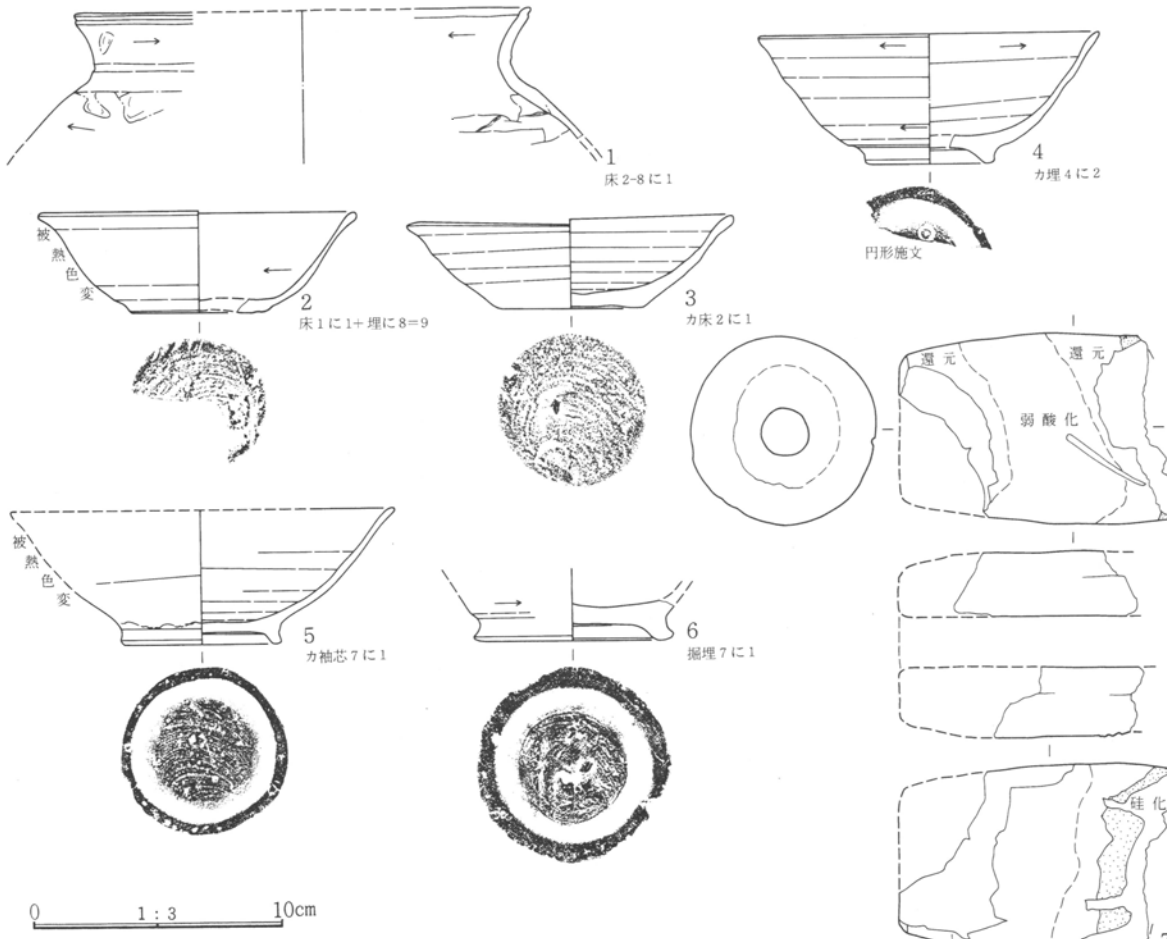


第454図　住居跡166遺物図

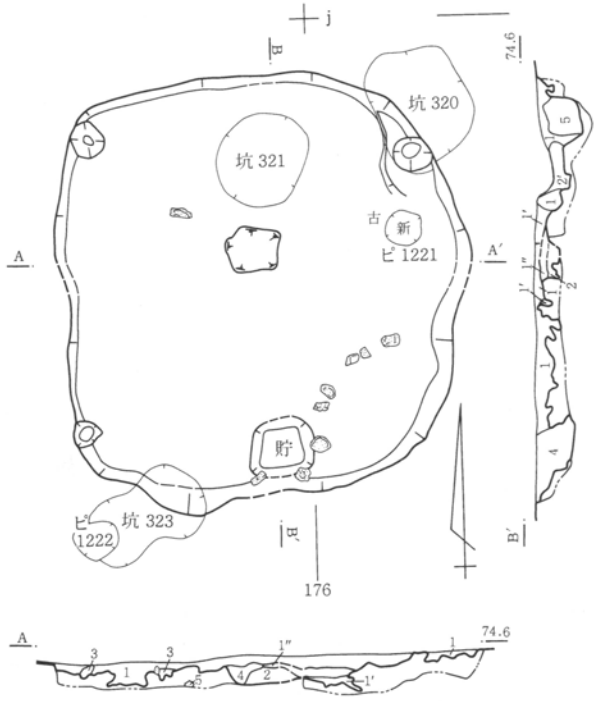


第455図　住居跡167遺構図

住居跡169の東壁を越えて延びており、住居跡169の最終埋没に近い頃、北壁走行に沿い設けられたと想起することができた。第459図中、土層断面Ｂの北端側に未注記個所は第494図に示した溝112の個所で注2・3に相当しているが、整理段階で検討した結果、注2・3は住居跡169の北壁下に存在した溝状の掘方の全幅を捉えたものと考えられるのであり注2・3・4は住居跡169の掘方埋土と考えたい。したがって溝跡112の形状と深さはＢ断面の成り状態と考えられる。住居跡169の規模は南北577cm、東西535＋αcm（540cm強）、方向は想定中軸でN3°30′Wを測る。施設ほかとして、先ず床面上の木炭と木炭粒、床面の部分的焼土面化がある。木炭の分布は、一般に焼失と云われるほど多くはないものの、ある程度、建築材が残存している中で燃焼した結果と考えている。第459図中の細綱は焼土、ザラザラ目は木炭と木炭粒、細線の集合体は木炭である。炉跡は床面における各所の焼土化のため不明瞭である。貯蔵穴も不明。柱穴は調査地外に北西柱穴が推定されるほか３穴を認め、南西柱穴底面は標高73.94m。掘方は中央部を高め、壁下を溝状に凹めた床下構造を持ち、部分的に土橋状の掘り残しがある。その西溝中に新古切合いのある小穴を認めた、古側の底面標高73.84m、新側で同74.07mを測る。遺物は北西側に集中して認められ、遺物図中の取り上げ注記溝112は前述のとおり誤まり

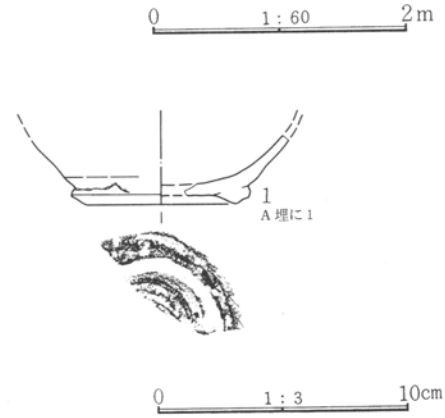


第456図　住居跡167遺物図

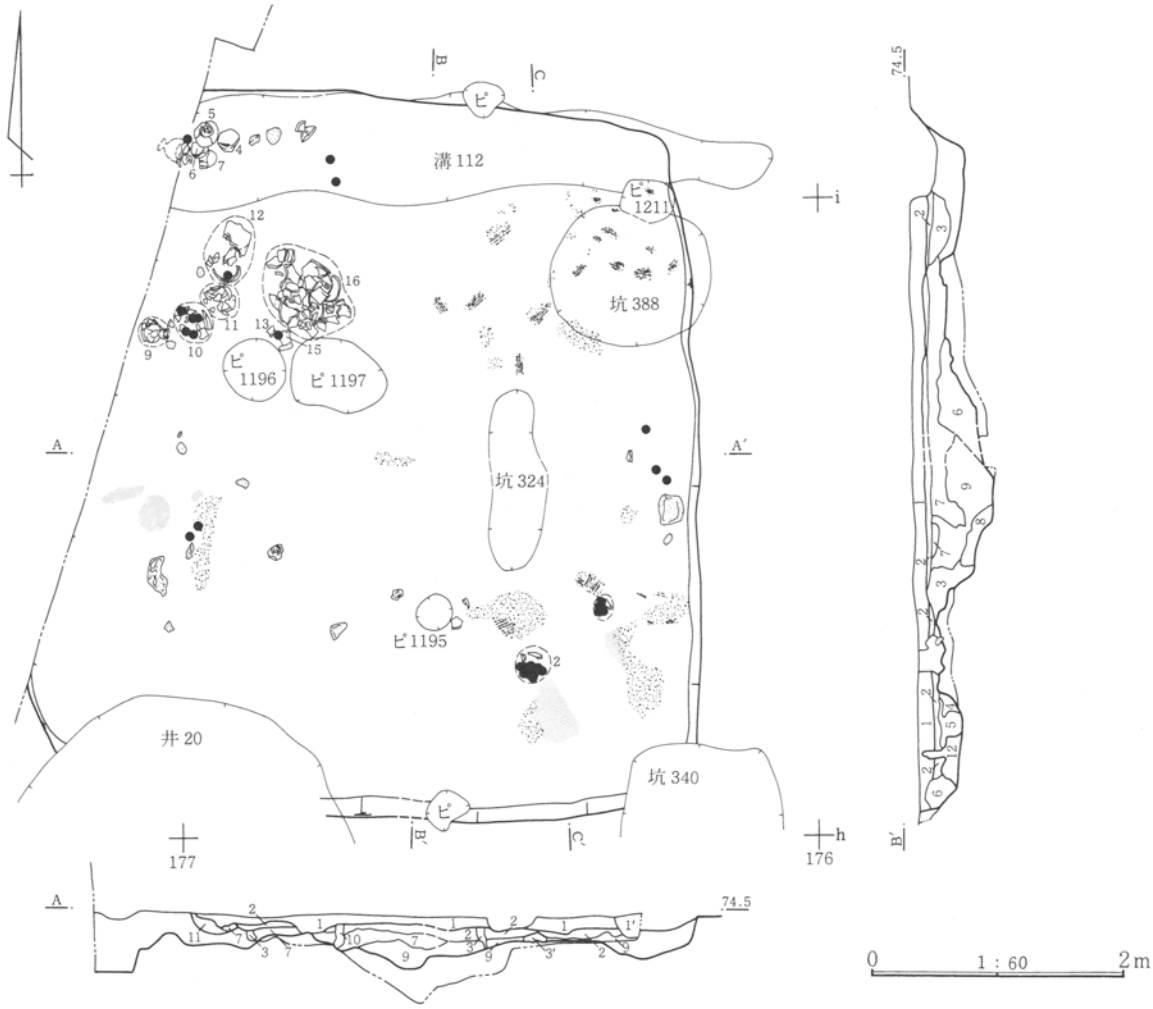


第457図　住居跡168遺構図

1、黒褐（10YR3/1）ローム漸移状、軟。1′は少し黒い。1″は少し締る。部分床あり。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入る。2′は少し締る。
3、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム土壌化。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含み、軟。
5、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く含む。



第458図　住居跡168遺物図



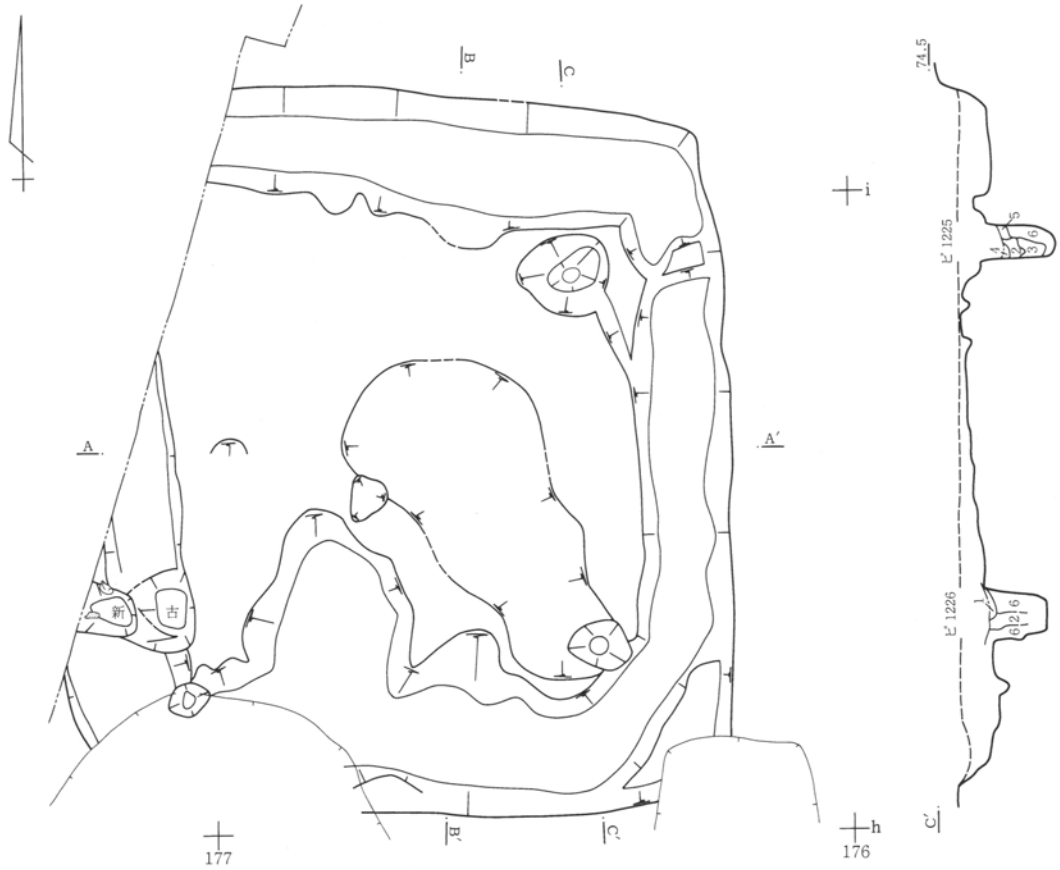
１、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。1′は多い。
２、黒褐（10YR3/1）木炭粒含む。締る。床層。ローム小粒入る。
３、黒褐（10YR3/1）ローム小粒わずか入り、軟。3′は締る。床層。
４、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロック多く含む。
５、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロック多く含む。軟。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化、漸移的。
７、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含み、上面締る。
８、にぶい黄褐（10YR5/4）７層より黒い。
９、黒　（10YR2/1）倒木か、軽石見えず。
10、黒　（10YR2/1）軽石入り、軟。
11、黒褐（10YR3/1）焼土粒多い。別住居カマド土。
12、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

第459図　住居跡169遺構図

の可能性大である。遺物種に高坏、器台、台付甕大・小、壺大・小、甑があり、多くの個体に埋土とあっても一部は床に接している場合が多いのでまとまりとしての一括性を認めてよいと云える。なお当遺跡の住居跡埋土の考え方であるが、当遺跡の住居跡の残存は上半の大半を失なっている場合が多くあり、当遺跡住居跡埋土は、他遺跡からすれば埋没土下方が意味される。遺物の時期は古墳時代前期で、住居機能も同期である。

住居跡171　（第464・・65図、図版81・197）

位置は、Ｑ大区hi175にあり、調査面はローム層上面から同漸移層で標高74.55mである。重複は、住居相互とは無く、坑307・308・311、無番坑２つなどが後出してある。平面形らやや歪む隅丸の逆台形状を呈している。規模は南北336cm、東西297cm、方向は中軸でN5°45′Wを測る。施設として東壁に竈が、南西端で貯蔵穴が床面ではほとんど埋没し、掘方では底面標高74.12mで掘方平坦部とは15cmの差がある。掘方として平面形



１、黒褐（10YR3/1）軟らか、ロームブロック多く含む。
２、黒褐（10YR3/1）黒味あり、軟。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入り、少し締る。
４、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化、軟。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

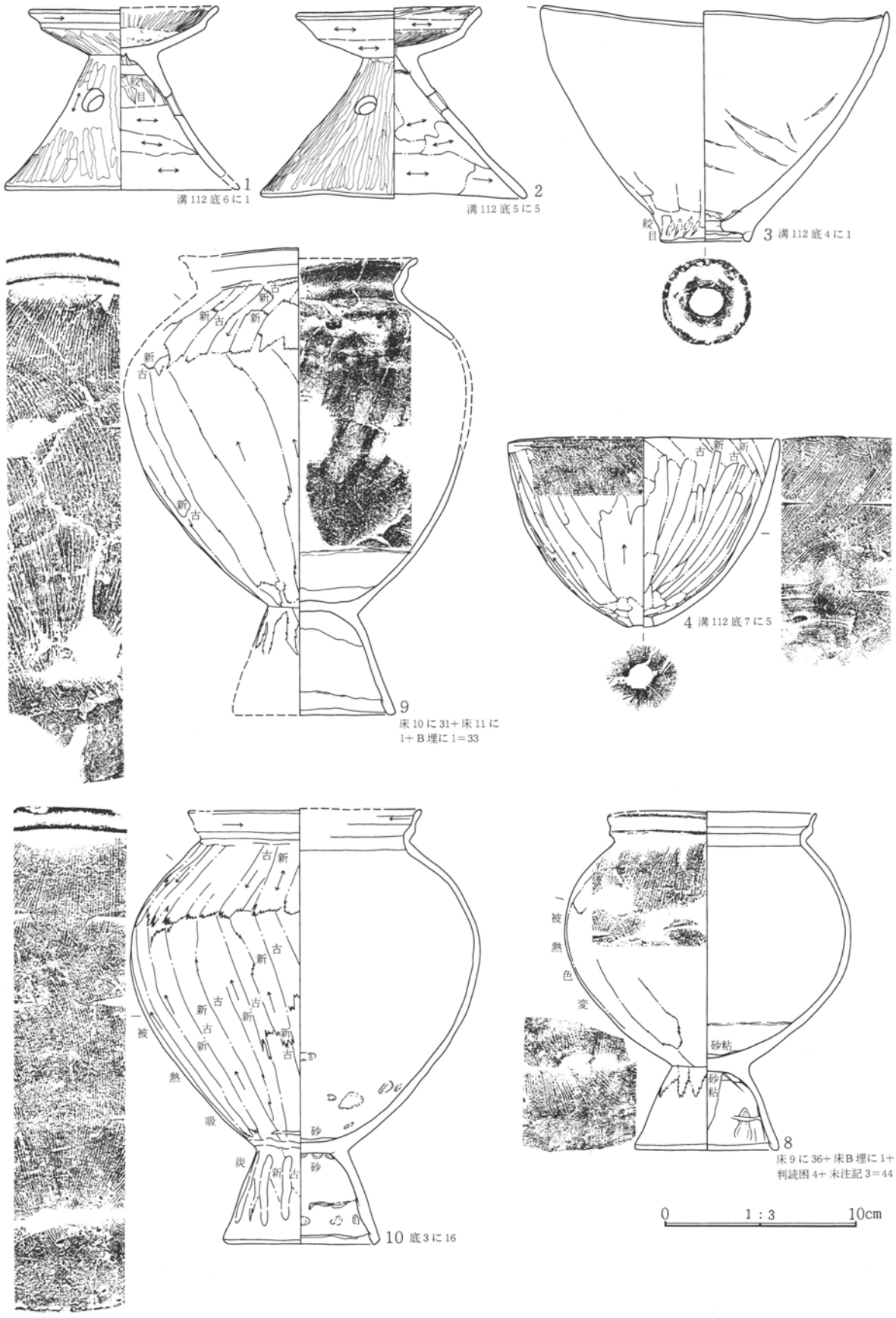
0　1：60　2m

第460図　住居跡169遺構図

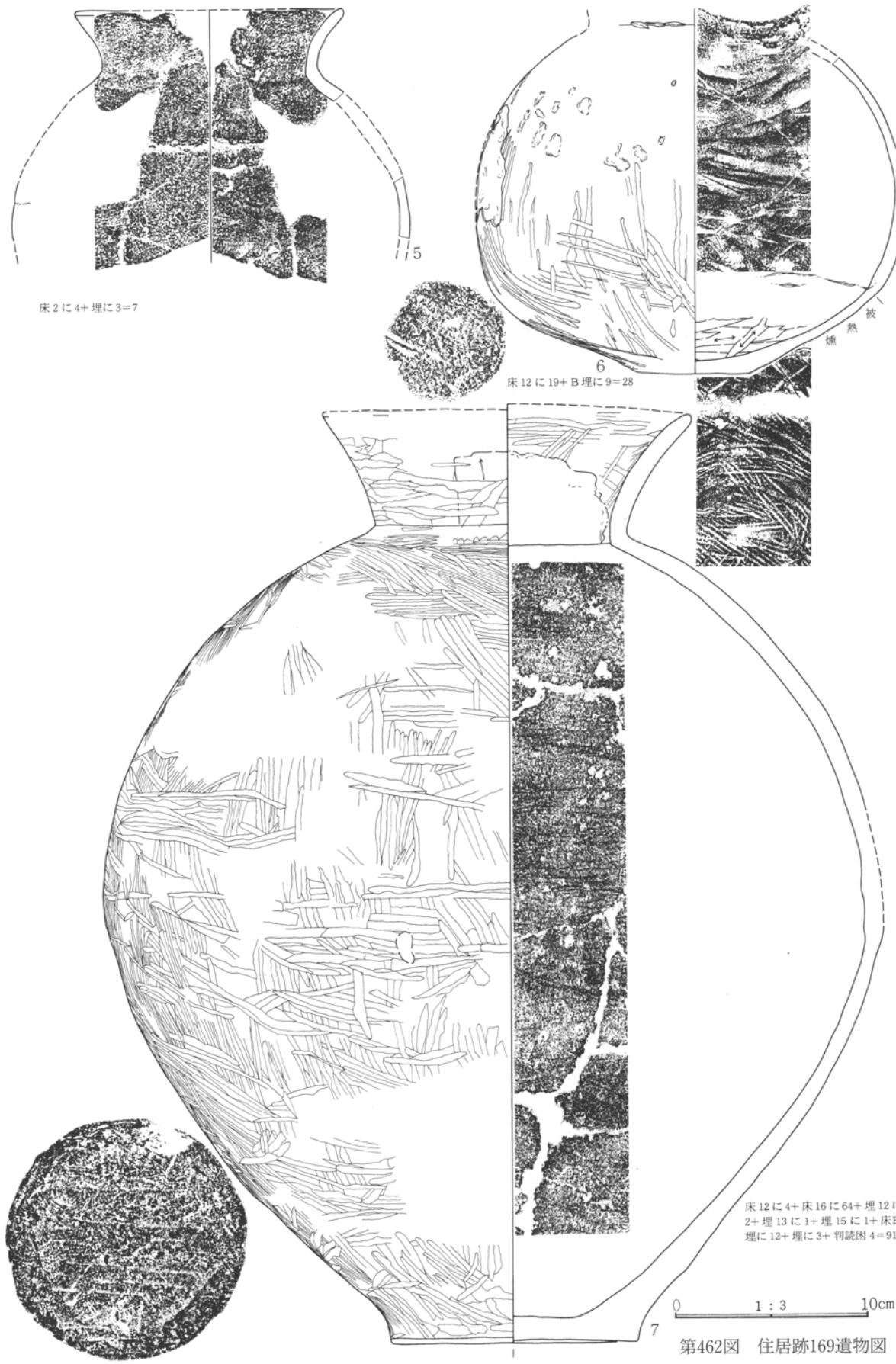
正円に近い床下坑は見えず、竈前の床下坑は存在する。竈前の床下坑は平坦部から17cmの深さを測る。竈は両袖に石材を用い、中央左寄りに支脚様の石材が立石状に存在しており、その下方には、構築に係わるらしい浅い小穴がある。さらに竈底面には灰層が部分的に残っていた。遺物は第465図掲げた。特に注意されるのは坏、埦類に片口様に口縁を凹めた個体が同図4・5・7に見られ目的は不明確ながら何んらかの生産目的のための用器を思わせる。灰釉陶器は同図11・12があり、その碗は浸掛で灰釉の２度掛を行なっている。技法上の点は同図２に糸切損じ糸切面が２面あり、同図４に土師器で通有の指おさえが下半に見られる。遺物の時期は、同図１が９世紀後半に見えるほか10世紀前半の個体と考えられ、住居機能も同期。

住居跡172　（第466・467・468図、図版82・197・198）

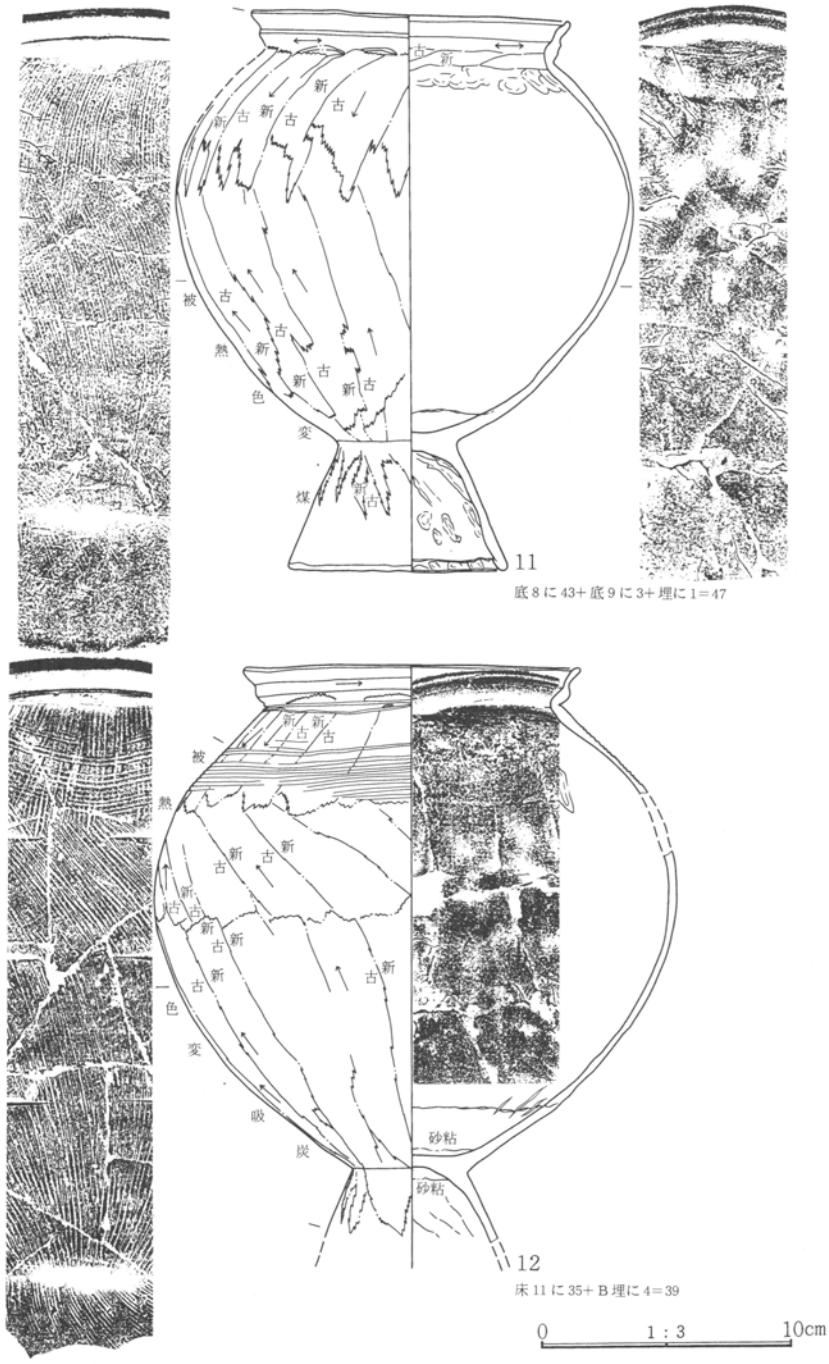
位置はＱ大区ij174・175にあり、調査面はローム層上面標高74.5mである。重複は坑302・303・304・318が後出している。平面形は二辺の長い隅丸逆台形を呈し、規模は南北458cm、東西368cm、方向は中軸でN11°45′Wを測る。施設として東壁に竈、南東隅に貯蔵穴、貯蔵穴当初から掘り上げてしまっているので廃棄時の埋まり込みがどの程度であったのかは不明であるが掘方底面で標高74.07m、平坦部から13cmの深さである。掘方は、円形に近い床下坑２と南壁下の中央付近に灰層を伴なう楕円形の床下坑がある。床下坑の深さは北で底面同74.16、中央で同74.09、南で同74.09を測る。竈前の床下坑は竈寄りの想定焚口直下付近に円形の土坑



第461図　住居跡169遺物図



第462図　住居跡169遺物図

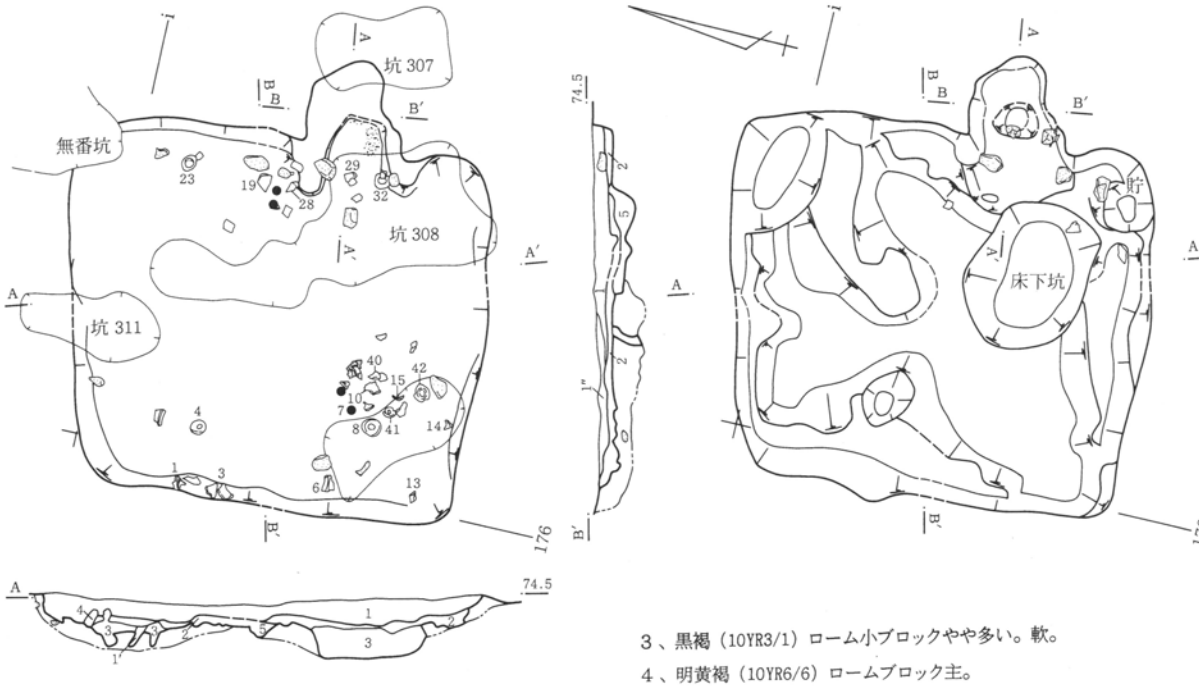


第463図　住居跡169遺物図

が見られるが竈構築に係わる土坑かは不明である。竈は、袖に立石の袖石があり、底面に部分的に灰、焼土面が存在していた。同掘方には灰を含む面が奥まで続いており、前身竈存在の可能性大である。遺物は第467・468図に掲げた。特記点は前出の住居跡171に３点見られた片口様の須恵器坏が同図７にも存在している。同図15は、製作法の粘土挽目を割れ口から辿り、器形の天地を決定したが、逆向きにすると甑となるが、同形の甑と製作法が異るため、製作上の天地を重んじた。そのため不明器種でもある。同図13は羽釜であり出現初期に見える内傾さと、鍔から口縁までの短かさが見える。同図14は羽釜ではなく口の広がり、底側に近いヵ所でも細まらない傾向から甑を考えたい。遺物の時期は、９世紀後半を主にしているが同図14が羽釜であれば時期的に下るが、14は床面出土でしかも入念様でもあり、９世紀後半を考えたい。14の存在によって羽釜出現期の問題に係わってくる。住居機能も９世紀後半である。

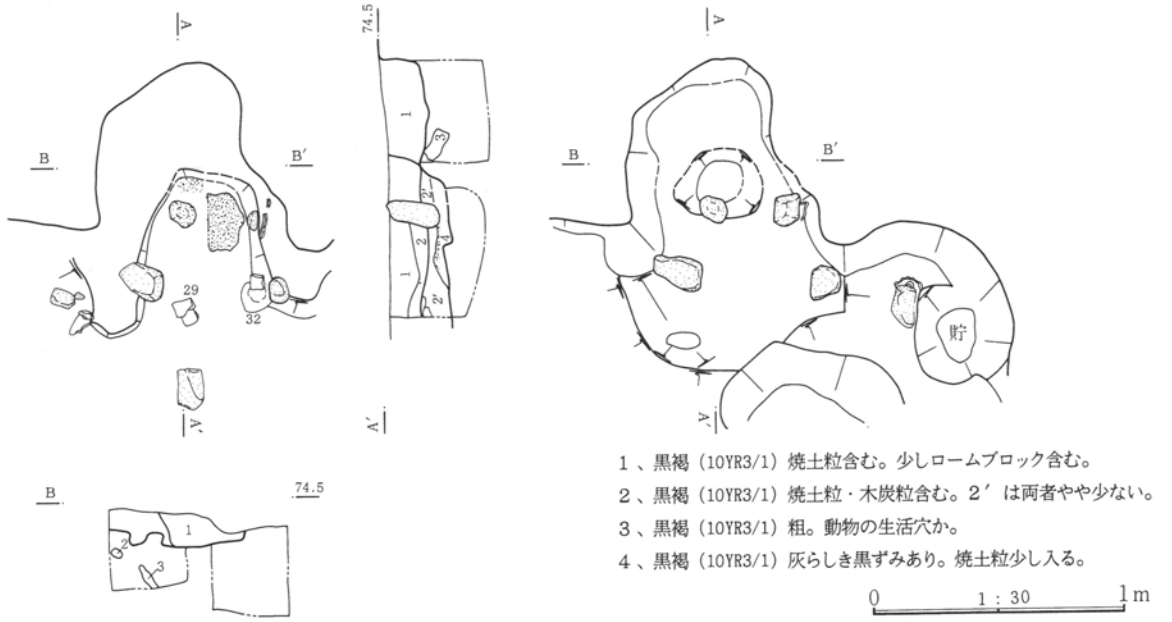
住居跡173　（第469・470図、図版82・198）

位置はＱ大区ｈ177にあり、調査面は住居跡169の埋土上面標高74.4mである。重複は先行して古墳時代前期の同169が先行して存在する。規模は竈左端から貯蔵穴南端までの長さ125cmを測り、方向は厳密には西方が調査地外にあるため不明。施設としては、東壁に付くと考えられる竈、南東隅に存在すると考えられる貯蔵穴がある。第469図は掘方図である。竈は左袖に立石がかかり、平面は少し掘過ぎていると推測される。その



１、黒褐（10YR3/1）ローム小粒わずか含む。１′は含まず。１″はＡｓ－Ｂ含む。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、少し締る。床層。
３、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックやや多い。軟。
４、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主。
５、にぶい黄褐（10YR6/4）ロームブロック多い。

0　1：60　2m

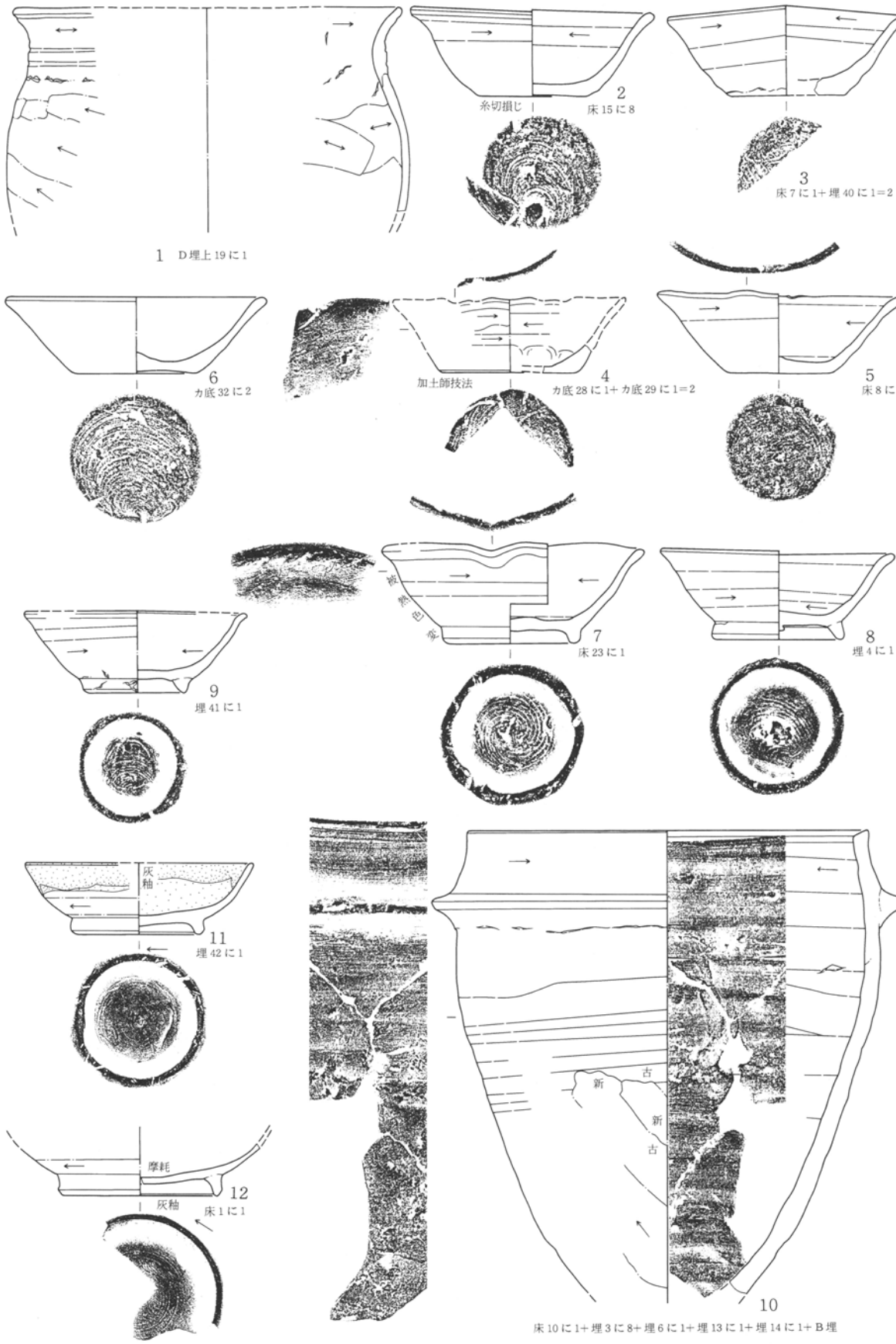


１、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。少しロームブロック含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒含む。２′は両者やや少ない。
３、黒褐（10YR3/1）粗。動物の生活穴か。
４、黒褐（10YR3/1）灰らしき黒ずみあり。焼土粒少し入る。

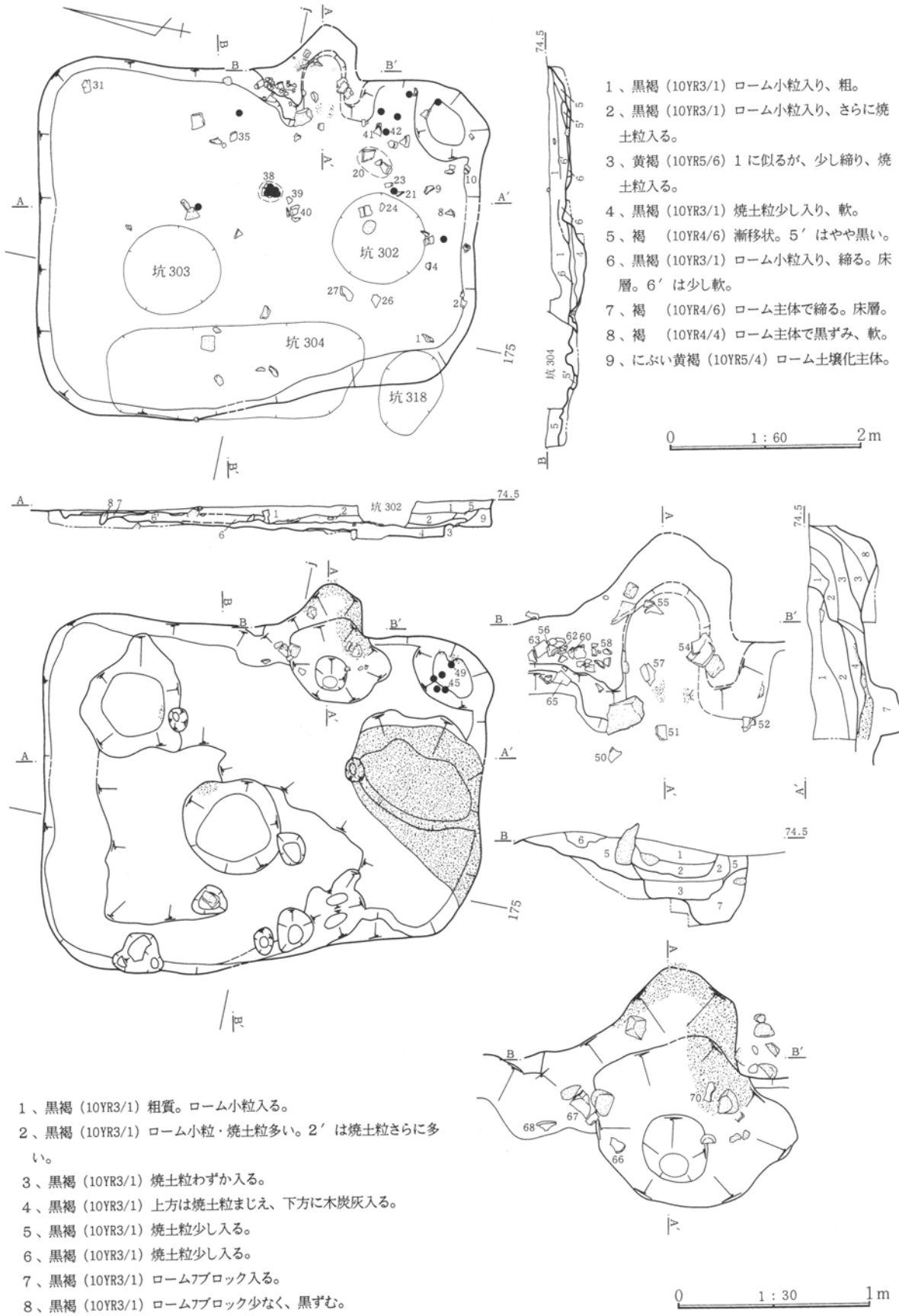
0　1：30　1m

第464図　住居跡171遺構図

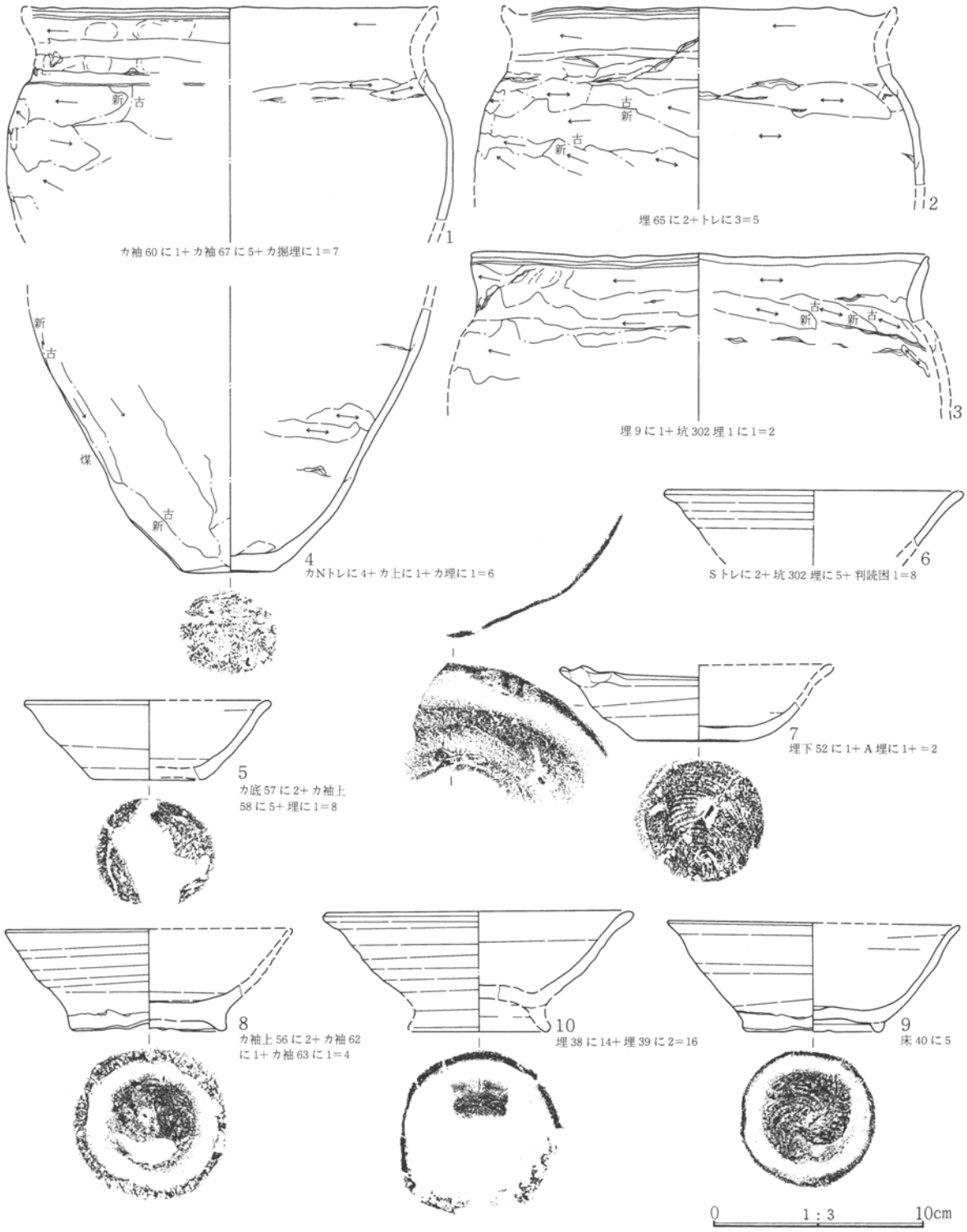
ことは掘方図が示すように右袖立石と対照的に位置し、直下に掘下の深部立上りが接している。土層断面４中のワラ灰については、現場において指先に灰をつまんで、揉んだ時、指先にケイ酸体に思えるザラ付きがあった場合に、ワラ灰もしくはケイ酸の多い単子葉植物灰ありとした。木炭灰は黒色灰を主として木炭粒を含む時に木灰と捉えた。灰とした時は、その両者のいずれか判断しなかった時である。貯蔵穴は上面に床層があったか確認していない。遺物は第470図のとおり10世紀後半の埦の出土があり、小片ではあるが、貯蔵穴埋土取上№１の出土であるので、この住居の機能時に関連するとある程度考えてよいであろう。



第465図　住居跡171遺物図



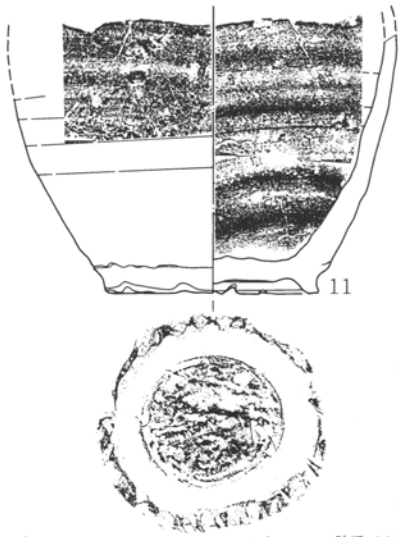
第466図　住居跡172遺構図



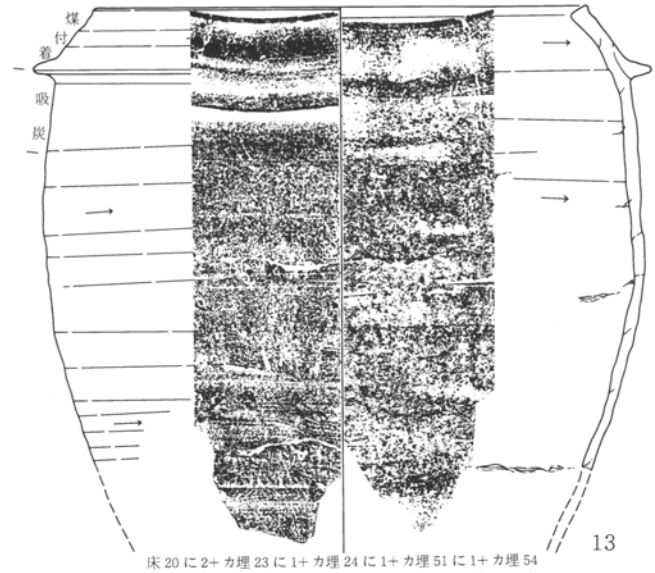
第467図　住居跡172遺物図

住居跡175　（第471・472図、図版82・198）

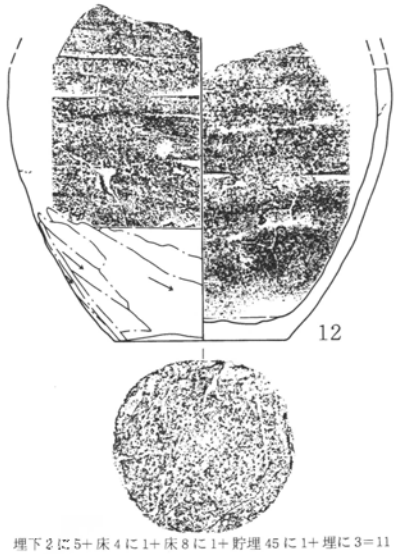
位置はＱ大区gh173にある。調査面はローム層上面標高74.3mである。重複は溝106を切り、住居跡157に切られる。第471図は掘方図で、状況は痕跡程度である。住居形態は隅丸方形と考えられるが、住居跡157が深いため、大半を失なう。そのため規模として測れるのは南壁の長さで東西350cmである。貯蔵穴上面は床層が覆っていたか否か、掘下げ中途で住居跡の存在に気付いたので明瞭でない。溝跡106についてこの場所ではっ



床21に1＋埋10に1＋埋下2に2＋カ床70に1＋貯埋49に1＋B埋に3＋判読困1＝10

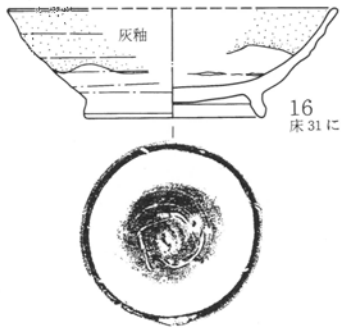


床20に2＋カ埋23に1＋カ埋24に1＋カ埋51に1＋カ埋54に2＋カ埋55に1＋カ埋65に2＋カ埋66に1＋カ埋に3＋カ上に3＝17

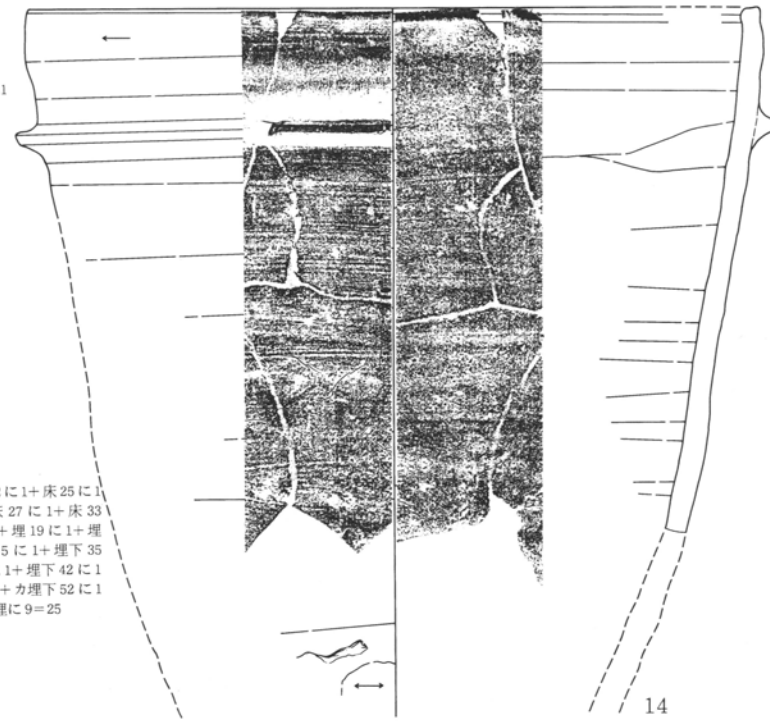


埋下2に5＋床4に1＋床8に1＋貯埋45に1＋埋に3＝11

埋下35に1＋C埋に1＝2



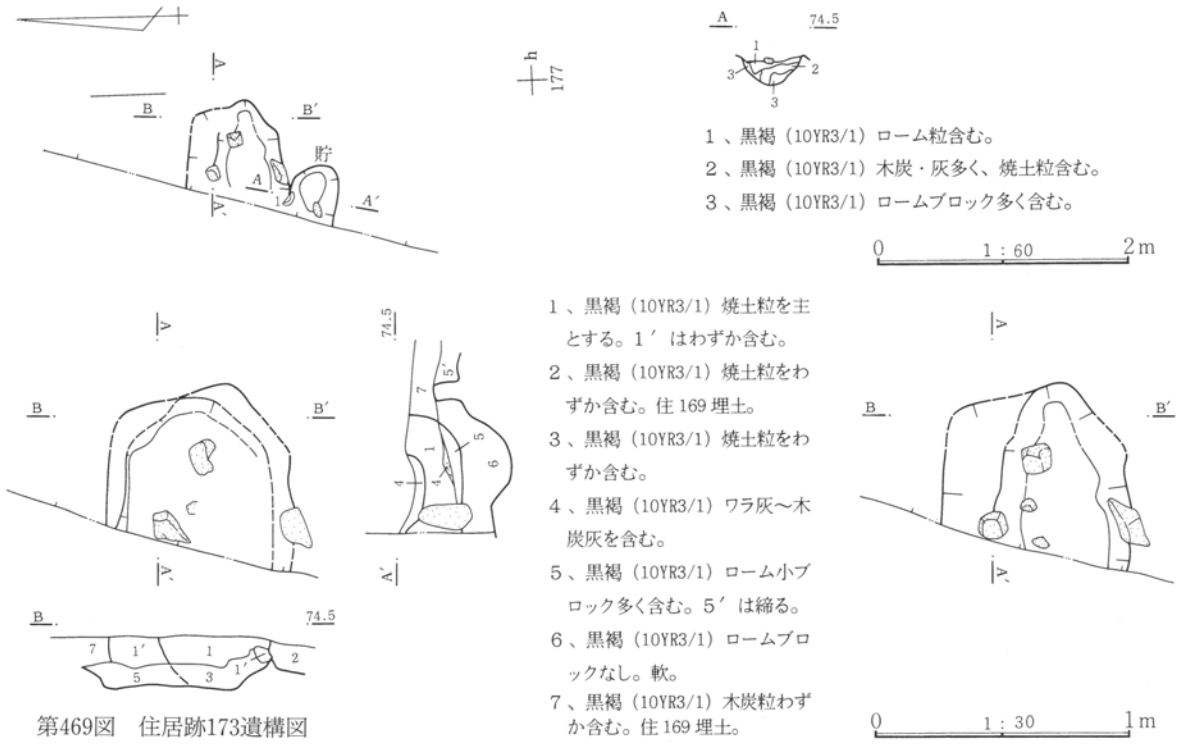
床31に1



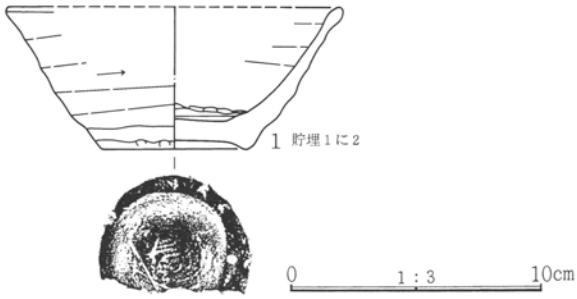
床20に1＋床22に1＋床25に1＋床26に1＋床27に1＋床33に1＋埋18に1＋埋19に1＋埋下1に1＋埋下5に1＋埋下35に1＋埋下41に1＋埋下42に1＋カ埋下50に1＋カ埋下52に1＋カ掘埋に1＋埋に9＝25

0　1：3　10cm

第468図　住居跡172遺物図

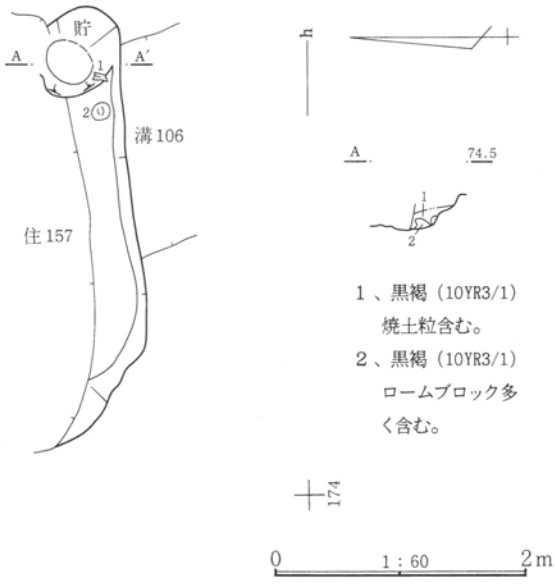


第469図　住居跡173遺構図

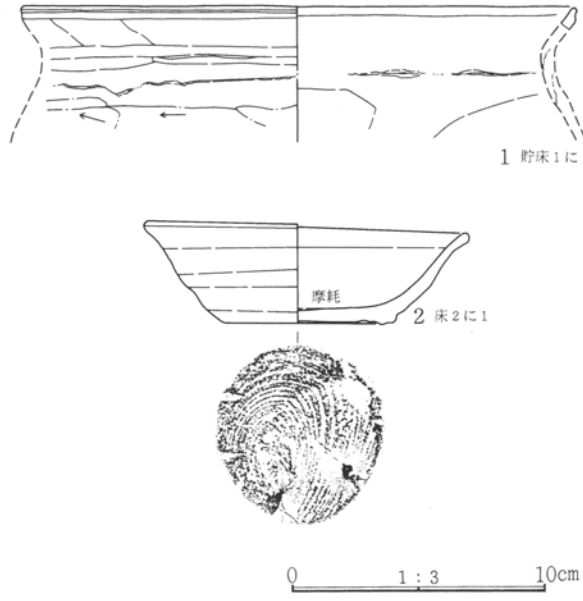


第470図　住居跡173遺物図

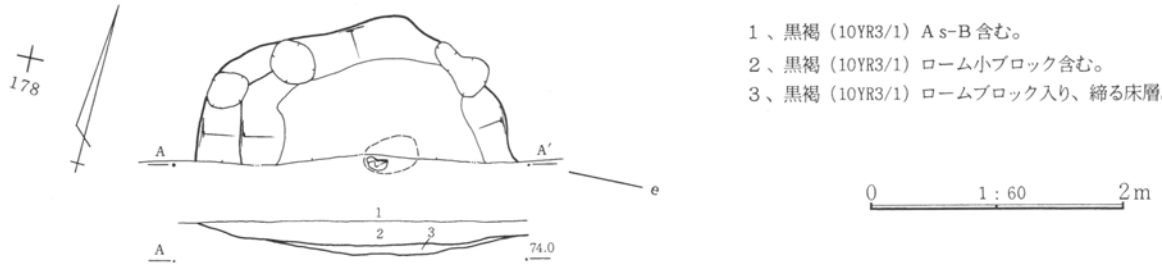
きり切っていたものの、以北にどのように重複したのか不明であった。住居跡175は10世紀後半の遺物が量をもって出土しているので層位上の重複を別にしても、当住居の第472図に示した個体が９世紀後半頃であるので、その新旧は推奨できる。同図２は完器であり、床面からの出土である。土師器甕同図１と同期であり一括性ありとしてよい。



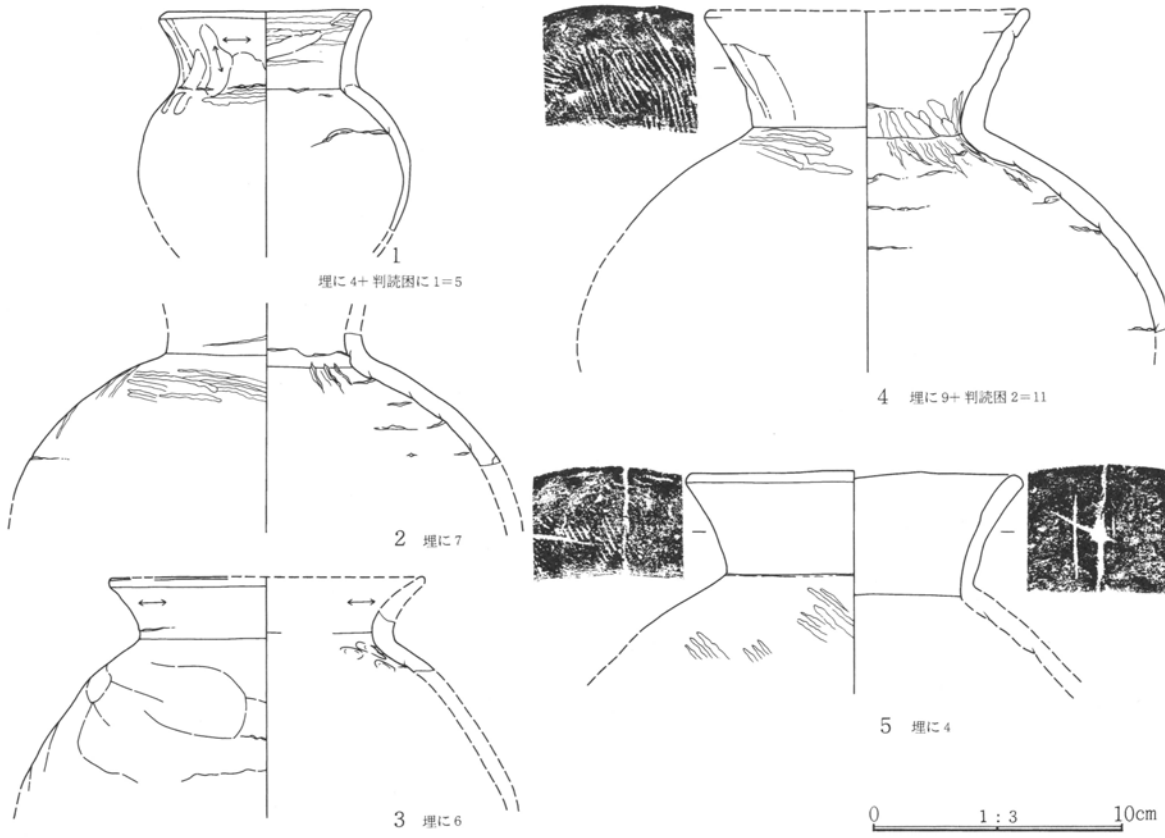
第471図　住居跡175遺構図



第472図　住居跡175遺物図



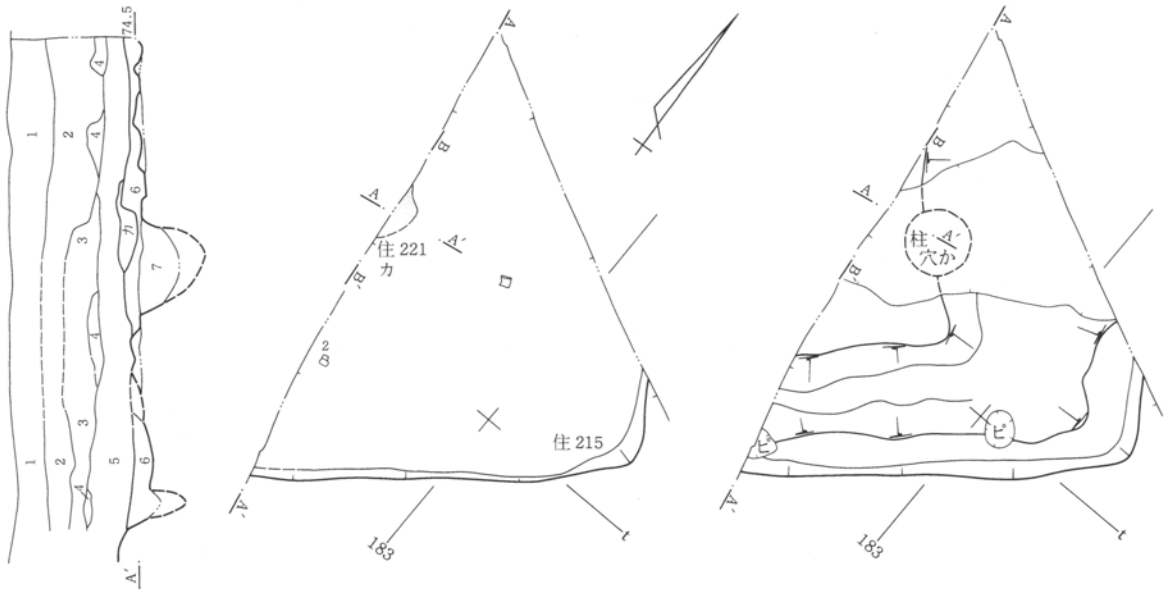
第473図　住居跡212遺構図



第474図　住居跡212遺物図

住居跡212　（第473・474図、図版83・198）

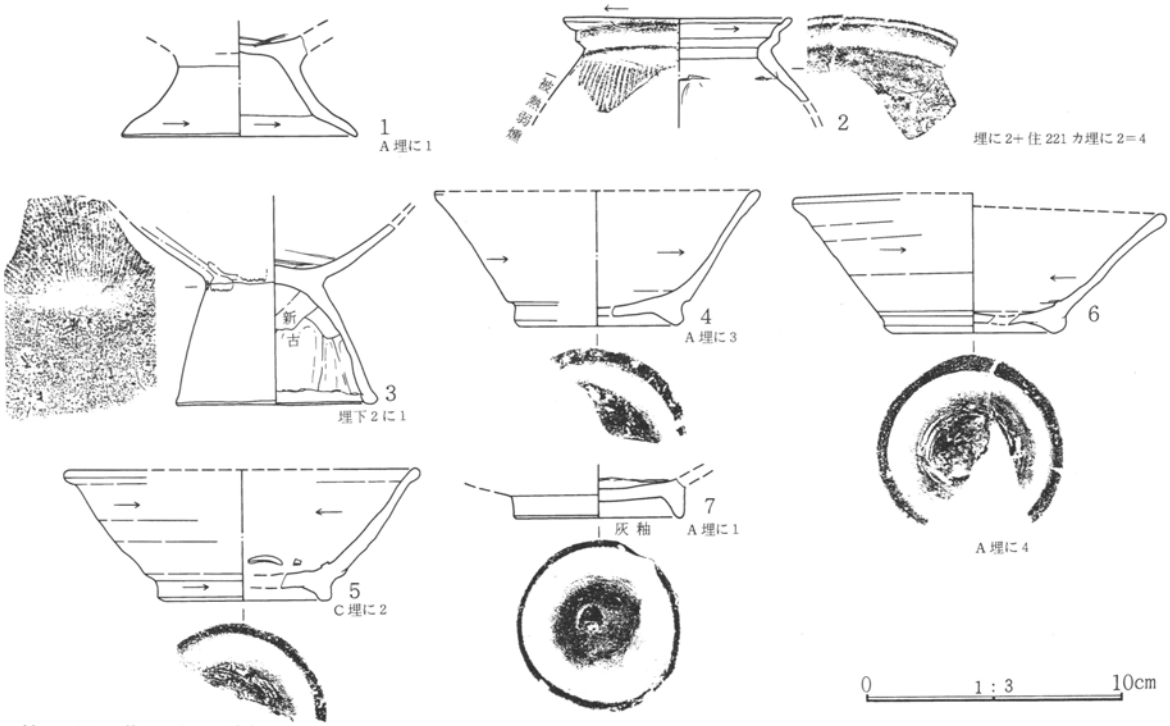
位置はＱ大区ｅ177にあり、調査時は、Ｐ区北市道調査区とした市道直下の調査であり、本書ではＱ区と接続したためＱ区の扱いで含めた。住居跡212南壁とＰ東区もの間には、市道側溝があり、側溝分幅１ｍについては未調査である。さらにＰ東区での延長部は、上面を中世遺構の削平され住居跡南端は確認されていない。重複遺構は、第473図土層注記１中に溝跡110と道跡８中世を思わせる小ピットが後出してある。各々近世遺物を伴出していないので中世の可能性大である。規模は東西258cm、南北112＋αcmを測り、方向については平面形が楕円形気味であり測れなかった。施設に関連しては、床面そのものが、土層断面注３が締る床層であったが、上面を辿ると全体が凹地状に窪み、柱穴、明瞭な立上りは確認できなかった。床面の硬さは住居跡の締りであった。遺物は第474図1～5はすべて埋土の取り上げとなっているが取り上げ№１の可能性が強く、大量の土器がまとまって存在していた。図化が無いのは市道下の短期調査のためである。住居の機能時は、この一群の古墳時代前期の頃である。



１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ含む耕土。
２、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ含む。軟。
３、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。軟。
４、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。軟。少し黒い。
５、黒褐（10YR3/1）焼土粒含み、軟。ローム小粒ほとんど見えず。
６、黒褐（10YR3/1）ローム小粒含み、軟。
７、黒褐（10YR3/1）倒木の黒色土。

0　1：60　2m

第475図　住居跡215遺構図

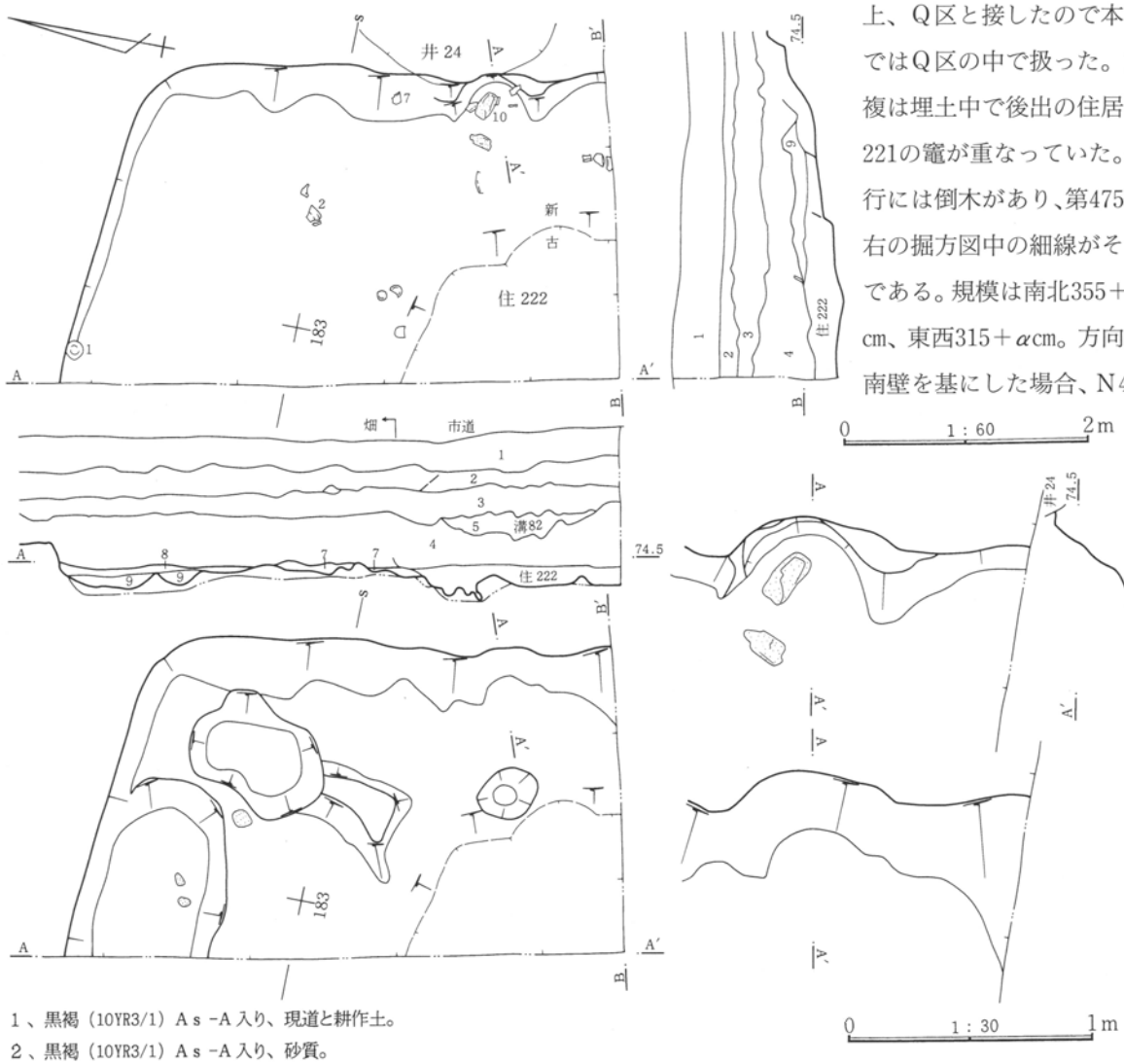


第476図　住居跡215遺物図

住居跡215　（第475・476図、図版83・199）

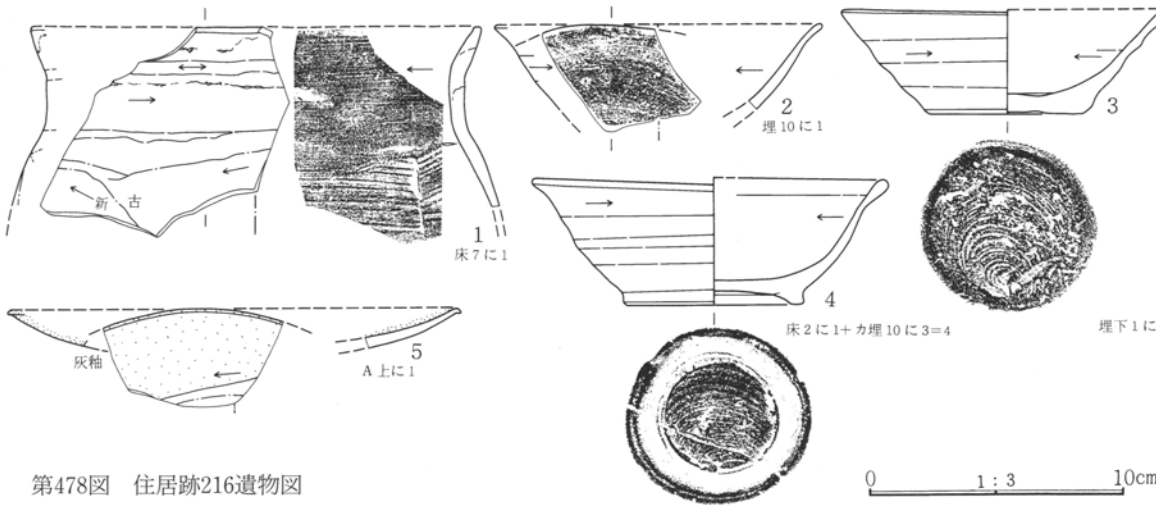
位置はＱ大区st182･183にある。調査面はローム層漸移中標高74.7mである。調査はＱ区の調査終了後、市道との取り付けの関連で調査を行なぇた。したがってＱ区は埋めもどし後で、Ｑ区の住居跡を目で見ながら、その延長を考えると云うことはできなかった。この調査は当時、Ｑ区西市道調査区と称していたが、調査図

上、Ｑ区と接したので本書ではＱ区の中で扱った。重複は埋土中で後出の住居跡221の竈が重なっていた。先行には倒木があり、第475図右の掘方図中の細線がそれである。規模は南北355＋αcm、東西315＋αcm。方向は南壁を基にした場合、Ｎ40°

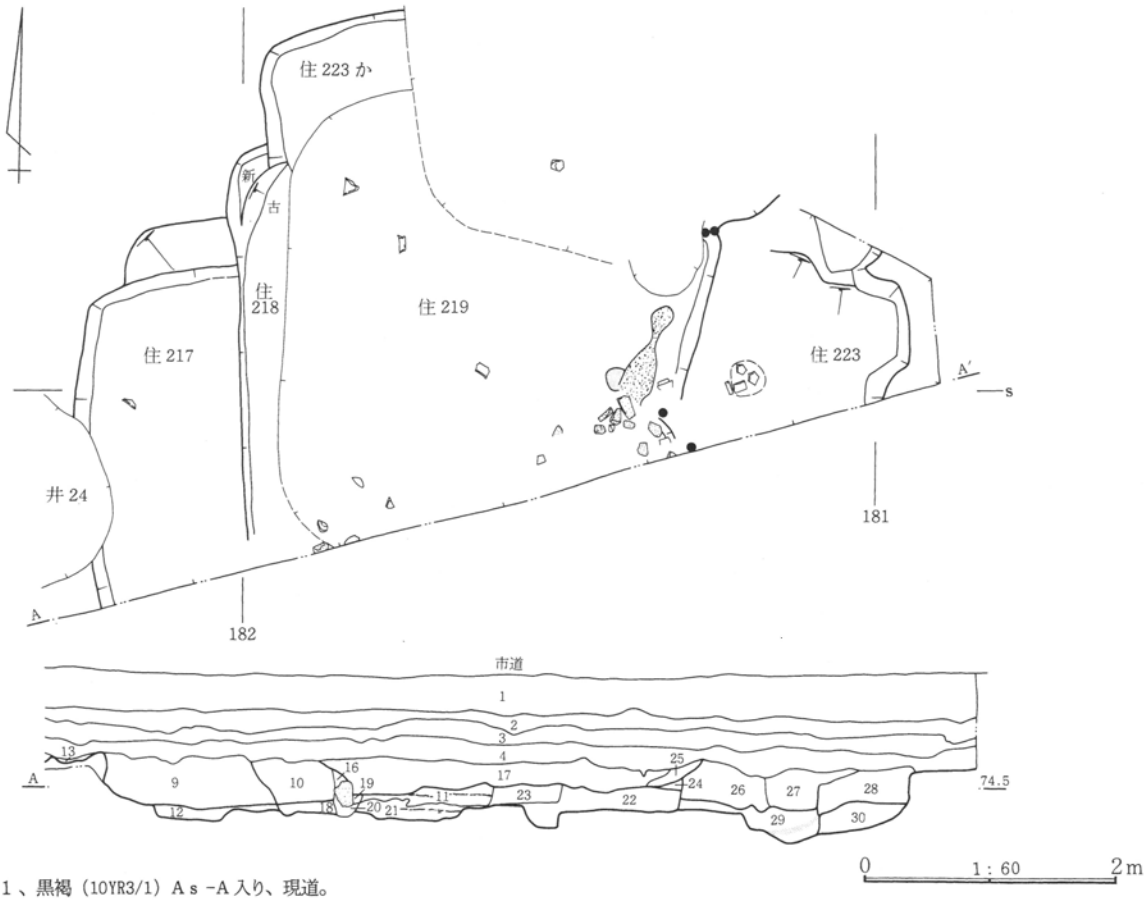


１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、現道と耕作土。
２、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、砂質。
３、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。軟。
４、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り(ライン不明瞭)、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
５、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ多く混じる。
７、にぶい黄褐（10YR3/4）ロームブロック、土壌化を主とする床層。
８、黒褐（10YR3/2）ロームブロックやや多い床層。
９、黒褐（10YR3/2）土壌化とロームブロック含む。

第477図　住居跡216遺構図



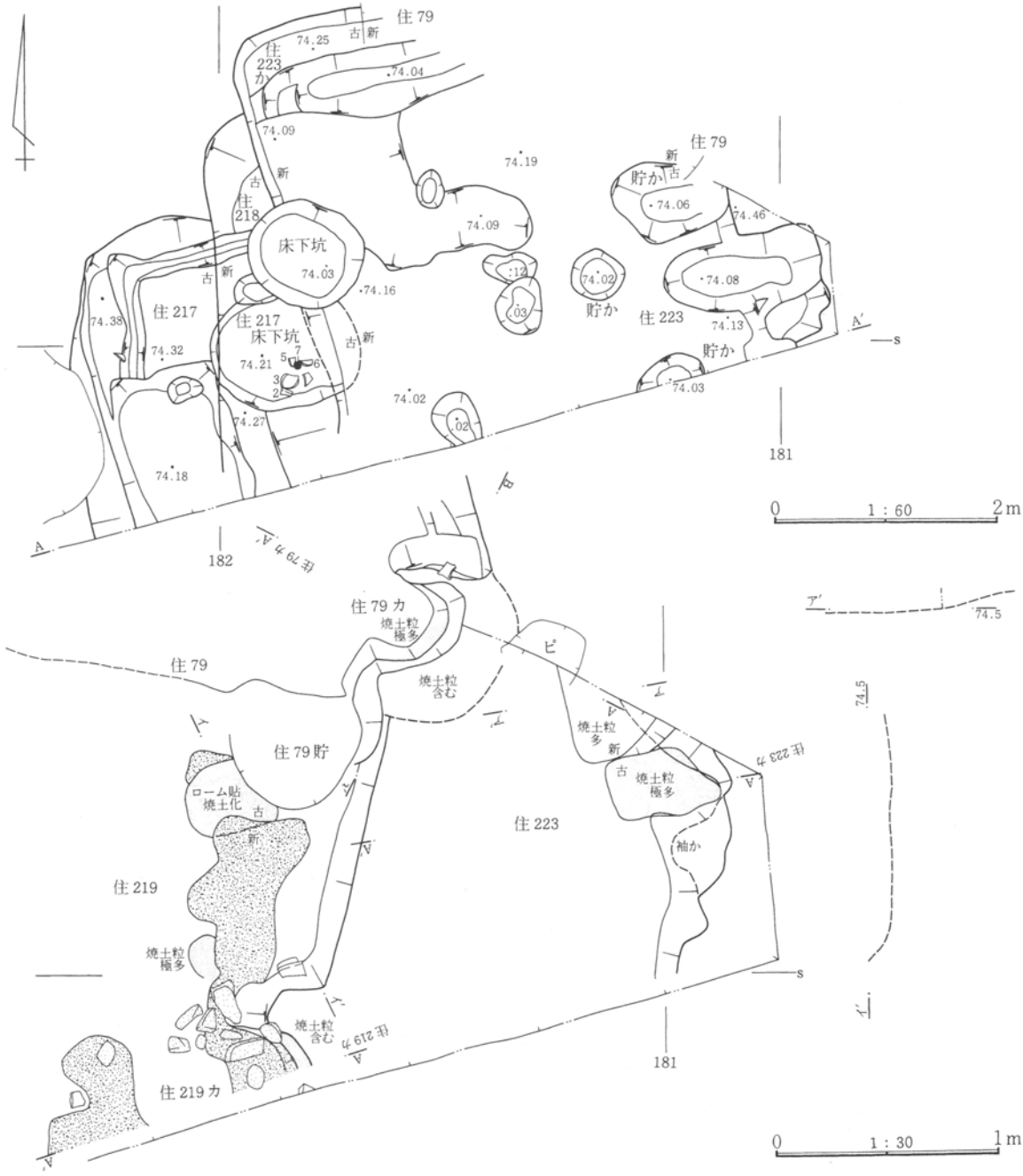
第478図　住居跡216遺物図



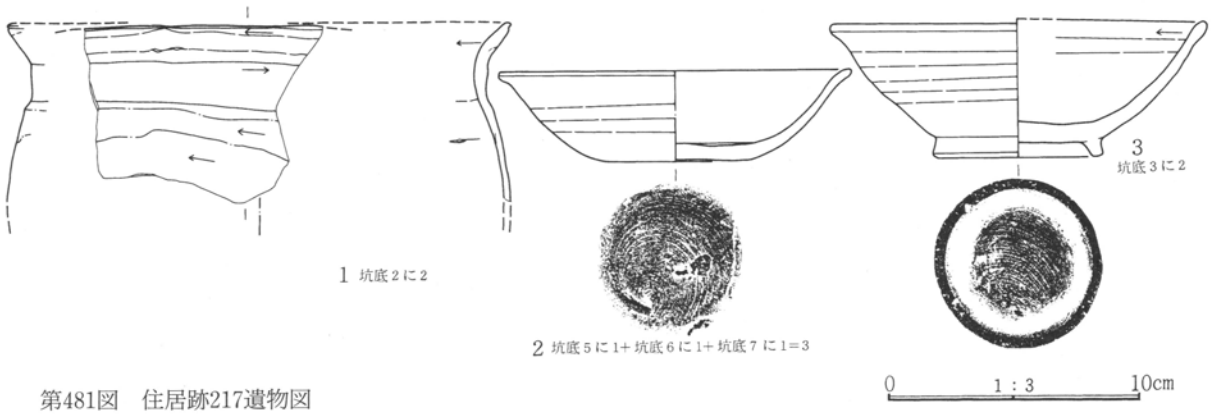
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、現道。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、砂質。
3、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。軟。
4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り（ライン不明瞭）、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
9、黒褐（10YR3/2）ロームブロック多く含み、上面床でやや締る。住216床層。
10、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・木炭・焼土粒含む。
11、黒褐（10YR3/1）ローム粒少し含む。ロームブロックの部分的床見える。焼土粒など見えず。
12、黒褐（10YR3/1）ローム粒など入らない。９層と分離される黒褐。
13、褐　（10YR4/4）ローム漸移。
16、黒褐（10YR3/1）ほとんど何も含まず、黒味強い。
17、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し含む。
18、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ないが、締る床層。
19、黒褐（10YR3/1）何も含んでいないように見える。軟。
20、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。軟。
21、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック含み、締る。掘り方埋土層。
22、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック含み、締る。掘り方埋土層。上面床層。
23、黒褐（10YR3/1）ローム粒などほとんど見えず。
24、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。
25、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。焼土・木炭粒多い。
26、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。わずかに焼土・木炭粒含む。
27、にぶい黄褐（10YR4/2）ロームブロック、土壌化的。
28、黒褐（10YR3/1）下方ローム小粒入り、締る。
29、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。貯蔵穴埋土。
30、黄褐（10YR4/6）ローム土壌化ブロック主で、上面締る。

第479図　住居跡217・218・219・223遺構図

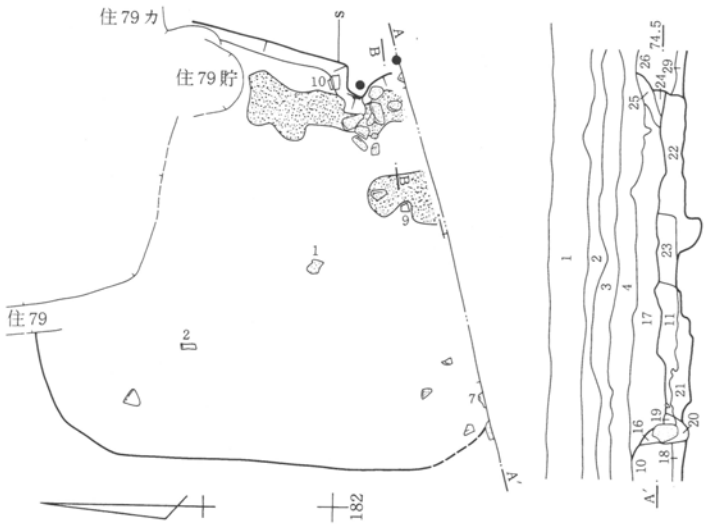
15′Wを測る。施設としては発見状態で床層以下の状態であったのと西壁断面に床層らしきヵ所はなく別遺構が重複しているかのようであった。掘方面では中央を高め周壁沿いを溝状に掘り窪めた床下施設を認めたが、その南東隅部には柱穴は見当らず、強いて求めれば第475図右掘方図中に破線で柱穴かと記入してあるヵ所が深く下がっていた。しかしその個所には倒木が存在し、根跡などとも考えられる。遺物は第476図に示したが、住居構造と考え合せると古墳時代前期の同図2・3が本住居跡に係わると考えられる。上方からの重複の可能性は、同図1・4・5・6・7などが調査面の標高74.7m、層位では注記５層下方、６層付近までおよんでおり、10世紀前半頃の別遺構があったらしい。



第480図　住居跡217・218・219・223遺構図

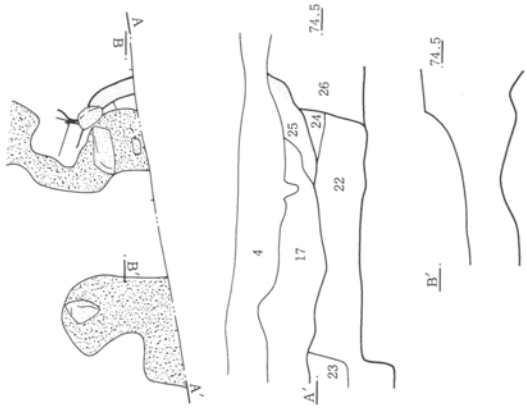


第481図　住居跡217遺物図



1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、現道。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、砂質。
3、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。軟。
4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り(ライン不明瞭)、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
10、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・木炭・焼土粒含む。
11、黒褐（10YR3/1）ローム粒少し含む。ロームブロックの部分的床見える。焼土粒など見えず。
16、黒褐（10YR3/1）ほとんど何も含まず、黒味強い。
17、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し含む。
18、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ないが、締る床層。
19、黒褐（10YR3/1）何も含んでいないように見える。軟。
20、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。軟。
21、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック含み、締る。掘方埋土層。
22、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック含み、締る。掘方埋土層。上面床層。
23、黒褐（10YR3/1）ローム粒などほとんど見えず。
24、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。
25、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。焼土・木炭粒多い。
26、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。わずかに焼土・木炭粒含む。
29、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。貯蔵穴埋土。

0　1：60　2m



4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り(ライン不明瞭)、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
17、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し含む。
22、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック含み、締る。掘り方埋土層。上面床層。
23、黒褐（10YR3/1）ローム粒などほとんど見えず。
24、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。
25、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。焼土・木炭粒多い。
26、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。わずかに焼土・木炭粒含む。

0　1：30　1m

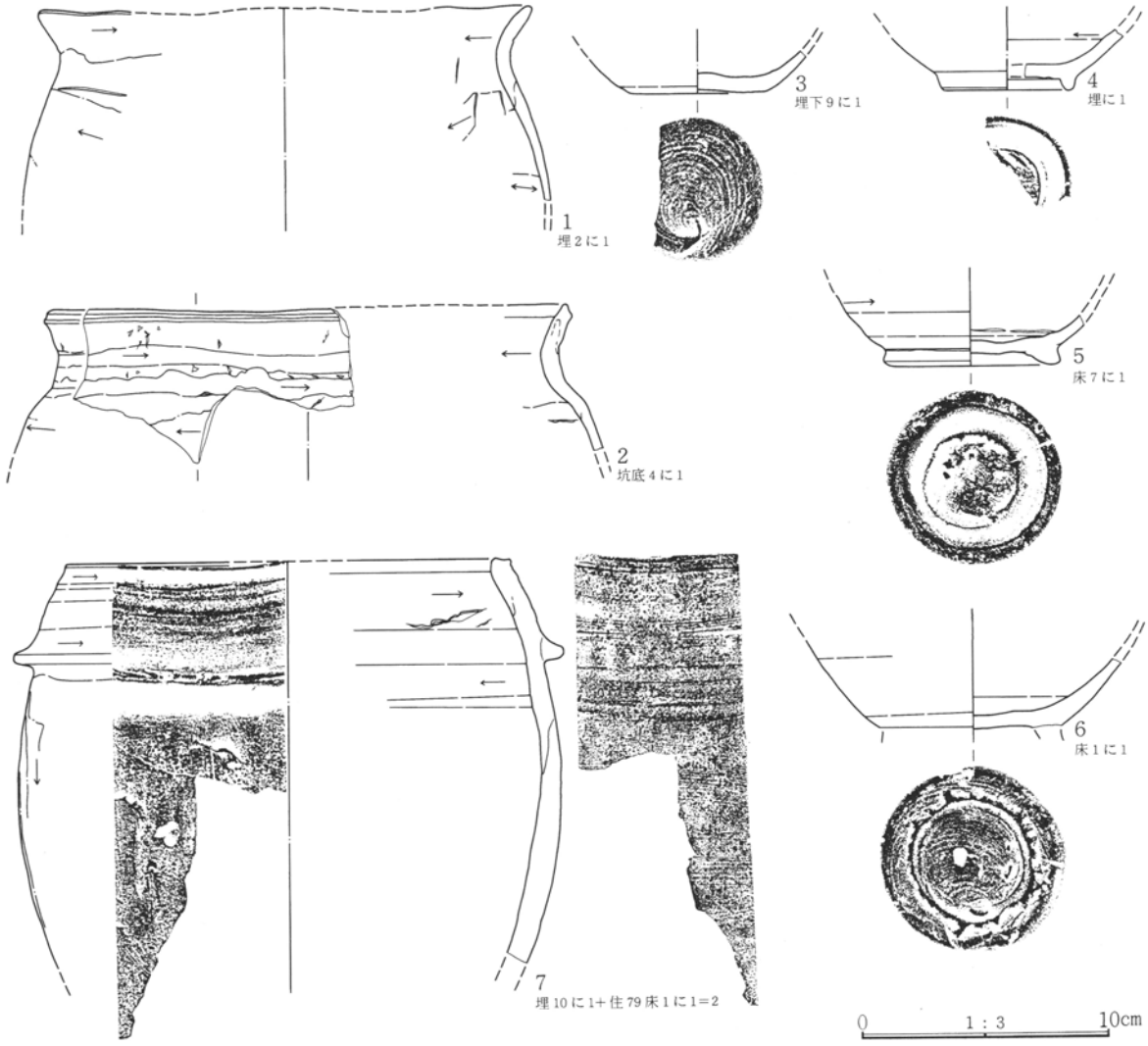
第482図　住居跡219・220遺構図

住居跡216　（第477・478図、図版83・199）

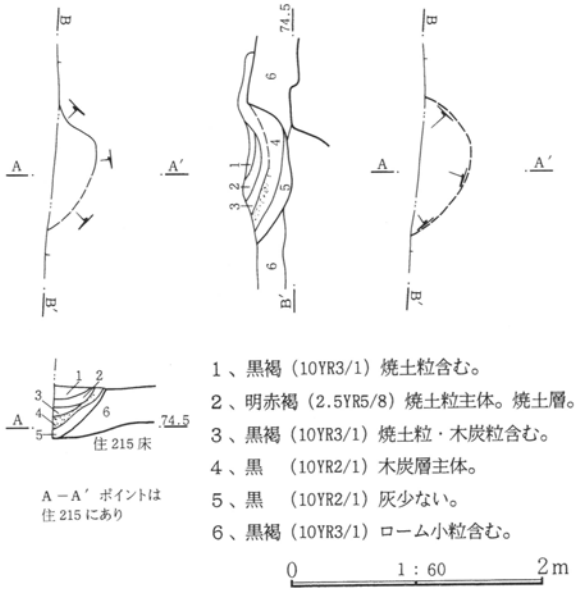
位置はＱ大区rs182･183にあり、調査時はＱ区西市道調査区である。調査面はローム層漸移からローム層上面標高74.6mである。重複は住居跡222が先行してあり、井戸跡24とは重さなり少なく不明であった。規模は、東西266＋αcm、南北416＋αcm、方向は東壁でＮ10°Ｗを測る。施設として竈が東壁に、掘方で土坑とピットが認められた。貯蔵穴は調査区南東際に考えられそうであるが、凹みもなく、掘方も凹みは見られなかった。遺物は第478図に示した。全体的には９世紀中頃から後半で、住居機能もその頃である。

住居跡217、同218、同219、同223　（第479・480・481図、図版83・84・199）

位置はＱ大区rs180～182にあり、調査時はＱ区西市道調査区である。調査面は、ローム層漸移標高74.6mである。この４住居跡のほかに同79が加わり、当遺跡中最も複雑な重複場所の一であった。重複順は、住居跡79は貯蔵穴に新古があり、住居跡79は住居跡219、同223を切り、住居跡219は同218・223を切る。住居跡217は同218に切られると云う関係が得られているが、確認は充分ではないし不明なヵ所が多い。遺物は住居跡217



第483図　住居跡219・220遺物図

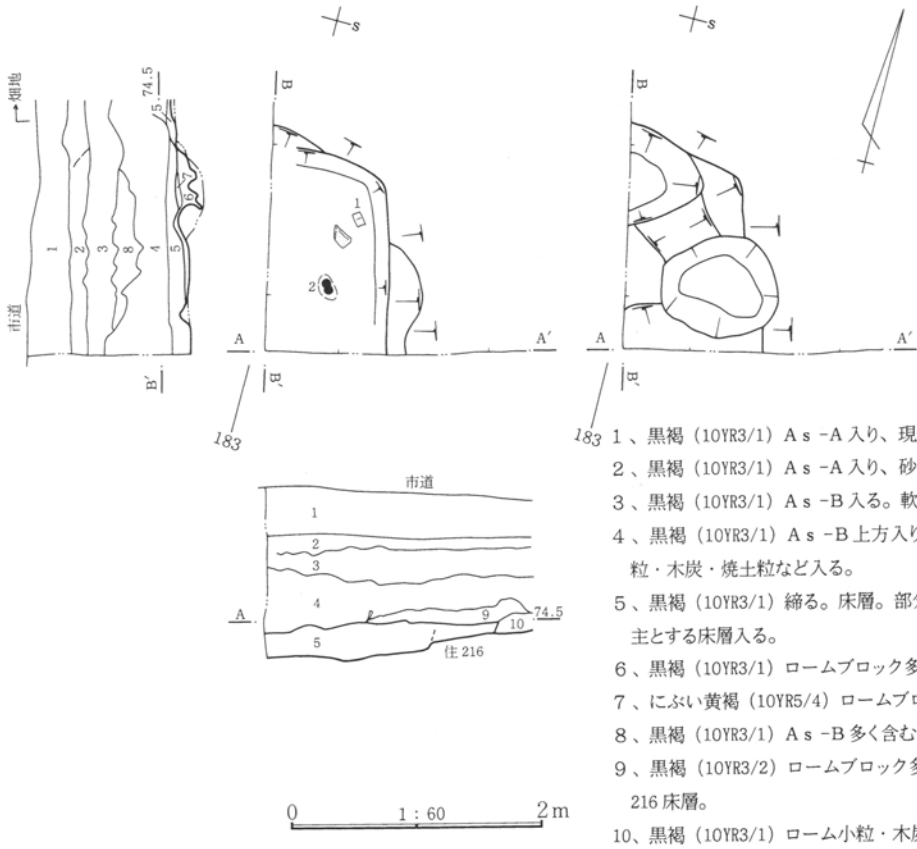


第484図　住居跡221遺構図

について第281図に掲げた。時期は９世紀中頃でこの一角の中では遡ぼる時代の土器である。

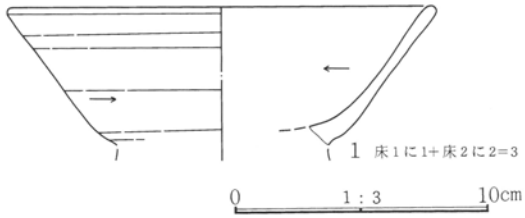
住居跡219・220　（第482・483図、図版84・199）

位置はＱ大区rs181、調査時はＱ区西市道調査区である。調査面はローム層漸移標高74.5m。重複は、後出の住居跡79に切られ、同218、同223が先行する。規模は南北365cm、東西340cm、方向は西壁でN3°Wを測る。施設として東壁に竈が付き、貯蔵穴は調査地外に、床下は掘方としてまとめた第480図を参照されたい。掘方状態は５棟分の床下が重なり、どの住居に関係するのか判からなかったのである。竈は、竈前に灰層が広がり部分的な粘土貼面の焼土化ヵ所があった。竈内に軟質凝灰炭製の用材が存在していた。西壁の遺存は不良



１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、現道。
２、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、砂質。
３、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。軟。
４、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り（ライン不明瞭）、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
５、黒褐（10YR3/1）締る。床層。部分的にロームブロック、土壌化を主とする床層入る。
６、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含み、締る。
７、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック、土壌化を主とする床層。
８、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ多く含む。溝82埋土。
９、黒褐（10YR3/2）ロームブロック多く含み、上面床でやや締る。住216床層。
10、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・木炭・焼土粒含む。

第485図　住居跡222遺構図



第486図　住居跡222遺物図

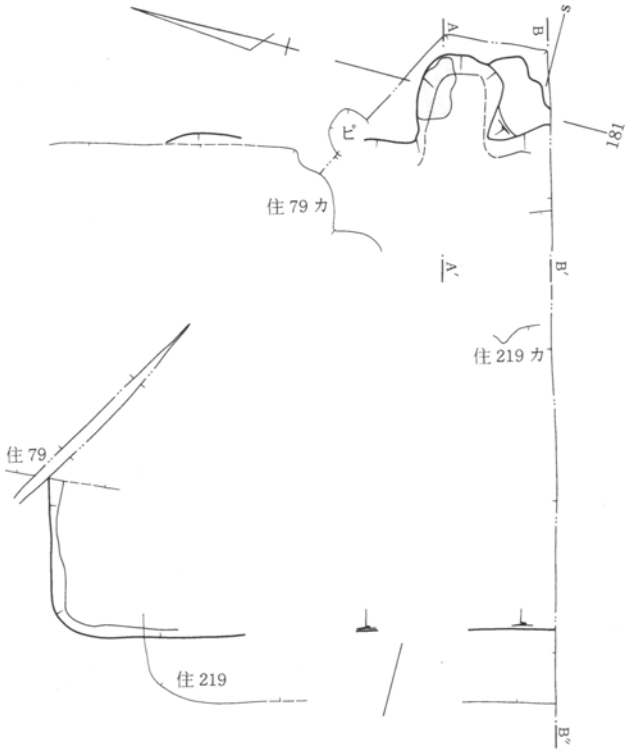
で床付近でわずかな高まりで確認できたに過ぎない。遺物は第483図に示した。時期は９世紀後半頃であるが同図２は、注記に坑底４とあるのは、第481図住217に組込まれるべき個体で、除外して考えられたい。

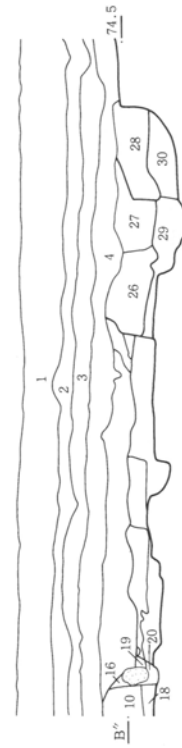
住居跡221　（第484・476図、図版84・199）

位置はＱ大区ｔ183にあり、調査時はＱ区西市道調査区と称した一角にある。調査面はローム層漸移層標高74.6m付近であるが住居跡215の調査面上で住居跡221の竈を発見した。当初は住居跡215の炉跡かと考えていたが、土層確認の10cmトレンチを設けて掘下げた結果、調査地外西に向って延びる竈跡であることが判明した。遺物は第476図中の遺物が関係するかもしれないが、明確でない。東竈として考えれば、９・10世紀頃の住居跡であろう。

住居跡222　（第485・486図、図版84・199）

位置はＱ大区ｒ182にあり、調査時はＱ区西市道調査区中の１つである。調査面は住居跡216床面付近標高74.5m付近である。調査では当初、住居跡216より後出住居として掘り始め、中途で逆であることが壁面土層から確認された。しかし短期調査区のため平面確認せず、壁面位置は断面では明確なものの、平面では不明瞭な形状となった。規模は南北で162＋αcm、東西97＋αcm、方向は東壁の成り走行から、およそＮ13°Ｅで他の同期住居跡と異なる。施設として、床下坑を第485右掘方図中に捉えて表現したが、後代の住居跡216の床下坑かもしれない。遺物は第486図に掲げた。１個体のみであるが同図１は９世紀初頭の埦であり、住居機能時期に関連するであろう。

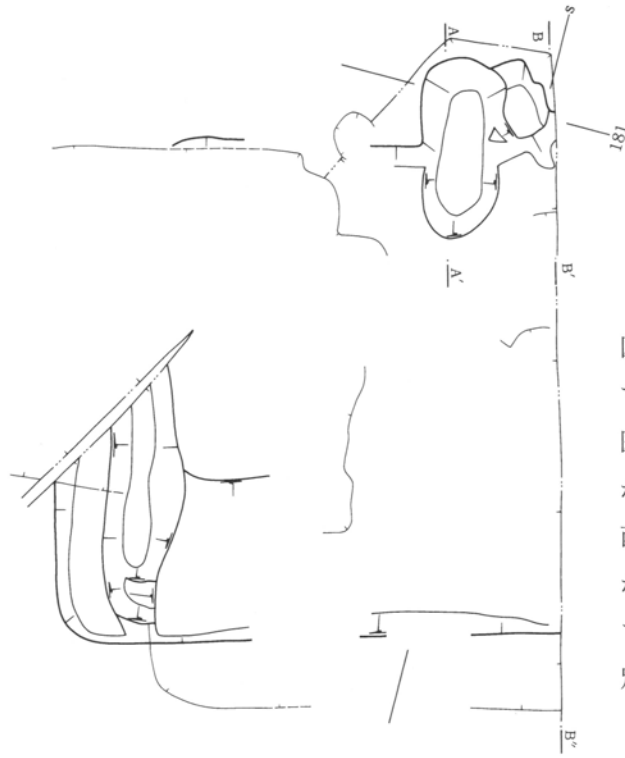




＊未注土層は住219
Ａ－Ａ′にあり。

1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、現道。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、砂質。
3、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。軟。
4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り(ライン不明瞭)、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
10、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・木炭・焼土粒含む。
16、黒褐（10YR3/1）ほとんど何も含まず、黒味強い。
18、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ないが、締る床層。
19、黒褐（10YR3/1）何も含んでいないように見える。軟。
20、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。軟。
26、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。わずかに焼土・木炭粒含む。
27、にぶい黄褐（10YR4/2）ロームブロック、土壌化的。
28、黒褐（10YR3/1）下方ローム小粒入り、締る。
29、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。貯蔵穴埋土。
30、黄褐（10YR4/6）ローム土壌化ブロック主で、上面締る。

0　1：60　2m



第487図　住居跡223遺構図

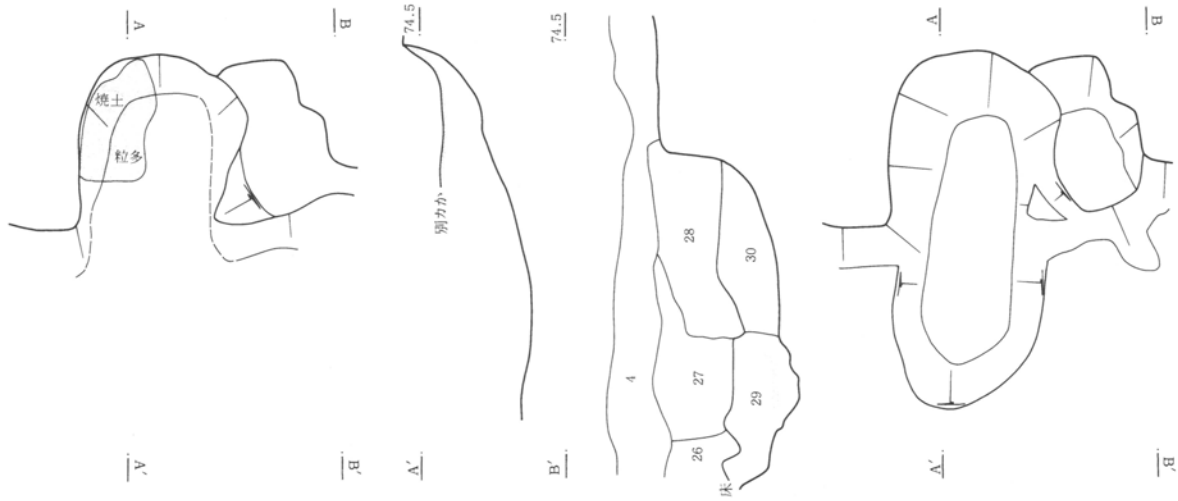
住居跡223　（第487図、図版84）

位置はＱ大区rs181にあり、調査時はＱ区西市道調査区中の１住居であった。調査面はローム層漸移74.5mであった。重複は５棟重さなる中の１つで第479・480図を参照されたい。住居跡79・219に切られ、住居跡219が後出する。規模は南北405＋αcm、東西390cm、方向は西壁から求めるとＮ15°30′Ｗである。時期は住居跡219が９世紀後半であるのでそれ以前であろう。施設として東壁に竈が、掘方の北壁付近で周溝の一つが見え、別に立上りが存在していた。

住居跡251　（第489図）

位置はＱ大区ｒ174に、調査面はローム層上面74.5m。規模は東西392＋αcm、南北206＋αcmを測る。床面に炉跡があり、古墳時代前期の住居跡か。

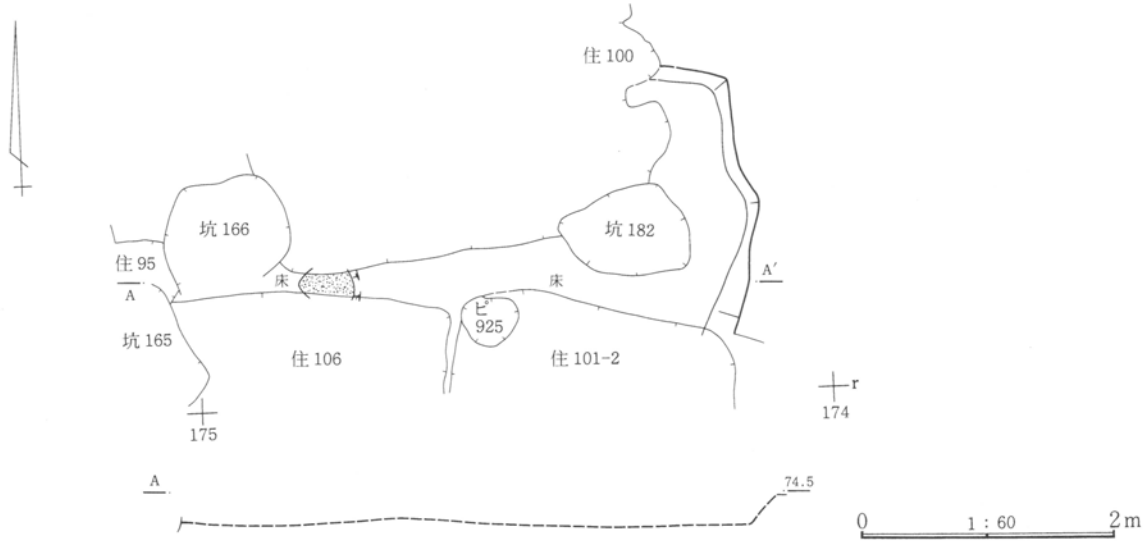
２、掘立柱建物跡



4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ上方入り(ライン不明瞭)、下方ローム小粒・木炭・焼土粒など入る。
26、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック含む。わずかに焼土・木炭粒含む。
27、にぶい黄褐（10YR4/2）ロームブロック、土壌化的。
28、黒褐（10YR3/1）下方ローム小粒入り、締る。
29、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒多く含む。貯蔵穴埋土。
30、黄褐（10YR4/6）ローム土壌化ブロック主で、上面締る。

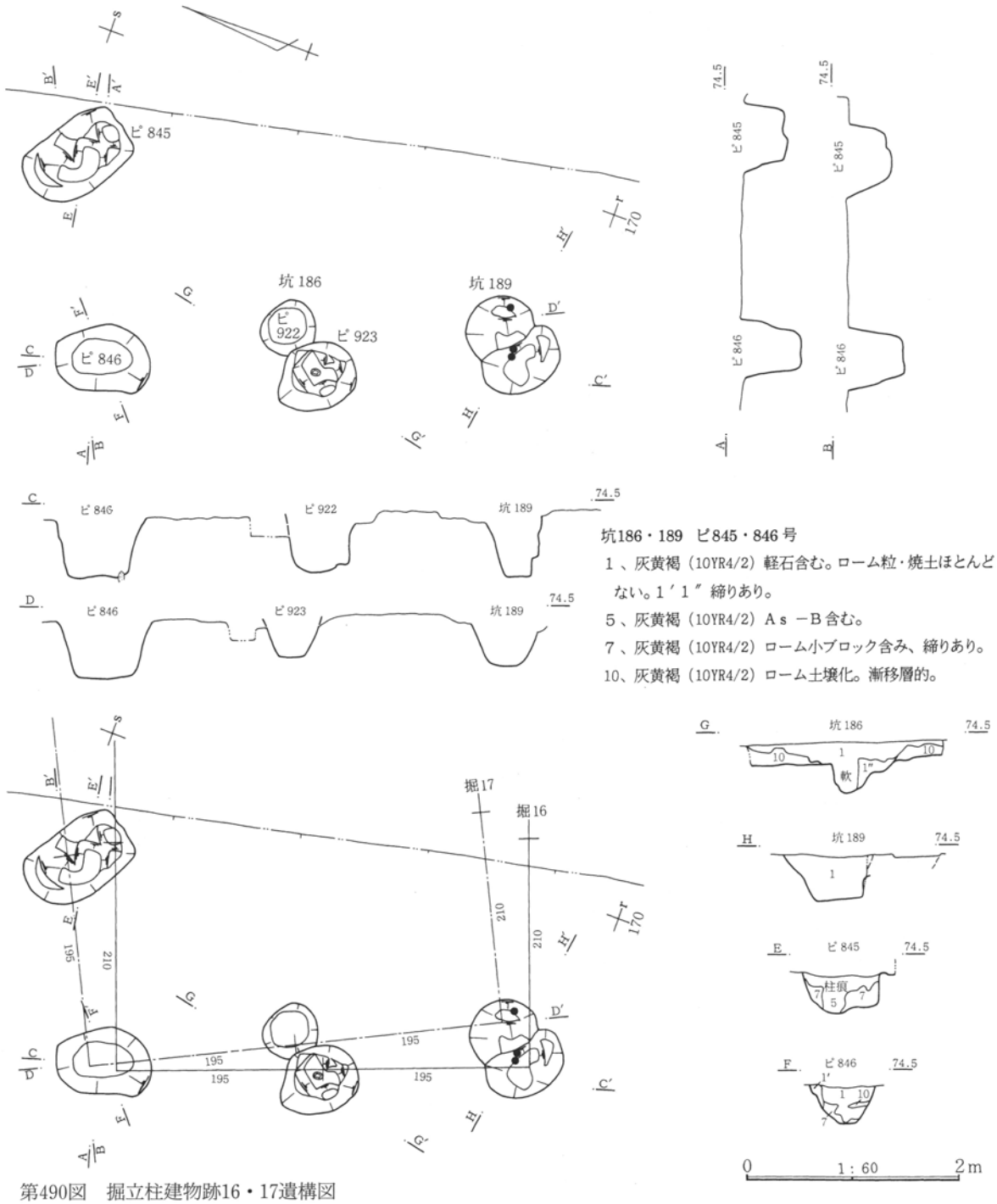
0　1：30　1m

第488図　住居跡223遺構図



第489図　住居跡251遺構図

Ｑ区では、掘立柱建物跡16・同17、同18の新旧、計建替２場所でまとめることができた。柱穴はピットとした小穴と大いに関係を持つので既述すれば、Ｐ東区は南半で８世紀代、建替えを除く７棟を中心に、それに関連したと考えられる大形ピットを含む小穴が周辺で濃く、以北にやや薄く存在し、調査地際まで続いていた。それ以北の分布は、８世紀代より遡ぼると考えられる４棟以上の小規模建物と近時期のピット、中世掘立柱建物跡２棟とA_s－Ｂ混の埋土のピットの一群が存在していた。その連続性は８世紀代と思えるピットはＱ区ｇライン付近から減少傾向にあり、中世ピットも散在傾向にあった。Ｑ区で二たび平安時代９世紀以前ピットが多くなるのはｏ～ｓ169～173とｓ176～177付近であった。前群は掘立柱建物跡16～18を含む一群で、後群は西よりピ697・695・696・697・699・702・717・700・701・727・726・737・826・825・744・823があり、まとめることはできなかったが複数条の東西柵列の可能性がある。Ｑ区内に広がるピットを全体的

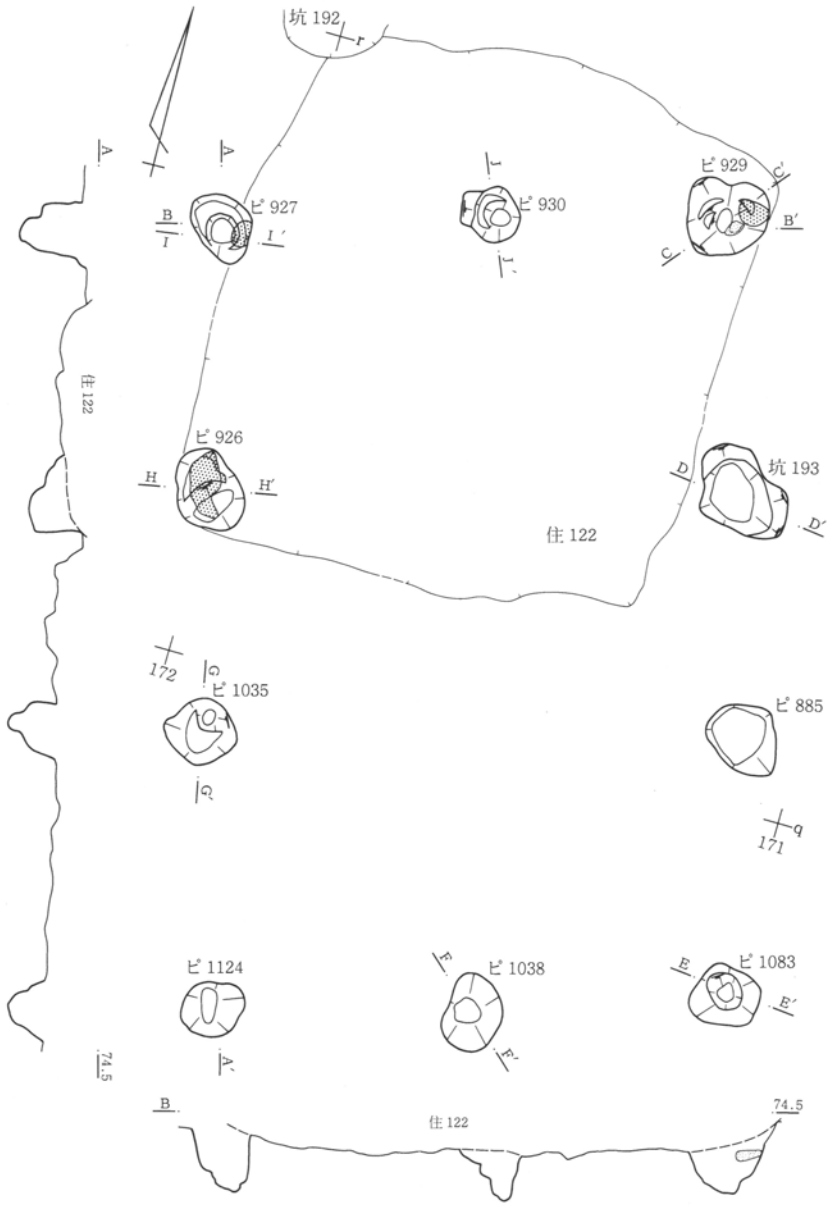


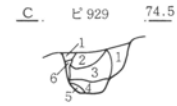
第490図　掘立柱建物跡16・17遺構図

に云えば、植物の根など底面が片寄ったり上端を超えて横に喰込む例は少なく、人為に思えるピットが絶対的に多数を占めていた。東接の寺院跡との関連からは、Ｑ区は、寺院外西接の集落と考えられるが、寺院地西限と目される溝跡113まで接近した場所でも20m隔てあるため、空白の未調査地が存在していることも考慮しなければならないが、掘立柱建物跡16・17は、中央基壇東西軸の延長上約80mに存在している点も、同寺院の西側の出入に関連しての施設と占地上考えられる。門跡があったとすれば、溝跡113を越えた寺院地側であろう。

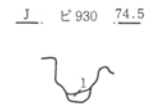
掘立柱建物跡16・17　（第490図、図版85）

位置はＱ大区ｒ170にある。調査面はローム層漸移標高74.4mにある。東半は調査地外にあるため不明瞭で

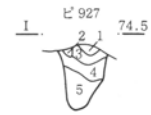




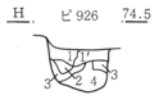
ピ 929
1、暗褐（10YR3/3）密。白色粒φ1㎜・ローム粒5㎜全体に含む。
2、黒褐（10YR3/2）密。白色粒φ1㎜以下含む。
3、黒褐（10YR3/1）密。ローム粒φ1～3㎜含む。
4、黒褐（10YR3/1）3層よりも黒い印象。混入物少ない。
5、黒褐（10YR3/1）4層にロームブロックブレンド。
6、1層にロームブロックブレンド。



ピ 930
1、黒　（10YR2/1）混入物少なく、密で軟らかい。

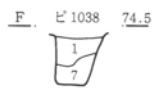


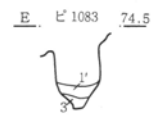
ピ 927
1、暗褐（10YR3/3）固く密。
2、撹乱。
3、黒褐（10YR3/2）白色粒φ1㎜混入。固く密。
4、黒褐（10YR3/1）炭化物わずかに含む。混入物少なく、1・3層より軟らかい。
5、にぶい黄褐(10YR4/3)と黒褐(10YR3/2)のブレンド。軟らかい。



ピ 926
1、黒褐（10YR3/1）細砂。密。白色粒子φ1㎜全体に入る。1′は1と同じも極小ロームブロック入る。
2、黒　（10YR2/1）細砂。密。極小ロームブロック・白色粒わずかに混入。
3、4層と黄褐（10YR5/6）ロームブロックのブレンド。
4、黒　（10YR2/1）混入物少ない。密。柔らか目。

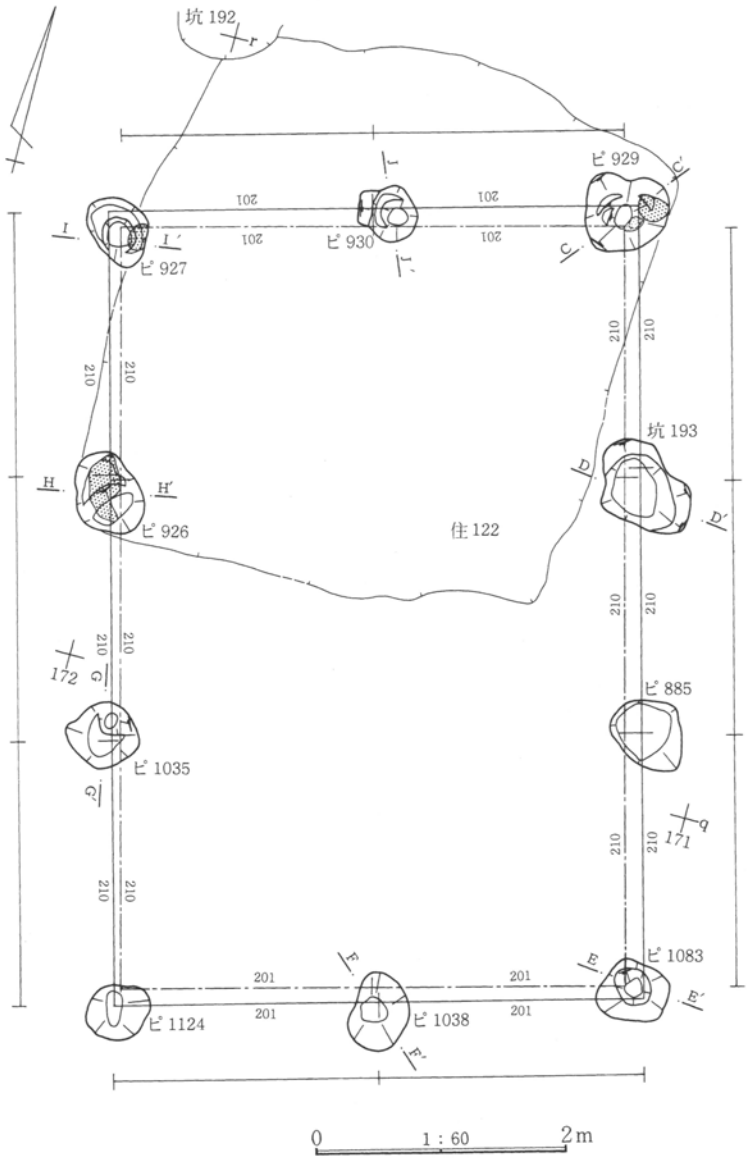
0　1：60　2m





ピ 1035・1038・1083 坑 193
1、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。1′は締りあり。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム小ブロックとその土壌化傾向あり。
5、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。5′木炭粒入る。5″少し軟。
7、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック含み、締りあり。

第491図　掘立柱建物跡18遺構図



第492図　掘立柱建物跡18遺構図

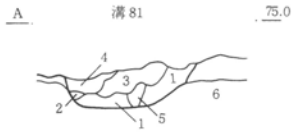
あるが、50～100cmの柱穴径を有する柱穴規模の建物で梁行１間建物は考え難いため、第490図に示した西辺は梁側と考えられる。さらに西側を桁行２間とした場合は閉鎖的な間数となるので、その点からも西辺は梁側が考えられるので桁側は東西となり、３間以上の桁数が推測される。調査は住居跡が複雑に重さなり合う中で、まとめられる掘立柱建物跡の存在は予測していなかったので、ピット群中のピット扱いで半分掘を行なう中で掘建柱建物跡であることが判明した。第490図中の建物建方線の実線が掘立柱建物跡16、１点鎖線が同17である。断面設定で新古関係は断面11において同16が同17の柱穴を切っていたが、断面位置が柱穴中心を通っていないので甘い結果としたい。規模は、図中に示した柱間数値であり、方向は同16でN20°30′W、同17でN26°Wを測る。出土遺物は微弱であったが、柱穴の埋土は、A_s－Bを混えない古代の埋土で、おおまか築土状態である点は、Ｐ東区の８世紀代柱穴に共通する。

掘立柱建物跡18　（第491・492図、図版85）

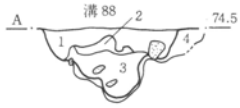
位置はＱ大区pq171・172にあり、調査面はローム層上面標高74.5mである。重複は古墳時代前期の住居跡122・128を各々の柱穴は後出してある。掘立柱建物18は、新古の建替えるものの住居跡128の調査が床面に達した時に気付いたため、北半がある同122埋土上面で柱痕と建替えの新旧の判断を行なった。その結果、建方線の１点鎖線が後出し、細線が先行建物であると確認された。建方線の作成は調査中に行なったもので南半は各柱穴の中段化や２穴化傾向は少なく、北半にその傾向が認められたため、南側を基に後出建物の建替えがなされたと推定された。図中トーンは柱痕確認した状態を示したが、抜取りらしく、新旧結果とは不一致で、先行建物の痕跡も残されていた。全体的に柱筋は通り良く、掘立柱建物の中ではＰ東区の８世紀代建物群の西側建物に並ぶ良さであった。遺物は少なく、埋土にA_s－Ｂ混を含まず、古代である。

３、溝跡　（第9・493・494図、図版86・200）

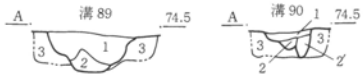
１、明黄褐（10YR6/6）Ａｓ－Ｂ含む。ローム粒多く含む。
２、明黄褐（10YR6/6）Ａｓ－Ｂ含む。ロームブロック主体。
３、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。砂質。
４、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。古代遺構埋土。



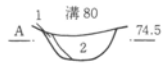
１、黒褐色壌土（10YR2/3）ローム小斑含む。
２、暗褐色壌土（10YR3/3）ローム斑含む。締り弱。
３、黒褐色壌土（10YR2/3）ローム粒ごく少量含む。
４、暗褐色壌土（10YR3/4）ローム小斑含む。やや粗。
５、崩れたロームブロック。
６、ローム。



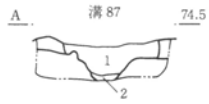
１、暗褐（10YR3/3）２㎜大の炭化物を少量含む。
２、暗褐（10YR3/3）１層にロームブロックをまだらに含む。
３、暗褐(7.5YR3/3）ロームブロックを少量含む。７～８㎝大の円礫を下方に多く含む。
４、黄褐（10YR5/6）ローム漸移層。



１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ混土。白色粒φ１㎜含む。
２、１層とロームブロック･粒のブレンド。2′は2層よりもローム混ざり少ない。
３、黄橙（10YR6/8）地山ローム。

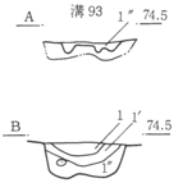


Ａ－Ａ′
１、暗褐（10YR3/4）（10YR4/6)ローム多く含む。締り弱い。
２、暗褐（10YR3/3）ローム粒・焼土粒含む。締り強い。

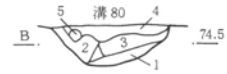


１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、黒色味あり。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、黒色味あり。締りあり。１層よりロームブロック量多い。

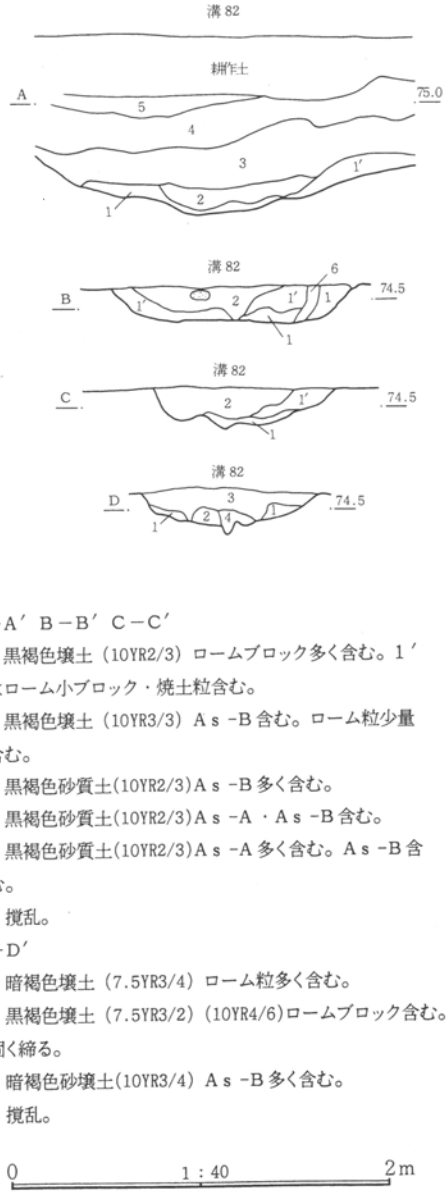
１、黒褐（10YR3/2）にぶい黄褐(10YR4/3)と褐(10YR4/4)のブレンド。軟らかい。細土。
２、地山ロームとにぶい黄褐土(10YR4/3)のブレンド。



Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ・軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。黒味あり。ロームブロックなし。１′は少し茶味がかる。ロームブロックなし。１″は土壌化まじえる。ロームブロックなし。



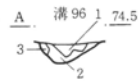
Ｂ－Ｂ′
１、暗褐（10YR3/3）ロームブロック含む。締り弱い。
２、暗褐（10YR3/4）（10YR4/6)ローム斑多く含む。締っている。
３、暗褐（10YR3/4）ローム粒含む。
４、暗褐（10YR3/4）ローム粒・焼土粒含む。締り強い。
５、撹乱。



Ａ－Ａ′ Ｂ－Ｂ′ Ｃ－Ｃ′
１、黒褐色壌土（10YR2/3）ロームブロック多く含む。１′はローム小ブロック・焼土粒含む。
２、黒褐色壌土（10YR3/3）Ａｓ－Ｂ含む。ローム粒少量含む。
３、黒褐色砂質土(10YR2/3)Ａｓ－Ｂ多く含む。
４、黒褐色砂質土(10YR2/3)Ａｓ－Ａ・Ａｓ－Ｂ含む。
５、黒褐色砂質土(10YR2/3)Ａｓ－Ａ多く含む。Ａｓ－Ｂ含む。
６、撹乱。
Ｄ－Ｄ′
１、暗褐色壌土（7.5YR3/4）ローム粒多く含む。
２、黒褐色壌土（7.5YR3/2）（10YR4/6)ロームブロック含む。固く締る。
３、暗褐色砂壌土(10YR3/4）Ａｓ－Ｂ多く含む。
４、撹乱。

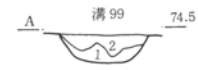
第493図　溝跡遺構図

溝跡は、Ｑ区に34条がある。Ｑ区中で溝跡に関しての総体的な所見は次のとおりである。Ｑ区は、Ｒ区と並んで遺跡全体では高所にある。その高所の中を分けて第９図に示した溝跡が存在し、最も古い溝跡にｏ～ｑラインを東西に走行する一群の溝跡87・96・98・99・101・102がある。古代の埋土であり、住居跡埋土と識別が困難であったが、溝跡87は、９世紀前半頃の住居跡111、10世紀中頃の住居跡159を切る平面を確認して



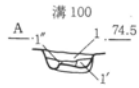
１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。
２、灰黄褐（10YR4/2）ローム大ブロック含み、締りあり。
３、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム小ブロックとその土壌化傾向あり。

１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ・軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。ロームブロックなし。
２、Ａｓ－Ｂ含み、締り弱い。
３、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。ローム土壌化。

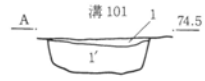


１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。１′は締る。

１、黒褐（10YR3/1）少し軽石含み、軟。
２、黒褐（10YR1/3）少し軽石含み、軟。さらにローム小ブロック入る。

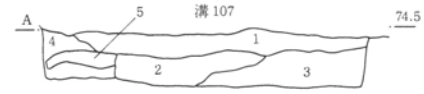


１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。１′は締る。１″は少し黄味がかる。

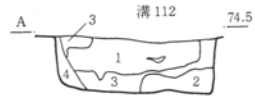


１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。ロームブロックなし。１′はロームブロックなし。軟。

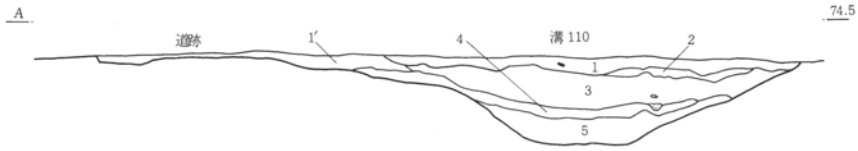
１、黒褐（10YR3/1）ローム小粒含む。
２、黒褐（10YR2/3）ローム小粒さらに多い。少し締る。



１、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・軽石入る。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入らず。軽石少。
３、黒褐（10YR3/1）軽石もほとんど見えず、軟。
４、にぶい黄橙（10YR6/4）ロームブロックと漂白化ローム。軟。
５、にぶい黄橙（10YR6/4）黒褐土少し土壌化混じる。
６、にぶい黄橙（10YR6/4）漂白化ロームで基盤状。



１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。軟らか。
２、灰黄褐（10YR4/2）ローム大ブロック含み、締りあり。軟らか。
３、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム小ブロックとその土壌化傾向あり。軟らか。
４、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化。漸移層的。軟らか。



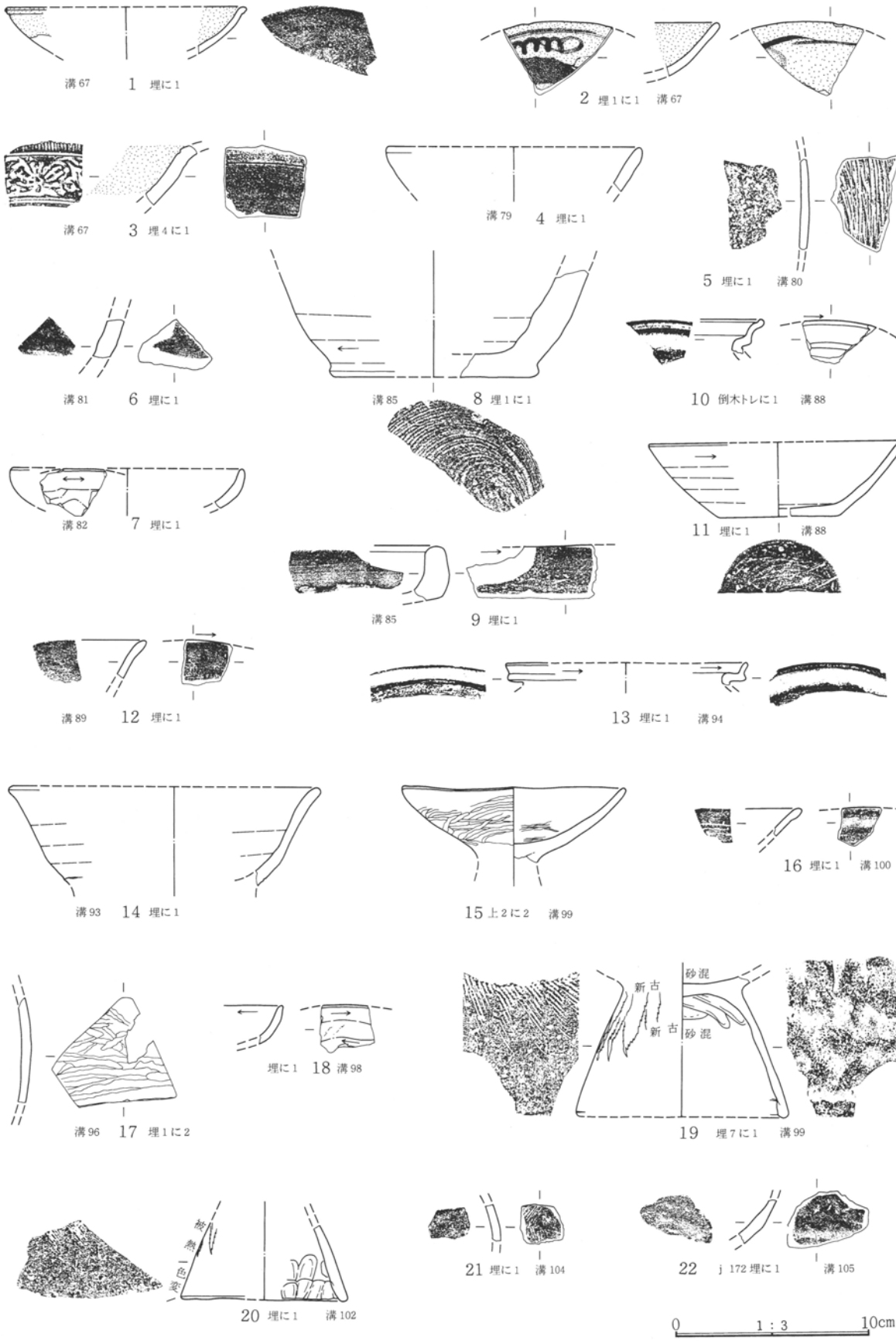
１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。１′は少し締り、道跡。
２、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。わずかロームブロック含む。少し締る。
３、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。わずかロームブロック含む。
４、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。少し粘性。還元気味。
５、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。ロームブロック含む。

0　1：40　2m

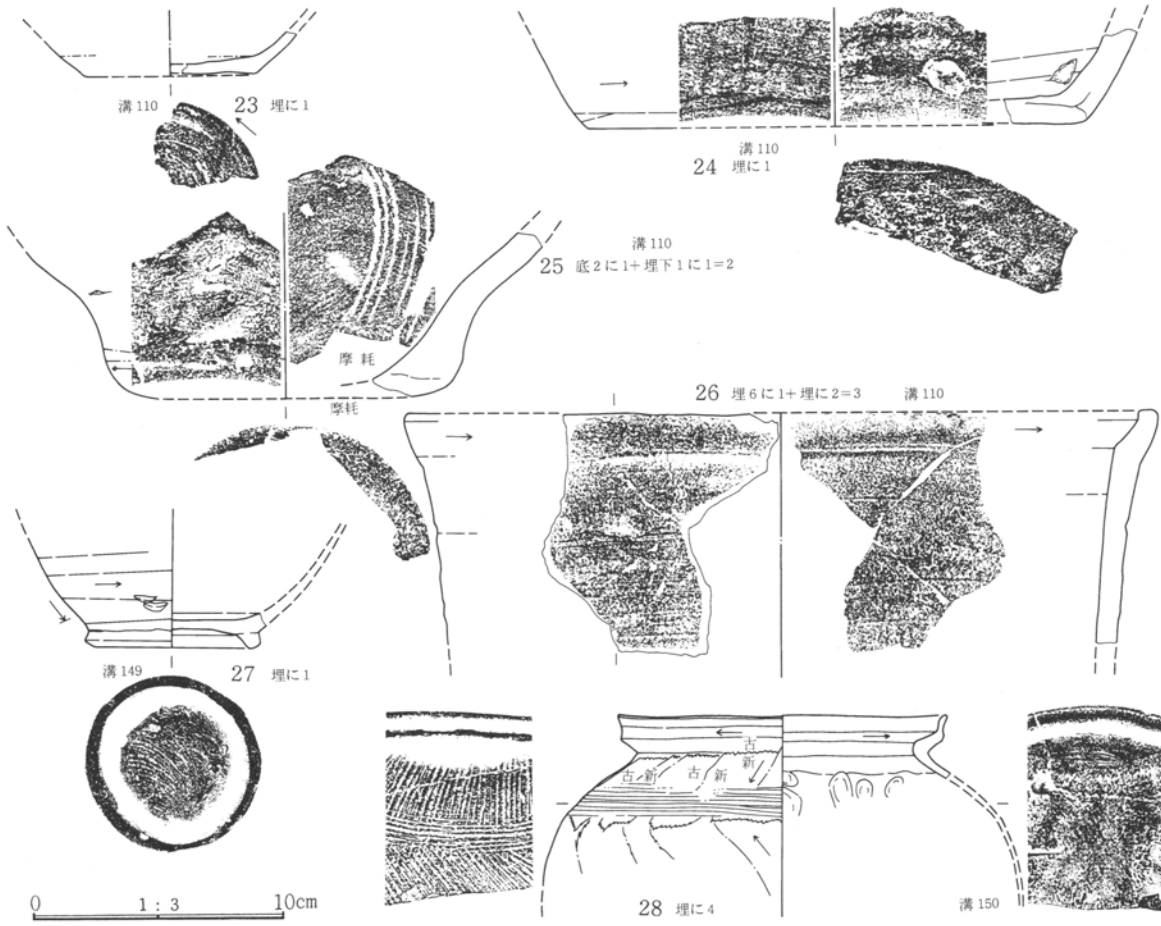
第494図　溝跡遺構図

いるので以降と考えられるが、その走行の一部に住居跡131、同132の北壁沿いに並走する場合や、溝跡98・99・102などが平安時代住居の少ない個所を通過することを考え合せると、11世紀末頃までの構築ではなかったと想起することができる。遺物は第495図18に９世紀前半頃の坏が溝跡98から、同図16に溝跡100からの出土である９世紀後半から10世紀前半頃の須恵器片があるので遺物と埋没時期を加えることにより少し構築時期を補なうことができよう。

溝跡106・107も古代の埋土であったが、住居跡57以北の住居群中と重さなった場面では埋土相互の区分ができなかった。唯住居跡123では溝跡106の延長上として可能性のある溝跡89が住居跡123を切っているため古


溝67　1　埋に1
2　埋1に1　溝67
溝67　3　埋4に1
溝79　4　埋に1
5　埋に1　溝80
溝81　6　埋に1
溝85　8　埋1に1
10　倒木トレに1　溝88
溝82　7　埋に1
11　埋に1　溝88
溝85　9　埋に1
溝89　12　埋に1
13　埋に1　溝94
溝93　14　埋に1
15　上2に2　溝99
16　埋に1　溝100
溝96　17　埋1に2
埋に1　18　溝98
新古
砂混
新古
砂混
19　埋7に1　溝99
焼
溝
20　埋に1　溝102
21　埋に1　溝104
22　j 172 埋に1　溝105
0　1：3　10cm

第495図　溝跡遺物図



第496図　溝跡遺物図

墳時代前期以降であることが分った。

続いて浅間山Ｂ軽石を含む溝跡については次のとおりで、溝跡67を除く全溝跡とも近世陶・磁器を含まない。

溝跡80は、A_s－Ｂの混入は不明瞭であったが、下方延長の溝跡80の埋土が粗質であったのでその可能性があり、方向はＮ34°Ｗを測る。古代住居跡を切る。

溝跡81・82は、埋土にA_s－Ｂを混入し、溝跡82の南側・北側には道跡の硬化面が幅70～80cmで取り付く、溝跡81同走行のため近時期であろう。溝跡82は、Ｒ区の溝跡118に達している。Ｎ68°Ｅを測る。埋土は砂質土が多くあり、時期によっては流水していたようである。

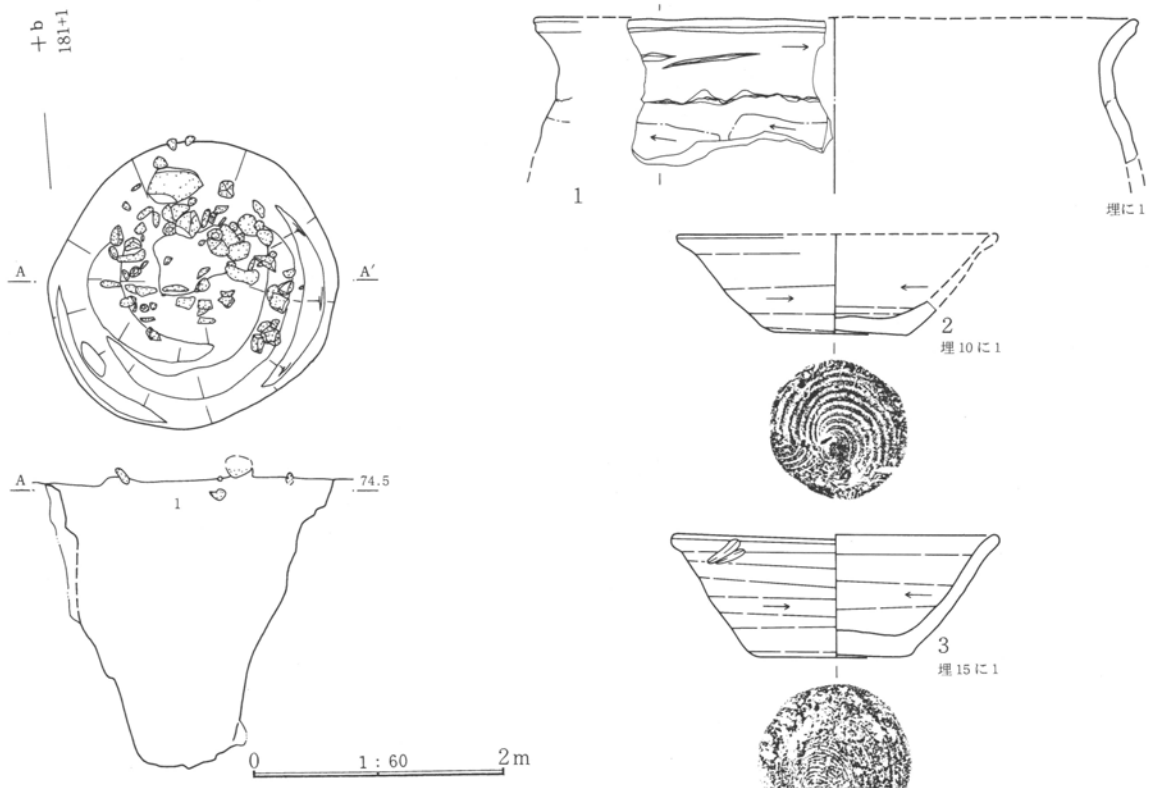
溝跡79・88・105は、A_s－Ｂを混入し、溝88の埋土下方には砂質土を含み、時期によっては流水していたようである。方向はＮ27°Ｗを測る。

溝跡92・93・97は、A_s－Ｂを混入し、底面に鋤状工具痕が残される。各々高所にある溝跡88より分岐していたようである。

溝跡100は、A_s－Ｂを混入し、底面に砂質土があり、時期によっては流水していたようである。延長はＰ東区の溝跡41に達する。遺物は第496図に示したとおり、15世紀初頭頃の同図26、15世紀中頃の同図25など中世後半の軟質陶器片がある。方向はＮ17°Ｗを測る。

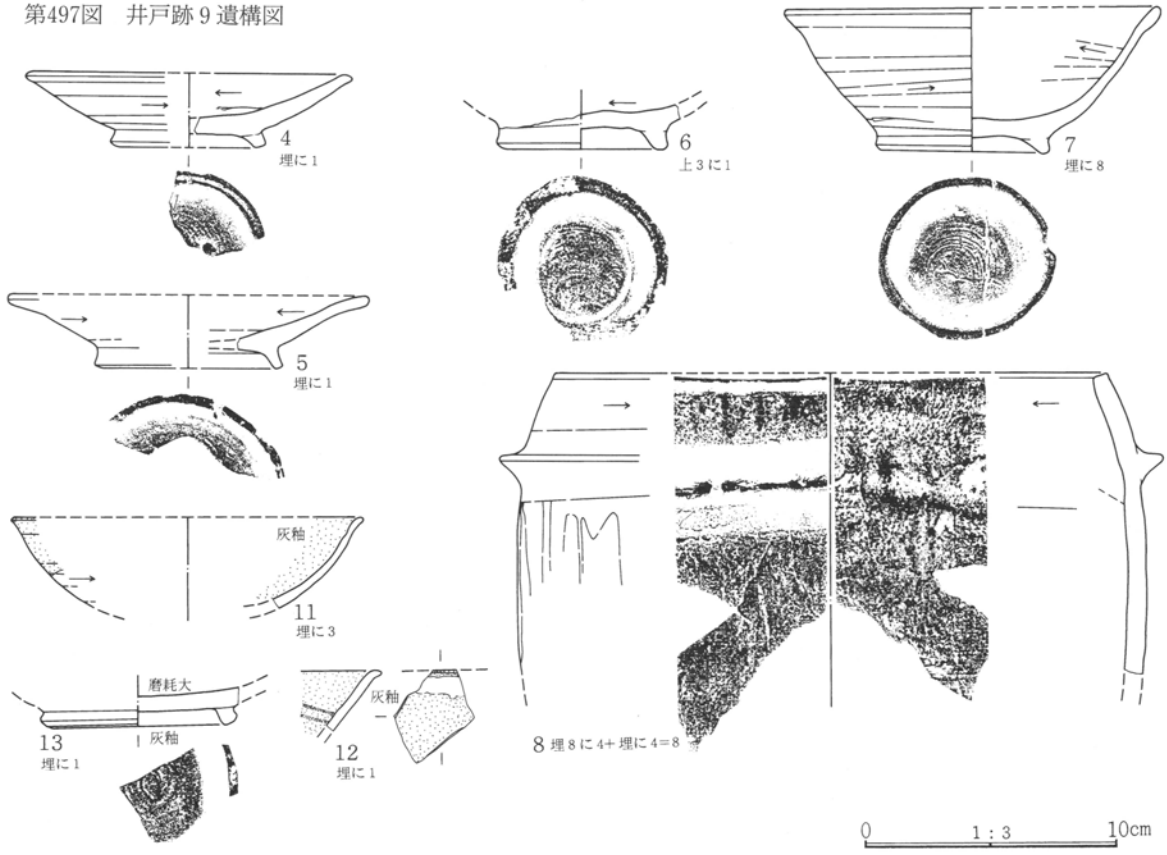
３、井戸跡

Ｑ区では14基の井戸跡を調査した。地形は北西に高く、南西に低い地形にあり伏流水や地下水の流下も、

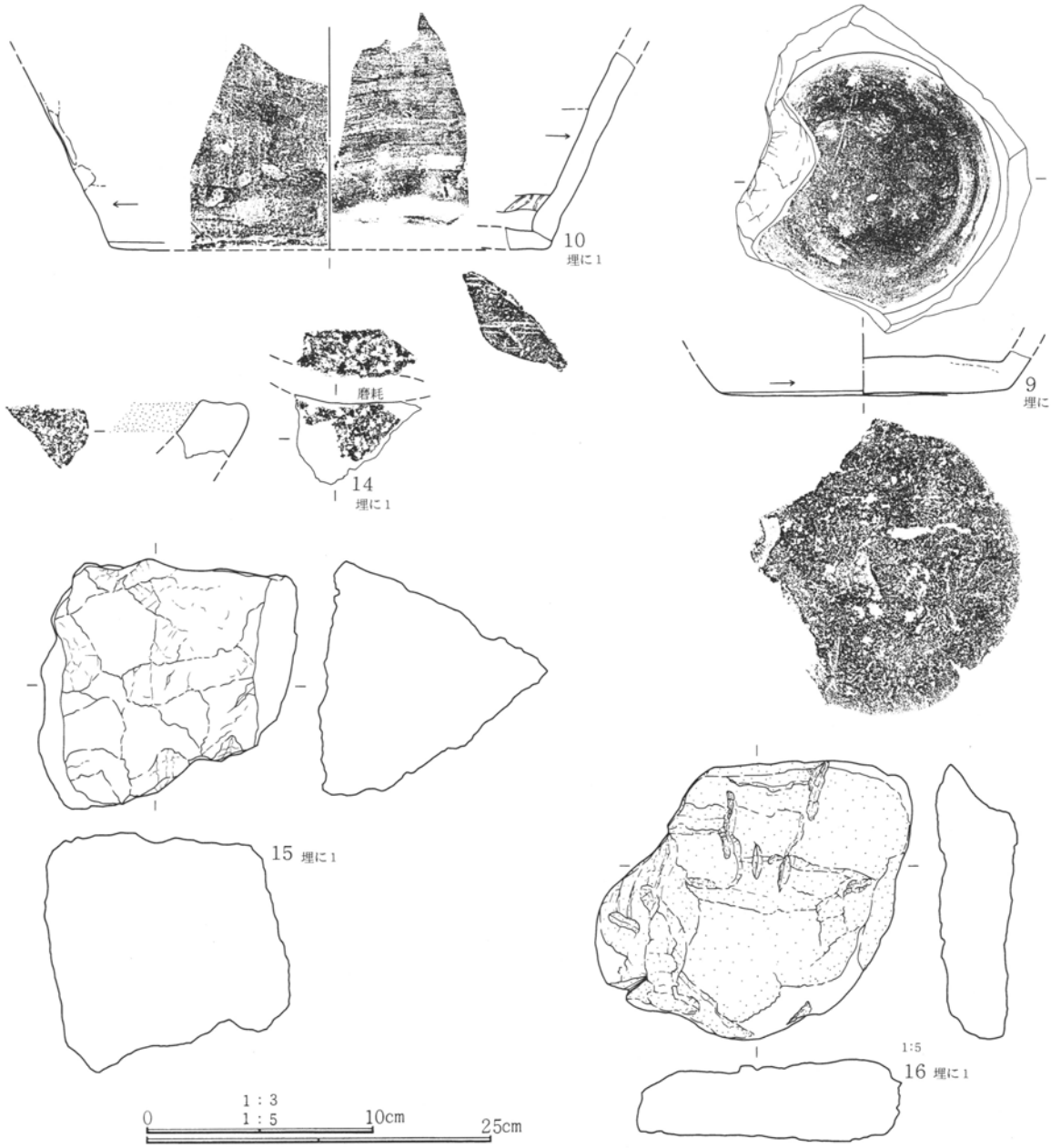


1、黒褐（10YR2/1）白色粒φ1～2㎜混入。中程にローム粒わずかに見える。土は地山に比べ粗い。

第497図　井戸跡９遺構図

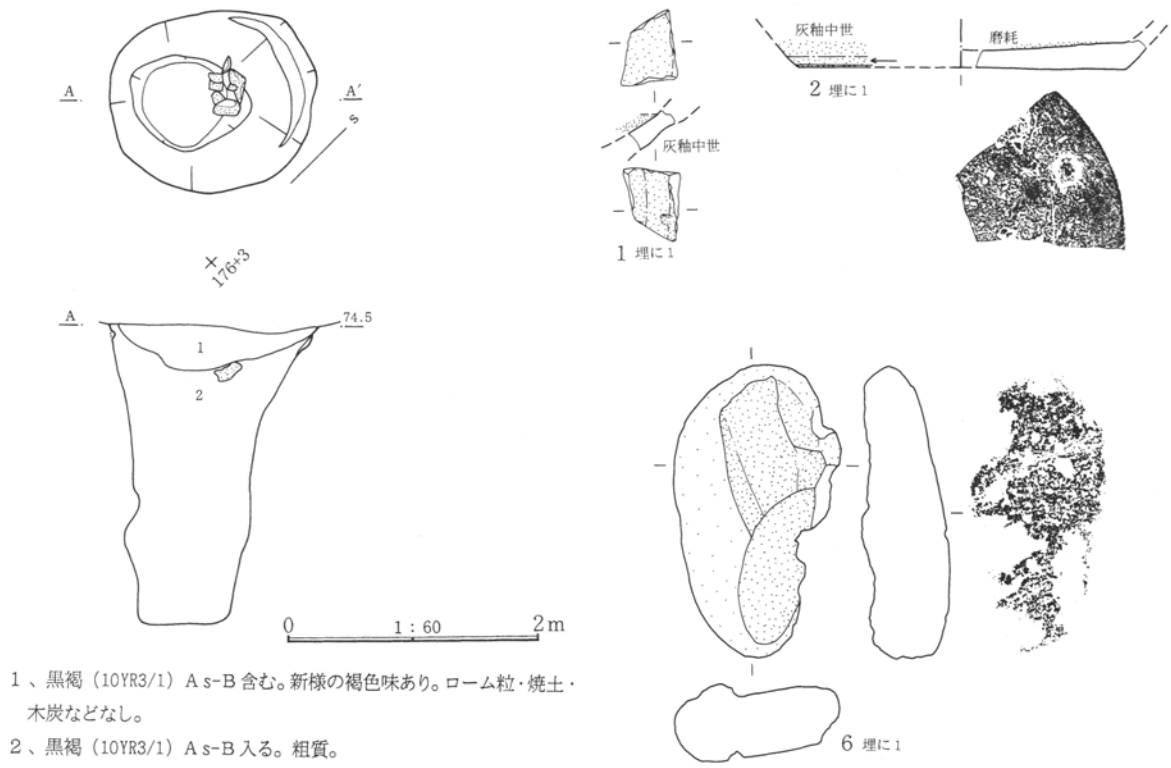


第498図　井戸跡９遺物図



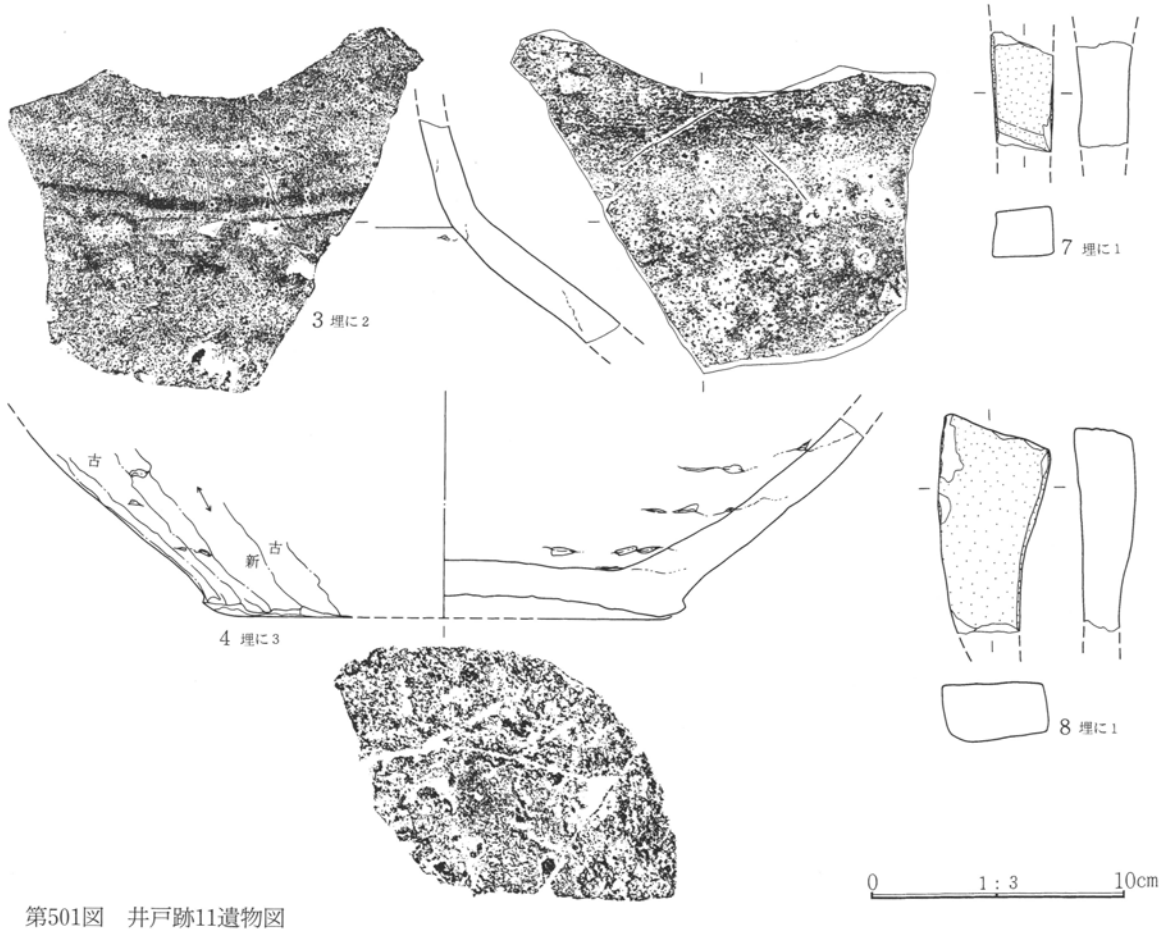
第499図　井戸跡９遺物図

基盤の二次堆積のローム層が急激な状態で堆積したように見えるので層の粗密の問題や地下水の地中変流の条件が別にあるようにも見えなかったので北西から南東に向かい流下していると考えられた。地下水は、湧水もゆるやかな透水を至て湧いた自然水位で全水量が決まる。井戸をまとめて掘上げた11月の時期的な条件としてＱ区東側の側溝は水路として南流下し、一年間を通じて流水していたが、南南東約300mの水田に引水させる水路として夏期は極めて多量に流れ、11月頃は人家排水の水が主なのか、地域の主要水が主因なのか不明であったが、わずか流水していた。水路は３面コンクリートではあったが、部分的に接合割れがあり、地下水に相当影響をあたえていると推考された。井戸跡に係わる11月頃の自然水位は標高74.0m付近である。それ以下、73.5m付近以下には、径1.5cm～５㎜程度の自然噴出し孔が湧水層中にあり、そこからの水量も多大であった。ローム層上面から100～150cm下方にはシルト質の火出灰土の水性による二次堆積層が存在する場合とない場合とがあり、ある場合は、湧水層になっている。それら湧水の流下走行について古代・中世の

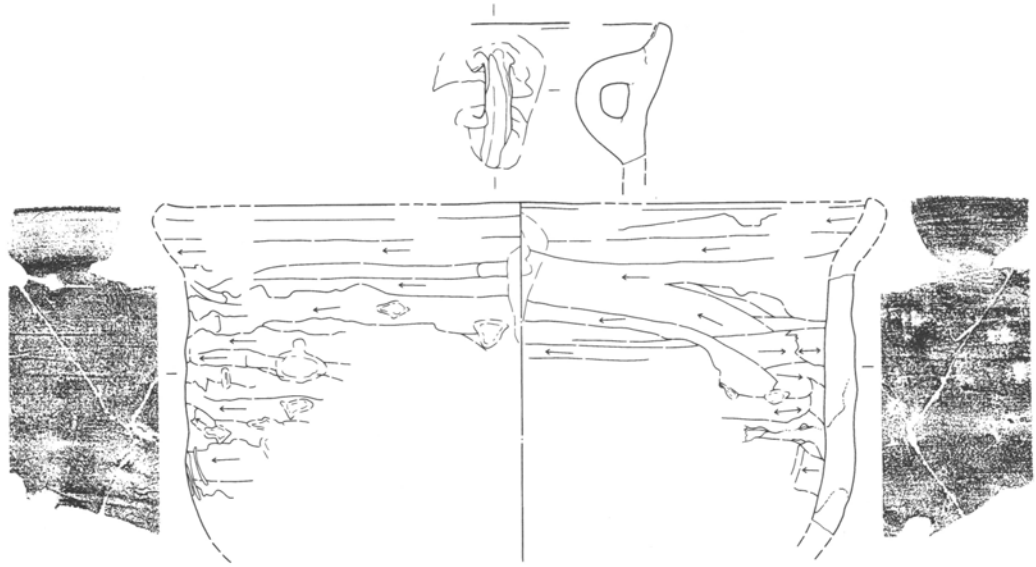


1、黒褐（10YR3/1）As-B含む。新様の褐色味あり。ローム粒・焼土・木炭などなし。
2、黒褐（10YR3/1）As-B入る。粗質。

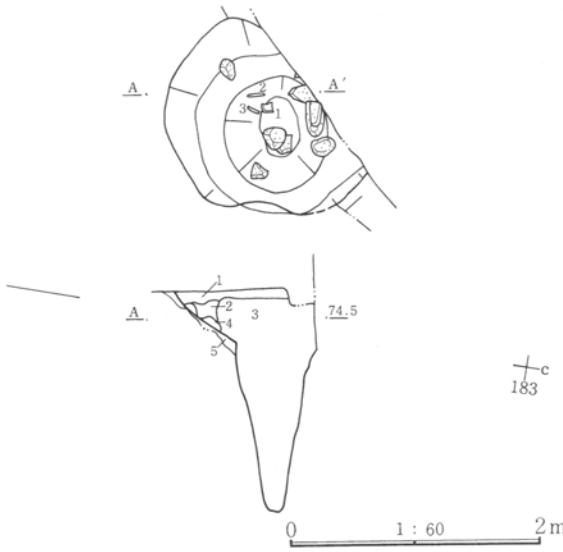
第500図　井戸跡11遺構図

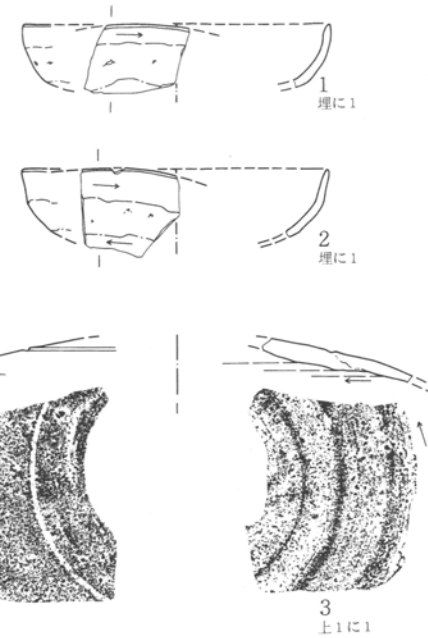


第501図　井戸跡11遺物図



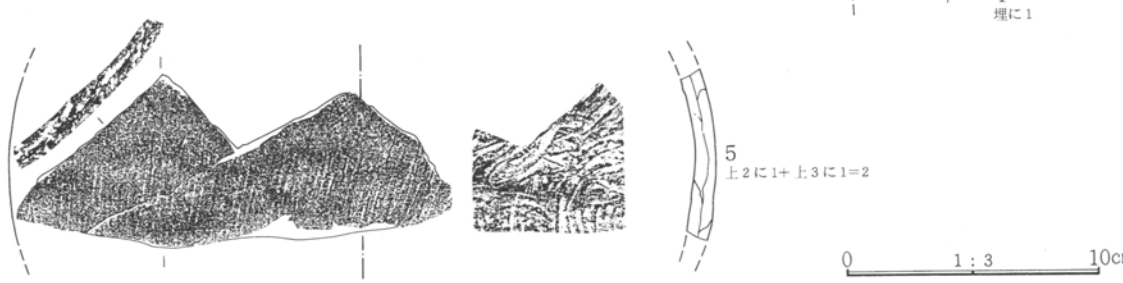
第502図　井戸跡11遺物図



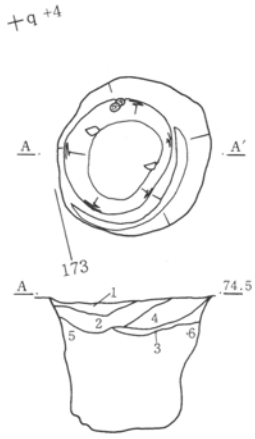


1、黒褐（10YR2/2）白色パミス・ローム粒φ1 含む。
2、黒褐（10YR2/2）1層と3層の中間土。焼土粒見られる。
3、黒褐（10YR2/2）ローム粒1～5㎜散在。土はやや砂質になる。
4、2層とロームブロックのブレンド。
5、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化。

第503図　井戸跡12遺構図



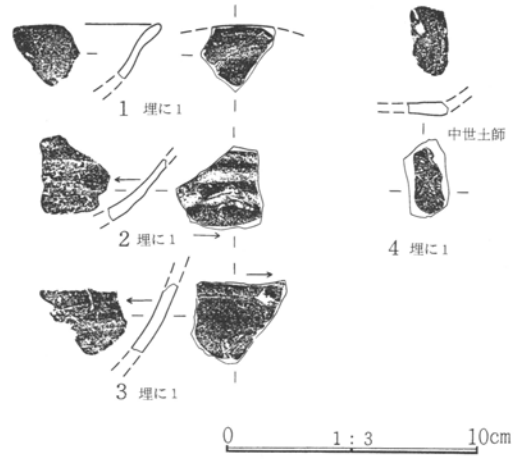
第504図　井戸跡12遺物図



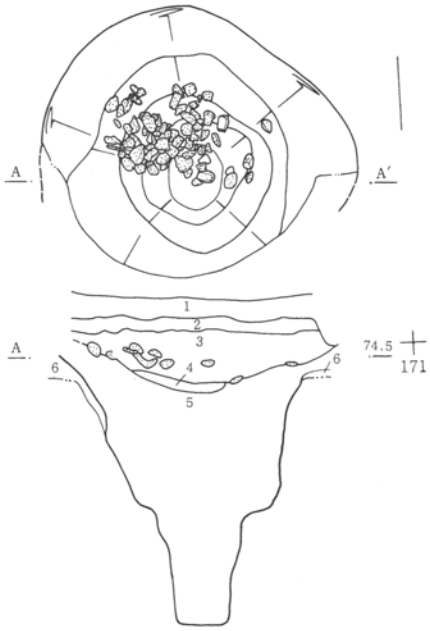
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。砂質。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。ロームブロック多い。粗。
３、明黄褐（10YR6/6）
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。粗。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。粗。
６、黒褐（10YR3/1）５層よりロームブロック量多い。粗。

0　1：60　2m

第505図　井戸跡13遺構図



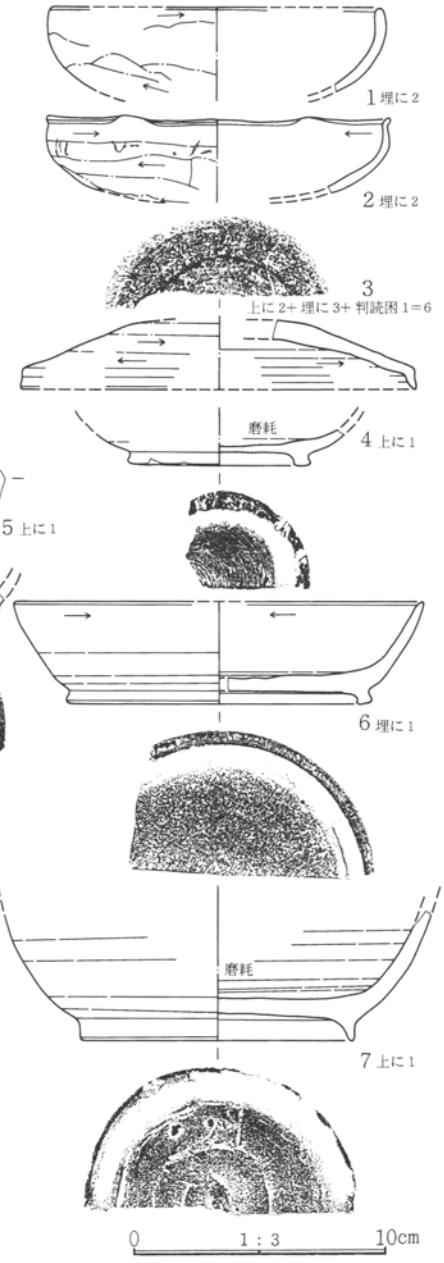
第506図　井戸跡13遺物図

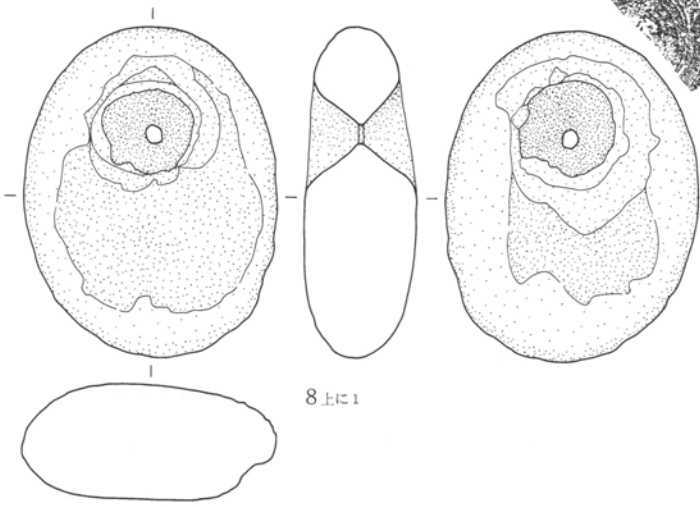


１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ含む。現道の硬化あり。１′は軟らか。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。粗。
３、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まず。やや粗。この中、礫遺物多い。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含まず。砂質。
６、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含まず。粘性。ローム漸移なし。

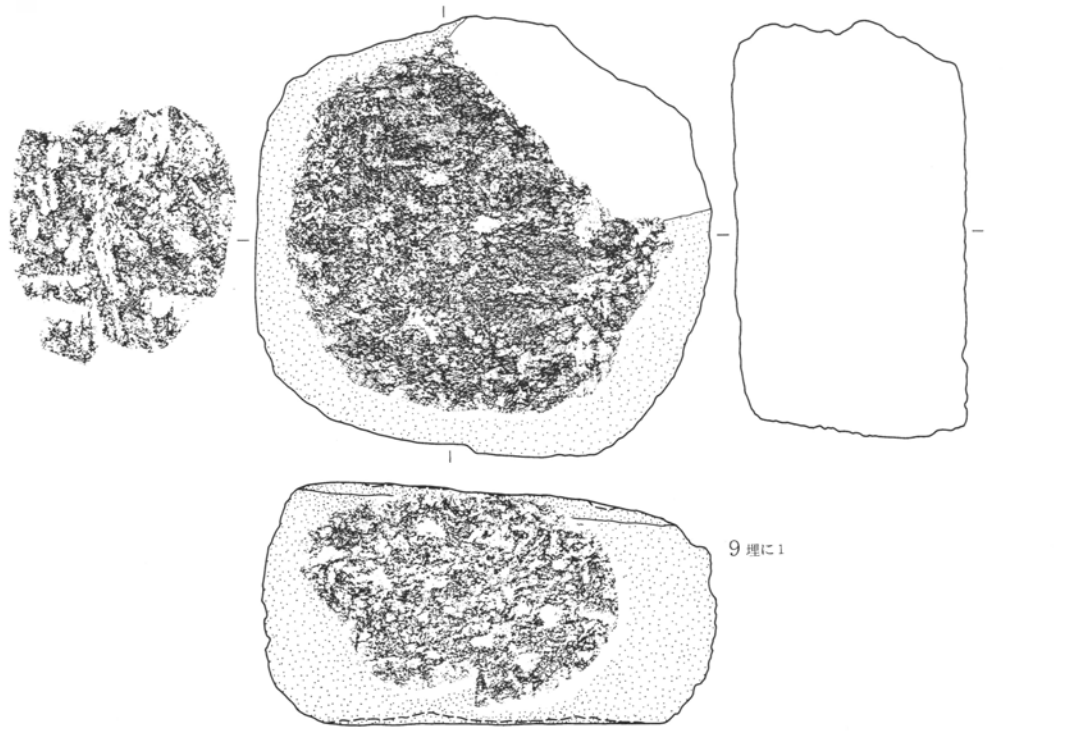
0　1：60　2m

第507図　井戸跡14遺構図

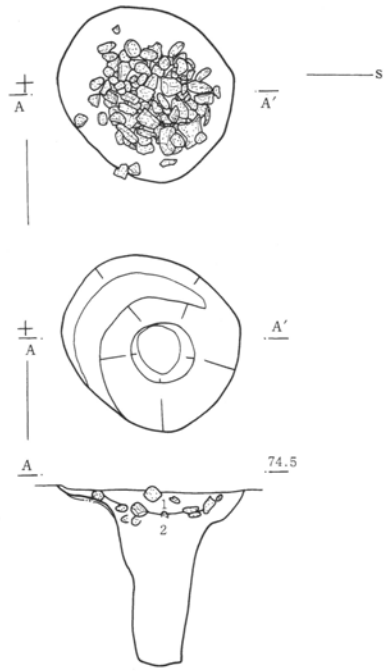




第508図　井戸跡14遺物図



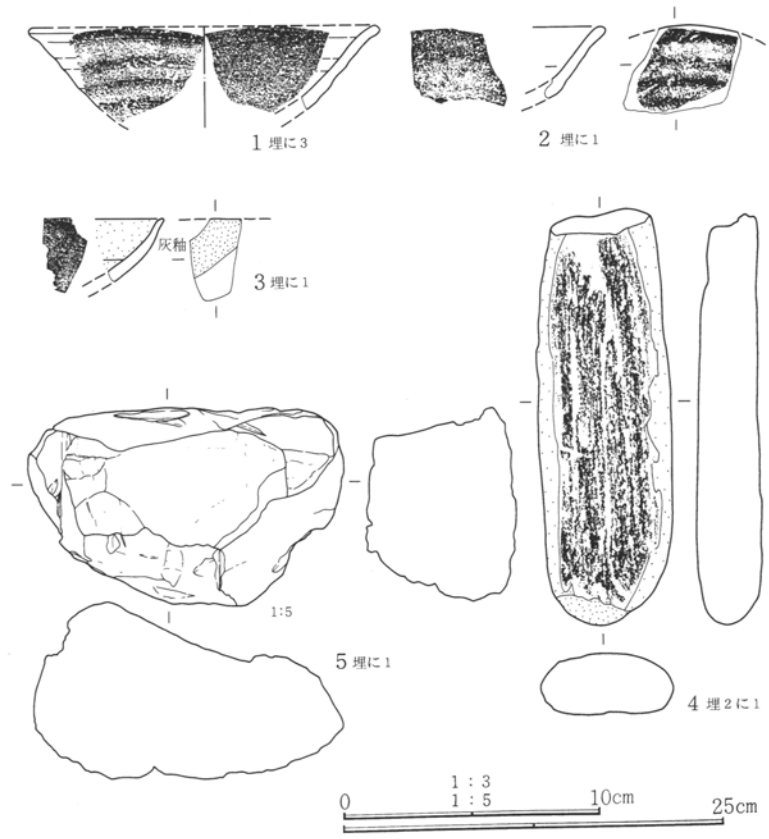
第509図　井戸跡14遺物図



1、黒褐（10YR3/1）As-B混じり、軟らか。
2、黒褐（10YR3/1）As-B混じり、1層より締りあり。埋土か。礫多い。

0　1：60　2m

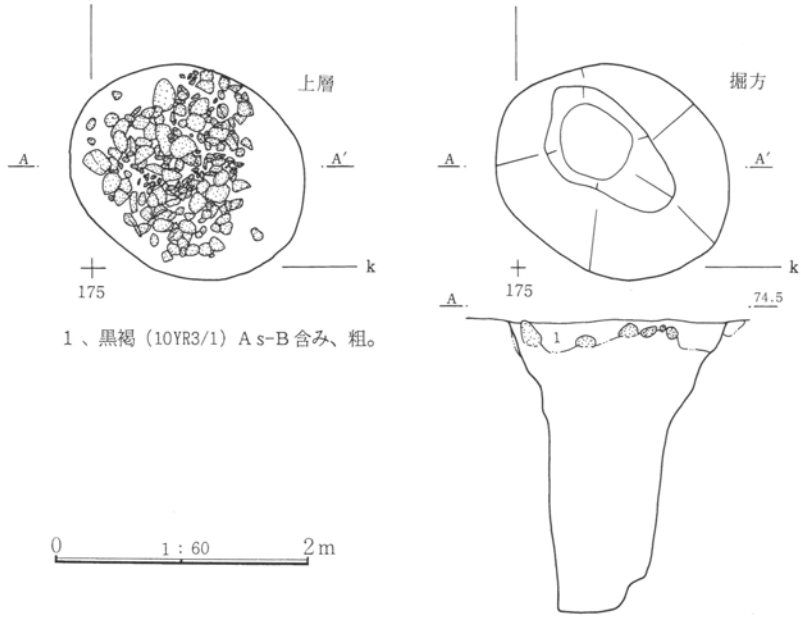
第510図　井戸跡15遺構図



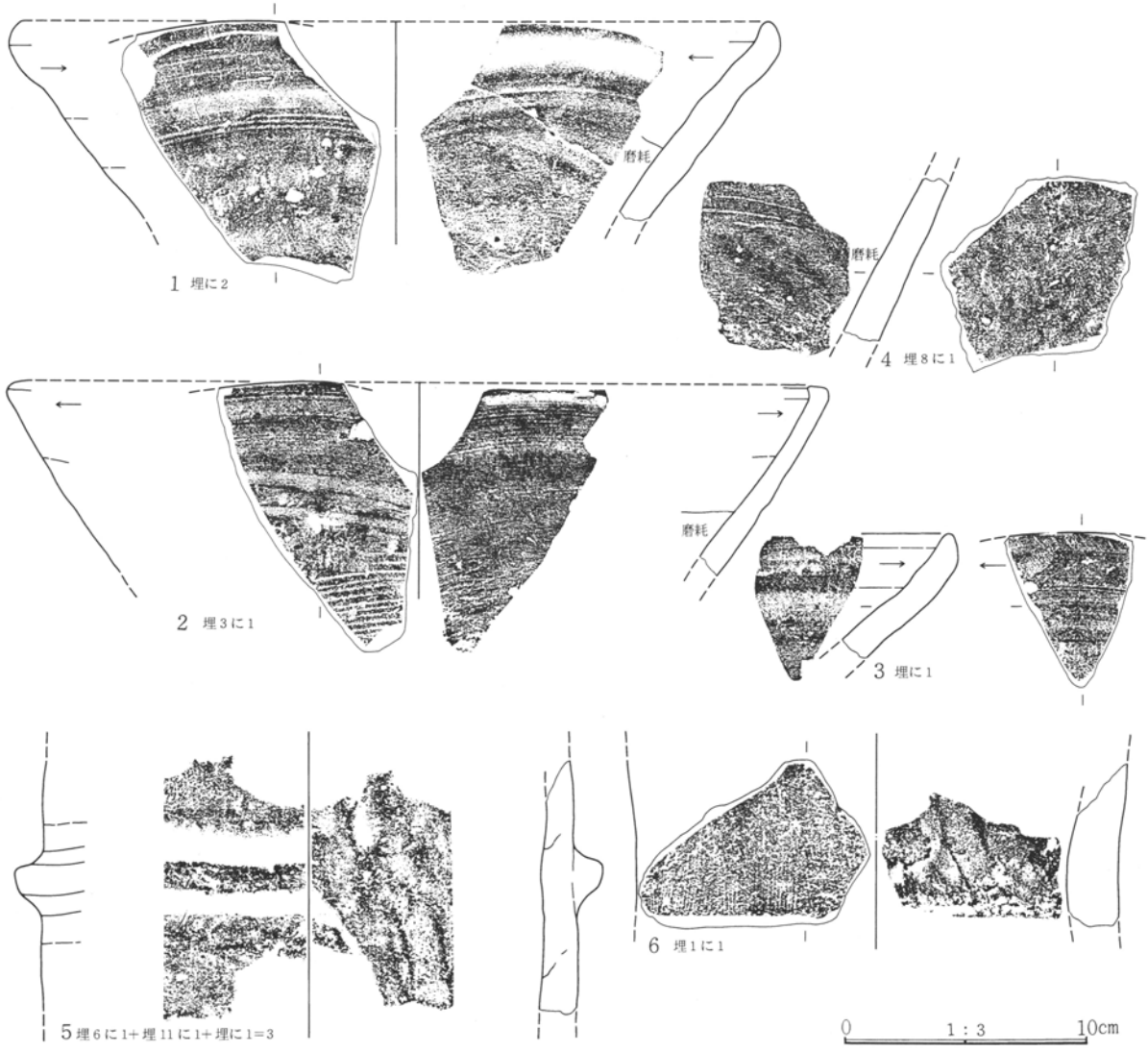
第511図　井戸跡15遺物図

人々は、当然のごとく承知していたらしく、上方の平面形は円形であっても内部下半が卵形となっていたり底面が卵形となっていたりする例が多く見られた。その際隅丸の尖部は北西方向、つまり地下水の上流向きに設けられる傾向があった。

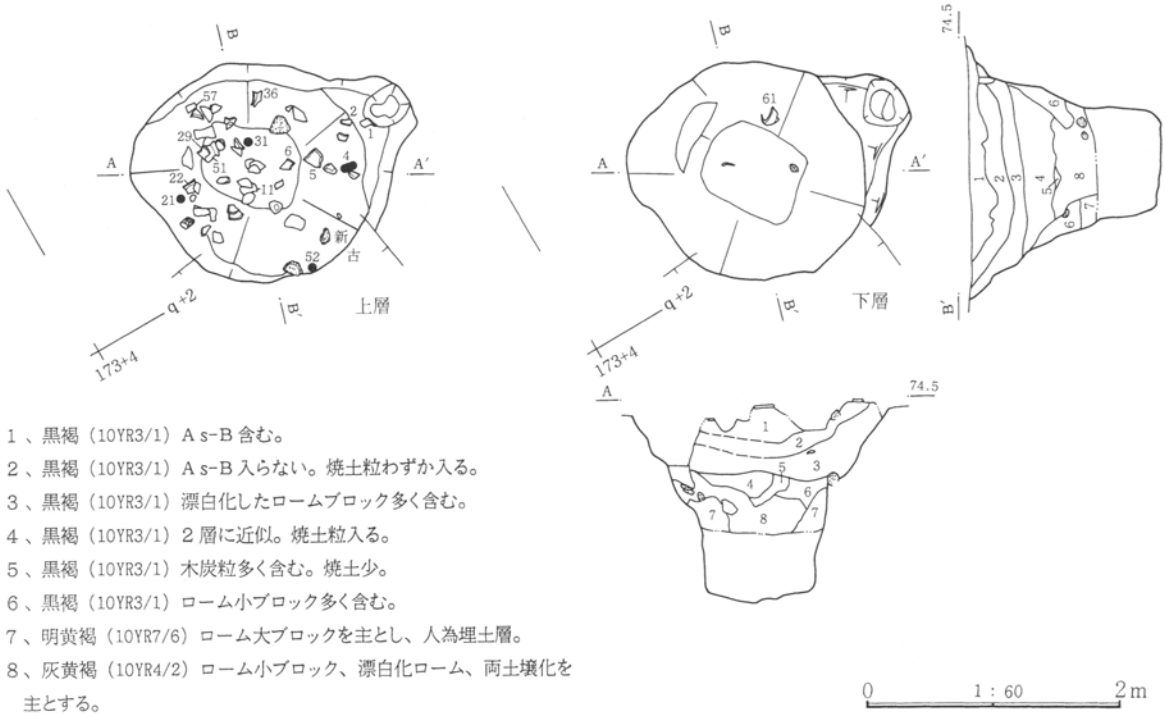
井戸跡の調査は、さく井業者への委託に伴なう湧水量、湧水点の判断を現場で確認している。また、井戸跡の掘残しや、未掘の井戸はなく、全井戸を調査した。



第512図　井戸跡16遺構図



第513図　井戸跡16遺物図



１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ入らない。焼土粒わずか入る。
３、黒褐（10YR3/1）漂白化したロームブロック多く含む。
４、黒褐（10YR3/1）２層に近似。焼土粒入る。
５、黒褐（10YR3/1）木炭粒多く含む。焼土少。
６、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。
７、明黄褐（10YR7/6）ローム大ブロックを主とし、人為埋土層。
８、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック、漂白化ローム、両土壌化を主とする。

第514図　井戸跡17遺構図

井戸跡９　（第498・499図、図版87・200・201）

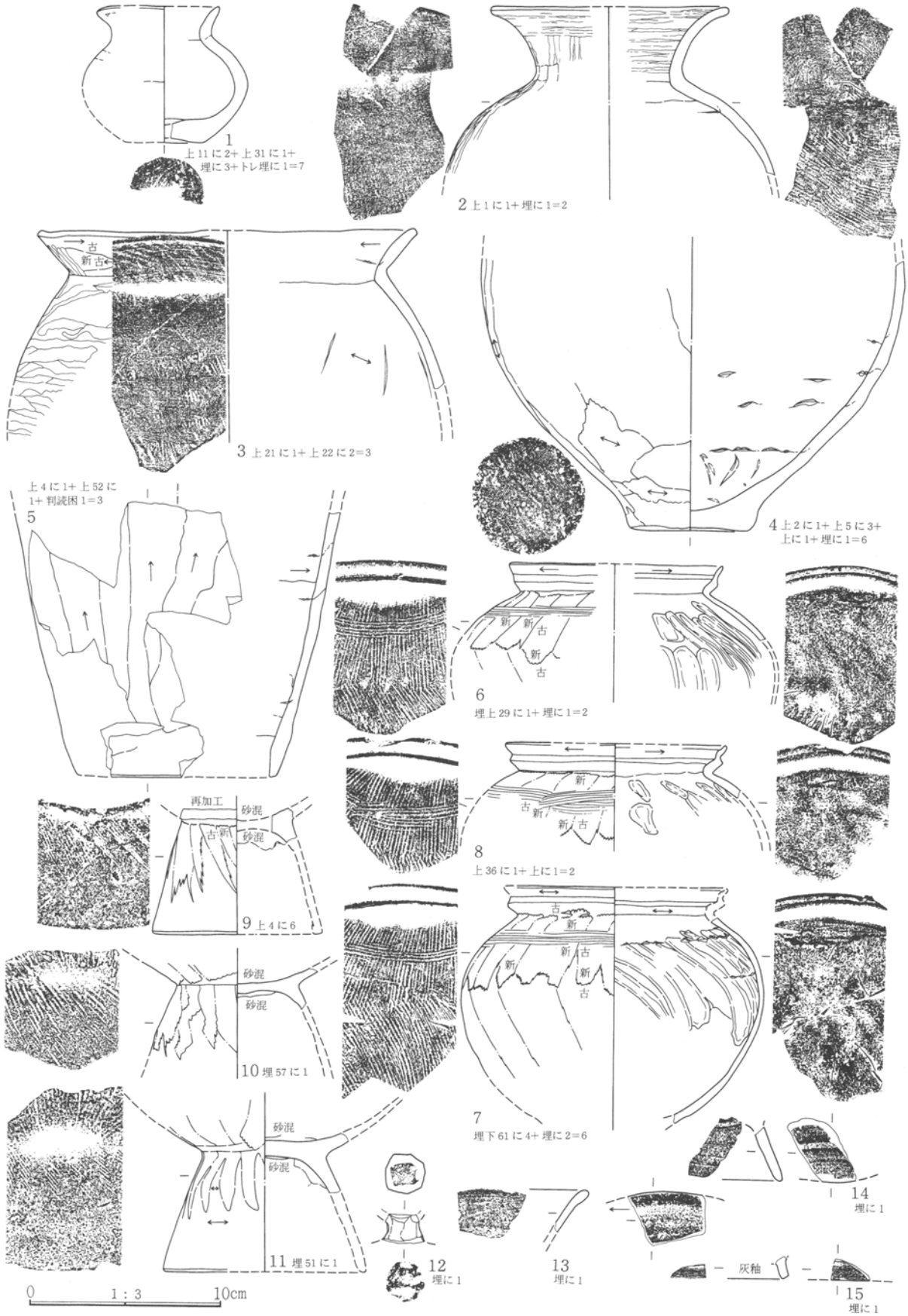
Ｒ大区ａ181にある。ロート状に広がる丸底気味の形態で径218cm、深さ228cm。深さ180cmまで礫多く、注１気味の埋土で、以下は暗黒褐色の砂質土。自然水位は、調査面より－60cmまで達し、湧水層は調査面より－130cm以下にあり、取水口は７ヵ所で北東より南南西にあり、北東から標高72.96、72.5、73.2、73.09、73.1、73.06、73.3mの位置であった。最下位でわずかなアグリ部（湧水等で起きたオーバーハング部）が存在。湧水量は毎秒0.6ℓ、有効貯水量約2.40㎥。遺物は土師器209片、須恵器11片あり。第497図のとおりであるが、最終埋没は同図2・3など10世紀中頃で、以下の埋土に10世紀前半の個体が含まれ、機能は10世紀か。

井戸跡11　（第500・501・502図、図版87・201）

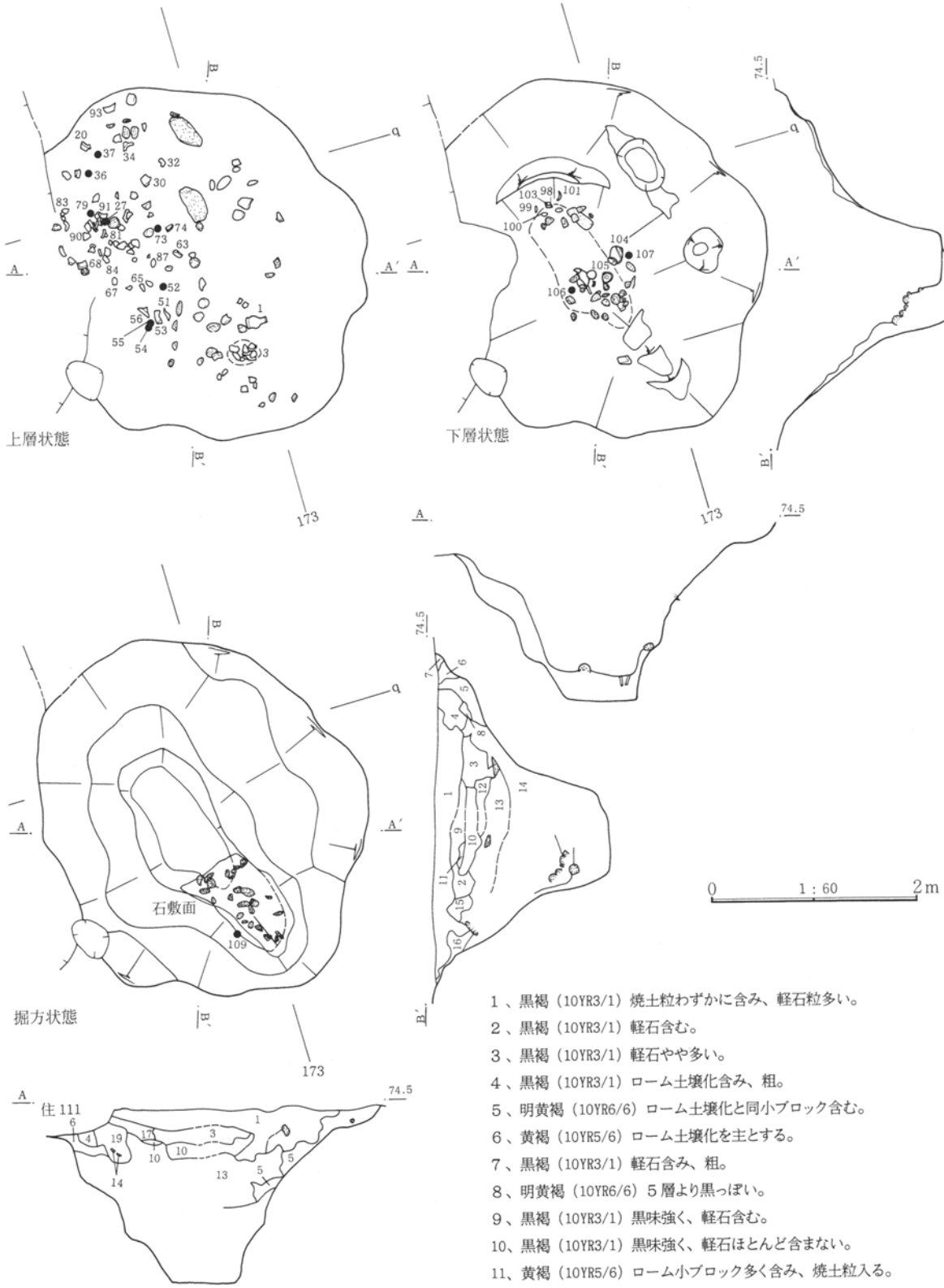
位置はＲ大区ｃ183にあり、調査面は黒色土中標高74.6m。形態は平面円形で底平ら気味。埋土は、注２以下もＡs－Ｂをまじえる粗質土。自然水位は、－80cm。湧水層は－185cm以下にあり、北から西北西にかけ３ヵ所、北より標高72.47、72.62、72.67mの位置であった。湧水量毎秒0.1ℓ、有効貯水量0.9m³である。遺物は土師器片30、須恵器片19、瓦２、磁器１、焼締陶器11、施釉陶器１、石製遺物３、石465があり、第501・502図に示した。そのうち第502図５は破片量があり、14世紀末頃の軟質陶器で機能も同期であろう。

井戸跡12　（第503・504図、図版87・201）

位置はＱ大区ｂ183にあり、調査面は黒色土中標高74.7m。形態は平面不整気味な円形で、底先尖り気味。埋土は注記３以下暗黒褐の砂質土。自然水位は－70m。湧水層は－145cm以下に、南東に１孔あり深さ標高73.26m。湧水量は毎秒0.5ℓ。有効貯水量0.14m³。遺物は土師器42、須恵器13、石わずか、篩分け炭化コメ・麦様小粒、松葉など。遺物は第504図に示したとおり同図1～3は８世紀代と考えられる個体であるが、最も新しい遺物に同図４があり、10世紀代である。機能時はその頃であろう。

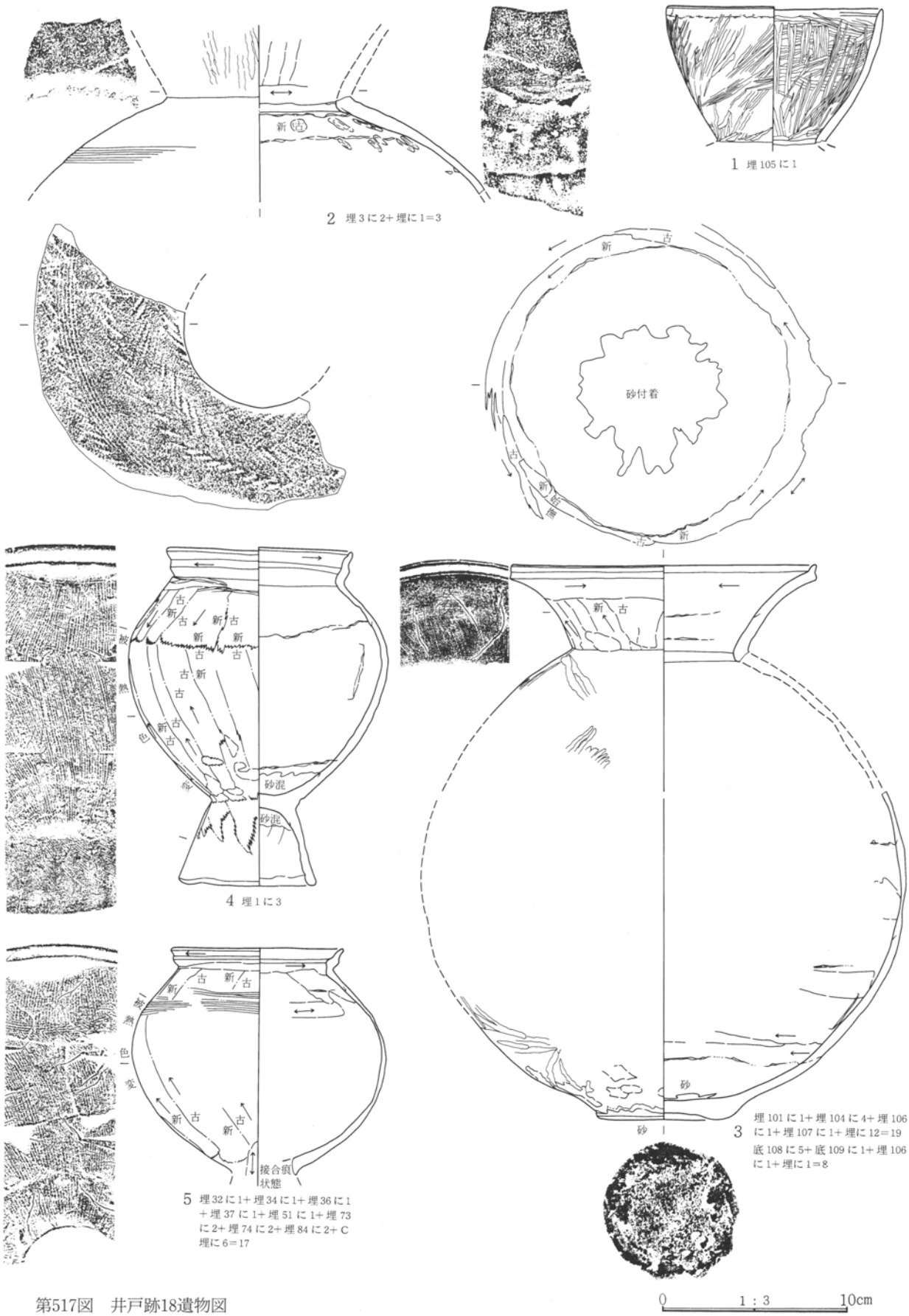


第515図　井戸跡17遺物図

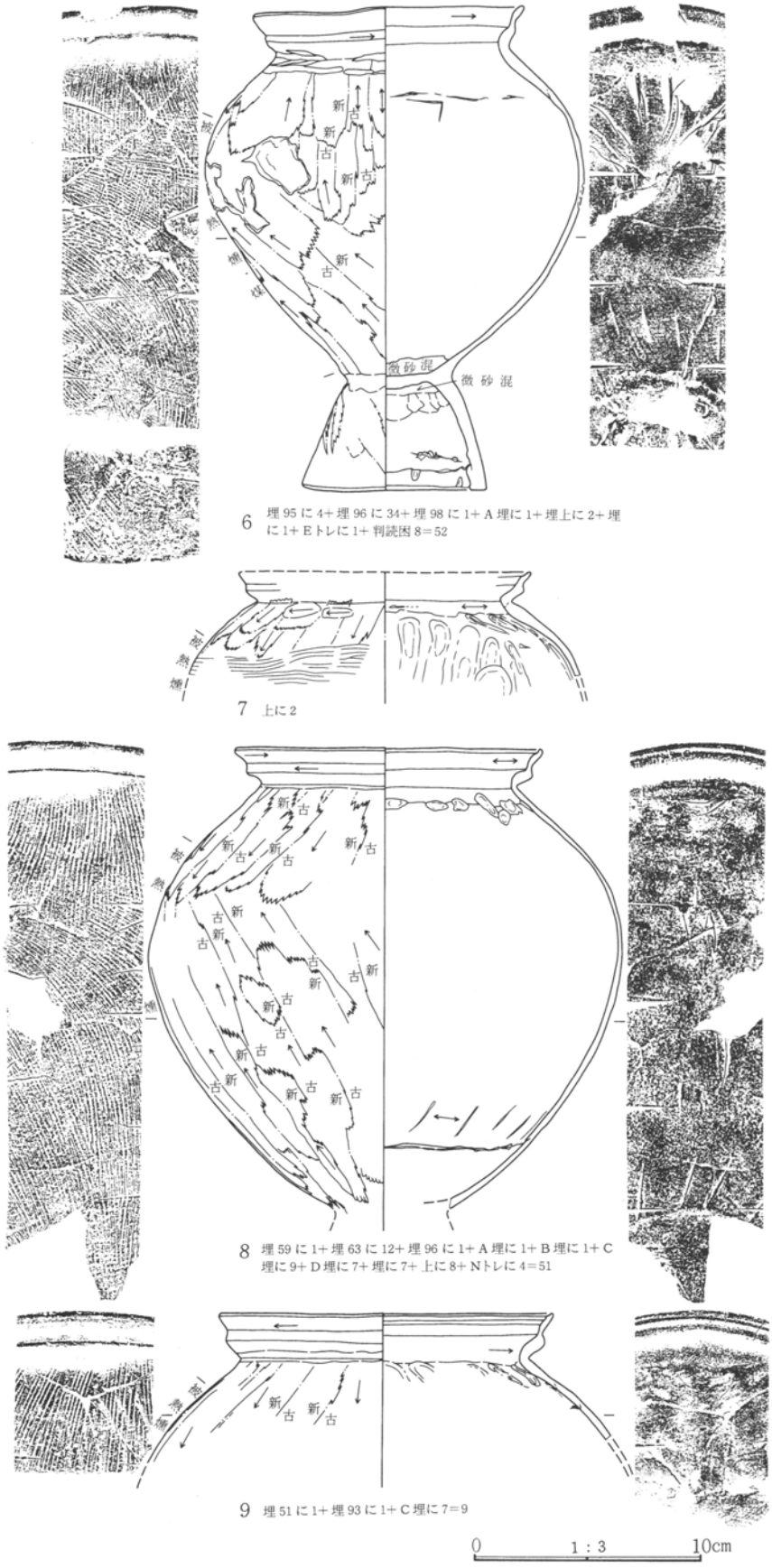


1、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずかに含み、軽石粒多い。
2、黒褐（10YR3/1）軽石含む。
3、黒褐（10YR3/1）軽石やや多い。
4、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化含み、粗。
5、明黄褐（10YR6/6）ローム土壌化と同小ブロック含む。
6、黄褐（10YR5/6）ローム土壌化を主とする。
7、黒褐（10YR3/1）軽石含み、粗。
8、明黄褐（10YR6/6）５層より黒っぽい。
9、黒褐（10YR3/1）黒味強く、軽石含む。
10、黒褐（10YR3/1）黒味強く、軽石ほとんど含まない。
11、黄褐（10YR5/6）ローム小ブロック多く含み、焼土粒入る。
12、黒褐（10YR3/1）軽石含み、ローム小ブロック少し入る。
13、にぶい黄橙（10YR6/4）漂白化した粘性ローム小ブロック入り、少し締る。
14、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、軽石不明瞭。
15、黒褐（10YR3/1）軽石粒・ローム小粒・焼土粒含む。
16、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、５層に近いが、黒い。
17、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、軽石粒多い。
19、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・軽石・木炭粒含む。

第516図　井戸跡18遺構図



第517図　井戸跡18遺物図



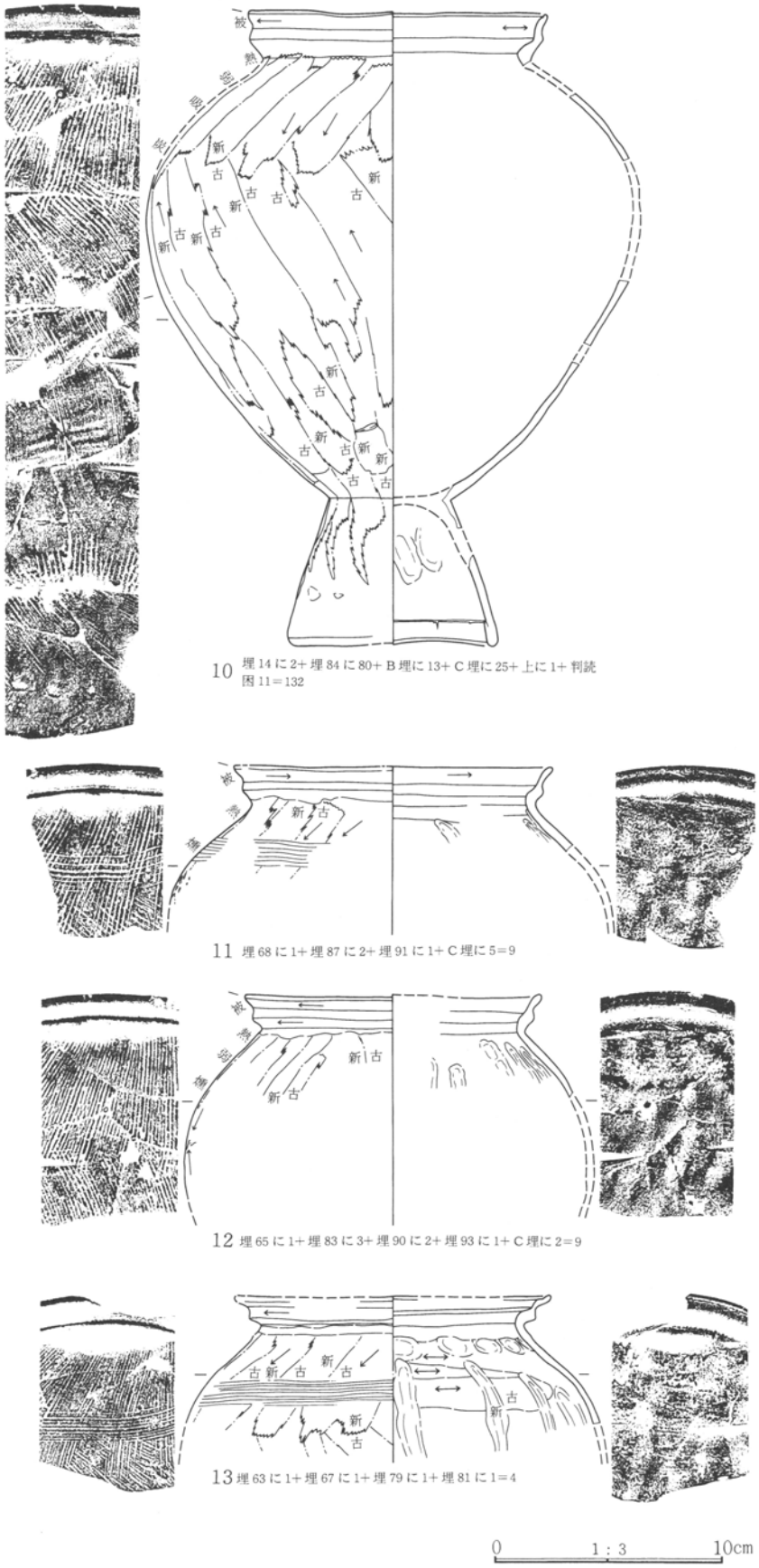
第518図　井戸跡18遺物図

井戸跡13　（第505・506図、図版88・201）

位置はＱ大区ｑ172にあり、調査面はローム層漸移標高74.5m。土層注記３以下は暗黒褐の砂質土である。規模は径122cm、深さ130cmである。自然水位は－50cmで、湧水層は－95cmの底付近に取水口が３ヵ所あり、北側で標高73.47、東側で73.45、南側で73.48mである。湧水量は毎秒0.5ℓ、有効貯水量0.3m³を現地で測定している。出土遺物は土師器34片、須恵器８片、石43であった。遺物は第506図に示したとおりで同図1・2は10世紀頃の須恵器坏で埦片であるが、最も新しい遺物に同図４の中世土器質土器皿片がある。中世土師質土器産量は当地域では13世紀後半頃から以降と考えられる。埋土上層は注1・2のとおりAs－Bを含み、以下も含まれていた。さらに中世軟質陶器が１片も出土していないので、この井戸跡の機能時を13・14世紀頃と考えたい。

井戸跡14　（第507・508・509図、図版88・201）

位置はＱ大区ｔ171にあり、調査面は黒褐色土中で標高74.5m。形態は平面形円形、断面形底の平らな

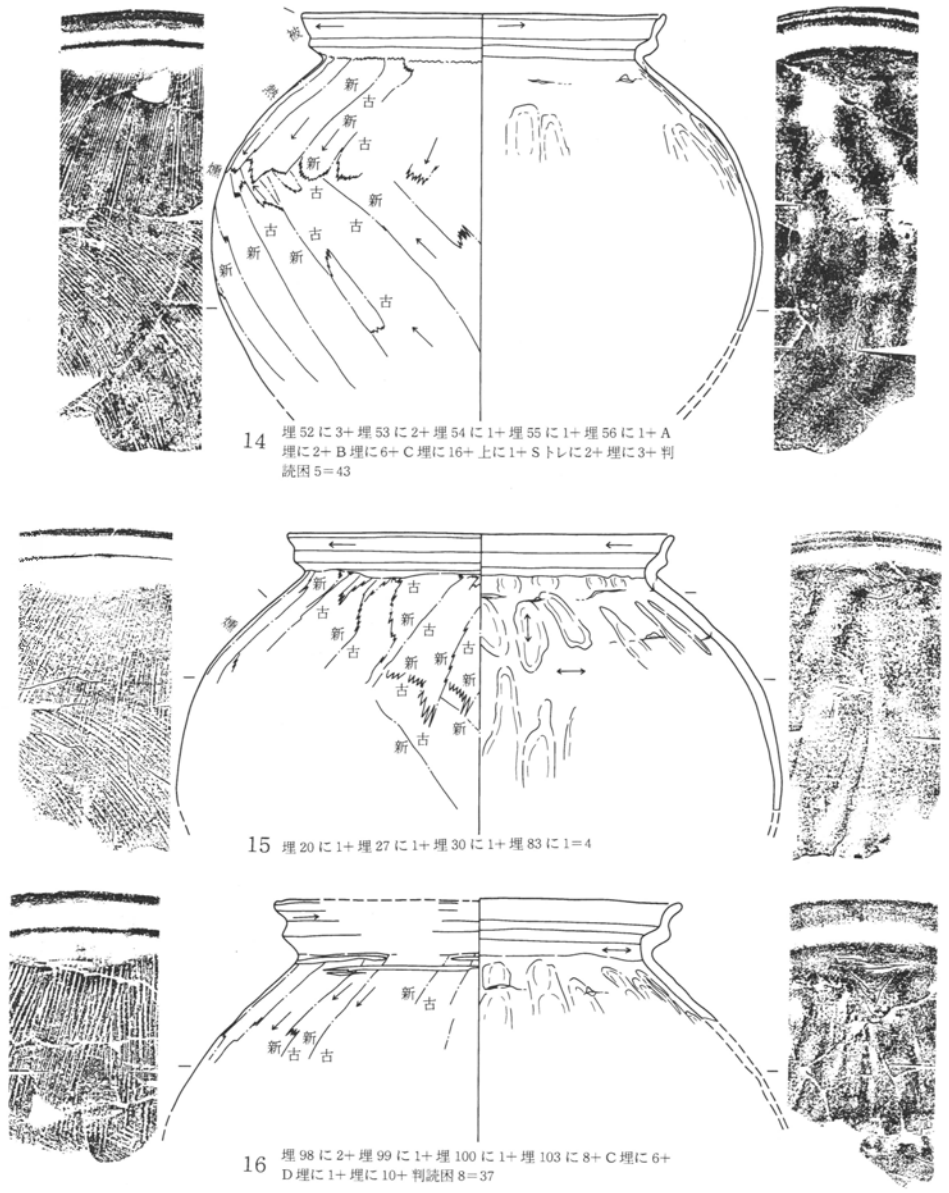


第519図　井戸跡18遺物図

ロート状を呈する。埋土は黒褐色の砂質土で、注３から５の－100cm付近まで石を多量に混じえていた。規模は径254cm、深さ213cmである。自然水位は－60cm。湧水層は＋1.10cm以下の層で、取水孔は径12cmで北側標高73.26mであった。湧水量は毎秒0.1ℓ、有効貯水量0.7m³である。遺物は第508・509図に掲げた。調査時では土師器575片、須恵器54、石製遺物２、石175を数える。このうち須恵器片中の一つに10世紀頃の羽釜片が含まれていたが、整理時に抽出できなかった。抽出できたのは図中1～7まで８世紀頃の遺物であり、構築時期は、その羽釜片の10世紀頃が井戸の機能時と考えられる。同図14は分銅状石製品。同図９は荒削が残され未成品か。

井戸跡15　（第510・511図、図版88・202）

位置はＱ大区rs171にあり、調査面は、ローム層漸移標高74.4mである。埋土はＡs－Ｂを含み、注２以下は粗質な黒褐色土であった。注１から－100cmまでの間多量な石が廃棄されていた。平面は円形気味で、最上部付近で急にラッパ状となる。規模は径142cm、深さ



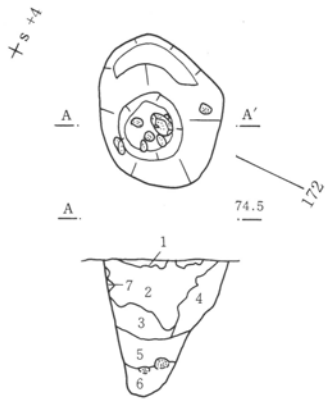
第520図　井戸跡18遺物図

138cmを測る。自然水位は－60cmで、湧水層は－130cm以下に取水口が３ヵ所あり、北側で標高73.09、南東で73.04、南西で73.2mの位置。湧水量は毎秒0.1ℓ、有効貯水量0.1m³。遺物は第511図に示したが、A_s－B降下以降は見えず、おそらくは、地域で軟質陶器量産の14世紀後半頃以前、12世紀以降の機能であろう。

井戸跡16　（第512・513図、図版88・202）

位置はQ大区k175に、調査面標高74.4m。形態は円形で上方はラッパ状に開く。埋土はA_s－Bを混え、粗質、－100cmまで礫多量。規模径186cm、深さ238cm。自然水位－70m、湧水層150cm以下で、取水口は、３孔あり北西で標高72.10、西で72.48、南東で72.93mの位置である。毎秒0.15、貯水量0.8m³、遺物は軟質陶器片６、土師類144、石99。軟質陶器の第513図1・2・3は15世紀前半頃で、井戸機能は同期か。

井戸跡17　（第514・515図、図版88・202）



１、黒褐（10YR3/1）黒味おび、軽石入る。住104床下。締る。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。
３、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。粗。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。さらに木炭粒含む。
５、灰黄褐（10YR5/2）ロームブロック含む。
６、灰黄褐（10YR5/2）ロームブロック含む。さらに小礫多く含む。上面に円礫鋪か。
７、ロームブロック。

0　1：60　2m

第521図　井戸跡19遺構図

第522図　井戸跡19遺物図

位置はＱ大区qr173、調査面はローム層湯移74.45m。平面不整円形、断面ロート状。埋土は最上層にA_s－Ｂ入る。規模長径228cm、深165cmを測る。遺物は第515図に示したとおりであるが、上方を住居跡111が切るため、埋土上方の一部に同図5・12～15がおよんで入る。それを除くと、遺物の主体は古墳時代前期となり、井戸跡の機能時もその頃であろう。

井戸跡18　（第516・517・518・519・520図、図版89・202・203）

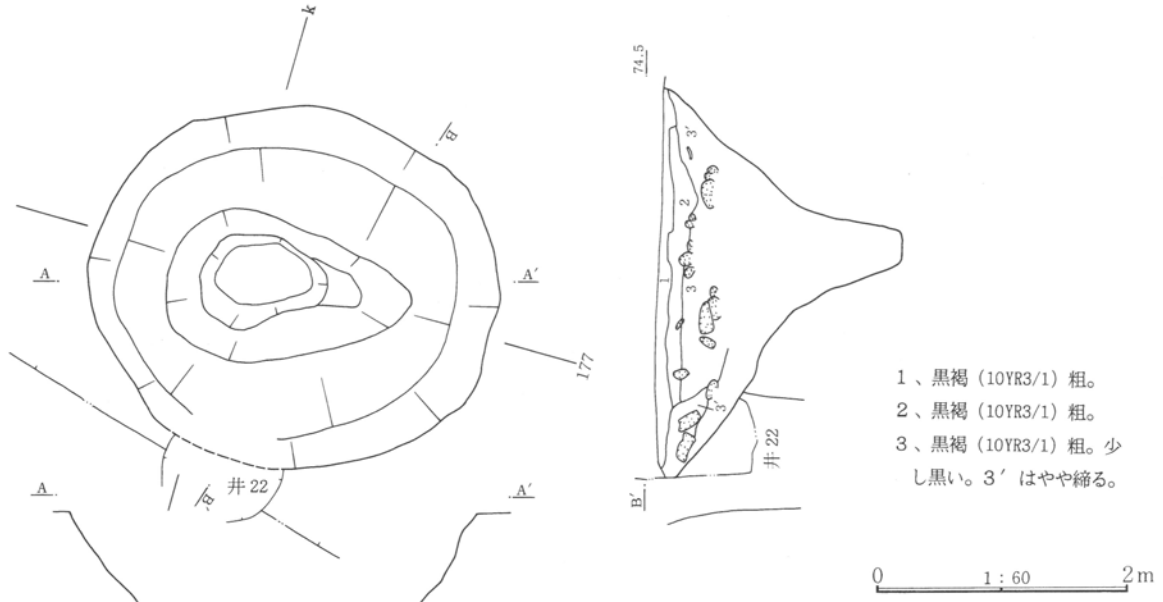
位置はＱ大区pq172･173にあり、上方を住居跡111が切る。平面形は不整な円形を呈し、上方に向け、ラッパ状に開らく。規模は長径372cm、深さ169cmを測る。埋土上方は土器片と人頭大の石を含む礫混りであった。井戸機能時の改修として第516図右上図は、南側に階段状の段が設けられ、その前代（左下図）には礫敷の面が存在していた。遺物は上層から中層にかけ多出土し、古墳時代前期の個体で、機能時もその頃。

井戸跡19　（第521・522図、図版89・90・203）

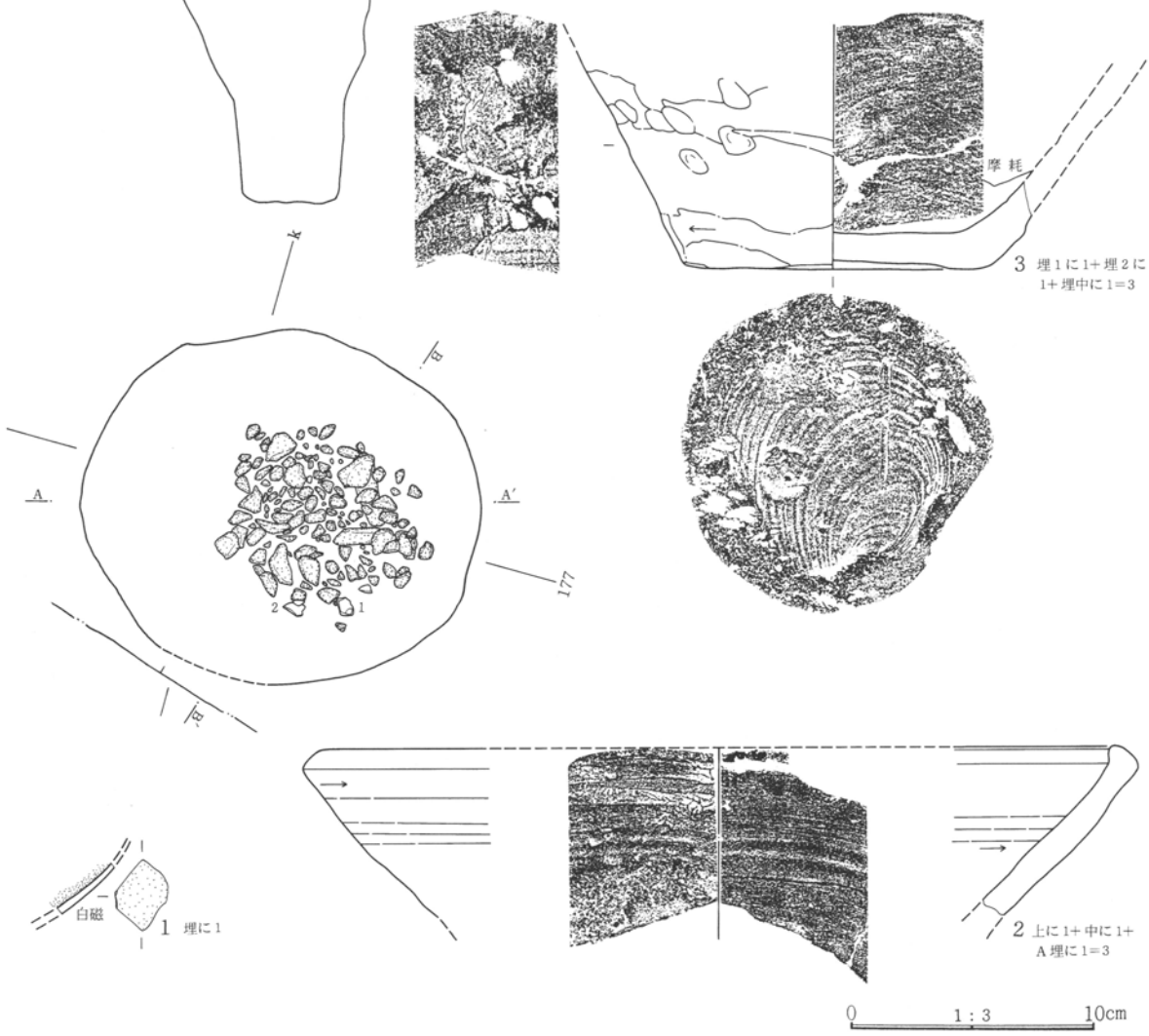
位置はＱ大区ｒ171・172にあり、調査面は住居跡104埋土上面標高74.2m。住居跡104と重複し井戸跡19が先行する。形態は長楕円気味で、断面底尖り状、口側で開らく。埋土は土層番号5・6間で礫が少量認められた。遺物は第522図に示したとおりであり、同図３は鍬状の石斧である。少量の土器片は、古墳時代前期の台付甕の胴部と考えられる破片である。

井戸跡20　（第523・524・525・526・527、図版90・203・204）

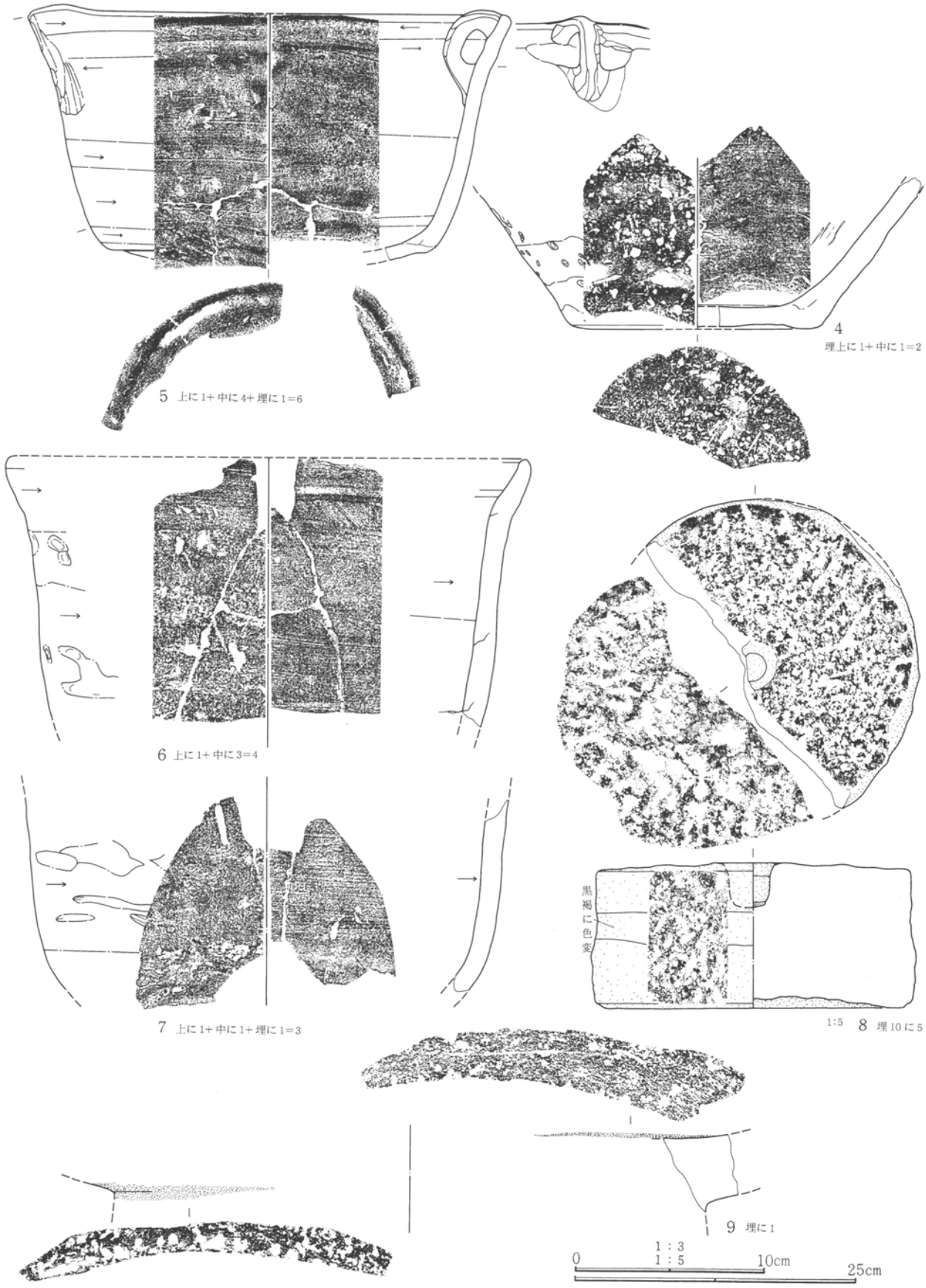
位置はＱ大区jk176･177にあり、調査面はローム層漸移標高74.35m。隣接の井戸跡22を切って存在する。



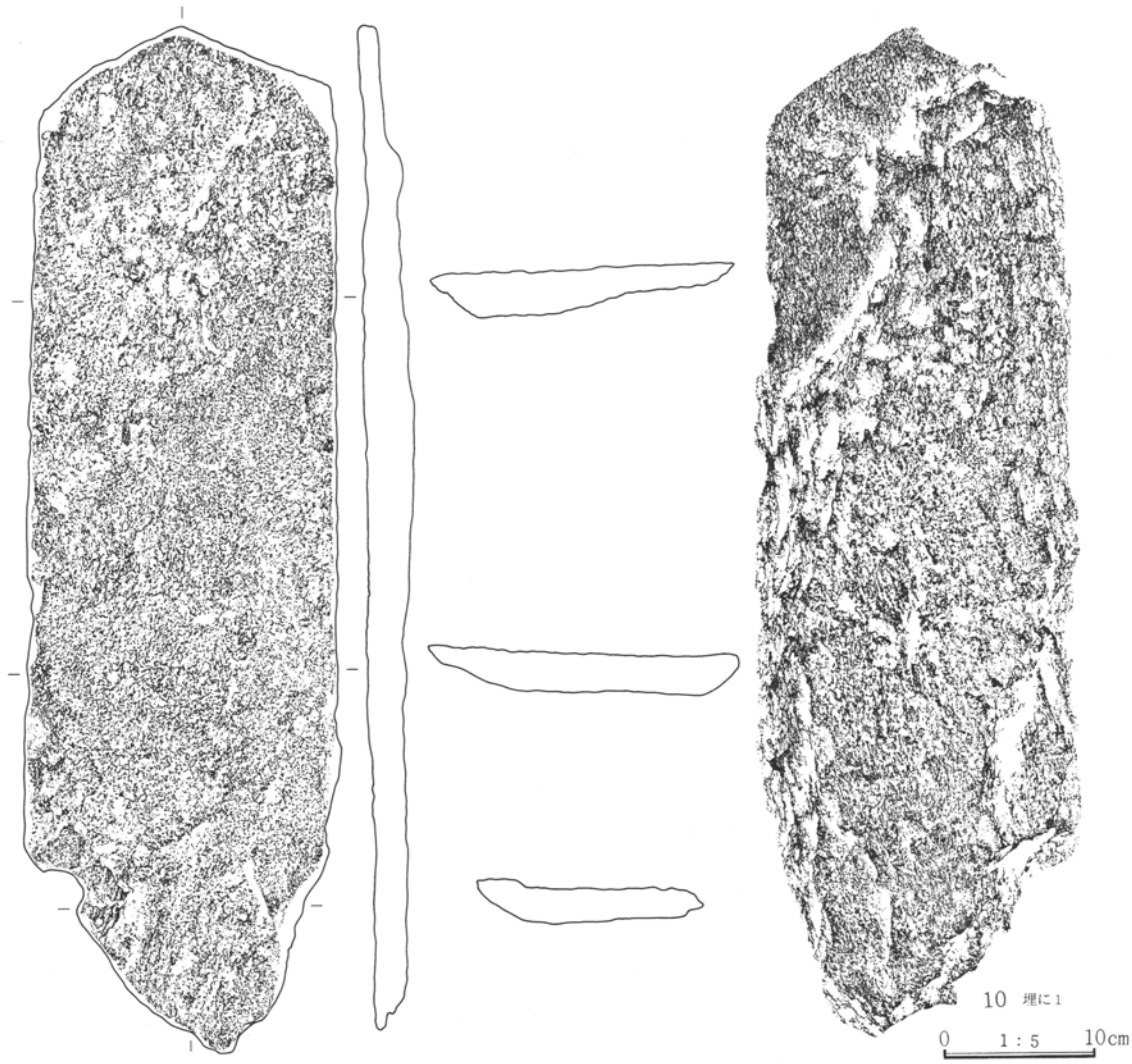
第523図　井戸跡20遺構図



第524図　井戸跡20遺物図



第525図　井戸跡20遺物図



第526図　井戸跡20遺物図

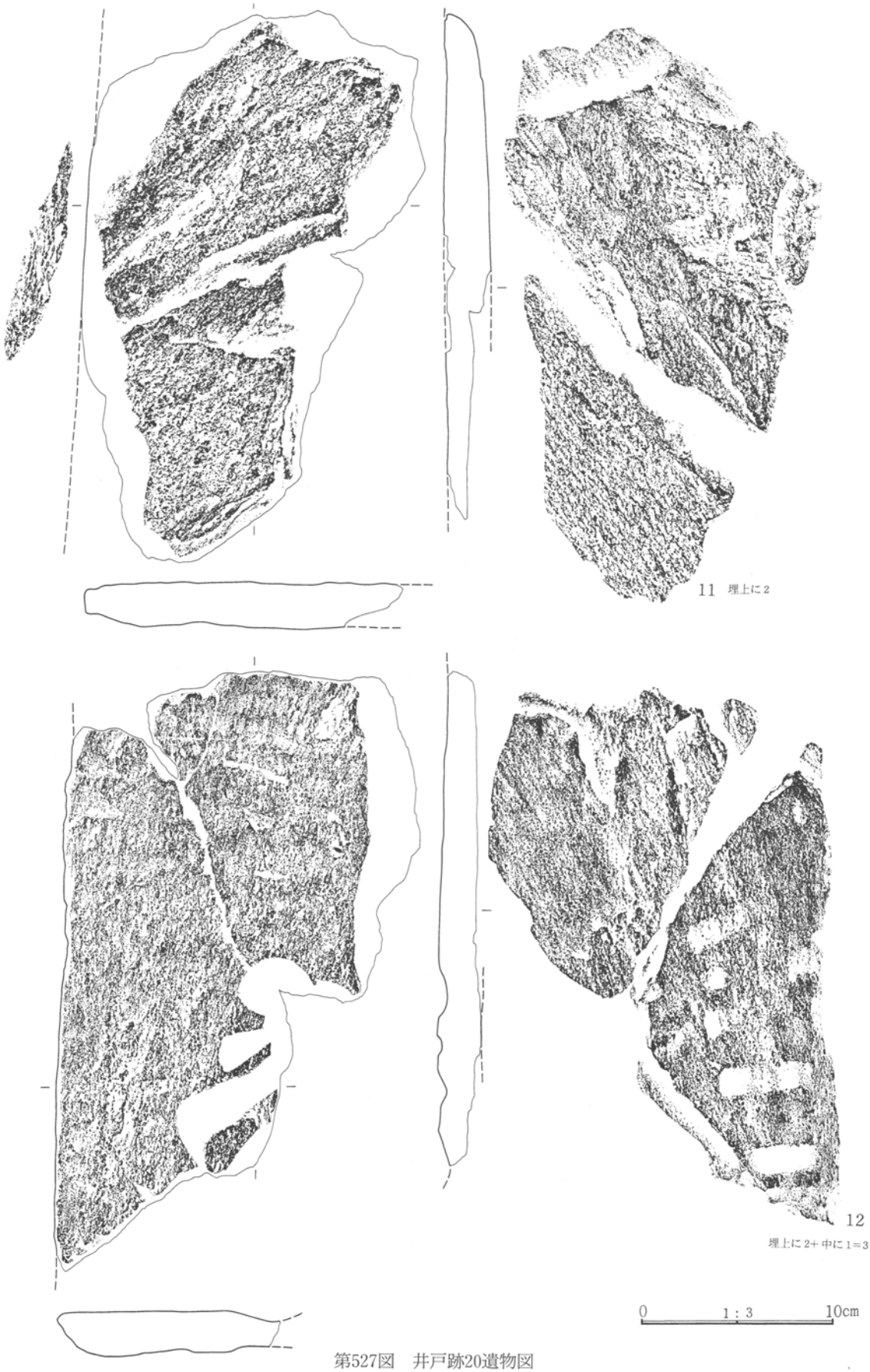
平面は円形気味で、底平らで上方大きく開く。上層から－80cm付近まで多くの礫が廃棄されていた。底面独特な卵形である。規模は長径330cm、深さ293cmを測る。遺物は第524・525・526・527図に示したように中世軟質陶器が多くあり、穀臼・茶臼・石製板碑が加わり、中世の一括資料となる。軟質陶器同図5・6は14世紀末から15世紀初頭の製品で、住居機能時と直結の遺物であろう。

井戸跡21　（第528・529図、図版90・204）

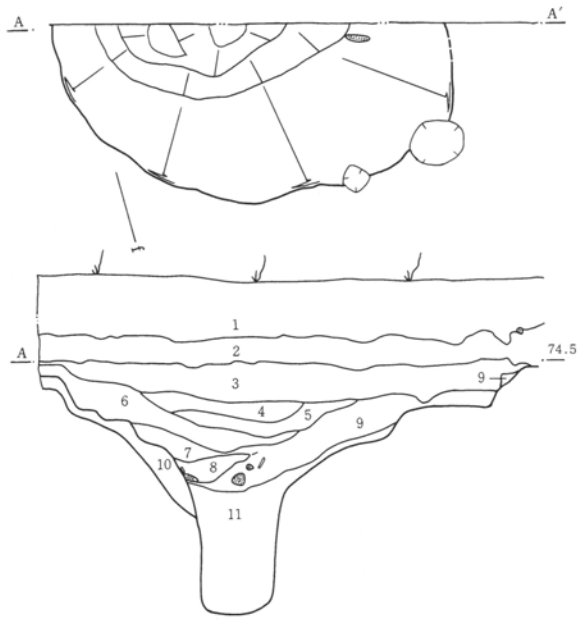
位置はＱ大区ef177にあり、調査面はローム層漸移標高74.4m。埋土は少し粘質がかり、古代の質感にあった。規模は長径326cm、底面位置は72.50mであり、深さおよそ200cmを測る。遺物は第529図に示した少量であり、その中に同図１の灰釉陶器碗片があり、９世紀後半から10世紀の製品を思わせる。他に古墳時代前期の土器片があるが、新しい時期の遺物を遺構埋没時に近いとして捉えれば、井戸の機能前は、10世紀前半頃となろう。

井戸跡22　（第530図、図版90）

位置はＱ大区gh177にあり、調査面はローム層漸移標高74.5m。埋土は下方までA_s－Ｂをまじえる。上方



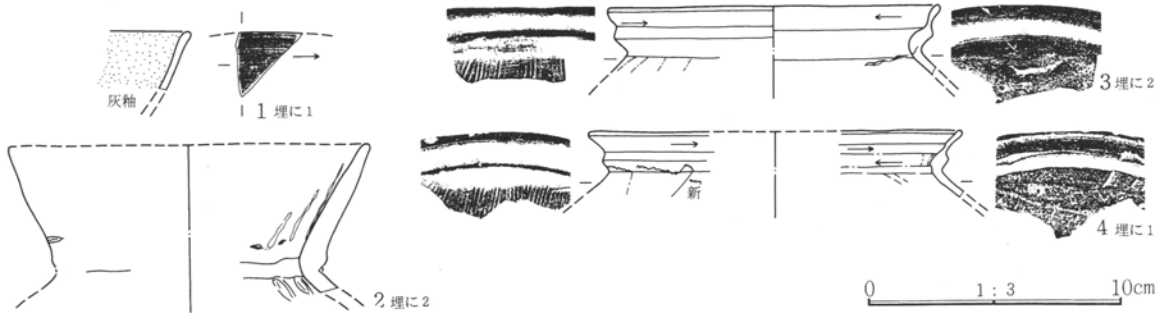
第527図　井戸跡20遺物図



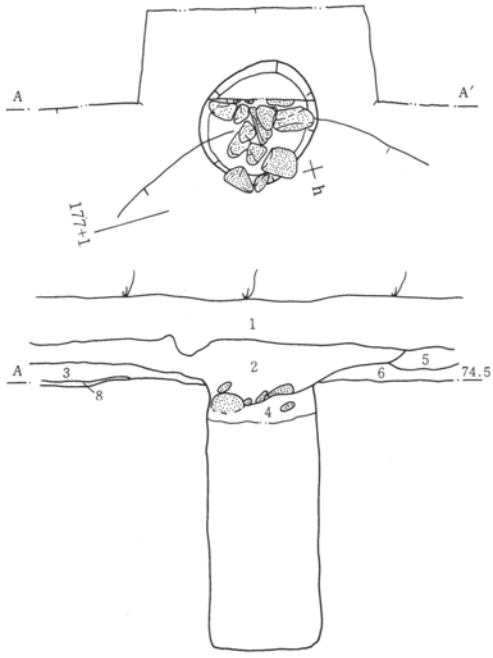
１、黒褐（10YR3/1）耕作土を含み、Ａs-Ａ入る。粗質。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ入る。粗質。
３、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。軽石少し入る。
４、黒褐（10YR3/1）少し黒ずむ。粘性。
５、黒　（10YR2/1）有機質の黒色粘性土が横縞状に入る。
６、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入り、粘性。
７、黒褐（10YR3/1）ローム大ブロック・小ブロック入る。
８、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックのみ。
９、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。
10、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移状。軟。
11、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム漸移状。粘性。急速に埋填された感じ。

0　1：60　2m

第528図　井戸跡21遺構図



第529図　井戸跡21遺物図



第530図　井戸跡22遺構図

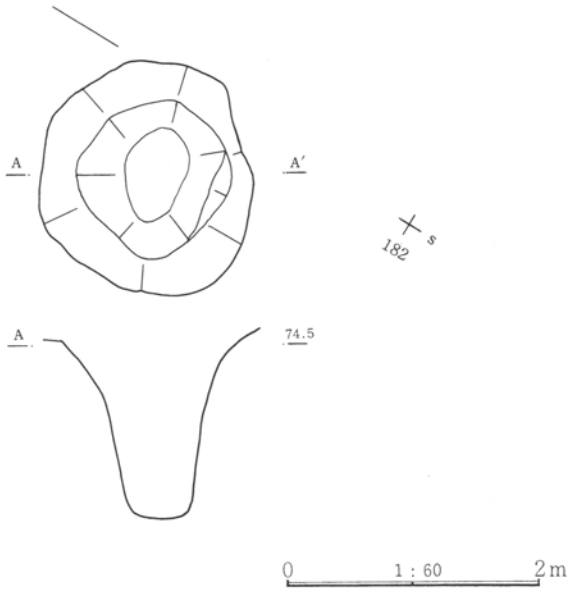
１、黒褐（10YR3/1）耕作土を含み、Ａs-Ａ入る。粗質。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ入る。粗質。
３、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ入り、締る。道跡。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い。
５、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。粗。
６、明黄褐（10YR6/6）ローム漸移状。軟。
８、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ入り、締る。ローム小ブロック入る。

0　1：60　2m

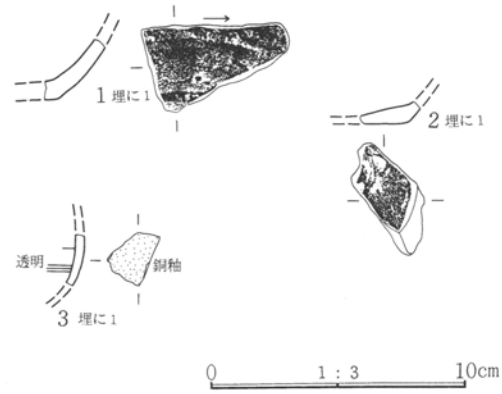
には礫を含む。規模は径106cm、深さ210cmを測る。遺物は中世遺物が存在して良いはずが無い。そのため地域で軟質陶器量産の始まる14世紀末以前から13世紀を含む頃に井戸機能時を考えておきたい。その点は直井筒形からもうかがわれる。

井戸跡24　（第531・・32図、図版90・204）

位置はＱ大区ｒ181にあり、調査面はローム層上面標



第531図　井戸跡24遺構図



第532図　井戸跡24遺物図

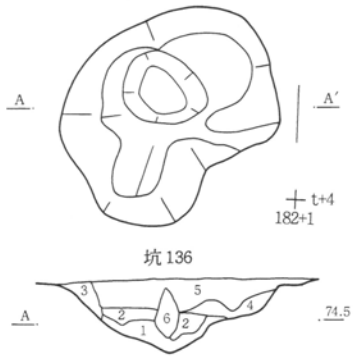
高74.6m。底面やや平らで上方に大きく開く。規模は径182cm、深さ143cmを測る。埋土にＡs－Ｂを含むか不明。遺物は第532図に示したが、同図３は上方からの混入遺物である。同図１は８世紀頃、同図２は９・10世紀頃の遺物であるが機能時の推測は困難である。

５、土　坑

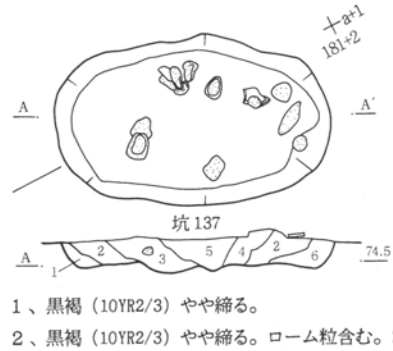
Ｑ区は、冒頭の187頁で触れたように、溝跡79と同105を結ぶ以来では住居跡上方を失ない、それは削平の結果であろうと説明した。その下面はＡs－Ｂを混える黒褐色の砂質土であり、ほぼローム層上面でもある。

同溝より以東で、Ａs－Ｂを含む、削平化面際にある土坑群はＱ大区ｊ173付近とｒｓ173付近の２群とＡs－Ｂ混りのｎ170の大きな浅い凹地がある。ｊ173付近は坑278・281・282など隅丸方形気味の浅い土坑であった。底面の凹凸は多くなく平ら気味であった。坑281・282の間には同形状の無番坑が入り、東から西に向い後出重複していたので共通の目的や機能を果すために設けられたらしい。ｒｓ173付近には西より坑165・坑166・167・176・168・169が東西並びに存在し、これも前例の一群のように整ってはいなかったが、一群を成しているので共通の目的や機能のために設けられたのかもしれない。これら３カ所の一群は出土遺物に中世陶・磁器はむろんのこと地域生産され量的に多い中世軟質陶器片を含んでいないので中世前半以前の構築とも考えられる。中世の土坑と考えられるのは、隅丸長方形の土坑で、南から坑300・333・298・297・299・296・301・304の一群、坑221・212・214・304などが散在的に分布、方向性もＮ15°Ｗ前後の方向性と近似してある。円形土坑は南より坑310・309・314・293・280・284・338・302・303・305など南側の隅丸長方形土坑の一群に近接してあり、接極的な根拠はないが中世遺構の可能性ありとしておきたい。そのほかの区域ではＡs－Ｂを含む正円形に近い土坑の存在は稀薄、散在的な分布であった。隅丸長方形土坑については南接のＰ東区73頁の冒頭で触れたように曲師・小林地区の集落境の外郭を成す大溝が溝跡36・44であったと想定されたが、屋敷廻りの大溝はＱ区内には存在していなかったので、Ｑ区は屋敷回りの大溝と外郭大溝との間の場所として捉えられるので、地域として隅丸長方形の土坑は芋穴が推定されることを併せて考えると、Ｑ区南側に隅丸長方形の土坑が集中する点は備蓄用の芋穴であったのではないかと思われ、円形土坑の集密同カ所に近接してある占地的な共通性は、食用の根菜類備蓄であったことを感じさせる。

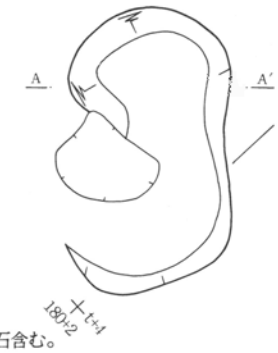
第10図において土坑、ピットの少ないカ所は、住居跡の集密カ所と、溝跡の存在した場所であり、その中で、土坑やピットがＡs－Ｂ混りの場合には、粗質・砂質のために埋土の区別が可能であったが、含まない古

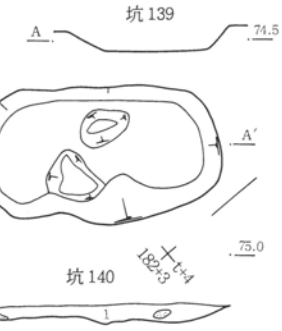


1、暗褐（10YR3/4）（10YR4/6）ローム粒多く含む。
2、黒褐（10YR2/3）（10YR4/6）ロームブロック３％。
3、暗褐（10YR3/3）（10YR4/6）ローム斑３％。
4、暗褐（10YR2/3）（10YR4/6）ローム斑５％。ローム粒含む。
5、黒褐（10YR2/3）白色軽石粒・炭化物粒含む。やや締る。
6、攪乱。

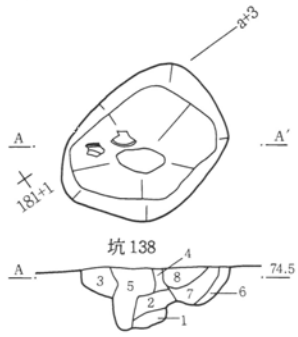


1、黒褐（10YR2/3）やや締る。
2、黒褐（10YR2/3）やや締る。ローム粒含む。2′白色軽石含む。
3、黒褐（10YR2/2）（10YR4/6）ローム斑７％。固く締る。
4、暗褐（10YR3/4）（10YR4/6）ローム斑７％。固く締る。
5、暗褐（10YR3/4）白色軽石粒含む。ローム斑少しあり。
6、暗褐（10YR3/3）ローム粒少量含む。

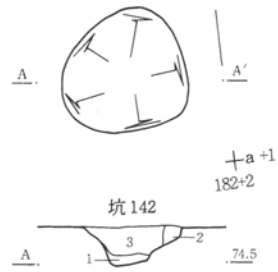




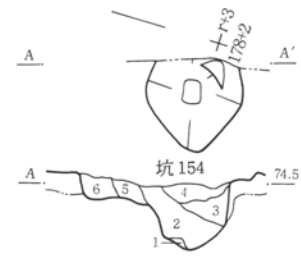
1、暗褐（10YR3/4）白色軽石粒・炭化物粒含む。



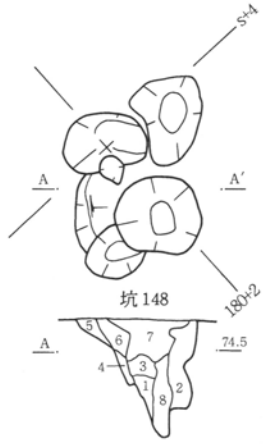
1、黒褐（10YR2/3）（10YR4/6・10YR6/6）ローム小ブロック含む。
2、黒褐（10YR2/3）（10YR4/6・10YR6/6）ロームブロック 10%。
3、暗褐（10YR3/3）（10YR4/6・10YR6/6）ローム粒含む。
4、暗褐（10YR3/3）（10YR4/6・10YR6/6）ロームブロック含む。
5、暗褐（10YR3/3）（10YR4/6・10YR6/6）ローム粒７％全体に混入。
6、黒褐（10YR2/3）（10YR4/6・10YR6/6）ローム粒少量含む。
7、暗褐（10YR3/4）（10YR4/6・10YR6/6）ローム斑３％。
8、暗褐（10YR3/3）（10YR4/6・10YR6/6）ローム粒少量含む。



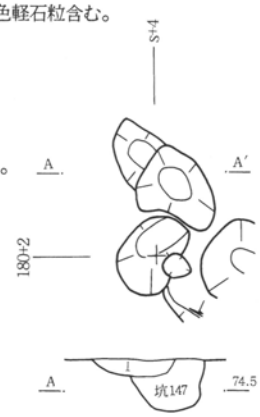
1、暗褐（10YR3/3）ローム斑５％。ローム粒多い。
2、暗褐（10YR3/4）白色軽石少量混じる。やや締る。
3、暗褐（10YR3/3）ローム粒・白色軽石粒含む。



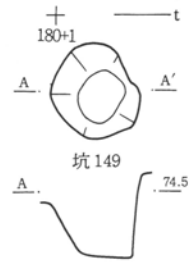
1、黒（10YR1.7/1）均質。締り弱い。やや粘る。
2、黒褐（10YR2/3）ローム粒多く含む。
3、黒褐（10YR2/3）ローム斑含む。攪乱気味。締り弱い。
4、暗褐（10YR3/4）ローム斑・ローム粒含む。
5、暗褐（10YR3/3）ローム斑・ローム粒含む。周辺層より締り強く、乾いている。

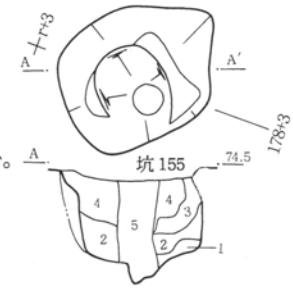


1、暗褐（10YR3/4）ローム粒多く含む。
2、暗褐（10YR3/4）ローム斑・ブロック・粒子多く含む。
3、暗褐（10YR3/4）ローム粒少量含む。
4、暗褐（10YR3/4）２層と類似。ロームさらに多い。
5、暗褐（10YR3/4）漸移層の崩れたもの。
6、暗褐（10YR3/4）ローム斑含む。
7、暗褐（10YR3/3）ローム粒含む。
8、黒褐（10YR2/3）ローム粒含む。



1、暗褐（10YR3/4）ローム粒少量含む。

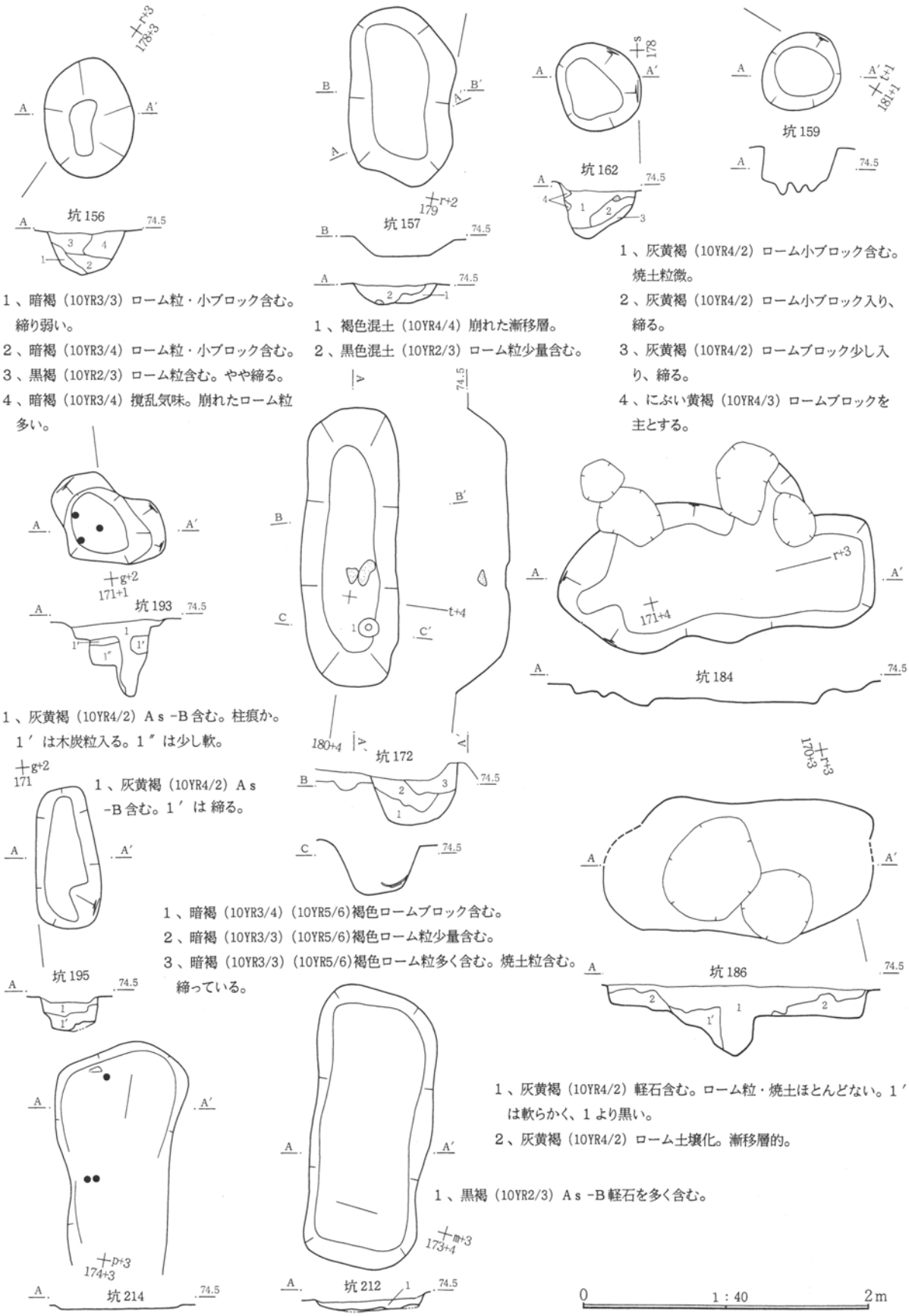




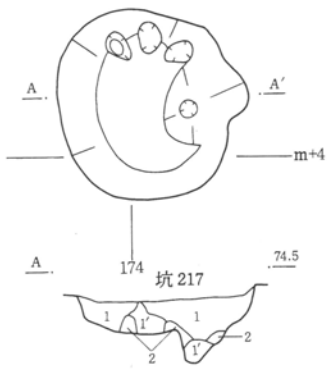
1、にぶい黄橙（10YR6/4）ロームブロック。
2、暗褐（10YR3/3）１層のブロックを含む。
3、暗褐（10YR3/3）明黄褐(10YR6/6)ローム斑を多く含む。
4、暗褐（10YR3/4）明黄褐(10YR6/6)ローム粒を含む。
5、黒褐（10YR2/3）ローム粒少量含む。
6、暗褐（10YR3/3）ローム斑多く含む。

0　1：40　2m

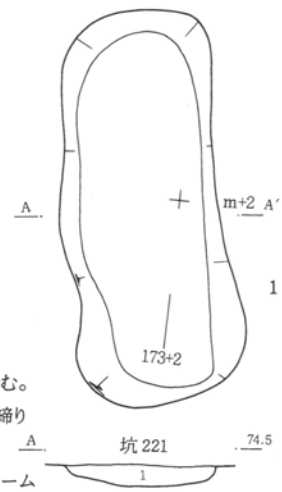
第533図　土坑遺構図


坑156
1、暗褐（10YR3/3）ローム粒・小ブロック含む。締り弱い。
2、暗褐（10YR3/4）ローム粒・小ブロック含む。
3、黒褐（10YR2/3）ローム粒含む。やや締る。
4、暗褐（10YR3/4）撹乱気味。崩れたローム粒多い。
坑157
1、褐色混土（10YR4/4）崩れた漸移層。
2、黒色混土（10YR2/3）ローム粒少量含む。
坑162
坑159
1、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック含む。焼土粒微。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック入り、締る。
3、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック少し入り、締る。
4、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロックを主とする。
坑193
1、灰黄褐（10YR4/2）As-B含む。柱痕か。1′は木炭粒入る。1″は少し軟。
坑172
坑184
坑195
1、灰黄褐（10YR4/2）As-B含む。1′は締る。
1、暗褐（10YR3/4）（10YR5/6）褐色ロームブロック含む。
2、暗褐（10YR3/3）（10YR5/6）褐色ローム粒少量含む。
3、暗褐（10YR3/3）（10YR5/6）褐色ローム粒多く含む。焼土粒含む。締っている。
坑186
1、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。1′は軟らかく、1より黒い。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化。漸移層的。
坑214
坑212
1、黒褐（10YR2/3）As-B軽石を多く含む。
0　1：40　2m

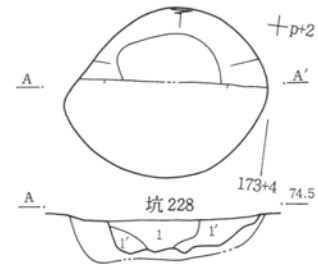
第534図　土坑遺構図



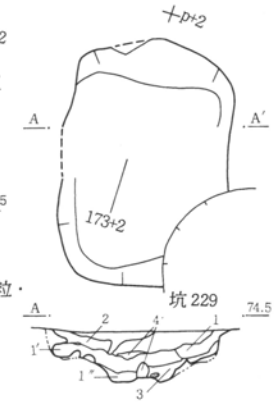
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ・軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。１′は締りあり。
２、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。ローム小ブロック含み、締りあり。



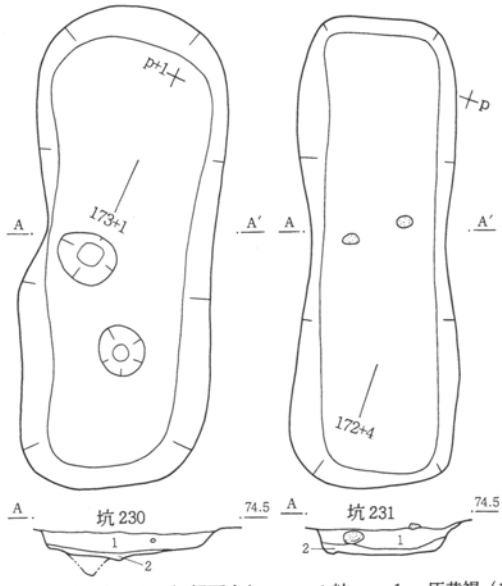
１、灰黄褐（10YR4/2）軽石・Ａｓ－Ｂ含む。ローム粒・焼土ほとんどない。



１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。１′は締りあり。

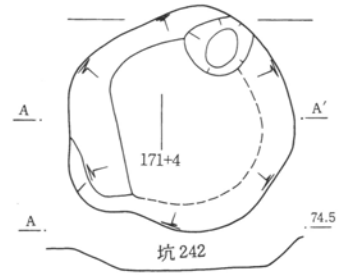


１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。１′は木炭粒多い。１″は木炭わずか含む。
２、灰黄褐（10YR4/2）ローム大ブロック含み、締りあり。
３、木炭含まず。掘方埋土。
４、ロームブロック。

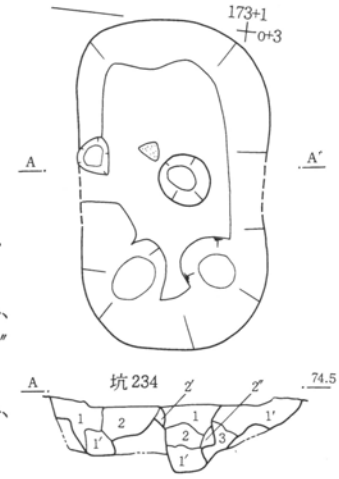


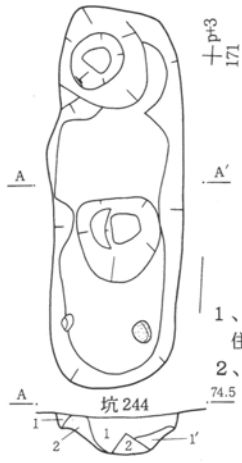
１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。
２、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ入る。ローム大ブロック含み、締りあり。

１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。
２、ロームブロック小さい。Ａｓ－Ｂ入る。

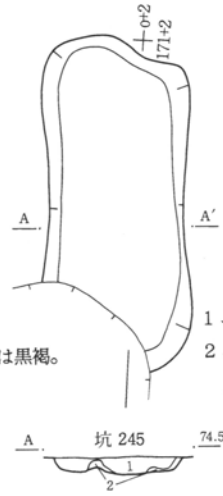


１、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。１′は軟らか。
２、灰黄褐（10YR4/2）ローム大ブロック含み、締りあり。２′はロームブロック小さい。２″はロームブロック小さい。締る。
３、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック含み、締りあり。

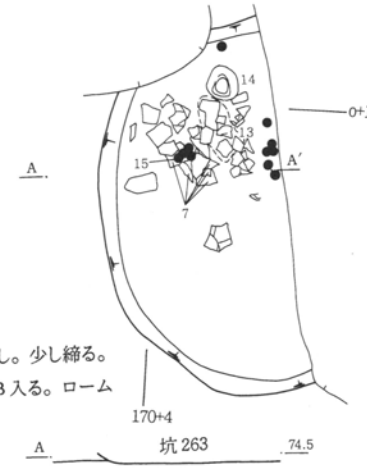




１、少し締る。１′は黒褐。住居埋土か。
２、少し締る。

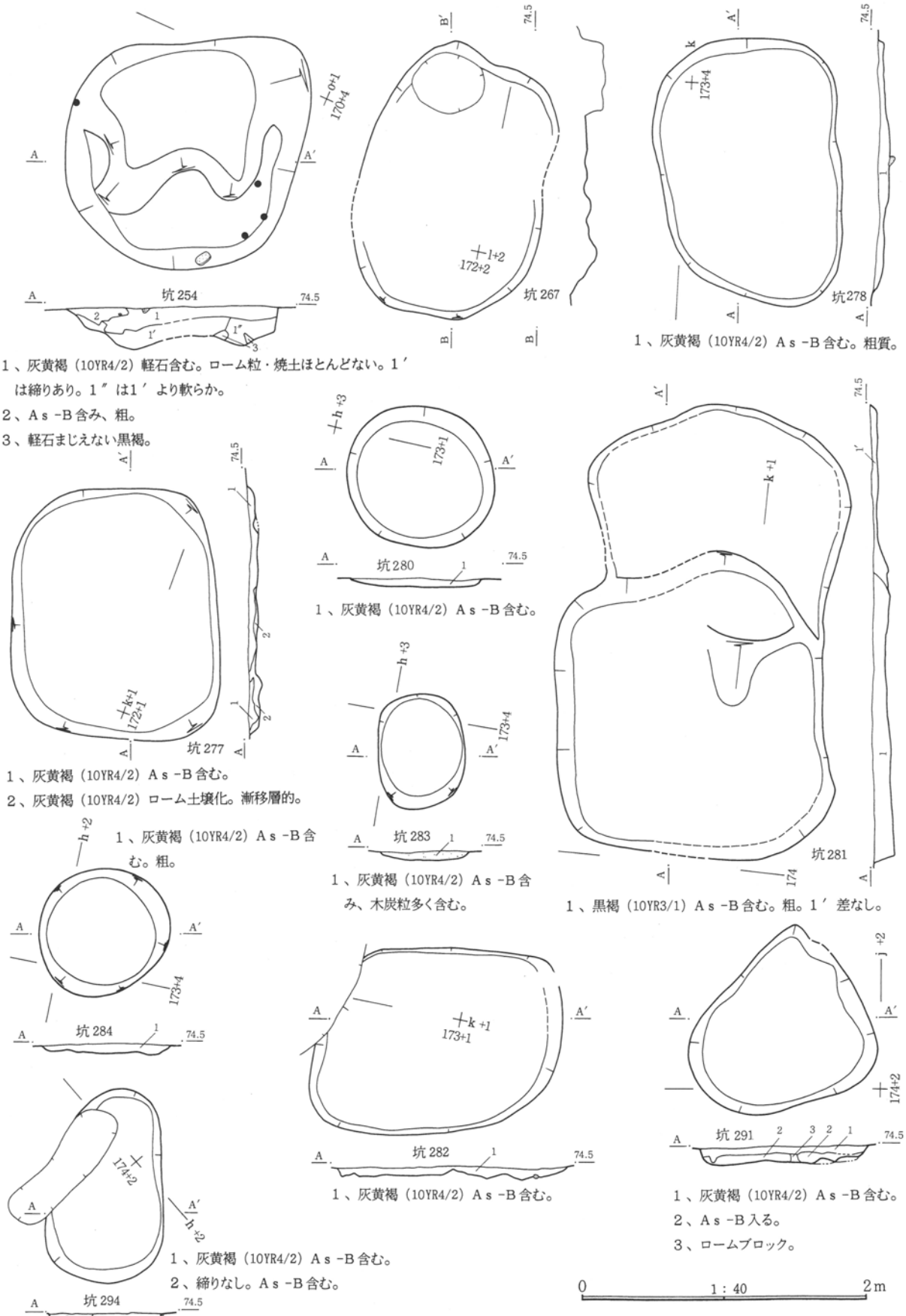


１、Ａｓ－Ｂ入る。ローム粒なし。少し締る。
２、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ入る。ローム土壌化。漸移層的。



0　1：40　2m

第535図　土坑遺構図



1、灰黄褐（10YR4/2）軽石含む。ローム粒・焼土ほとんどない。1′は締りあり。1″は1′より軟らか。
2、As -B含み、粗。
3、軽石まじえない黒褐。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。粗質。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壌化。漸移層的。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。粗。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含み、木炭粒多く含む。

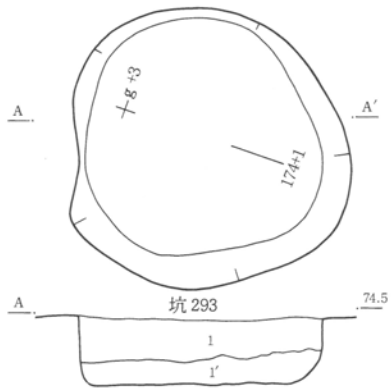
1、黒褐（10YR3/1）As -B含む。粗。1′差なし。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。

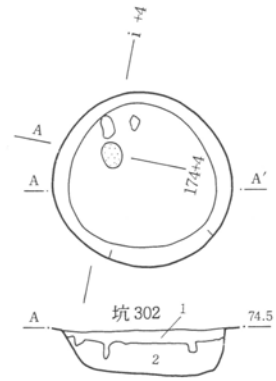
1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。
2、As -B入る。
3、ロームブロック。

1、灰黄褐（10YR4/2）As -B含む。
2、締りなし。As -B含む。

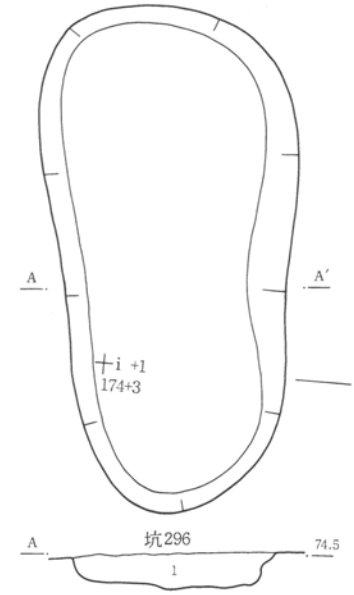
第536図　土坑遺構図



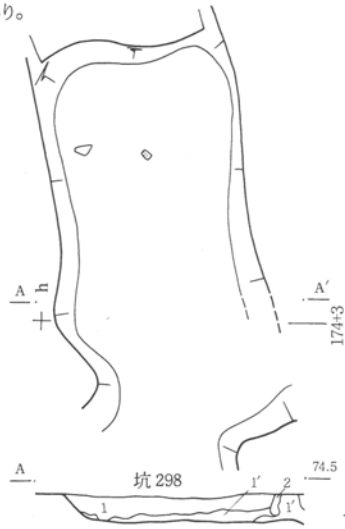
１、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック含み、締りあり。Ａｓ－Ｂ入る。１′は少し黒く、締りあり。



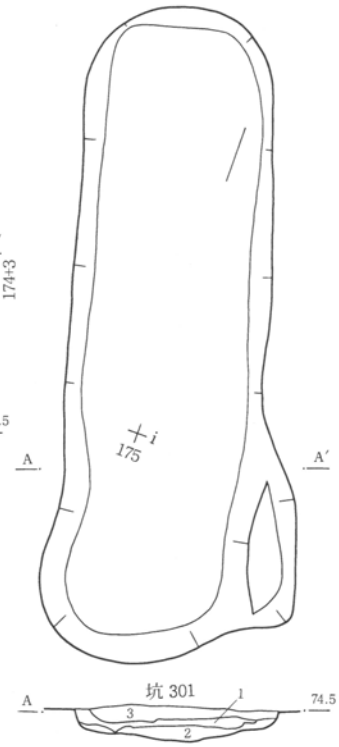
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。少し軟。
２、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。少し締る。



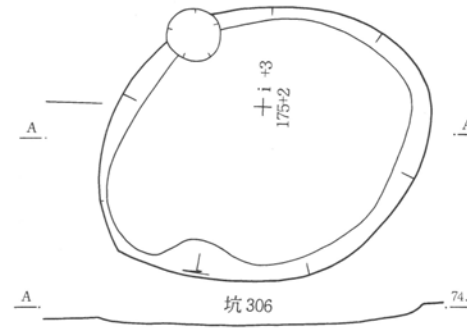
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。

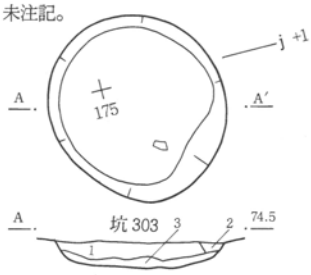


１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。１′はロームブロックわずか含み、締る。
２、未注記。

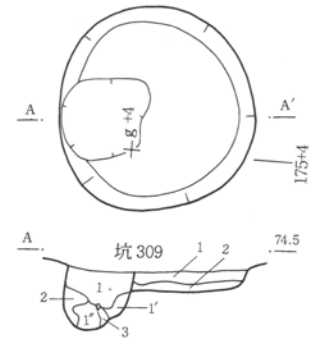


１、Ａｓ－Ｂ含み、締る。
２、ロームブロック多く含み、締る。
３、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。

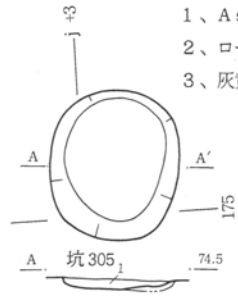




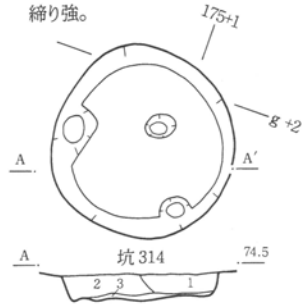
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。
２、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。少し締る。
３、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。褐色。締り強。



１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。１′はロームブロックわずか含み、少し締る。１″は少し硬く締る。
２、にぶい黄褐（10YR4/3）Ａｓ－Ｂ含む。ローム大ブロックとその土壌化傾向あり。
３、にぶい黄褐（10YR5/4）根か。ローム土壌化主体。



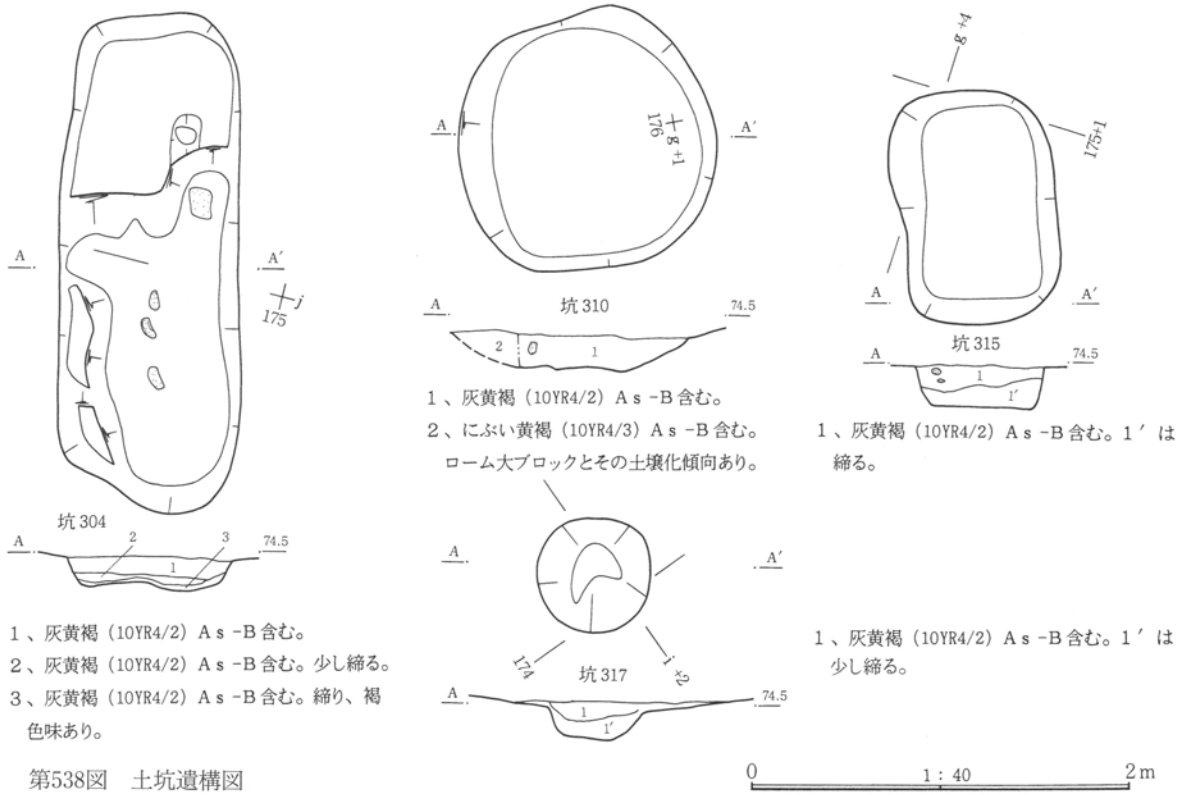
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。



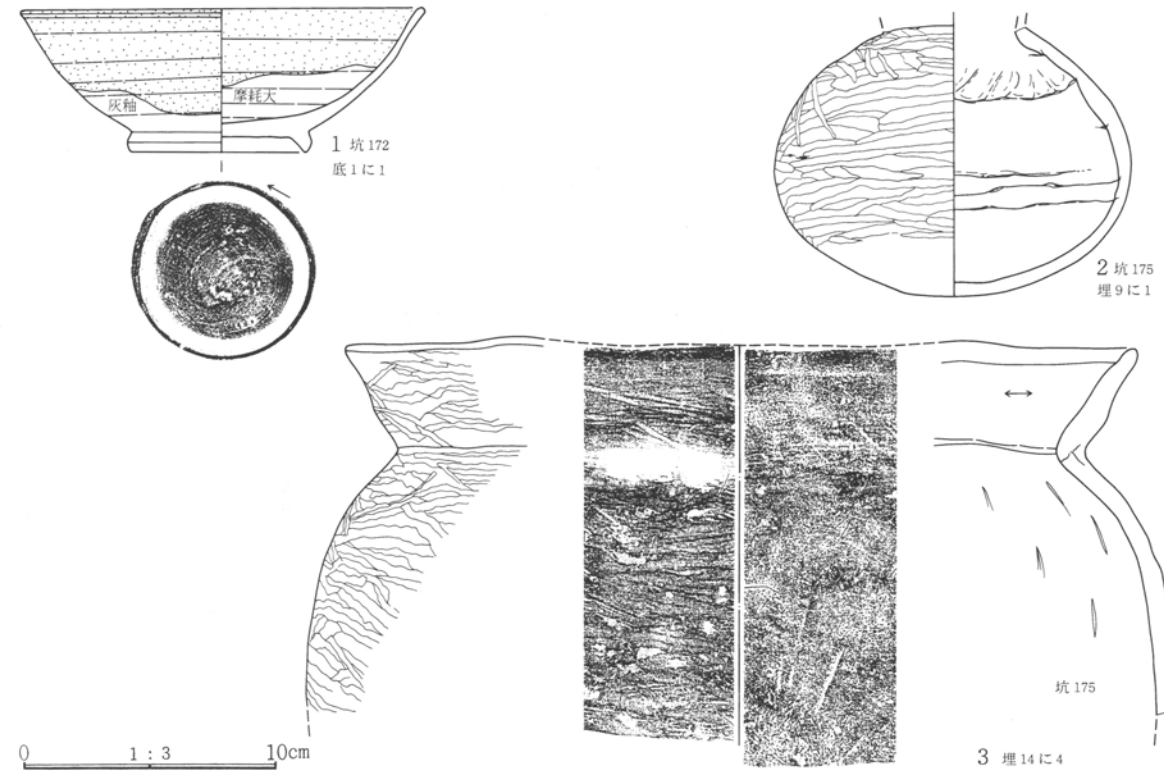
１、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。
２、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。ロームブロックわずか含む。
３、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。少し硬い。

0　1：40　2m

第537図　土坑遺構図

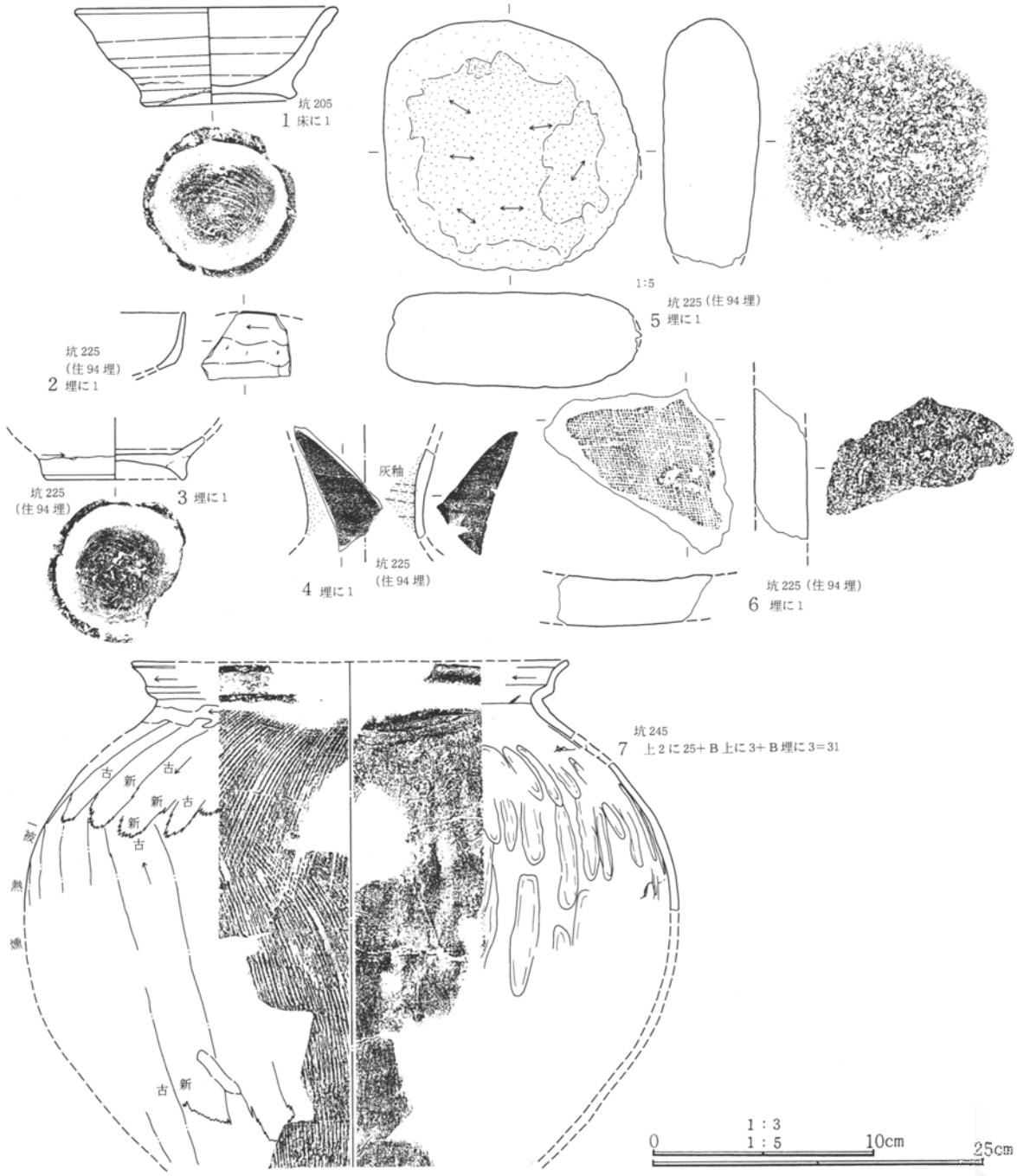


第538図　土坑遺構図



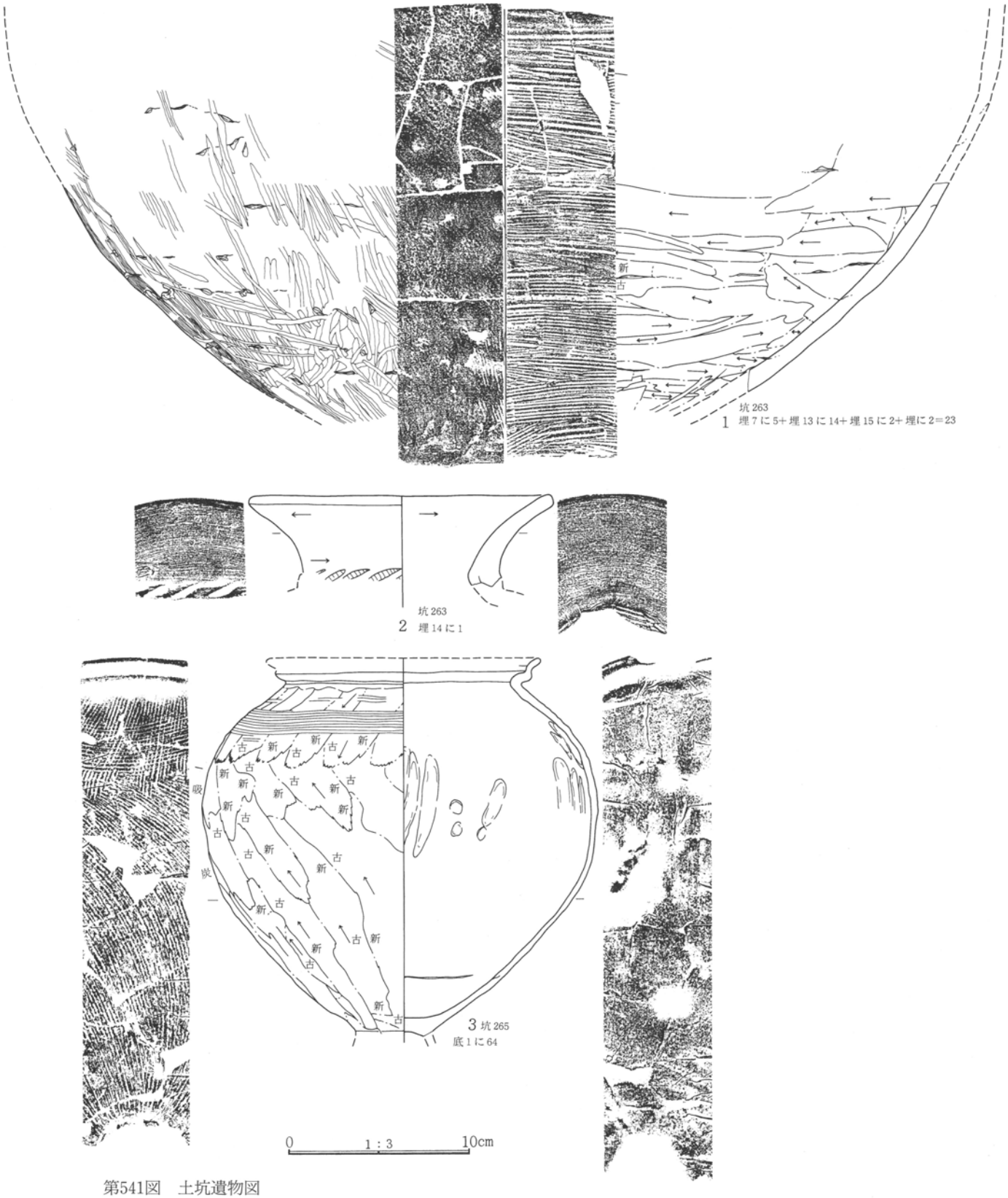
第539図　土坑遺物図

代の埋土相互の場合には、ほとんど識別できなかった。そのため図中に空白が生じることとなった。古代の遺構の中で柱穴規模以上の土坑は人為であると明言できる例は少なく、掘方輪郭のにじみ、ローム漸移層より黒づむが輪郭不明瞭な、不整形土坑も数多く存在していた。古代土坑の中で長方形を呈し、墓坑として人



第540図　土坑遺物図

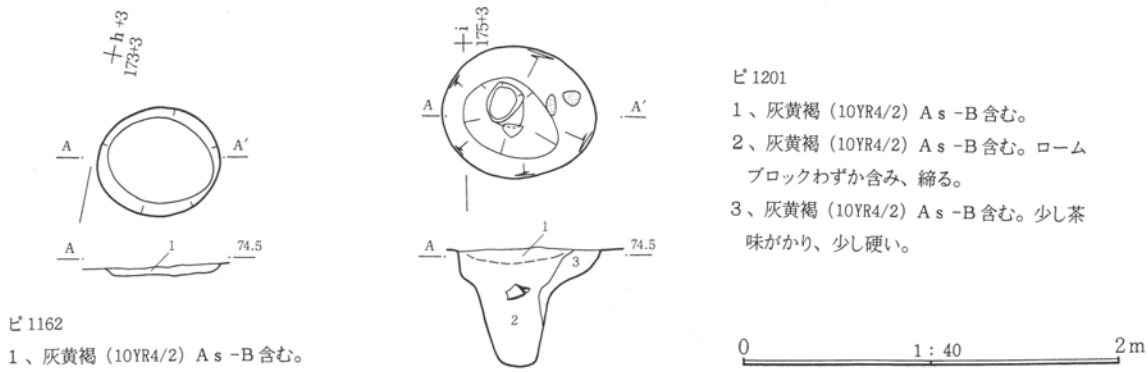
身大の規模がある例としてＱ大区ｔ180に位置する坑172があり第539図１に10世紀代灰釉陶器碗の出土がある。第534図では上面長192cm、幅65cm、N6°Wを測る。Ｑ区の中央付近のＰ172のあたりにある坑230・231・244もA_s－Ｂ混りを認め難い埋土で、人身大墓坑様の規模にあり、短かい規模ながら坑229も近接してある。古代の土坑で、土器を多量に伴なった例は坑263で東半を住居跡135に切られるため円形をなす直径200cmのうち西半分の残存であった。出土遺物として古墳時代前期の第541図1・2の出土があり、同図１は、当遺跡最大の土師器大甕であり、同２は壺である。同図１大甕は、半欠以下の個体であるが最大径は推定で55cm前後と考えられる。この土坑は住居跡の残欠部としては、住居掘方で共通例となるような土坑は発見できなかったので、住居跡残欠とは考え難く、坑263は土坑単一での目的と機能で設けられたと考えられる。



第541図　土坑遺物図

６．ピット　（第542図、図版93・94）

Ｑ区で、A_s－Ｂを含まない古代、同を混える中世以降のピットの多くは、Ｐ東区と同様に柱穴や人為を思



ピ1162
1、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。

第542図　ピット遺構図

わせる小穴が第542図ピ1201などをはじめとし多かった。古代では大規模な例は土坑扱いで遺構番号が付され、367頁の掘立柱建物跡項で触れたようにピ697・695他のｓ176～177の一群にようにまとめられなかったが柵列の可能性のあるピットが存在し、掘立柱建物跡16・17・18各々のピットについては、建物跡としてまとめることができた。その他のピットは、偏在性はあっても古代・中世以降を通じ集中性は薄かった。偏在性としてA_s－Ｂを含むピットはｋ１ライン以南で南下するにしたがい増加傾向にあり、Ｐ東区の北縁で調査された掘立柱建物跡２と同３とか中世建物跡と推測される。それら中世建物跡に繋がる可能性がやや膨らむ余地がある。また、前項での備蓄用の芋穴を類推させた隅丸長方形土坑と根菜の備蓄を考えた円形土坑の一群の集中性もこの一角にあり、単独では意味付け困難であっても複合的には土坑なり、ピットの存在理由が見えそうである。

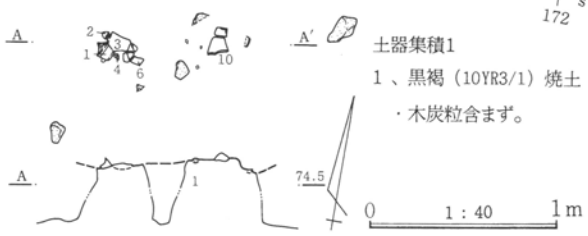
７．土器集積とそのほかの遺構

Ｑ区において特記すべき遺構に土器集積、集石、道跡などの遺構がある。

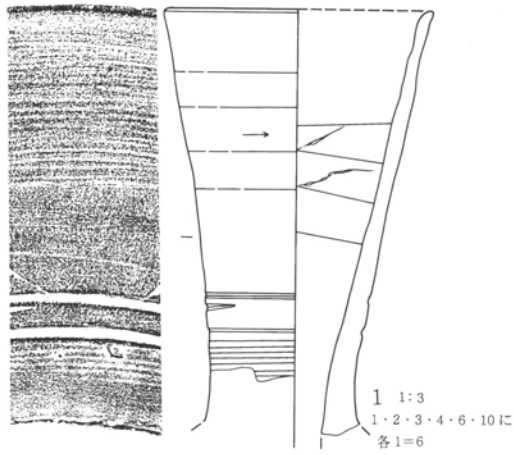
土器集積1・2の発見は次のとおりである。Ｑ区の調査は、先ず主体地であるＯ東区からＳ区段丘上までの間に20m毎にＸＹ２軸方向で１m幅トレンチを設定し試掘を行なった。排土は重機で行なったが、遺構に触れた場合は掘り下げず存在確認のみとして進行させた。試掘の結果、Ｑ区はほとんどのカ所で遺構の連続性が認められ、その状況は密であった。Ｑ区での上層の剝取りは重機で行なったが、試掘トレンチの遺構・遺物上に置いた土のうを剝取りの目安とした。排土の始めはＱ区の北西隅側からで、目安となった位置はおおむねA_s－Ｂ混層下の黒色土中であった。その黒色土中で竈跡の発見は多くはなかったが、遺物の出土は目立って存在していた。遺物が出土する以上、黒色土中の面で住居跡平面輪郭も追求できるはずであったが、実施してみると、大半の住居跡の残存は悪く、床付近の残存例が相当あり、それに加え倒木数が多く、５m毎に１カ所以上存在するあり様であり黒色土中の面での住居跡輪郭の追求は現実的でなかった。その判断を行なった時点は既に重機は、Ｑ区調査区の北縁付近に達していたため、急據調査面をローム層漸移付近に切り替えを行なった。しかしそうした調査面の切り替えにも係わらず北壁からｒライン付近までは、黒色土は存在していたものの、以南の黒色土は極めて薄い存在でA_s－Ｂ混りの粗質土がローム層漸移層の直上に存在していた。土器集積1・2は、この時の重機による面下げ位置付近に存在していた遺構で、土柱として遺物を残したのみに近い状態ではあるが、古代遺構残存の厚さをこのことによってある程度、考えさせる点での左証として重要であった。

土器集積１　（第543・544図、図版85・205）

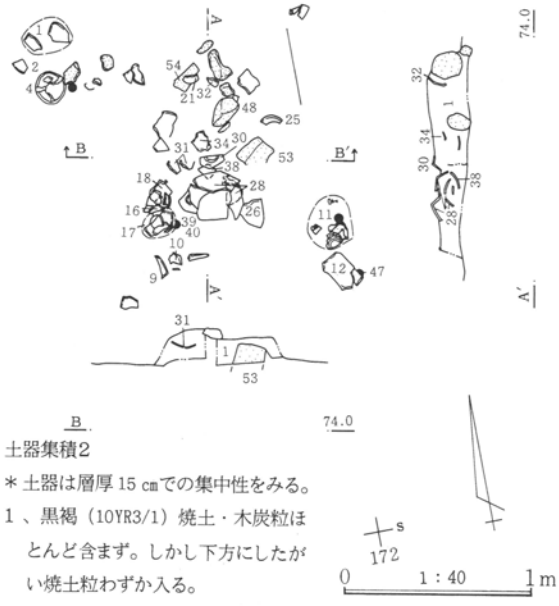
位置はＱ大区ｒ172にあり、調査面は標高74.7m付近の黒色土中である。上面は重機による上層剝取りによる。発見時は重機による上層剝取排土時であり、発見当初は複数個体の遺物とその中に第544図１の一部が見えていたので、住居跡で８世紀前半頃の長頸壺の存在は薄いため、この破片の一群を祭祀関連の可能性もありと考え、土器集積の名称をあたえた。土層注１は古代の土層である。断面中の破線が遺物散在の面位置を推定したものである。土器集積１の直上に極めて接近してＡs－Ｂ混り層が存在したことになる。



第543図　土器集積１遺構図



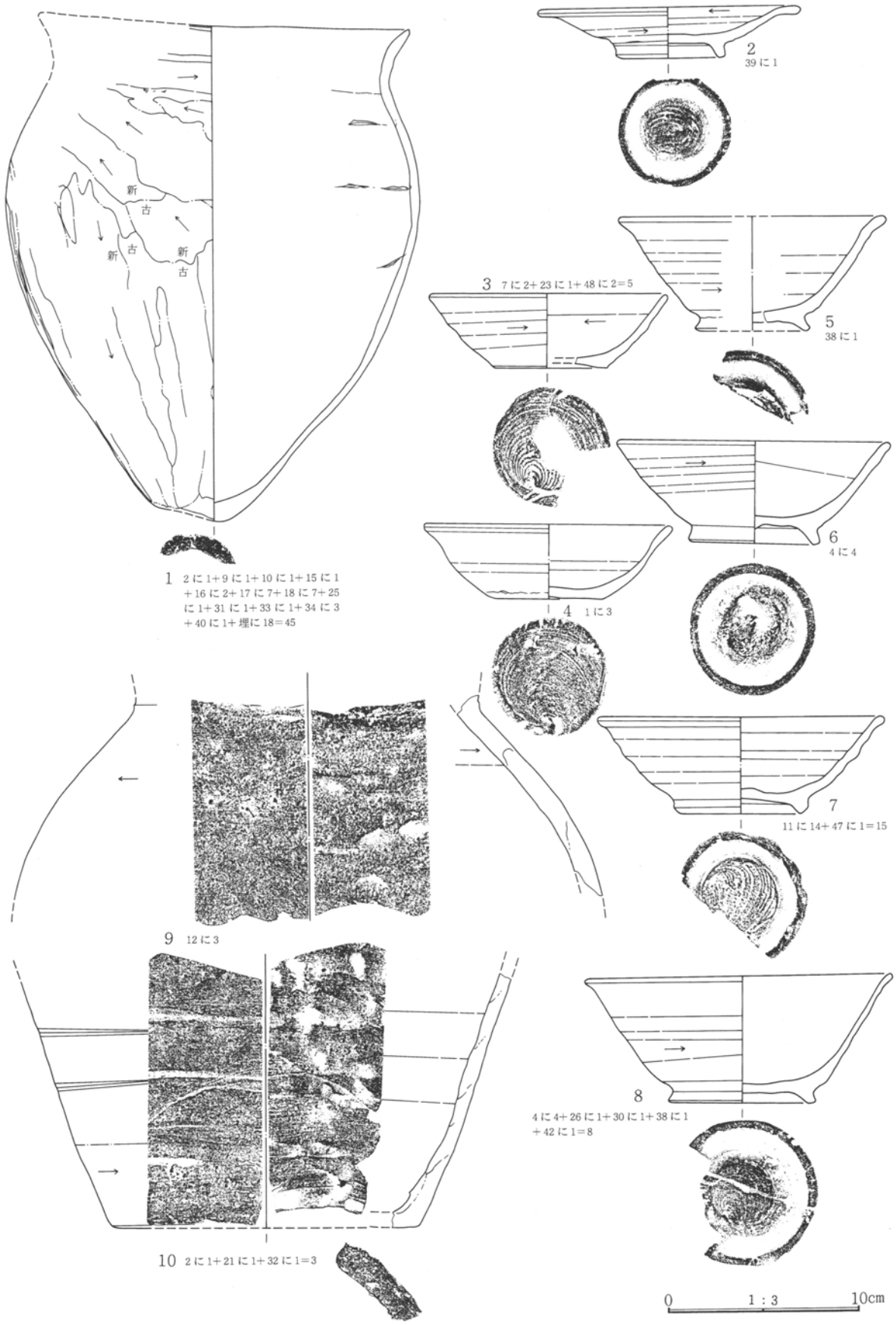
第544図　土器集積１遺物図



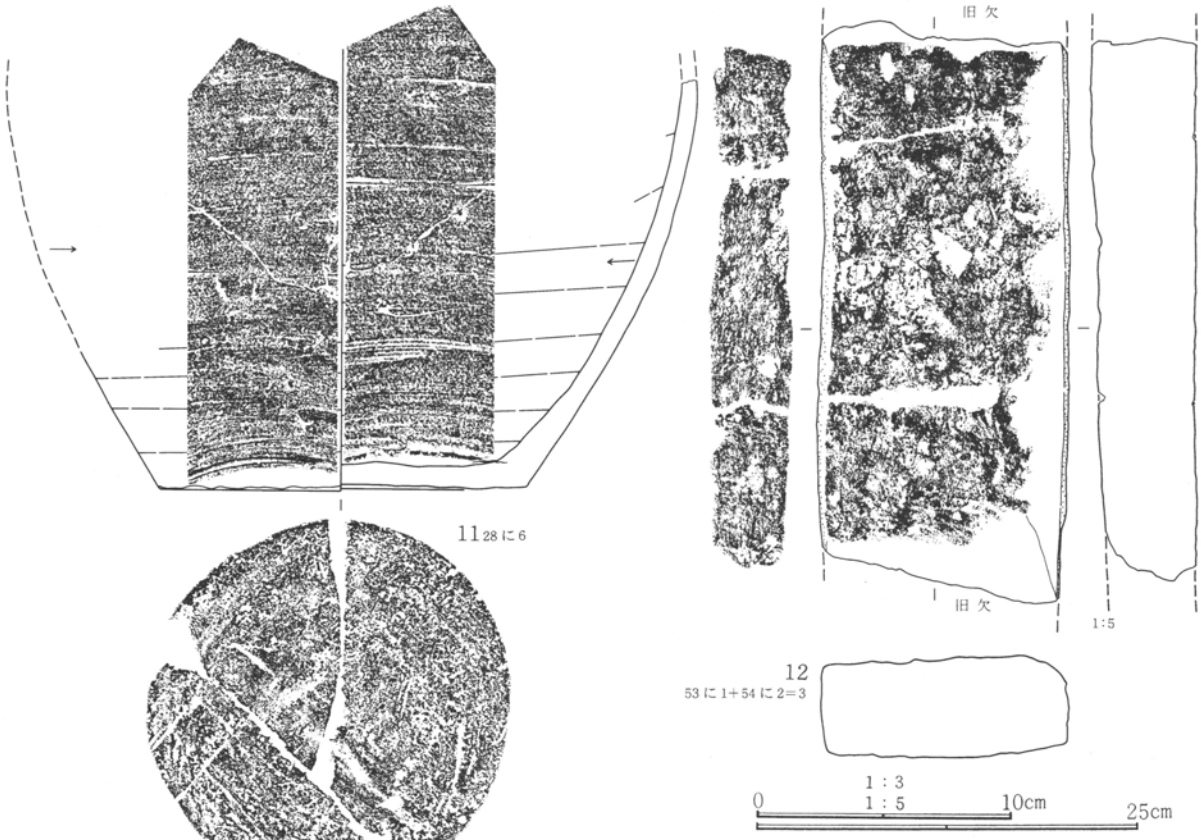
第545図　土器集積２遺構図

土器集積２　（第545・546・547図、図版85・205・206）

位置はＱ大区ｓ172にあり、南西２ｍの位置に土器集積１がある。調査面は74.5mの黒色土中である。上面は重機による上層剝取り面である。遺物の分布は高低差があり、第545図の遺物取上げ番号53は最下部の調査面以下にあり、竈天井架材であったがこの場所の石類の多くは被熱し、おおむね竈用材を考えさせた。そのため土器集積２を竈廃材と竈周辺に遺物類と仮定した場合、第546図に長甕があり、須恵器坏・埦をまじえて、一般的な有様に思える。しかし、須恵器の大形瓶は２個体あり、通常では余り見られない特殊性があり、住居跡に伴なう遺物種の組み合せとして少し異質性を感じる。またこれらの遺物が住居跡の旧状位置にあったとすると、まず周辺の住居跡は時期的に近い９世紀代の住居跡として住居跡105・109が近接してあり、住居跡105の調査面は標高74.4m付近で既に床面であった。住居跡109は調査面は標高74.4m付近で既に掘方層であった。両住居跡は、９世紀頃に至っても本来的な竪穴住居跡の深さは100cm前後があるため、２例の住居跡は、存在するはずの100cm前後の土層が何らかの形で攪乱を受けた（約20cm以下調査時削土）と考えられるのである。そのため土器集積２の調査面74.5m付近でも掘方・床を持つ住居跡の存在を考えることは、充分に可能である。しかし、住居跡としての旧悲に近い残存であるのかという設問については、土器集積２は、第546図の土師器甕・須恵器坏・埦の製作時期は９世紀中頃と考えられ、時期的な混在は瓶類を除き少ない。その頃の住居跡は、東壁に竈を設け、南東壁下に貯蔵穴が、その周辺に土器類が存在する場合が多い。しかし、土器集積２の土器類の分布は東側に向って延びてお



第546図　土器集積2遺物図

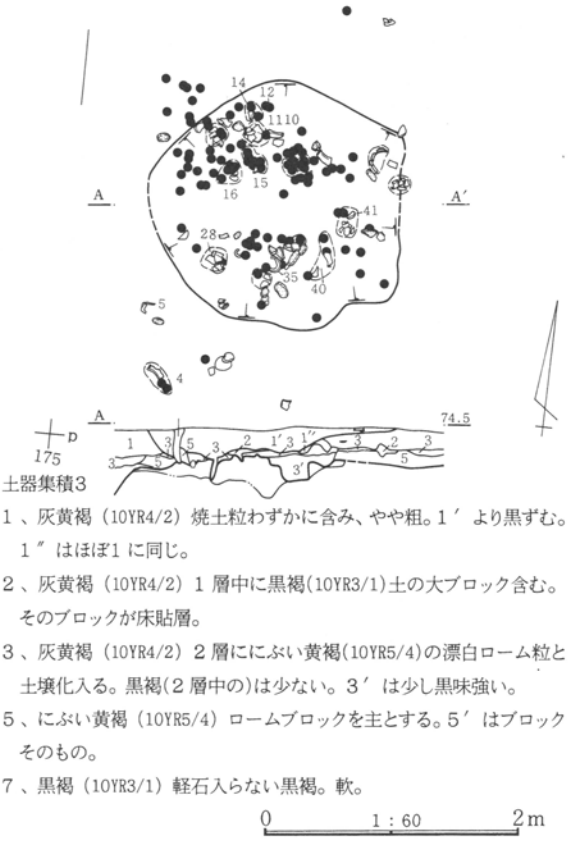


第547図　土器集積２遺物図

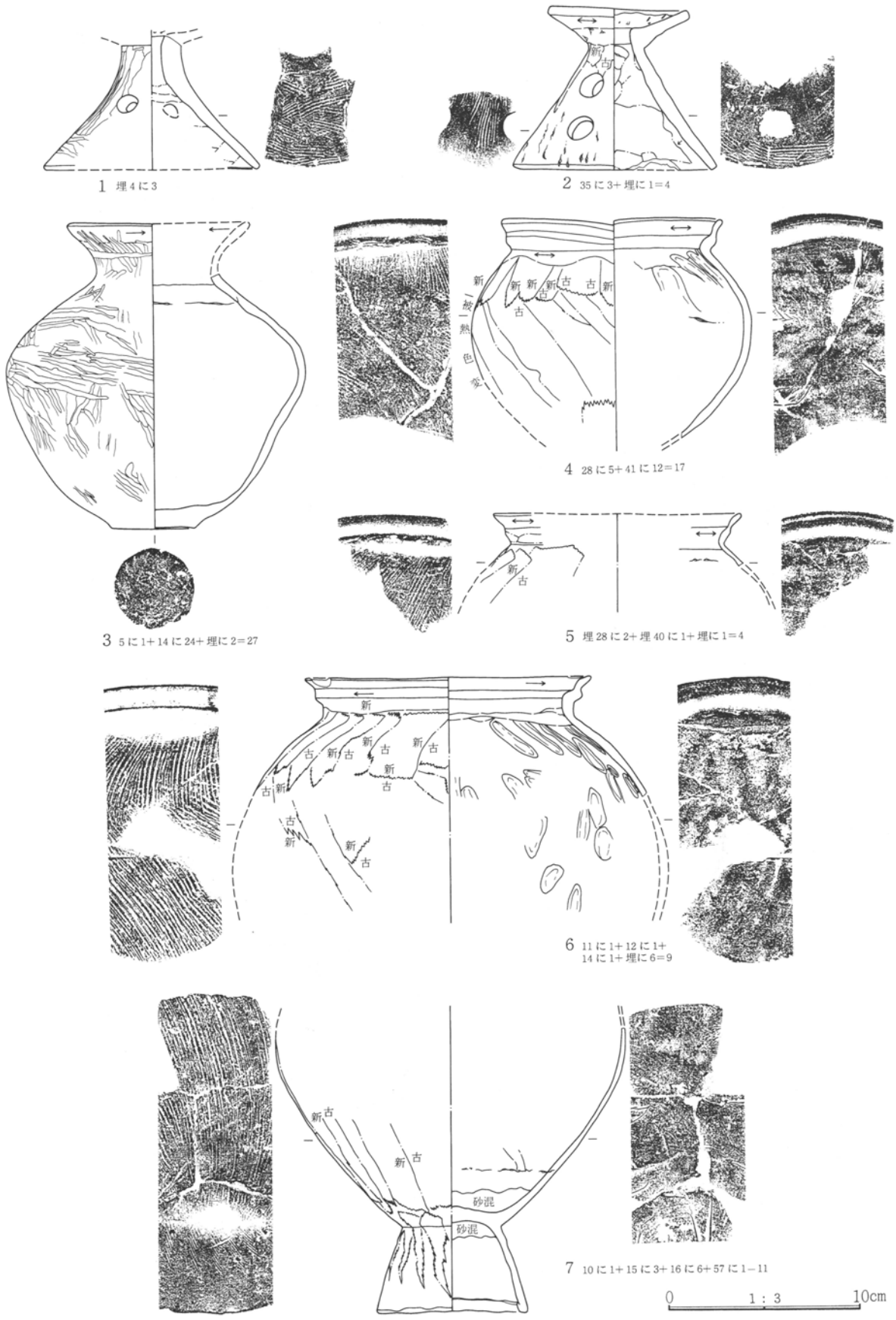
り、住居跡が存在していても、A_S－Ｂ降下以前の段階に住居跡後攪乱された可能性を考えることができるのではないだろうか。１ｍ余りの土の堆積がいつ失なわれることになったのか疑問は残される。土器集積２の調査面以下は、古墳時代前期の大型住居跡104の床・掘方構造は同じ黒色土のため、土器集積２の下方構造の追求はできなかった。結論的に、土器集積２は、住居跡であった可能性を考えておきたい。

土器集積３　（第548・549図、図版85・206）

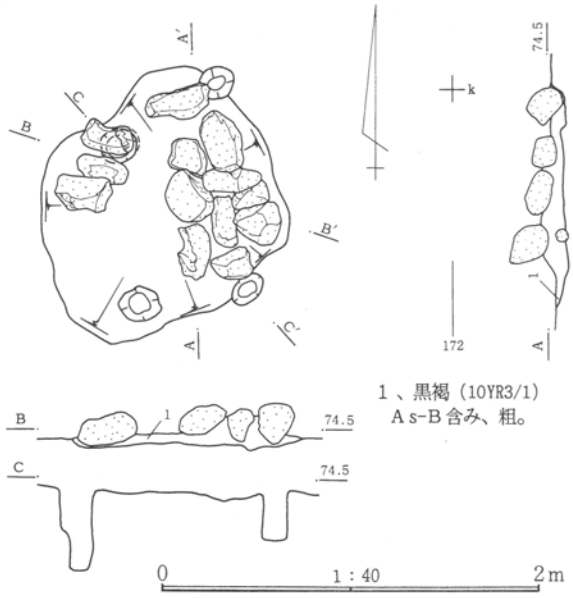
位置はＱ大区Ｐ174、住居跡116内にあり、調査面は標面74.45m付近である。遺物は第549図に示したように古墳時代前期の一群である。住居跡116内で土器集積３の位置は西南寄りにあり、後出の倒木跡に近接していることと、住居跡埋没の過程で土坑状の凹地が生じえることも充分考えられ、遺物相互の時期差の少ないことから、土坑内の土器集積とは別に住居跡116に関連した埋没過程も考える必要性ありとしておきたい。



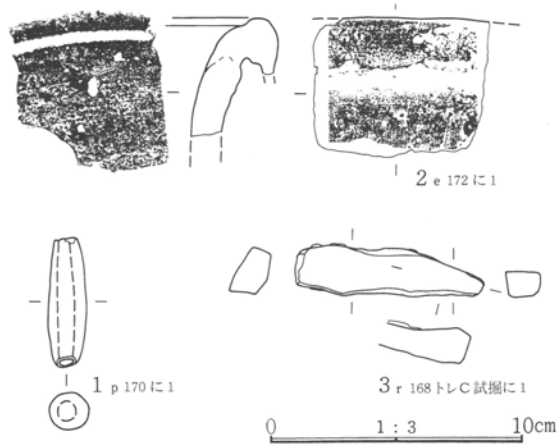
第548図　土器集積３遺構図



第549図　土器集積3遺物図



第550図　集石４遺構図



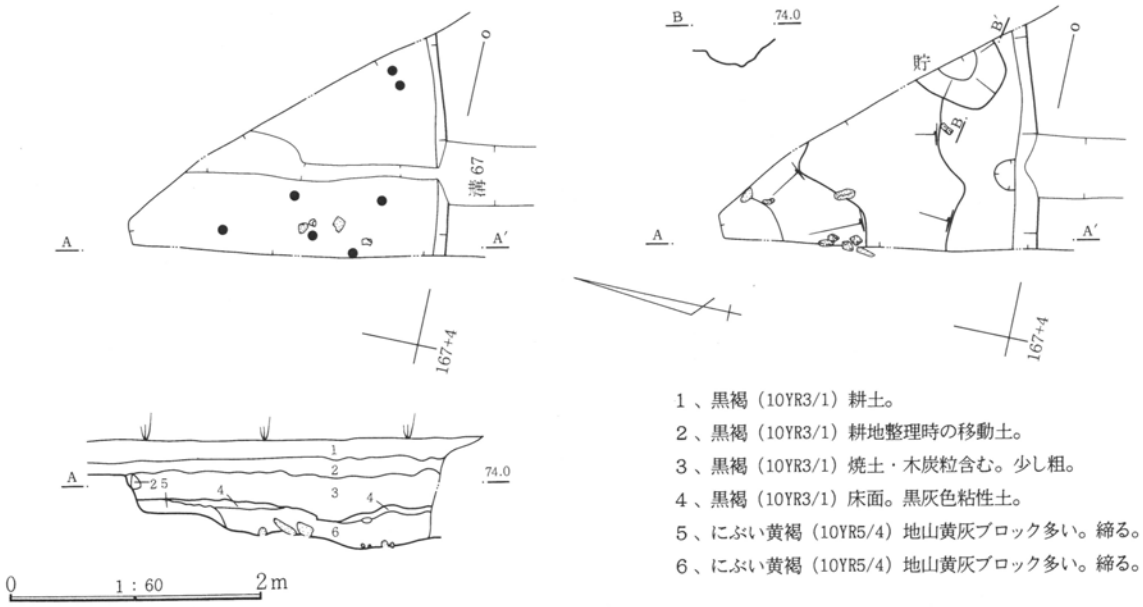
第551図　Ｑ区の遺物図

集石４　（第550図、図版85）

位置はＱ大区ｊ172にあり、調査面は標高74.45mである。埋土と下方にＡs－Ｂ混りであり、土坑内に存在した石類のようである。掘方の細い穴は根跡か不明。中世の一群に近接するので中世かもしれない。遺物の出土はない。

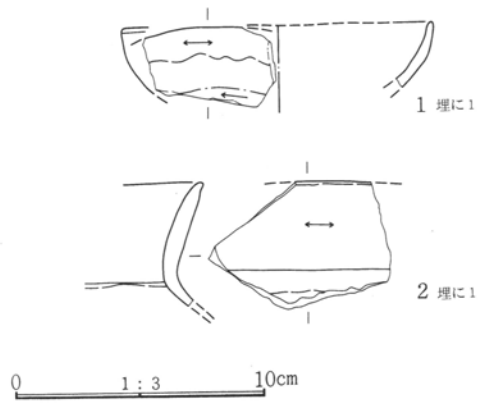
第７章　Ｑ東区調査の遺構と遺物

Ｑ東区とした調査区は、本線に取付く市道の拡幅カ所に相当していた。対象面積は159m²位置関係は第７図のとおりＱ区の東延長上にある。同区は、水田中にある。この水田はＲ区で調査された溝113を中心にして、同溝の埋没後その凹地に細長い水田が約15m幅で史跡観音山古墳の東周溝付近まで連続的に続いて存在していたが昭和58年度の圃場整備事業によって、その狭長な水田区画は、畑地と水田とに分けられ整理された。当遺跡周辺では南半が水田となり、Ｑ東区のある水田は東西幅36mの水田であった。この水田の中程に溝跡113の延長に相当するカ所に雑草の生育が幅約５ｍで成長が極立って良く、明らかにその延長に相当していることが分った。Ｑ東区から溝跡113の延長部まで東方15mの位置関係にある。溝跡113の構築は８世紀代と考えられ、溝の東方に寺院跡とされる区画がある。報告では、第３図に示した出土瓦をもって９世紀代頃の寺院跡とされたが、今回の調査で８世紀前代の瓦類が相当量含まれていたため、８世紀代に創建された可能性ありと考えている。一坦埋没した溝跡113の凹地が、いつ頃から水田であったのかは、Ｒ区で調査した道跡8・9は地域でかつて東（ひがし）往還と称された道跡で天明３年のＡs－Ａ軽石の前・後代を調査した。遺跡９は、溝跡113の西側肩部から、平坦部に存在して畦の高まりとなり18世紀以前の水田畦であることが判明し、溝跡114・115・117・118・119など近世溝も水田に関係するであろうことが考えられた。その上限は、溝跡114から中世の可能性のある第762図１の石臼が出土している。溝跡114の頃になると道跡は、溝跡113の東側にある道跡11が機能していた。溝跡114以前は、流水痕のあるＡs－Ｂ混りの土層は溝跡113の第730図注記５のとおり見え、溝跡113のｇ168付近では近純層も存在し、その直下層は、水田土壌に見られる黒色粘性土が存在していた。県内の水田遺跡の中には３ｍ前後の溝跡の埋没凹地を利用して小規模区画を連続的に設けた例もあるので、この場合は全面否定はできない。前述からの水田は、第729図の溝113の西立上りを境に西に13＋αm、東に４m前後が最大で考えられる範囲である。道跡8・9が太畦として機能していた時期から現代までの間は、第729図



1、黒褐（10YR3/1）耕土。
2、黒褐（10YR3/1）耕地整理時の移動土。
3、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。少し粗。
4、黒褐（10YR3/1）床面。黒灰色粘性土。
5、にぶい黄褐（10YR5/4）地山黄灰ブロック多い。締る。
6、にぶい黄褐（10YR5/4）地山黄灰ブロック多い。締る。

第552図　住居跡53遺構図



第553図　住居跡53遺物図

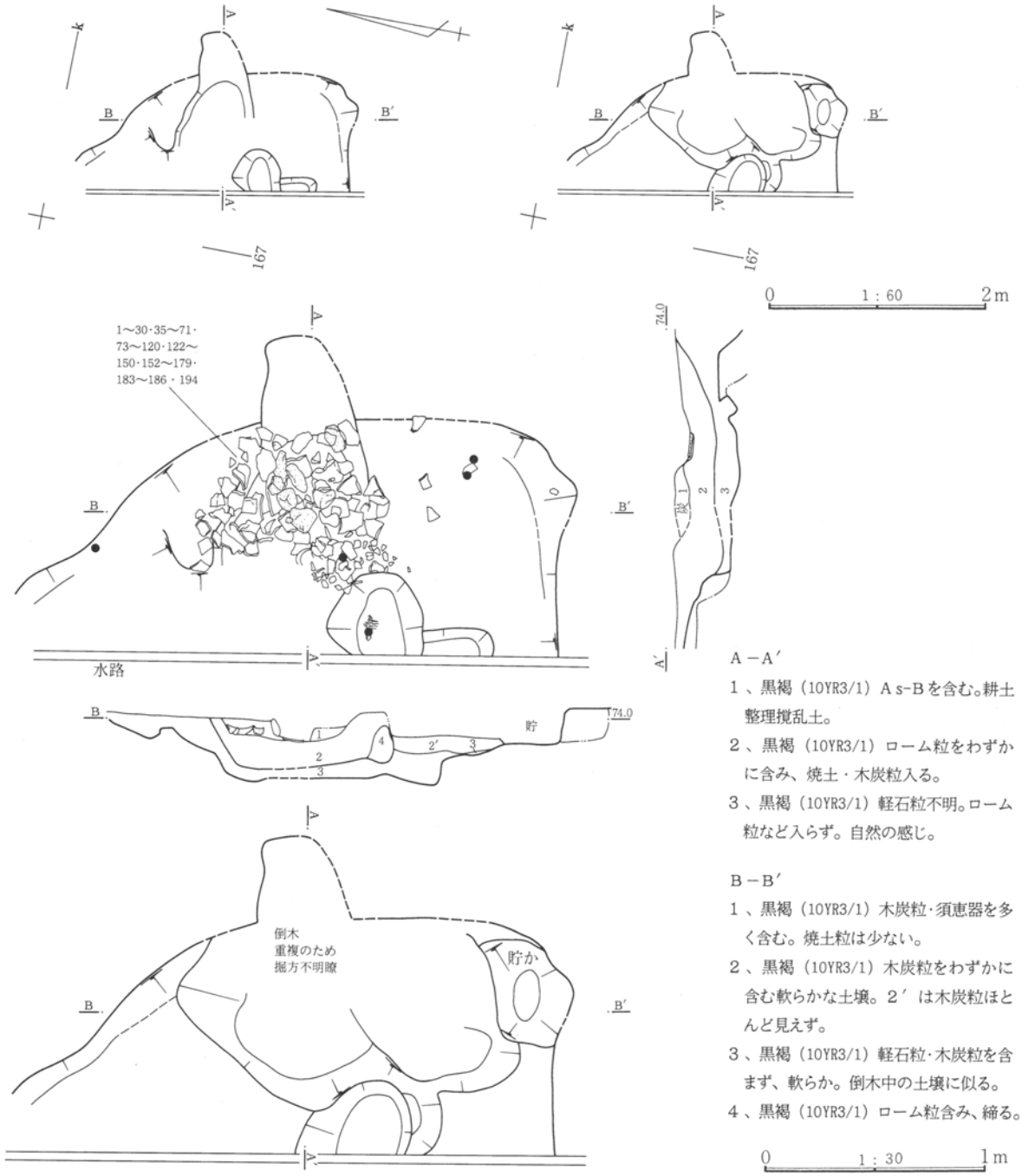
注記６が東往還であり、Ｃポイントから左側へ150cmの位置が水田部立上であり、道跡８の西端から530cmの幅であった。Ｑ東区では、水田域はおよんでいなかったが、基盤面は昭和58年度にこの水田を受継いで設けられた圃場整備の水田床土があった。圃場整備前の畑地から水田化の際に削平された層厚は20～30cm前後が考えられ、さらに405頁で説明したように古代土層が今日まで生き続けていれば、100cm以上が考えられ、今日までの間に80cm前後が失なわれたと考えられる。

Ｑ東区で調査された遺構数は、住居跡３、溝跡２、土坑５であった。住居跡はＱ大区m166で焼土粒を含むカ所を住居跡56としたが攪乱顕著で、それを除去すると基盤層であったため、住居跡としての図化は行なわなかった。基盤面には農耕用の工作機の刃型が残されていた。溝跡67・69は現代溝であり、溝跡69は現在も使用されている用水路の掘方部であった。

１．住居跡

住居跡53　（第552・553図、図版53・207）

位置はＱ大区ｏ167にある。調査面はローム層中標高74.1mである。調査区の北端で発見され、大半が調査地外に延る。重複は現代溝の溝跡67が切り、住居跡床層の一部が切られる。規模は、南北255＋αcm、東西175＋αcmを、方向は南壁を基にするとＮ15°Ｗを測る。施設としては、床面上で見い出せなかった貯蔵穴が掘方で、また住居の改修か、別住居に係わる段差が南壁から北側へ50cm隔てて認められた。掘方部北端では、床下坑らしき凹みが存在していた。遺物は、第553図に示したとおり、小片でしかも埋土出土であり、住居跡と直結するか否の弱さが認められる同図１と２があり、８世紀代の遺物である。Ｑ区の８世紀代住居跡のうち、東側に存在する住居跡は、掘方底面まで深い例が存在してあり、住居跡53もある程度の深さがあり、同期住居との共通性が接極的と云うほどではないが、ある程度存在する。



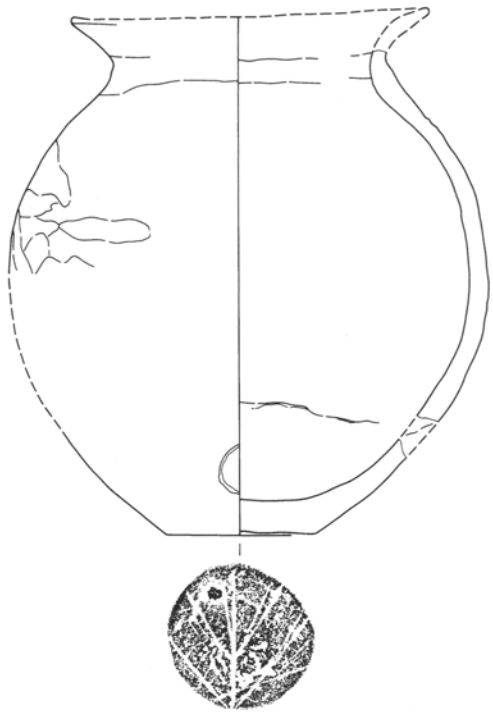
Ａ－Ａ′
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂを含む。耕土整理撹乱土。
２、黒褐（10YR3/1）ローム粒をわずかに含み、焼土・木炭粒入る。
３、黒褐（10YR3/1）軽石粒不明。ローム粒など入らず。自然の感じ。

Ｂ－Ｂ′
１、黒褐（10YR3/1）木炭粒・須恵器を多く含む。焼土粒は少ない。
２、黒褐（10YR3/1）木炭粒をわずかに含む軟らかな土壌。２′は木炭粒ほとんど見えず。
３、黒褐（10YR3/1）軽石粒・木炭粒を含まず、軟らか。倒木中の土壌に似る。
４、黒褐（10YR3/1）ローム粒含み、締る。

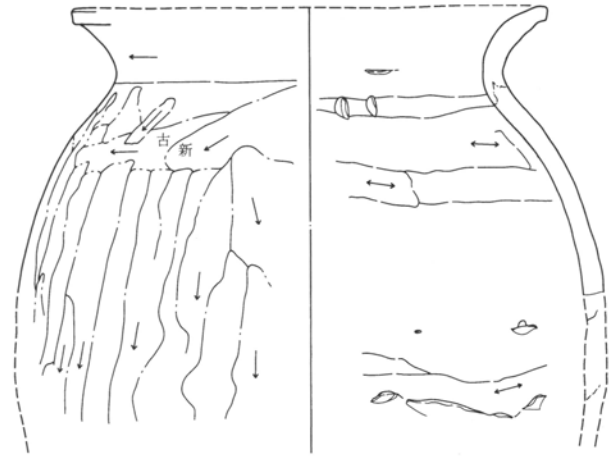
第554図　住居跡54遺構図

住居跡54　（第554・555・556・557図、図版96・207）

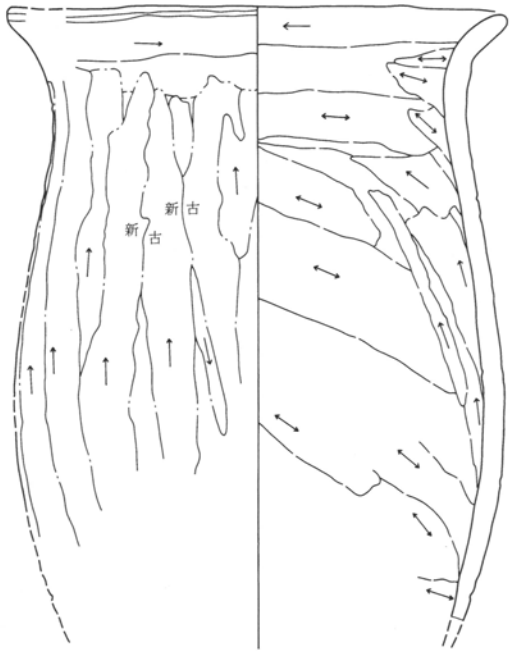
位置はＱ大区ｊ167にあり、調査面はローム層中標高74.1mである。西半に水路と市道があり、調査地外となる。重複は竈付近に先後不明瞭な倒木痕があり、不明瞭さを残す。規模は南北で528＋αcm、東西218＋αcmを測り、方向は調査結果に不明瞭さがあり数値計測は困難である。全体からすると西に偏ずるようである。施設としては東壁に竈が付設され、南東隅に貯蔵穴らしき凹部があり、床面上で竈前に小穴が存在していた。竈は、住居廃棄時に一括廃棄したと考えられる土器群が存在していた。それらは第555～557図に示した個体がそれで、遺物取上げ番号の若い数字が上方に、多い数字が下方に存在していた。第557図8・9などは上方に



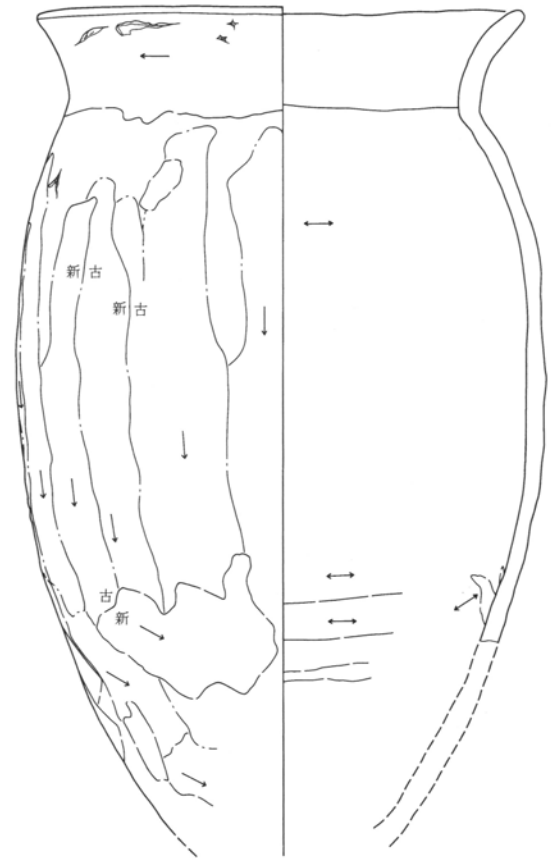
1
カ埋 43 に 1＋カ埋 54 に 1＋カ埋 61 に 2＋カ埋 63 に 3＋カ埋 64 に 1＋カ埋 65 に 2＋カ埋 79 に 1＋カ埋 80 に 1＋カ埋 81 に 1＋カ埋 82 に 1＋カ埋 83 に 1＋カ埋 84 に 3＋カ埋 85 に 3＋カ埋 86 に 4＋カ埋 87 に 5＋カ埋 91 に 1＋カ埋 93 に 1＋カ埋 94 に 1＋カ埋 95 に 1＋カ埋 96 に 1＋カ埋 97 に 1＋カ埋 98 に 2＋カ埋 101 に 1＋カ埋 102 に 1＋カ埋 103 に 1＋カ埋に 12＝53



2 カ埋 48 に 2＋カ埋 134 に 3＝5



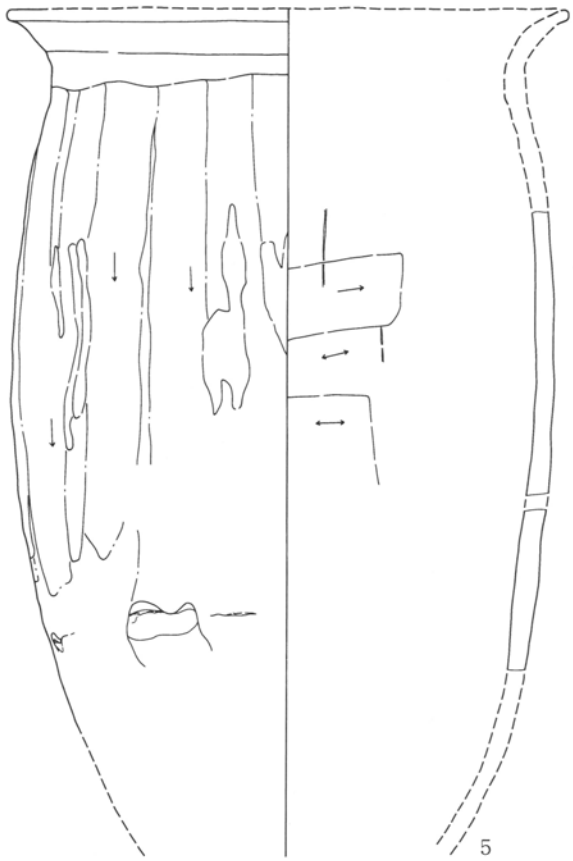
3
カ埋 58 に 1＋カ埋 68 に 1＋カ埋 71 に 1＋カ埋 72 に 3＋カ埋 104 に 1＋カ埋 105 に 1＋カ埋 106 に 1＋カ埋 107 に 1＋カ埋 110 に 2＋カ埋 114 に 1＋カ埋 194 に 1＋カ埋に 10＋埋に 1＋カに 1＝26



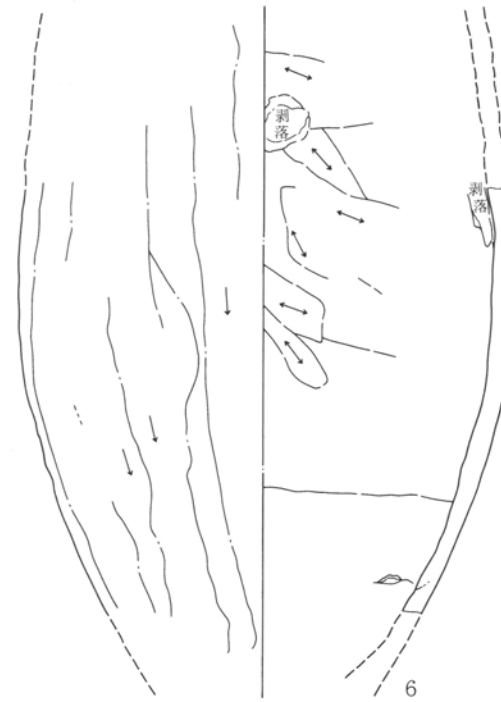
4
カ埋 12 に 1＋カ埋 26 に 1＋カ埋 47 に 2＋カ埋 51 に 1＋カ埋 52 に 6＋カ埋 53 に 1＋カ埋 66 に 2＋カ埋 67 に 2＋カ埋 69 に 1＋カ埋 70 に 1＋カ埋 77 に 2＋カ埋 78 に 2＋カ埋 111 に 1＋カ埋 112 に 1＋カ埋 113 に 4＋カ埋 115 に 2＋カ埋 116 に 1＋カ埋 117 に 1＋カ埋 118 に 1＋カ埋 120 に 2＋カ埋 122 に 4＋カ埋 123 に 1＋カ埋 124 に 4＋カ埋 126 に 1＋カ埋に 30＝75

0　1：3　10cm

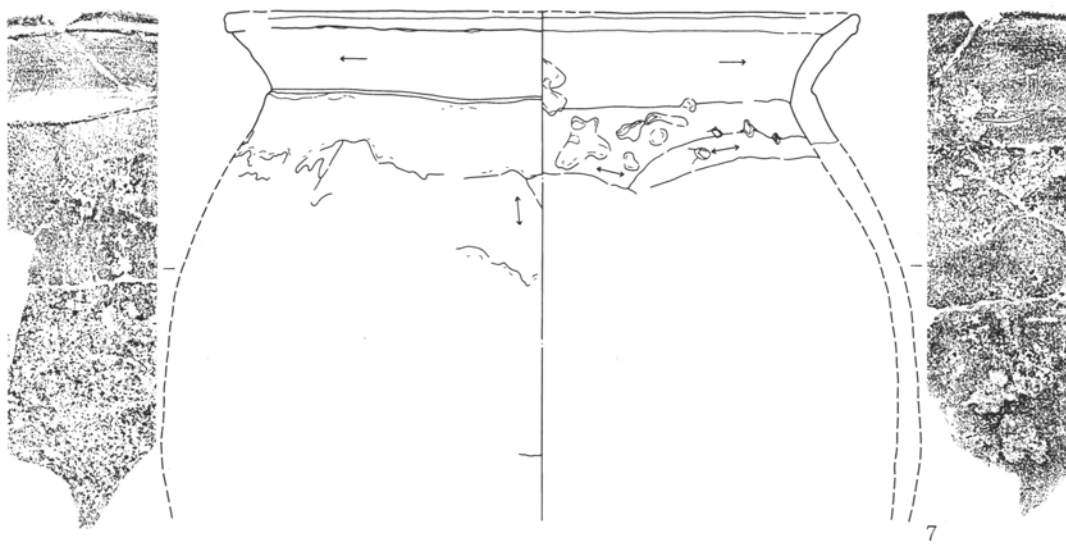
第555図　住居跡54遺物図



カ埋 23 に 1＋カ埋 25 に 2＋カ埋 46 に 1＋カ埋 57 に 5＋カ埋 60 に 1＋カ埋 79 に 1＋カ埋 90 に 2＋カ埋 92 に 1＋カ埋 100 に 4＋カ埋 119 に 1＋カ埋 127 に 1＋カ埋 128 に 1＋カ埋 129 に 1＋カ埋 138 に 1＋カ埋 139 に 3＋カ埋 142 に 1＋カ埋 146 に 1＋カ埋 147 に 7＋カ埋 158 に 2＋カ埋 159 に 1＋カ埋 171 に 1＋カ埋 172 に 2＋カ埋 179 に 6＋埋に 7＝54



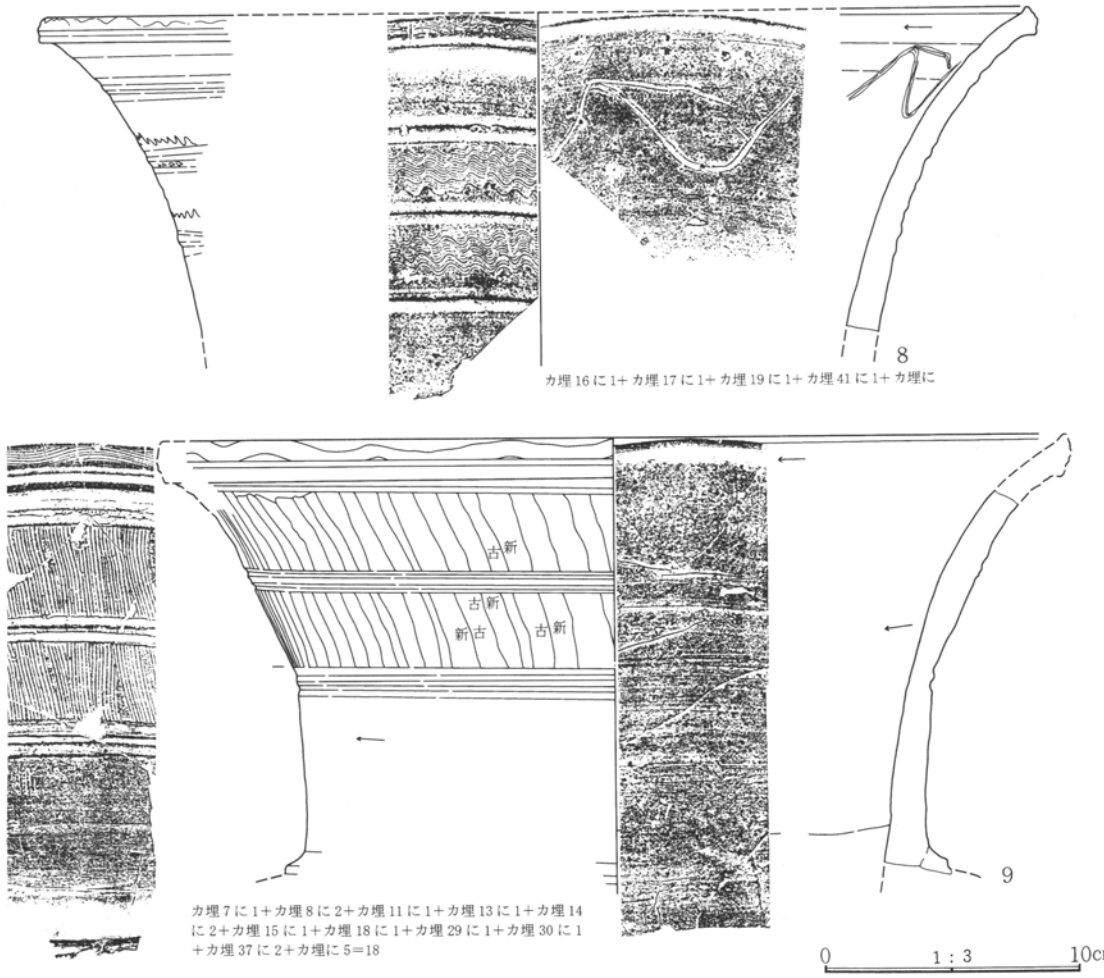
掘埋 169 に 1＋カ 150 に 1＋カ 152 に 1＋カ 160 に 1＋カ 161 に 1＋カ 163 に 1＋カ 164 に 1＋カ 179 に 19＋カ 184 に 2＋カ埋 149 に 1＋カ埋 183 に 2＋157 に 1＝32



カ埋 3 に 1＋カ埋 5 に 1＋カ埋 36 に 4＋カ埋 49 に 1＋カ埋 75 に 1＋カ埋 132 に 3＋カ埋 144 に 1＋カ埋に 3＝15

0　1：3　10cm

第556図　住居跡54遺物図

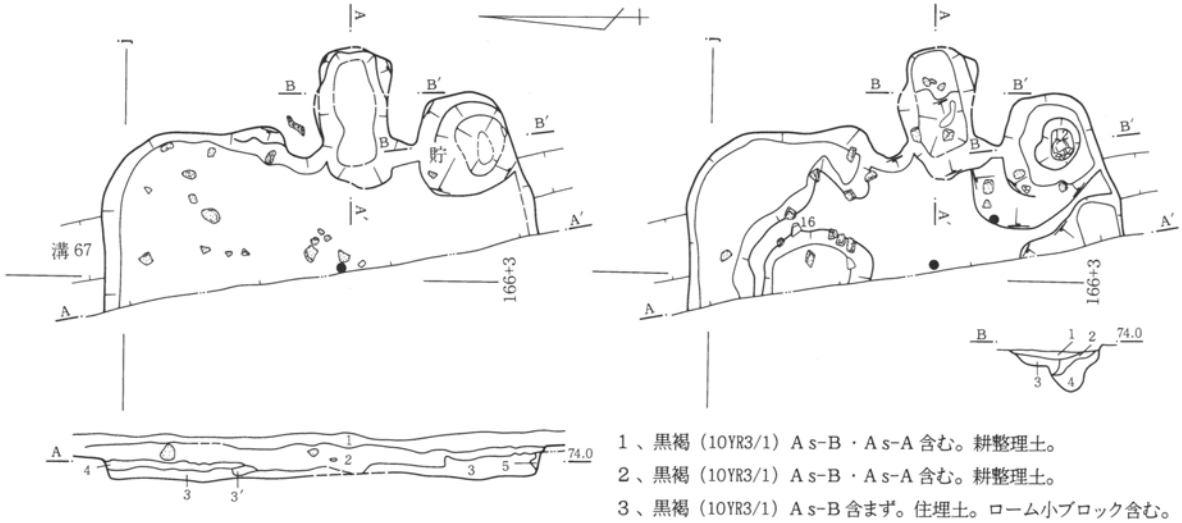


第557図　住居跡54遺物図

存在していた。遺物類は６世紀後半の一群で第557図８には箆記号が、同図９には低く型式的な頸部突帯、櫛施文・隆線の挽出し、口縁波状文帯があり、新来手法に在来特徴を残す西毛地域の製品である。まだ西毛地域の須恵器窯が大展開される前の個体でもある。土師器類は、坏類が見えず甕・壺類の組合せの関係が得られる。図1・2・7など壺類の占める割合が高いのも６世紀代様相であり、図１の木葉痕も生産地背景を示す時期的様相の一端でもある。

住居跡55　（第558・559図、図版96・97・207）

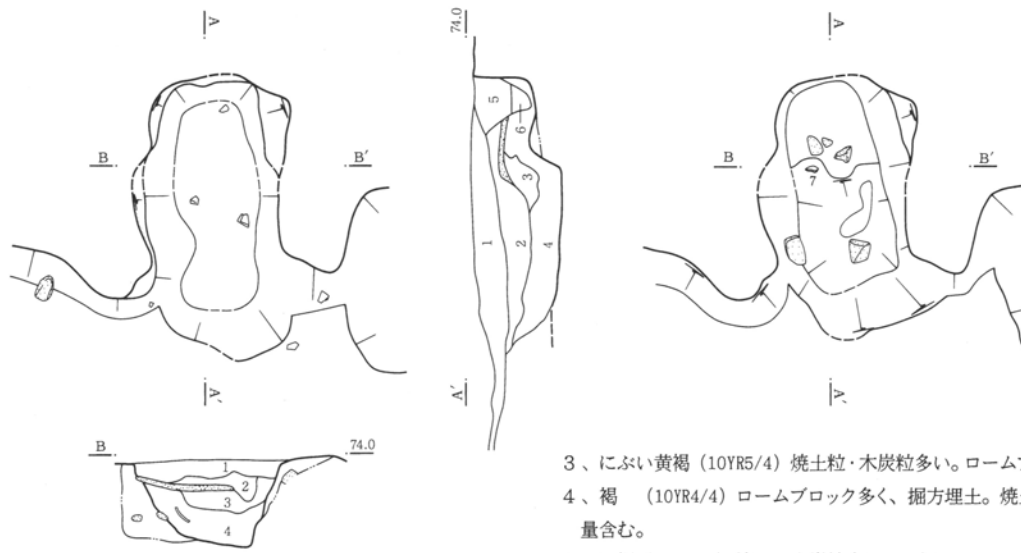
位置はＱ大区ｆ166にあり、調査面はローム層中標高74.1mである。重複は溝跡67が後出してある。規模は南北350＋αcm、東西130＋αcmで西半は未調査地となる。方向は東壁を基にN2°45′Wを測る。施設として東壁に竈、南東隅に貯蔵穴が、掘方に床下坑がある。竈は、地山袖を造り出し、貯蔵穴は廃棄時にはほとんど埋没し、土層断面Ｂの土層注記２に床層が入る。貯蔵穴の掘方には段差があり、掘直しが行なわれたかもしれない。掘方は、周壁下を溝状に掘窪めた状況が北壁・南壁下に見えた。遺物は第559図に示した。竈や貯蔵穴から出土の個体は、８世紀の個体が多くあり、住居の機能時と考えてよいであろう。



貯蔵穴

１、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少なく、少し締る。
２、黒褐（10YR3/1）少し還元気味。床。
３、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入る。
４、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少。少し粗。
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ・Ａs-Ａ含む。耕整理土。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ・Ａs-Ａ含む。耕整理土。
３、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まず。住埋土。ローム小ブロック含む。
　３′は少し締る。
４、黒褐（10YR3/1）少し黄味おびた粘性土。
５、ロームブロック。

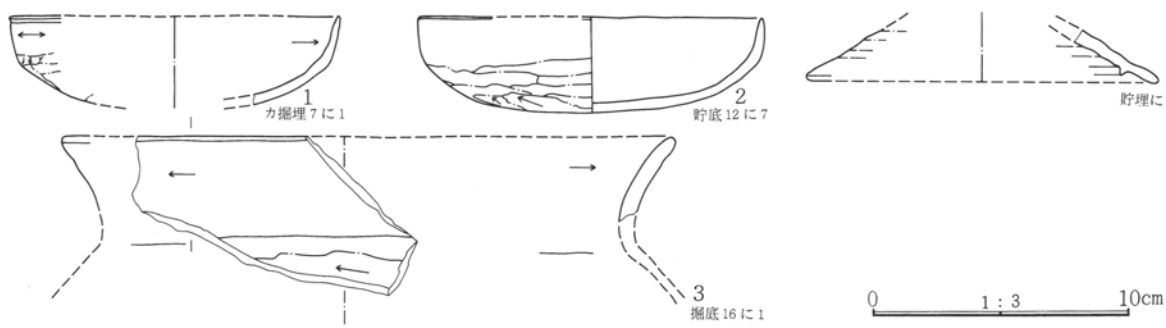
0　1：60　2m



１、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含み、粗。
２、にぶい黄褐（10YR5/4）焼土粒多く、木炭粒含み、下部に灰層あり。
３、にぶい黄褐（10YR5/4）焼土粒・木炭粒多い。ロームブロック含む。
４、褐　（10YR4/4）ロームブロック多く、掘方埋土。焼土・木炭粒少量含む。
５、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒少ない。粗。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）灰色、粘性の築土か。

第558図　住居跡55遺構図

0　1：30　1m



0　1：3　10cm

第559図　住居跡55遺物図

溝 67

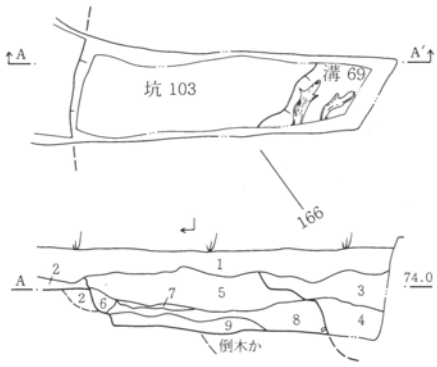
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ・ビニール含む。

２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ・ビニール含む。粗質。

３、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ・ビニール含む。やや締る。

４、にぶい黄褐（10YR5/3）Ａs-Ａ・ロームブロック含む。現代。

５、にぶい黄褐（10YR5/3）Ａs-Ｂ含み、ローム粒まじえる。



坑 103・溝 69

１、黒褐（10YR3/1）現耕土。

２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まない古代の有機質土。

３、黒褐（10YR3/1）溝 69 埋土。Ａs-Ａ含み現代埋土。

４、黒褐（10YR3/1）溝 69 埋土。Ａs-Ａ含み現代埋土。少しローム含む。

５、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ粒含む。少し砂質。

６、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ粒含む。少し砂質。

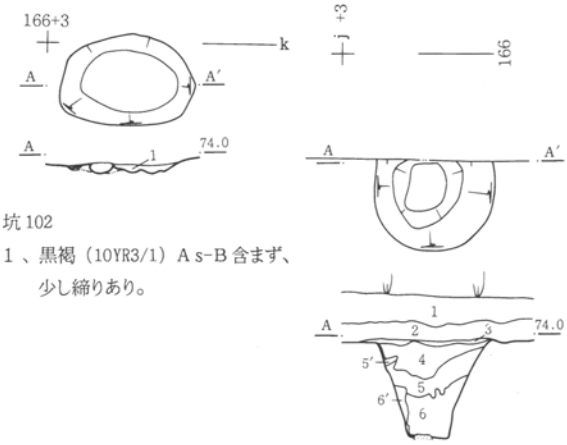
７、にぶい黄褐（10YR5/3）地山ロームブロックを多く含む。Ａs-Ｂ粒入る。

８、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ粒を含む。地山小ブロックわずか入る。

９、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ粒を含む。地山小ブロックわずか入る。

0　1：60　2m

第560図　溝跡・土坑遺構図



坑 102

１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まず、少し締りあり。

坑 106

１、黒褐（10YR3/1）耕土。

２、黒褐（10YR3/1）耕地整理時の移動土。

３、にぶい黄褐（10YR5/4）耕地整理時の移動土。主として地山の。

４、黒褐（10YR3/1）締り少なく、粗。黒味強い。

５、にぶい黄橙（10YR6/4）地山ブロック多く、5′は漂白化黄灰ブロック。

６、明黄褐（10YR6/6）地山ブロック多く、締りあり。6′はローム土壌化。

＊全体に木炭・焼土粒少ない。柱穴としては埋土に締りない。（6 層は除く）

0　1：60　2m

第561図　土坑遺構図

２．溝跡・土坑　（第7・560・561図、図版96）

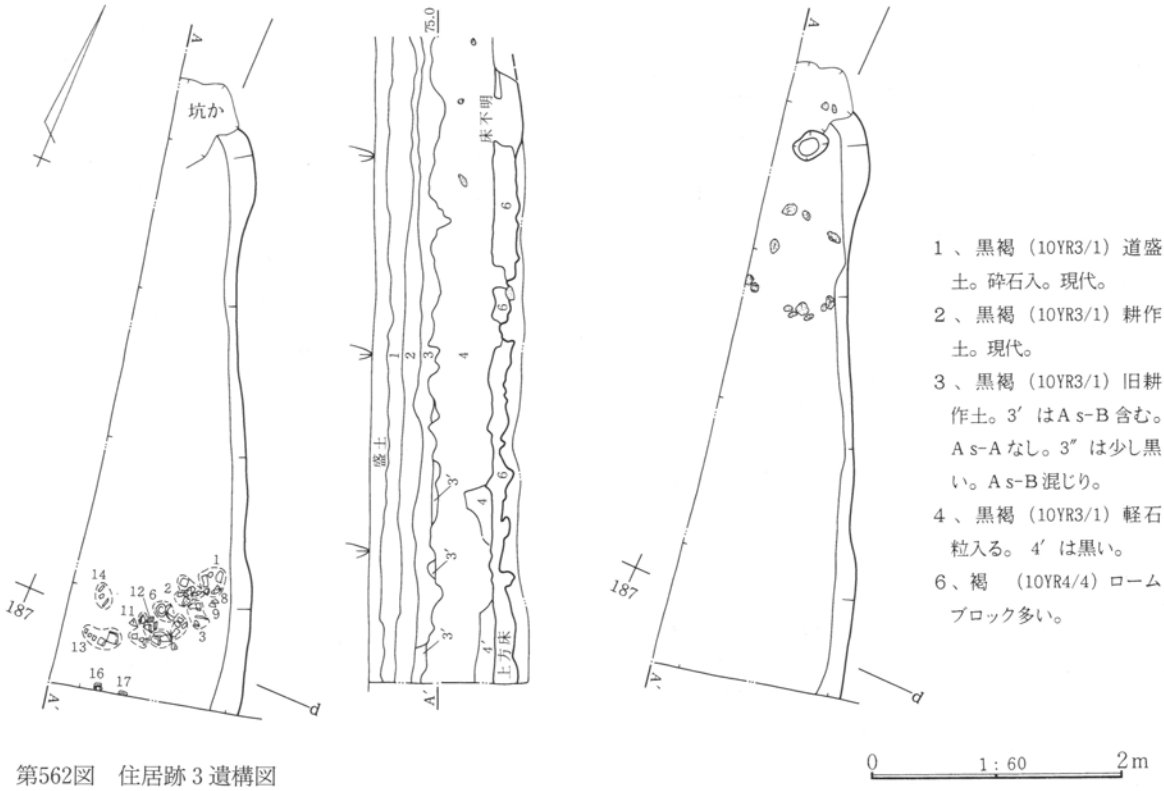
溝跡は、Ｑ東区の冒頭、409頁で触れたとうり、Ｑ東区に存在する溝跡67・同69は、現代であり、溝跡69は現在使用水路の掘方と旧溝であった。

土坑・ピットの残存数は、Ｑ東区の旧時にどの位の遺構が存在していたのか、考えるうえで重要である。Ｑ東区の場合、上層を削平、失なったとは云え、存在数は少なく、本来的に遺構数量は少なかったであろうと推測される。そのため土坑106は古墳時代前期の住居に伴なう貯蔵穴も考えうる。Ｑ東区の土坑中、住居跡に関連しそうな古代の土坑はこれ１例のみであり、住居跡56とした例と合せて２例で、住居跡希薄な分布のようである。坑103は、調査地区に延びるカ所が多いため形状不明瞭であるが、埋土にA_s－Ｂを含むため中世竪穴状の遺構かとも思える。土坑102は土層注記２のとおり、耕地整理時の移動土が入り、現代である。

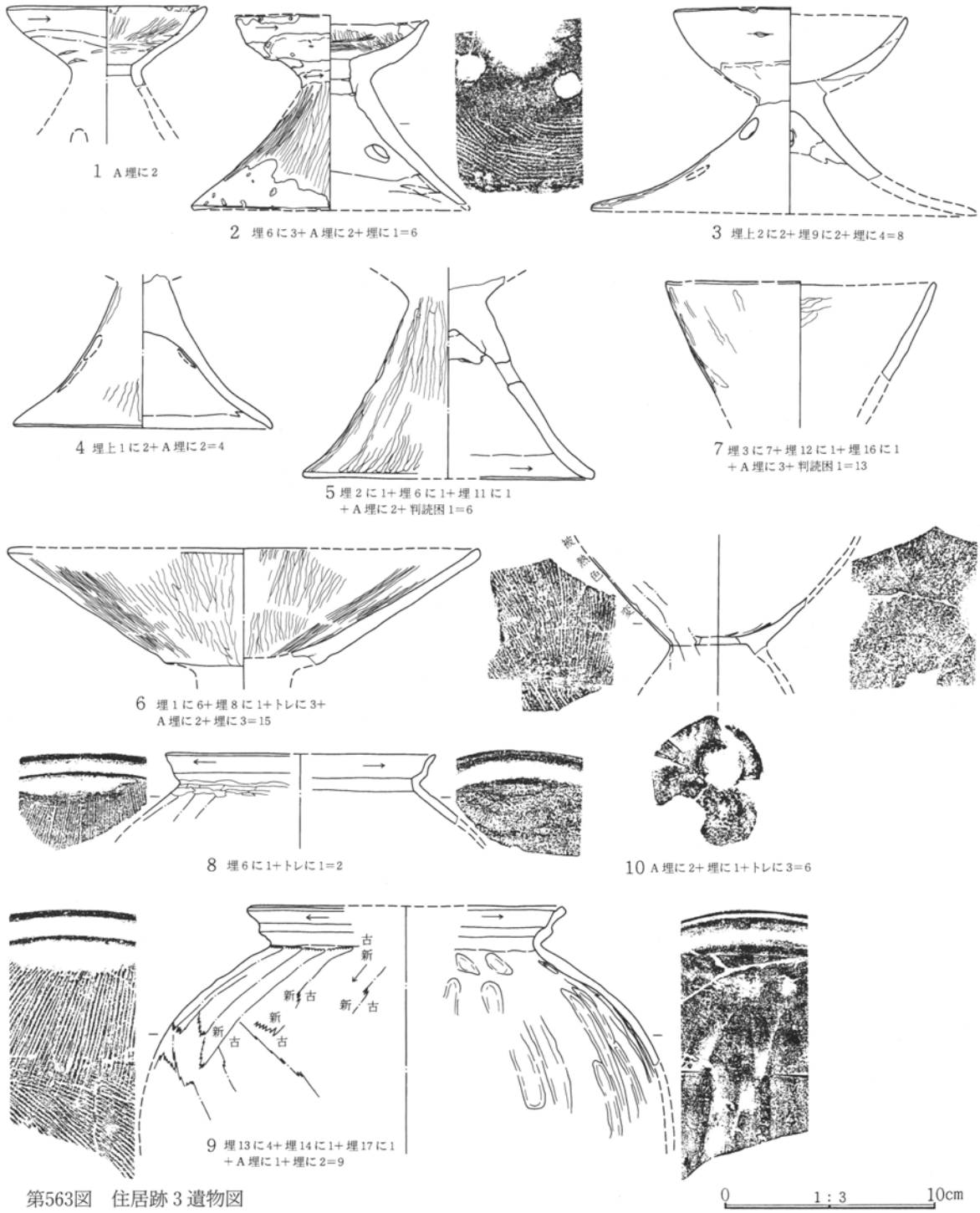
第８章　Ｑ区県道西調査区の遺構と遺物

Ｑ区県道西の調査は、Ｑ区の大多数を終了した平成13年度までの調査と時を隔てた、翌14年度にＮ西区と同じ４・５月の調査である。対象面積503㎡で当該地は畑地で、現県道前橋・長瀞線を狭む西側の調査区にありＱ区西端と10m弱離れている。調査区さ南北30.8m、幅2.7m、約83㎡である。調査の結果、第７図のとおり住居跡１、溝跡４、土坑４、ピット18の遺構を数える。調査面はローム層上面に近い同漸移層付近、標高74.6mであり、Ｑ区北西隅より10cmほど高い。層順は、第562図Ａ断面のように、現代の耕作土が15cm前後の層厚で浅間山Ａ軽石（A_s－Ａ）を含み、土層注記３にあるA_s－Ｂ混りの江戸時代耕作土層・中世土層が15cmの層厚であり、その下方に焼土粒・木炭粒などをわずか含む黒色土が存在した。その下方に５cm前後のローム層漸移層が存在するが、Ｑ区北西隅側と異なり、軟らかい状態ではなく、本来的に存在していたローム層漸移は、流出したか別の作用で失なわれたかは不明ながら、一坦、失なわれ、その後に、黒色土とローム層上層との間に生じた漸移層であるかのように思えた。上層は重機により削土した。遺構名称は、Ｎ西区と併せ新番号を用いた。

Ｑ区県道西の遺構密度は、隣接のＱ区北西付近に比らべ極めて少なく、古墳時代前期の集落は粗な状態でまだ西側に延びそうであったが、奈良・平安時代住居跡は薄くなりそうで、集落外至近を思わせた。溝跡は大規模であったり、Ｑ区側に続きそうな例はなかった。溝走行は溝跡38が北側に下る傾向がある他不明であった。土坑・ピットは、人為を思わせる例はピット36のみで、遺構壁面が人為を思わせる直線化、掘込み鋭い状況は無く、ピットも穴の低面位置が共に無かったり、黒色土の入り込みが穴の上面より内側に向うものなどで、非人為的であった。この点も、奈良時代以降の集落域から離れたらしいことを感ずるのである。



第562図　住居跡３遺構図

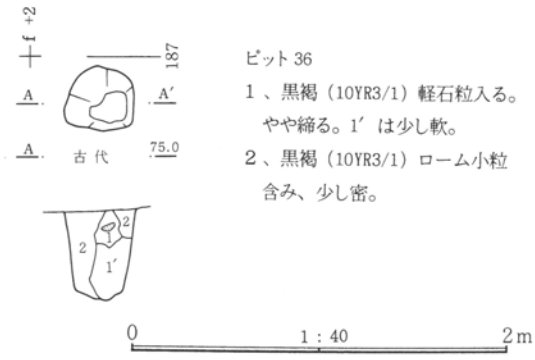


第563図　住居跡3遺物図

1．住居跡

住居跡のうち、奈良・平安時代住居跡が当区に存在し、自然のほか何んらか条件が嵩み、失なわれたとの説問については、土坑・ピットの存在中に、住居跡掘方痕跡と見られる遺構は無かったので、奈良・平安時代の住居の存在は考え難い。そのため住居跡は、次の1軒と考えてよい。

住居跡3　（第562・563図、図版98・208）



第564図　ピット遺構図

位置は、Ｒ大区ｃｄ186に、調査面はローム層漸移付近標高74.6mである。重複は、北端で床層が途切れ穴様に見えるカ所があり、新古の区別不明で、さらにその下方に住居跡３に先行の倒木痕が存在。規模は南北522＋αcm、東西155＋αcm、方向は東壁を基にN21°30′Wを計る。施設としては、調査面そのものが床面であり残存は良好と云えなかった。掘方で北側に小穴が存在した。遺物は南半に集中し、第563図のとおりある程度の組合せをもって存在する。時期は古墳時代前期である。器台・高坏の存在の割りに、小形壺が少ない点は注意される。

２．溝・土坑・ピット

溝・土坑・ピットの有り様は417頁、Ｑ区県道西の冒頭で触れた。ピットは、その大半について人為とは思えなかったが第564図に示したピット36のみが柱穴のように見えた。時期は、古代の埋土であった。

第９章　Ｒ区西市道調査区の遺構と遺物　（第７図、図版99）

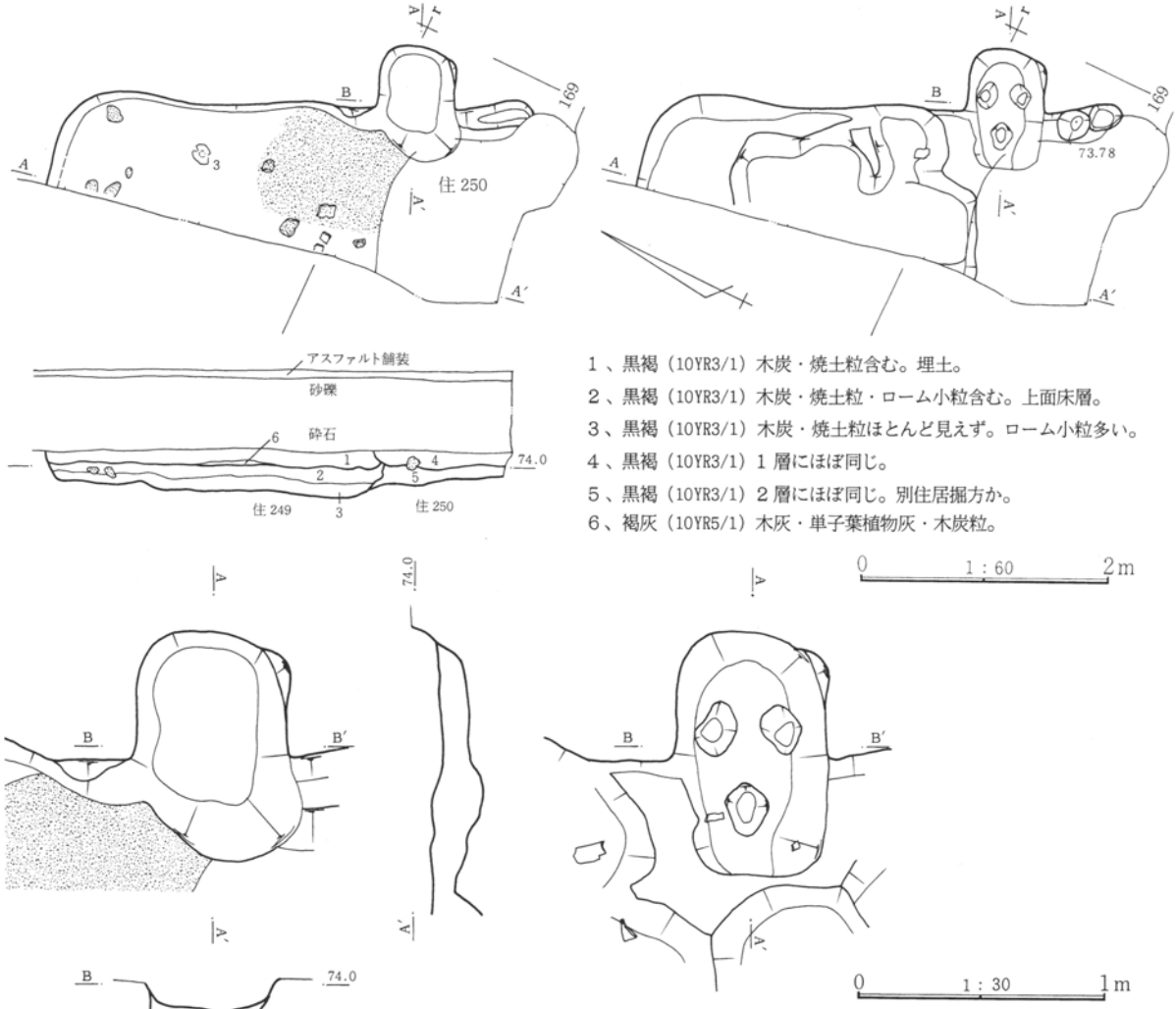
同区はＱ区・Ｒ区間に存在していた舗装市道を除去して′01、12月に調査を行なった。南北37m、幅４m、面積約150m²を調査した。調査面は、ローム層上層まで砕石が敷込まれ、それを除去した面を調査面とし、標高74.1m付近である。調査の結果、住居跡２、溝跡85、土坑７、ピット31である。各々の傾向について、まず調査面は、隣接のＱ区が標高74.4m付近、Ｒ区が74.3m付近であるので20～30cm低い面であった。その層厚で上層に存在した住居が削平されたとすると調査区内に床下の土坑や、溝状の掘方などが見受けられないので削平された住居跡の存在は否定的であった。住居跡は南端で２軒、存在したが、そのＱ区延長上に住居跡146が存在しているが壁位置に差があるため、別々の住居である、南側で住居跡２軒が重複し合って存在しているのは、南方のＱ東区でも粗な分布となるので、集落の集密状況はこの付近までと考えて良さそうである。溝跡は溝跡85が東下りで東に向って存在しているがその南・北側（道跡10）の道跡は削平のため認められなかった。調査区北東隅にはＲ区に主体がある溝跡119の西立上りを見い出している。土坑とピットは北側と南側に分布し、間のａ・ｂラインに空白が生じている。この空白カ所はやや高いため上層が削平されたようである。土坑・ピットは各々は深さは浅く、南側は人為による遺構と考えられたが北側は、土坑を除くと自然を思わせるピットが多かった。そのためＱ区から続くピット群は、一坦このあたりで終るようであった。

１．住居跡

Ｒ西市道区の住居跡傾向は前述した。次に各々の住居跡に触れたい。

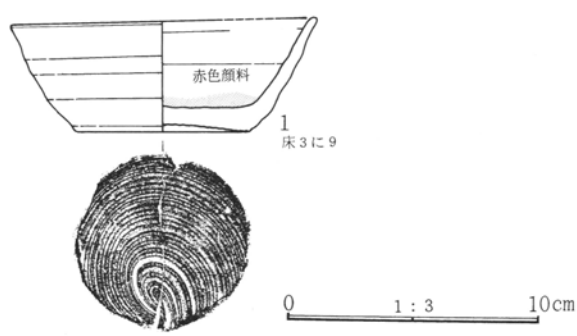
住居跡248　（第565・・6図、図版99・208）

位置はＱ大区ｑｒ169にある。調査面はローム層上層標高74.15m。重複は住居跡250に切られる。規模は南北402＋αcm、東西128＋αcm、方向は東壁でN24°Wを測る。施設として東壁に竈、南東に底面標高73.78mの



1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。埋土。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒・ローム小粒含む。上面床層。
3、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒ほとんど見えず。ローム小粒多い。
4、黒褐（10YR3/1）１層にほぼ同じ。
5、黒褐（10YR3/1）２層にほぼ同じ。別住居掘方か。
6、褐灰（10YR5/1）木灰・単子葉植物灰・木炭粒。

第565図　住居跡248遺構図



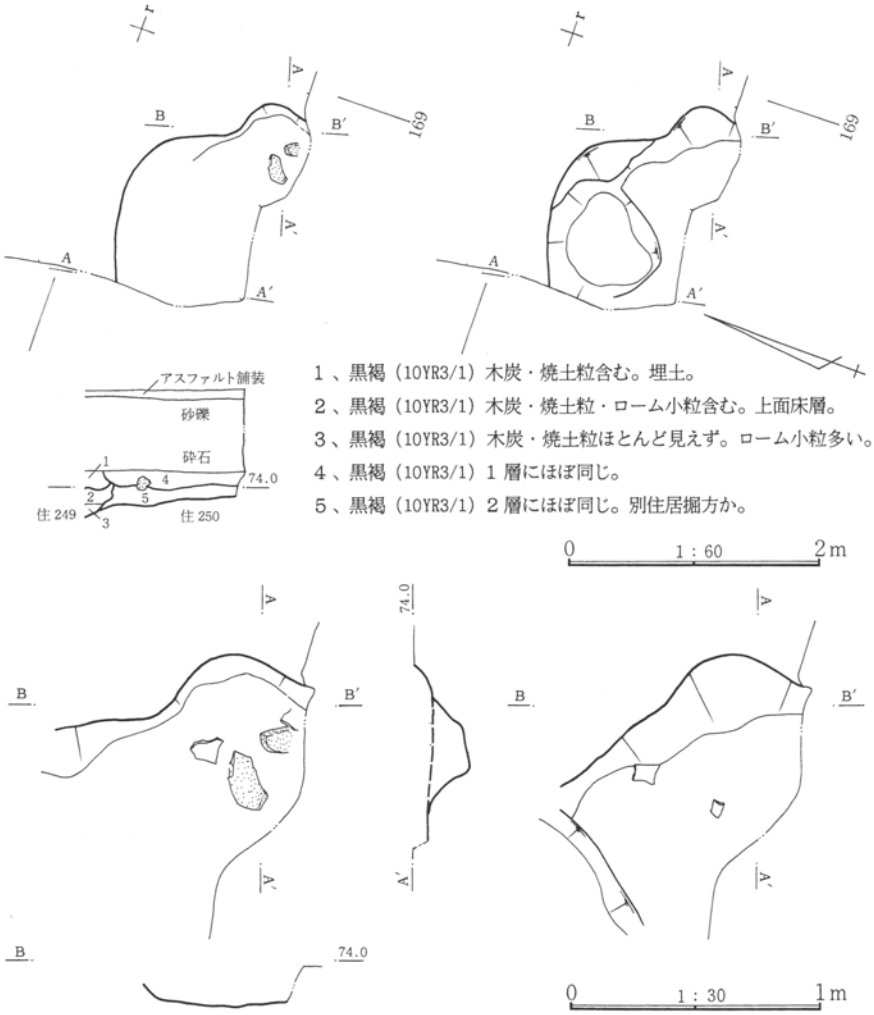
第566図　住居跡248遺物図

小穴が存在したが貯蔵穴にしては小さ過ぎる。遺物は床から第566図１が近完器の状態で出土している。９世紀前半の個体で、住居機能も同期であろう。同図１の内面底には赤色顔料が付着し、工的な作業を行なう居住者であったようである。南西10mにある住居跡133は10世紀後半頃で茶漆付着・内面磨耗土器・羽口が存在し、Ｑ区全体の中では工的な性格の住居跡が近接して見られる点も見過せない。

住居跡250　（第567図、図版99）

位置はＱ大区ｑ169に、調査面はローム層上層標高74.0m付近である。重複は住居跡248を切って存在しているが、同250北半の床層から掘方層まで市道建設と考えられる削平化によって失なわれ、第567図土層断面Ａ中の注記５のように別住居跡と考えられる土層があり、土層に伴なう掘り込み状態が第567図右側の掘方面図である。そのため竈の存在は住居跡250であっても以下の掘方状態は別住居跡の可能性が強い。掘方図中の円形土坑は、床土坑と考えられるが住居中の位置として北東隅に存在すると考えるには、通有の場合に竈付

近に存在する例が多いため、この土坑は至近に竈のある住居跡250に伴なう可能性も持たれる。規模は、南北150＋αcm、東西135＋αcm、方向は東壁を基にするとN26°Wを測る。施設としては、東壁に竈があり、可能性として掘方に床下坑が考えられる。遺物は少なく、住居跡の機能時期は、住居跡249の9世紀前半以降であろう。

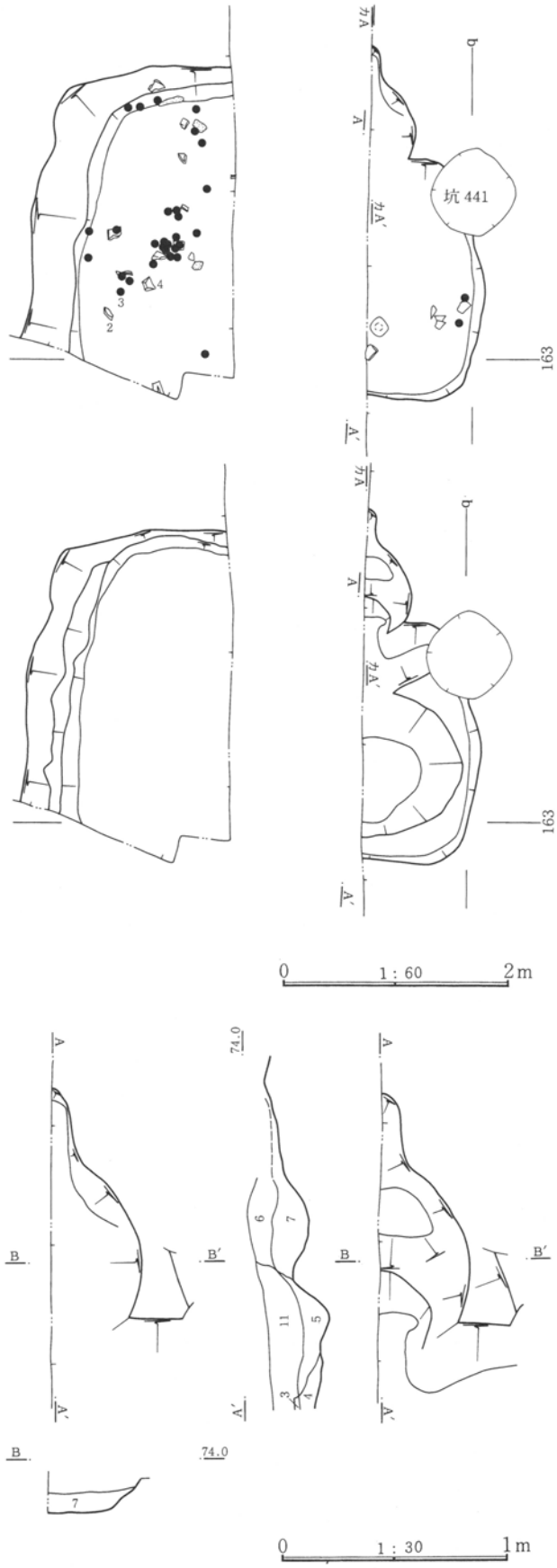


第567図　住居跡250遺構図

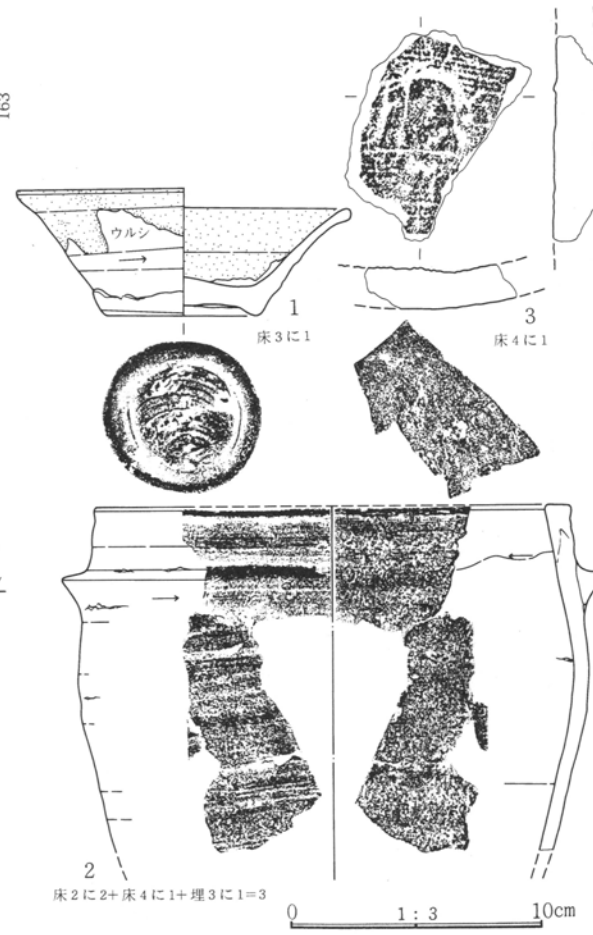
第10章　R・S区調査の遺構と遺物　（第11図、図版100）

R区は、調査時は、主体をR区、pqライン付近の市舗装道路直下をR北市道区、その東延長上にある2カ所の小区をS区工事立合い1、同2（東側0157付近）、西方のS大区k171の小区をS西区、qライン以北の井野川段丘崖までをS区と呼称していた。対象面積約2850で㎡でここではそれらをまとめて扱いたい。

遺構数は、住居跡76、溝跡35、井戸跡1、柱列1、道跡3、土坑111、ピット329であった。遺構傾向は、古墳時代前期の住居跡は散在的であった全体傾向であったが井野側段丘崖付近のoライン以北では重複状態にあり、銅鏃の出土した住居跡208を含む一辺近9m級の住居跡が2棟存在していた。群構成としてkライン以北がその大形住居を含む一群で、cライン以南は、Q区に繋る一群で、その間に溝跡130が存在する。奈良・平安時代住居跡は、Q区の冒頭、187頁で触れたように溝113が、東接の寺院跡を画する大溝で以東のR区の住居群が、寺院関連と考えられるとした。住居跡形態は、東西長軸の形態を持つ例が目立ち、遺物では瓦、工的作業関連の遺物を含む場合があった。井野川崖との関連では、古墳時代前期の大形住居跡を設けたこと、寺院の中枢基壇も近接する点なども井野川側から、もしくは対岸から見られる景観を意識してのことであろう。溝跡・井戸跡・遺跡・土坑・ピットは各項目の冒頭で触れたい。

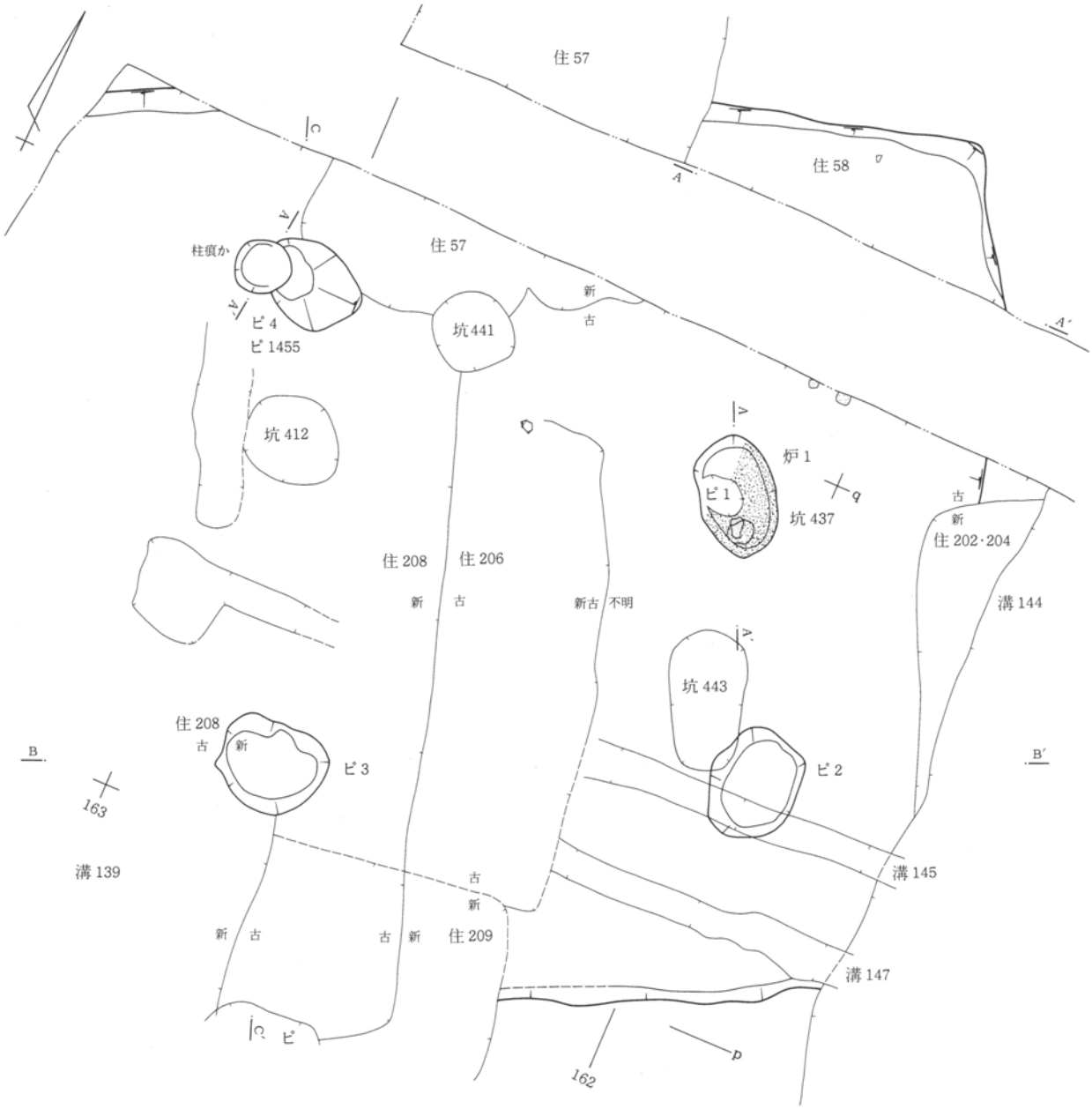


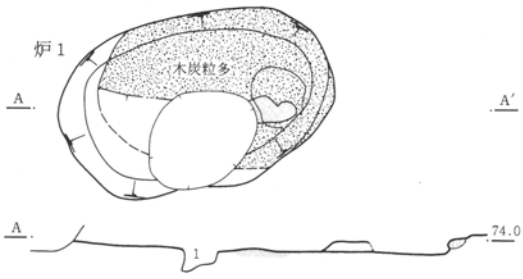
第568図　住居跡57遺構図

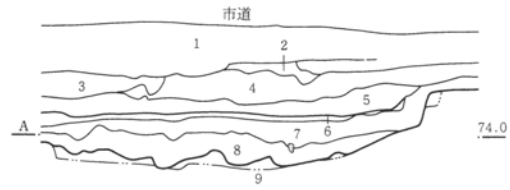


第569図　住居跡57遺物図

１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。硬い。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを多く含む。床層部分的に入る。下方焼土粒多い。
３、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主の床。
４、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックを多く含む。少し焼土粒入る。
５、黒褐（10YR3/1）木灰を多く含む。
６、黒褐（10YR3/1）木灰・焼土粒を多く含む。カマド灰。
７、灰黄褐（10YR6/2）焼土粒大ブロック・ローム土壌化含む。
８、黒褐（10YR3/1）軟。動物穴か。
９、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック土壌化多い。住208掘方埋土。
10、黄褐（10YR5/6）ロームブロックさらに多く、９層より土壌化少。住208掘方埋土。
11、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、木炭粒含む。

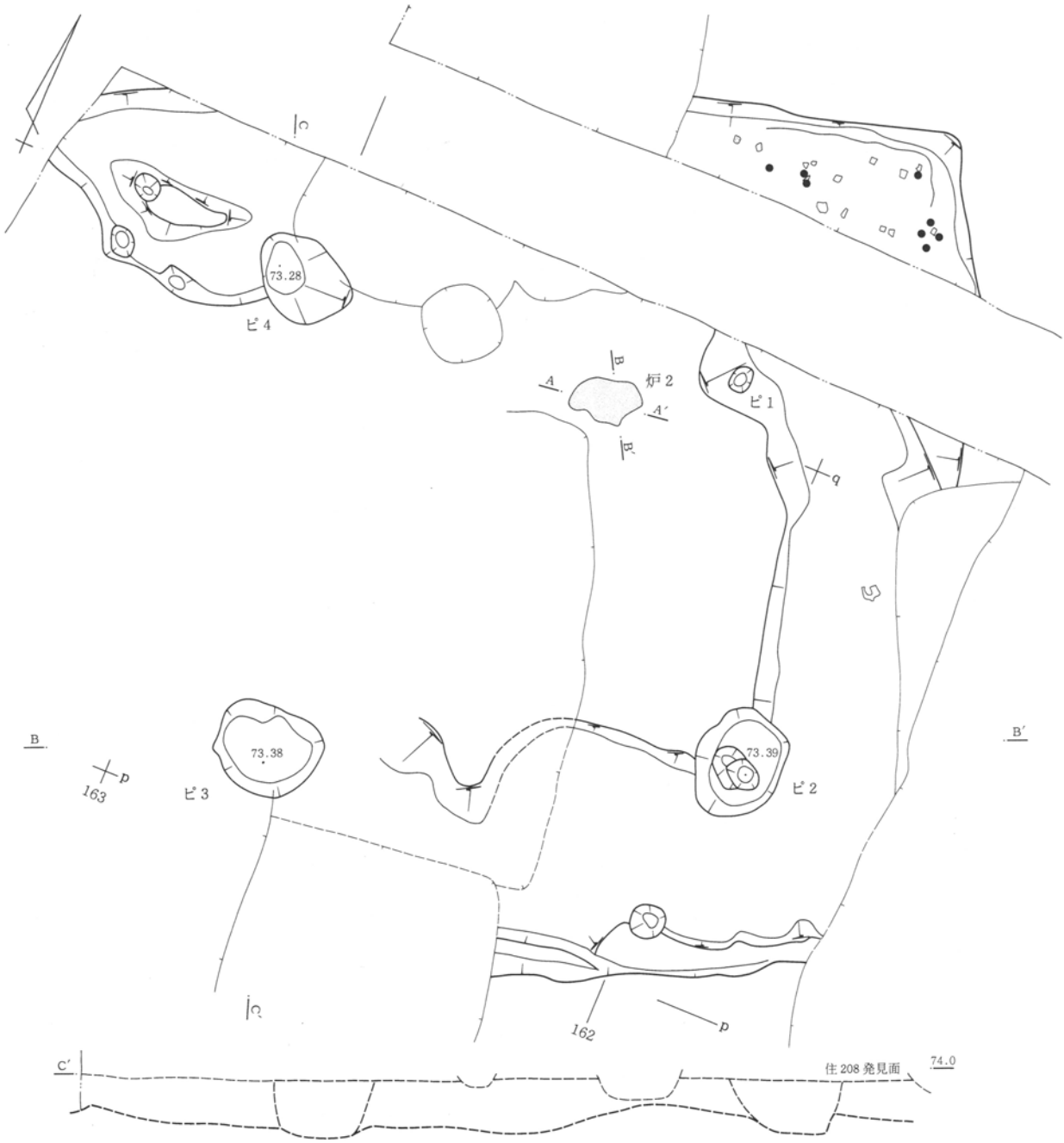


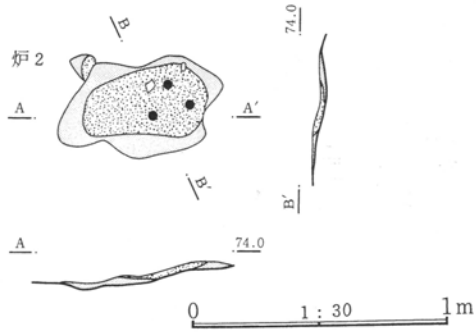




1、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多い。　0　1：30　1m　　0　1：60　2m

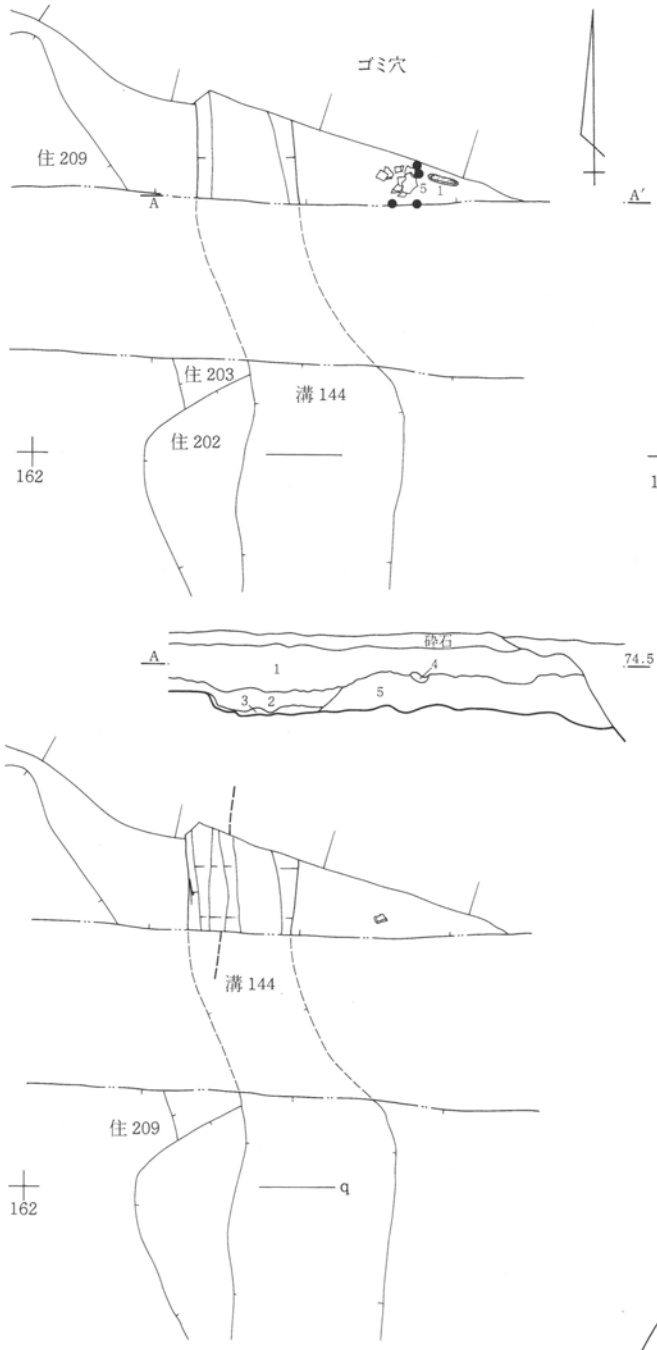
第570図　住居跡58・205遺構図





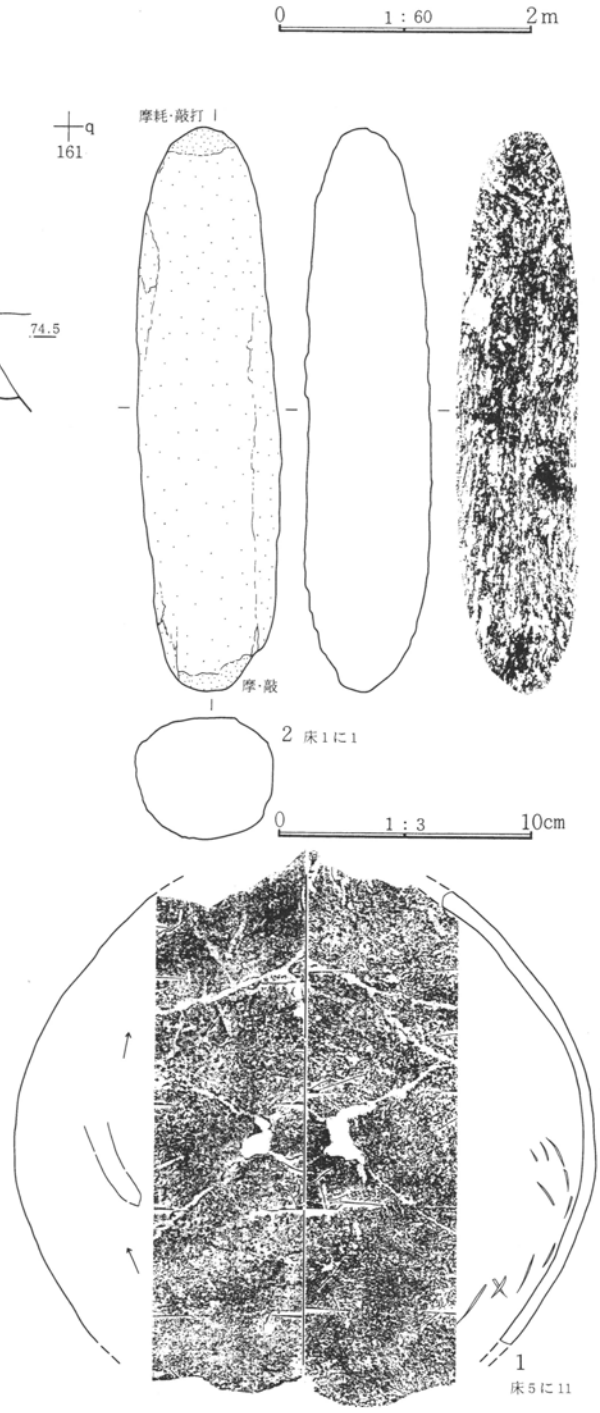
１、黒褐（10YR2/3）Ａｓ－Ａ混土。φ１～５㎜。密度高く、固い。上半分現盛土。
２、暗褐（10YR2/4）Ａｓ－Ａ含むもバラつきが目立つ。
３、黒褐（10YR2/2）Ａｓ－Ａφ１～２㎜散在。Ａｓ－Ｂ？混土柔らかい。粗。
４、黒褐（10YR2/2）白色パミスφ１～３㎜混入。小石・焼土ブロック含む。土は締っている。
５、黒褐（10YR2/2）４層にロームブロック混じる。
６、黒褐（10YR3/2）住58床層。ロームブロックブレンド。白色パミス少ない。それ程固くない。
７、黒褐（10YR3/2）６層にほぼ同じ。焼土粒含む。
８、黒褐（10YR3/2）地山ロームと７層のブレンド。ひどく乱されている。
９、明黄褐（10YR6/8）地山ローム。

第571図　住居跡58・205遺構図



第572図　住居跡59遺構図

1、黒褐（10YR3/2）小白色軽石・Ａｓ－Ａを含む。硬い。
2、黒褐（10YR3/2）小白色軽石・焼土粒・木炭粒を含む。締りあり。溝埋土。Ａｓ－Ｂ前代か。
3、黒褐（10YR3/2）焼土粒を含む。ロームブロック少し含む。硬い。締りあり。溝埋土。Ａｓ－Ｂ前代か。
4、黒褐（10YR3/2）小白色軽石を含む。硬い。
5、黒褐（10YR3/2）２層より密。焼土粒・軽石含む。締る。

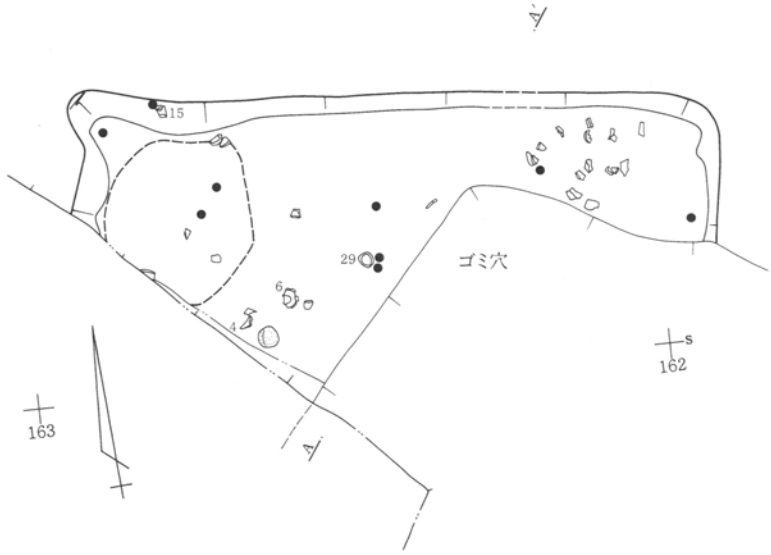


第573図　住居跡59遺物図

1．住居跡

住居跡57　（第568・569図、図版102・208）

位置はＲ大区ｑ163に、調査面はローム層漸移標高74.0m。重複は、下に住居跡58・205があり、同57が後出。規模は南北403cm、東西283cm、方向は中軸でＮ3°Ｅを測る。施設として東壁に竈、貯蔵穴は坑441と重なり



1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入るか不明。（可能性－入らない）締る。焼土・木炭粒入る。少しローム粒含む。

2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入らず。締る。焼土・木炭粒入る。少しローム粒含む。

3、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入らず。締る。少しローム粒含む。

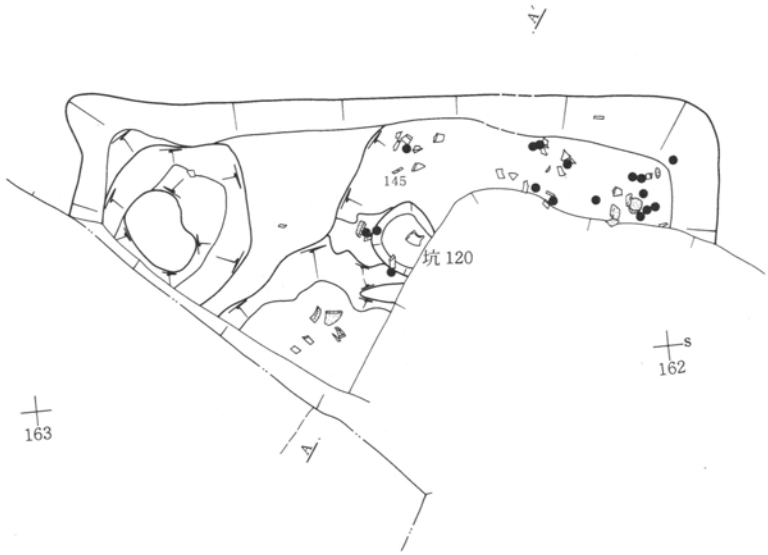
4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入らず。締る。還元気味粘性。4′は床層。

5、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入らず。締る。客土か。貼り土。礫含む。焼土粒やや多い。

6、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入らず。締る。貼り床、貼り土。礫含む。焼土粒やや多い。ローム粒・小ブロック入る。6′は黒褐(10YR3/1)Ａｓ－Ｂ入らず。締る。６層より黒ずむ。

7、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入らず。少し弱い。６層より黒ずむ。壁溝埋土か。

0　1：60　2m

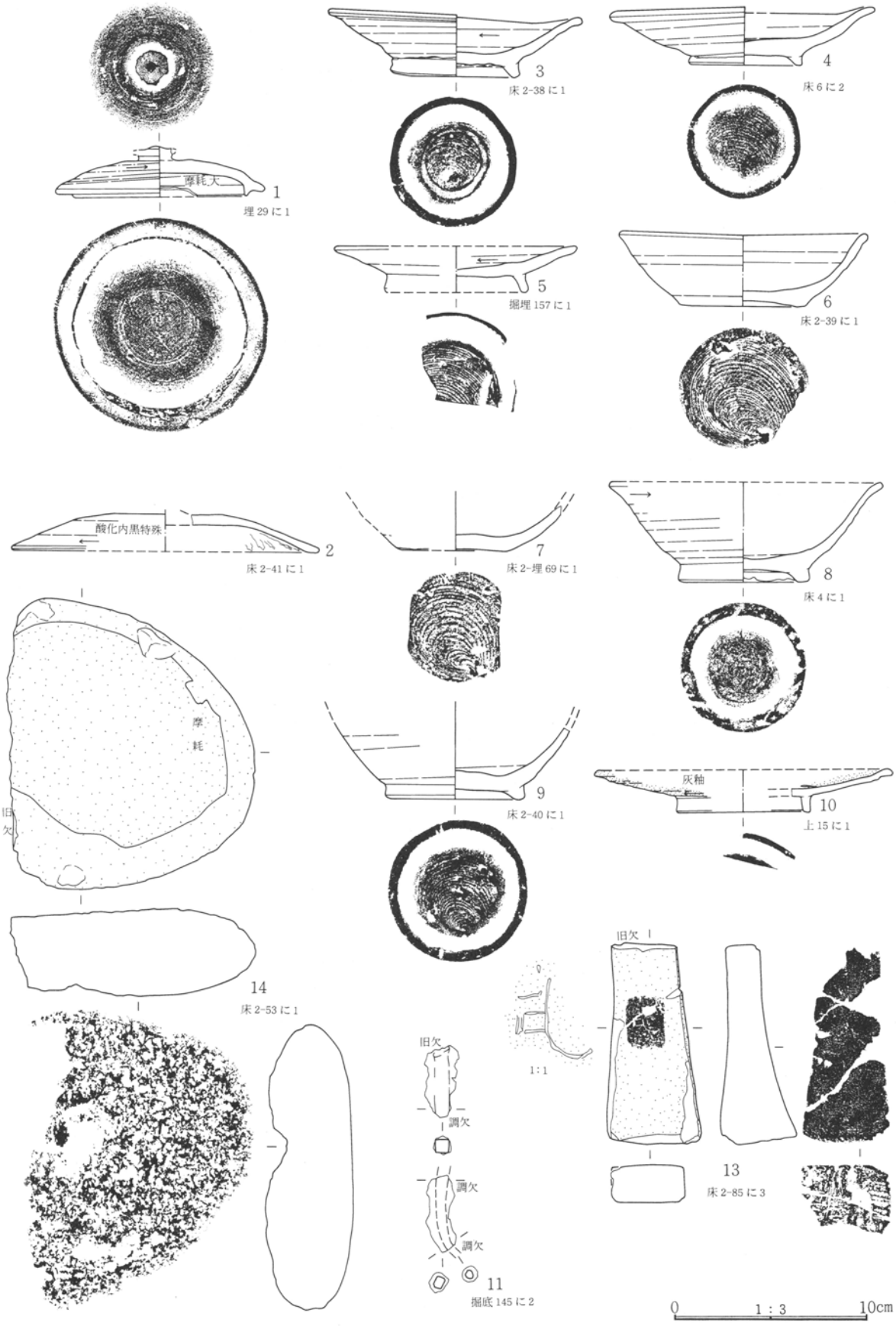


第574図　住居跡60遺構図

不明である。遺物は第569図があり、同１は10世紀中頃、同２は10世紀前半の個体である。同１は近完器であり、住居の機能時であろう。

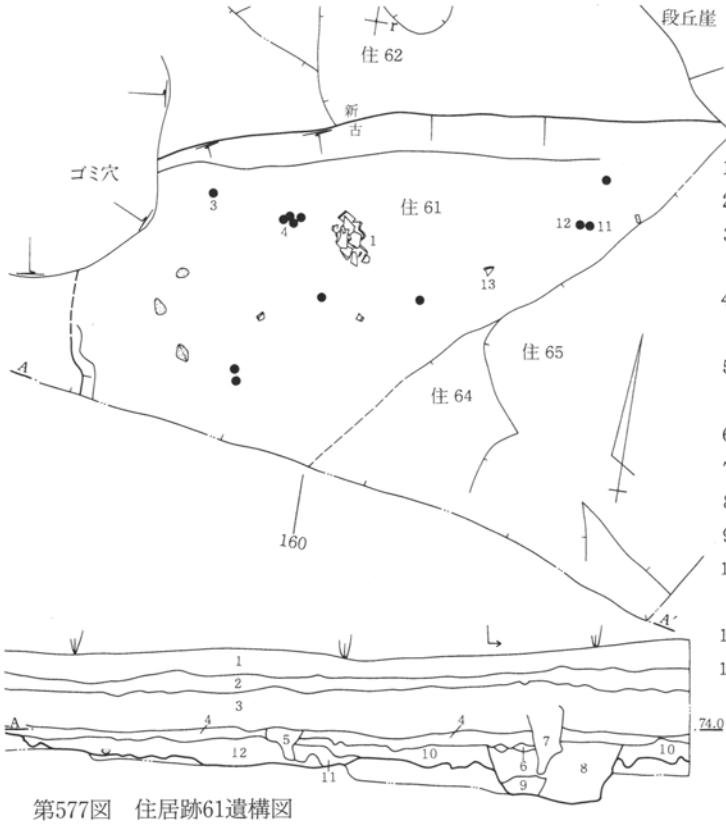
住居跡58・205　（第570・571図・図版102）

位置はＲ大区ｏｐｑ161～163に、調査面はローム層上面～ローム層漸移層標高74.0～74.3mである。重複は、その関係を第570図中



第575図　住居跡60遺物図

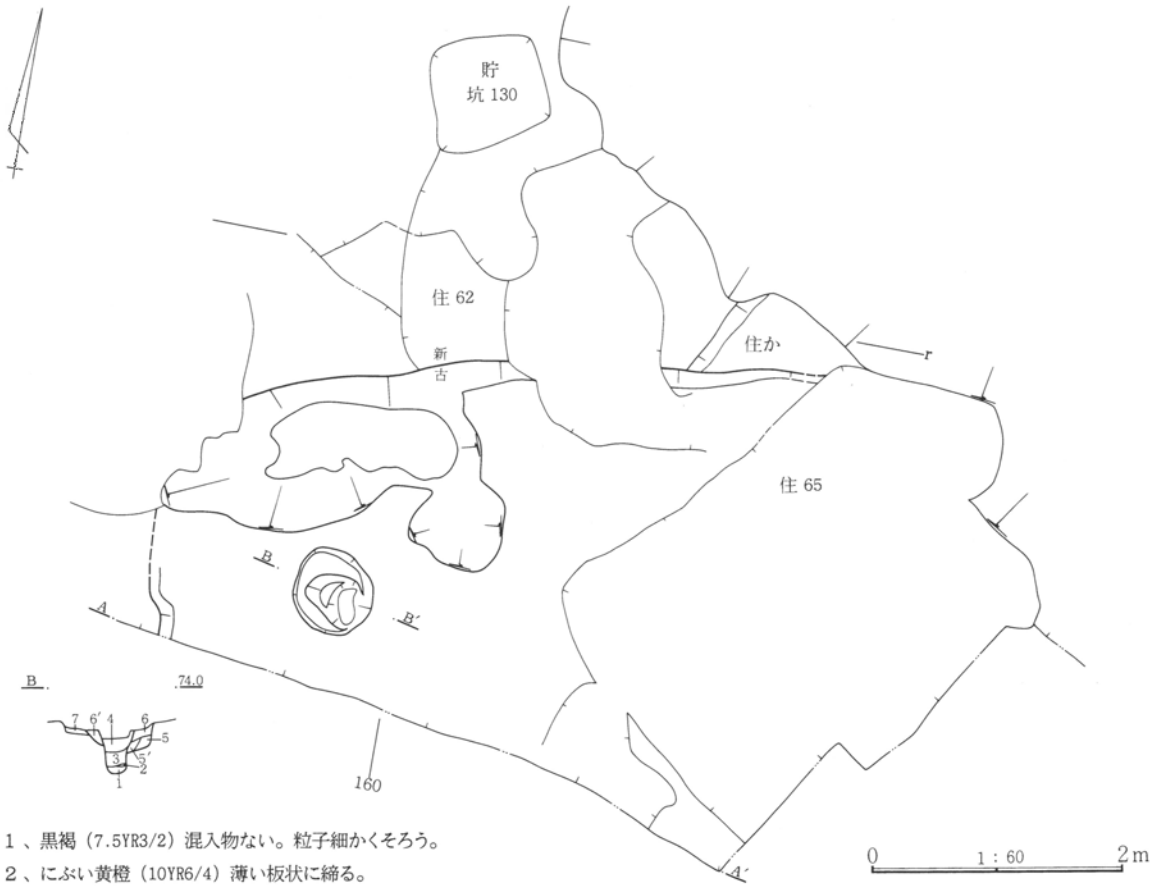
第576図　住居跡60遺物図



1、黒褐（10YR3/1）客土。現代で市道際。
2、黒褐（10YR3/1）As-Aを含む。
3、黒褐（10YR3/1）As-B・ローム小ブロックを含む。締りあり。
4、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小粒を多く含み、締る。As-Bを含むように見える。道路か。
5、にぶい黄褐（10YR5/4）4層に加え、少し焼土粒入る。上方は少し締る。
6、褐灰（10YR5/1）焼土・木炭粒が層をなす。
7、黒褐（10YR3/1）粗。根痕か。
8、黒褐（10YR3/1）少し軟らか。土坑か。
9、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム大ブロック入る。
10、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロック入り、少し軟らか。床面らしい面不明瞭。
11、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム粒少し含む。軟らか。
12、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム粒多く含む。

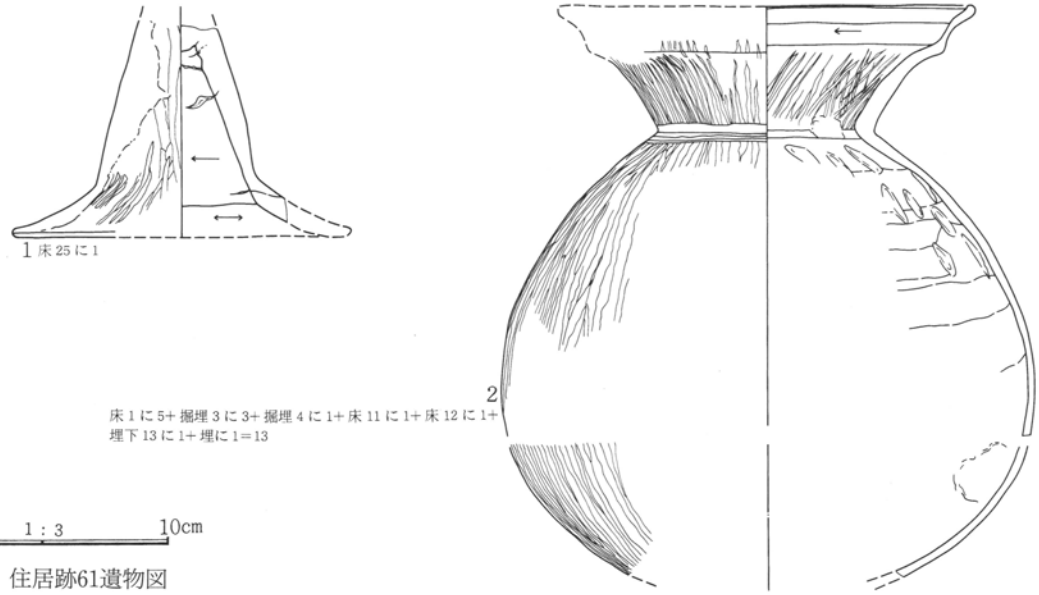
0　1：60　2m

第577図　住居跡61遺構図



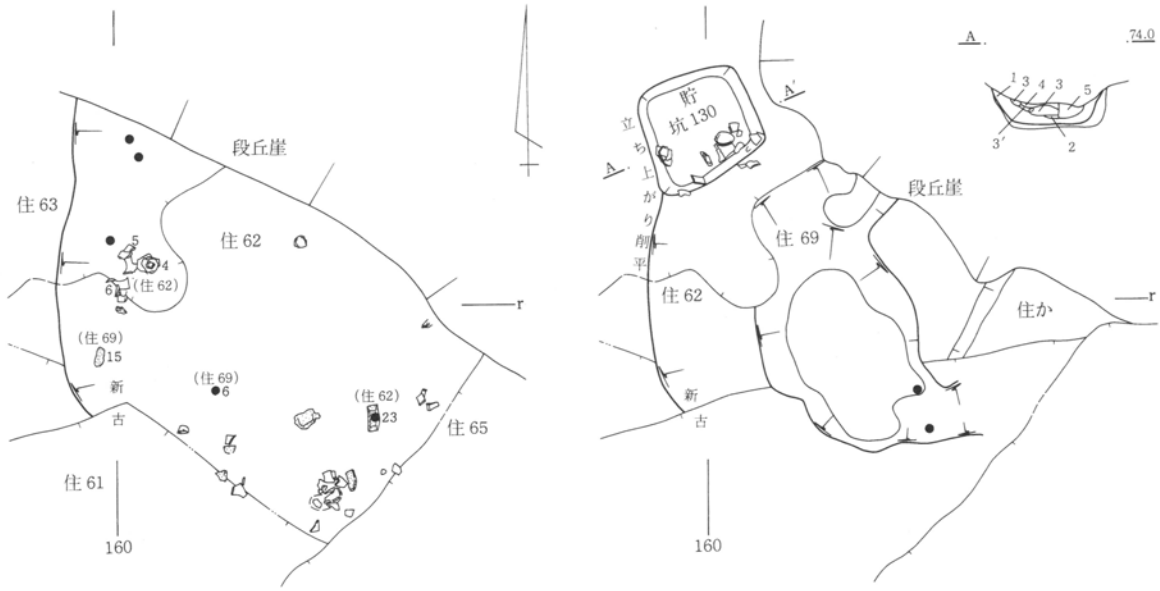
1、黒褐（7.5YR3/2）混入物ない。粒子細かくそろう。
2、にぶい黄橙（10YR6/4）薄い板状に締る。
3、黒褐（10YR2/3〜3/3）暗褐色土の混土。
4、暗褐（10YR3/3）ローム小ブロック含む。
5、暗褐（10YR3/3）暗褐色土中に黄褐色(10YR5/6)ロームブロックを多く含む。炭化物粒含む。5′はロームブロック小さく量も少ない。
6、暗褐（10YR3/3）暗褐色土中にローム粒・小ブロック多く含む。締る。6′は締りやや弱い。
7、黒褐（7.5YR3/2）ローム粒少量含む。

第578図　住居跡61遺構図



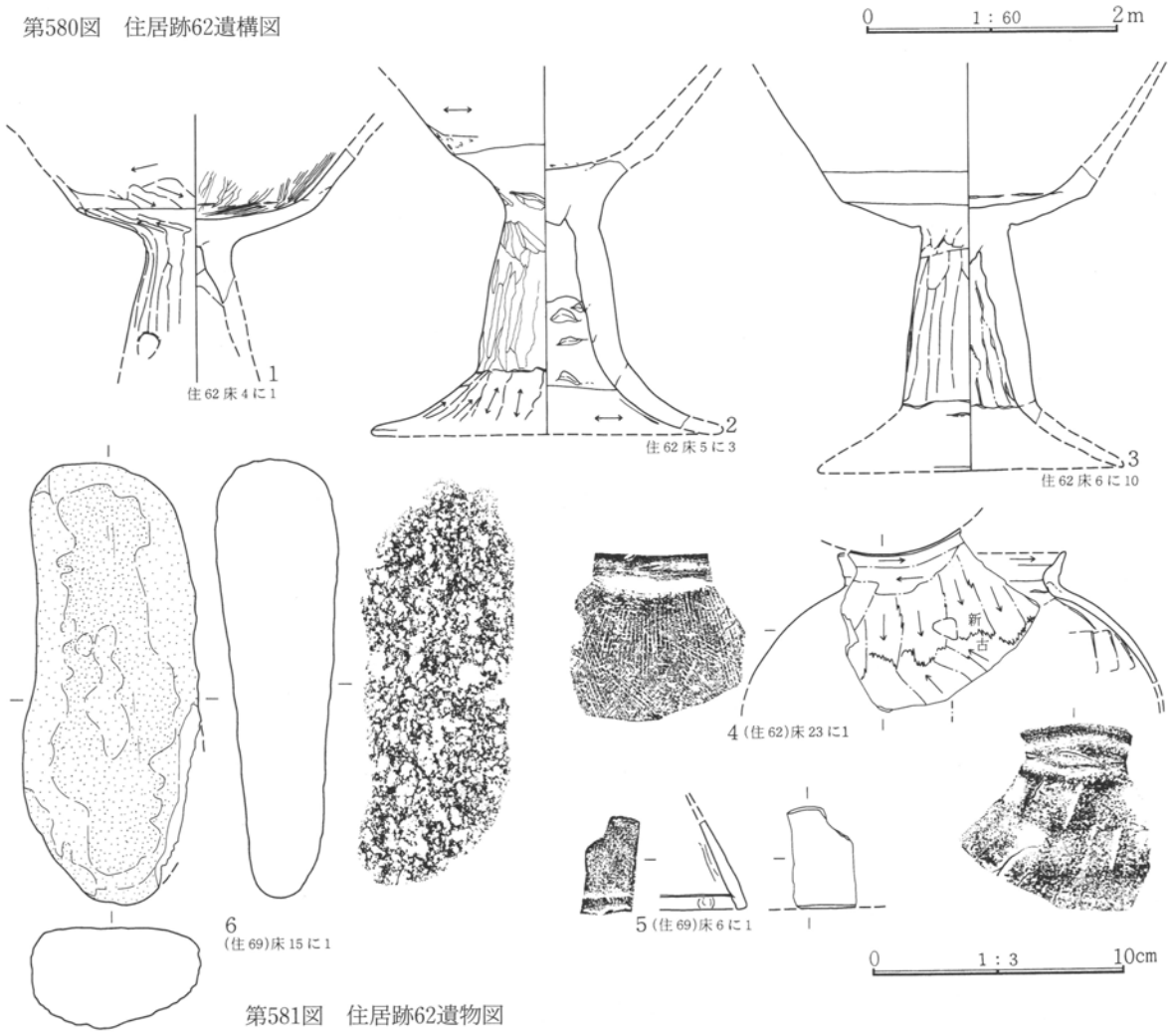
第579図　住居跡61遺物図

で示したほか溝跡145・147が後出する。施設として、炉跡が新・古で、柱穴ピ2〜4（ピ1455）がある。規模は南北810cm、東西900＋αm、方向は北壁とピ3―ピ4間を基にN23°Wを測る。柱穴間はピ2―ピ3芯間

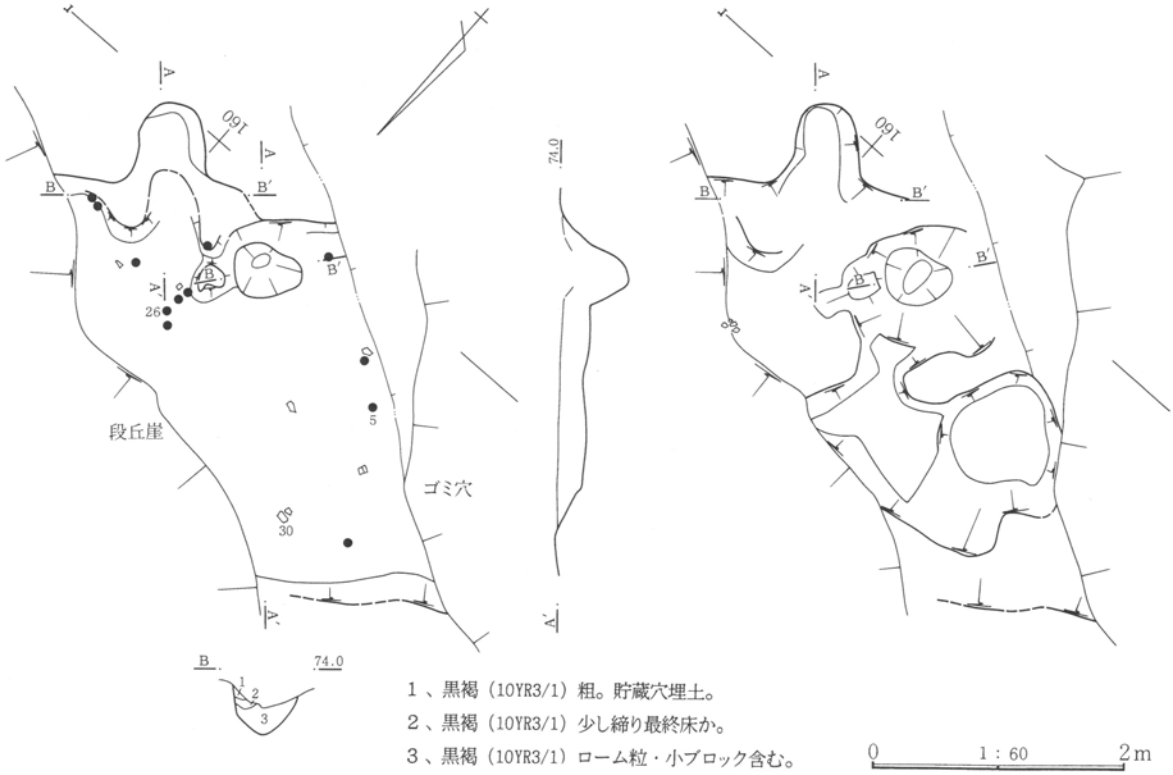


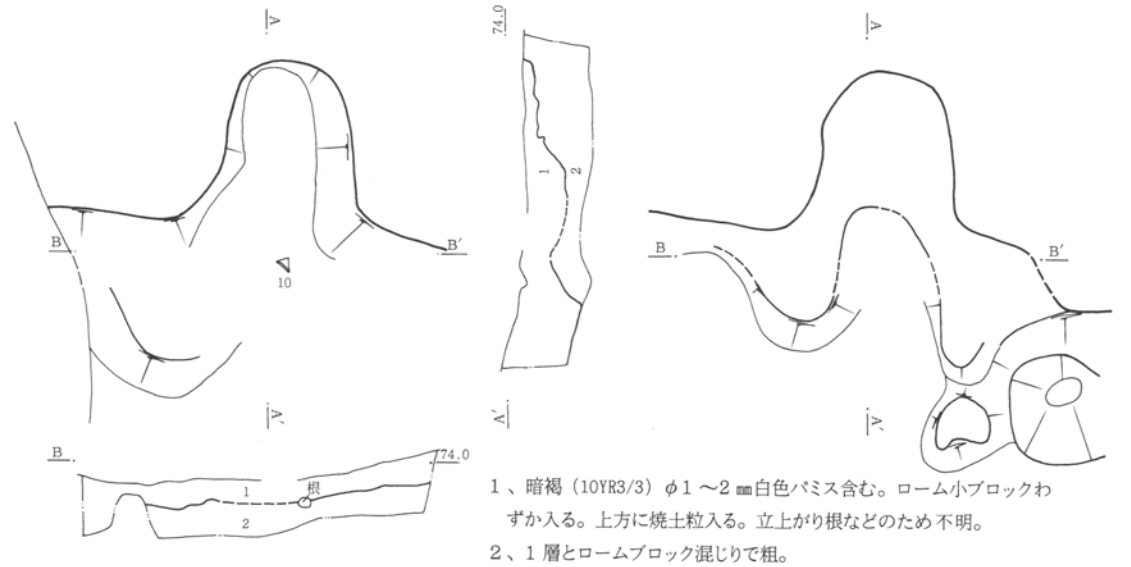
１、黒褐（10YR2/3）ローム粒・炭化物粒少量含む。締っている。
２、黒褐（10YR2/3）混入物少なく均質。締りやや弱い。
３、明赤褐（５YR5/6）焼土。３′は赤褐(2.5YR4/6)焼土。
４、暗褐（10YR5/4）焼土小ブロック・炭化物多く含む。
５、焼土ブロックを多く含む攪乱。

第580図　住居跡62遺構図

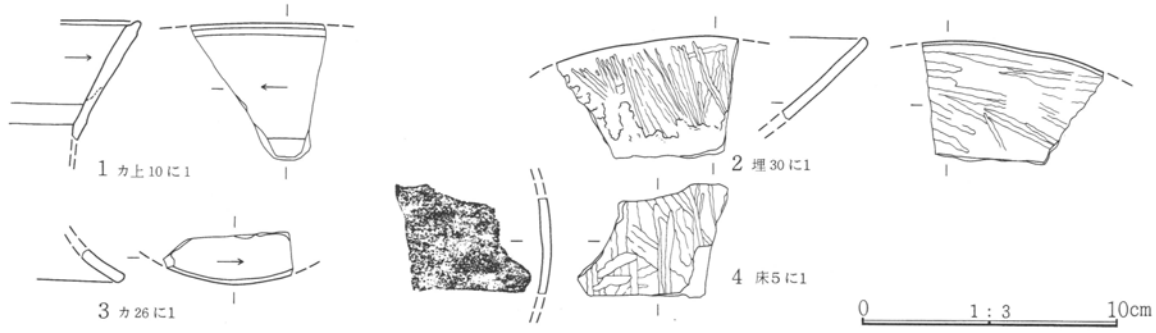


第581図　住居跡62遺物図

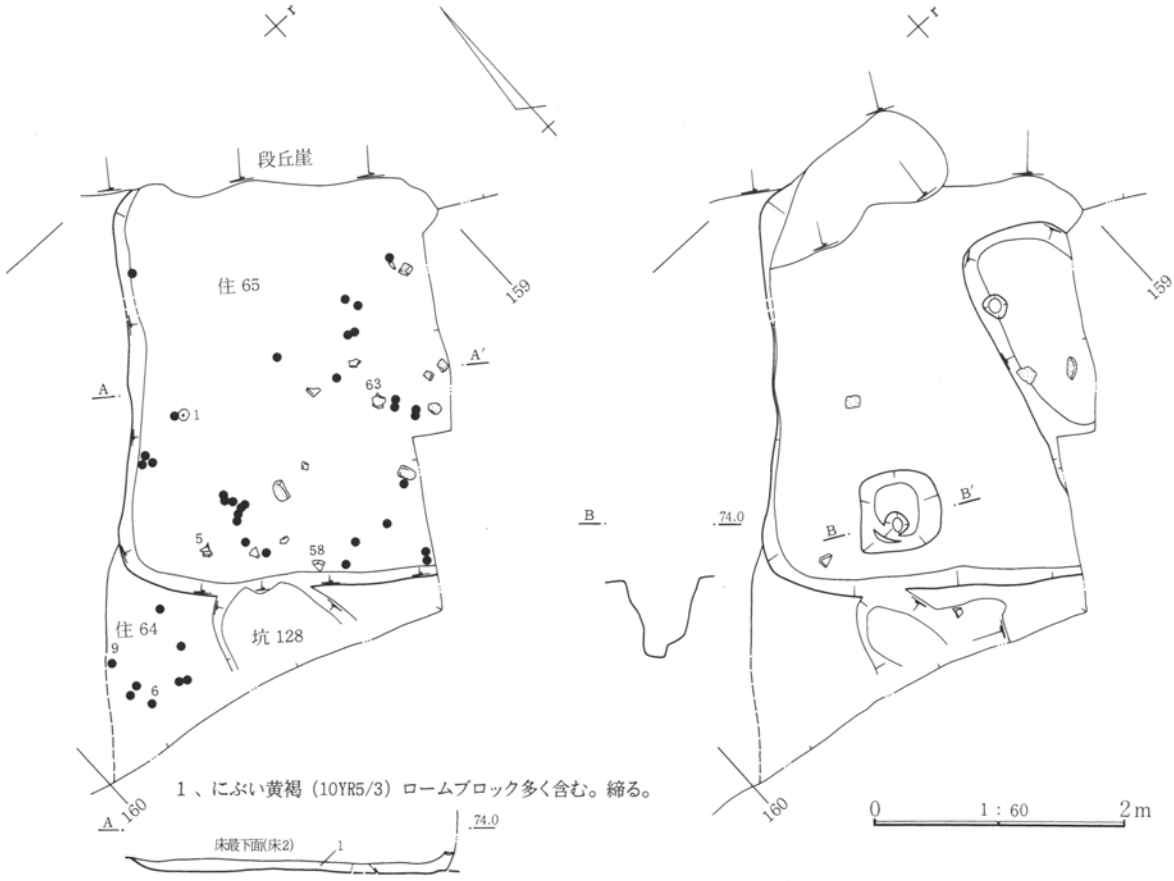




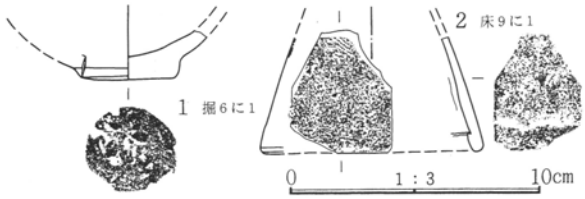
第582図　住居跡63遺構図



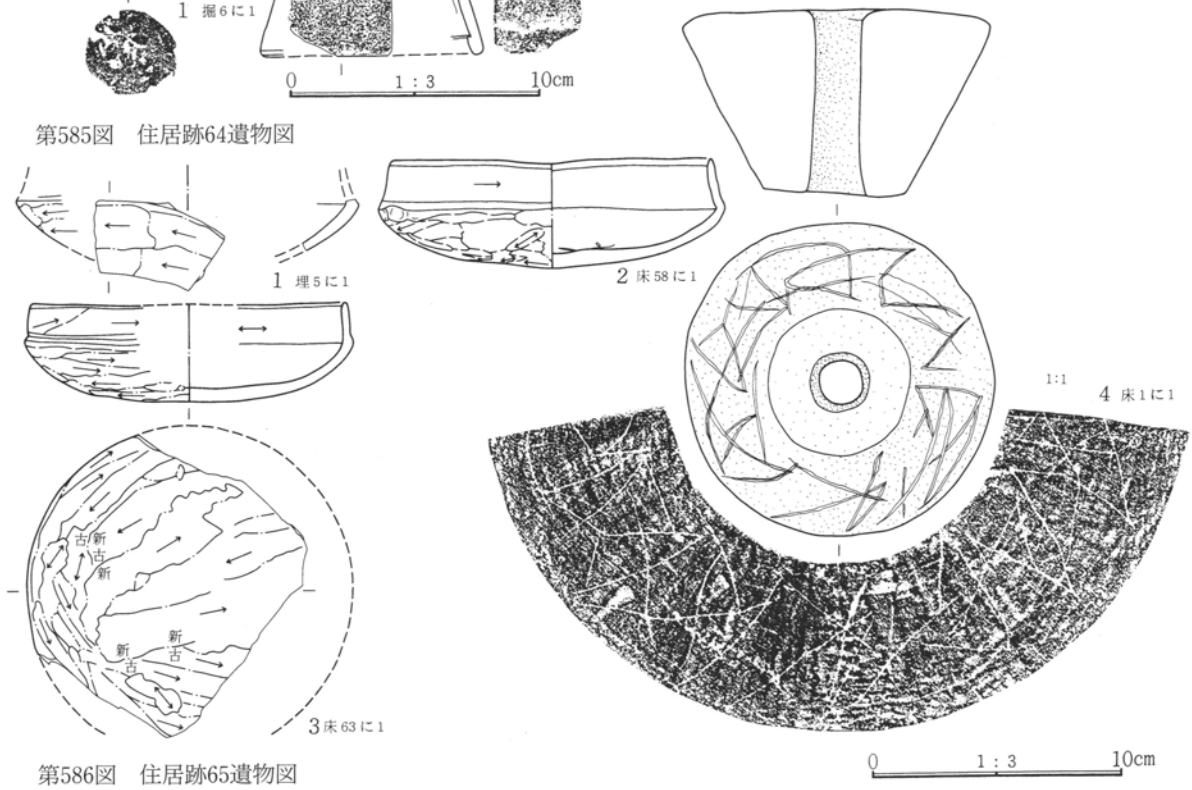
第583図　住居跡63遺物図



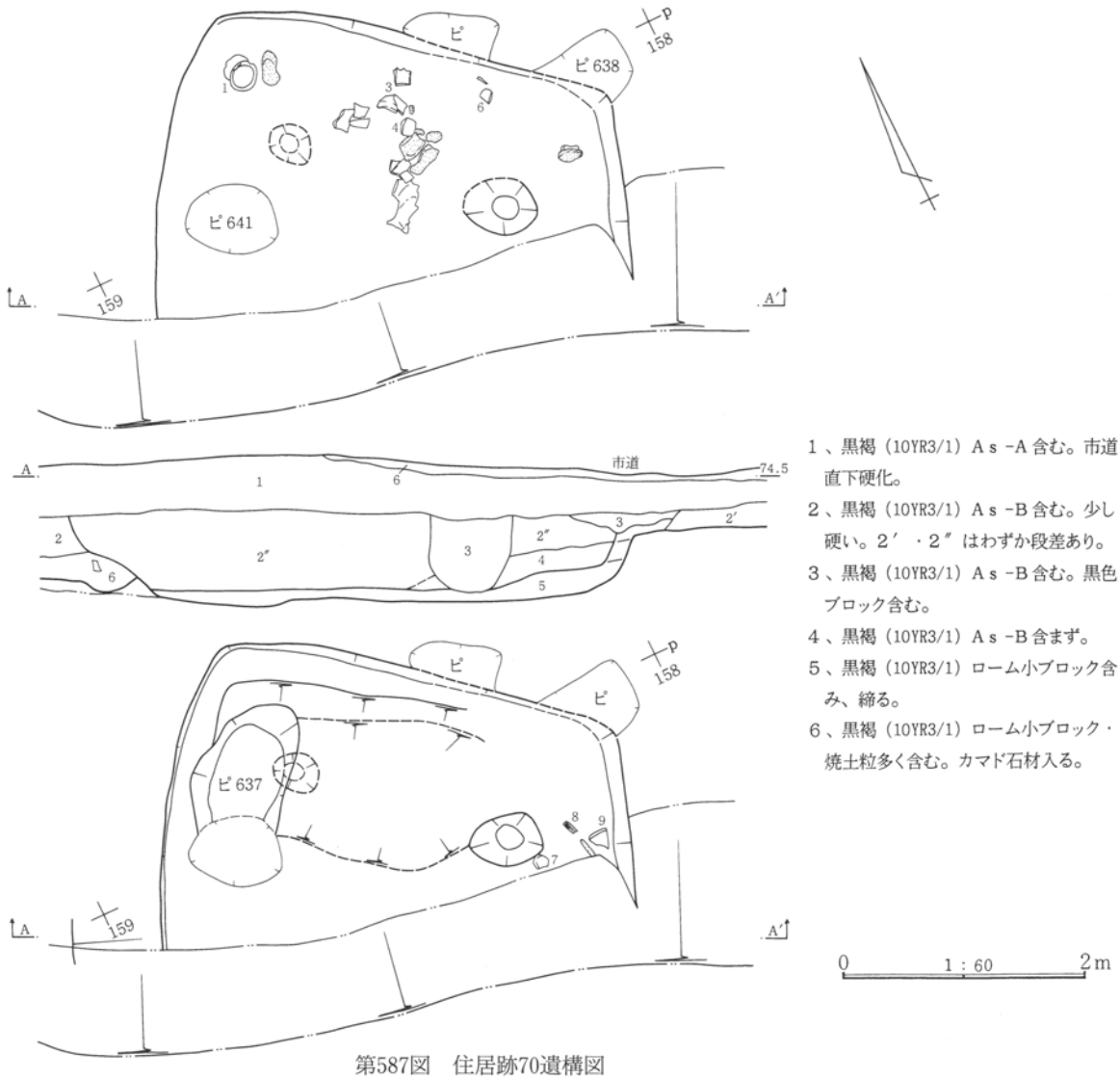
第584図　住居跡64、65遺構図



第585図　住居跡64遺物図



第586図　住居跡65遺物図



第587図　住居跡70遺構図

445cm、ピ３－ピ４芯間450cmである。断面Ｂは、当住居の規模が大き過ぎ、調査終了ぎわで存在に気付いたため図上作図を加え、破線がそれである。遺物は図示しなかったが、古墳時代前期である。

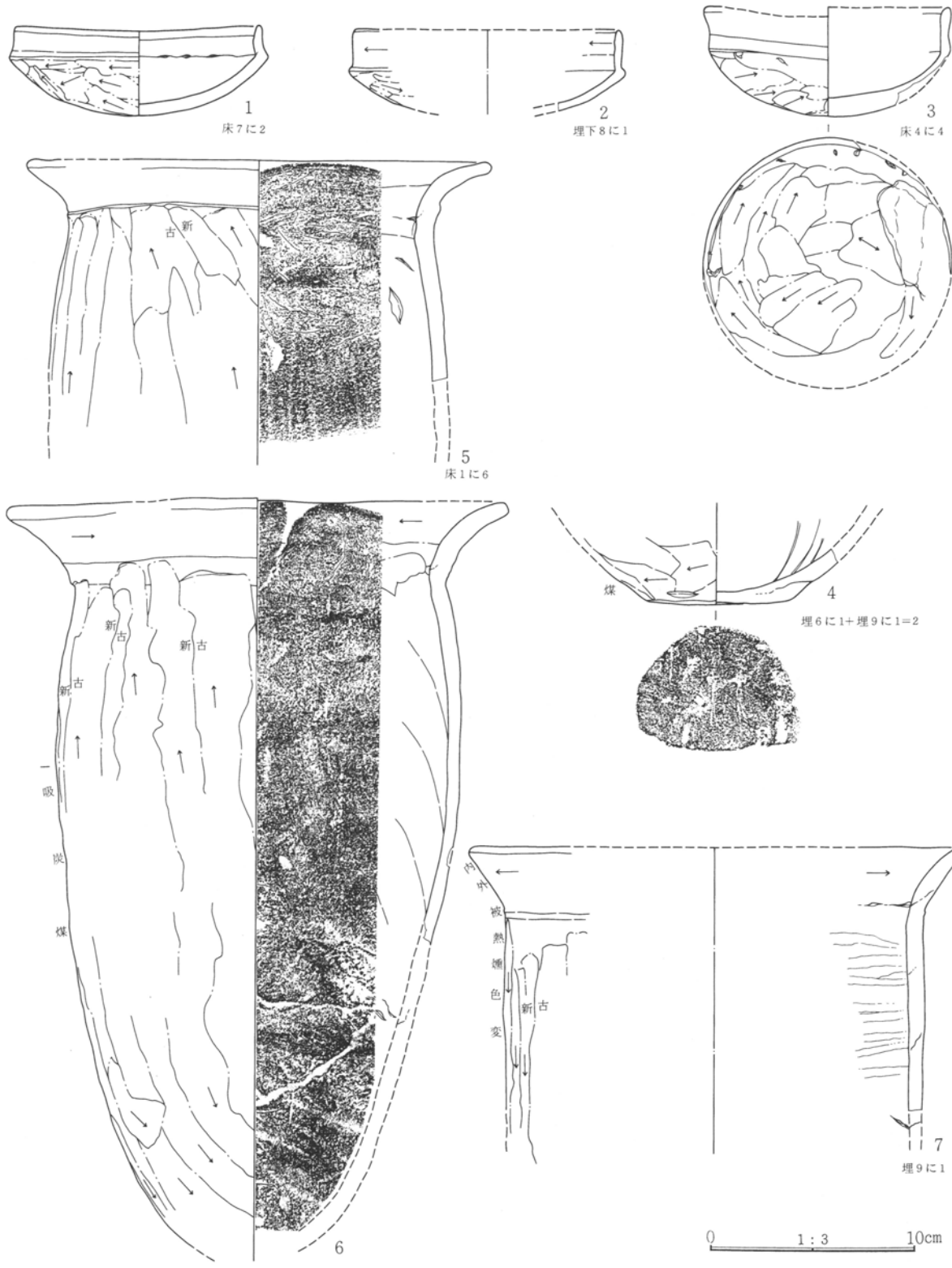
住居跡59　（第572・573図、図版102・208）

位置はＲ大区ｑ162に、調査面はローム層漸移からローム層上面である。重複は溝跡144が後出してあるが住居跡202・203との関係は不明瞭。規模も溝跡144が住居跡59西壁を切るため不明であり、東西175＋αcm、南北117＋αcmを測る。遺物は床出土の第573図１に古墳時代前・中期の壺があり、住居機能も同期か。

住居跡60　（第574・575・576図、図版102・208・209）

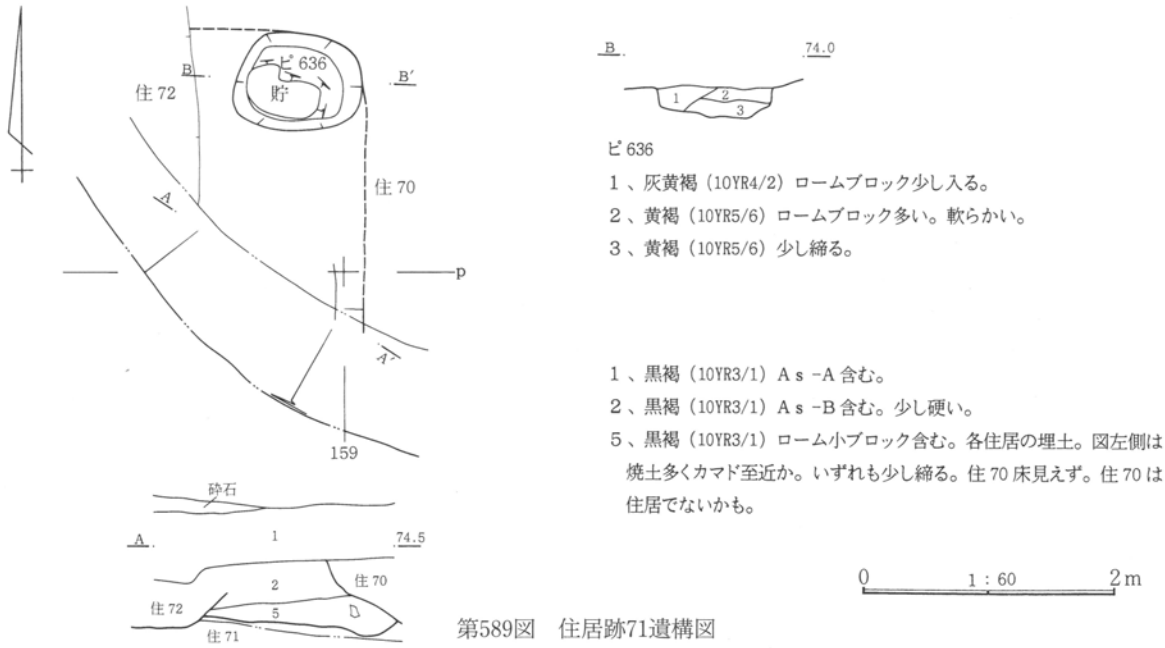
位置はＲ大区ｓ161・162に、調査面はローム層漸移標高74.0mである。重複は旧農道が上方にある。規模は南北243＋αcm、東西515cm、方向は北壁を基にＮ4°Ｅを測る。施設は貼床が厚く、第574図上が床１、中が床２（下層床）である。掘方に土坑がある。遺物は９世紀後半で、機能時も同期。前代遺物も埋土にある。

住居跡61　（第578・579図、図版102・103・209）

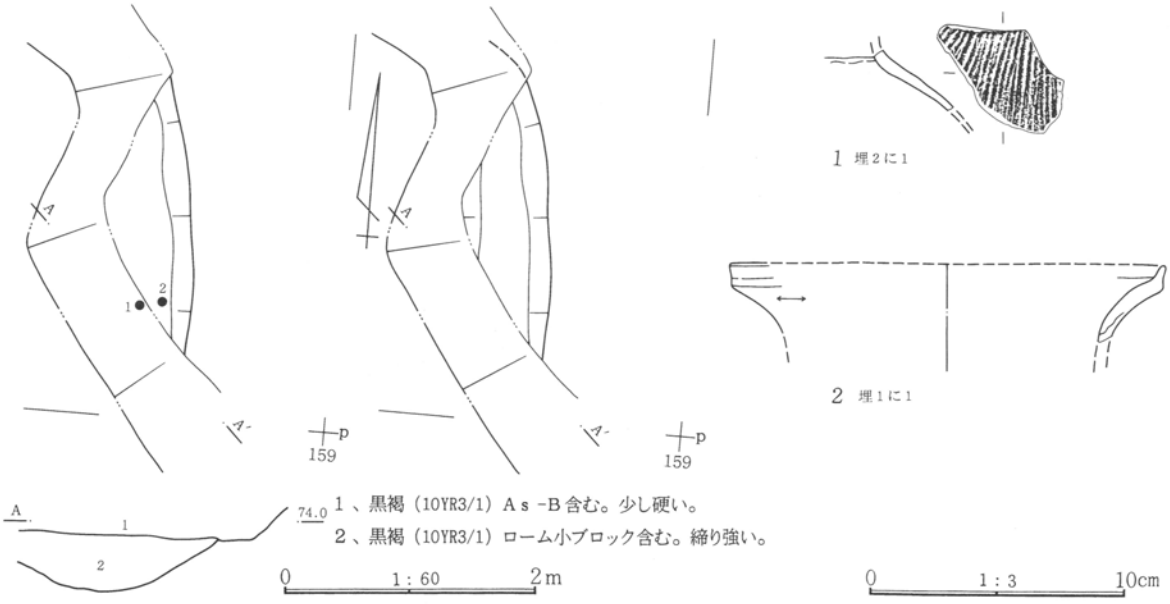


第588図　住居跡70遺物図

位置はＲ大区ｑｒ159・160に、調査面はローム層漸移層標高74.0mである。重複は後出の住居跡62・64・65があるが、複雑であまり推奨できない。規模は南北で320＋αcm、東西520＋αcm、方向は北壁を基にするとN10°31′Wを測る。施設は掘方上において柱穴らしき小穴、前代の倒木にかかるため不明瞭な土坑状凹みカ所がある。遺物は古墳時代前期の第579図1・2があり、住居機能時も同期。



第589図　住居跡71遺構図



第590図　住居跡72遺構図

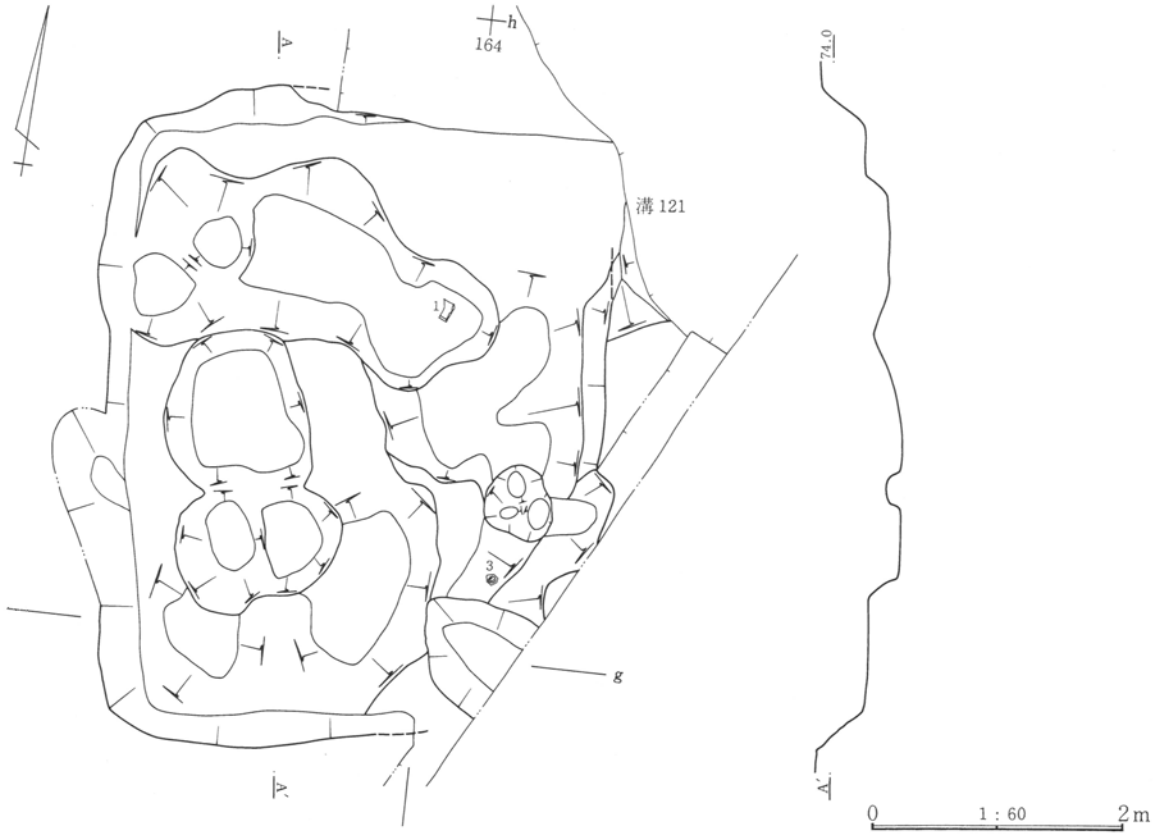
第591図　住居跡72遺物図

住居跡62　（第580・581図、図版103・209）

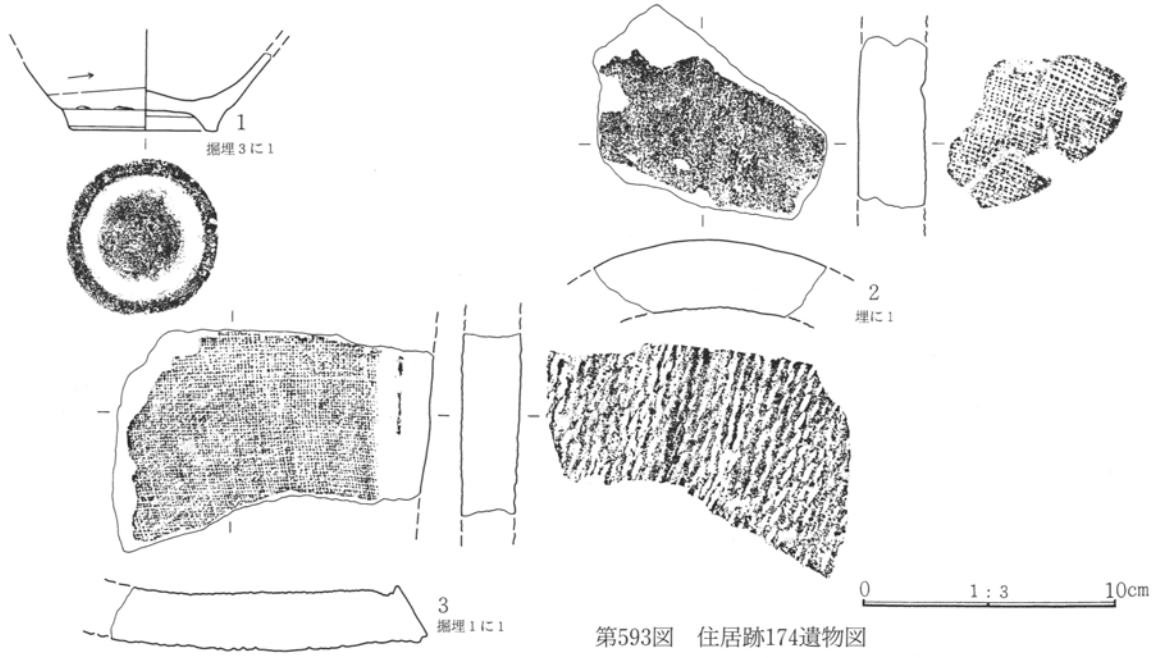
位置はR大区ｑｒ159・160に、調査面はローム層漸移で標高74.0m。重複は後出して住居跡61・63・65がある。同地およびPライン以北は、調査前に竹林であったため30cm程掘下た調査面は相当に荒れていた。そのため住居跡61と同65の重複関係は推奨できないし住居跡62の西壁も明確な状態ではなかった。施設として貯蔵穴らしき坑130があり、掘方には倒木痕がかかる。遺物は古墳時代前期の個体で、住居も同期。

住居跡63　（第582・583図、図版103・209）

位置はR大区ｑｒ159・160に、調査面はローム層で漸移標高74.0m、竹林による面荒れあり。重複は先行の住居跡62がある。規模は南北305＋αcm、東西295cm、方向は東壁でN31°45′W。施設は、東壁に竈、右袖下寄に貯蔵穴らしき小穴、掘方に床下坑。遺物は第583図1のみが9世紀代の土師器甕片で、住居機能も同期か。



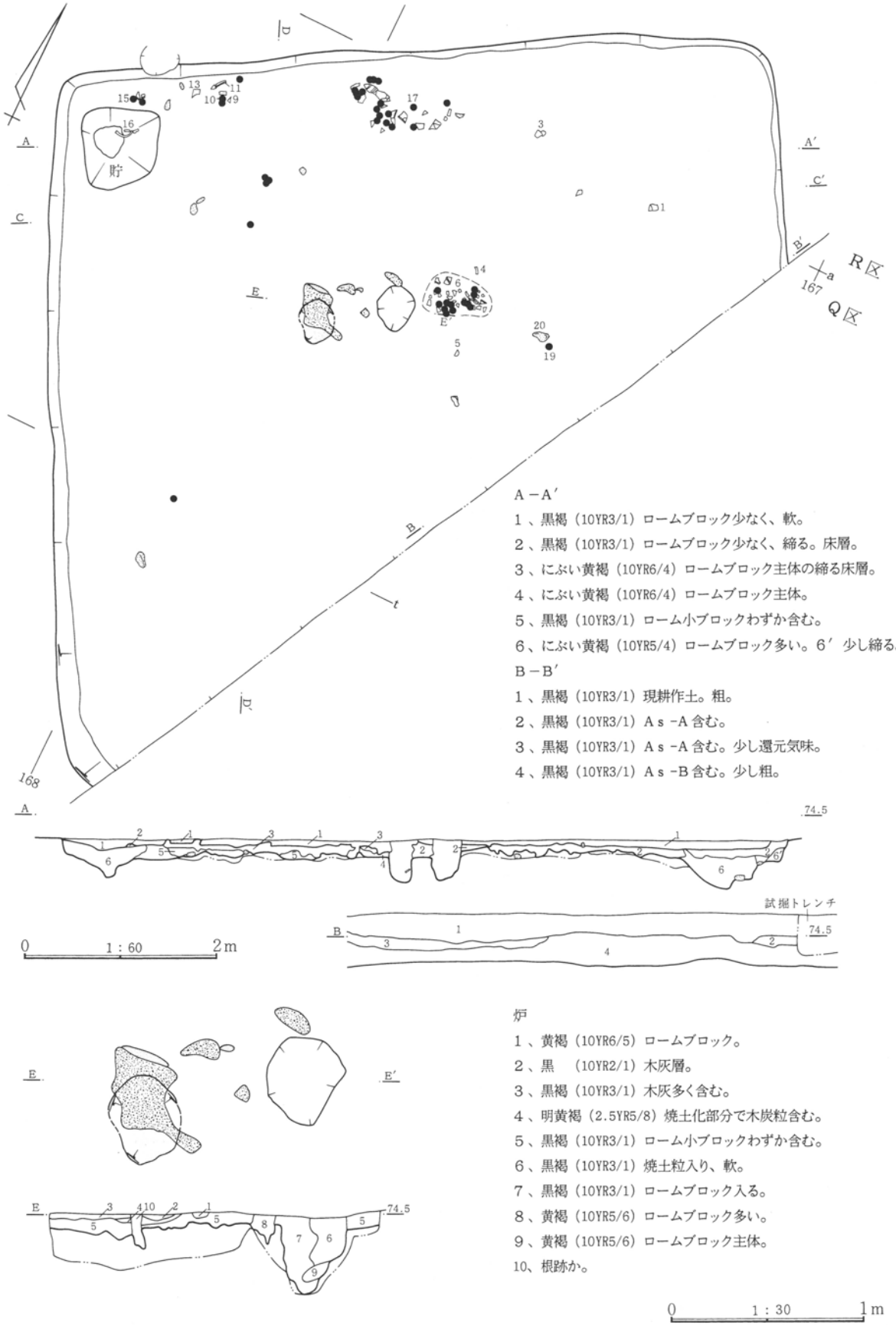
第592図　住居跡174遺構図



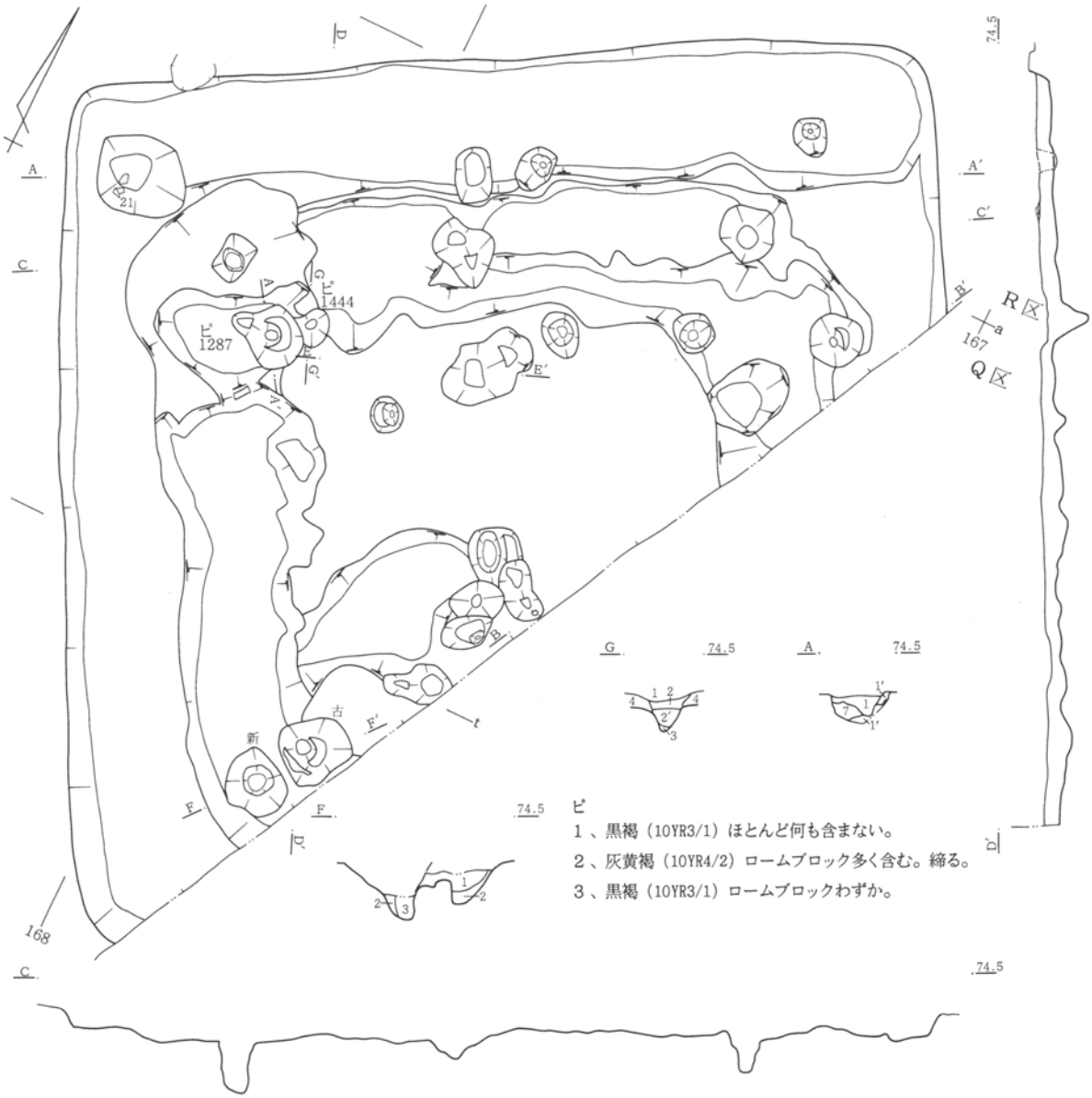
第593図　住居跡174遺物図

住居跡64　（第584・585図、図版103・209）

位置は、R大区ｑ159にあり、調査面はローム層で漸移標高74.0m。調査前竹林のため面荒れあり。重複は、同61を切り、同65に切られるが推奨できない。施設として、住居跡65内に貯蔵穴らしき穴跡が、掘方に坑128が同64に伴なう床下の土坑であるのか不明であったが、関連の広がりを認めた。遺物は、第585図２に古墳時代前期の個体があり、住居機能も同期か。



第594図　住居跡176遺構図



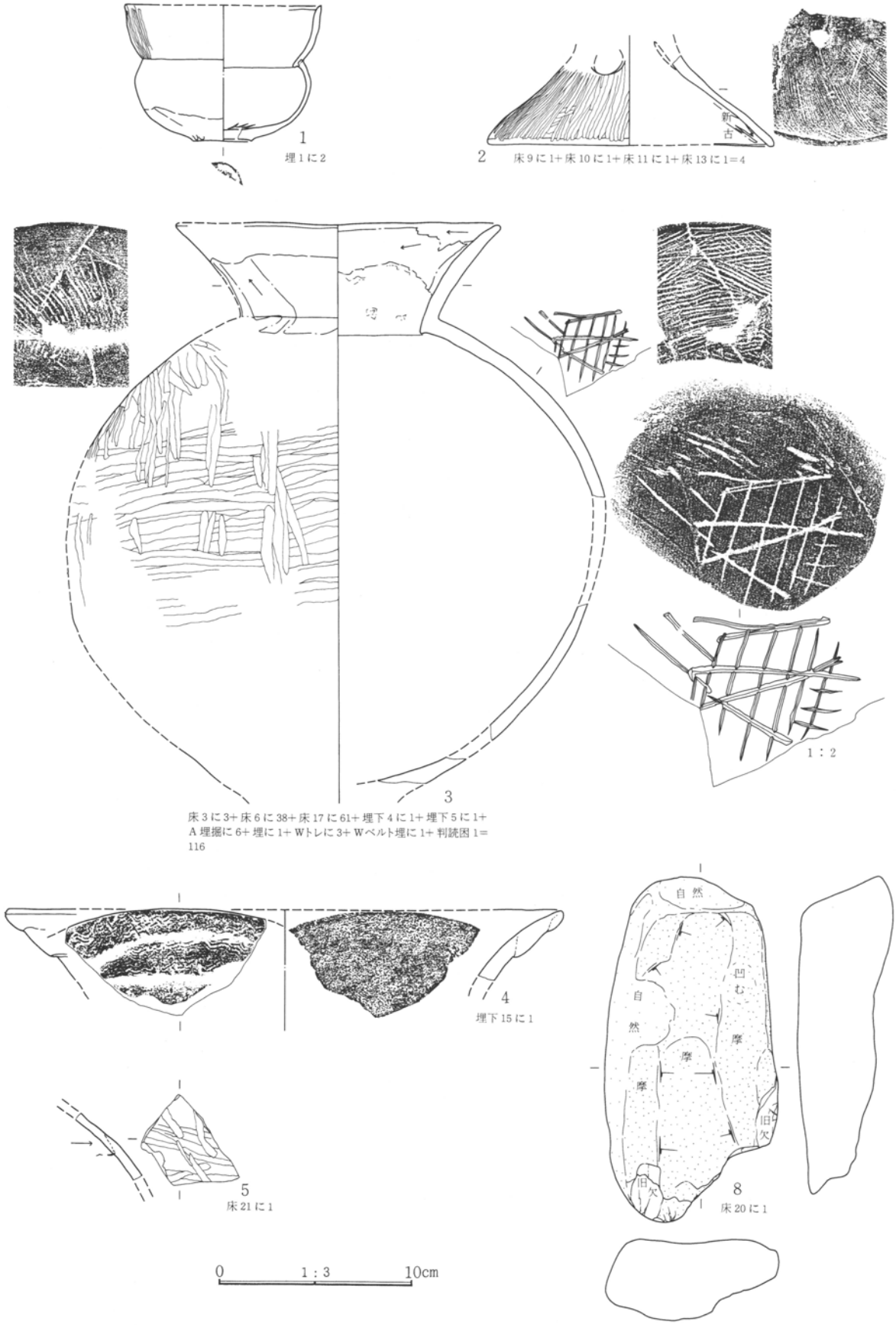
第595図　住居跡176遺構図

住居跡65　（第585・586図、図版103・210）

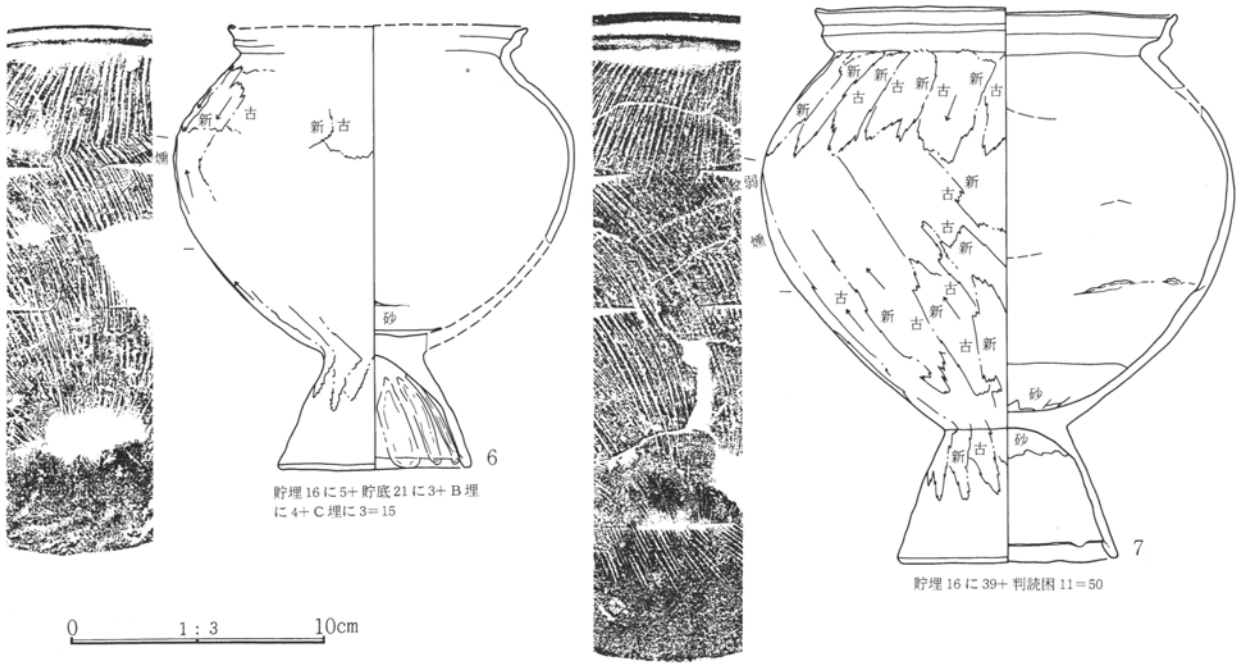
住居跡64に北接。床層に上・下（床２）があり、掘方に浅い凹みが東寄りにある。規模は南北319＋αcm東西268＋αcm、方向は西壁を基にＮ41°45′Ｅを測る。遺間は６世紀末前後で、機能時も同期である。

住居跡70　（第587・588図、図版104・210）

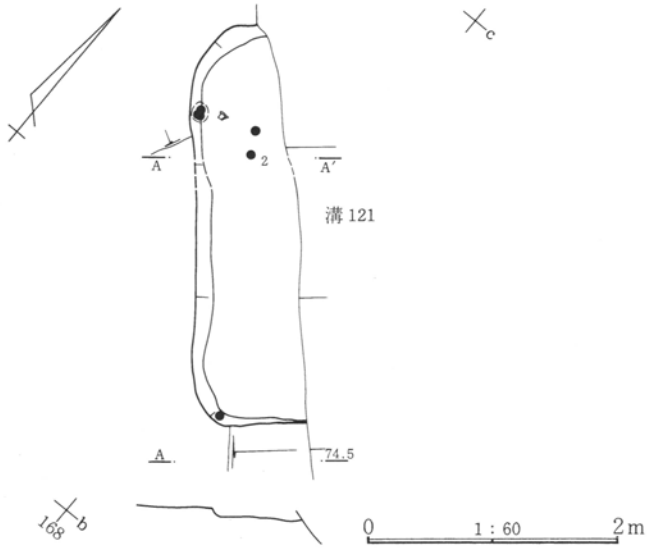
位置はＲ大区ｏＰ158に、調査面はローム層で標高74.0m。重複は、ピットはピ641が後出するほか新古不明。施設は小穴と掘方の凹みがある。工事区のため確認不足。規模は、南北250＋αcm、東西392＋αcm、北壁を基にＮ39°30′Ｅを測る。遺物は６世紀後半の一括資料があり、住居機能時も同期である。



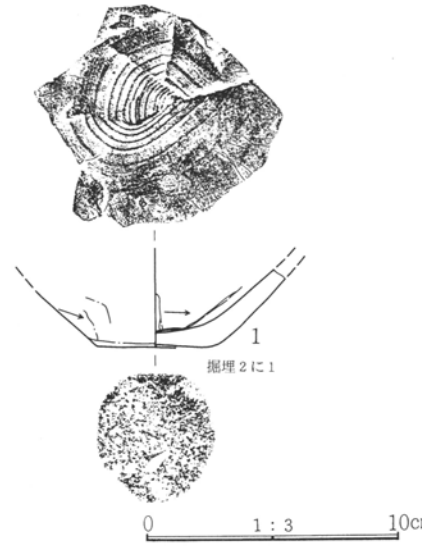
第596図　住居跡176遺物図



第597図　住居跡176遺物図



第598図　住居跡177遺構図



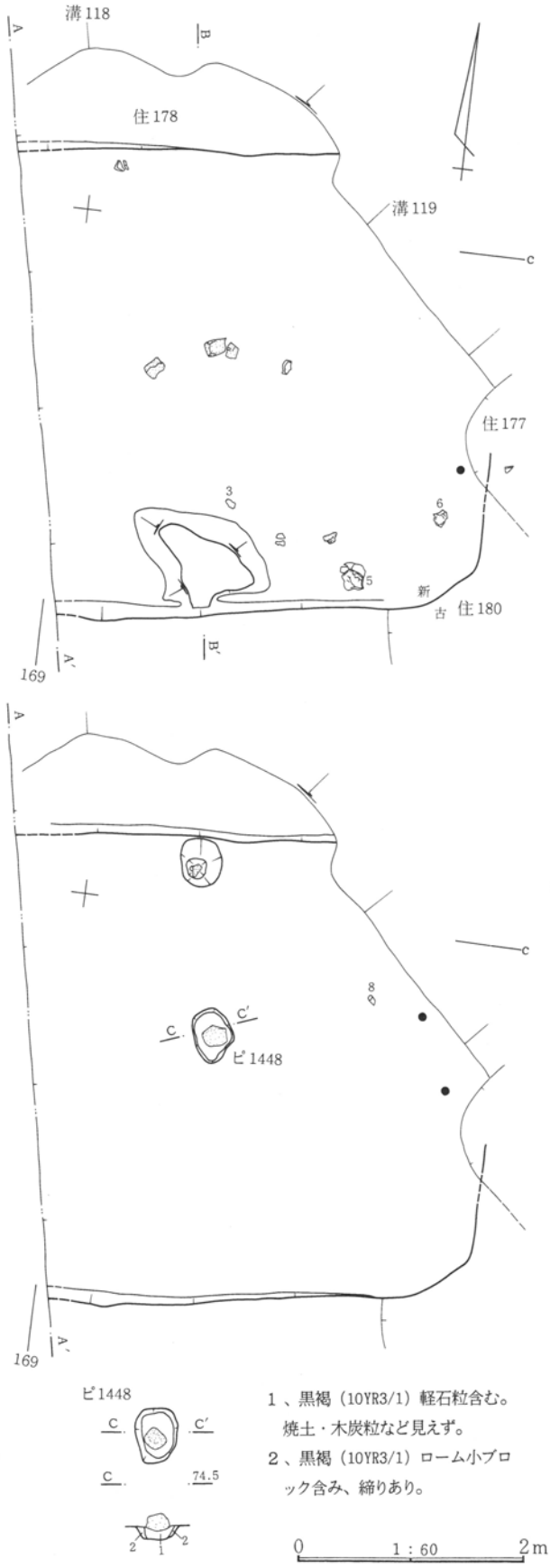
第599図　住居跡177遺物図

住居跡71　（第589図、図版104の住居跡70右側）

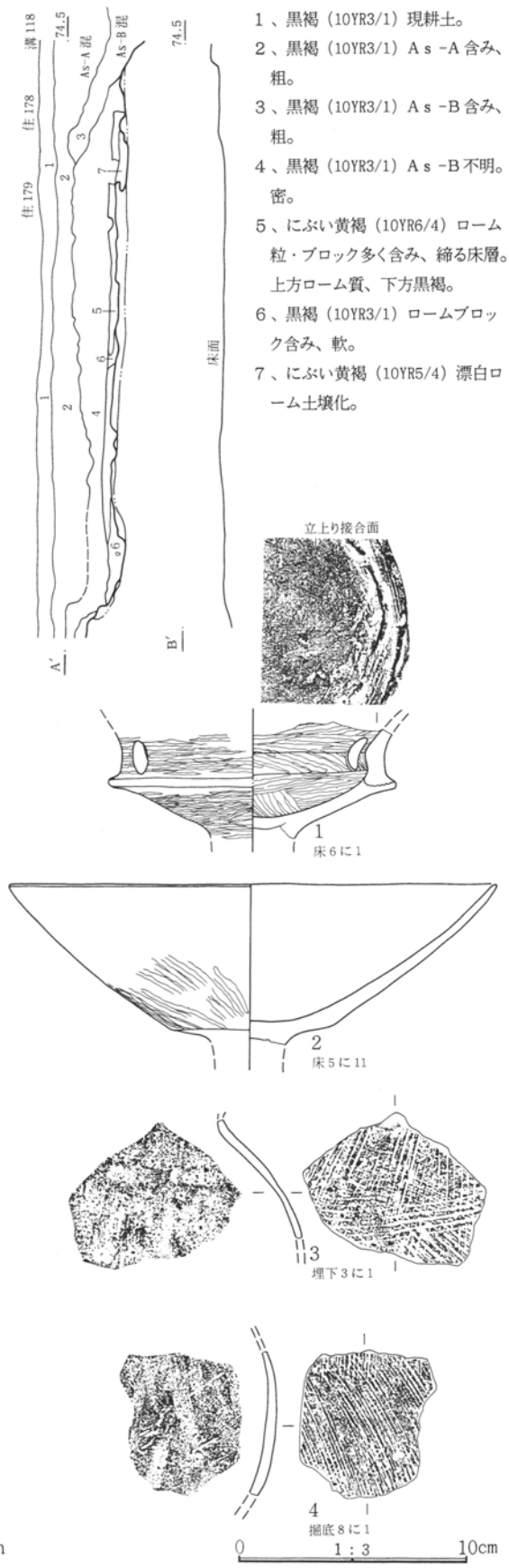
位置はＲ大区ｏＰ158・159に、調査面はローム層で標高73.8m。調査は工事区。重複は住居跡70・同72に切られる。施設に貯蔵穴がある。規模は南北235＋αcm、東西140＋αcm。方向はおよそN1°Eである。遺物は、微弱で遺構の重複からすれば古墳時代後期以前、６世紀後半以前であろう。

住居跡72　（第590・591図、図版210）

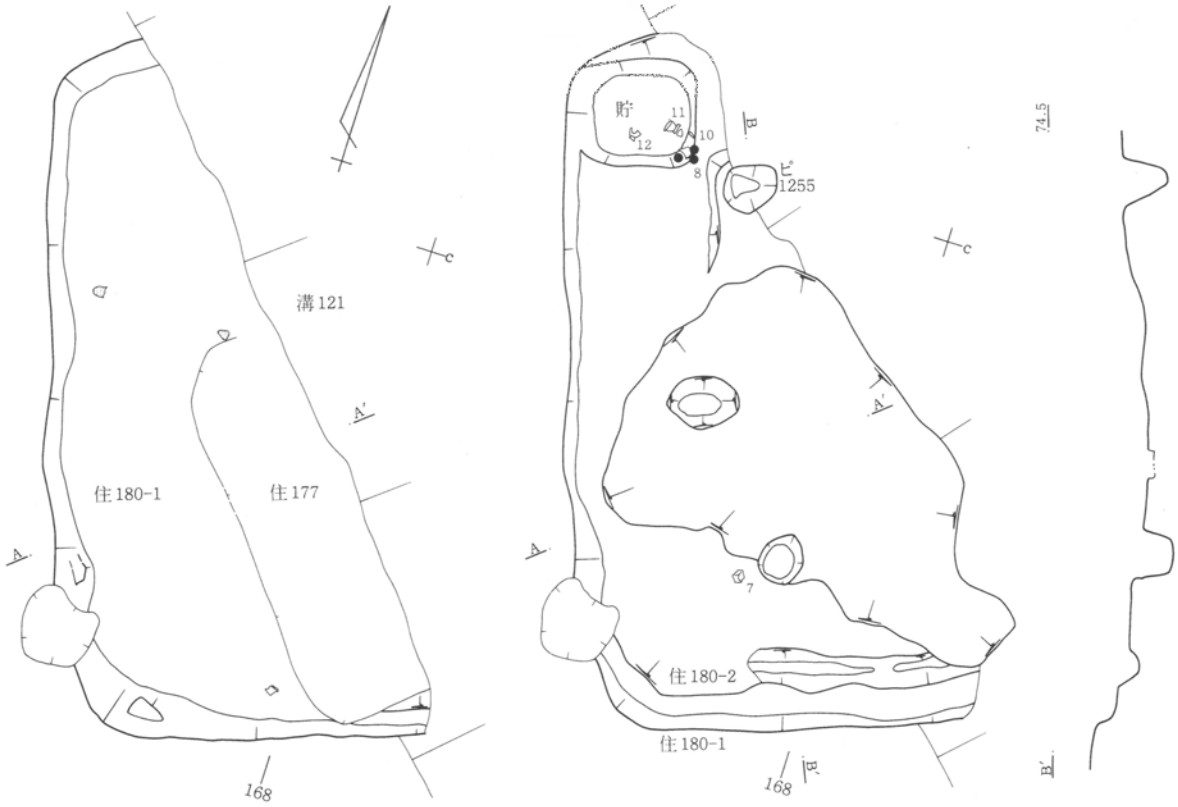
位置はＲ大区Ｐ159に、調査面はローム層で標高73.8m。調査は工事区。重複は住居跡71を切る。施設は掘方に溝状の凹みがある。規模は、南北220＋αcm、東西70＋αcm、方向は東壁でN8°Wを測る。遺物は、第591図のとうり少なく、同図２の個体が古墳時代前・中期の土師器壺片であるので住居機能時と同期であろう。



第600図　住居跡178・179遺構図



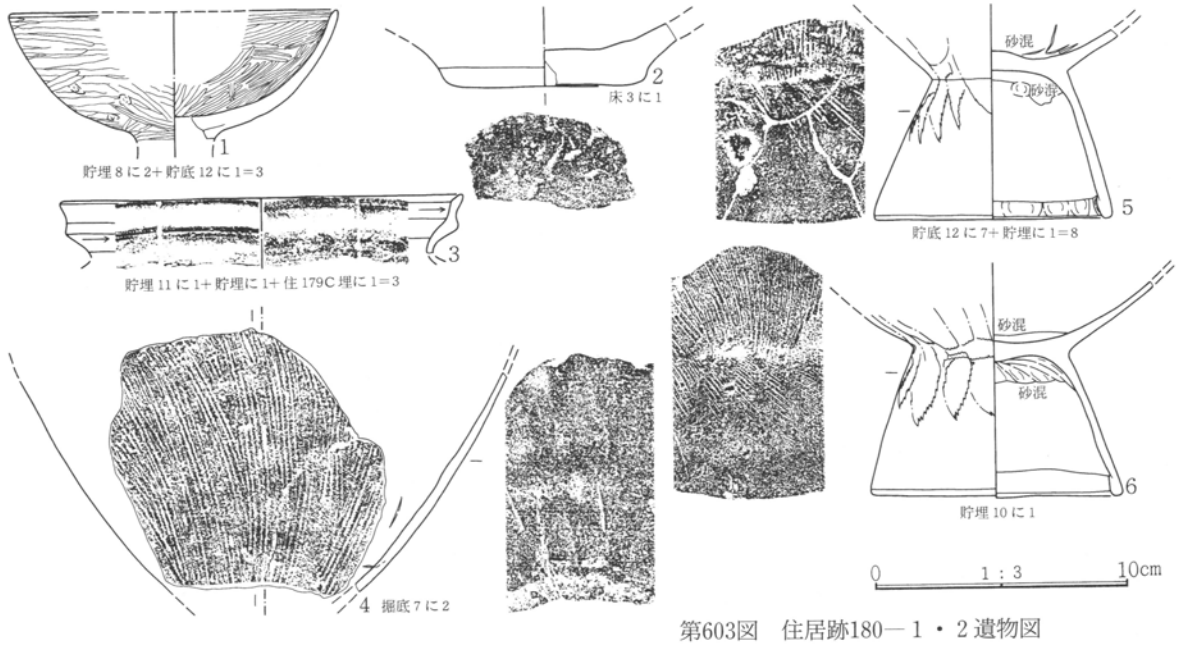
第601図　住居跡179遺物図



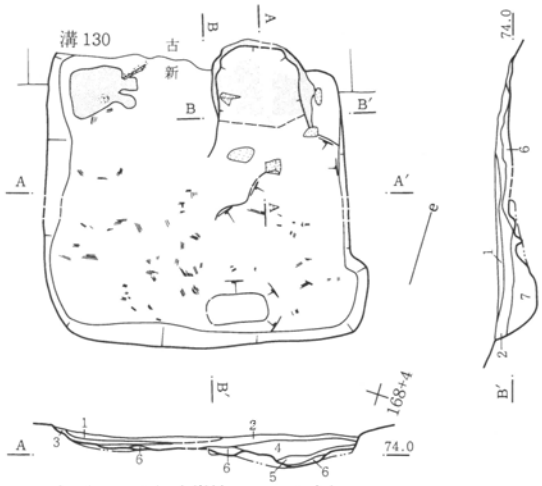
1、黒褐（10YR3/1）ローム小粒含む。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。締る床。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。軟。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。上面締る。
6、褐　（10YR4/4）ローム黒ずむ。土壌化。6′はさらに黒ずむ。
7、黒褐（10YR3/1）ローム粒含まず。
8、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主。

0　1：60　2m

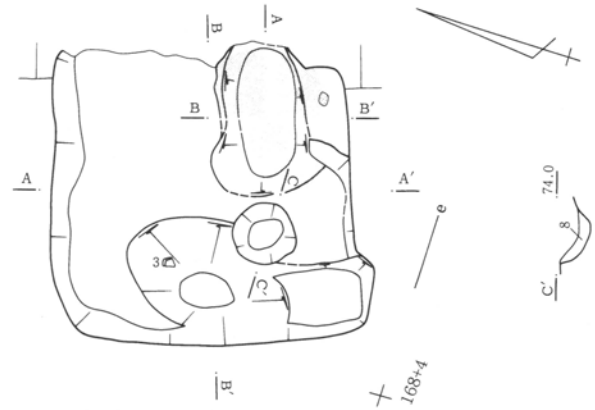
第602図　住居跡180―１・２遺構図



第603図　住居跡180―１・２遺物図

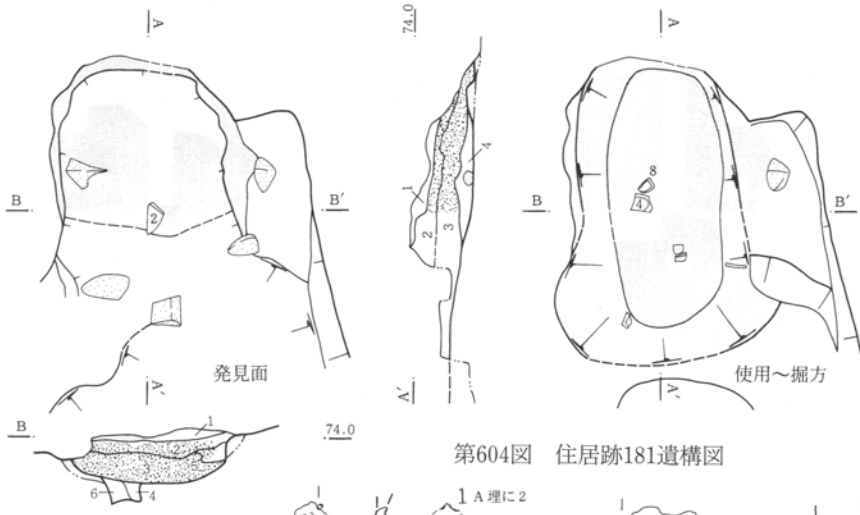


1、黒褐（10YR3/1）木炭粒・Ａｓ－Ａ含む。
2、黒褐（10YR3/1）木炭粒・Ａｓ－Ａ含む。東側・南側は焼土粒含む。上面は締る。床面。
3、黒褐（10YR3/1）木炭粒・Ａｓ－Ａ含む。上面床。
4、黒褐（10YR3/1）木炭粒わずか、焼土粒多い。上面床。



5、黒褐（10YR3/1）焼土粒・ロームブロック含む。
6、にぶい黄橙（10YR6/4）ロームブロック多く、焼土粒見えず。掘り方埋土。上面締る。
7、黒褐（10YR3/1）砂質。Ａｓ－Ａ含む。下面に木炭層あり。
8、黒褐（10YR3/1）木炭粒多く含む。締る。

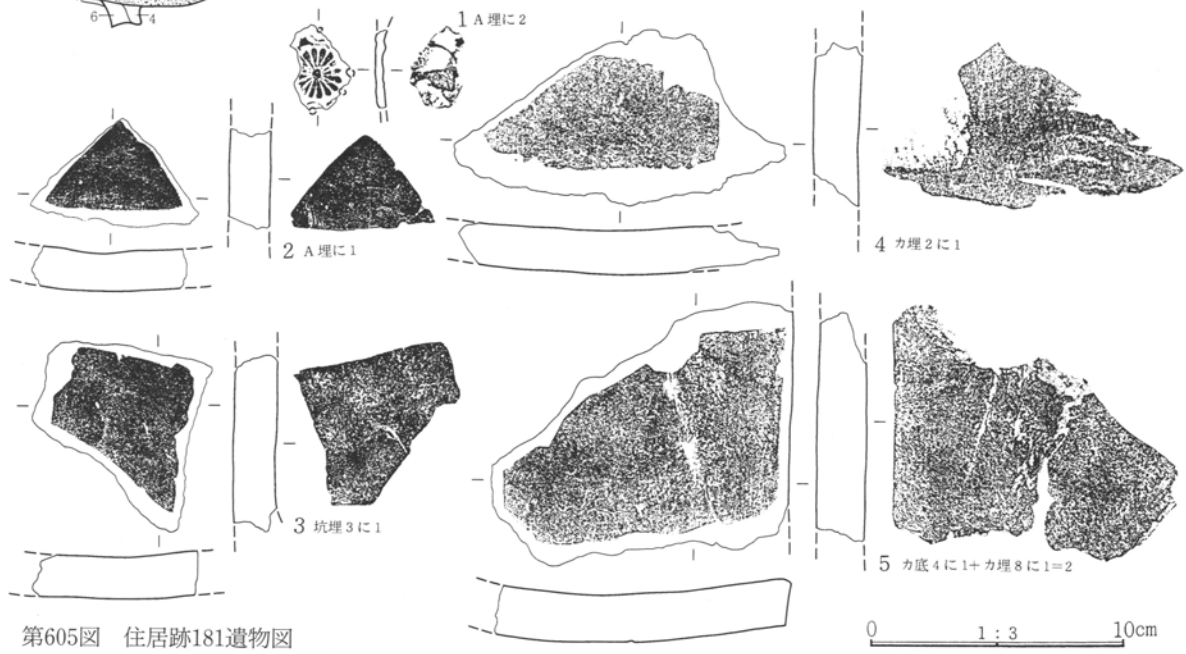
0　1：60　2m



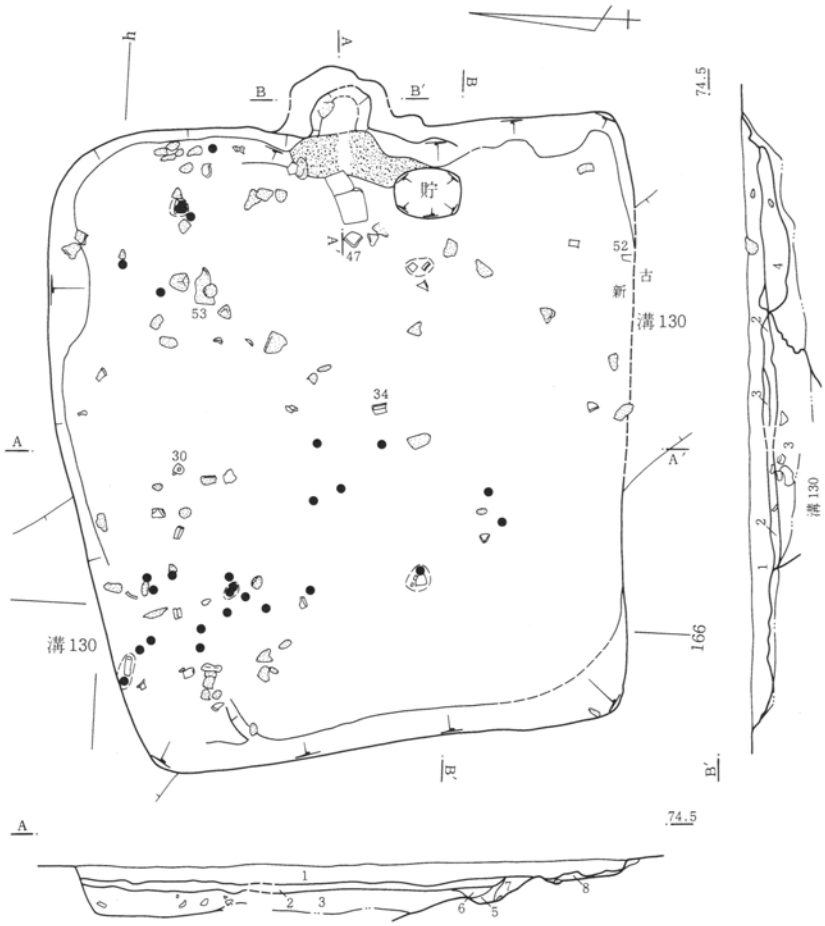
1、明赤褐（2.5YR5/8）焼土粒とその粘土小塊多い。
2、黄灰（2.5Y4/1）灰を主とし、焼土粒わずか入る。
3、黄灰（2.5Y4/1）灰を主とし、焼土粒わずか入る。２層より黒味あり。
4、明赤褐（2.5YR5/8）焼土粒主体。
5、明赤褐（2.5YR5/8）～黄灰（2.5Y4/1）灰と焼土粒・塊とがまじりあう。
6、明黄褐（10YR6/6）焼土粒まじえ、ロームブロック主体。

0　1：30　1m

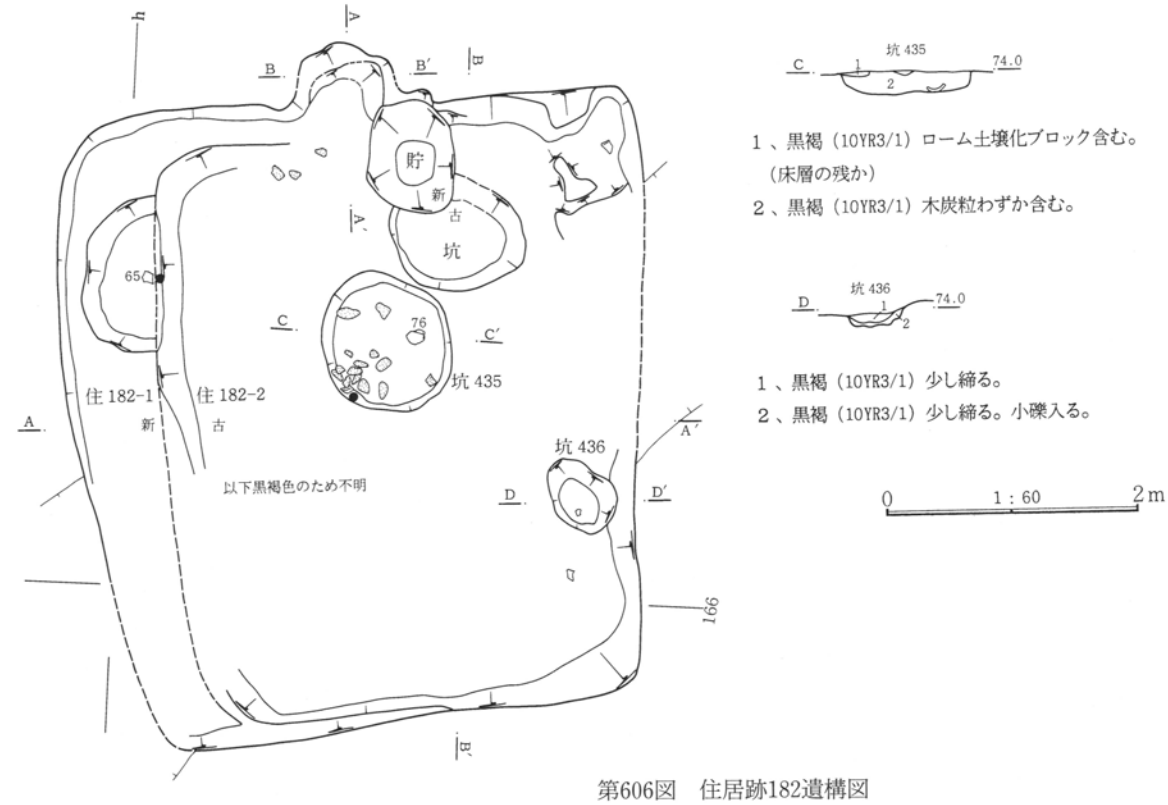
第604図　住居跡181遺構図



第605図　住居跡181遺物図



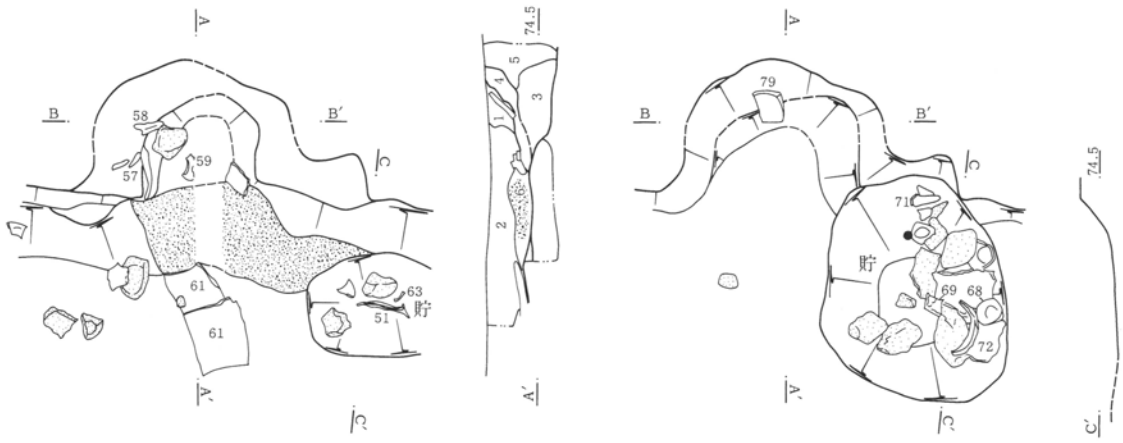
１、黒褐（10YR3/1）軽石入る。焼土粒部分的にわずか入る。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含み、少し締る。床層ではあるが弱い。２′は２より締る。
３、黒褐（10YR3/1）軽石入り、土器多く含む。
４、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土粒わずか含む。
５、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主体。
６、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入る。
７、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入る。
８、褐　（10YR4/4）ロームブロックと土壌化。

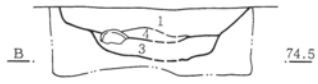


１、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化ブロック含む。（床層の残か）
２、黒褐（10YR3/1）木炭粒わずか含む。

１、黒褐（10YR3/1）少し締る。
２、黒褐（10YR3/1）少し締る。小礫入る。

第606図　住居跡182遺構図

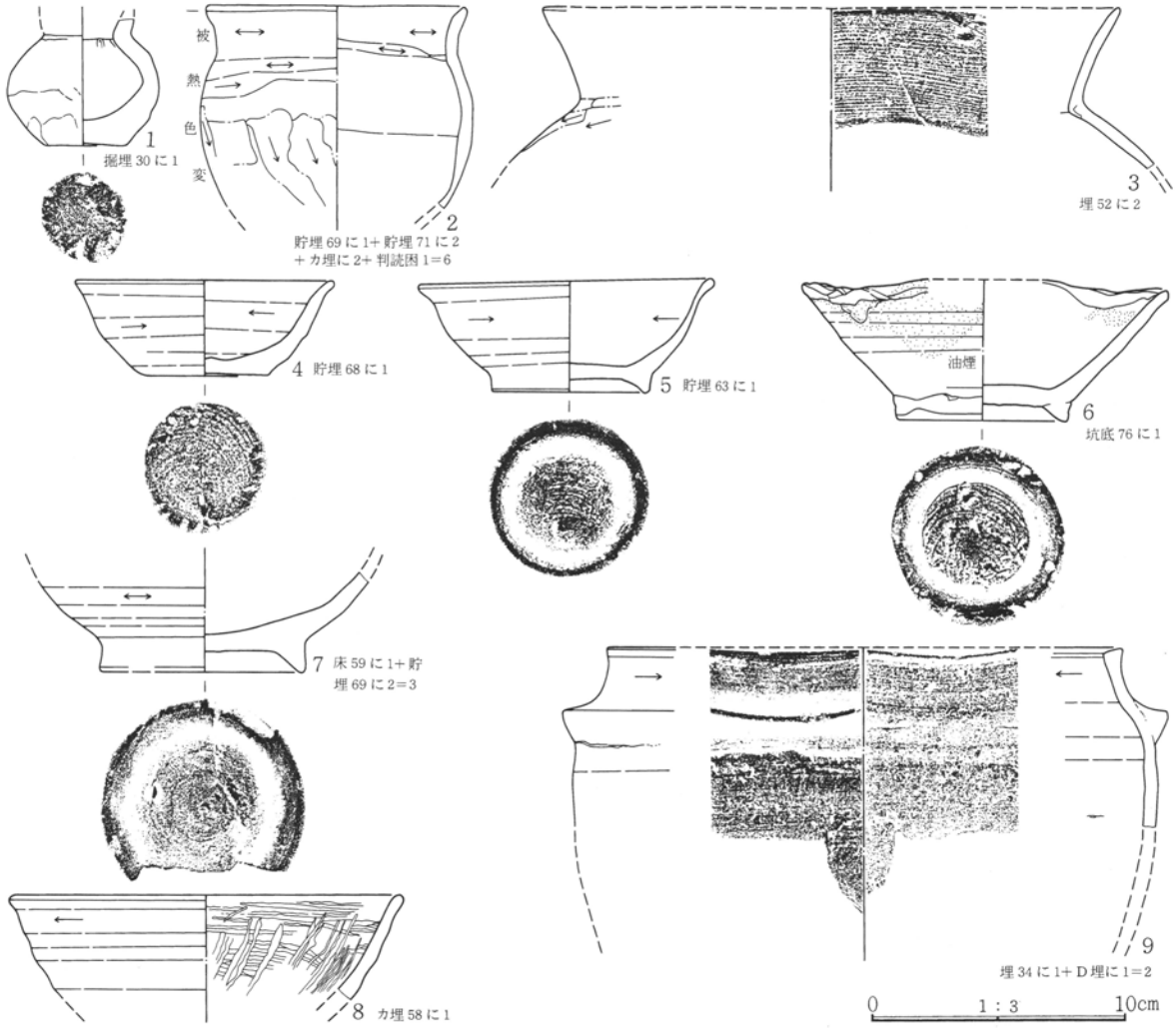




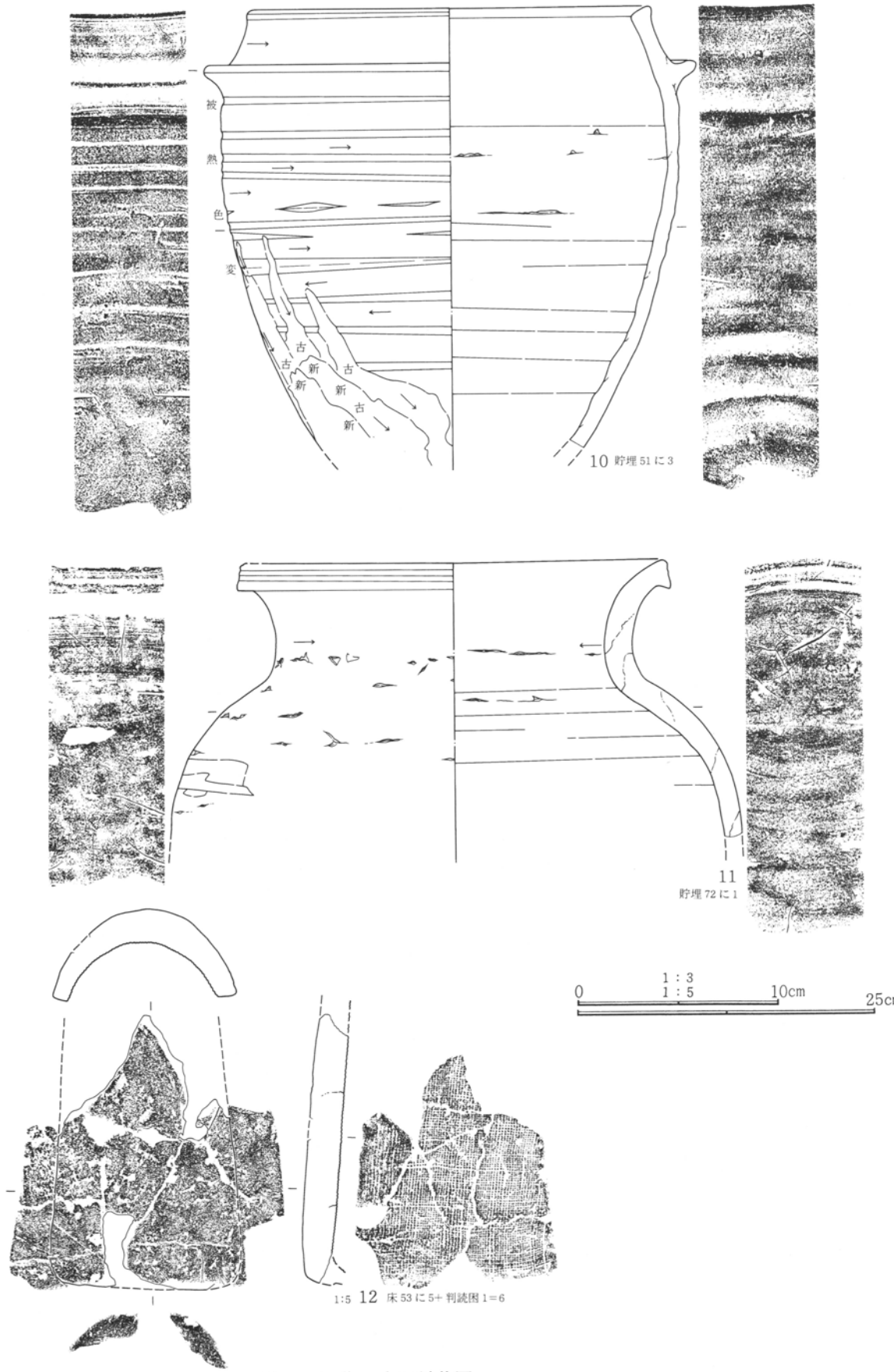
1、黒褐（10YR3/1）木炭粒わずか、焼土粒多く含む。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒見えず。
3、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック多く含む。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。
5、黒褐（10YR3/1）倒木の黒色土軽石入る。
6、黒褐（10YR3/1）木炭を含む。焼土粒入る。

0　1：30　1m

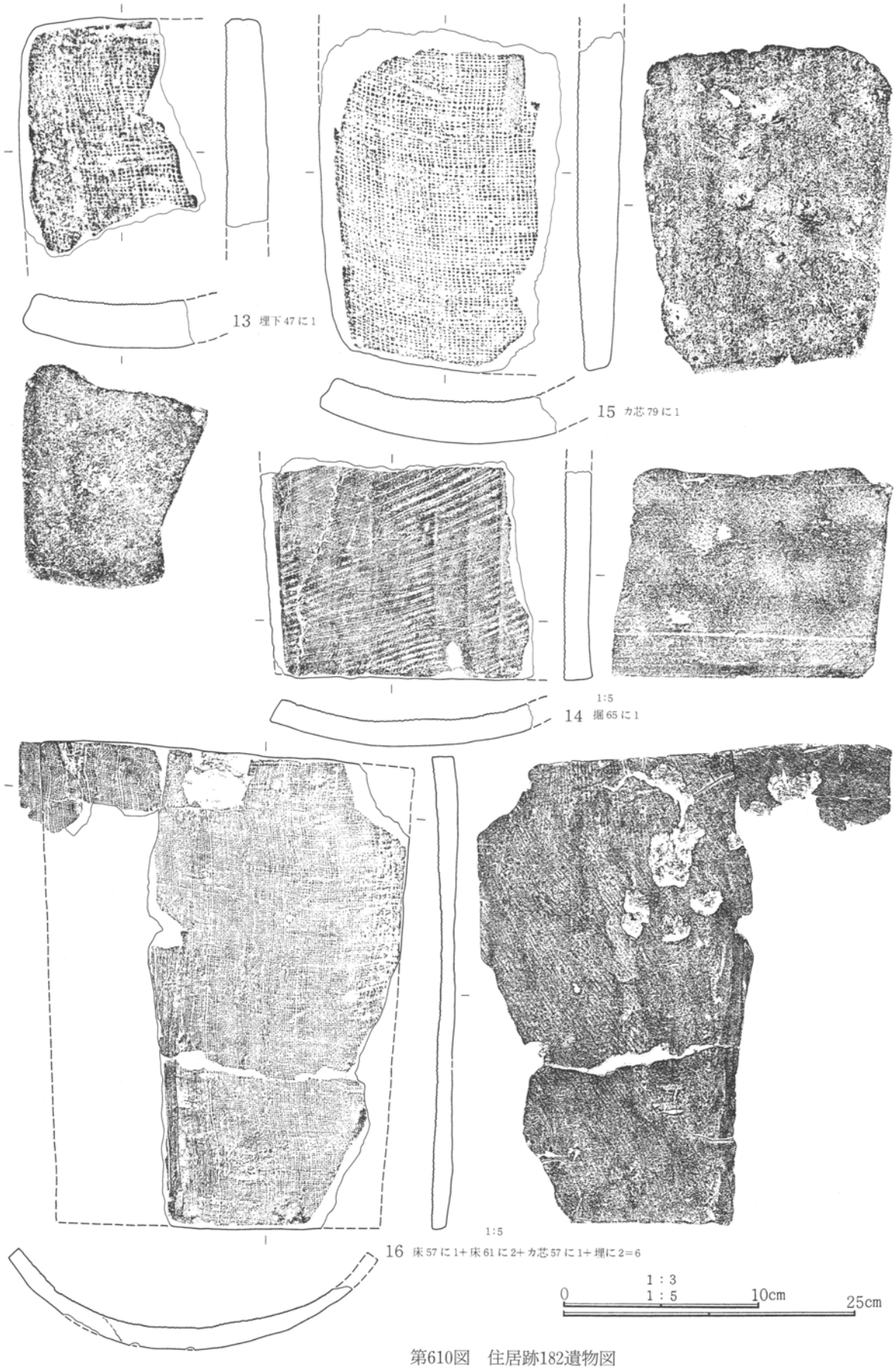
第607図　住居跡182遺構図



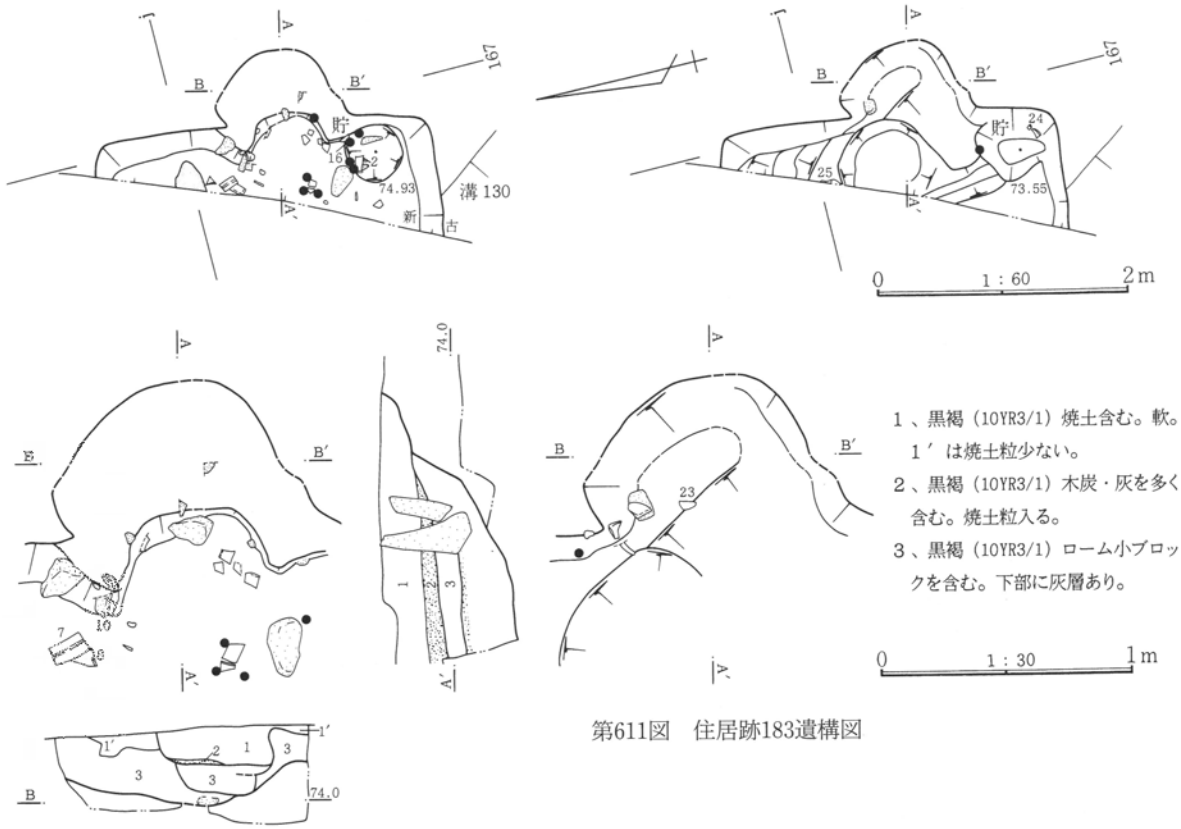
第608図　住居跡182遺物図



第609図　住居跡182遺物図



第610図　住居跡182遺物図



第611図　住居跡183遺構図

住居跡174　（第592・593図、図版104・210）

位置はＲ大区ｆｇ163・164に、調査面はローム層上面標高74.1m。住居跡は、昭和58年度に高崎市教育委員会によって調査されたＳＩ0001である。既掘のため掘方状態にあった。重複は北西隅を中世溝の溝跡121が後出してある。規模は南北523cm、東西398cm、方向は西壁でＮ5°Ｗを測る。遺物は同報告によると10世紀前半の土器類と鐙瓦・大形瓦片の出土があった。同期としては大形の住居跡である。

住居跡176　（第594・595図、図版104・210）

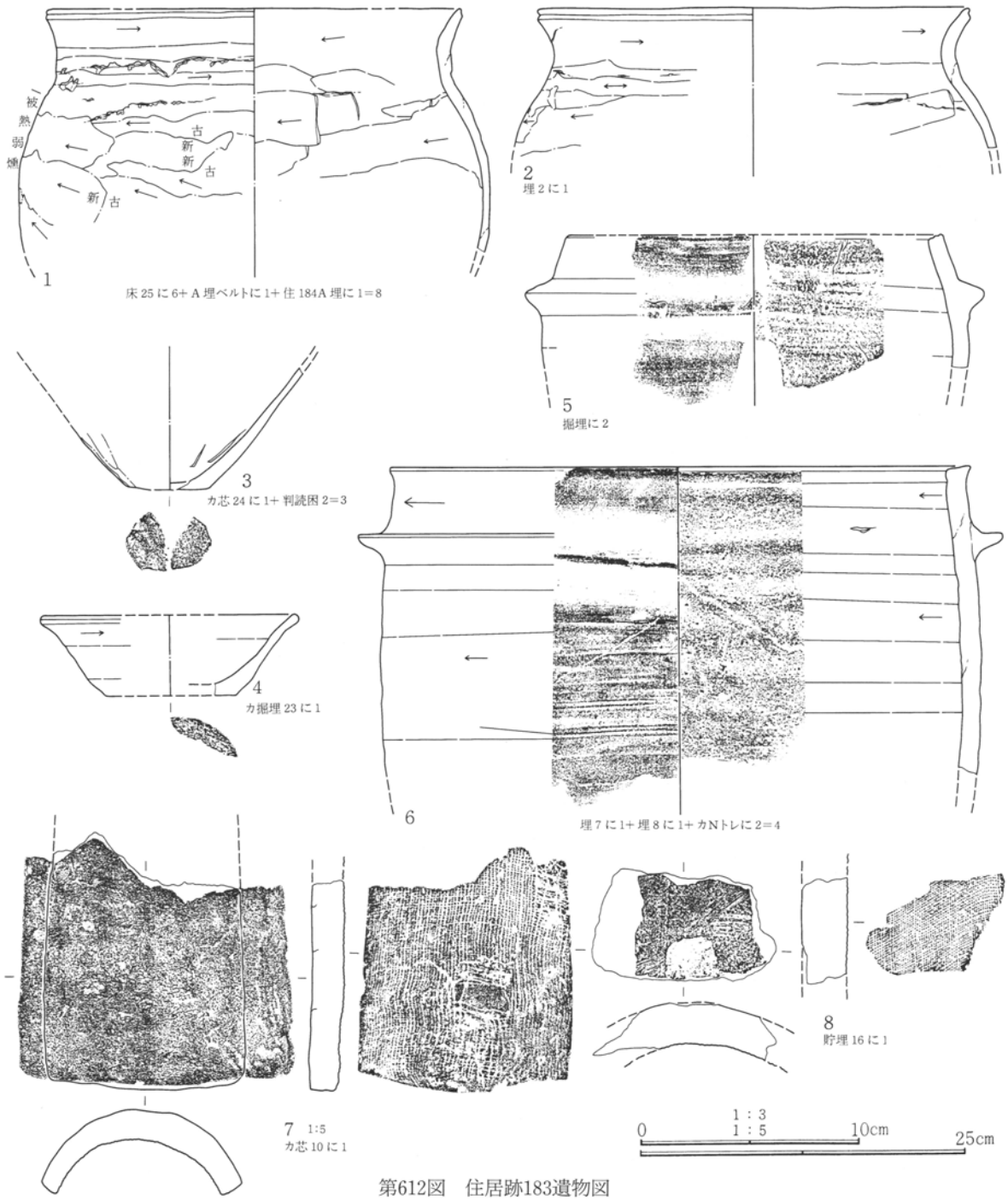
位置はＱ大区・Ｒ大区境167・168に、調査面は、ローム層漸移標高74.25m。重複はないものの上面の削平化が目立つ。規模は南北745cm、東西773cm、方向は西壁でＮ27°Ｗを測る。施設として北西隅に貯蔵穴、炉、柱穴南西に新旧２穴、北西に２穴、東は不明瞭。遺物は古墳時代前期の一群で、住居機能も同期。

住居跡177　（第598・599図、図版105・211）

位置はＲ大区ｂ167・168に、調査面はローム層漸移標高74.15m。重複は溝跡121が切り、住居跡180―1を切る。規模は南北315cm、東西88＋αcm、方向は西壁でＮ40°Ｗを測る。第598図は掘方状態である。遺物は、第599図１の９・10世紀頃の土師器甕底部片がある。掘方埋土出土のため住居機能は同期。

住居跡178　（第600・601図、図版105・211）

位置はＲ大区ｃ168・169に、調査面は南接の住居跡179と同一面。重複は平面確認時に住居跡179を切って存在していた。施設は見い出せなかった。規模は南北81＋αcm、東西290＋αcm、方向は南壁を基にＮ4°Ｗを測る。遺物は微弱であったが、住居跡179より後出時期の住居である。



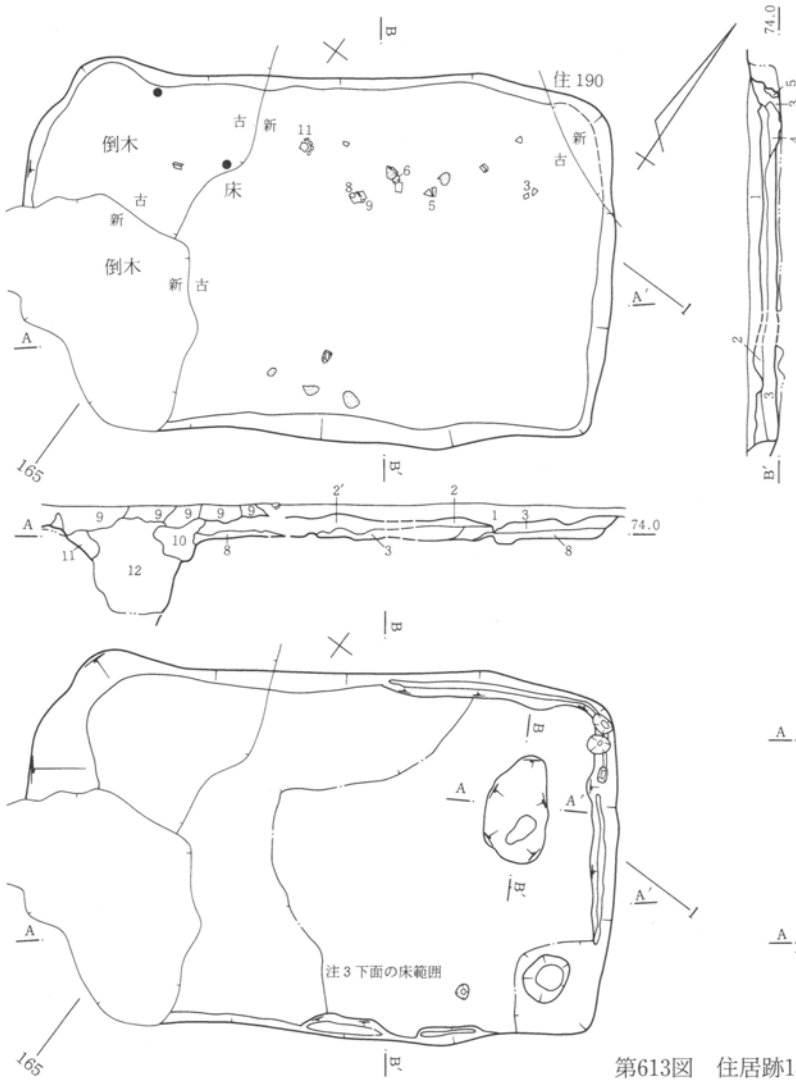
第612図　住居跡183遺物図

住居跡179　（第600・601図、図版105・211）

位置はR大区ｂｃ168・169に、調査面はローム層漸移標高74.3m。重複は住居跡180を切り、同178に切られ、同177とは不明。規模は南北410＋αcm、東西390＋αcm、方向は南壁を基に、N8°15′Wを測る。施設として南壁下に高まりがあり、２ピットとの関係は不明。遺物は古墳時代前期の個体で住居機能も同期か。

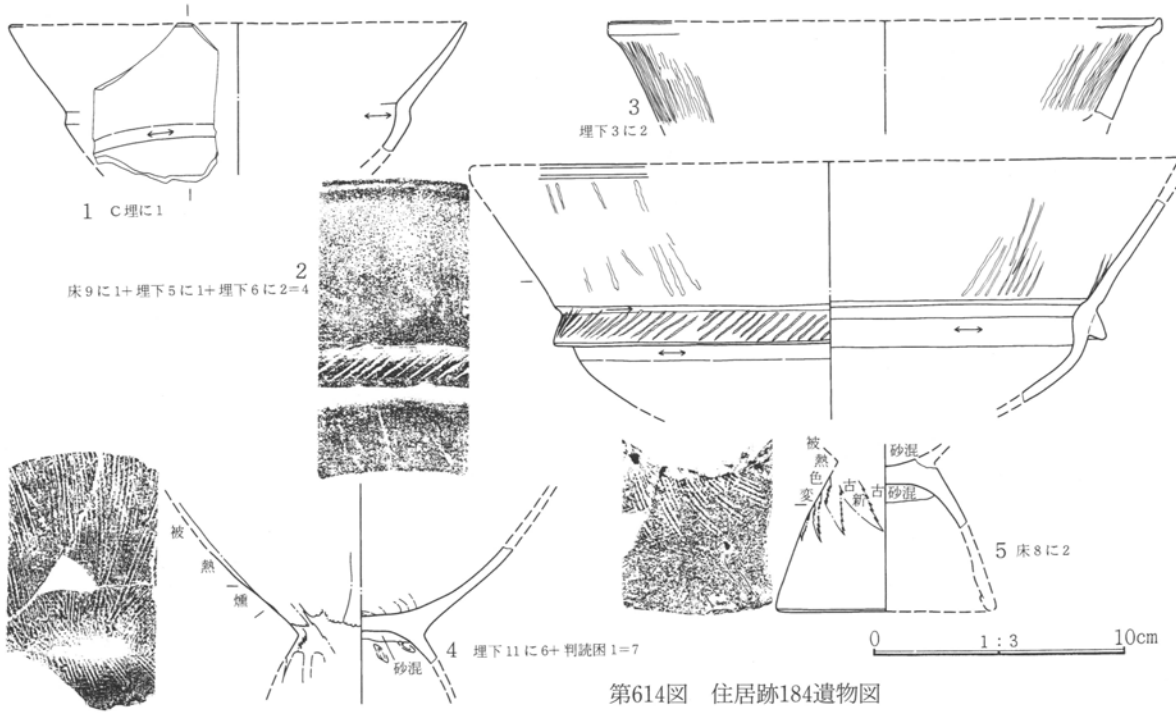
住居跡180―１・同―２　（第602・603図、図版105・211）

位置はR大区ｂｃ167・168に、調査面はローム層漸移標高74.3m。重複は住居跡177が切る。規模上層の住居跡180―１では南北553cm、東西360＋αcm、方向は西壁を基にN19°30′Wを測る。下層床と南壁下で周溝を伴

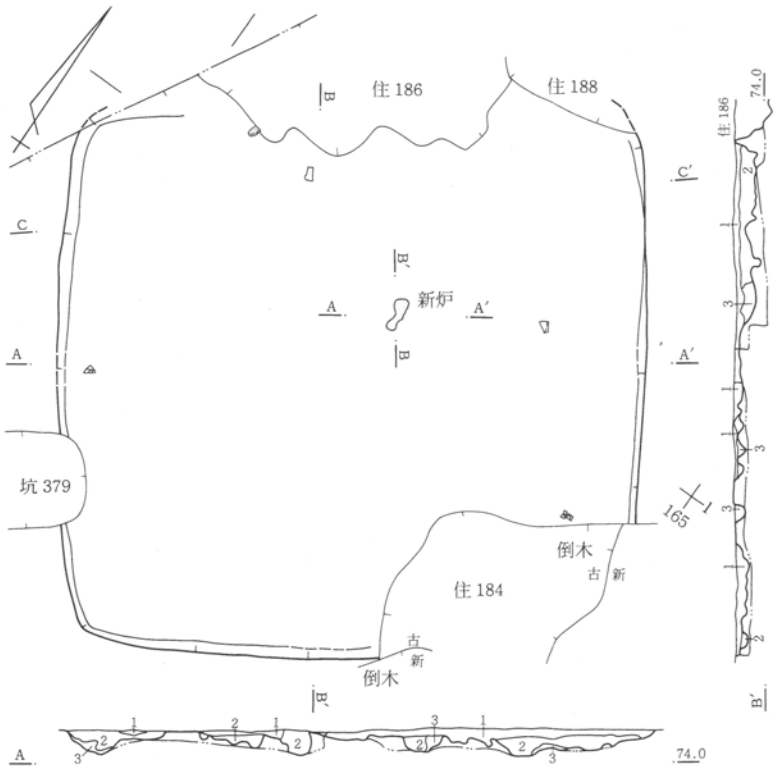


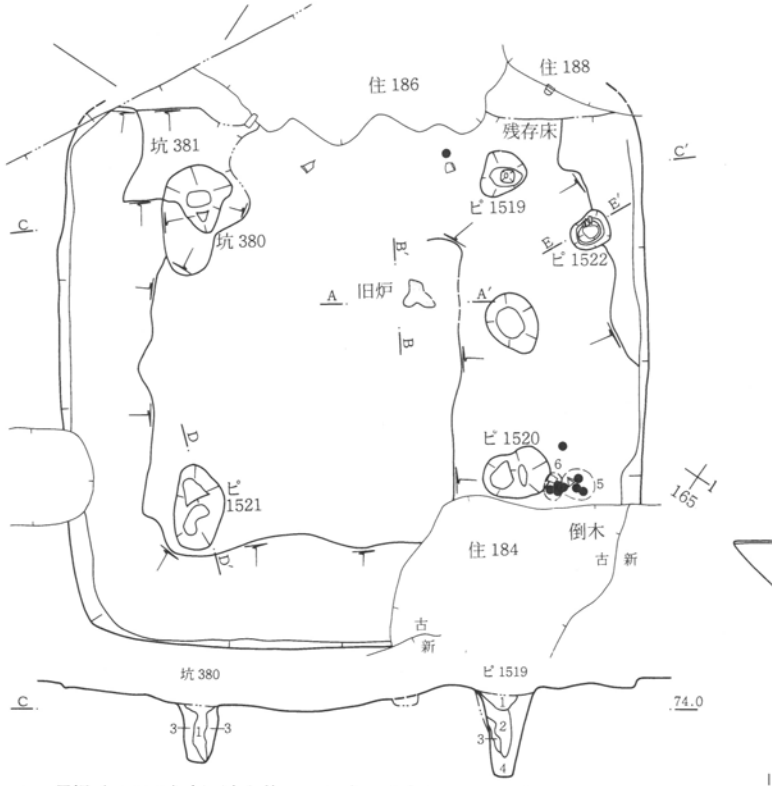
1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く、焼土粒少し含む。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロックをやや含む床層。締る。2′はローム粒少。
3、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを多く含む。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロックやや多い。
5、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。
8、褐　（10YR4/4）ローム漸移的で軟。
9、黒　（10YR2/1）黒色味強。
10、灰黄褐（10YR4/2）倒木、ローム漸移より黒い。
11、黒　（10YR2/1）黒色味強。少し締る。
12、黒　（10YR2/1）黒色味強。軟。

第613図　住居跡184遺構図



第614図　住居跡184遺物図

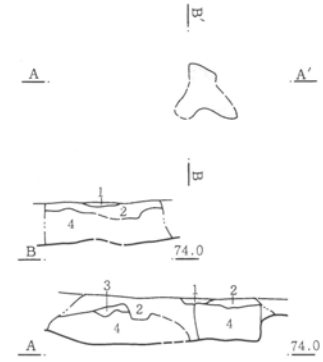




1、黒褐（10YR3/1）軽石含まず、ロームブロック少ない。1′は黒い。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。
3、黒褐（10YR3/1）さらにロームブロック多く、締る。
4、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック、土壌化主体で締る。

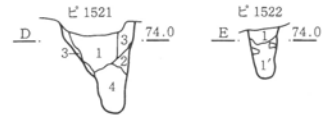
0　1：60　2m

第615図　住居跡185遺構図



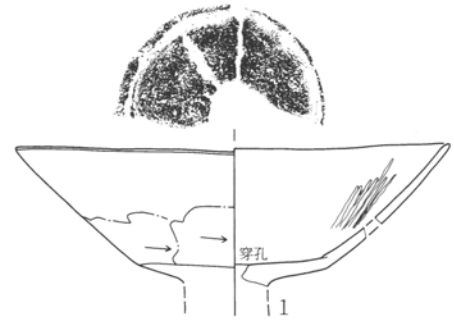
炉
1、黒褐（10YR3/1）焼土粒を多く含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒含まない。
3、黒褐（10YR3/1）やや軟。砂質の黒色土。
4、黒褐（10YR4/4）ロームブロック多く含む。土壌化多。

0　1：30　1m



ピ1521・1522
1、黒褐（10YR3/1）軽石含まず、ロームブロック少ない。1′は黒い。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。
3、黒褐（10YR3/1）さらにロームブロック多く、締る。
4、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック、土壌化主体で締る。

床
1、黒褐（10YR3/1）ローム小粒わずか含む。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム粒入り、焼土粒わずか入る。
3、明黄褐（10YR6/6）ローム漸移状で締る。

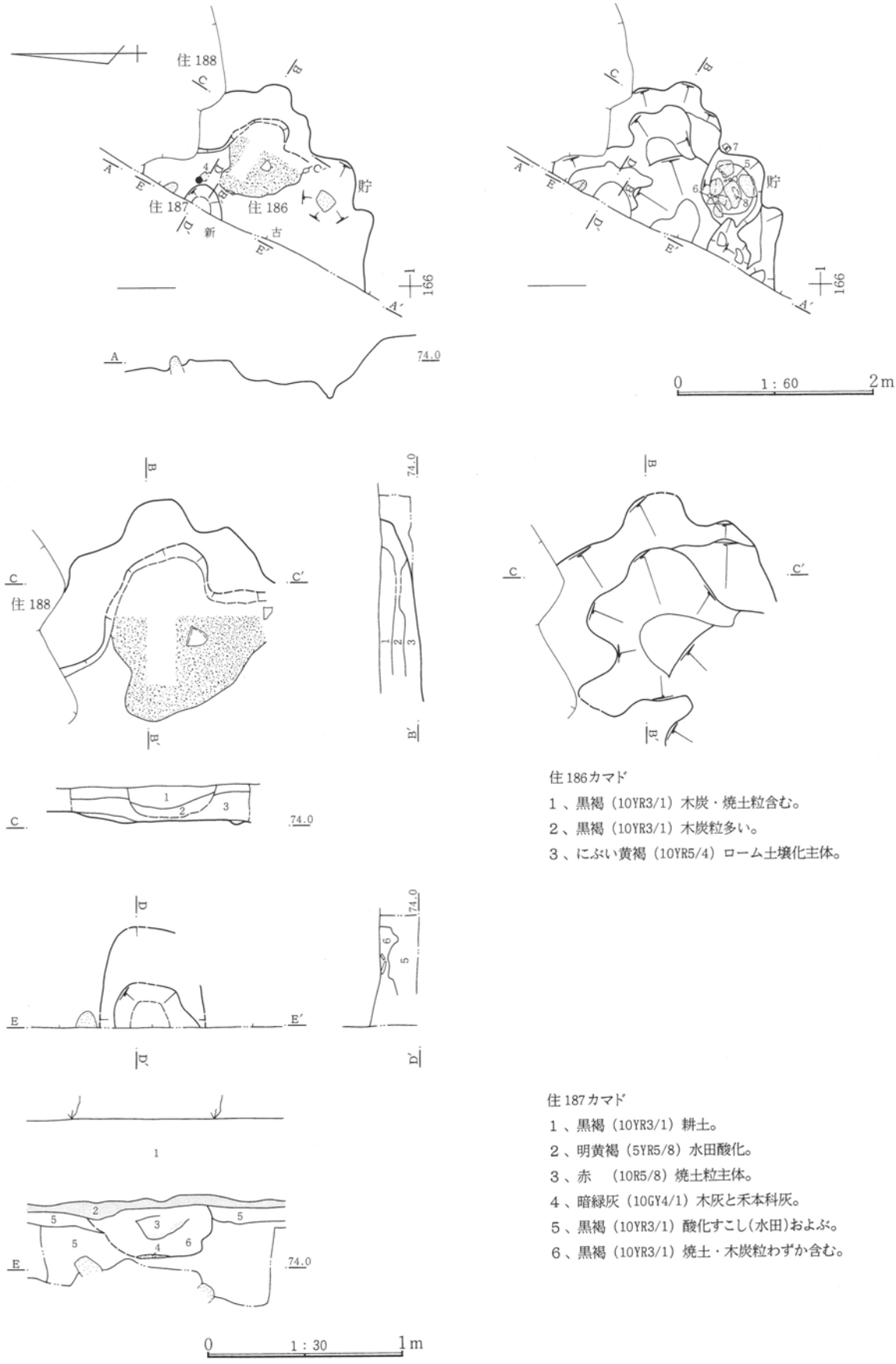


床5に6＋床6に3＋D掘埋に2＋判読困2＝13

D掘埋に1

0　1：3　10cm

第616図　住居跡185遺物図



住186カマド

1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。

2、黒褐（10YR3/1）木炭粒多い。

3、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

住187カマド

1、黒褐（10YR3/1）耕土。

2、明黄褐（5YR5/8）水田酸化。

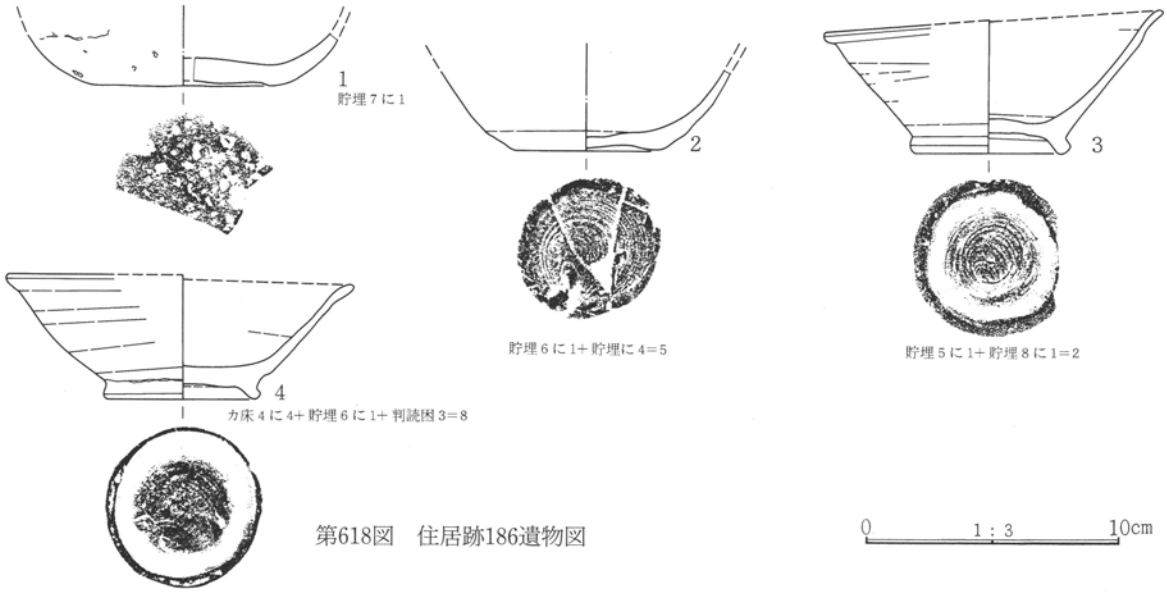
3、赤　（10R5/8）焼土粒主体。

4、暗緑灰（10GY4/1）木灰と禾本科灰。

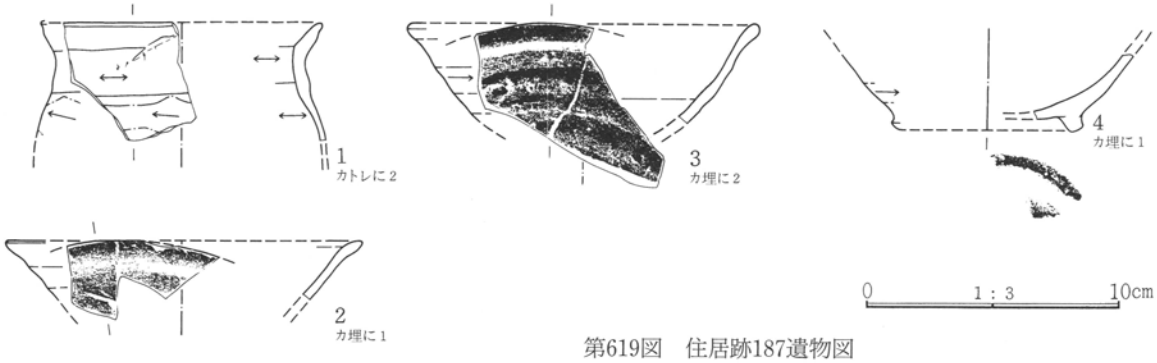
5、黒褐（10YR3/1）酸化すこし（水田）およぶ。

6、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒わずか含む。

第617図　住居跡186、187遺構図



第618図　住居跡186遺物図



第619図　住居跡187遺物図

なう住居跡180―2とは周溝との方向性が同180―1と平行するため、1住居の改修による新古の可能性もある。掘方上で貯蔵穴、柱穴2穴を確認し、位置関係は同180―1に伴う可能性大。遺物は古墳時代前期で、住居機能も同期。

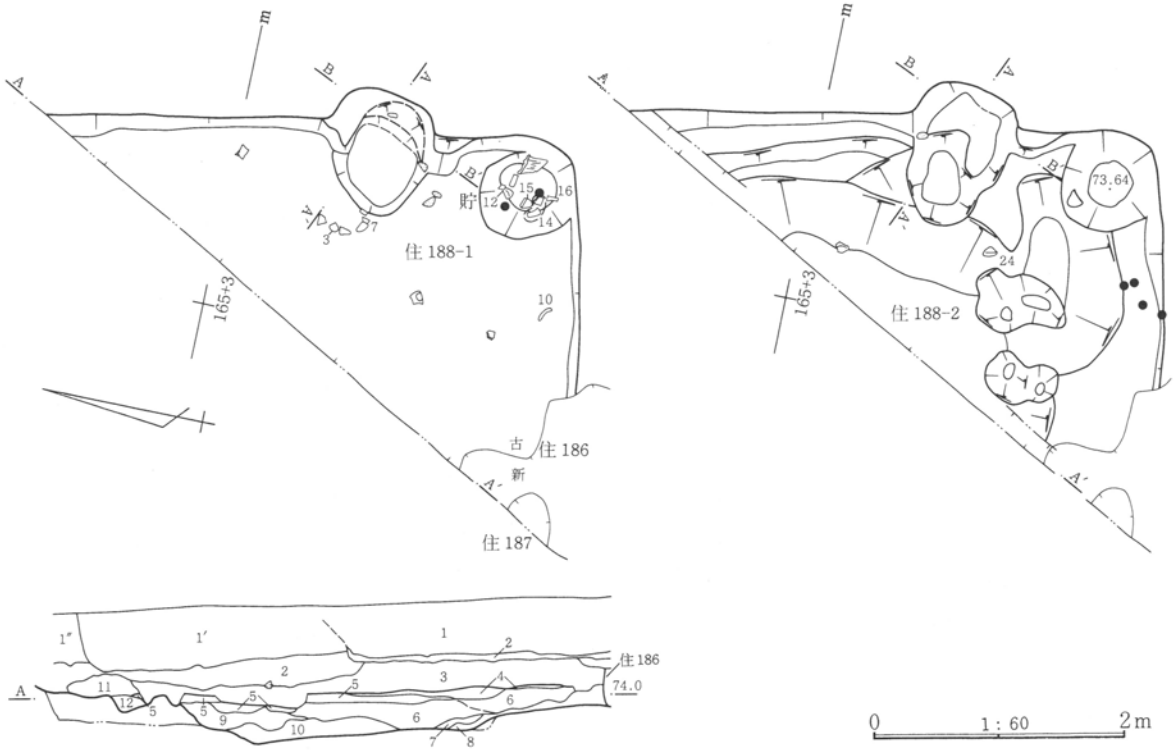
住居跡181　(第604・605図、図版105・211)

位置はR大区1168に、調査面はローム層上層標高74.3m。重複は溝跡113より後出。規模は南北257cm、東西228＋αcm、方向は西壁でN19°Wを測る。施設に床面の存在、東壁に竈、掘方に土坑があった。床面上は、小木片の炭化が多くあり、竈の被熱顕著。時期は遺物により江戸時代末から明治時代初期頃。

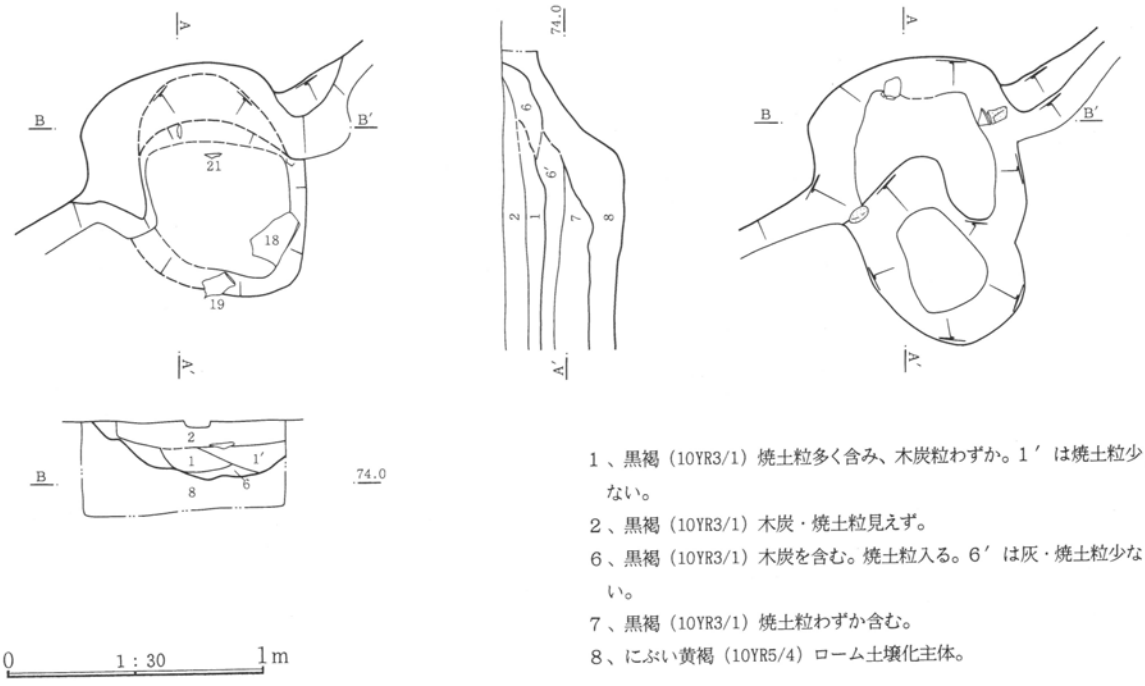
住居跡182―1・2　(第606・607・608図、図版106・211・212)

位置はR大区gh165・166に、調査面はローム層上面標高74.25m。重複は溝跡130より後出。平面上2住居があるらしく同―1・2に区別。施設は、竈、貯蔵穴に新旧が、掘方に床下土坑がある。規模は個別分別を明瞭にできず全体で南北472cm、東西509cm、方向は東壁を基にN8°15′Wを測る。貯蔵穴は、床面図の新段階の底面標高73.96m、掘方図の旧段階の床面標高73.82mであった。遺物について、新・旧貯蔵穴の遺物は10世紀後半で型式差少なく、住居機能時はその頃と考えたい。両住居跡は、瓦の出土が見立っている。

住居跡183　(第611・612図、図版106・212)

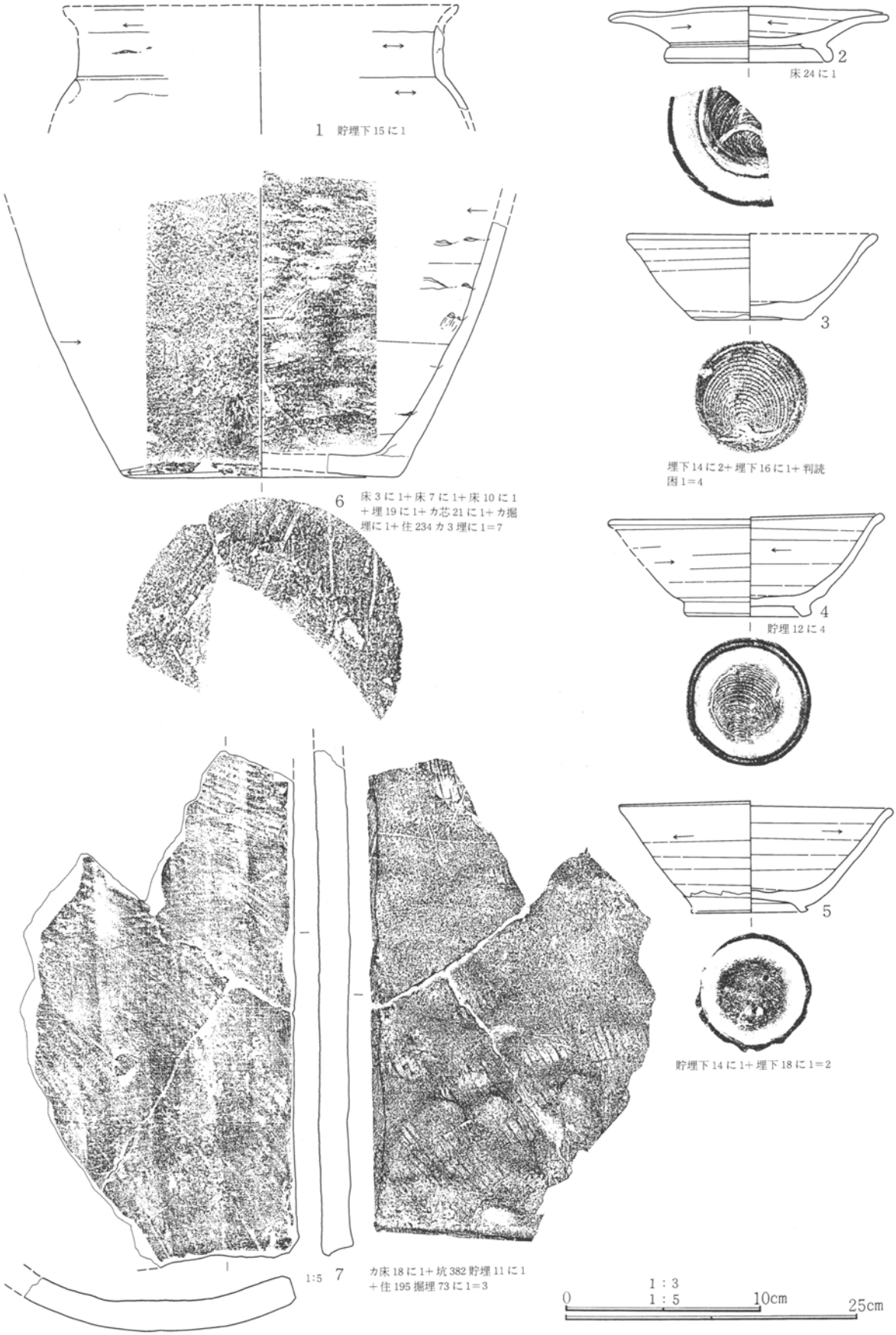


1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入る。水田耕土。1′は粗な耕土。1″はやや締る畑地土壌。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。硬化床層。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。硬化床層。少し還元気味。
6、黒褐（10YR3/1）ローム粒含む。軟。
7、黒褐（10YR3/1）ローム粒少ない。少し締る。
8、黒褐（10YR3/1）ローム粒少ない。少し締る。さらに焼土粒含む。
9、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。床下土坑か。少し締る。
10、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。少し締る。
11、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。
12、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。少し締る。

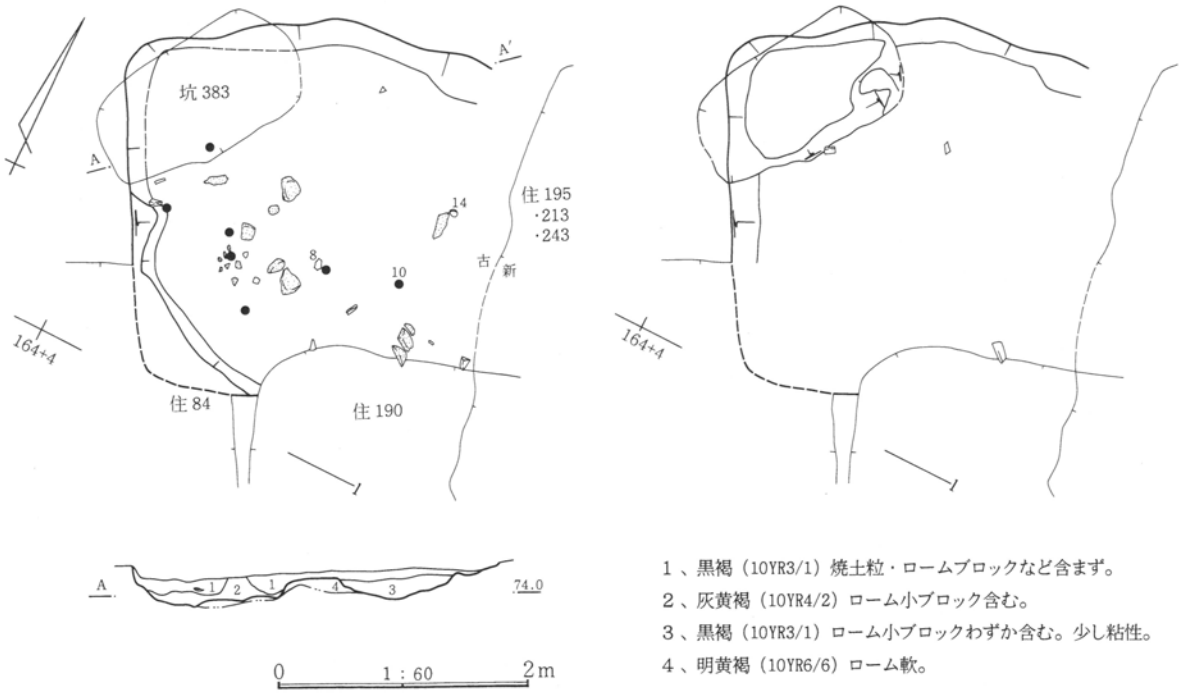


1、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含み、木炭粒わずか。1′は焼土粒少ない。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒見えず。
6、黒褐（10YR3/1）木炭を含む。焼土粒入る。6′は灰・焼土粒少ない。
7、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。
8、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

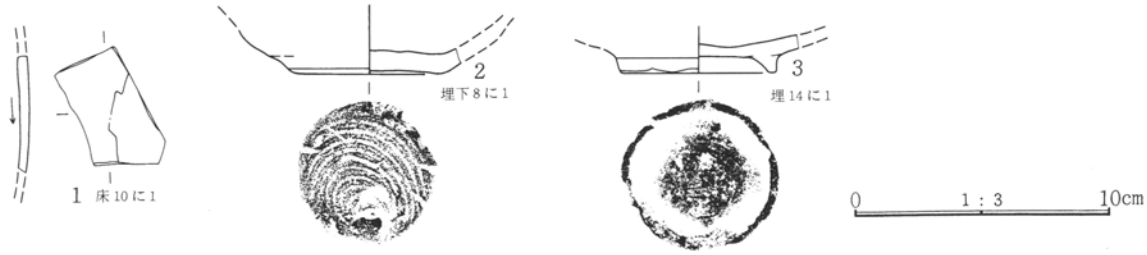
第620図　住居跡188―１・２遺構図



第621図　住居跡188―1・2遺物図



第622図　住居跡189遺構図



第623図　住居跡189遺物図

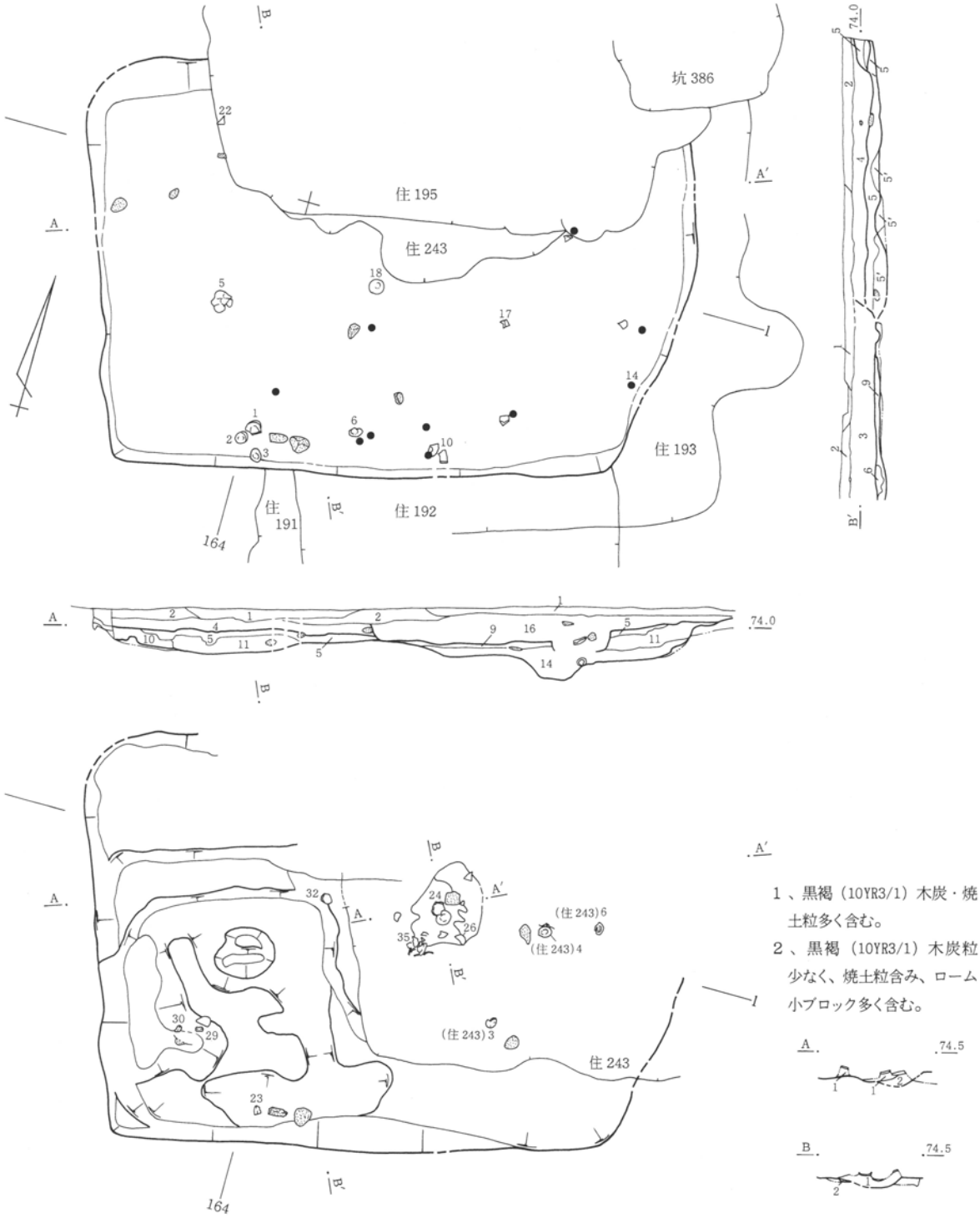
位置はＲ大区ｋｌ164に、調査面はローム層上面標高74.3m。重複は住居跡190が切り、南西側の小規模な倒木が後出してあり、さらに先行の倒木が西側にある。規模は南北288cm、東西473cm、方向は東西中軸を基にＮ34°Ｗを測る。施設に炉跡、南東隅に底面標高73.31mの小穴、掘方の壁下溝がある。遺物は第614図のように古墳時代前期の個体があり、住居機能も同期である。

住居跡186　（第615・616図、図版107・213）

位置はＲ大区ｋｌ165に、調査面はローム層上面標高74.3m。重複は住居跡184、同186、同188と倒木２カ所・坑379が後出。規模は南北440cm、東西470cm、方向は中軸でＮ33°Ｗを測る。施設は炉跡に新・旧、柱穴４カ所、ピ1521の底面標高73.43mがある。貯蔵穴は坑381（坑名称の左側の凹み）底面標高73.14mである。遺物は第616図1・2があり、古墳時代前期で住居機能も同期。

住居跡186　（第617・618図、図版107・213）

位置はＲ区大区ｌ165に、調査面はローム層上面標高74.25m。重複は住居跡188を切るが、西方の大半は調査地外。規模は南北238＋αcm、東西135＋αcm、方向は南壁を基にＮ0°31′Ｅを測る。施設に竈・貯蔵穴がある。遺物は９世紀後半の個体が主をなし、住居の機能も同期。

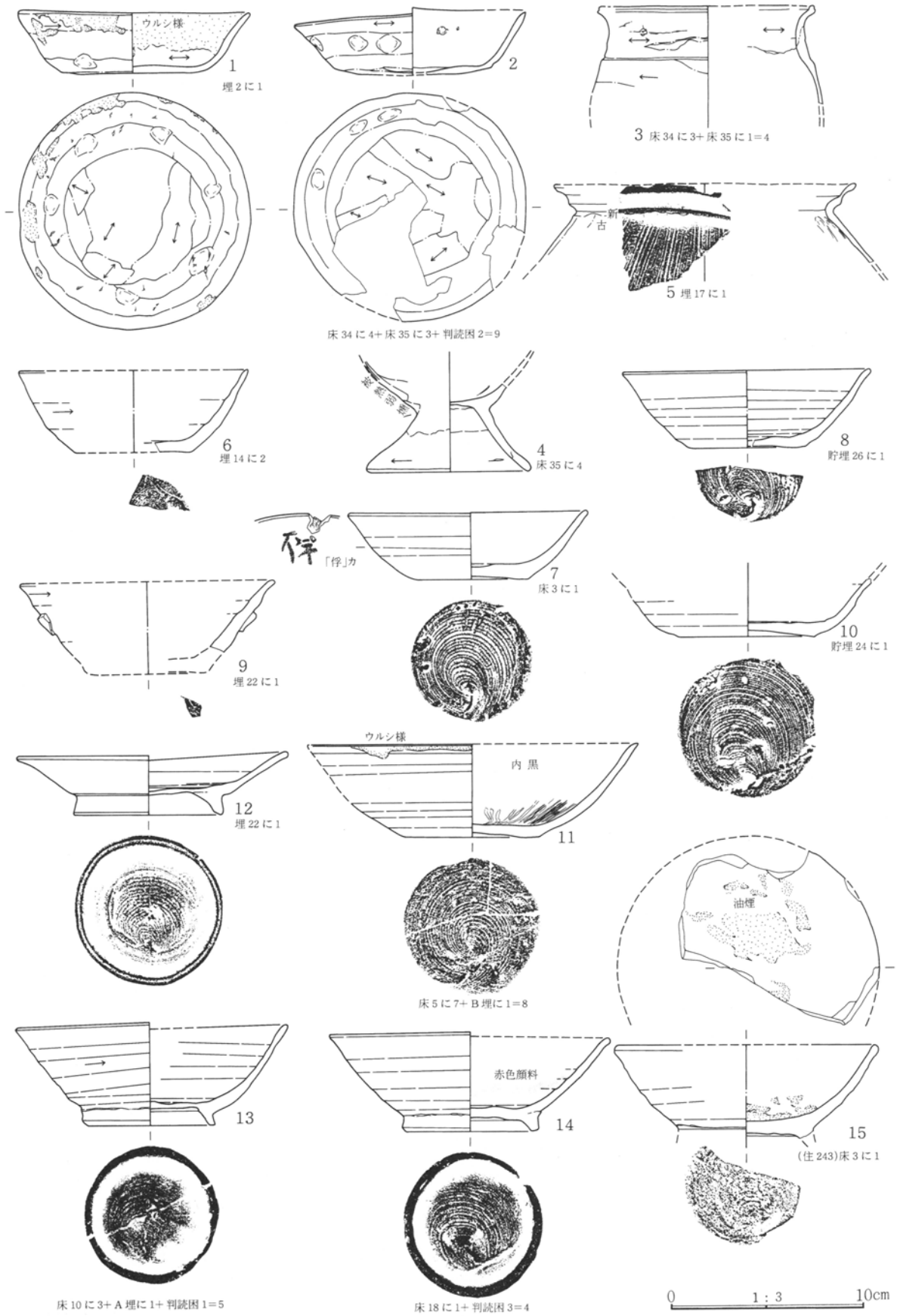


1、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒多く含む。
2、黒褐（10YR3/1）木炭粒少なく、焼土粒含み、ローム小ブロック多く含む。

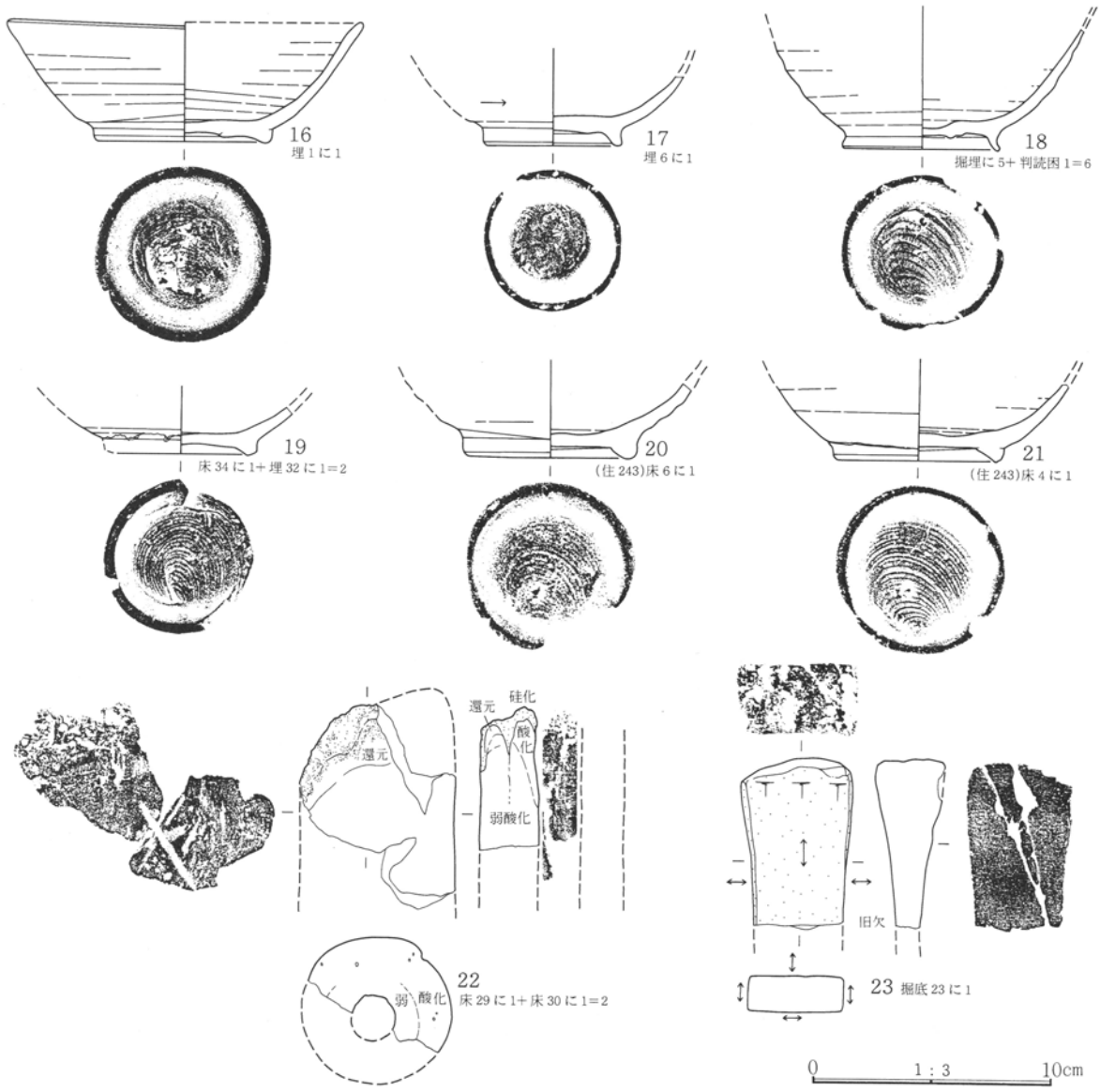
1、黒褐（10YR3/1）As-A含み、道跡。現代。水田終わりの東西道。締る。
2、黒褐（10YR3/1）As-A入らず。ローム小粒入る。
3、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒入る。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒入る。
5、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、締る。住床層。5′は軟。
6、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、締る。住床層。
9、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、締る。床層。
10、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多い。黒褐ブロック多い。
11、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主体。
14、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。
16、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。

0　1：60　2m

第624図　住居跡190遺構図



第625図　住居跡190遺物図



第626図　住居跡190遺物図

住居跡187　(第617・619図、写真図版107・213)

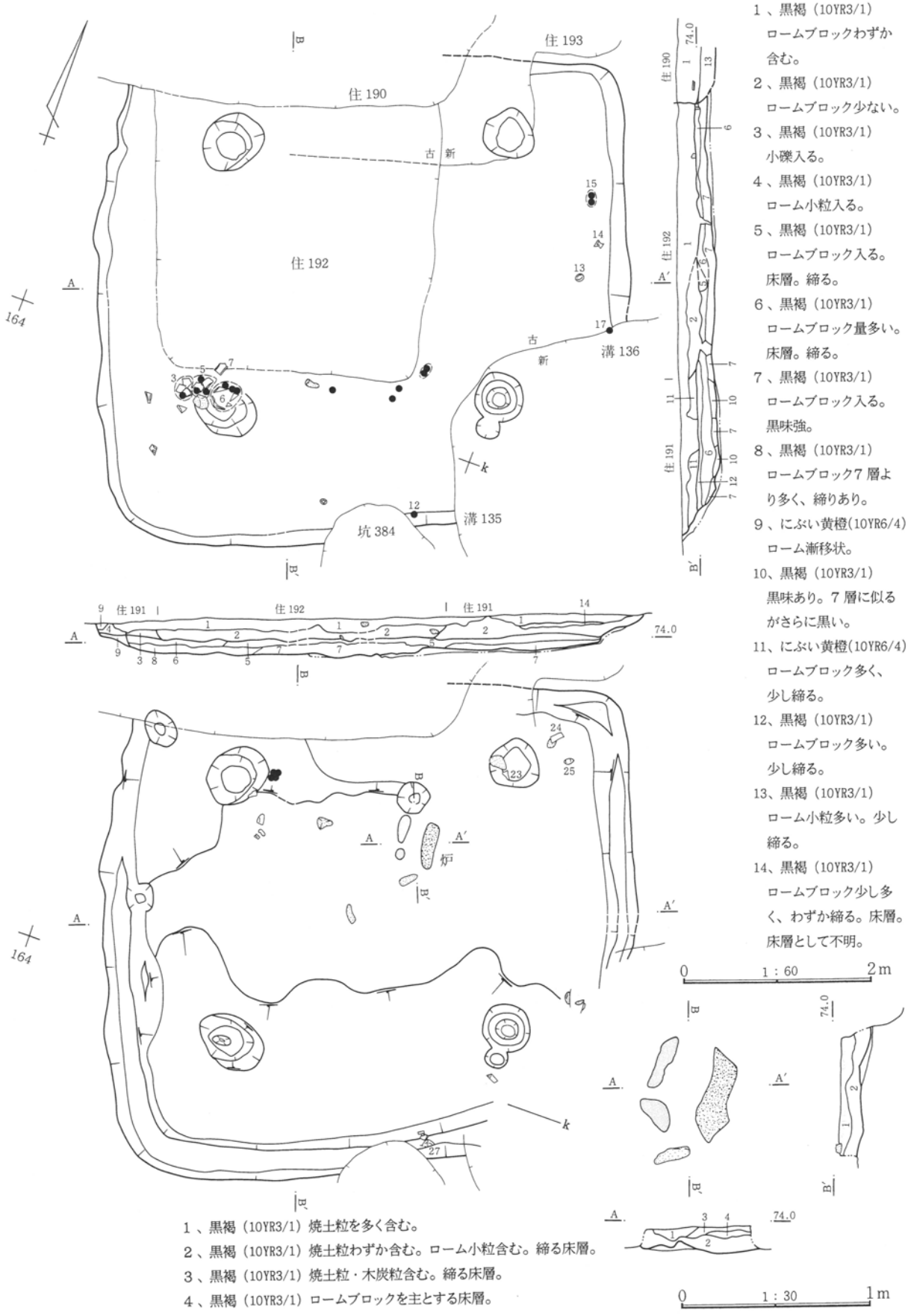
位置はR大区l165に、調査面はローム層上面標高74.25m付近で、住居跡186の調査に合せて行ない、重複は同186が先行。竈の一部分の調査で、第617図平面は掘方状態。遺物は9世紀後半、住居機能も同期。

住居跡188―1、同188―2　(第620・621図、写真図版107・213)

位置はR大区1m165に、調査面はローム層上面標高74.25m。重複は住居跡186が切る。規模は南北432+αcm、東西275+αcm、方向はN11°Wを測る。施設に竈と貯蔵穴がある。遺物は9世紀中頃、機能も同期。

住居跡189　(第622・623図、写真図版107・213)

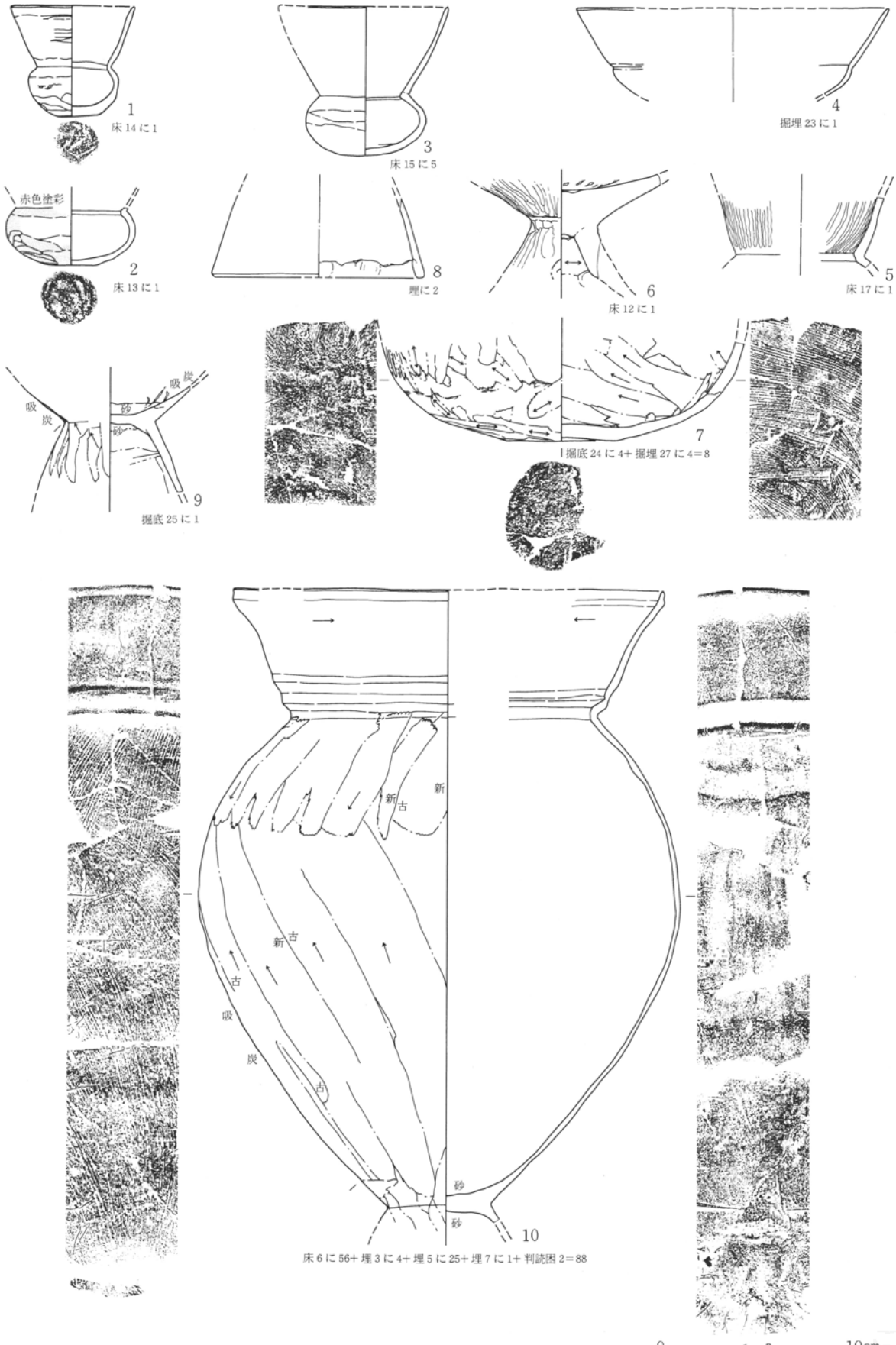
位置はR大区l164に、調査面はローム層上面標高74.25m。重複は住居跡84・190・195・213・243、土坑283が後出するが、重複大のため推奨できない。規模は南北295+αcm、東西319+αcm、方向はN28°30Wを測る。施設は不明瞭。遺物は、9世紀中頃と見られるが、数少なく、住居機能時やや不明瞭。



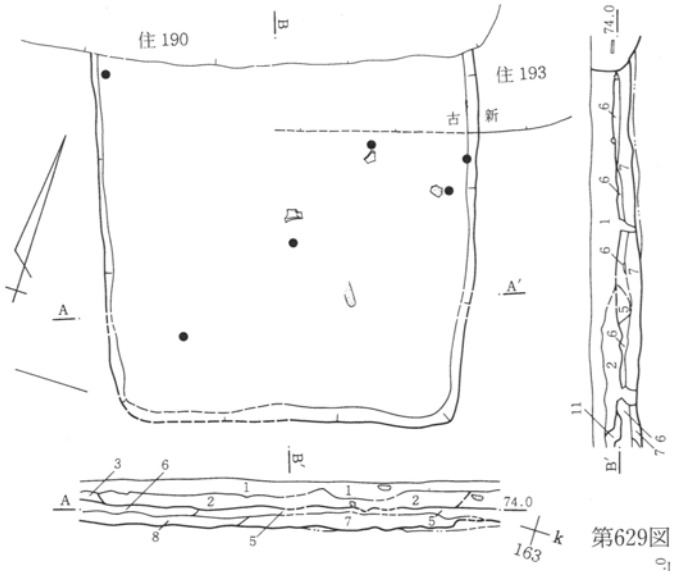
1、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。
3、黒褐（10YR3/1）小礫入る。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入る。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入る。床層。締る。
6、黒褐（10YR3/1）ロームブロック量多い。床層。締る。
7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入る。黒味強。
8、黒褐（10YR3/1）ロームブロック7層より多く、締りあり。
9、にぶい黄橙(10YR6/4)ローム漸移状。
10、黒褐（10YR3/1）黒味あり。7層に似るがさらに黒い。
11、にぶい黄橙(10YR6/4)ロームブロック多く、少し締る。
12、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い。少し締る。
13、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多い。少し締る。
14、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し多く、わずか締る。床層。床層として不明。

1、黒褐（10YR3/1）焼土粒を多く含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずか含む。ローム小粒含む。締る床層。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒含む。締る床層。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを主とする床層。

第627図　住居跡191遺構図



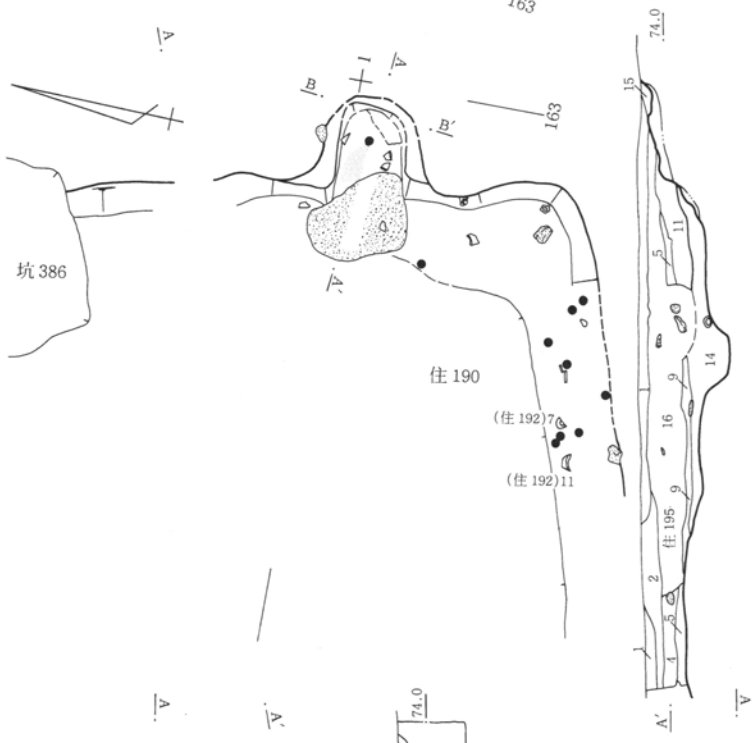
第628図　住居跡191遺物図



１、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。
３、黒褐（10YR3/1）小礫入る。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入る。床層。締る。
６、黒褐（10YR3/1）ロームブロック量多い。床層。締る。
７、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入る。黒味強。
８、黒褐（10YR3/1）ロームブロック７より多く、締りあり。
11、にぶい黄橙（10YR6/4）ロームブロック多く、少し締る。

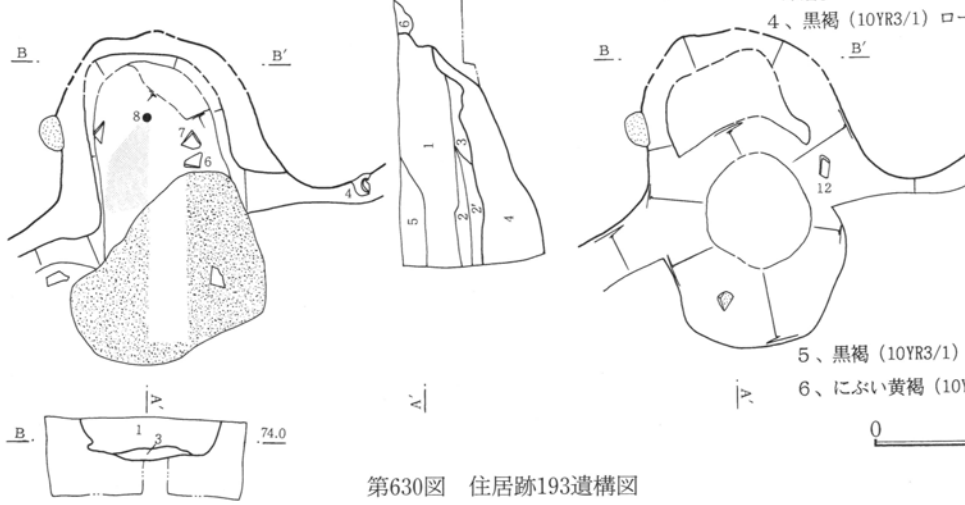
0　1：60　2m

第629図　住居跡192遺構図



１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ含み、道跡。現低い。水田終わりの東西道。締る。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ入らず。ローム小粒入る。
４、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒入る。
５、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、締る。住床層。
９、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、締る。床層。
11、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主体。
14、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。
15、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。
16、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。

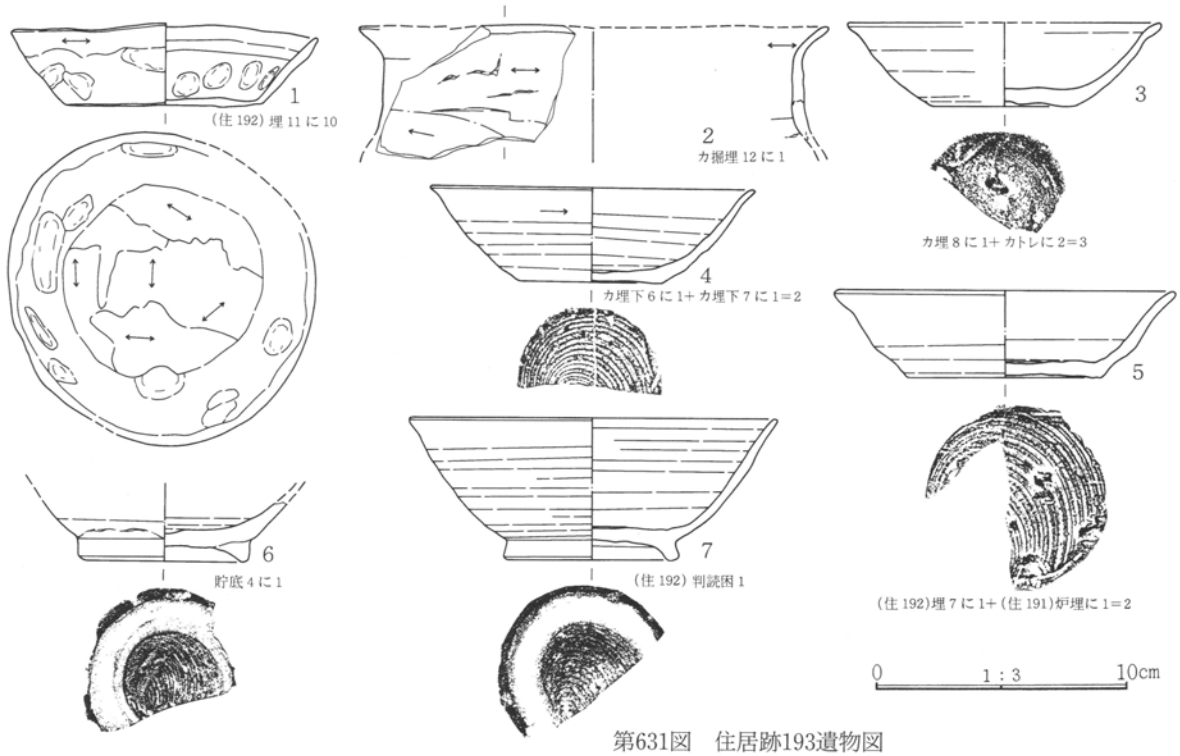
0　1：60　2m



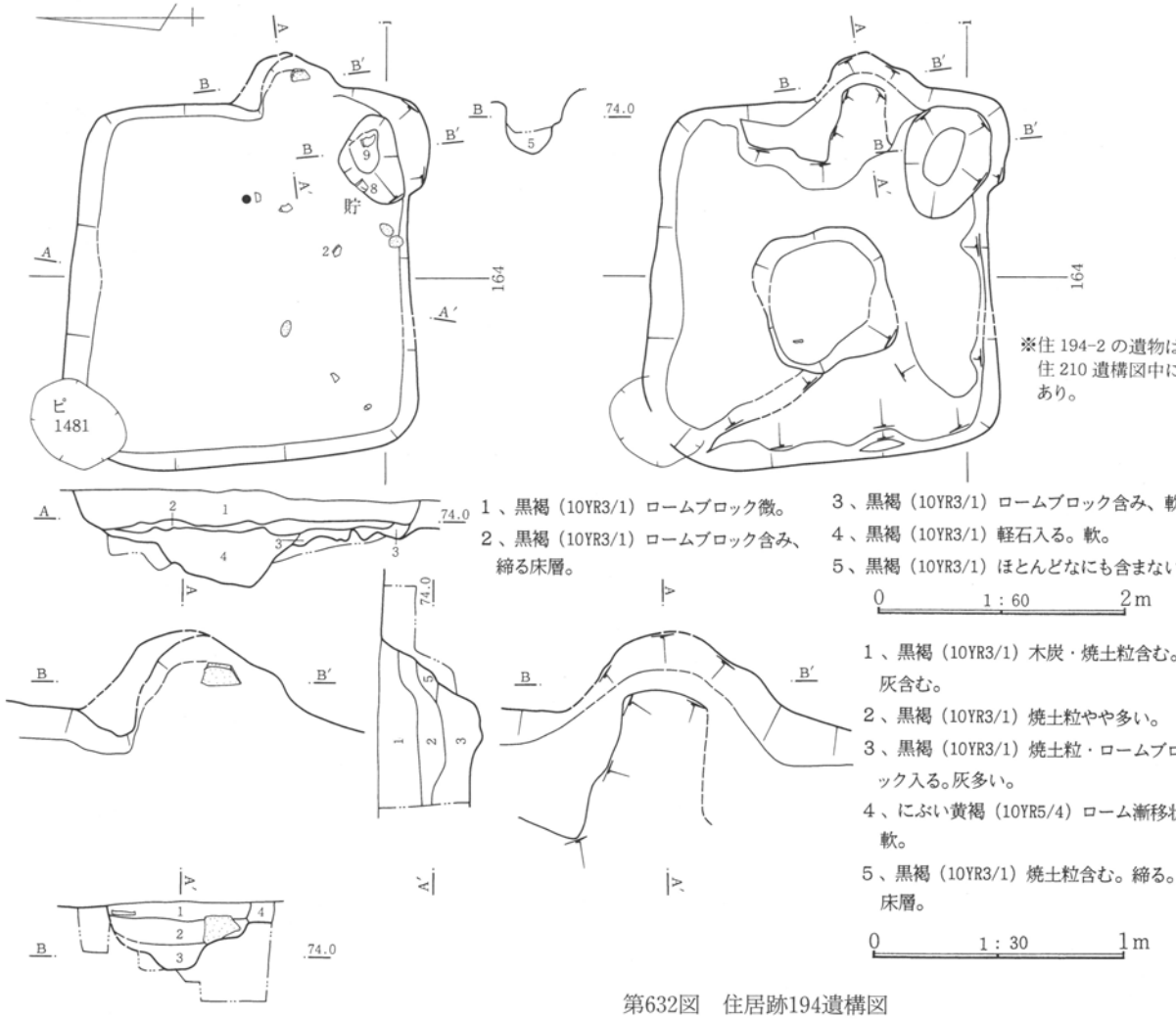
１、黒褐（10YR3/1）焼土粒を多く含む。
２、黒褐（10YR3/1）焼土粒をわずか含む。ローム小粒含む。締る。床層。２′は焼土やや少ない。
３、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒含む。締る。床層。
４、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを主とする。
５、黒褐（10YR3/1）木炭灰入り、黒っぽい。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1：30　1m

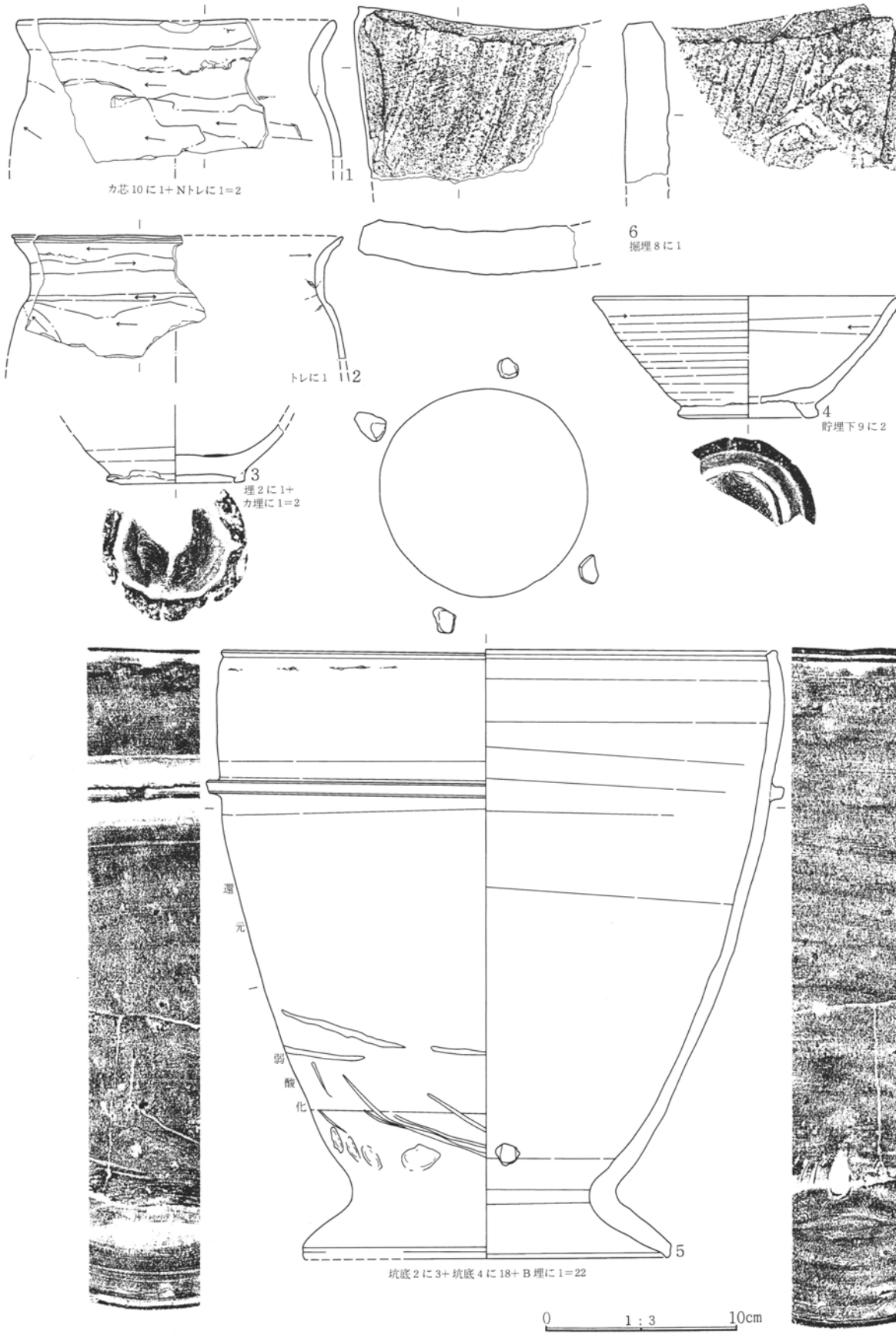
第630図　住居跡193遺構図



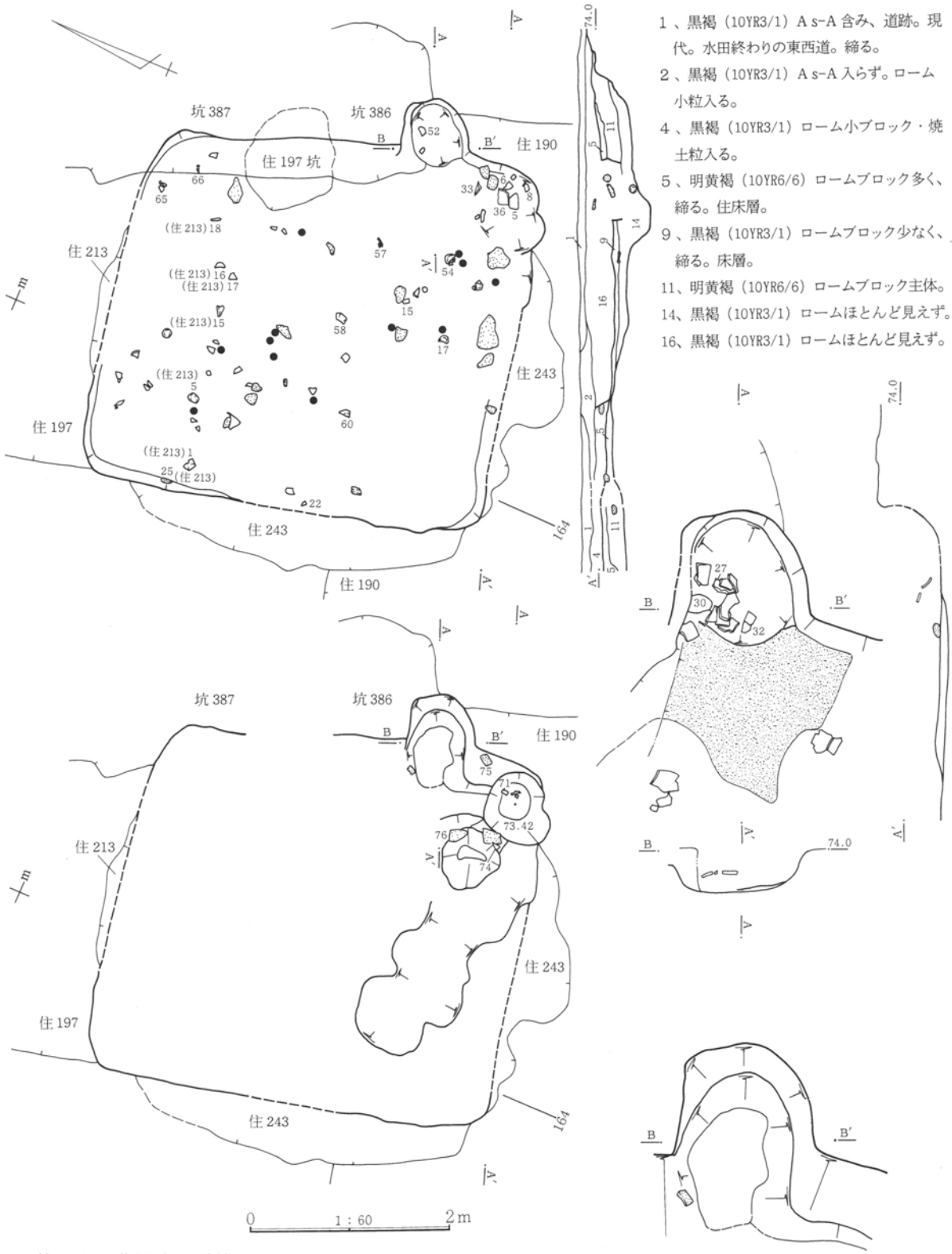
第631図　住居跡193遺物図



第632図　住居跡194遺構図



第633図　住居跡194遺物図

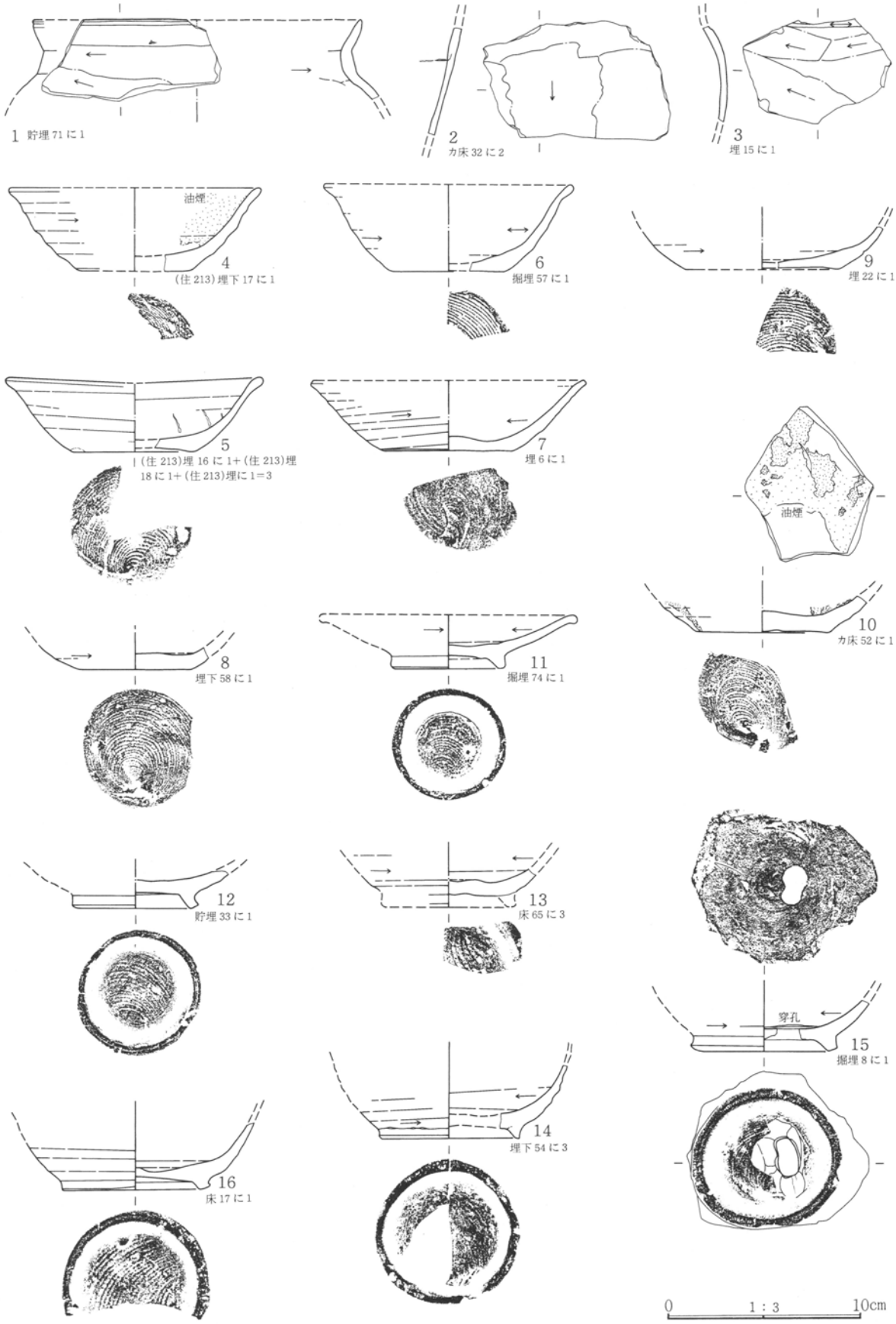


1、黒褐（10YR3/1）As-A含み、道跡。現代。水田終わりの東西道。締る。
2、黒褐（10YR3/1）As-A入らず。ローム小粒入る。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒入る。
5、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、締る。住床層。
9、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、締る。床層。
11、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主体。
14、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。
16、黒褐（10YR3/1）ロームほとんど見えず。

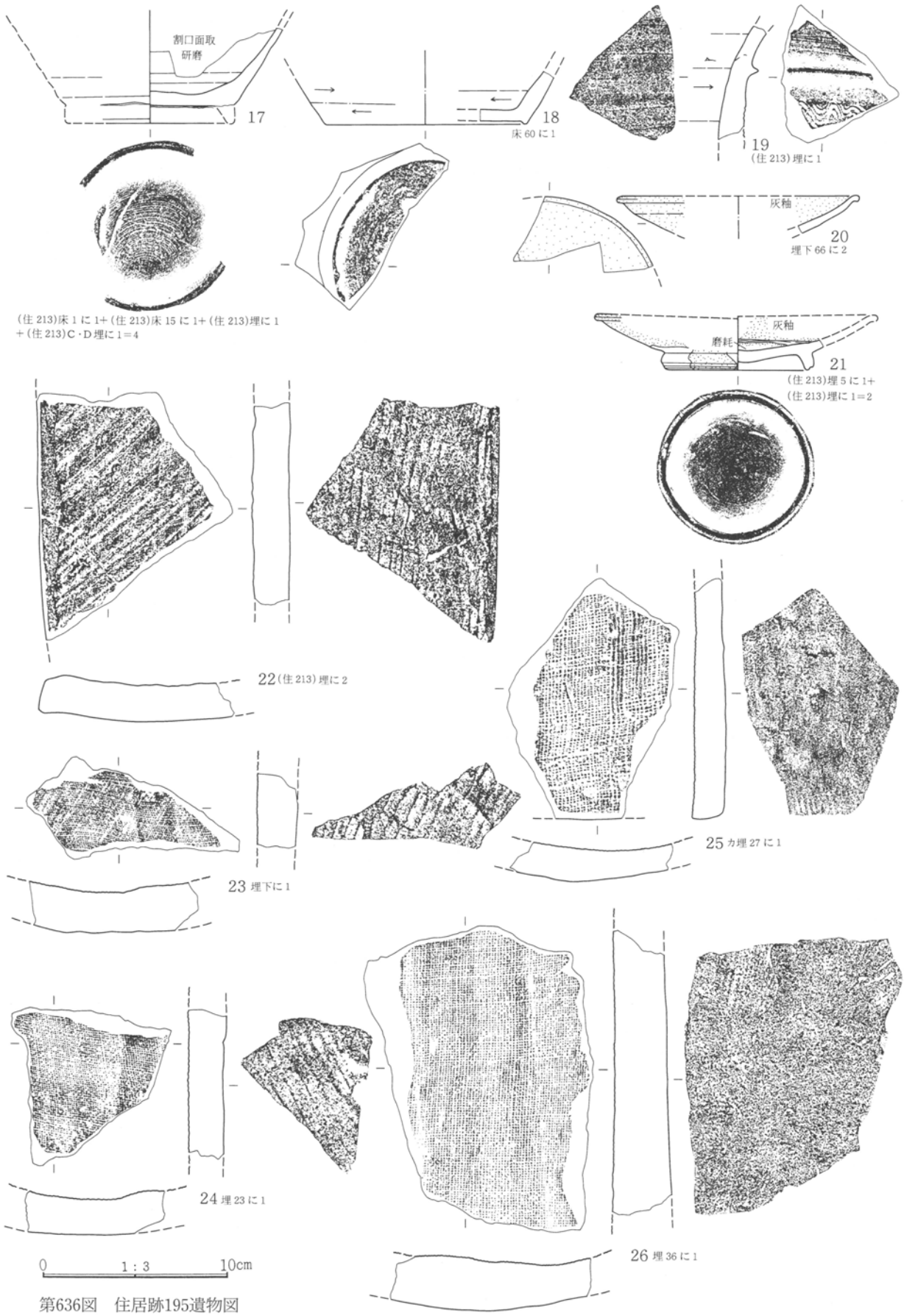
第634図　住居跡195遺構図

住居跡190　（第624・625・626図、写真図版108・213・214）

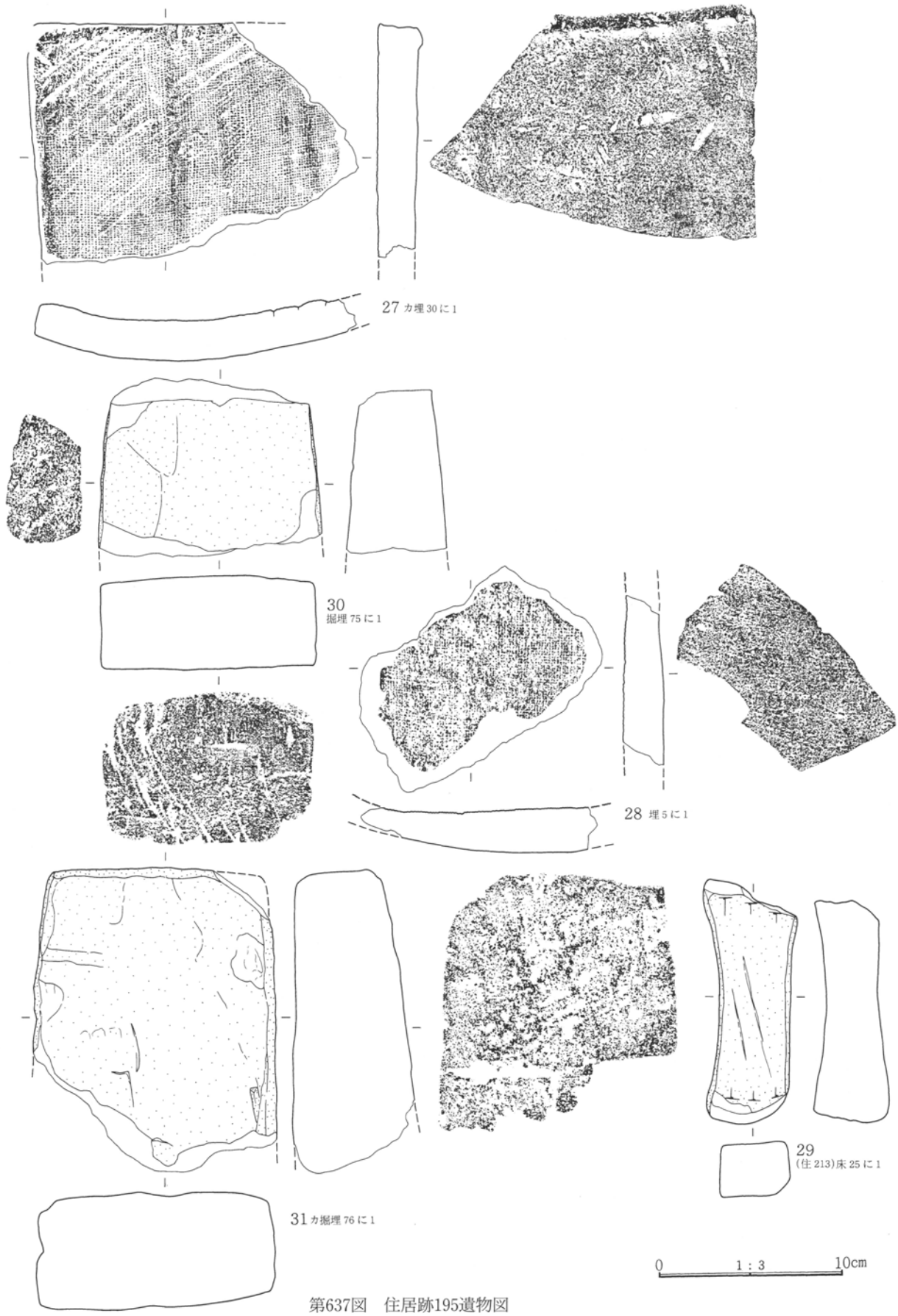
位置はR大区ｋ１163・164に、調査面は、標高74.1m。重複は多く推奨できないが、住居跡191・192を切



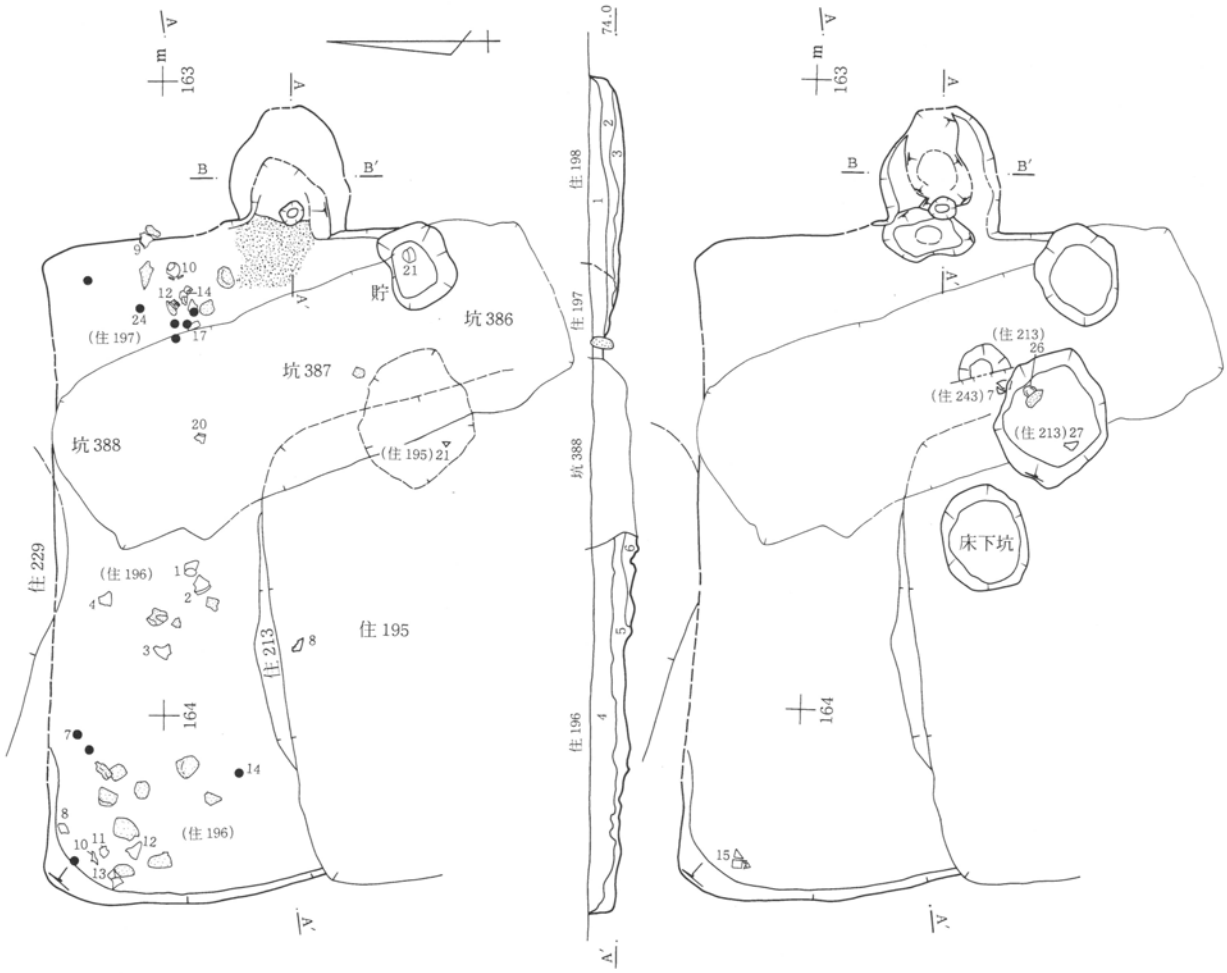
第635図　住居跡195遺物図



第636図　住居跡195遺物図

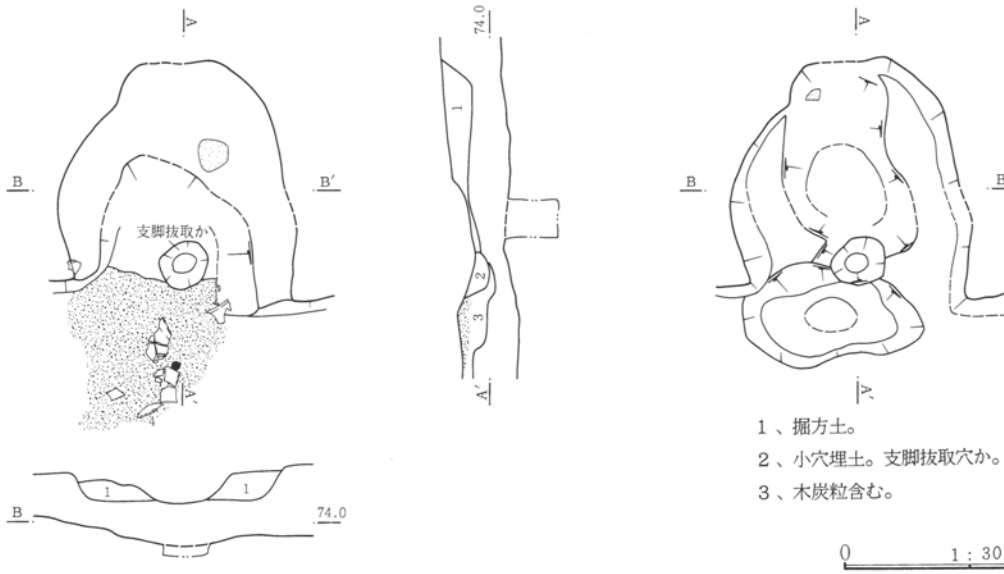


第637図　住居跡195遺物図



1、黒褐（10YR3/1）As-A含み、砂質。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム粒・小ブロック多く、焼土粒入る。
4、黒褐（10YR3/1）砂質。4′ほぼ同じ。4″少し締る。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。住居の床。
6、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、木炭粒わずかに入る。

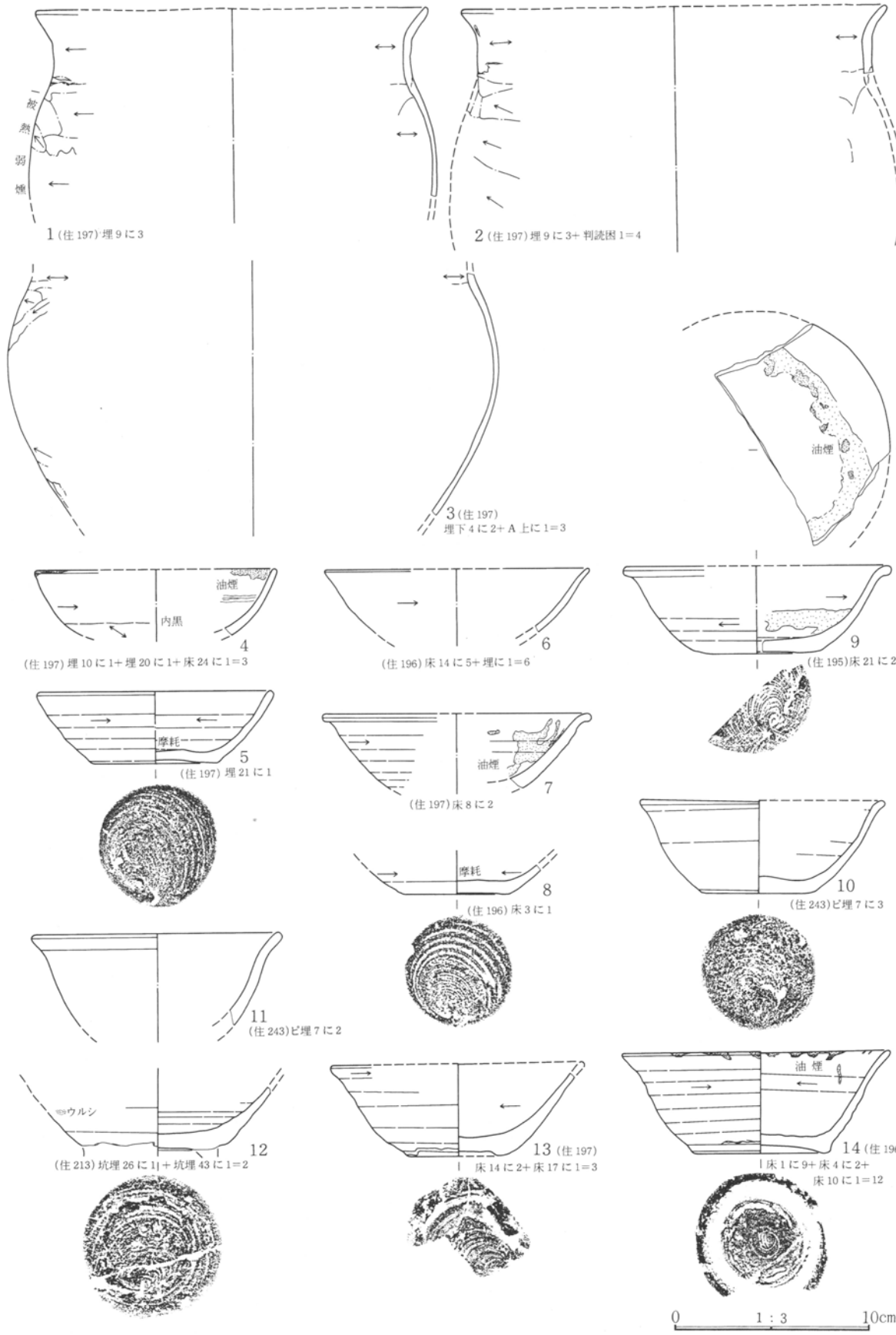
0　1：60　2m



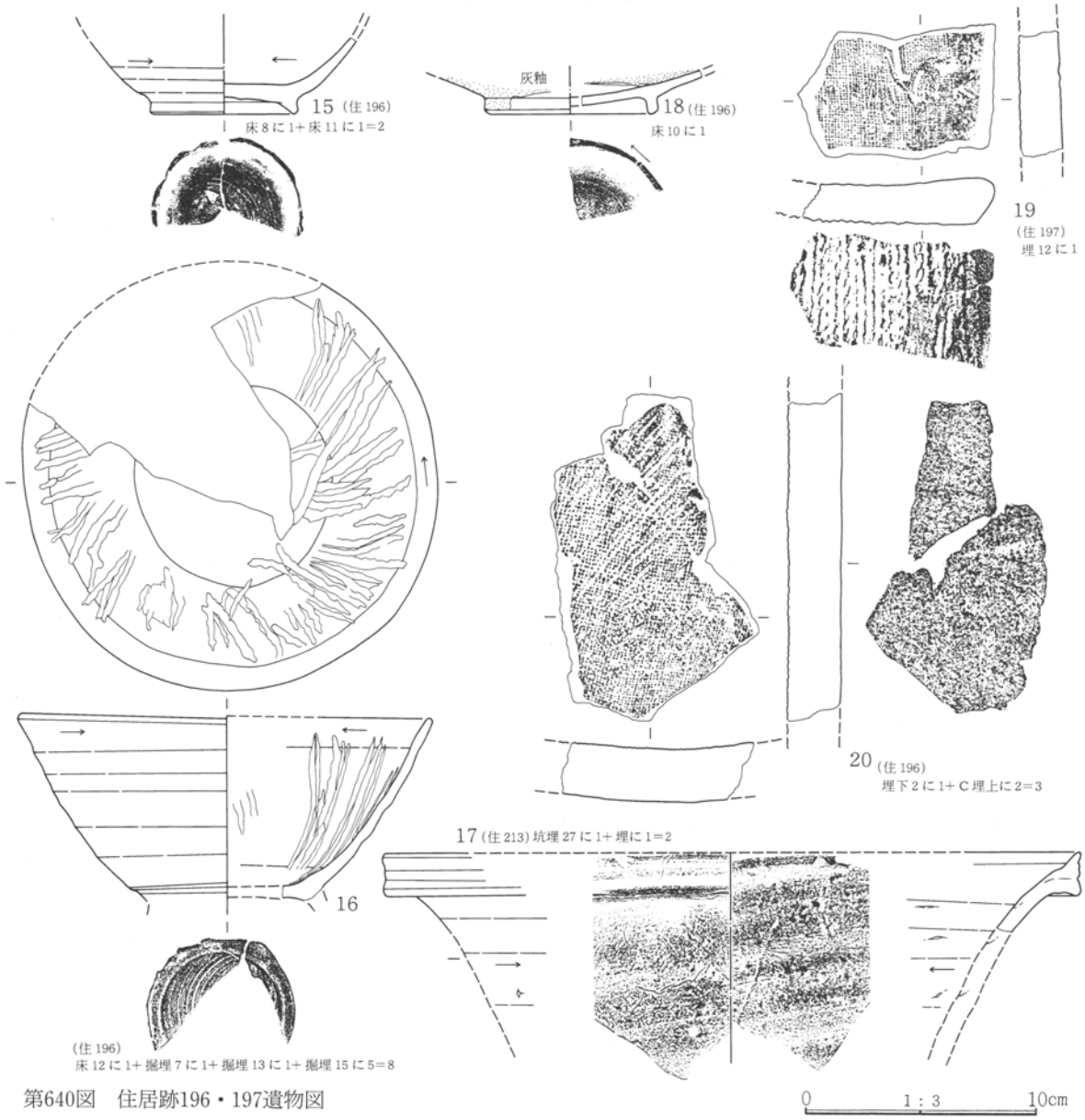
1、掘方土。
2、小穴埋土。支脚抜取穴か。
3、木炭粒含む。

0　1：30　1m

第638図　住居跡196・197遺構図



第639図　住居跡196・197遺物図



第640図　住居跡196・197遺物図

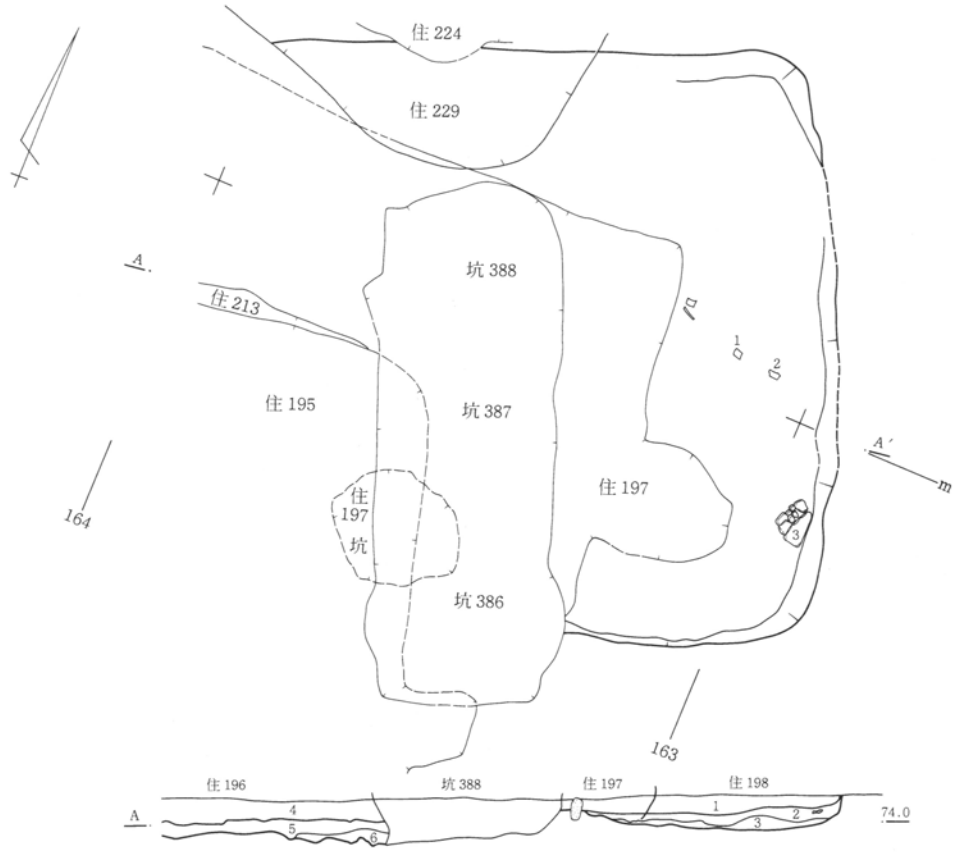
り、住居跡195・243に切られる。規模は南北404cm、東西578cm、方向は西壁でN20°30′Wを測る。施設は竈・貯蔵穴は重複のため不明瞭、掘方に焼土・灰を含む小さな凹みがあった。遺物9世紀前半、機能も同期か。

住居跡191　(第627・628図、写真図版108・214)

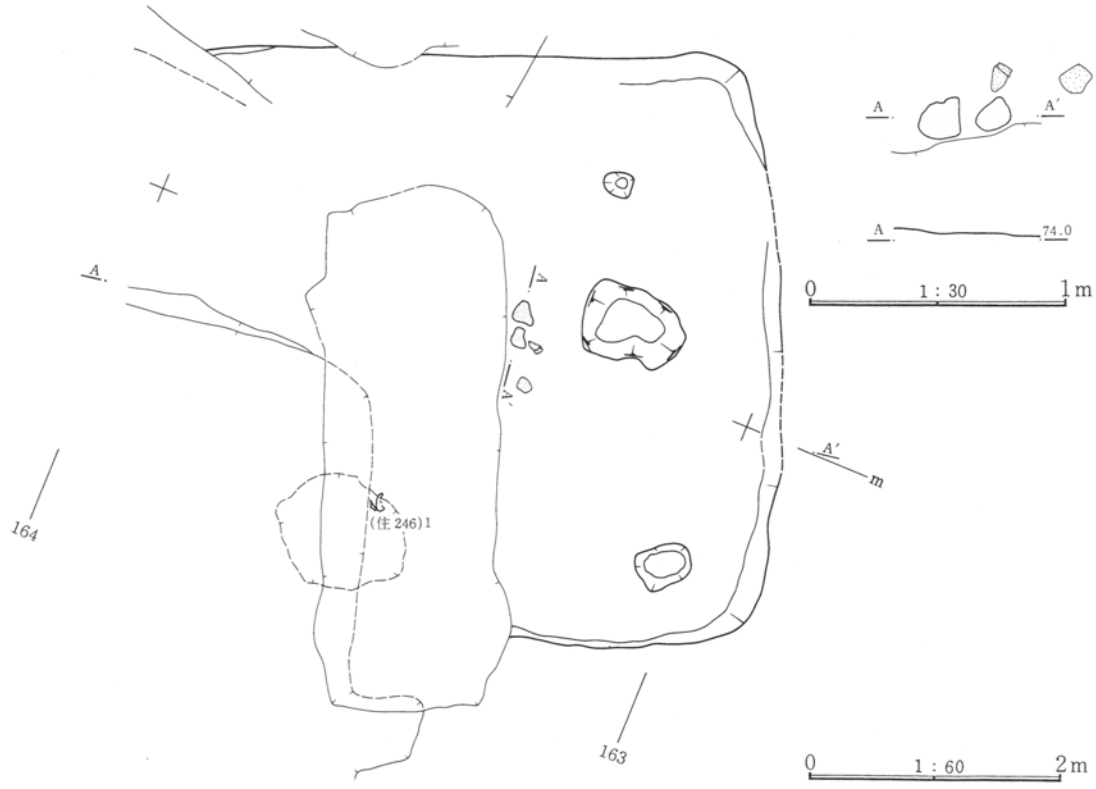
位置はR大区ｊｋ163に、調査面はローム層上面標高74.25m。重複は住居跡190・192・193、溝跡135・136、坑384に切られる。規模は南北497cm、東西571cm、方向はN17°45′Wを測る。施設は、新旧があり、掘方で旧炉跡が、壁下には旧時の壁面が内側に、柱穴も新旧があった。深さは北東で73.44m、南東で73.20m、南西で73.21m、北西で73.47mを測る。遺物は古墳時代前期で、住居機能も同期である。

住居跡192　(第629図、写真図版108・214)

位置はR大区ｋ163に、調査面は住居跡191の埋土上面である。重複は住居跡191を切り、住居跡190・193に切られる。規模は、南北295＋αcm、東西305cm、方向は中軸でN18°Wを測る。施設は、住居跡191が下方に存



１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ含み、砂質。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。
３、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム粒・小ブロック多く、焼土粒入る。
４、黒褐（10YR3/1）砂質。４′ほぼ同じ。４″少し締る。
５、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。住居の床。
６、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、木炭粒わずかに入る。



第641図　住居跡198遺構図